鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（165）

南九州西回り自動車道建設（薩摩川内都ＩＣ～高江ＩＣ間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（XXXI）

川骨遺跡・西之城遺跡・川幡遺跡

かわぼね　にしのじょう　かわばた

（薩摩川内市高江町・宮里町）

2011年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

川骨遺跡・西之城遺跡遠景

土器集中遺構出土土器

薩摩焼

棚田

序　　　文

この報告書は，南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設に伴って，平成 19 年度～ 21 年度にかけて実施した薩摩川内市高江町・宮里町に所在する川骨遺跡・西之城遺跡・川幡遺跡の発掘調査の記録です。

川骨遺跡は，弥生時代後期後半から古墳時代初頭，中世後半から近世にかけての遺跡です。弥生時代後期後半～古墳時代初頭については，河川にかかわる祭祀を行った場所（土器集中遺構 13 か所）が検出され，壺や器台が出土しました。中世後半から近世については，掘立柱建物跡などの遺構とともに陶磁器類が出土し，この地域に住む当時の人々の生活の様相を窺い知るうえで貴重な資料です。

渋谷一族と島津氏が攻防を繰り広げた際に築城されたとされる山城の縁辺部にあたる西之城遺跡からは，中世から近世にかけての人々の生活の跡が見つかりました。

川幡遺跡は，蔵骨器が出土しました。また近世においては山の斜面を棚田として開墾し，その境に石垣が築かれていました。当時の技術を知るうえで貴重な資料であるため，今回の発掘調査では記録作業を行いました。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査にあたりご協力いただいた国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所，薩摩川内市教育委員会，関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成 23 年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　山　下　吉　美

報告書抄録

ふりがな	かわほねいせき・にしのじょういせき・かわばたいせき
書名	川骨遺跡・西之城遺跡・川幡遺跡
副書名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	XXXI
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	165
編集者名	鶴田静彦・関明恵・福薗美由紀
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　0995-48-5811
発行年月日	平成23年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因
		市町村	遺跡番号					
かわほねいせき 川骨遺跡	かごしまけん さつませんだいし たかえちょう 鹿児島県薩摩川内市高江町	46215	―	31° 49′ 34″	130° 15′ 33″	平成19年9月3日～ 10月26日	1,560㎡	南九州西回り 自動車道 川内隈之城 道路建設
						平成20年5月9日～ 平成21年3月19日	11,240㎡	
にしのじょういせき 西之城遺跡	かごしまけん さつませんだいし たかえちょう 鹿児島県薩摩川内市高江町	46215	6-193	31° 49′ 18″	130° 15′ 32″	平成21年1月6日～ 3月19日	2,000㎡	
かわばたいせき 川幡遺跡	かごしまけん さつませんだいし みやざとちょう 鹿児島県薩摩川内市宮里町	46215	―	31° 48′ 36″	130° 16′ 37″	平成21年2月9日～ 3月11日	500㎡	
						平成21年11月4日～ 11月13日	700㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川骨遺跡	祭祀	弥生時代後期後半～ 古墳時代初頭	土器集中遺構	弥生土器，中津野式土器（古段階）， 免田式土器	
	散布地	古代		墨書土器（表採資料）	
	集落	中世～近世	掘立柱建物跡 溝状遺構 布基礎 鍛冶炉 石組み 石垣 井戸 ピット	坩堝，鉄滓土師器， 輸入陶磁器（青磁・白磁・青花）， 肥前系陶磁器， 薩摩焼， 土師質土器，土製品（人形）， 管状土錘，砥石　等	
西之城遺跡	散布地	中世後半～近世	なし	中世土師器，輸入陶磁器（白磁･青磁･青花）， 瓦質土器（擂鉢・火鉢），石臼，管等	
川幡遺跡	散布地	古代	棚田	土師器，須恵器	

遺跡の概要	川骨遺跡は，弥生時代後期後半から古墳時代初頭と中世後半から近世にかけての遺跡である。弥生時代後期後半から古墳時代初頭については，土器集中遺構が13基検出され，弥生時代後半から中津野式土器の古段階・新段階に想定される大甕，壺，器台や免田式土器が出土しており，川辺における祭司的性格が窺われる遺構である。中世後半から近世については，青磁・白磁・青花等の輸入陶磁器や肥前陶磁器，薩摩焼等が大量に出土している。これらの遺物は中世後半から近世を通して継続的に出土しており，この地域の陶磁器の組成を知る上で貴重である。 西之城遺跡については，中世から近世にかけての遺物が出土したが，遺構は検出されなかった。 川幡遺跡については，古代に相当する須恵器の壺が1点と土師器が数十点出土したが，遺構は確認されなかった。


川骨遺跡
西之城遺跡
川幡遺跡
薩摩川内市
0
1km

例　　　言

1　本報告書は，南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設に伴う川骨遺跡・西之城遺跡・川幡遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は，鹿児島県薩摩川内市高江町 2201 番地ほか（川骨遺跡），2602 番地ほか（西之城遺跡），宮里町 1825 番地ほか（川幡遺跡）に所在する。

3　発掘調査及び報告書作成は，国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。

4　発掘調査は，平成 19 年度から平成 21 年度にかけて実施し，整理作業報告書作成は，平成 22 年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。

5　掲載遺物番号は遺跡ごとの通し番号であり，本文，挿図，表，写真図版の番号は一致する。

6　挿図の縮尺は各図面に示した。

7　本書中の標高は建設省九州地方建設局鹿児島国道事務所が提供した工事計画図面にある国土座標のＺ座標値を基準とした。

8　発掘調査における遺構実測図の作成及び写真撮影は，各年度の調査担当者が行った。また，空中写真の撮影は（有）ジパング･サーベイに，一部の遺構実測については（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

9　遺構図のトレースは，整理作業員の協力を得て，平成 22 年度の担当職員が行った。

10　出土遺物の実測，トレースは，整理作業員の協力を得て，平成 22 年度の担当職員が行った。

11　出土遺物の写真撮影は，本センター職員が行った。

12　本報告に係る自然科学分析については，放射性炭素年代測定・種実同定を（株）加速器分析研究所，木材の樹種同定をパリノ・サーヴェイ（株），植物珪酸体分析・花粉分析を（株）古環境研究所に依頼し，その結果を第３章の第５節に掲載した。

13　執筆分担は以下の通りである。

　第１・２章　福薗美由紀　　　第３章　関明恵・福薗美由紀　　第４章　鶴田靜彦・関明恵

　第５章　関明恵・抜水茂樹

14　本報告遺跡に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示等に活用するほか，研究者等にも公開する。なお，遺跡出土遺物の注記略号はそれぞれ「カワボネ」（川骨遺跡）「ＮＪ」（西之城遺跡）「カワバタ」（川幡遺跡）である。

凡　　例

1　基準方位は磁北であり，レベルは海抜絶対高である。

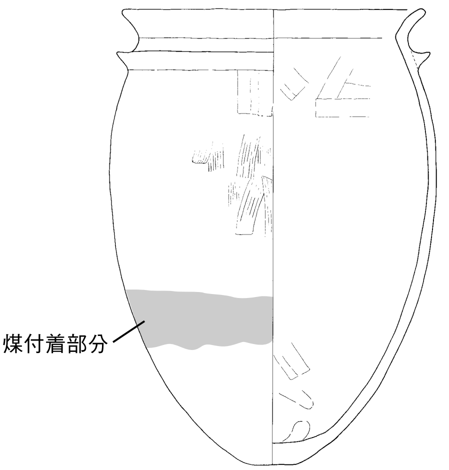
2　使用した土色は『新版標準土色帖　2004年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。ただし，陶磁器の胎土の色調や釉調については，『標準土色帖』を基準としながら，一般的な色調感も加味して表現した。

3　遺構・遺物実測図の縮尺は，挿図中に記した。

4　本書で用いる炉状遺構の表現については，次のとおりである。


炭化物

5　本書で用いる土器の表現は，次の通りである。

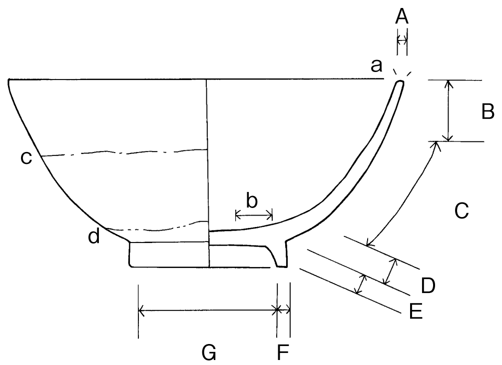


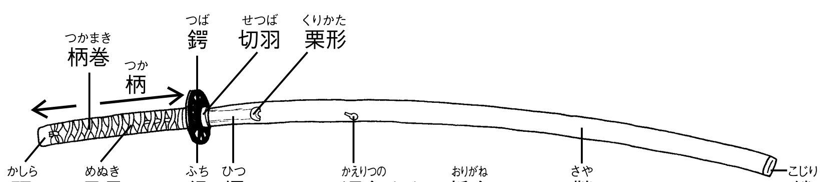
6　本書の土器・土師器観察表における「胎土」の項目については，肉眼観察を行い，特に多く含まれる鉱物に「○」をつけた。その他については詳細を備考に記した。

7　本書で用いる近世以降の陶磁器についての基本的な名称，及び表現方法は以下のとおりである。

【名称】　A　口唇部
　　　　B　口縁部
　　　　C　体部
　　　　D　腰部
　　　　E　高台脇
　　　　F　畳付
　　　　G　高台内面

【表現】　a　口唇部，畳付の釉剥ぎ位置
　　　　b　見込み蛇ノ目釉剥ぎ部
　　　　c　一次施釉ライン
　　　　d　二次施釉ライン





目　　次

挿　図　目　次

川骨遺跡

西之城遺跡

川幡遺跡

写 真 図 版 目 次

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（以下鹿児島国道事務所）は，南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下県文化財課）に照会した。この計画に伴い，県文化財課が平成18年6月に計画路線の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ，当事業区内には，7か所の遺物散布地及び発掘調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについては，鹿児島国道事務所・県文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下県埋文センター）の三者の協議に基づき，鹿児島国道事務所と鹿児島県教育委員会との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため，事業着手前に発掘調査を実施することになった。

これを受けて，平成19年度から計画的かつ継続的に各遺跡の発掘調査を実施し，埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は県埋文センターが実施した。

本書で報告する遺跡は7か所の遺跡のうち，川骨遺跡・西之城遺跡・川幡遺跡の3遺跡である。

第２節　事前調査

１　川骨遺跡

川骨遺跡は，平成19年9月3日～10月26日に実施した事前調査（260㎡），一部本調査(1300㎡)の結果，弥生時代後期から古墳時代初頭に相当すると考えられる遺物及び，中世後半から近世にかけての遺構・遺物が確認された。

事前調査における組織は以下のとおりである。

〈平成19年度〉

事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原　景信
調査企画	〃	次長兼総務課長	平山　章
	〃	次長兼南の縄文調査室長	新東　晃一
	〃	調査第二課長	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濵　修
	〃	主任文化財主事	宮田　栄二
調査担当	〃	文化財主事	岩屋　高広

調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	日高　勝博
	〃	総務係長	寄井田正秀
	〃	主査	蒲地　俊一

2　西之城遺跡

西之城遺跡は, 平成20年12月15日から平成21年2月23日までの期間に, 事前調査(600㎡)を行った結果, 中世から近世にかけての遺物が出土した。

事前調査における組織は以下のとおりである。

〈平成20年度〉

事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原　景信
調査企画	〃	次長兼総務課長	平山　章
	〃	次長兼南の縄文調査室長	池畑　耕一
	〃	調査第二課長	彌榮　久志
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	冨田　逸郎
調査担当	〃	文化財主事	富山　孝一
	〃	文化財主事	田畑　哲治
調査事務	〃	総務係長	紙屋　伸一
	〃	主査	鳥越　寛晴

3　川幡遺跡

川幡遺跡は, 平成21年2月12日から2月24日にかけて, 事前調査(200㎡), 一部本調査(300㎡)を行った結果, 古代の遺物が出土した。

事前調査における組織は以下のとおりである。

〈平成20年度〉

事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原　景信
調査企画	〃	次長兼総務課長	平山　章
	〃	次長兼南の縄文調査室長	池畑　耕一

	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調査第二課長	彌榮 久志
	〃	主任文化財主事兼 調査第二課第二調査係長	冨田 逸郎
調査事務	〃	文化財主事	抜水 茂樹
	〃	文化財主事	羽嶋 敦洋
調査事務	〃	総務係長	紙屋 伸一
	〃	主査	鳥越 寛晴

第３節　本調査

1　川骨遺跡

川骨遺跡は，事前調査の結果，平成19年度に一部本調査(1300㎡)を行い，平成20年5月9日～3月19日の期間に本調査を実施した。その結果，弥生時代～古墳時代，中世～近世にかけての遺物・遺構が出土した。

本調査における組織は以下の通りである。

〈平成20年度〉

事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原 景信
調査企画	〃	次長兼総務課長	平山 章
	〃	次長兼南の縄文調査室長	池畑 耕一
	〃	調査第二課長	彌榮 久志
	〃	主任文化財主事兼 調査第二課第二調査係長	冨田 逸郎
	〃	主任文化財主事	宮田 栄二
調査担当	〃	文化財主事	岩屋 高広
	〃	文化財主事	富山 孝一
	〃	文化財主事	羽嶋 敦洋
	〃	文化財調査員	福薗美由紀
調査事務	〃	総務係長	紙屋 伸一
	〃	主査	鳥越 寛晴
調査指導	三重大学	名誉教授	八賀 晋
	鹿児島大学埋蔵文化財調査室	准教授	中村 直子
	ラ・サール学園	教諭	永山 修一

２　西之城遺跡

西之城遺跡は，平成 21 年 2 月 24 日から平成 21 年 3 月 19 日までの期間に，本調査を行い，中世から近世にかけての遺物が確認された。本調査の組織は，事前調査の組織と同じである。

３　川幡遺跡

川幡遺跡は，平成 21 年 11 月 4 日から 11 月 13 日までの期間に本調査を行った結果，古代の包含層が確認された。

本調査における組織は以下のとおりである。

〈平成 21 年度〉

事業主体　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所

調査主体　鹿児島県教育委員会

企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課

調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	山下　吉美
調査企画	〃	次長兼総務課長	齋藤　守重
	〃	次長兼南の縄文調査室長	青﨑　和憲
	〃	調査第二課長	彌榮　久志
	〃	主任文化財主事兼 調査第二課第二調査係長	冨田　逸郎
調査担当	〃	文化財主事	抜水　茂樹
	〃	文化財主事	田畑　哲治
	〃	文化財主事	市村　哲二
調査事務	〃	総務係長	紙屋　伸一
	〃	主査	鳥越　寛晴

第４節　川内隈之城道路建設に伴う各遺跡の概要

南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設に伴い，県文化財課が行った埋蔵文化財の分布調査の結果，遺物散布地及び発掘調査の必要なことが判明した地点は以下の７か所である。

1　山口遺跡……薩摩川内市都町，標高約50ｍの丘陵地に位置する。旧石器時代の遺物が出土したほか，縄文時代早期の塞ノ神式土器，磨石，石鏃，古墳時代の成川式土器，中世の青磁，白磁が出土した。また古代の柱穴や焼土域が検出された。

2　山仁田遺跡…薩摩川内市青山町の平地に位置する。遺跡の標高は約27ｍで，川内川の支流である隈之城川中流域の左岸の微高地上に立地し，河床からの比高差は約５～10ｍである。縄文時代の岩本式土器，古代の土師器，中世の青磁，白磁，滑石製石鍋，近世の染付，薩摩焼が出土した。

3　堀之内遺跡…薩摩川内市青山町，標高約50ｍに所在する。旧石器時代の剥片尖頭器，縄文時代早期から晩期にかけての土器，石匙，石皿，磨石，石鏃が出土した。古墳時代の散石遺構，焼土域も検出され，同時代の成川式土器が出土している。古代の柱穴，溝が検出された。また土師器や須恵器も出土している。中世では，柱穴や青磁，白磁が出土している。

4　上新田遺跡…薩摩川内市青山町の平地に所在する。遺跡の標高は約34ｍで，川内川の支流である木場谷川中流域の左岸の傾斜面上に立地する。縄文時代の中原式土器，黒川式土器，磨製石斧，弥生時代の入来式土器，須玖式土器，黒髪式土器，竪穴住居跡，古墳時代の成川式土器，古代の土師器，石垣，掘立柱建物跡が出土した。

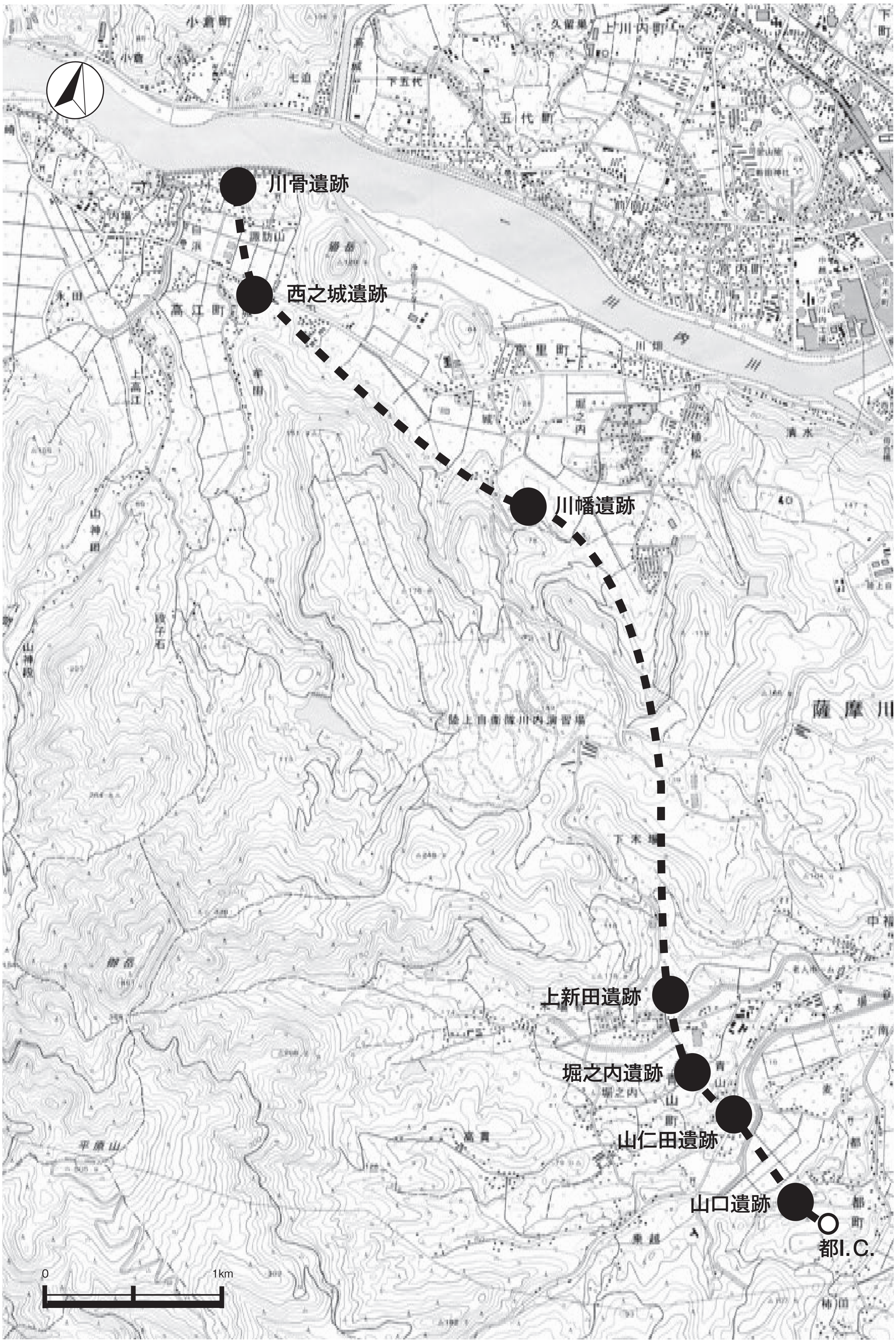
5　川幡遺跡……薩摩川内市宮里町に所在する。標高約12～20ｍの丘陵地の北斜面に立地している。土師器や須恵器が出土した。また，近世に棚田や畑として利用されていた時に構築されたと思われる石垣が良好な状態で残っていた。

6　西之城遺跡…薩摩川内市高江町に所在する。標高約６ｍの微高地上に立地している。周辺には宅地や水田，畑が広がっている。中近世の土師器や青磁，白磁のほか，石臼が出土した。

7　川骨遺跡……薩摩川内市高江町に所在する。標高約３～４ｍの川内川下流左岸の低地に立地し，遺跡の東側には猫岳があり，周辺には宅地並びに水田や畑が広がっている。弥生時代後期～古墳時代の土器，古代の人面墨書のほか，中近世の遺物が出土した。遺構は，弥生時代後期～古墳時代13か所の土器集中，古代・中近世の掘立柱建物跡，近世～近代の鍛冶炉跡，溝跡，水田遺構などが検出された。

表１　南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査遺跡一覧表（川内隈之城道路）

番号	遺跡名	所在地	調査対象面積 (㎡)	調査期間	時代	概要
1	山　口	薩摩川内市 都町	15,200 (調査中)	H21.11 ～ 22.3 H22.5 ～ 23.2	旧石器 縄文 古墳 古代	縄文土器 成川式土器 柱穴，土師器
2	山 仁 田	薩摩川内市 青山町	14,100	H21.11 ～ 22.3 H22.5 ～ 22.9	縄文 古代 中世 近世	縄文土器 土師器
3	堀 之 内	薩摩川内市 青山町	9,700 （調査中）	H21.12 ～ 22.1 H22.10 ～ 23.2	旧石器 縄文 古墳 古代	剥片尖頭器，三稜尖頭器 塞ノ神式土器，石鏃，石斧 成川式土器 土師器
4	上 新 田	薩摩川内市 青山町	5,800	H21.11 ～ 21.2 H22.5 ～ 22.9	縄文 弥生 古代	縄文晩期土器 山ノ口式土器，須玖式土器 土師器 石列
5	川　幡	薩摩川内市 宮里町	4,500	H21.2 H21.11	古代 近世	土師器，須恵器 石垣 本報告書
6	西 之 城	薩摩川内市 高江町	7,000	H21.2 ～ 3	中世～近世	土師器，青磁 本報告書
7	川　骨	薩摩川内市 高江町	12,800	H19.9 ～ 10 H20.5 ～ 21.3	弥生～古墳 古代 中世～近世	土器集中，成川式土器 畝間状遺構，人面墨書土器，土師器，須恵器，瓦 掘立柱建物跡，溝状遺構，鍛冶炉跡，水田遺構，井戸跡，土坑，石垣，青磁，白磁，青花，染付，肥前系陶磁器，薩摩焼，鉄滓，羽口，坩堝，瓦質土器，瓦，砥石 本報告書



第 1 図　薩摩川内都 I.C. ～高江 I.C 間遺跡位置図

第５節　整理・報告書作成作業

１　整理・報告書作成作業の組織

川骨遺跡･西之城遺跡･川幡遺跡の報告書作成作業は, 平成22年4月7日～平成23年3月11日まで, 鹿児島県立埋蔵文化財センターにて行った。

整理・報告書作成作業時の組織は以下のとおりである。

〈平成22年度〉

作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	山下　吉美
作成企画	〃	次長兼総務課長	田中　明成
	〃	次長兼南の縄文調査室長	中村　耕治
	〃	調査第二課長	井ノ上秀文
	〃	主任文化財主事兼 調査第二課第二調査係長	鶴田　靜彦
作成担当	〃	文化財主事	関　明恵
	〃	文化財調査員	福薗美由紀
事務担当	〃	総務係長	大園　祥子
	〃	専門員	鳥越　寛晴
作成指導	鹿児島大学法文学部	教授	渡辺　芳郎
	鹿児島大学埋蔵文化財調査室	准教授	中村　直子
	熊本大学文学部	教授	木下　尚子
	文化庁美術学芸課考古資料部門	調査官	豊島　直博

報告書作成指導委員会　平成22年11月26日（金）　所長ほか6名

報告書作成検討委員会　平成22年12月1日（水）　所長ほか10名

２　整理作業の経過

整理作業の経過は以下のとおりである。

4月　図面整理, 遺物の分類・選別, 接合・復元, 遺物実測, 分布図作成

5月　図面整理, 遺物の分類・選別, 接合・復元, 遺物実測・トレース, 観察表作成, 分布図作成, 遺構トレース, 原稿執筆

遺物指導　渡辺芳郎（鹿児島大学法文学部教授）

6月　遺物の接合・復元, 遺物実測, 観察表作成, 遺構トレース, 原稿執筆

遺物指導　中村直子（鹿児島大学埋蔵文化財調査室准教授）

7月　接合・復元, 遺物実測・トレース, 遺構トレース, 観察表作成, 写真撮影, レイアウト, 原稿執筆

8月　観察表作成, 遺物実測・トレース, 遺構トレース, 観察表作成, レイアウト, 原稿執筆

9月　遺物実測・トレース, レイアウト, 写真撮影, 原稿執筆

10月　観察表作成，遺構トレース，遺物実測・トレース，レイアウト，原稿執筆

遺物指導　木下尚子（熊本大学文学部教授）

11月　レイアウト，写真撮影，原稿執筆，原稿チェック

遺物指導　豊島直博（文化庁美術学芸課考古学資料部門調査官）

12月　写真レイアウト，原稿執筆，原稿チェック

1月　校正，図面整理，写真整理，遺物整理

2月　校正，遺物整理・収納

3月　校正，納品，遺物整理・収納



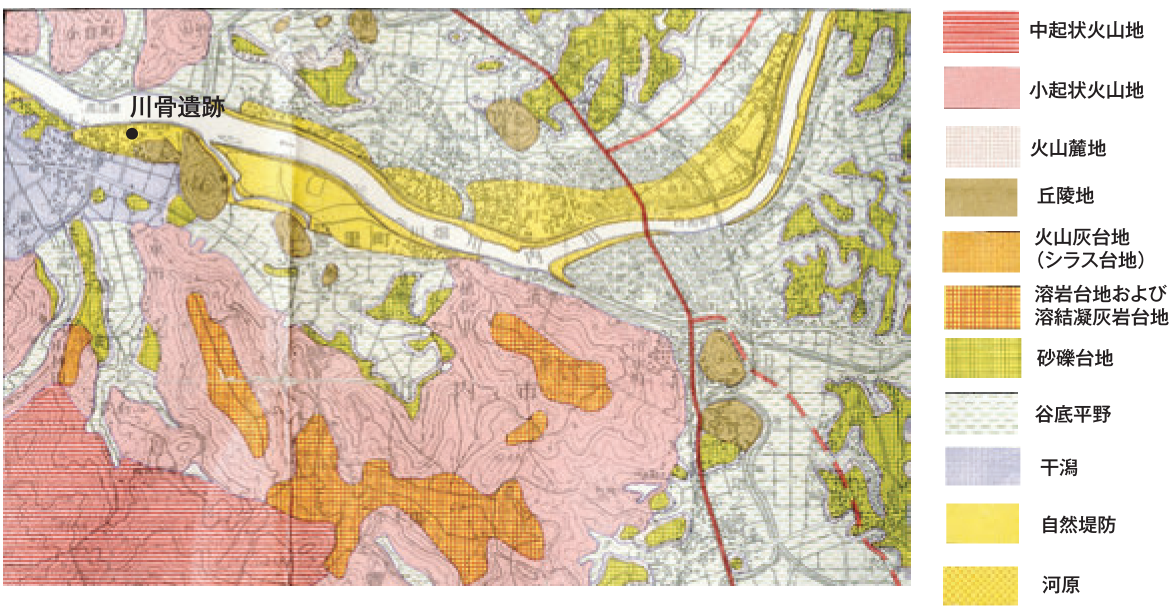

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置及び地理的環境

川骨遺跡・西之城遺跡・川幡遺跡が所在する薩摩川内市は，薩摩半島の北西部（北緯 31° 46′，東経 130° 18′ ）に位置する。東シナ海に面し，川内川を有する薩摩川内市は，古くから陸上・水上交通の要所であり，現在でも北薩地域の政治・経済の中心地となっている。薩摩川内市は，北方を出水山地，東を上床山地，南を高江山地に囲まれた盆地状の地形をなし，中央部には本県最大の河川である川内川が流れており，この川により形成された広い沖積平野を有している。これを川内平野あるいは川内盆地と呼んでいる。山地が多く平野の少ない南九州において大口盆地，出水平野，肝属平野と肩を並べる穀倉地帯である。川内という地名は，古代において薩摩国の設置に伴い薩摩国府が置かれた地域が川内川の内側にあるから「川内」，対岸に属する地域を「川外」と呼んだことに由来すると言われている。

山地の麓には，平野を取り巻くように権現原台地や国分寺台地など低いシラス台地が発達し，宅地や畑地として利用されている。シラス台地は山地から河川によって浸食をうけるため台地の間には狭小な谷底平野が発達すると共に，台地の縁辺部はシラス台地特有の浸食谷が複雑に発達し，急崖をなし，沖積平野へと移行する。これらの台地上では，薩摩国分寺跡や計志加里遺跡など多くの重要な遺跡が発見されている。

川内川の両側には，天辰町から高江町にかけて長さ約８㎞にわたって自然堤防が形成される。近年の調査では，自然堤防状で多くの遺構・遺物が発見され，この地が古くから人々の活動の中心地であったことをうかがわせる。川内川は，下流で大きく川幅を広げ，河口の両岸には川内砂丘が発達し，薩摩川内市の特徴的な地形となっている。



第２図　周辺地質図

第２節　歴史的環境

川骨遺跡・西之城遺跡は，薩摩川内市高江町に所在し，川幡遺跡は隣町の宮里町に所在する。

川骨遺跡は, 標高約３ｍ～４ｍの川内川下流左岸の低地に立地, 遺跡の東側には猫岳（標高 122 ｍ）があり，周辺には宅地並びに水田や畑が広がっている。遺跡の所在する高江地区の沖積面は猫岳以西に広がる美田地帯で川内市内でも有数の稲作地帯である。しかし，かつて高江のこの水田地帯は沼沢をなし，かなり奥まで川船の出入りがあった。「又前は大河流れ，末は湖水につゞけりといふは，此日暮の地，前に千臺川あり，是より下流二里許を過ぎ，高江邑の内に昔大湾ありて湖の如し，湖とは是を言ふなるべし。貞享年中其湾を塡て開墾し，高江新田と呼ぶ。」（『三国名勝図絵』）この地域では稲作は早くから行われていたようであるが，川内川の増水のたびに氾濫し生産は安定しなかった。この苦境を脱するために薩摩藩の普請奉行小野仙右衛門（千右衛門）による長崎堤防の築堤が九年の歳月をかけて完成された。この堤防は，大正時代の改修工事はあったものの，300 年を経た今日までもその姿を残している。

川骨遺跡は, 弘化２・３年（1845・1846）の川内川の洪水によって家屋が壊滅的な被害を受けたため，住んでいた人々が現在の峰山地区へ居住地を移したという記録が残っている。川骨遺跡の所在地周辺は，たびたび川内川の氾濫による被害を受けており，薩摩藩は弘化５年（1848）４月から高江町川内川支流の八間川の治水工事に取りかかった。江之口橋はこの工事の一環で，嘉永２年（1849）８月，肥後の名石工・岩永三五郎によって架設された。岩永三五郎はこの架設を最後に肥後に帰ったと伝えられている。薩摩川内市内で三五郎が手がけた橋のうち現存しているのは江之口橋のみであり，貴重な文化財である。

西之城遺跡はシラス台地上に位置する遺跡で，隣接する東之城遺跡と共に中世山城であったと伝えられる場所である。昭和 62 年（1987）に行われた中世城館跡調査によると，高江町東ノ城，西ノ城に所在する高江城（別名：城山城）は，城自体は消滅しているものの土塁が残存している，として縄張り図（略測）を作成している。

第３節　周辺遺跡

旧石器時代

薩摩川内市には，本県で最初に旧石器時代の尖頭器が発見された楠元町馬立遺跡，ナイフ形石器・細石器が出土した成岡遺跡，剥片尖頭器・ナイフ形石器・細石刃が出土した上野城遺跡がある。成岡遺跡，西ノ平遺跡から出土した石器は，長崎県島原半島の石器と極めて類似しており，直接あるいは密接な交流のあったことを示している。

縄文時代

薩摩川内市の縄文時代の遺跡は，発掘が行われたものが少なく，実態は不明である点が多い。その中でも，1987 年に発掘調査が行われた麦之浦貝塚は，市来式土器や鐘崎式土器，北久根山式土器などが出土した縄文時代後期を代表する遺跡である。上野城遺跡でも市来式土器が出土し，川内平野における縄文時代の様相が徐々にわかってきている。縄文時代晩期の遺跡としては計志加里遺

跡が挙げられる。黒川式土器や晩期の壺形土器が出土している。また，川骨遺跡の川砂堆積層からも縄文時代後期の土器が出土している。

弥生時代

弥生時代になると，川内川下流域の平野部や沼沢地が新たな生産拠点として成立してくる。以前から，外川江遺跡の後期の大甕や内向花文鏡，麦之浦貝塚の後漢鏡，若宮遺跡出土の石包丁・石鎌等は知られ，この地域の重要性については指摘されていたが，楠元遺跡，京田遺跡，大島遺跡，川骨遺跡等の調査成果はその指摘や重要性を具体的に示すこととなった。

楠元遺跡では，弥生時代終末の集落跡と，それに隣接する低地に水田跡が発見されている。また，京田遺跡の下層からは，弥生時代中期後半の水田跡が発見され，黒髪式土器が出土した。この時代の南九州の水田は伝播以来，自然の沼沢地等を利用した湿田が一般的とされる。発見された水田も湿田で，地形に左右され不定型で小規模の水田跡が確認されている。これらの遺構に伴って，京田遺跡と楠元遺跡からは，木製鋤や木製鍬の農具を中心に豊富な木製品が発見されている。柄は，南九州弥生時代の伝統をそのまま継承した曲柄と膝柄である。鍬には，平鍬・三叉鍬・横鍬があり，鋤は組み合わせ式で，未製品もあることから，遺跡内で農具の生産・加工も行われていたと考えられる。また，京田遺跡では，網枠，楠元遺跡では丸木弓・容器も発見され，生産活動の一端を覗かせている。発見された種子のＤＮＡ分析の結果，熱帯ジャポニカとコムギが検出され，稲作の起源や生業を解明する手がかりを提供している。これらの弥生時代の遺跡の調査は川内地域における稲作の広がりを示すだけでなく，南九州における稲作文化の解明に繋がる重要な発見となった。大島遺跡からは水田跡は検出されていないが，石包丁が出土しており，水稲稲作を生業とする生活を営んでいたことがわかる。また，弥生時代前期～終末にかけての土器や，須玖式系土器，黒髪式系土器などが出土しており，他地域との活発な交流や川内川流域の弥生土器の型式変化を知ることのできる重要な資料である。

古墳時代

弥生時代に引き続き，楠元遺跡では古墳時代においても水田が造られる。しかし，弥生時代の自然地形利用型の水田とは異なり，灌漑施設を備えた水利管理型水田である。古墳時代の集落については調査例が少ないが，成岡遺跡では19基，麦之浦貝塚では16基の竪穴式住居が発見されている。墓制は，大島遺跡で発掘された大刀・剣・金環が副葬された土坑墓のほか，在地性の強い多様な形態が発見されている。川内川河口の船間島古墳は竪穴式石室構造の円墳，河口５㎞上流の御釣場古墳では石蓋土坑墓と箱式石棺墓が残されている。横岡古墳は，10基の地下式板石積石室墓群と土坑墓群がある古墳として知られており，地下式板石積石室墓から副葬品として蛇行剣が出土している。また，平成21年には天辰町で竪穴式石室をもつ天辰寺前古墳が発見され注目されている。

古代

大宝元年（701年）に大宝律令が制定され，それに伴って702年には御陵下町・国分寺町に薩摩国府が置かれ，さらに奈良時代末には薩摩国分寺が建立され，この地は薩摩国における政治・文化

の拠点となった。数回にわたる国分寺跡の発掘調査によって，寺域，伽藍配置や平安時代と鎌倉時代の再建を経た事実が判明し，大和川原寺式伽藍配置であることも明らかにされた。また，国分寺跡の北方約１㎞の地点で国分寺創建時の瓦などを焼いたロストル式瓦窯の形態をもつ鶴峯窯跡が発見された。

2002 年度に発掘調査が行われた京田遺跡は，薩摩国分寺跡が立地する台地に隣接する低湿地に立地している。調査では，告知札と呼ばれている木簡が県内で初めて出土した。木簡には「嘉祥三年」（西暦 850 年）という年紀が記され，その内容は，郡司から在地の有力者に水田の差し押さえを告知する記述であった。古代の地方行政のあり方や,土地支配を考える上で重要な発見となった。また，川骨遺跡で出土した墨書土器も９世紀第三四半期に相当するものであると考えられ，同時代における祭祀の様相の一端を垣間見ることができる。

薩摩国分寺跡と川内川の中間に位置する大島遺跡は，越州窯系青磁や緑釉陶器，風字二面硯，石帯が出土している。また，国分寺台地から谷を一つ挟んだ台地上に立地する計志加里遺跡では，方形周溝墓や道跡が発見され，両遺跡とも薩摩国府と関係の深い遺跡であると考えられる。

そのほか，西ノ平遺跡からは，土師器や須恵器のほかに硯・墨書土器・刻書土器・焼塩土器・帯金具などが出土しており，役所的な性格をもつ遺跡であると考えられる。鍛冶屋馬場遺跡は，10 世紀頃に鍛冶を専門に行う人々が生活していた遺跡である。古代に始まった鍛冶は中世～近世にかけても引き続き行われており，川内川を利用した鉄生産の場であった。

墓制としては，土師器製の蔵骨器が出土した屋形原，熔結凝灰岩を掘り込んで埋納施設をつくって須恵器の蔵骨器を埋納した越ノ巣火葬墓がある。

中世

鎌倉時代は，島津氏や渋谷氏等下向した鎌倉武士と在地領主との長く激しい争いが繰り返された争乱の時代でもある。それらの戦いの結果，1570 年の島津氏の三州統一をもって新たな時代が到来する。戦国時代には秀吉軍が薩摩攻めの際に，猫岳をはじめとして周辺の山などに塁を築き数万の大軍を配置したと言われており，猫岳や猪子岳の頂上には現在も塁跡が残っている。また，上野氏の居城であった上野城跡からは，掘立柱建物跡・方形竪穴建物跡，溝跡・土坑墓・畑跡などが検出されている。また土坑の中からは木の実やオオムギ･コムギ･イネが発見されており，当時の人々の食生活の一端を垣間見ることができる。

近世

藩政時代には商業が発達し，中心地の向田町は水陸交通の要衝として賑わった。川内川河口の久見崎には，船手奉行所が置かれ，藩の造船所があった。当地は朝鮮の役の際，薩軍が船出した港として有名である。この役で夫を亡くした婦人によって始められたと伝えられる盆踊り「想夫恋」は，県の無形民俗文化財に指定されている。

天明年間（1781 ～ 1788 年）には，伊地知団右衛門李甫が天辰町に磁器窯を開いている。平佐焼と呼ばれるこの磁器は，県内各地に流通し隆盛を誇った。近年の調査では作業小屋や石垣，窯の形態が明らかになっている。その他に，近世・近代の鍛冶遺跡として古原遺跡，鍛冶屋馬場遺跡があ

る。このように川内川は，平佐焼や鍛冶などの生産に関わる原料の搬入と製品の搬出に積極的に利用され，古来より商工業の発展に大きな役割を担ってきた。

最後に，ここで紹介できなかった遺跡や詳細については，各遺跡の発掘調査報告書を参考にされたい。

引用参考文献

鹿児島県教育委員会	1975	『薩摩国府跡・国分寺跡』
〃	1983	「成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』28
〃	1984	「外川江遺跡・横岡古墳」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』30
〃	2005	『先史・古代の鹿児島 (資料編)』
〃	2006	『先史・古代の鹿児島（通史編）』
鹿児島県立埋蔵文化財センター	2002	「計志加里遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』38
〃	2002	「鍛冶屋馬場遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』39
〃	2003	「楠元・城下遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』57
〃	2004	「上野城跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』68
〃	2005	「大島遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』80
〃	2005	「京田遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』81
川内市教育委員会	1991	『麦之浦貝塚』
〃	1991	「御釣場古墳 (２号墓)」『川内市埋蔵文化財調査報告書』 1
川内郷土史編纂委員会	1975	『川内市史　上巻』

表２　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物・遺構	備考
1	川　　骨	薩摩川内市高江町	自然堤防	弥生～近世	弥生土器，土師器，輸入陶磁器，国産陶磁器	平成19・20年度調査本報告
2	西之城	薩摩川内市高江町	平地	中世	土師器，陶磁器	平成20年度調査本報告
3	上高江原	薩摩川内市高江町峯元・岩崎・藤花崎　　ほか	台地	古墳～室町	土器，内黒土師器，染付	
4	安養寺丘古墳	薩摩川内市宮里町安養寺	丘陵	古墳	土器	円墳
5	別府	薩摩川内市五代町別府		古墳～室町		
6	日吉	薩摩川内市宮里町日吉	微高地	古墳	土器，須恵器	
7	宮田	薩摩川内市宮里町宮田	微高地	古墳	土器，須恵器	
8	堀ノ内	薩摩川内市宮里町堀ノ内	微高地	古墳～室町	土器，須恵器，青磁，染付	
9	川　　幡	薩摩川内市宮里町	丘陵斜面	古代・近世	土師器，須恵器，陶磁器	平成20・21年度調査本報告
10	上新田	薩摩川内市青山町	丘陵端	縄文～中世	磨製石斧,縄文土器,弥生土器,成川式土器，土師器	平成21・22年度調査
11	堀之内	薩摩川内市青山町	丘陵斜面	縄文～中世	剥片尖頭器,石皿,成川式土器,土師器，須恵器，青磁，白磁	平成21・22年度調査
12	山仁田	薩摩川内市青山町	台地	縄文～中世	縄文土器，土師器，青磁，白磁，滑石製石鍋，薩摩焼	平成21・22年度調査
13	山口	薩摩川内市都町	台地	縄文～中世	磨石，石鏃，成川式土器，青磁，白磁	平成21～23年度調査
14	湯之谷	薩摩川内市隈之城町湯之谷	丘陵	平安	土師器	
15	西ノ口	薩摩川内市隈之城町西ノ口	台地	古墳	土器	
16	上ノ原	薩摩川内市中福良町上ノ原	台地	縄文～戦国	土器，須恵器，青磁，染付	昭和55年調査
17	西ノ平	薩摩川内市中福良町西ノ平	台地	旧石器～江戸	土器,土師器,青磁,(細石刃核)	昭和55～59年調査
18	成岡	薩摩川内市中福良町成岡	台地	旧石器～江戸	土器,須恵器,青磁,(細石刃)	昭和55～59年調査
19	立石A	薩摩川内市中福良町立石	丘陵	縄文～中世	土器，内黒土師器，青磁	
20	立石B	薩摩川内市中福良町立石	段丘	縄文～中世	土器，石鏃，黒曜石	
21	集	薩摩川内市中福良町集	台地	縄文～中世	土器，陶器，黒曜石	
22	床並	薩摩川内市青山町床並・岡峯	台地	古墳～室町	土器，陶器	
23	薗田	薩摩川内市青山町薗田・薗内	丘陵	古墳～室町	土器，青磁，陶器	
24	都原	薩摩川内市都町都原・山口	台地	縄文(早)～近世	蔵骨器埋納遺構，溝状遺構，土器，須恵器，陶磁器	平成12・14年調査
25	霜月田	薩摩川内市都町霜月田	台地	旧石器～近世	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土器，土師器，陶磁器	平成12・15年調査
26	四反畑	薩摩川内市尾白江町四反畑	微高地	平安～室町	内黒土師器，青磁，染付	
27	瀬戸山	薩摩川内市木場茶屋町瀬戸山	台地	古墳～近世	土師器，須恵器,青磁	
28	蕨迫	薩摩川内市木場茶屋町蕨迫	台地	古墳～室町	土器，陶器	
29	木場原A	薩摩川内市木場茶屋町木場原	台地	縄文～平安	石鏃，土器，内黒土師器	
30	木場原B	薩摩川内市木場茶屋町木場原	台地	縄文～室町	石鏃，土器，内黒土師器	
31	麦	薩摩川内市都町麦	低地	縄文～中世		

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
高江町
上高江
宮里町
川内川
薩摩川内市
陸上自衛隊川内演習場
陸上自衛隊川内駐屯地
冷水町
藤次原池
下木場
木場谷
尾白江町
青山町
高貫
東越
大河内
中郷町
木場茶屋町
0
1km

第３図　周辺遺跡地図

川　骨　遺　跡

第３章　川骨遺跡の調査

第１節　調査の経過 (日誌抄)

調査の経過は日誌抄をもって記載する。日単位では煩雑になるため月単位にまとめた。

〈事前調査・一部本調査　平成 19 年度：平成 19 年 9 月 3 日～ 10 月 26 日〉

９月

調査施設設営準備及び環境整備を行う。遺跡の層序，遺構・遺物の広がりを確認するための先行トレンチを 1 ～ 25 の番号をつけて設定し，掘り下げを開始。近世の石組み遺構や井戸，時期不明のピットを検出。Ⅰａ層から中近世の遺物（青磁・薩摩焼・染付・古銭など）が，Ⅴ層から成川式土器が出土。1 ～ 25 トレンチの土層断面図作成，写真撮影，平板実測，遺物の取り上げを行う。

10 月

26 トレンチ，南北ロングトレンチ（Ｃ－１～５区)，東西ロングトレンチ（F・Ｅ－５区）を設定し掘り下げを行う。ピット，石組み遺構，溝状遺構を検出。それぞれ写真撮影･平板実測を行う。14 トレンチで木製品と思われる遺物が出土したため，写真撮影，平板実測を行った後，発泡ウレタンを使用して取り上げる。トレンチにおける調査を終了し, Ｃ～Ｇ－１～５区の全面調査を行う。ピット，井戸跡を検出。薩摩焼や染付，肥前陶器，管状土錘などが出土。26 日，機材の撤収・遺跡の保護作業を行い，平成 19 年度の調査を終了する。

〈本調査　平成 20 年度：平成 20 年 5 月 7 日～平成 21 年 3 月 19 日〉

５月

高速道路建設の為の基礎工事を行うため，橋脚建設予定部分（Ｅ～Ｇ－２～５区，Ｇ～Ｉ－６～12 区）から発掘調査を開始する。重機による表土剥ぎの後，山鍬，ジョレン，ねじり鎌等で掘り下げを行う。Ｇ－３区にて布基礎検出。Ｉ－７区にて石組み検出。それぞれ写真撮影, 実測を行う。Ⅰａ層からは，薩摩焼や青磁，染付，管状土錘などが出土。Ｆ－５区の下層確認トレンチⅣｂ層から 16 世紀初頭～半頃に相当する完形の蓮弁文の青磁碗が出土。Ｇ・Ｈ－９区Ⅴ層上面にて掘立柱建物跡の柱跡になると思われるピットを 13 基検出。Ｇ－９区，Ｈ－９区Ⅴ層上面にてそれぞれ土器集中遺構 1・2 を検出。

職場体験学習で松元中学校から生徒 2 名来跡，発掘作業を行う。

６月

調査区内湧水の為, 排水溝を設置する。また土のうによる調査区の補強, ポンプによる排水を行う。日差しが強くなってきたため，遮光ネットの準備をする。Ｇ・Ｈ－６･７区の調査が終了したため, 重機による埋め戻し。Ｈ－ 17・18 区に 30・31 トレンチを設定。Ｈ－ 11 区にてかまど状遺構検出。Ｇ・Ｈ－ 14 区にて溝状遺構，石列の検出。Ｆ－８区Ⅴ層上面にて土器集中遺構 3 を検出。Ｈ・Ｉ－ 22 ～ 24 区において溝状遺構検出。Ｇ－ 22・23 区にて溝状遺構検出。Ｇ－ 18 区自然堤防際のⅠａ層にて墨書土器出土。Ｇ－ 19 区にて溝状遺構検出。薩摩川内市教育委員会前氏・藤井氏来跡。

７月

Ｃ～Ｅ－ 23 ～ 25 区Ⅰａ層掘り下げ。Ｃ～Ｅ－ 25 区Ⅴ層上面にて溝状遺構検出，写真撮影，実測を行ったのち, 下層確認トレンチを設定し掘り下げ, 土層断面図, Ⅴ層上面でのコンタ図作成。Ｆ・Ｇ－６～９区Ⅰａ～Ⅳｂ層掘り下げ, Ⅴ層上面を検出しコンタ図を作成。土器集中 1･2 の写真撮影, 実測の後取り上げる。Ｈ－９・10 区で検出されたピットの半裁を行い，埋土状況を確認する。Ｅ・Ｆ－ 18･19 区のⅤ層上面コンタ図を作成。Ｆ・Ｇ－ 6･7 区，Ｇ－ 15･16 区の調査が終了したため，重機による埋め戻しを行う。Ｈ－ 10・11 区においてピットを検出，半裁，断面図作成，写真撮影，全掘，記録を行う。Ｃ～Ｅ－６～９区Ⅰａ層，Ⅳａ層，Ⅳｂ層掘り下げ。Ｃ～Ｅ－１～９区Ⅰａ層，Ⅳａ層，Ⅳｂ層掘り下げ。Ｃ－６・７区Ⅴ層上面にて土器集中遺構 4 を検出。写真撮影，実測，取り上げを行う。Ｅ－ 12 ～ 16 区Ⅰａ層にて石列検出。Ｃ～Ｅ－ 12・13 区，Ｄ・Ｅ－ 14・15 区，重機による表土剥ぎ。Ｆ・Ｇ－ 12 ～ 15 区Ⅰａ層掘り下げ。Ｆ・Ｇ－ 14 区Ⅰａ層にて石列検出，写真撮影，平板実測。Ｃ～Ｆ－６・７区Ⅴ層上面コンタ図を作成。ラ・サール学園永山修一教諭，黎明館東氏来跡。

８月

作業員の定期健康診断を実施。Ｄ･Ｅ－ 13 区Ⅰａ層中にて石垣検出。写真撮影, 平板実測を行う。Ｃ－６区Ⅴ層上面で土器集中遺構 4 を検出。写真撮影, 実測, 取り上げを行う。Ｆ･Ｇ－ 12 ～ 16 区, Ⅰａ層，Ⅲ層，Ⅳ層，Ⅴ層掘り下げ。Ｃ･Ｄ－ 8･9 区Ⅳｃ層～Ⅴ層にて土器集中遺構 5 を検出。Ｄ･Ｅ－７区, Ｈ－ 10 区Ⅴ層上面で土器集中遺構 6･7 を検出。写真撮影後, 平板実測を行い取り上げる。Ｆ・Ｇ－ 12・13 区Ⅴ層上面で溝状遺構を検出，写真撮影後掘り下げ，実測を行う。Ｃ・Ｅ－ 12 ～ 15 区，Ⅰａ層，Ⅲ層掘り下げ。Ｈ・Ｉ－ 10・11 区調査終了，埋め戻し。Ｄ・Ｅ－９区Ⅴ層にて土器集中遺構 8 を検出，写真撮影後遺物取り上げ。琉球大学池田榮史教授，橿原考古学研究所山澤節子氏，川内歴史資料館吉本明弘氏来跡。

９月

Ｆ・Ｇ－ 14 ～ 16 区Ⅴ層にて土器集中遺構 9 を検出。写真撮影後実測を行い，取り上げる。低湿地部分から木片，石鏃出土。木片をギネステープにより取り上げ。排水対策のため，調査が終了したＤ～Ｇ－１～５区に重機で貯水池を掘る。土器集中遺構 5 の掘り下げ，実測。

10 月

Ｃ～Ｆ－ 12・13 区，溝状遺構検出。Ｅ－ 13 区にて鍛冶炉検出，写真撮影，実測。Ｄ・Ｅ－ 10 区Ⅴ層上面にて土器集中遺構 10・11 を検出。写真撮影後，実測，取り上げ。Ｃ～Ｆ－ 10・11 区Ⅰａ層～Ⅳ層掘り下げ。Ｄ～Ｆ－９～ 11 区Ⅰａ層～Ⅳ層掘り下げ。Ｄ・Ｅ－ 14・15 区掘り下げ。Ｅ－６～９区，ピット掘り下げ。Ｅ－ 13 区，鍛冶炉跡検出，写真撮影，実測。三重大学八賀晋名誉教授現地指導。現場の排水（泥水）処理に薬品（パック）を使用。

11 月

調査を終了した遺跡の一部を国土交通省へ引き渡し。空中写真撮影。Ｇ－ 12・13 区，重機による表土剥ぎ，Ⅰａ層掘り下げ。Ｄ－９区にて土器集中遺構 12 を検出。Ｃ－９区Ⅴ層上面にて土器集中遺構 13 を検出。写真撮影後, 実測, 遺物取り上げ。Ｃ～Ｆ－ 12 ～ 17 区, Ｃ～Ｅ－ 19 ～ 21 区, 重機による表土剥ぎ，Ｄ・Ｅ－ 13 区で水田遺構 2 を検出，写真撮影。鹿児島大学中村直子准教授

現地指導。

12月

Ｄ～Ｆ－６～13区遺構検出，掘り下げ。Ｅ～Ｇ－７・８区ピット掘り下げ。株式会社埋蔵文化財サポートによる土器集中遺構５の実測および調査区全体の遺構実測，コンタ図作成。鍛冶炉跡，水田遺構の科学分析サンプル採取。ラ・サール学園永山修一教諭現地指導。

１月

４地点の掘り下げ。Ⅴ層上面にてピット，溝状遺構検出。遺構実測，コンタ図作成，写真撮影。

２月

Ｂ・Ｃ－14～18区，湿地部分の掘り下げ。Ｅ・Ｆ－21・22区において畝間遺構検出。植物珪酸体分析，花粉分析の為の科学分析サンプル採取。Ｄ・Ｆ－19～22区ピット掘り下げ。Ｆ－20・21区，溝状遺構掘り下げ。遺構実測，写真撮影。

３月

Ｂ・Ｃ－18区，Ⅳ層上面にて水田遺構検出。Ｃ・Ｄ－19～21区，溝状遺構検出。それぞれ写真撮影を行った後，実測。Ｃ～Ｆ－19～22区，全景及び遺構近景写真撮影。産廃処理。19日，調査終了。

第２節　発掘調査の方法と成果

川骨遺跡の調査は，道路建設用センター杭のＳＴＡ.105とＳＴＡ.107を基準に，10ｍ間隔の区画を設定し，東から西へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・・・Ｊ列，北から１・２・３・・・28列と名称した。

事前調査では，設定したグリッドラインと地形を考慮して２ｍ×５ｍのトレンチを合計26か所設定し，遺跡全体における遺物包含層の有無や広がりを把握した。各トレンチは，山鍬･ジョレン･ねじり鎌等で掘り下げた。その結果，弥生時代から近世にかけての遺構・遺物などが発見された。

本調査は，事前調査で判明した旧地形を１～４地点にわけて調査を進めた。川内川近くの自然堤防と思われるところを１地点，自然堤防上で包含層が残存している箇所を２地点，鉄分を含む層があり泥層が堆積している低湿地を３地点，耕作によって自然堤防の上位の包含層が削平されているところを４地点とした。

調査方法は，表土を重機によって除去し，その後山鍬・ジョレン・ねじり鎌等でⅠａ層からⅣｃ層を掘り下げⅤ層を検出した。その結果，事前調査と同様に，弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が発見された。一括遺物以外の遺物は番号を付け，出土位置，レベルを記録した。遺構は，検出状況の記録の後，埋土を除去し，写真撮影・図面作成などの記録保存を実施した。

１地点では，表土直下から中・近世の坪地業，布基礎の遺構を検出した。遺物は表土に中世の土師器，青磁，白磁，染付，薩摩焼，管状土錘等が混在しており，包含層は確認できなかった。

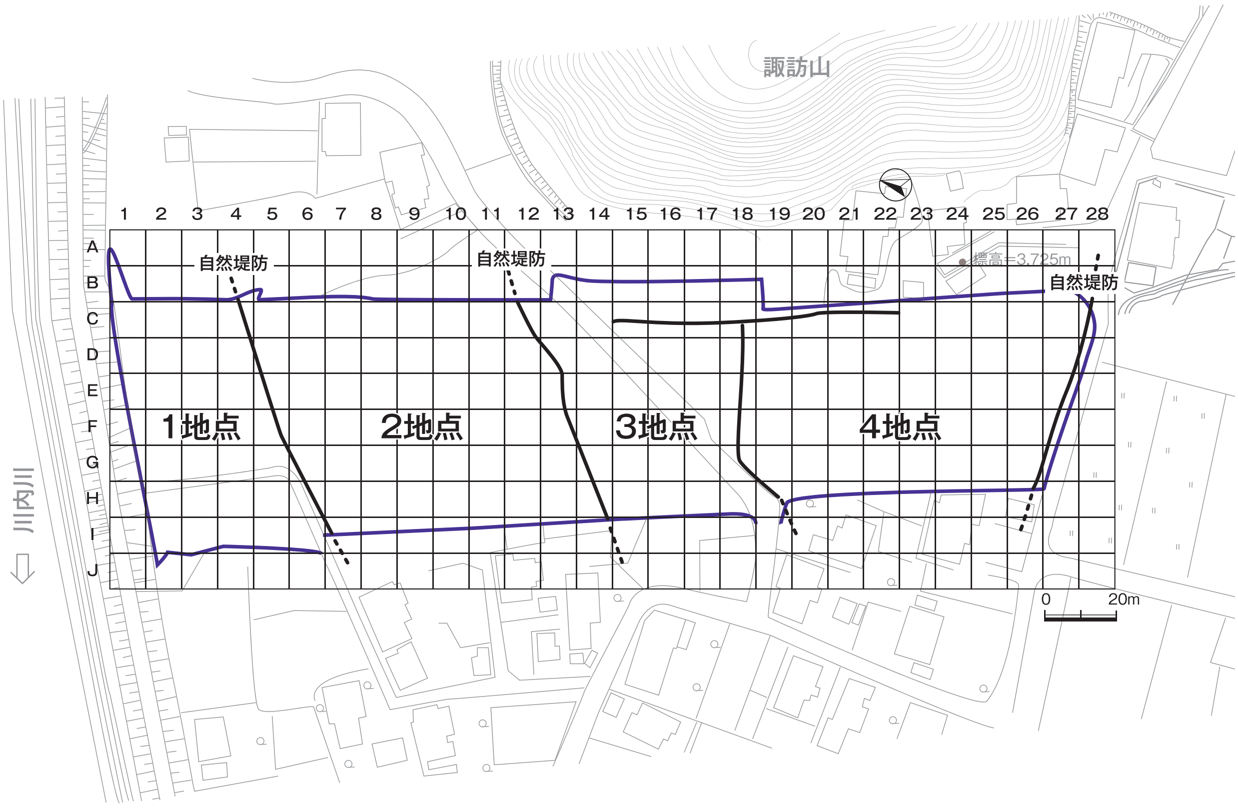
２地点では，弥生時代の土器が出土し，13か所の土器集中箇所が確認された。ここで出土した土器は弥生時代後期後半～古墳時代初頭に位置づけられる。特に土器集中遺構５では，壺，器台，大甕などが多量に重なり合って出土した。一般の集落や住居跡から出土する土器は甕の量が多いが，この土器集中遺構は，甕が少なく，壺が多く確認された。鹿児島大学中村直子准教授は，この状況と器台の存在や大甕の煤の付着から，大甕を煮炊きに使用し，なんらかの祭祀に使用したのではな

いかと推定している。また，土器集中遺構７は，他の土器集中遺構にはない小型の器種や高坏，免田式土器の長頸壺が出土した。

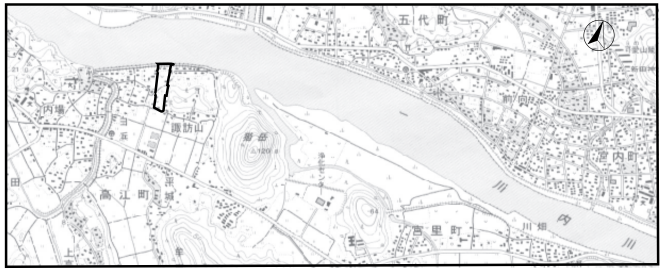
中世～近世の遺構としては, 掘立柱建物跡や溝の他に近世の鍛冶炉遺構（八賀晋氏の指導による）が５基検出された。これらの鍛冶炉遺構のC14の年代測定では，江戸時代中期から明治時代初頭に相当するという結果が出ている。

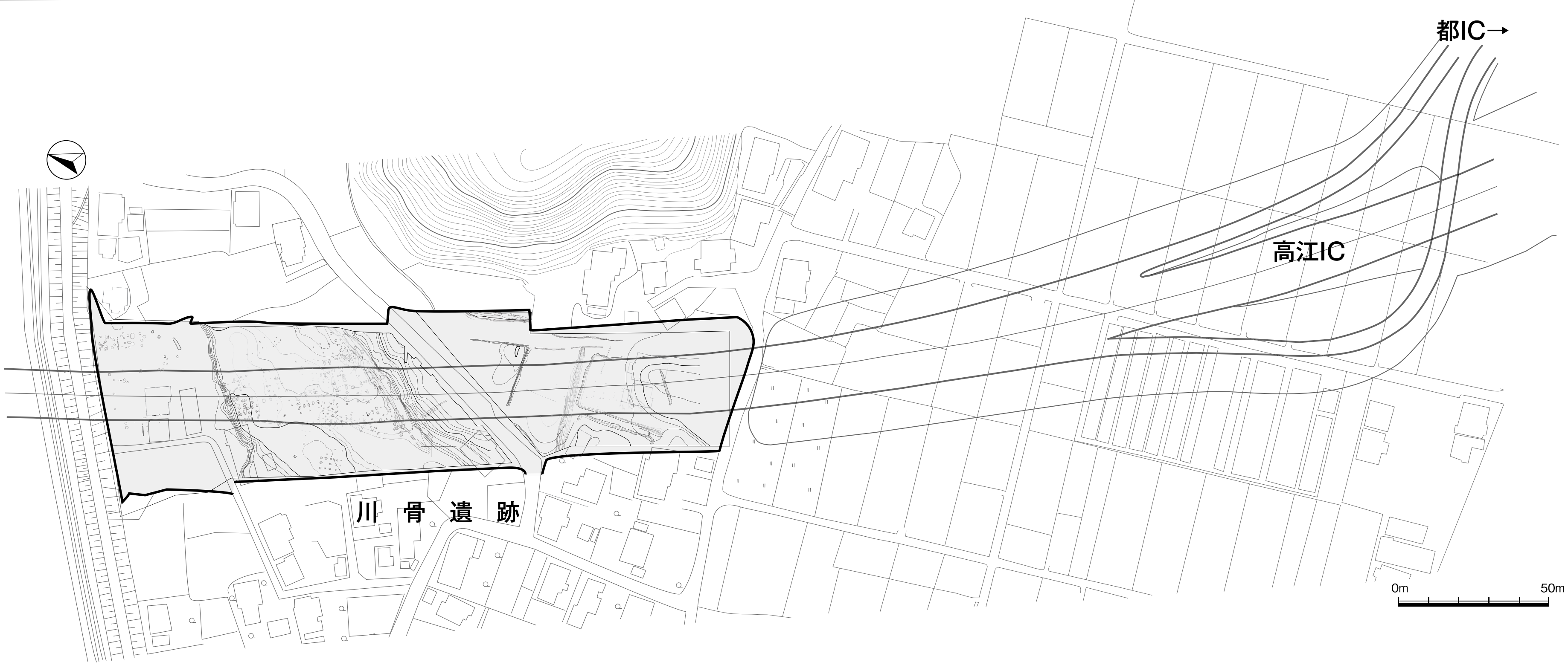
３地点の低湿地では土器集中遺構が１か所検出され，自然木が多数出土した。その上位層には数枚の水田層を確認した。

４地点では耕作等による削平があり，表土直下はⅤ層であった。遺物はほとんど出土しなかったが, 溝跡や畝間状遺構が検出された。また, 墨書土器（土師坏）が出土した。この墨書土器には,「御前舎入分家□□□（３文字不明）神郡進出」の文字と２個の「○」印が墨書してあり，現地で指導したラ・サール学園高校の永山修一教諭は，これを眼を表現したものと捉え，人面墨書土器であるとの見解を示した。



第４図　川骨遺跡周辺地形図および地点区分図





第５図　川骨遺跡路線図

第６図　川骨遺跡遺構配置図

第３節　層序

Ⅰ層は耕作土であり，Ⅱ層は，厚い部分で約１ｍ堆積し，Ⅱ層の下位からは弥生時代の土器や中・近世の陶磁器等が同じ層で出土した。Ⅱ層は長年の川内川の氾濫等による遺物の混在がみられるものである。

Ⅲ層は，３地点の低湿地のみで確認され，近代から現代の水田層で鉄分を含んでいる。

Ⅳａ層，Ⅳｂ層は，縄文・弥生時代や土師器等の流れ込みが確認された砂質土である。

Ⅳｂ層は，川内川沿いで約60㎝，遺跡中心部で約10㎝の厚みがあり，堆積の差がある。

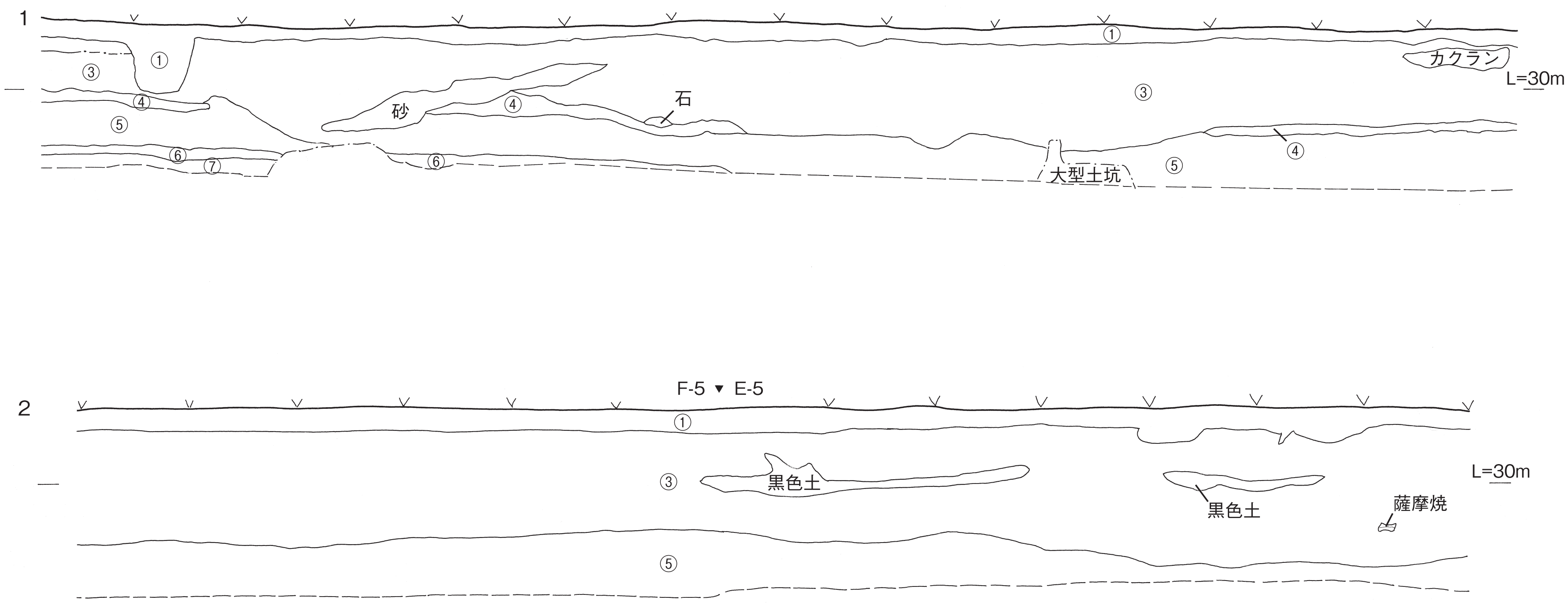
Ⅳｂ層①，Ⅳｂ層②は，酸化鉄分やマンガンを含む水田層である。

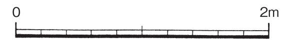
Ⅳｃ層は黒褐色土，Ⅴ層は黄褐色粘質土で，ともに弥生時代～古墳時代の包含層である。低湿地のⅤ層は，グライ化された灰色粘土であり，弥生時代～古墳時代の土器が出土した。

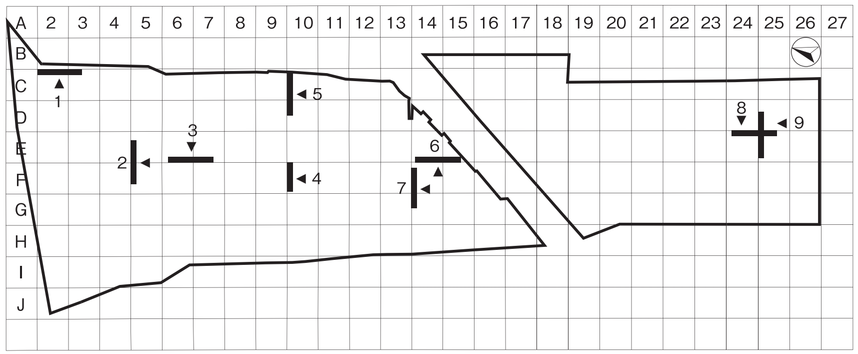
Ⅵ層は青灰色砂であり，無遺物層である。

自然堤防状（宅地・旧畑作地）			低湿地			
Ⅰ層	表土	耕作土	Ⅰ層		表土	耕作土，シラスの堆積
Ⅱ層	黒褐色土		Ⅱ層		黒褐色土	
			Ⅲ層	水田１	黄褐色土	
					明黄褐色土	酸化鉄分を含む
					黄褐色土	マンガンを含む
					灰黄褐色土	酸化鉄分を含む
					黒褐色粘質土	
Ⅳａ層	黒褐色砂質土					
Ⅳｂ層	灰色砂		Ⅳｂ①層	水田２	灰色粘質土	
					灰色砂	
			Ⅳｂ②層	水田３	灰黄色土	酸化鉄分を含む
					灰色シルト	
Ⅳｃ層	黒褐色土	弥生～古墳の包含層	Ⅳｃ層		灰黄色粘質土	
					黒褐色粘質土	
Ⅴ層	黄褐色粘質土	〃	Ⅴａ層		灰色粘質土	弥生～古墳の包含層
			Ⅴｂ層		黒褐色粘質土	
Ⅵ層	青灰色砂		Ⅵ層		灰色砂	

第７図　川骨遺跡基本土層図

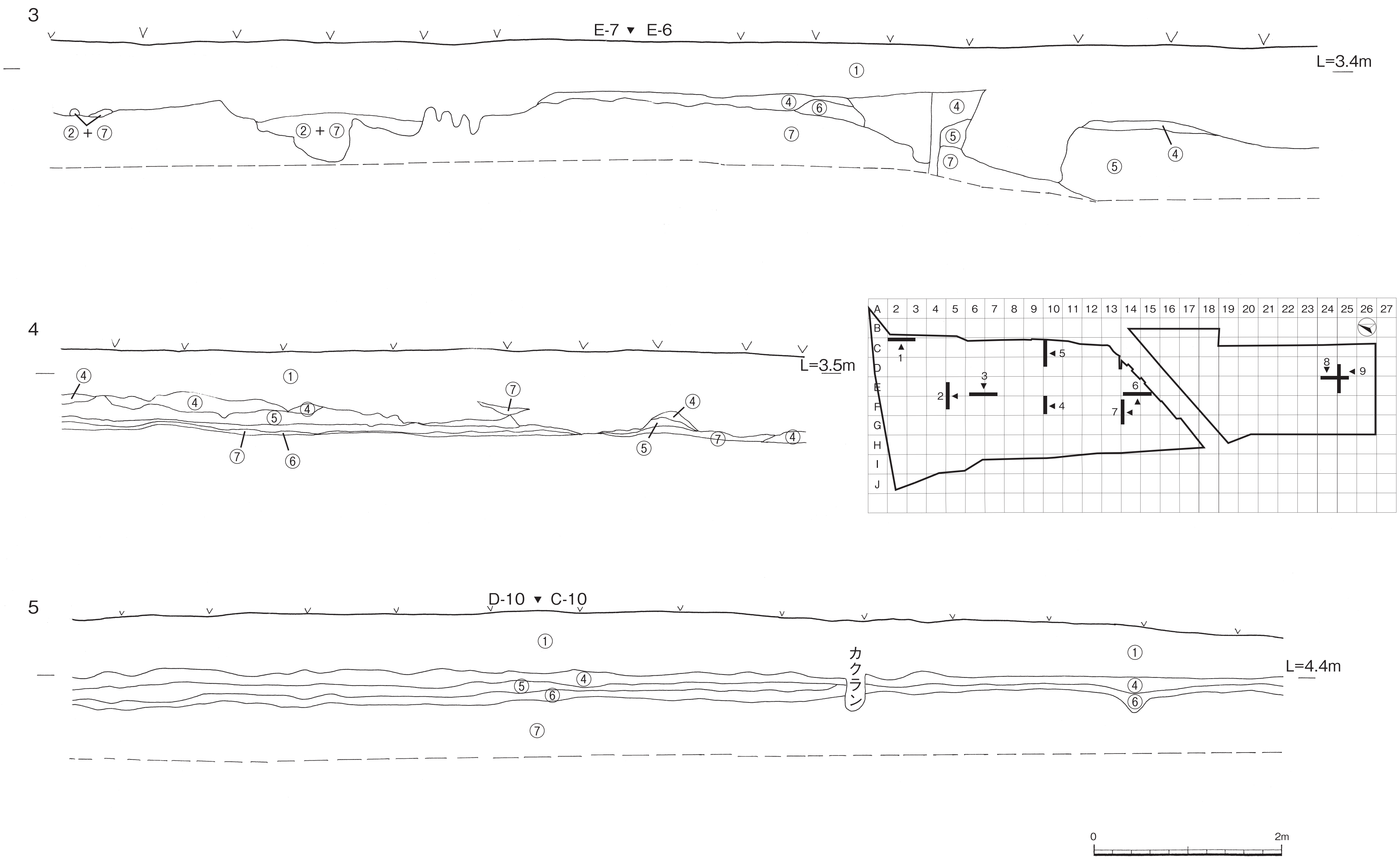




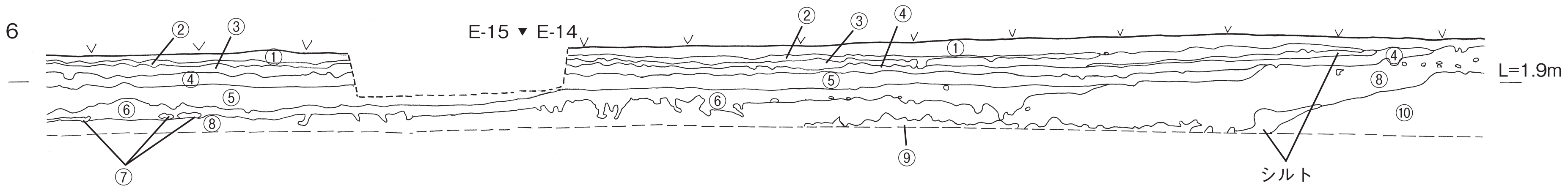


①表土…Ⅰ層　⑤灰色砂…Ⅳｂ層
②Ⅰ層＋礫＋シラス　⑥黒褐色土…Ⅳｃ層
③黒褐色土…Ⅱ層　⑦黄褐色粘質土…Ⅴ層
④黒褐色砂質土…Ⅳａ層
※１～５、７～９の土層注記。
６については、第10図中に別記。

第８図　１地点土層断面図

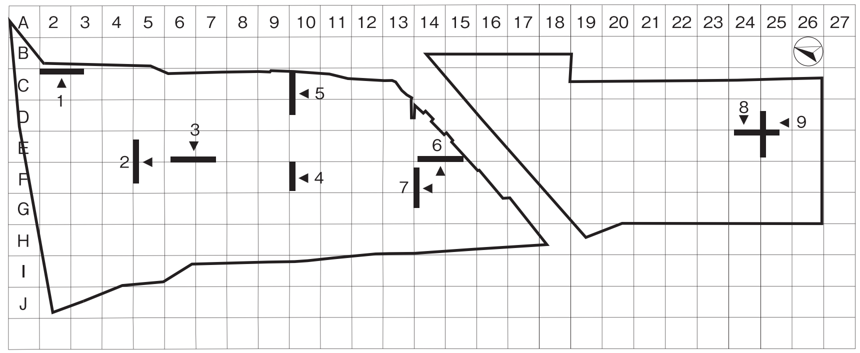


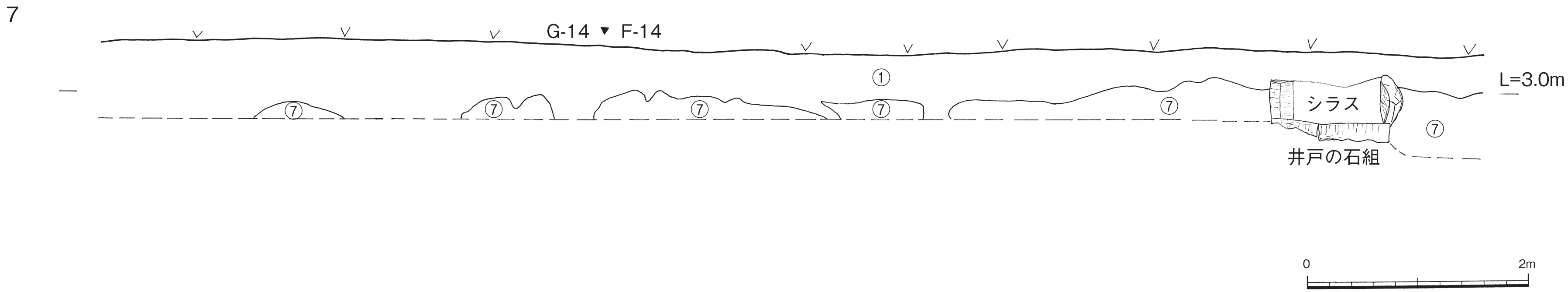
第９図　２地点土層断面図



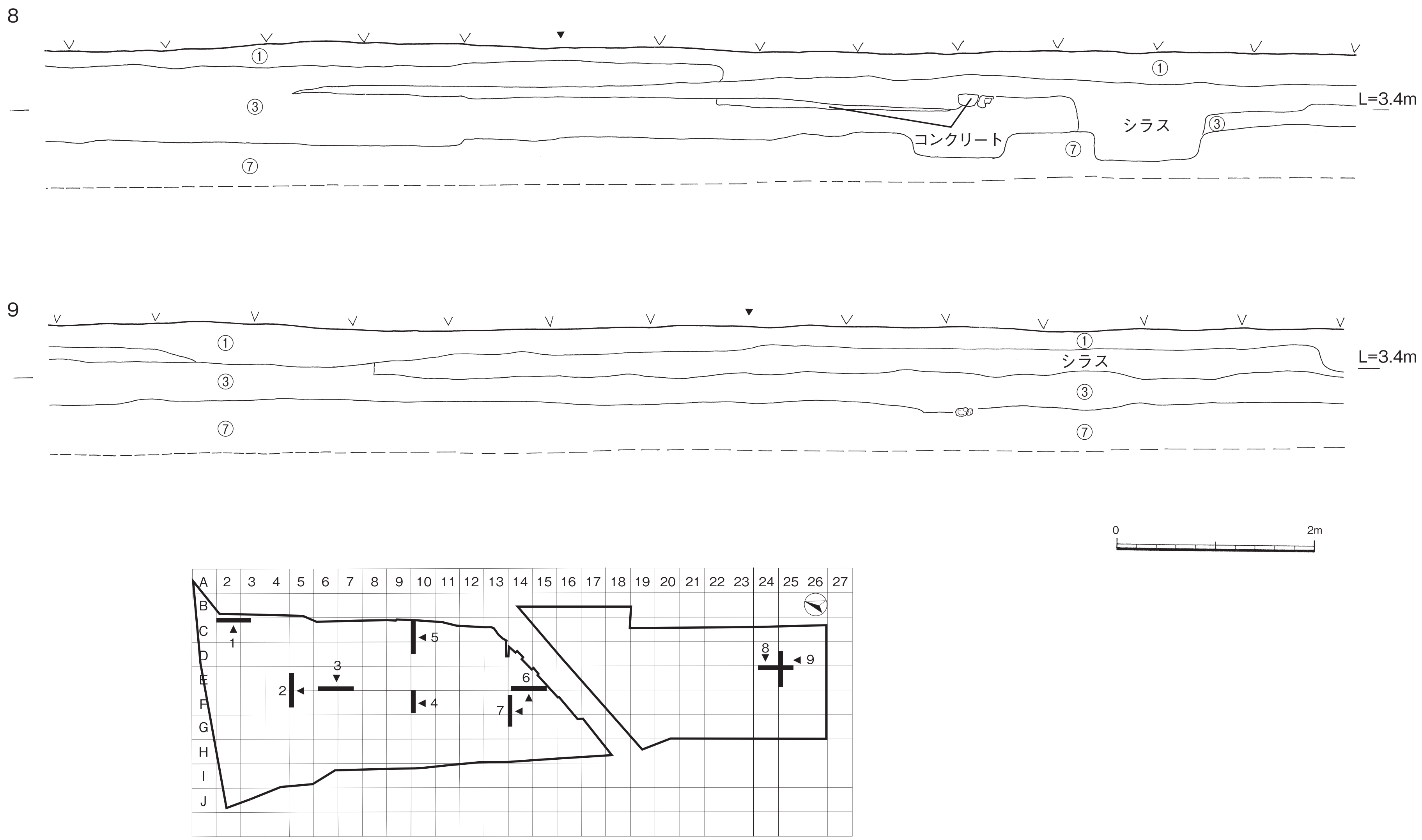
①灰黄褐色土
②黒褐色土 } Ⅲ層
③灰色粘質土…Ⅳｂ①層
④灰黄色土
⑤灰色シルト } Ⅳｂ②層
※６（底湿地）のみの土層注記

⑥灰黄色粘質土
⑦黒褐色粘質土 } Ⅳｃ層
⑧灰色粘質土…Ⅴ層
⑨黒褐色粘質土…Ⅴｂ層
⑩灰色砂…Ⅵ層





第１０図　３地点土層断面図



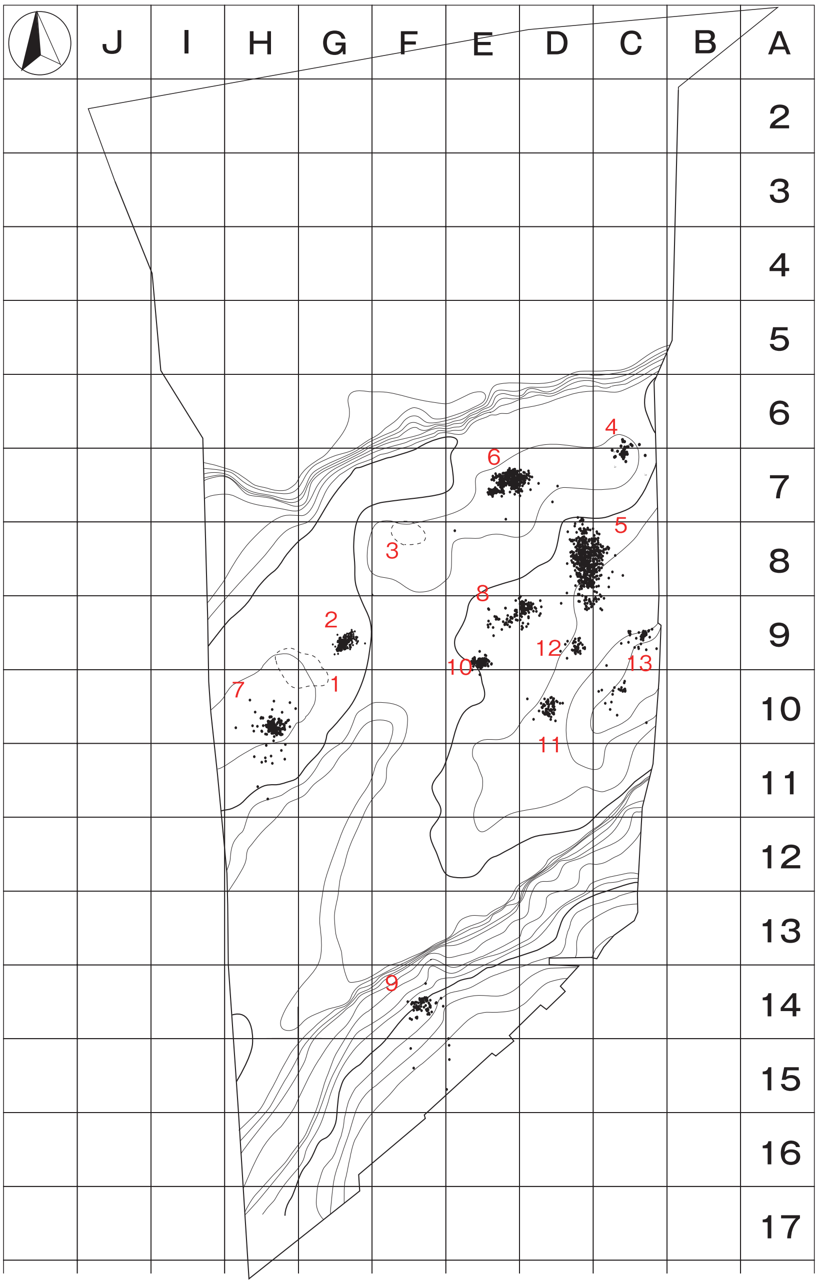
第 11 図　4 地点土層断面図

第４節　調査の成果

1　弥生時代～古墳時代の調査

弥生時代～古墳時代にかけては，自然堤防上の２地点において 12 か所，低湿地において１か所，計 13 か所の土器集中遺構が検出された。いずれも，弥生時代後期後半～古墳時代初頭に相当すると考えられる遺構である。Ⅳｃ層～Ⅴ層にかけて検出されたが, いずれも掘り込みは確認されなかった。Ⅳｃ層・Ⅴ層において，土器集中遺構以外からは同時期の遺物は出土しなかった。

土器は，器種ごとに甕・大甕・壺・鉢・高坏・器台・その他に分類し，113 点を図化した。以下に，土器集中遺構ごとに出土状況および出土遺物について述べる。なお，調査時は土器集中遺構 13 か所を土器集中Ａ, Ｂ, Ｃ・・・と呼称していたが, 今回報告するにあたって土器集中遺構１, ２, ３・・・と呼び変えることにする。



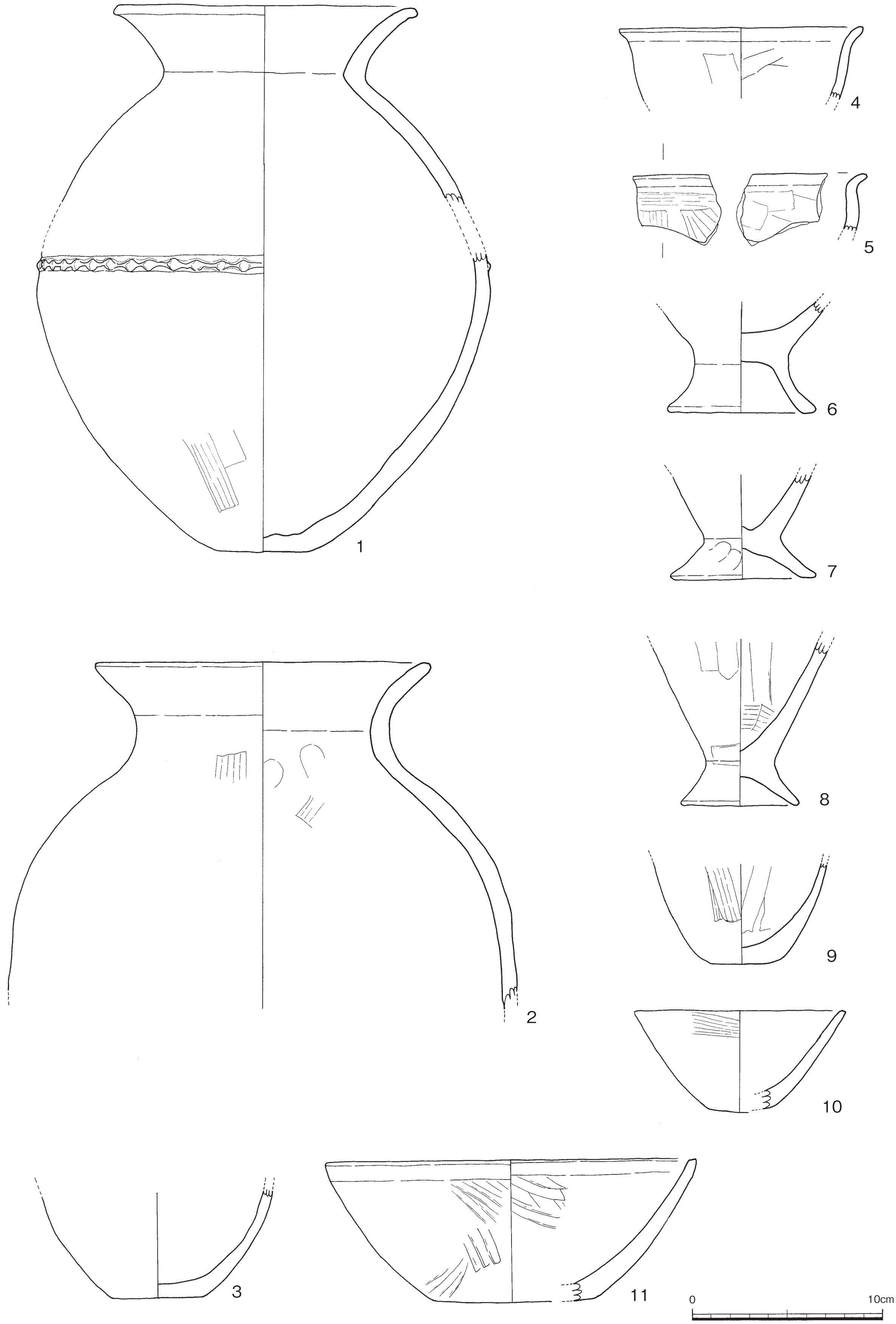
第 12 図　弥生～古墳時代遺構配置図

土器集中遺構 1(第 13・14 図)

Ｈ・Ｇ－９・10 区，Ⅴ層上面で検出した。約７×６ｍの範囲に小片が広がっており，中央部の空白部分を囲むように分布している。土器が摩耗しているため，川の洪水などで多少の位置移動はあったと考えられるが，土器の接合状況からおそらくほとんど元の位置を保っているといえる。

１～３は壺である。１は，口縁部が「く」の字に大きく外反し，平底の底部をもつ。また，丸みのある胴部に刻目をもつ三角突帯がめぐる。口唇部は平坦である。２は口縁部の屈曲がやや緩やかな壺で，胴部はほとんど張らず，肩部からまっすぐに底部に向かうと思われる。３はやや小型の壺の平底の底部である。４～11 は，鉢である。４の短い口縁部は，ゆるやかに外反する。５の口縁部は，短いが強く外反し内面にはっきりとした稜をもつ。６の脚部は，天井部に平坦面をもち脚端部は外反する。７・８の天井部は山形になっており，脚端部は直線的に開く。９のやや平底の底部は垂直気

第 13 図　土器集中遺構 1 出土状況



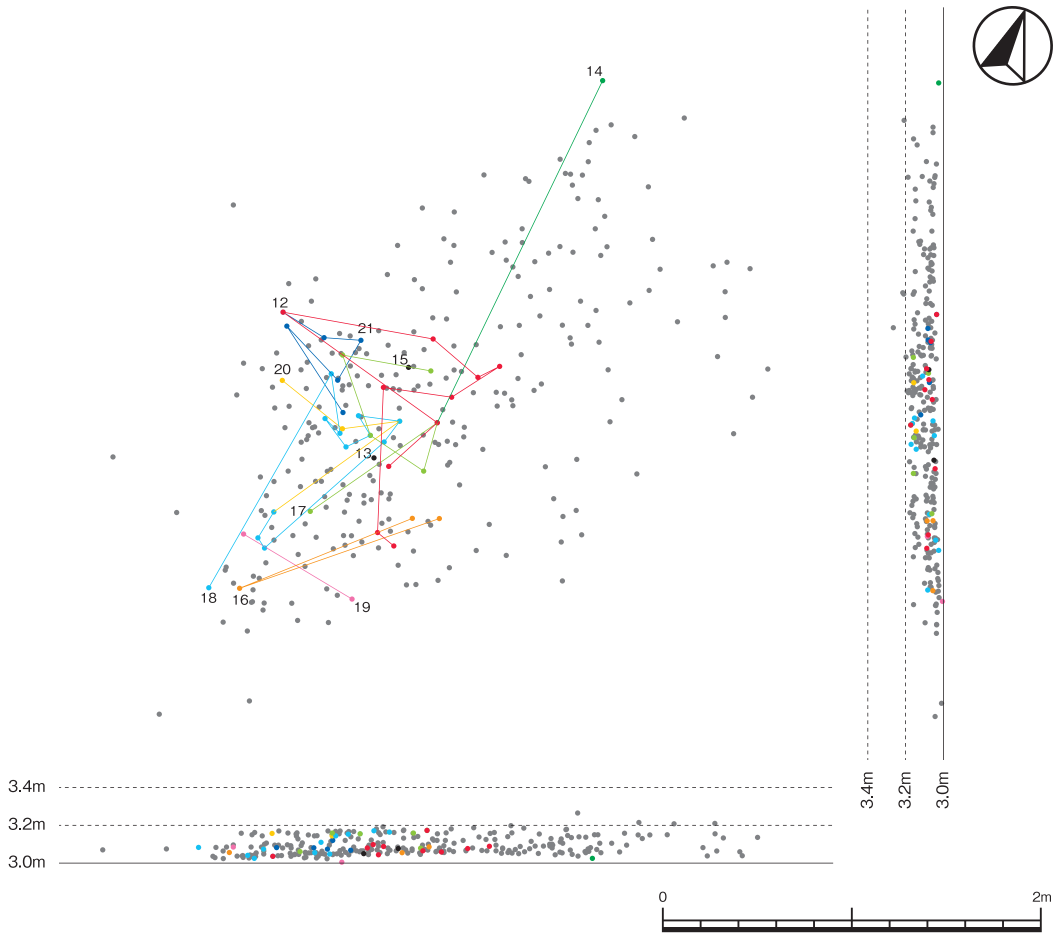
第 14 図　土器集中遺構 1 内出土遺物

味に立ち上がるが，10・11 はボウル状の鉢である。10 の底部はやや丸みを帯びる。11 はやや広めの単位のハケメ調整がなされている。

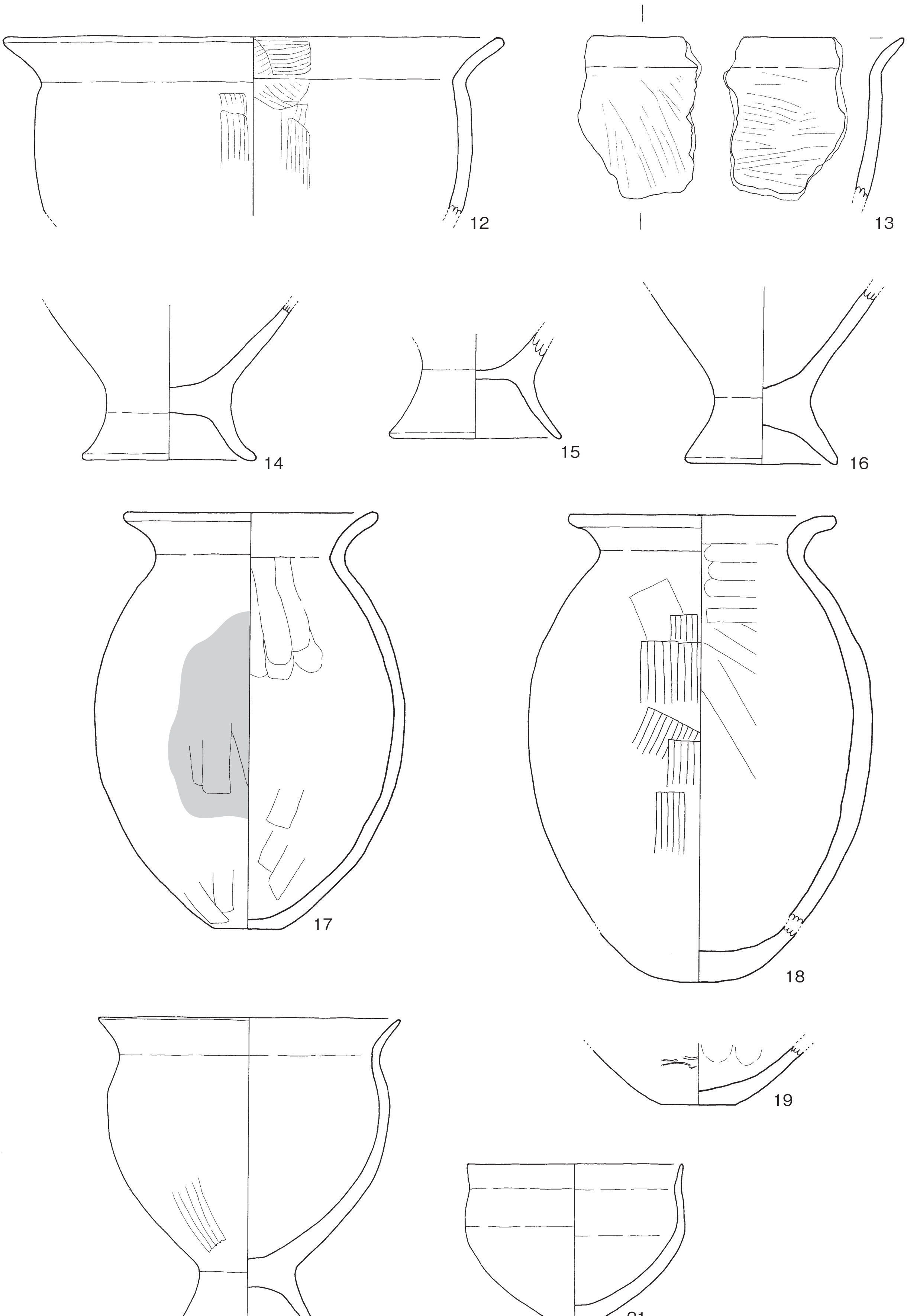
土器集中遺構 2(第 15・16 図)

G − 9 区，Ⅴ層上面で検出した。約 3 × 3 ｍの範囲に広がっている。

12・13 は甕の口縁部～胴部である。12 の口縁部は「く」の字に強く外反する。口唇部は平坦で，内外面ともハケメ調整の後ナデている。13 は，12 に比べると口縁部の屈曲が弱く，口唇部は先細りである。14 ～ 16 は甕の脚部である。14 は脚部内面の天井部が平坦で，脚の端部が外反する。15 は，同じく天井部が平坦であるが，器壁が薄く，脚が長く立ち上がる。16 の天井部は山形になっており，変換点が見られない。脚の端部はやや内側にむく。17 ～ 19 は壺である。17 は口縁部が屈曲する。底部は平底である。18 はやや平底の底部をもつ。19 は平底の壺である。内面は指押さえによる調整である。20 は小型の甕である。内面に稜をもつややゆるやかに外反する口縁部で，胴部がやや張る。脚部の内面の天井部はやや平坦で，脚は「ハ」の字に広がる。21 は鉢（小型の壺）として分類した。小さく平坦な底部からやや膨らむ胴部で，いったん内湾したあと口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部は先細りである。



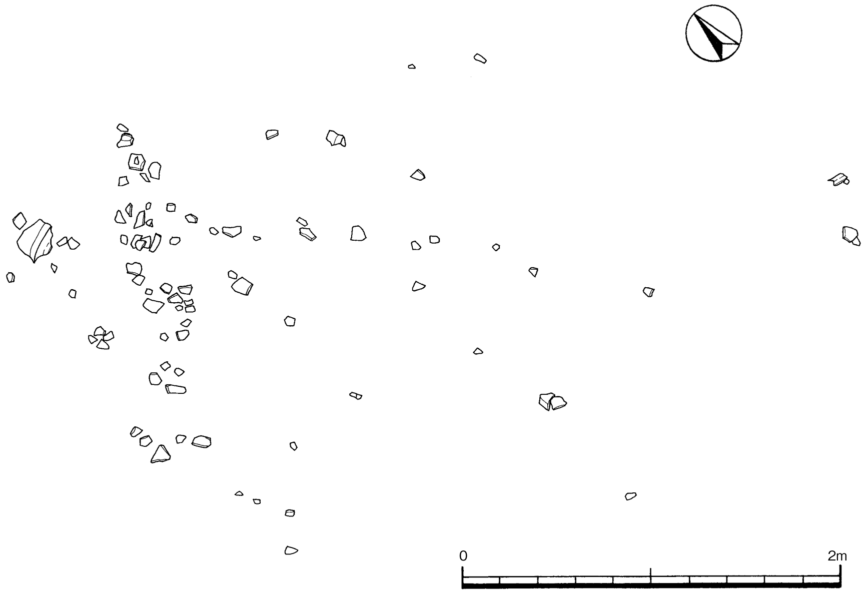
第 15 図　土器集中遺構 2 ドット図



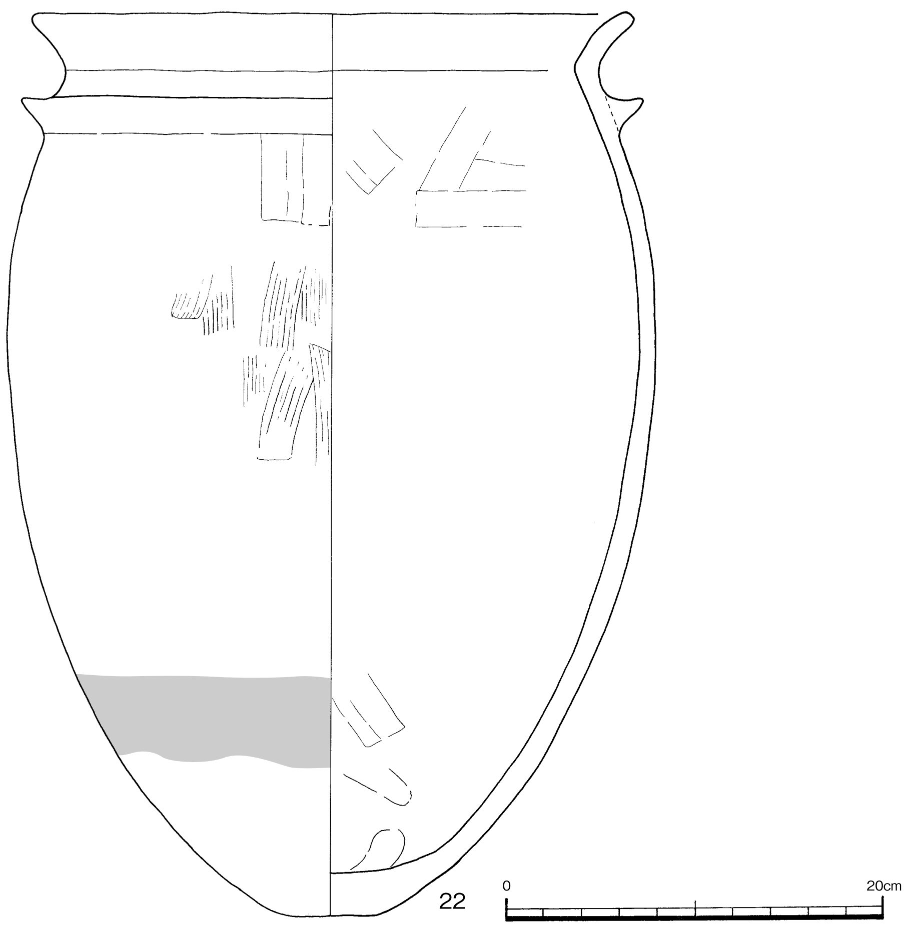
第 16 図　土器集中遺構 2 内出土遺物

土器集中遺構 3(第 17・18 図)

Ｆ－８区で検出した。約 2.5 × 3 ｍの範囲に広がっている。



第 17 図　土器集中遺構 3 出土状況



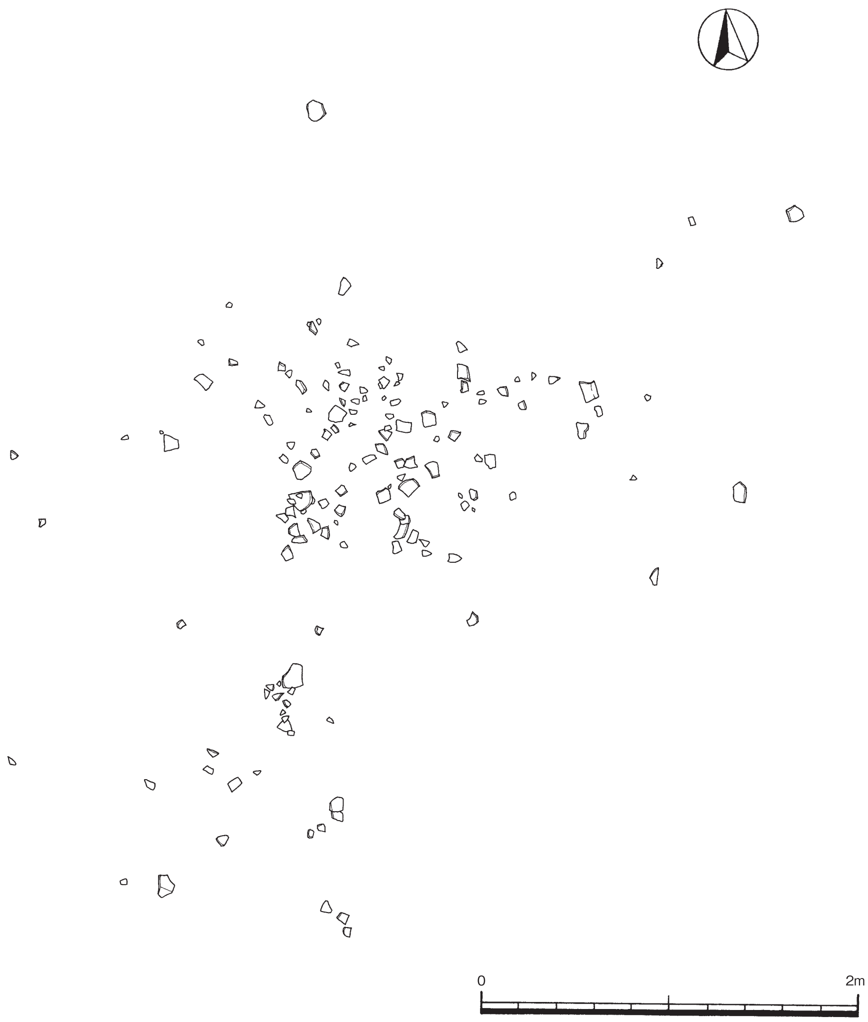
第 18 図　土器集中遺構 3 内出土遺物

出土した土器を接合・復元した結果，大甕と鉢の２点のみであることがわかった。鉢は残存状況が悪かったため，図化し得なかった。大甕は，口径31.6㎝で口縁部下に上向きのやや短い鍔がつく。底部はやや平底で胴部下半に煤の付着が見られ，煮炊きに使用されたものと思われる。内外面はハケメ調整であるが，底部付近は指ナデによる調整である。

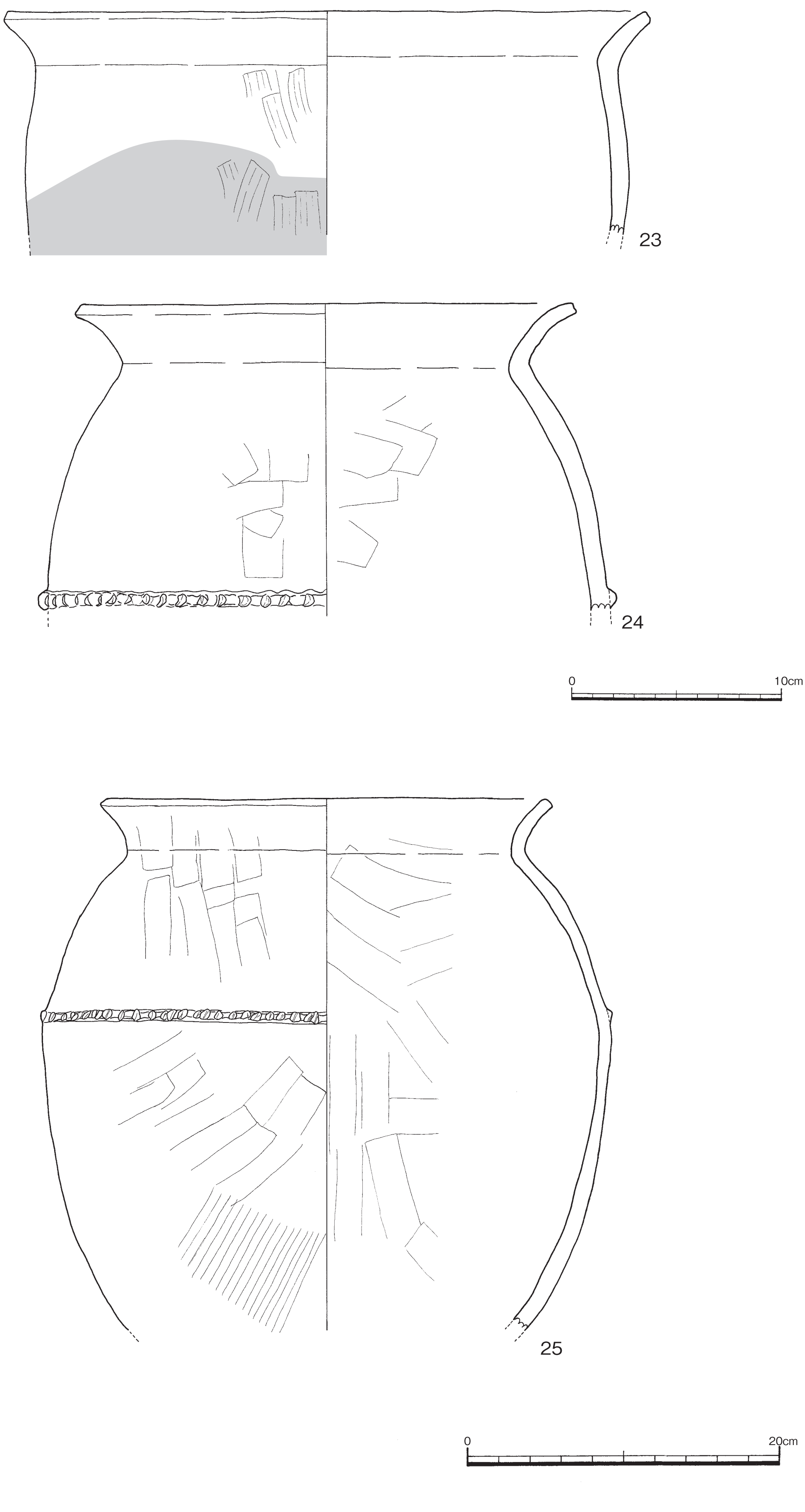
土器集中遺構４(第19～21図)

Ｃ－６・７区で検出した。約4.5×５ｍの範囲に広がっている。

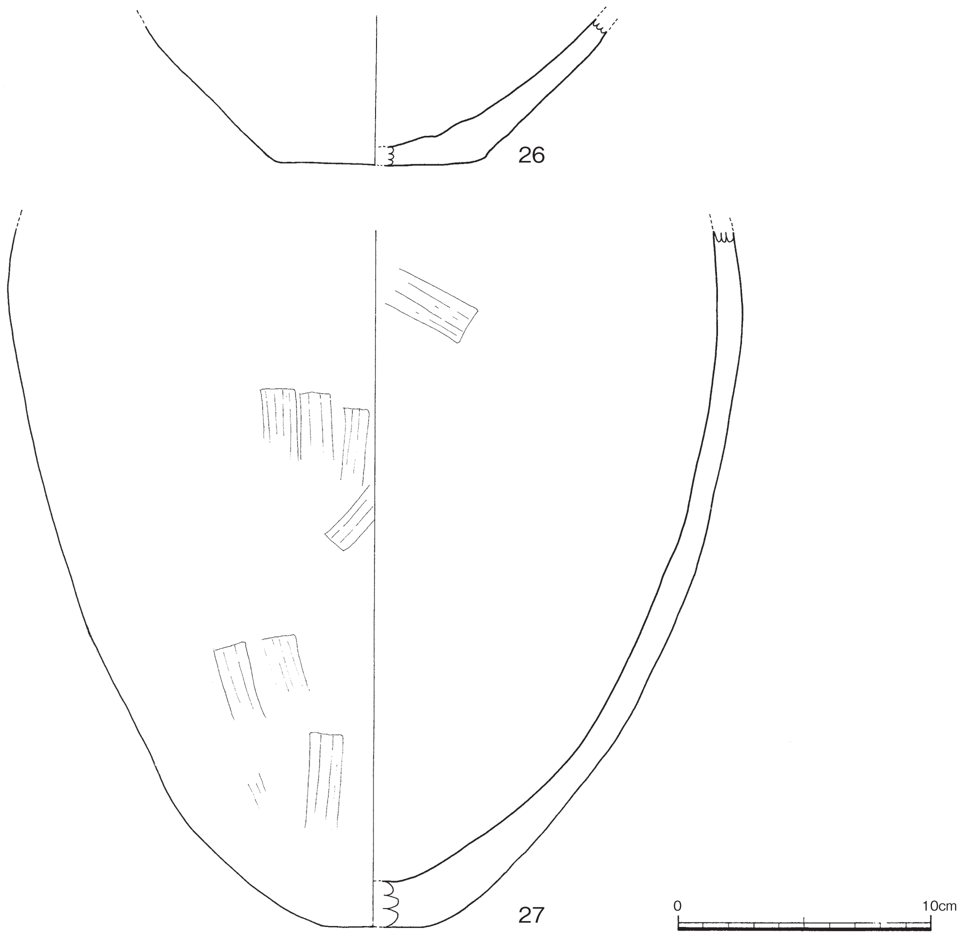
23は甕である。口縁部は「く」の字に外反し，内面の屈曲はやや強い。口唇部は平坦である。胴部はあまり張らず，外面に煤が付着している。24～27は壺である。24の口縁部は強く外反するため,内面にはっきりとした稜がみられる。胴部があまり張らない器形である。25の短い口縁部は,屈曲が24に比べてやや緩やかである。最大径がある胴部上半には一条刻目突帯がめぐる。土師甕に似た器形である。26は平底の壺である。27は壺の胴部～底部である。内外面はハケメ調整の後ナデている。底部は小さく，やや平底である。



第19図　土器集中遺構４出土状況



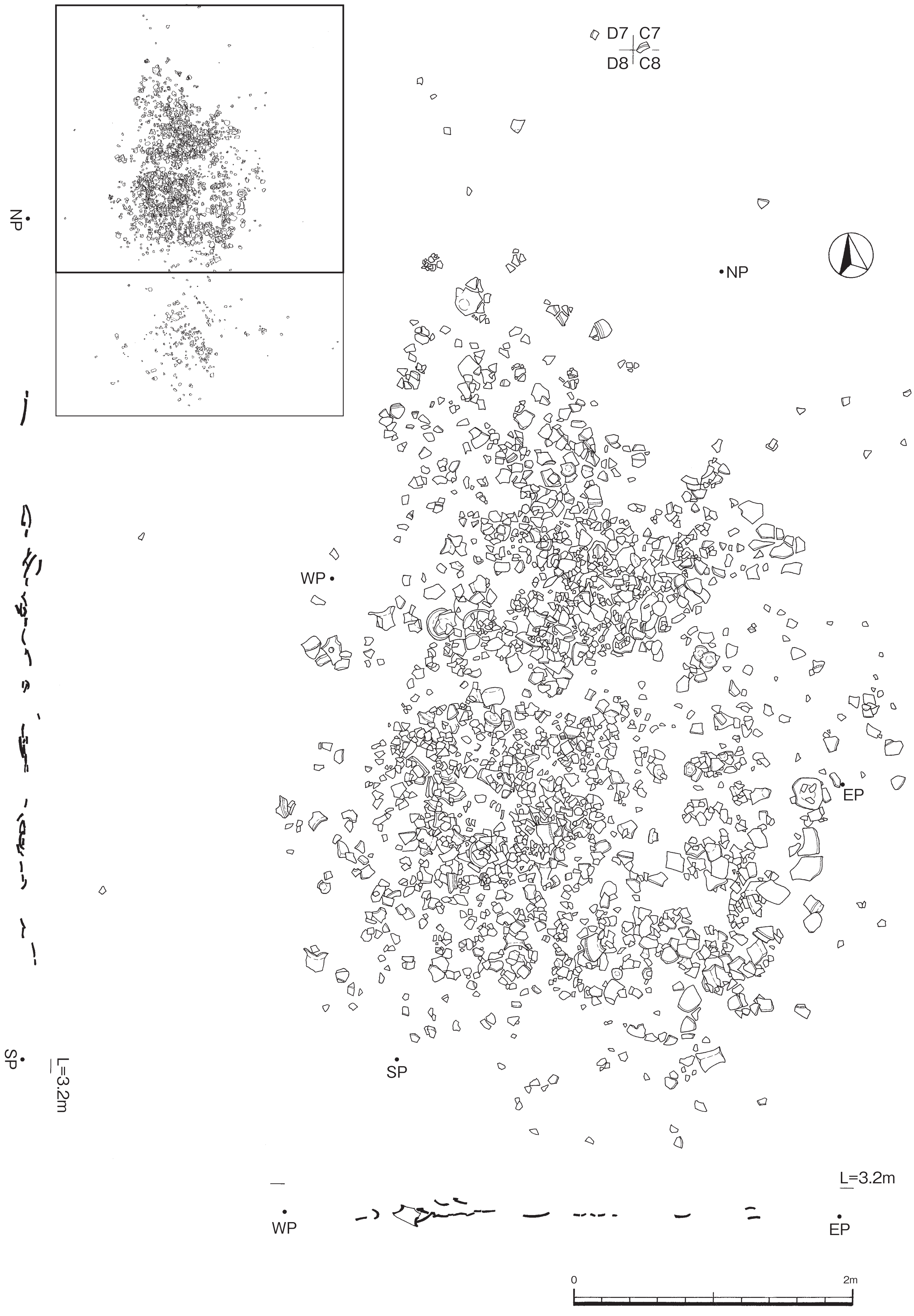
第 20 図　土器集中遺構 4 内出土遺物 1



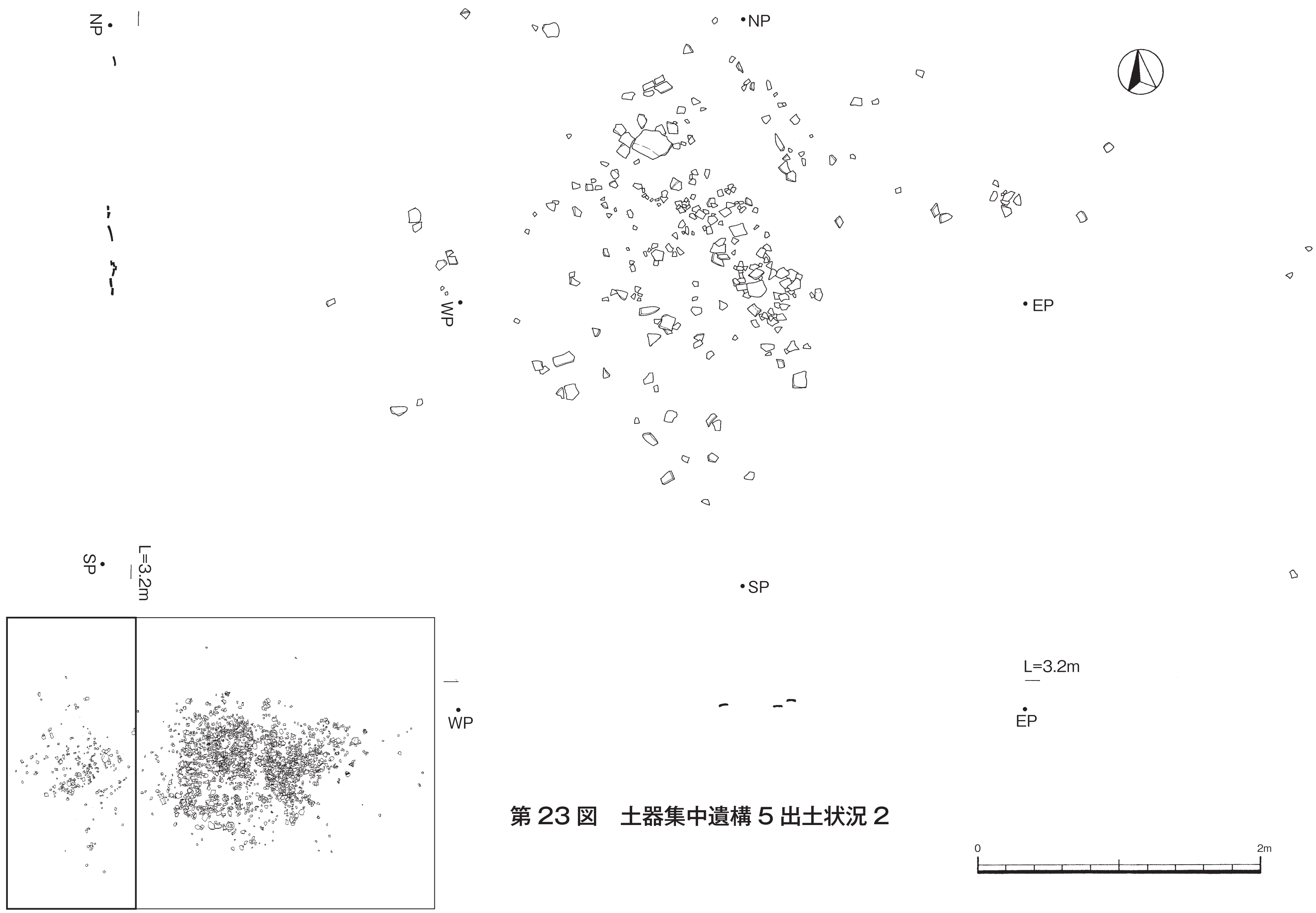
第 21 図　土器集中遺構 4 内出土遺物 2

土器集中遺構 5(第 22 ～ 41 図)

この土器集中遺構は，平成 19 年度の事前調査の 18 トレンチ内で確認されている。本調査では，C・D－7～9区，Ⅳc層～Ⅴ層で検出した。約 12 × 6 mの広範囲にわたって多くの土器が散在していた。多量に重なって出土する北側の部分と，少量が散布する南側の部分があるが，北側から出土した土器片と南側から出土した土器片が接合したため，同じ遺構として捉えた。Ⅳc層から小破片が出土しはじめ，Ⅴ層上面において大きな破片が重なって出土した。器種は，甕，壺，鉢のほか大甕や器台である。他の土器集中遺構よりも大型のものが多く，甕に比べて壺の個体数が多いことが特徴である。土器の出土状況をみてみると，大甕に煮炊きをしたと思われる煤の付着があるが周囲には炭化物の出土がないこと，壺の底部の多くが正位置で他の土器片の上に乗って出土していること，それぞれの破片が大きいこと，接合して完形に近い形に復元できるものが多いこと，接合できる破片が比較的近くで出土していることなどから，出土した土器はこの土器集中遺構内で実際に使用したのではなく，別の場所で使用した土器を集めて置いた，または集めて割ったものであると考えられる。

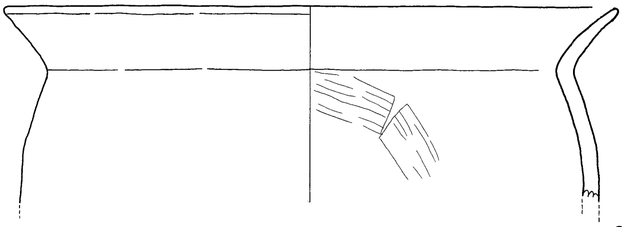


第 22 図　土器集中遺構 5 出土状況 1

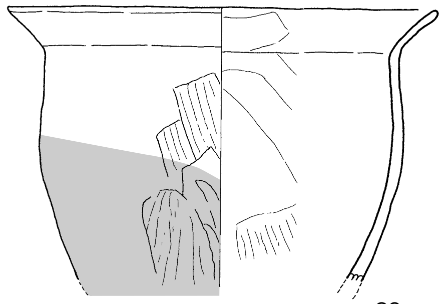


第23図　土器集中遺構５出土状況２

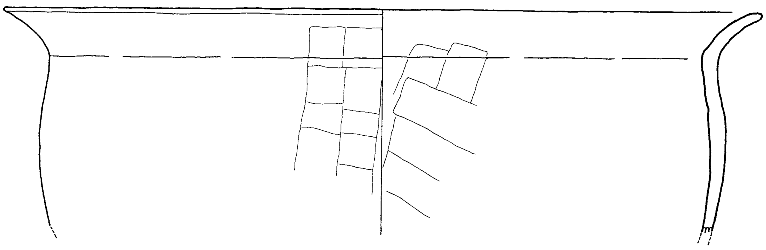
第 24 図　土器集中遺構 5 ドット図



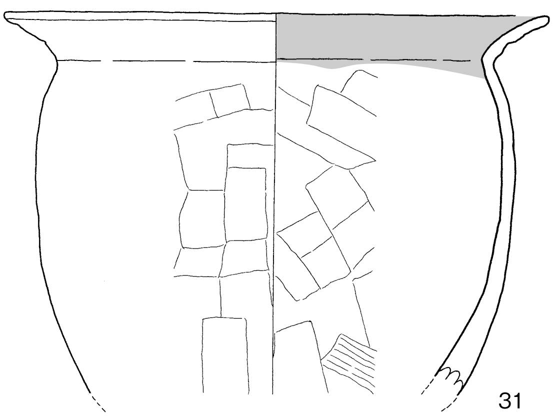
28



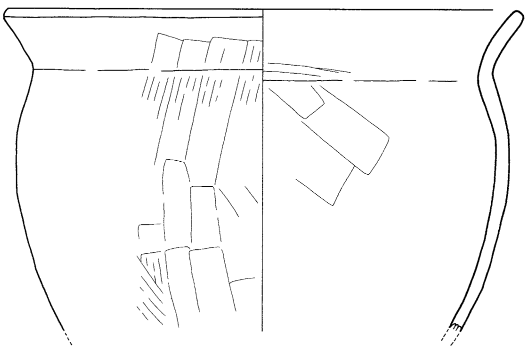
29



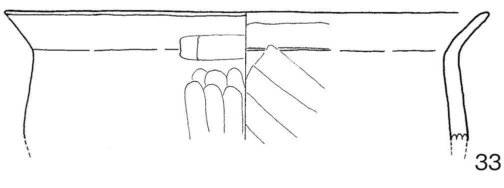
30



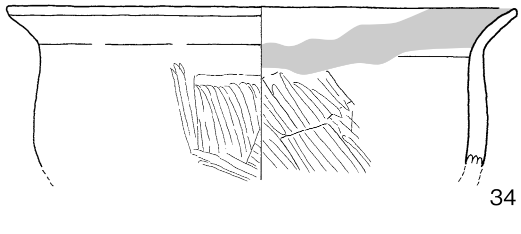
31



32



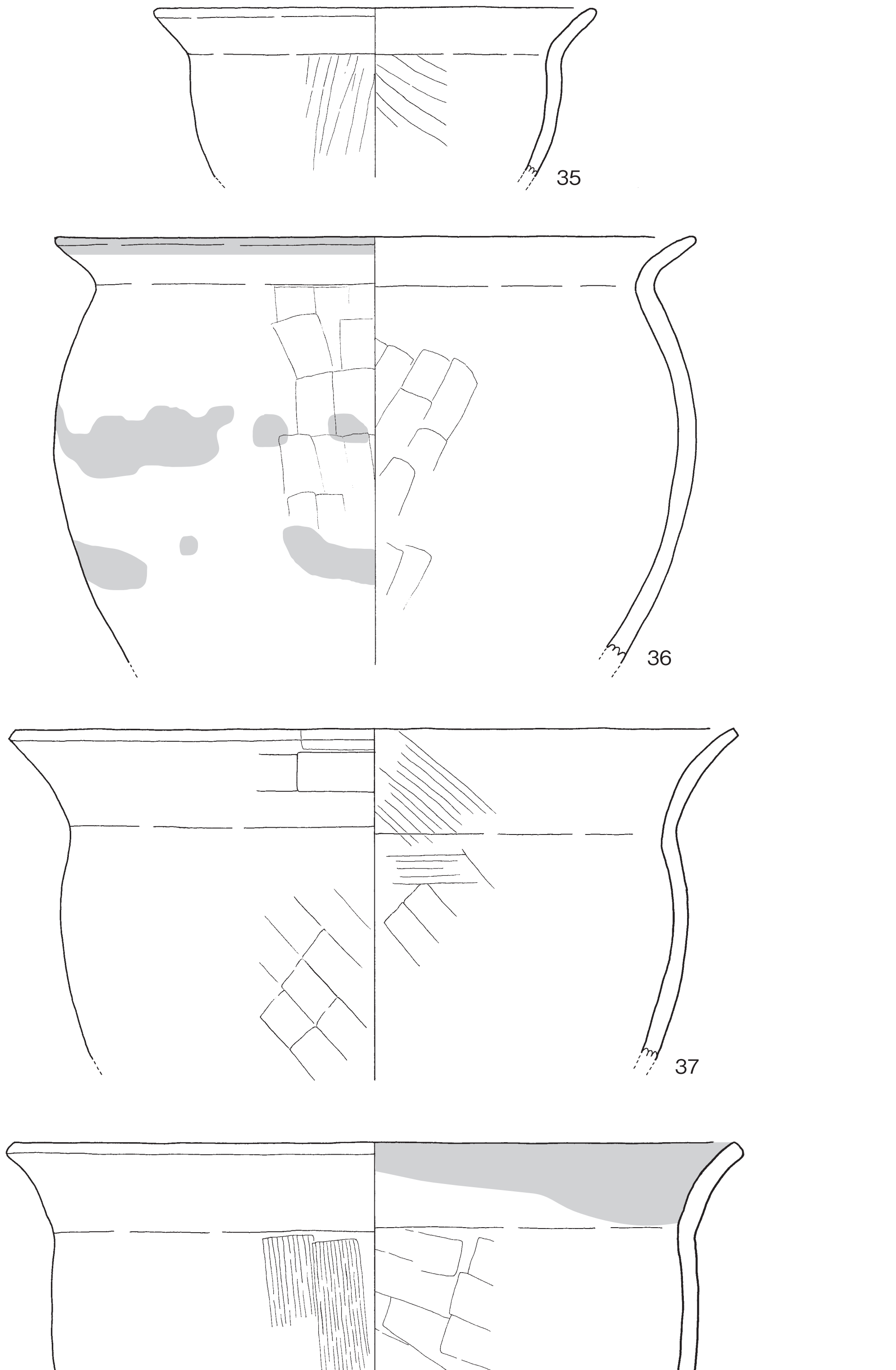
33



34

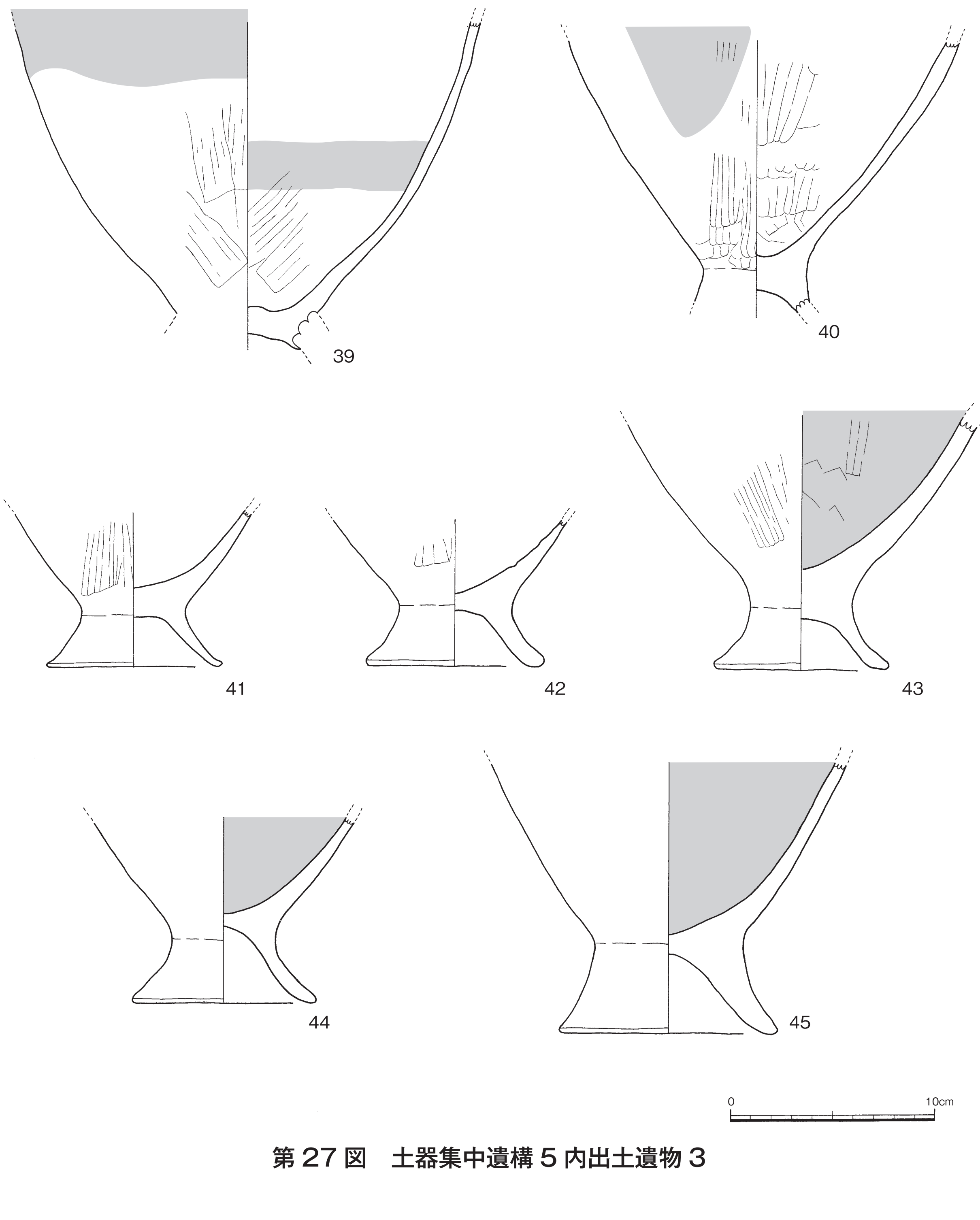
0　10cm

第 25 図　土器集中遺構 5 内出土遺物 1

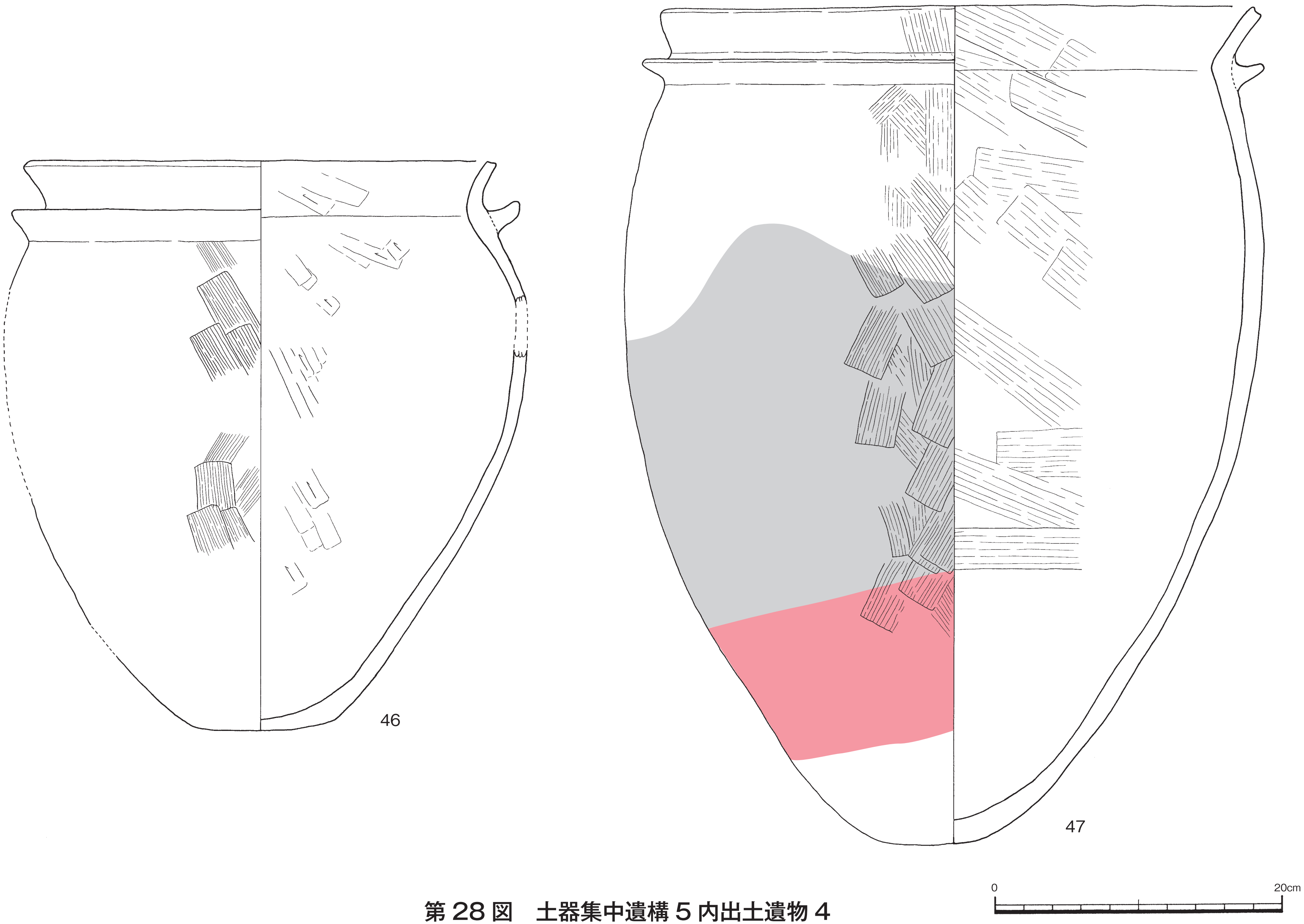


第 26 図　土器集中遺構 5 内出土遺物 2

28 ～ 45 は甕である。28 ～ 31 は，長い口縁部が「く」の字に外反するため，内面にはっきりとした稜をもつ。32 ～ 35 は，口縁部は外反するが，やや立ち上がり屈曲はゆるやかである。胴部の最大径が胴部上半にある。36 は丸みを帯びた胴部をもつ。口縁部は短く外反し，内面には稜をもつ。外面の口唇部と胴部に煤が付着している。37・38 は，長くゆるやかに外反する口縁部で，口唇部は平坦である。内外面ともハケメがはっきりと残る。作りは丁寧だが他の甕に比べて胎土が粗い。39 ～ 45 は，甕の胴部から脚部である。39 は 36 と同一個体の可能性がある。40 の口縁部形態は不明だが，脚台内面天井部は丸く，脚部はやや立ち上がる「ハ」の字状になると思われる。41 の天



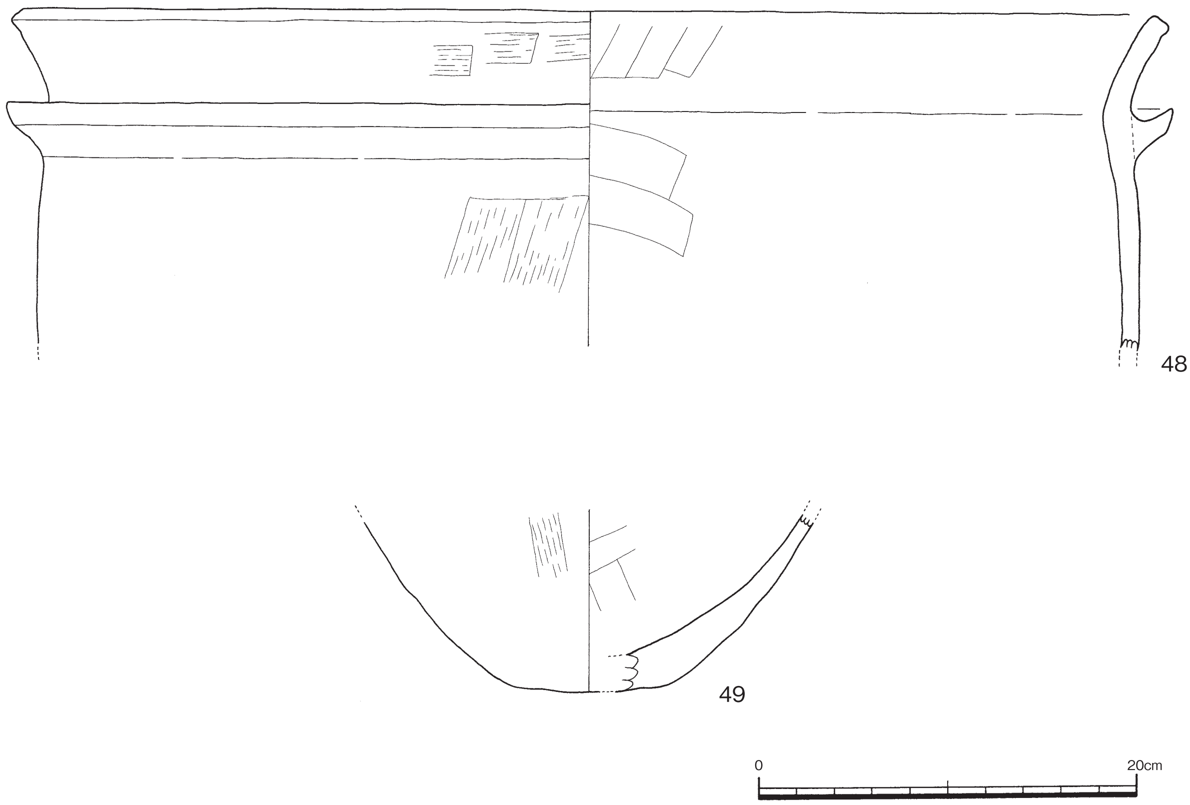
第 27 図　土器集中遺構 5 内出土遺物 3



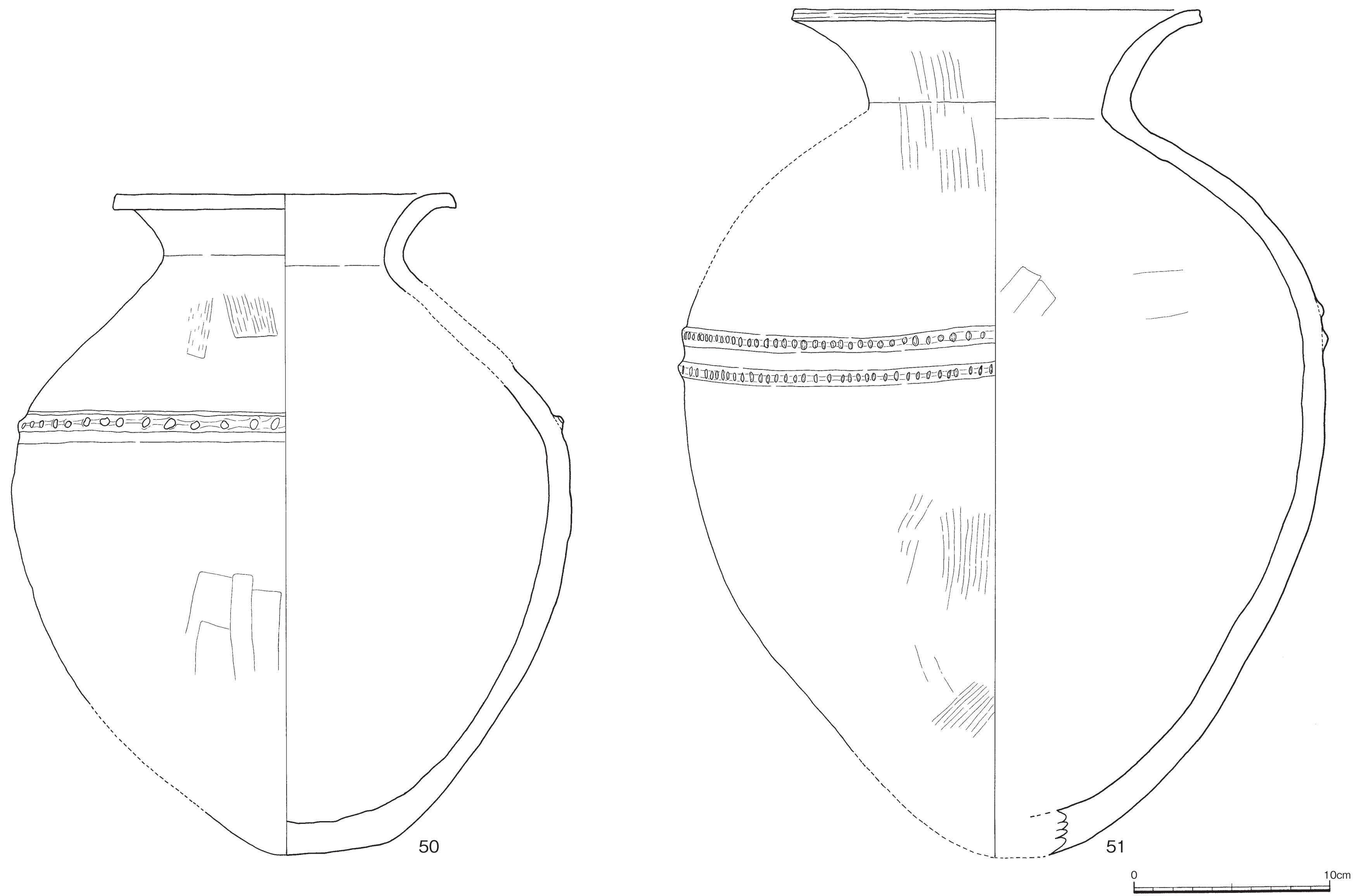
第 28 図　土器集中遺構 5 内出土遺物 4

井部は平坦であるが，42・43 はやや丸みを帯び，44・45 は丸く山形になる。天井部が丸くなるにしたがって，脚部は高くなり，脚の開きが狭く立ち上がる。

46 ～ 49 は大甕である。土器集中遺構 5 からは 3 個体出土した。46 はやや小ぶりで，胴部上半に胴部の最大径がある。底部は平底である。内面の稜は緩やかで，口唇部はややくぼむ。口縁部と鍔の長さは同じぐらいである。内外面とも煤の付着は見られない。内面はハケメの後を丁寧にナデて調整している。47 は土器集中遺構 3 から出土した大甕 (22) に類似する器形であるが，22 よりも大きく，器高 58cmの長胴である。底部はやや丸みを帯びた平底である。口縁部は「く」の字に外反しており，内面の稜ははっきりしている。口唇部はややくぼむ。鍔は口縁部よりも短く，やや横方向に付いている。内外面とも，幅の広いハケメによる調整である。胴部半ばには煤がめぐり，その下の部分は赤く焼けている。また，底部から 6cm程度は被熱していないので，おそらく地面に埋めて固定した状態で煮炊きに使用したものと考えられる。この土器に付着した煤で放射性炭素年代測定を行った結果 ,2060 ± 30yrBP という数値が得られた。暦年較正年代（1 σ）は 154 ～ 41cal BC の間に 2 つの範囲で示された。これは弥生時代中期頃に相当する結果である。詳細な自然科学分析の結果は第 5 節を参照されたい。48・49 は同一個体である。48 の口縁部は，口径 60cmを超える。同一個体と思われる胴部破片は多数出土しているが，完形復元までには至らなかった。口縁部は長く，ゆるやかに立ち上がって外反し，内面の稜はあまりはっきりしない。口唇部は平坦である。鍔は短く上を向いて付いている。内外面とも煤の付着は見られない。49 の底部はやや丸みを帯びた平底である。

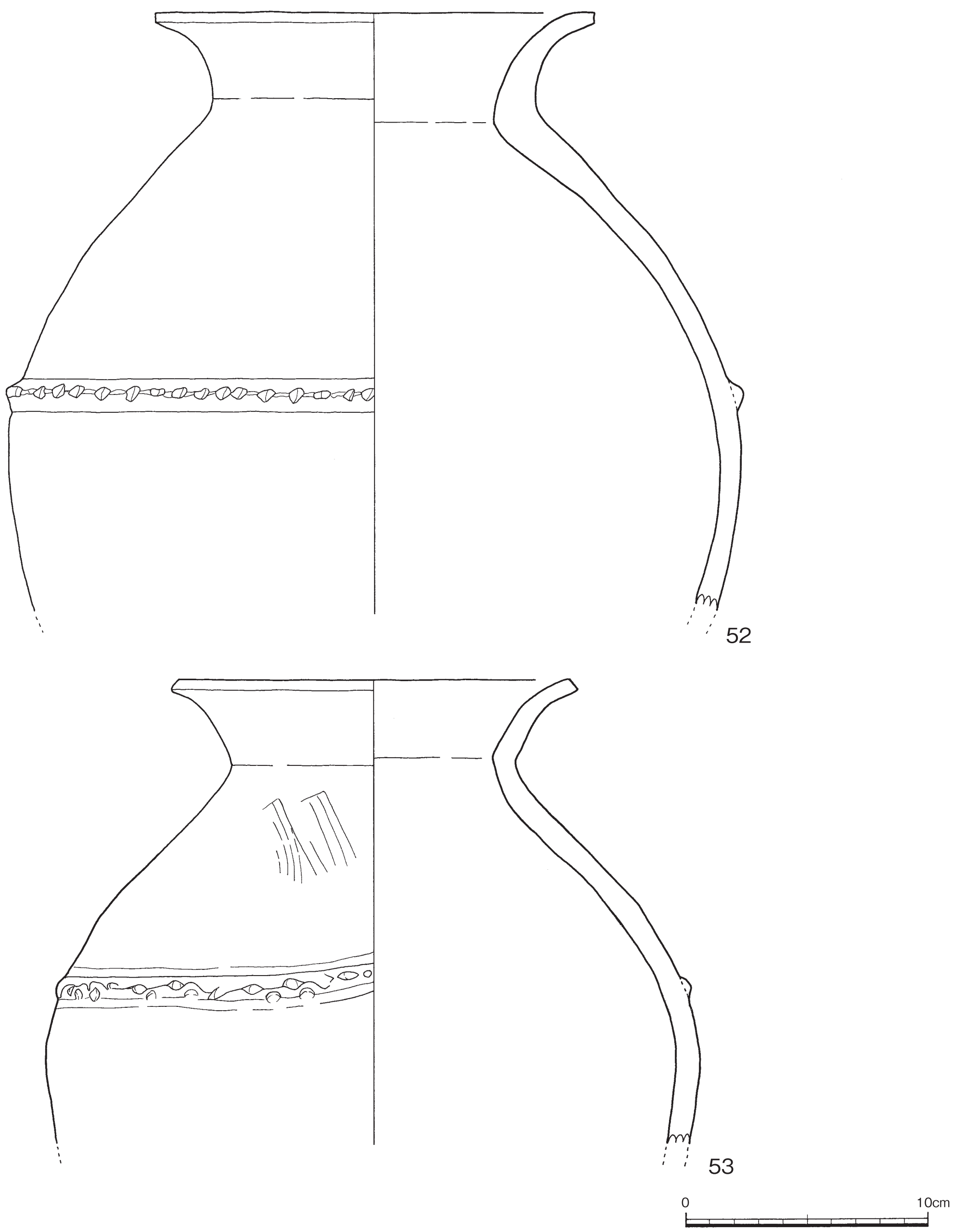


第 29 図　土器集中遺構 5 内出土遺物 5

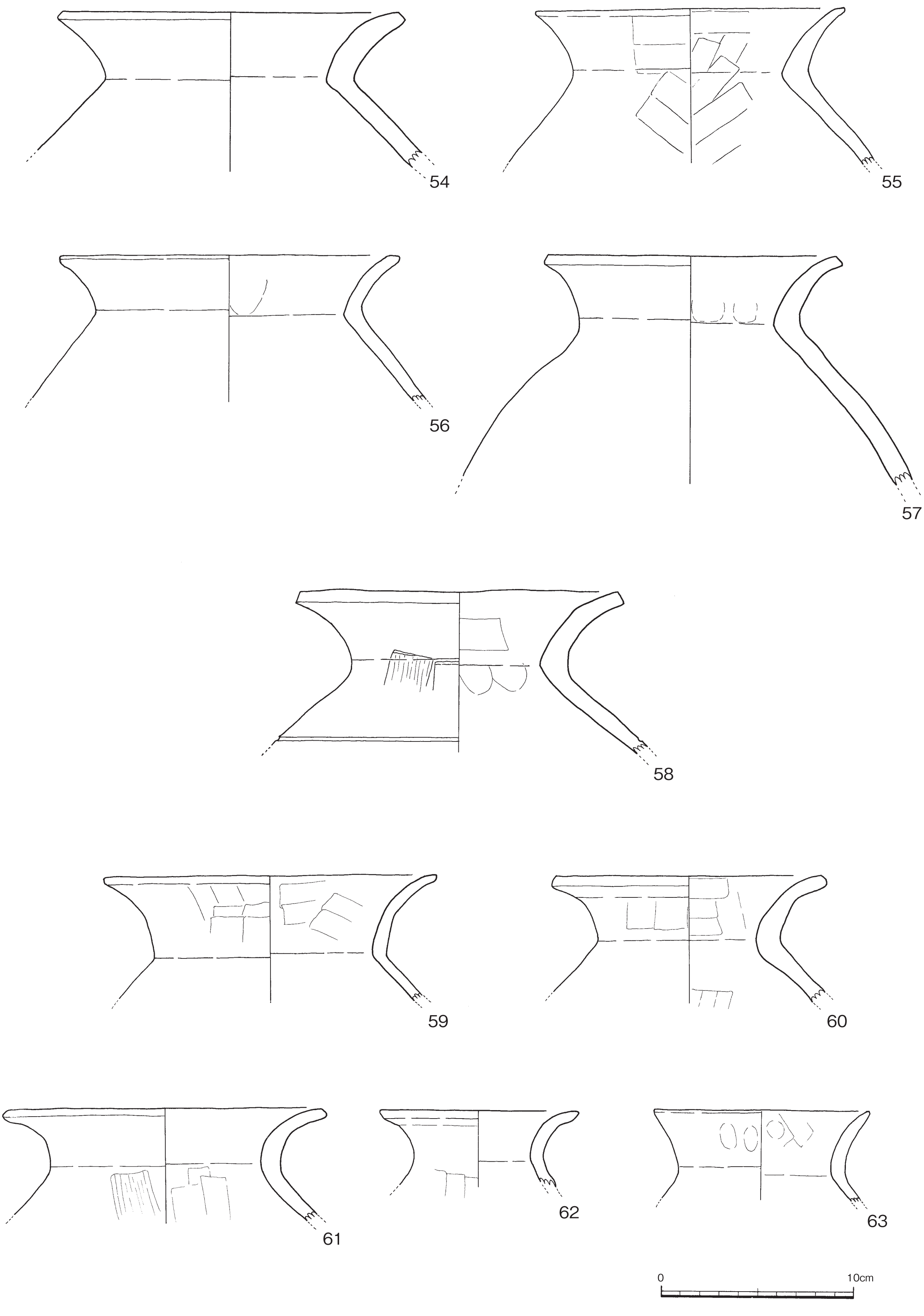


第 30 図　土器集中遺構 5 内出土遺物 6

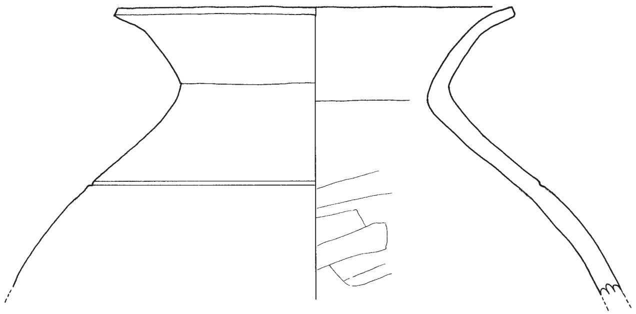
50 ～ 90 は壺である。壺のなかには，一条刻目突帯をもつものが多く，他にも断面三角形や断面台形の突帯をもつもの，胴部に沈線や線刻をもつものなど，他の土器集中遺構と比べてヴァリエーションが豊富である。50 は胴部が丸く張る形である。口縁部はゆるく外反し，内面の稜は強くはない。胴部上半に最大径を持ち，三角形の刻目突帯がめぐる。底部は平底である。51 は，頸部の屈曲が強く，内面の稜もはっきりとしている。口縁端部の折れ曲がりは 50 よりも緩やかである。口唇部には凹みがある。胴部半ばに最大径を持ち，二条の断面三角形の刻目突帯が巡る。底部は丸底である。52・53 は，胴部に一条三角刻目突帯が巡る壺である。頸が細く，口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦である。内面にははっきりとした稜をもつ。54 ～ 63 は壺の口縁部である。54 ～ 57 は，口縁部が「く」の字に外反する。58 ～ 63 は，口縁部が頸部から一度立ち上がった後，外反する形のものである。頸部からの立ち上がりが緩やかなもの，急で内面にはっきりとした稜を



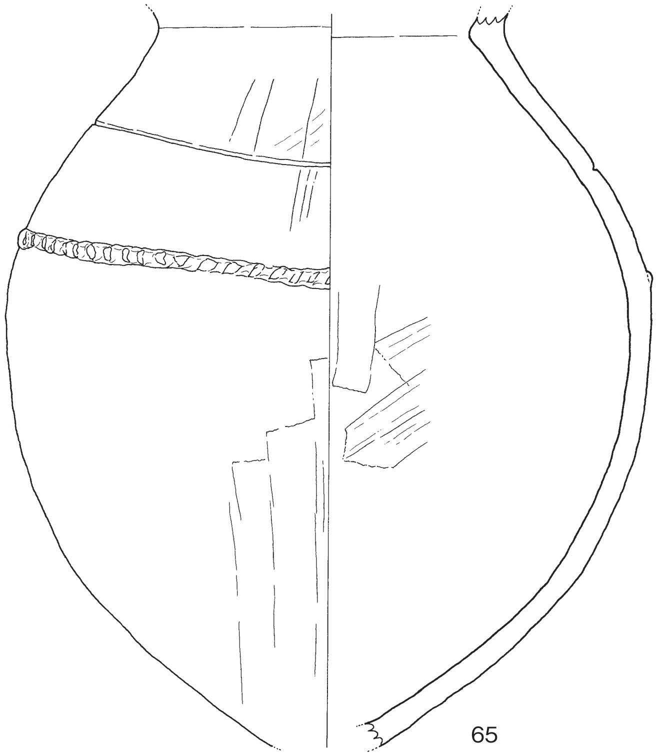
第 31 図　土器集中遺構 5 内出土遺物 7



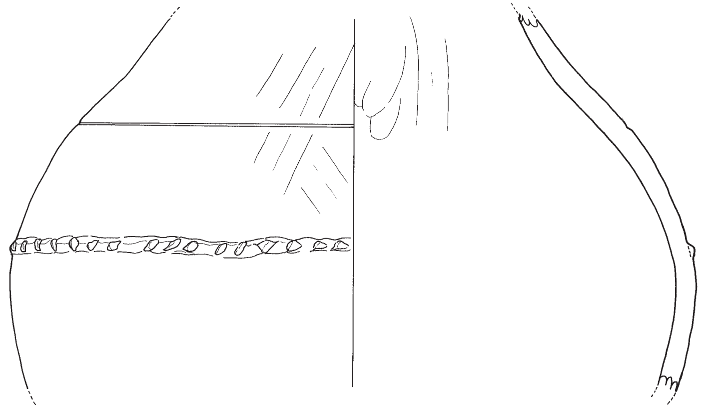
第 32 図　土器集中遺構 5 内出土遺物 8



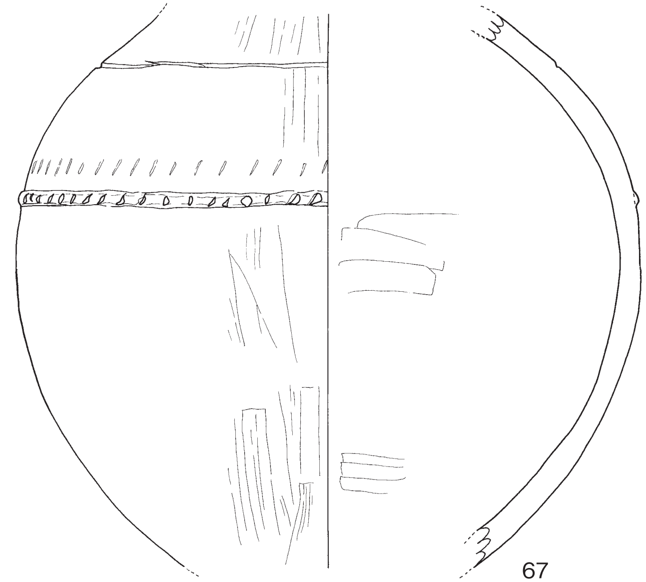
64



65

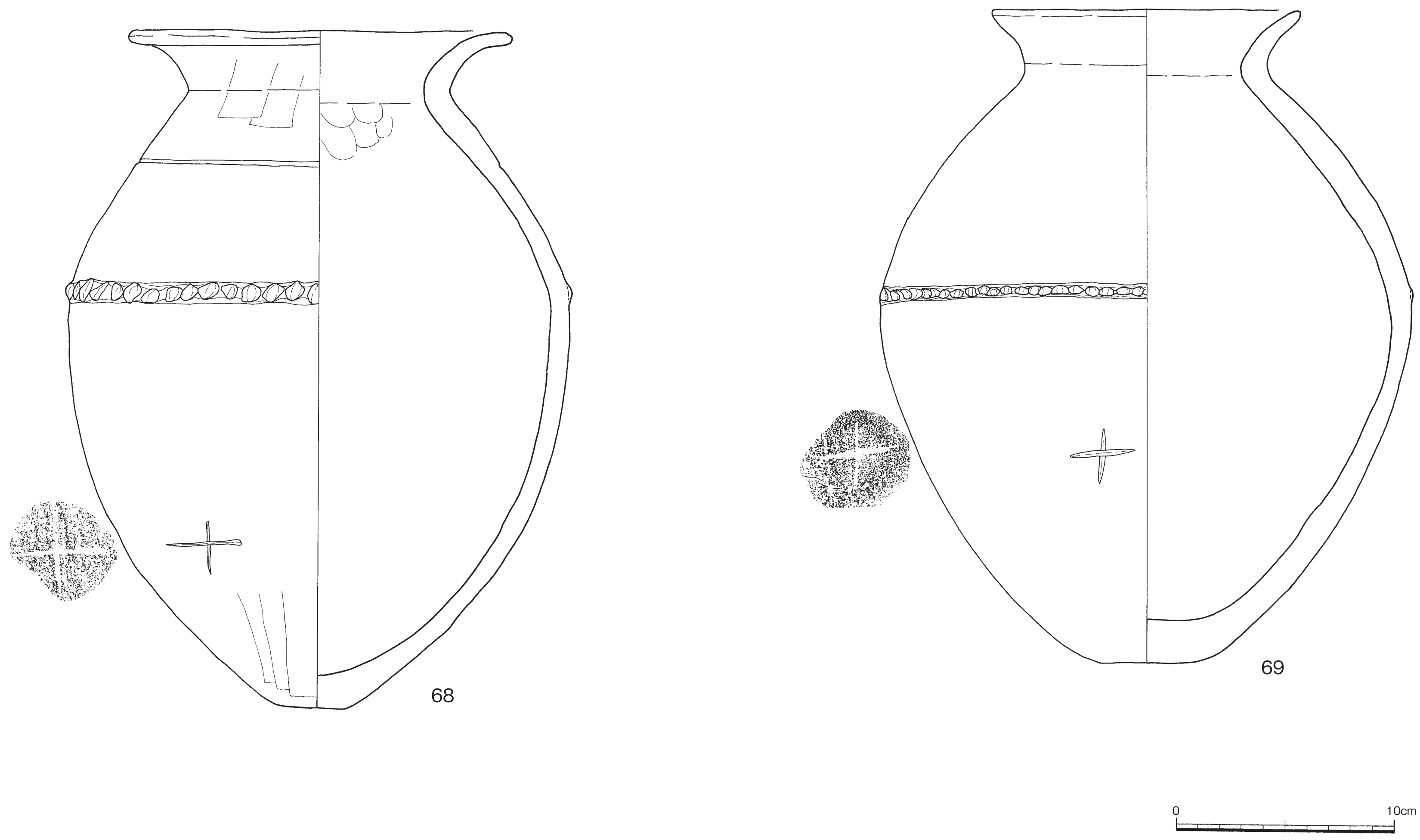


66

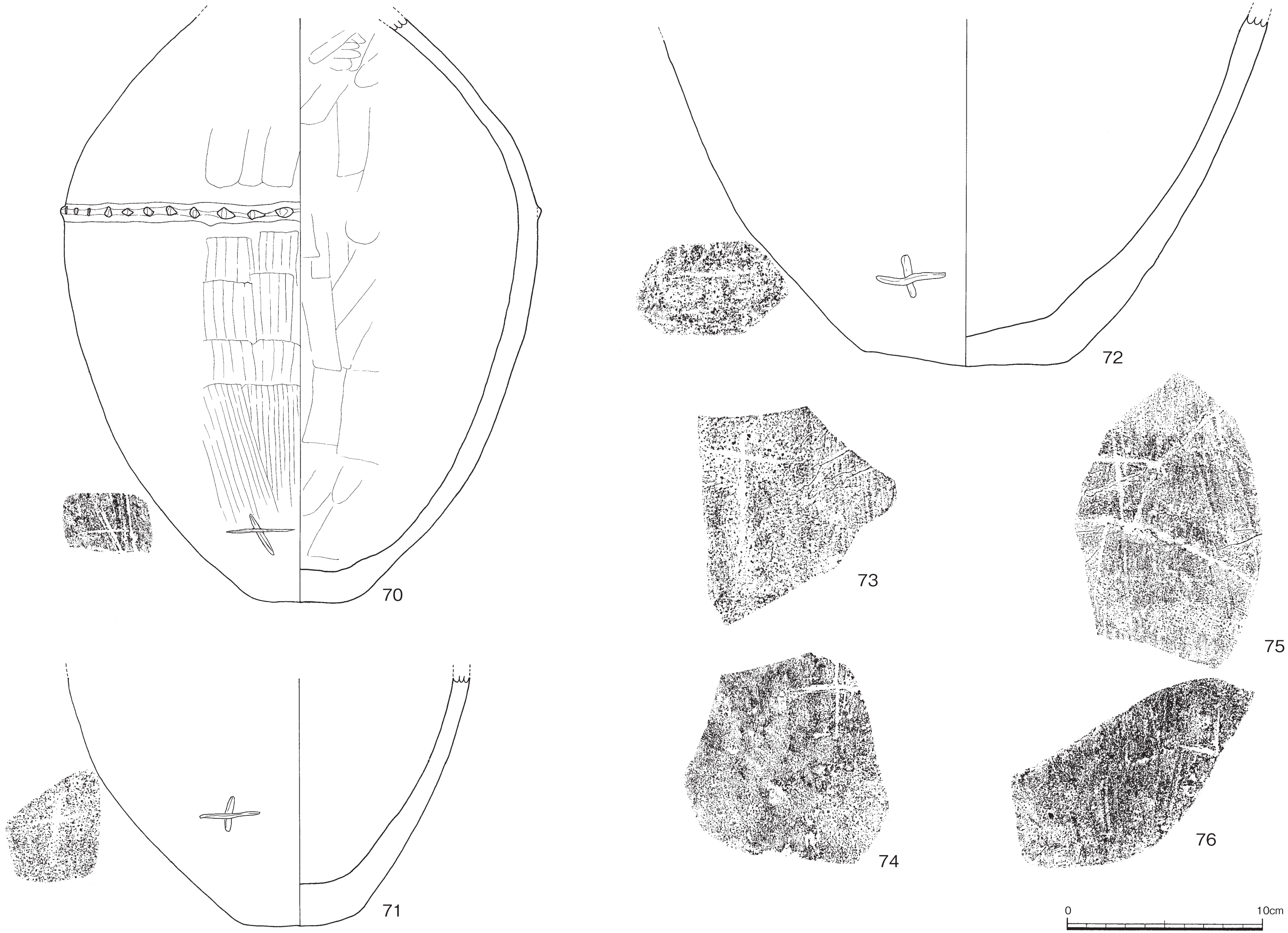


67

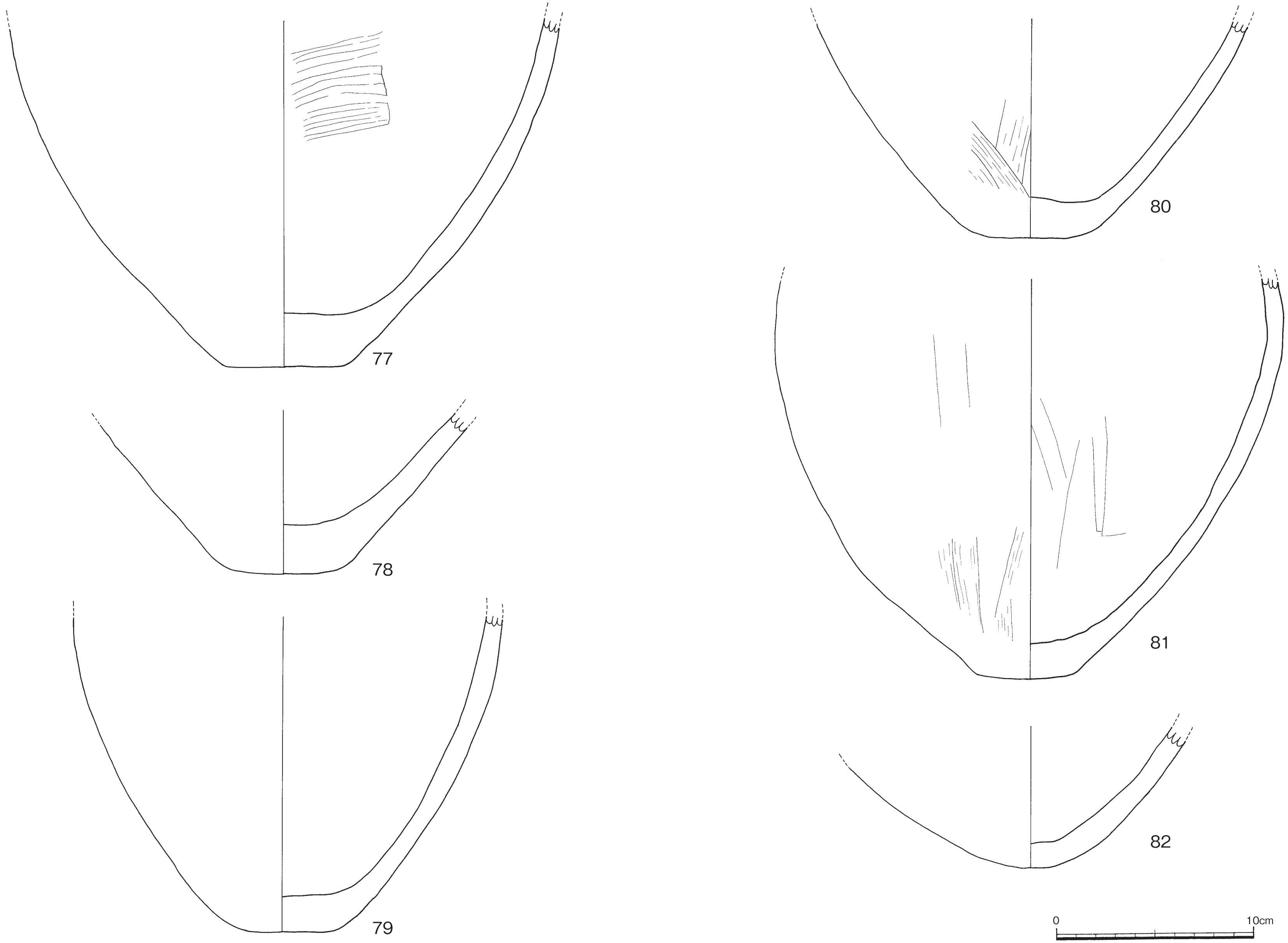
第 33 図　土器集中遺構 5 内出土遺物 9



第 34 図　土器集中遺構 5 内出土遺物 10

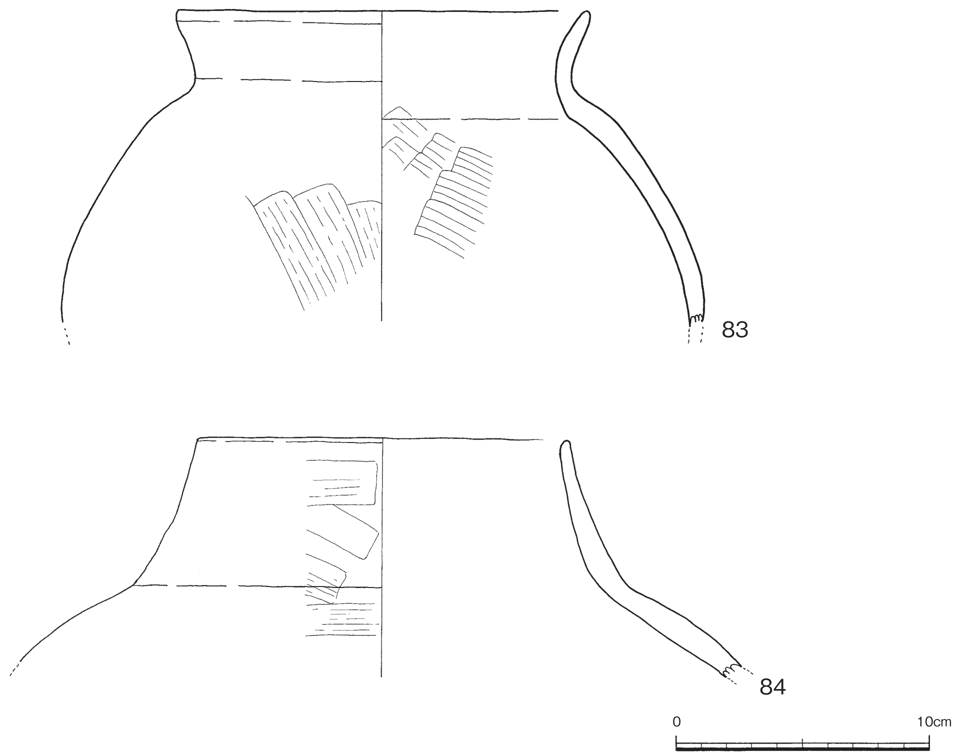


第 35 図　土器集中遺構 5 内出土遺物 11

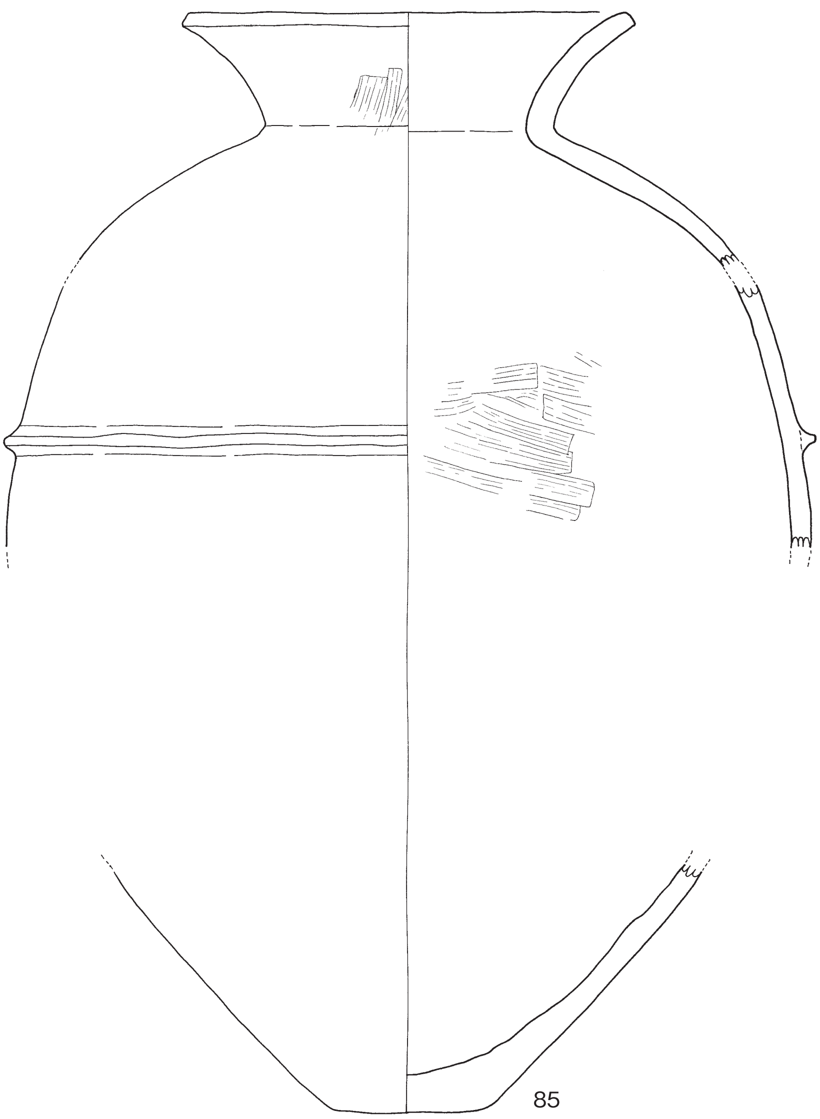


第36図　土器集中遺構5内出土遺物12

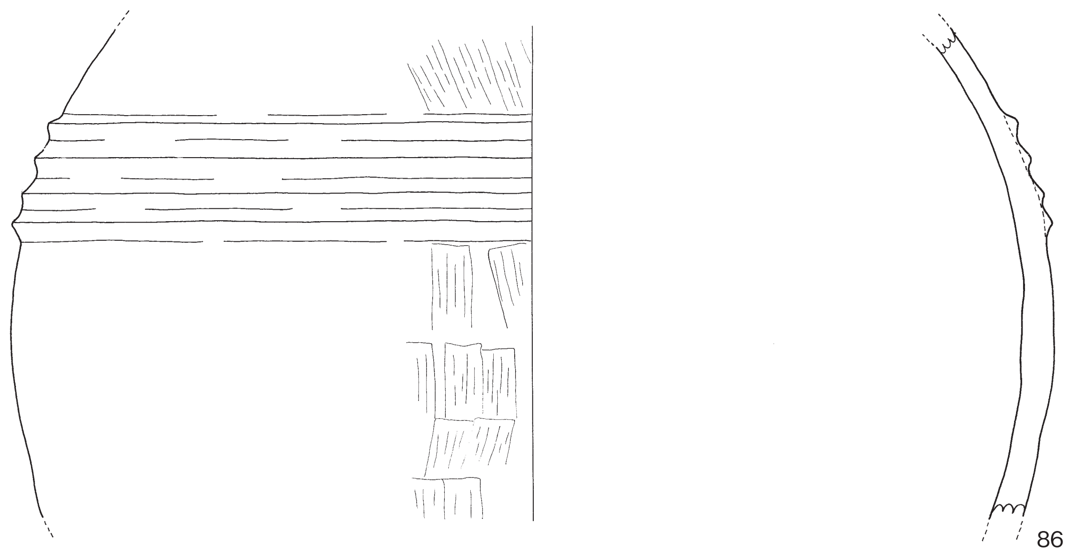
もつものがある。58は，頸部下に一条の沈線がめぐる。64～67は，頸部下に一条の沈線を巡らし，胴部に断面三角形刻目突帯をめぐらす壺である。64の口縁部は大きく外反するが，端部付近でさらに外に折れ曲がる。頸部内面の稜は強い。65の底部は小さい平底または丸底になると思われる。67は，突帯に刻目をつけた際の工具の痕が突帯上部にもついている。68・69は，胴部下半に「十」の線刻をもつ壺である。68は口縁部下に一条の沈線が巡り，胴部には断面三角形刻目突帯が巡る。「十」は焼成後線刻である。口縁部は大きくゆるく外反し，内面の稜は弱い。胴部はあまり張らず，底部は小さい平底である。69は68に比べて口縁部が短く，胴部は丸みを帯びて張る。底部は平底である。70～72は，胴部下半に「十」の線刻をもつ壺である。いずれも底部はやや平底である。70の胴部には，一条の断面三角形刻目突帯が巡る。73～76は，「十」の線刻がついた土器片である。土器片の厚みなどから，壺の底部付近の破片であると思われる。いずれも焼成後に線刻を施してある。77～82は，壺の底部である。平坦なもの（77），底部の立ち上がりがやや丸みを帯びるが平底のもの（78～81），丸底のもの（82）に分けられる。83・84は壺の口縁部～胴部である。83はほぼ直立する口縁部で胴部に丸みがある。土師甕に似た器形である。84は肩部からすぼまる形で口縁部が直立する。外面はミガキ調整である。内面は摩耗・剥離が激しい。85は胴部に一条の台形突帯をもつ壺である。「く」の字の強く外反する口縁部で,肩部が張る。口唇部は平坦である。同一個体と思われる底部は平底である。86は4条の断面三角形突帯をもつ壺の胴部である。87は一条刻目突帯が胴部にめぐる壺である。底部は平底で，外面の底部付近はハケメが残る。88～90は壺の胴部である。88は刻目突帯が一条半めぐると思われる。89・90は，断面三角形の突帯がめぐる。両方とも内外面は丁寧に工具でナデてある。



第37図　土器集中遺構5内出土遺物13



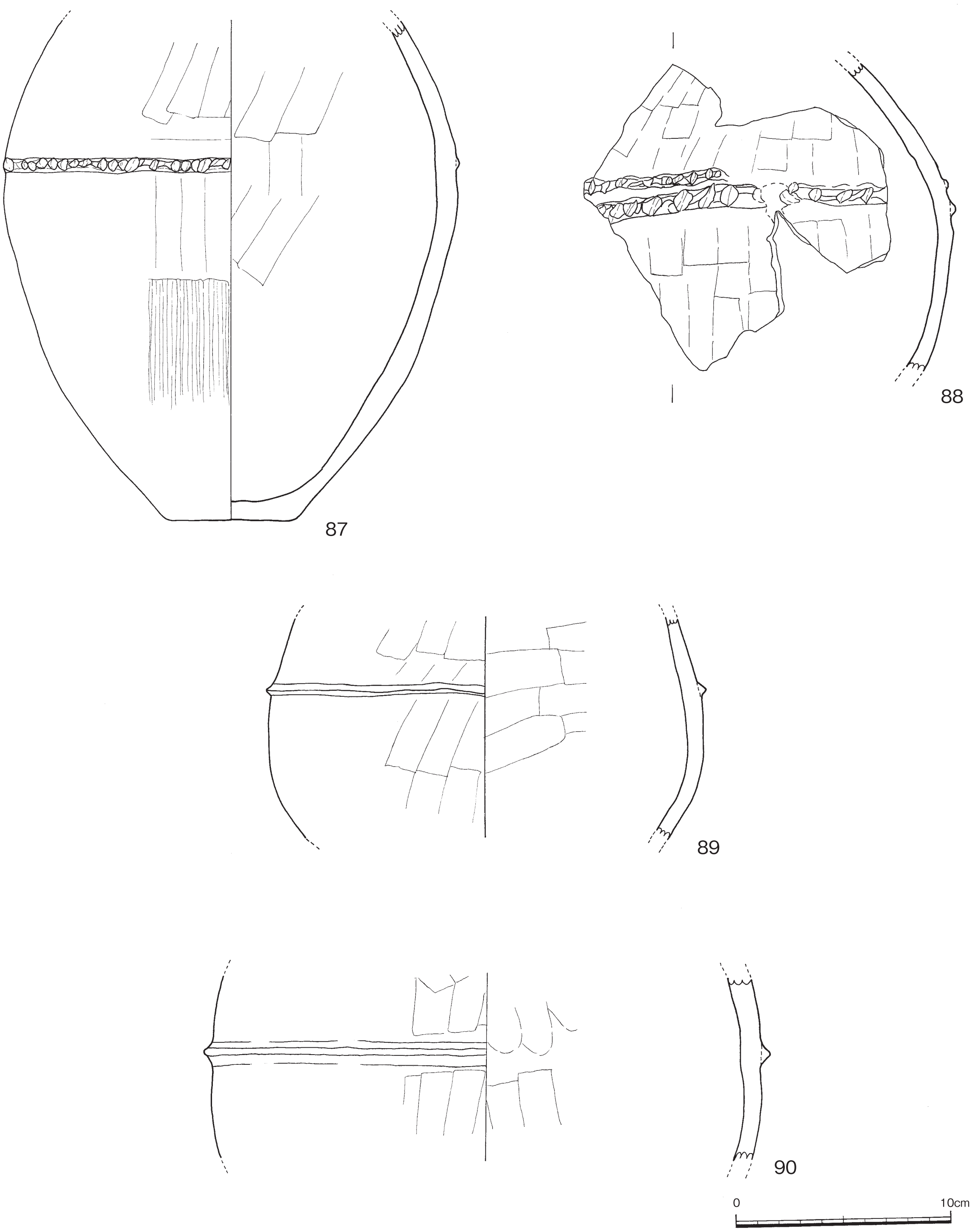
85



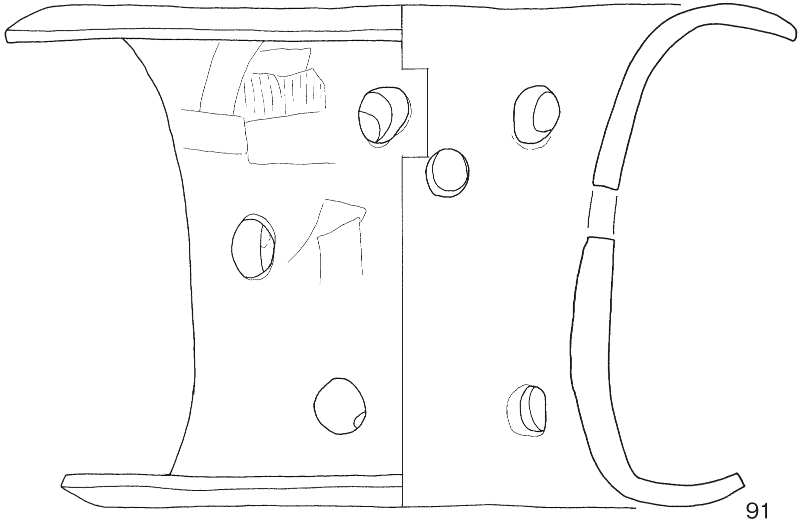
86

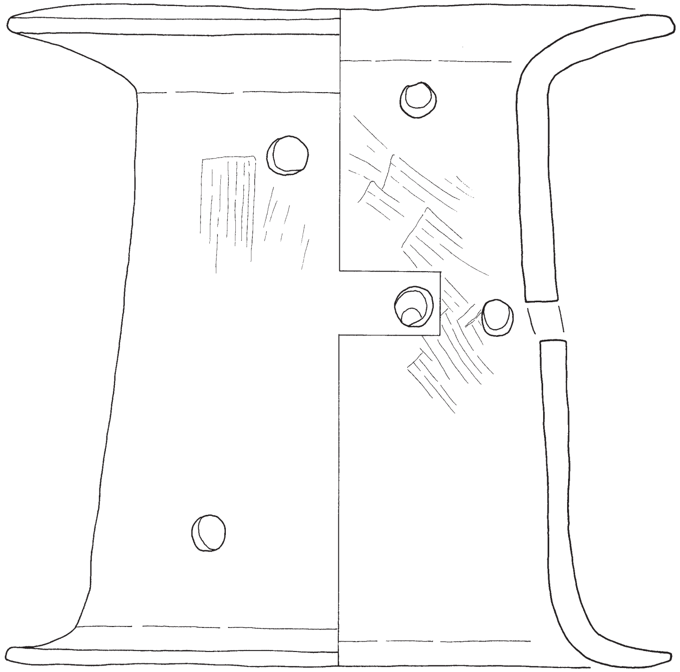
第 38 図　土器集中遺構 5 内出土遺物 14

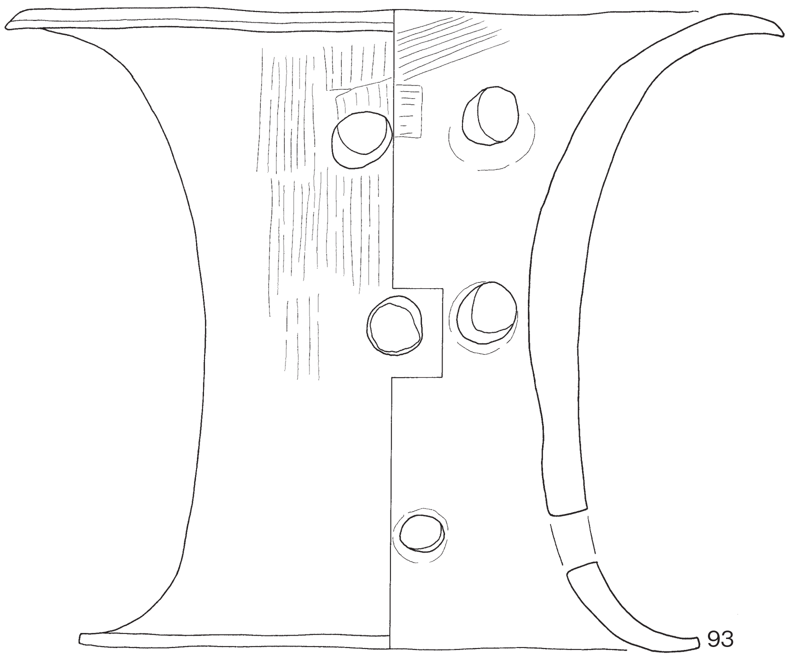
91 ～ 93 は器台である。接合・復元できたものは 3 個体であるが，残りの破片から他にも数個体の器台があったと考えられる。表面の摩耗が激しく，ハケメ調整の方向は内外面とも胴部半ばから上下方向，外側に向けて調整している。91・93 は，上段・中段・下段それぞれに 5 つずつ透かし孔がある。91 は底部，口縁部ともに大きく外反する。92 は，上段・下段が 6 つ，中段には 5 つの透かし孔がある。91・93 は口縁部・底部が波打っているが，成型時あるいは焼成時にひずんだものであると思われる。



第 39 図　土器集中遺構 5 内出土遺物 15

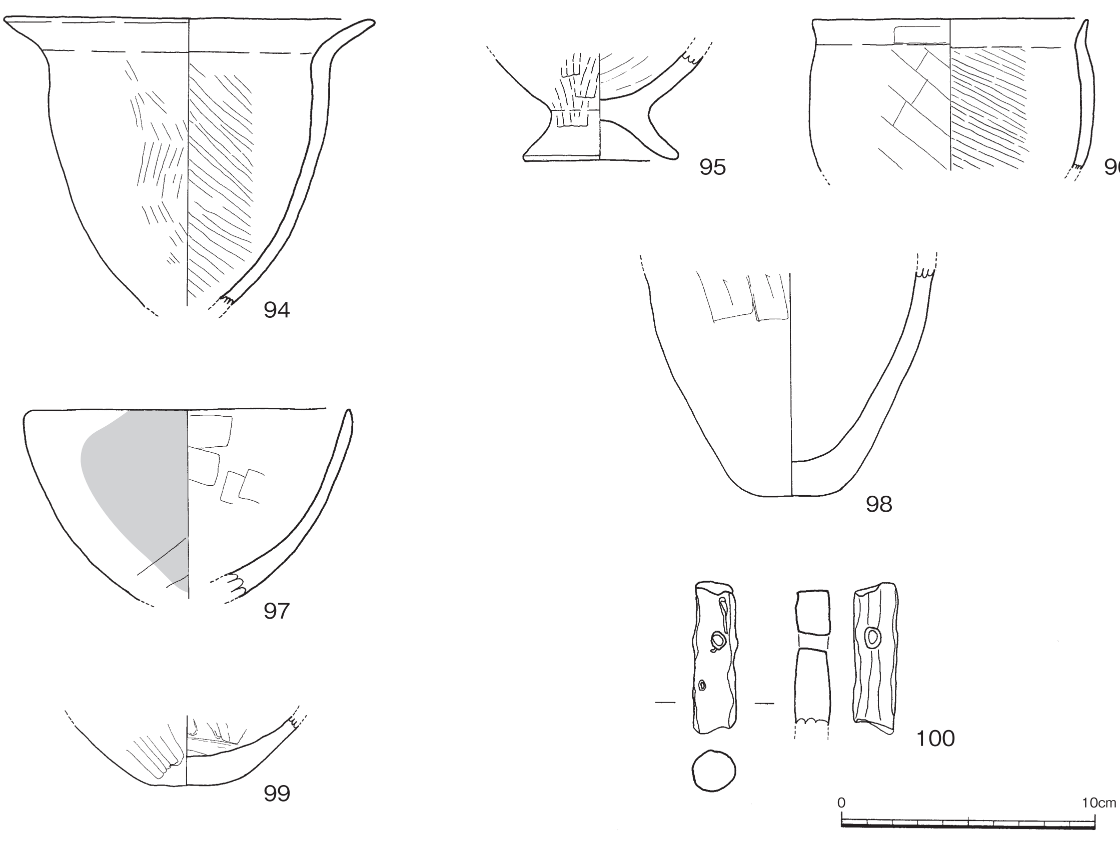

91


92


93

第40図　土器集中遺構5内出土遺物16

94・95は小型の甕である。94は口縁部が大きく外反するが，内面の稜はあまり強くはない。95は短く「ハ」の字に開く脚部である。天井部内面は丸く山形になる。96～99は鉢である。96は口縁部が短く，頸部からほぼ直立する形である。内面はハケメ調整である。97はボウル形になると思われる鉢である。98は平底の底部からまっすぐ立ち上がる形である。99の底部はやや丸みを帯びた平底である。小型の壺である可能性もある。100は双孔棒状土錘であると思われるが片側は欠損している。土器集中遺構内から出土したが土器に比べて胎土が緻密であり，古代に同じような土錘がよく見られることから，時期が異なるものである可能性も考えられる。



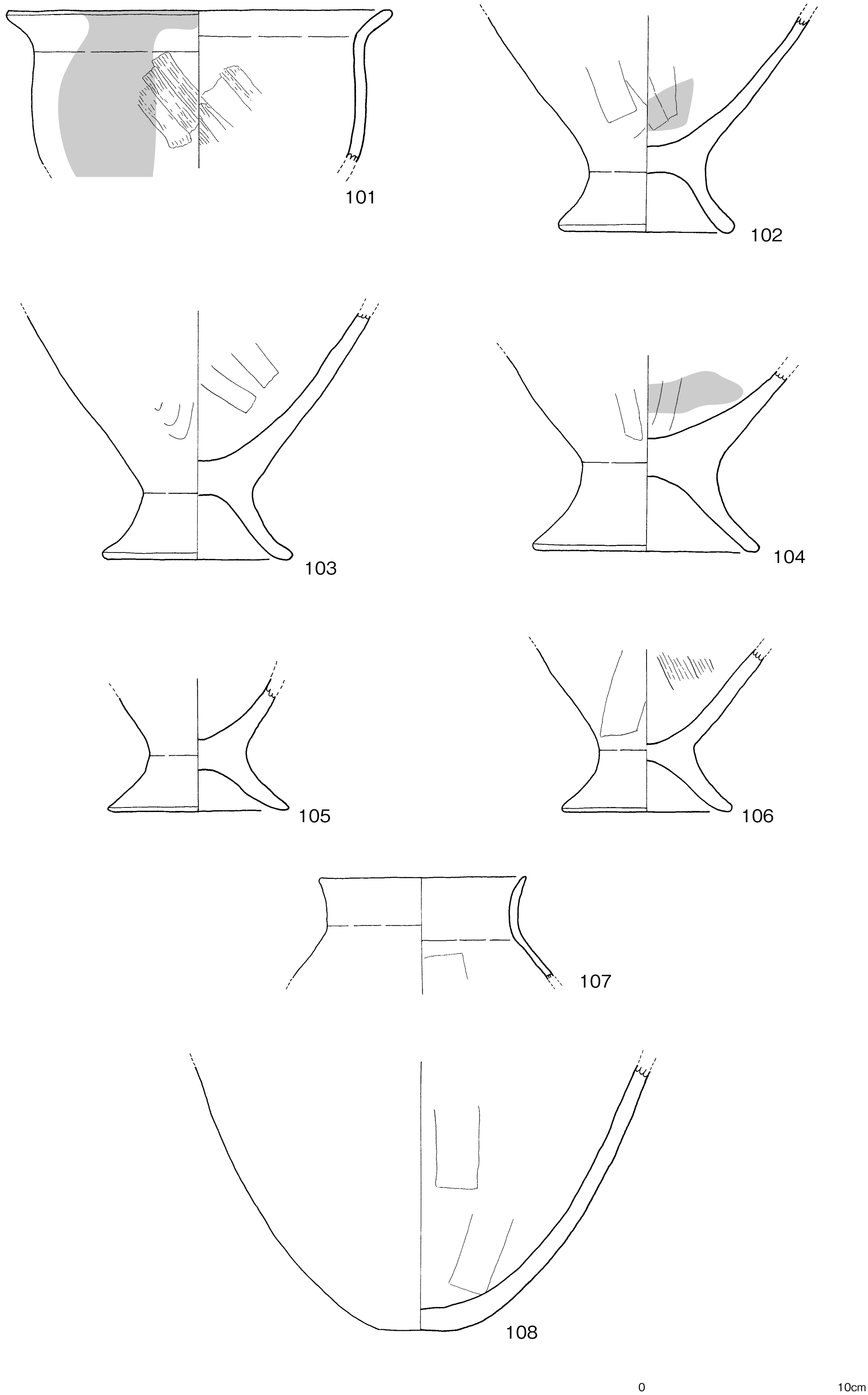
第41図　土器集中遺構5内出土遺物17

土器集中遺構6(第42・43図)

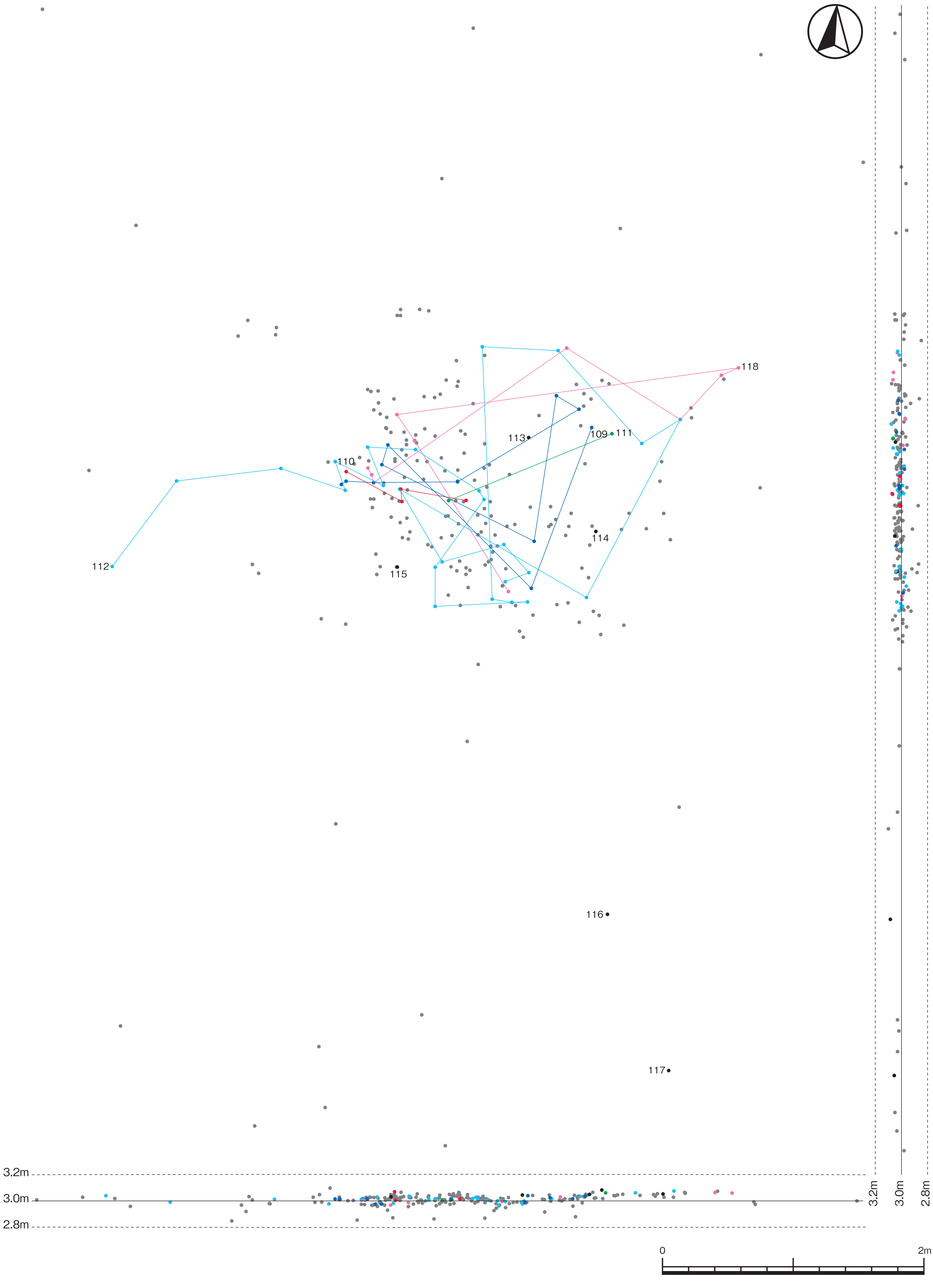
D・E－7区，Ⅴ層上面で検出した。約6×4ｍの範囲に小片が広がっている。

101は甕の口縁部～胴部である。「く」の字に外反する口縁部は内面に稜をもつ。口縁端部はやや丸みを帯びる。102～106は甕の脚部である。103は脚台内面の天井部が平坦で，端部は外反する。104の脚台内面の天井部は丸く，端部は「ハ」の字状に開く。105は鉢の脚部である。先細りの端部は「ハ」の字状に外反し，天井部はやや平坦である。106の脚台内面は104と同様であるが，端部はやや外反する。107は壺の口縁部である。頸部から直線的に立ち上がる口縁部はやや外反する。108は壺の胴部～底部である。底部はやや平坦である。

第42図　土器集中遺構6ドット図



第 43 図　土器集中遺構 6 内出土遺物



第 44 図　土器集中遺構 7 ドット図

土器集中遺構 7(第 44 ～ 46 図)

Ｈ－10 区，Ⅳｃ層～Ⅴ層上面で検出した。小型の土器や高坏，免田式長頸壺の出土など，他の土器集中遺構とは異なる器種がいくつか出土した。

109 は，壺の胴部～底部である。平坦な底部から立ち上がる胴部はあまり張らない。110 は小型の甕の口縁部～胴部である。「く」の字状に外反する口縁部は屈曲が強く内面に稜をもつ。111・112 は小型の甕の胴部～脚部である。脚台内面の天井部は丸く，端部は外反する。113 は，免田式の長頸壺である。外面の重弧文は摩耗が激しいが，胴部上半に 22 条の沈線と半弧を描く。底部は小さい平底である。114・115 は高坏の脚部である。114 は脚部下半に 4 つの孔がある。脚部端部は外反し，接地面が大きい。116 は小型の鉢の脚部である。低く短い脚部は外反し，内面天井部はやや平坦である。117 は小型の甕あるいは鉢の脚部である。充実脚台に近い細長い形で，脚台内面の空間は低く小さい。外面は指ナデによる調整である。118 は器台である。全体的に器壁が分厚く，重量もある。粘土紐を輪積みにして製作している様子が内面の観察からわかる。内面は指押さえによる調整であるが，口縁部付近はミガキによる調整である。胴部のふくらみ部分は，粘土を貼り付けている。底部の一部が剥落しており，布目痕が看取できる。布目の上に置いて胴部を積み上げ，後で脚部を貼り付けたと思われる。外面はミガキによる調整である。

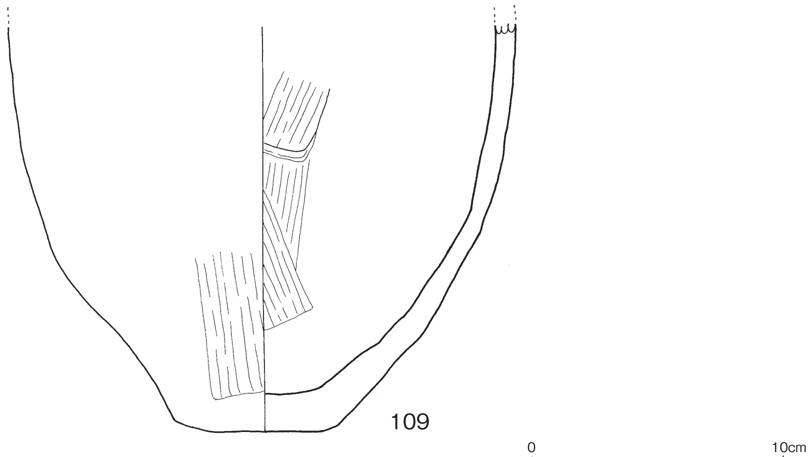
土器集中遺構 8(第 47・48 図)

Ｄ・Ｅ－９区，Ⅴ層上面で検出した。約 5 × 8 ｍの範囲に小片が広がっている。

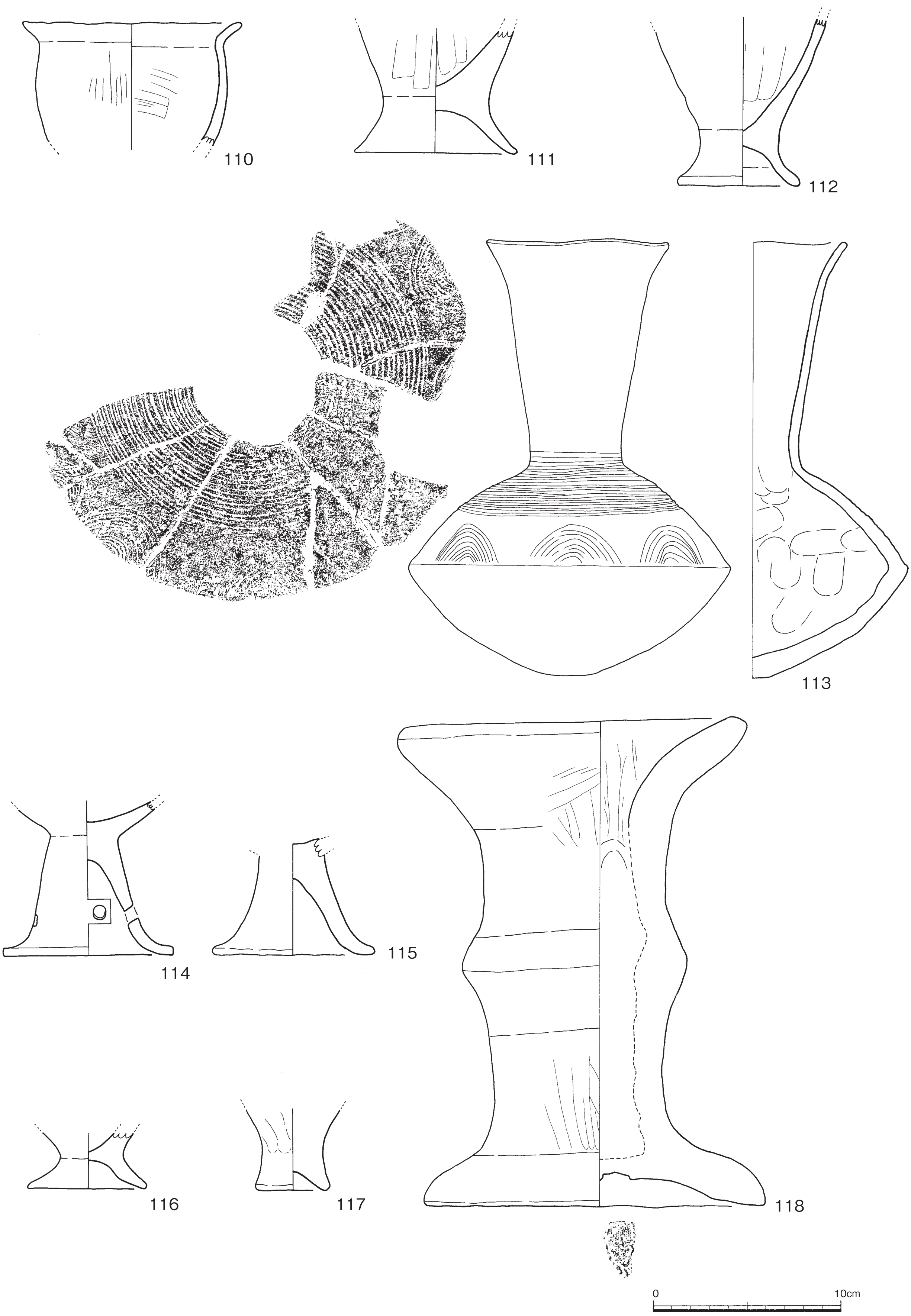
119 ～ 121 は甕の口縁部～胴部である。119 の口縁部は大きく外反し，内面の稜は強い。120 は 119 に比べるとやや緩やかな立ち上がりをする口縁部であるが，内面にはやや稜がある。胴部は丸みを帯びる。122・123 は甕の胴部～脚部である。122 の天井部内面は丸く山形で，端部は「ハ」の字状に外反するが端部は反り返らない。123 の天井部には突起が見られる。脚部は外反する。124 は，壺の底部である。平底で内面は指押さえによる調整である。

土器集中遺構 9(第 49・50 図)

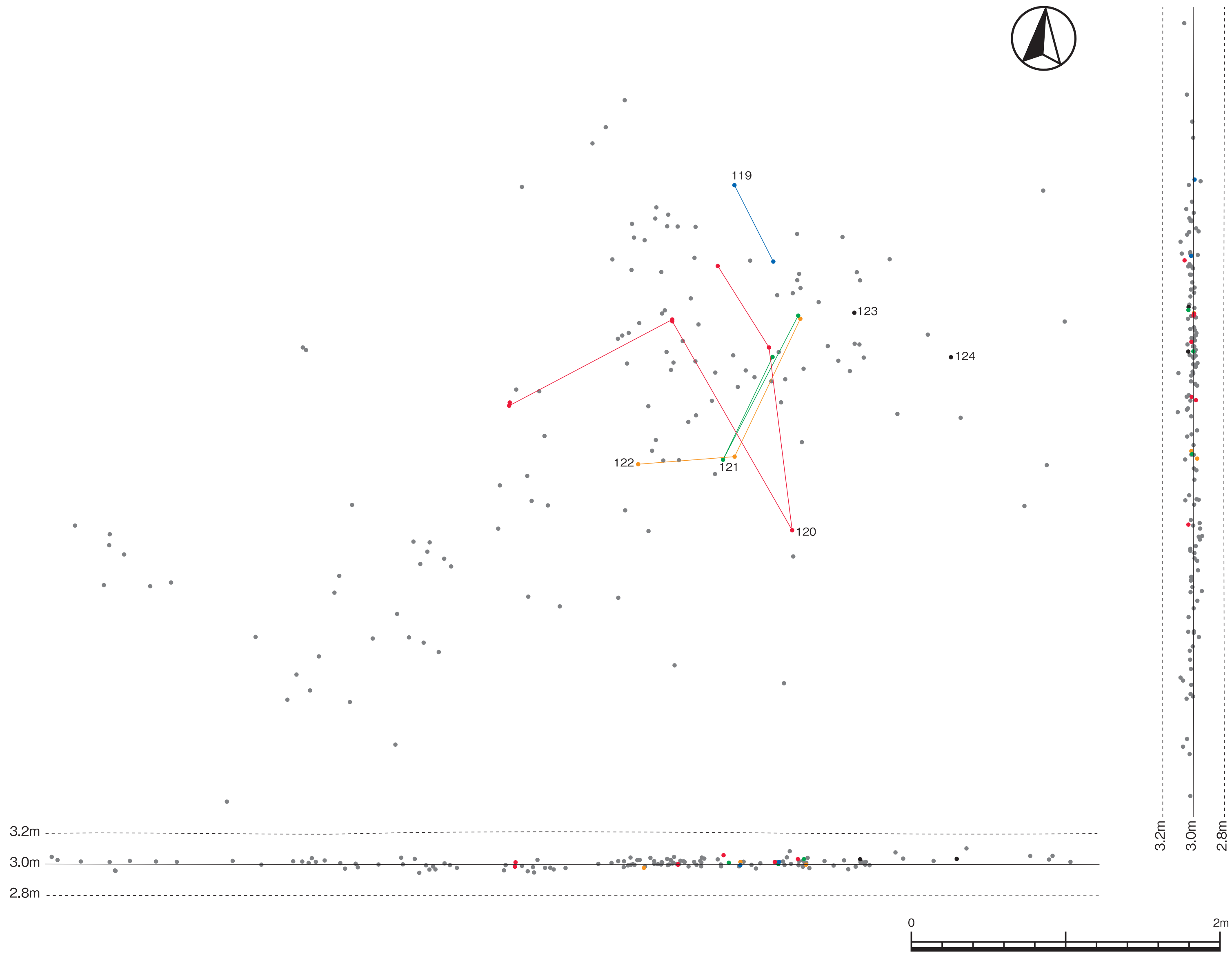
Ｅ・Ｆ－14 区の低湿地で検出した。低湿地部分は，北から南に向かって傾斜しており，この傾斜



第 45 図　土器集中遺構 7 内出土遺物 1



第46図　土器集中遺構7内出土遺物2



第 47 図　土器集中遺構８ドット図

に沿って土器が出土したことから，これらの土器は低湿地部分に廃棄されたものではないかと考えることができる。出土した土器を接合・復元したところ，甕 1 個体，壺 1 個体になった。低湿地の土層と同様，これらの土器の胎土も灰色化 (グライ化) している。

125 は甕である。口縁部は「く」の字状に外反するが稜はやや弱い。口唇部は平坦である。脚部内面の天井部は平坦である。126 は，平底の壺の底部である。

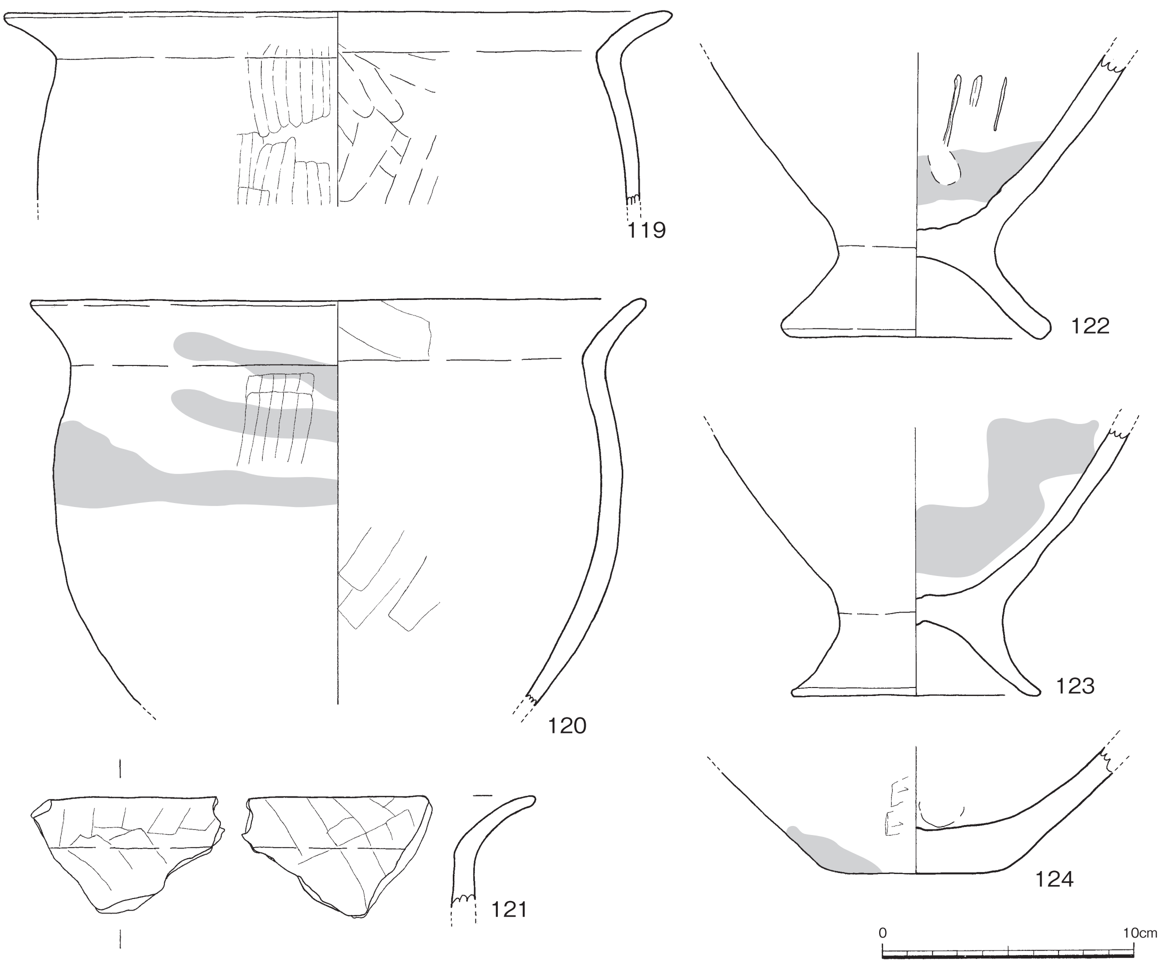
土器集中遺構 10(第 51・52 図)

E － 9・10 区，Ⅴ層上面で検出した。約 3 × 3 mの範囲に広がっている。

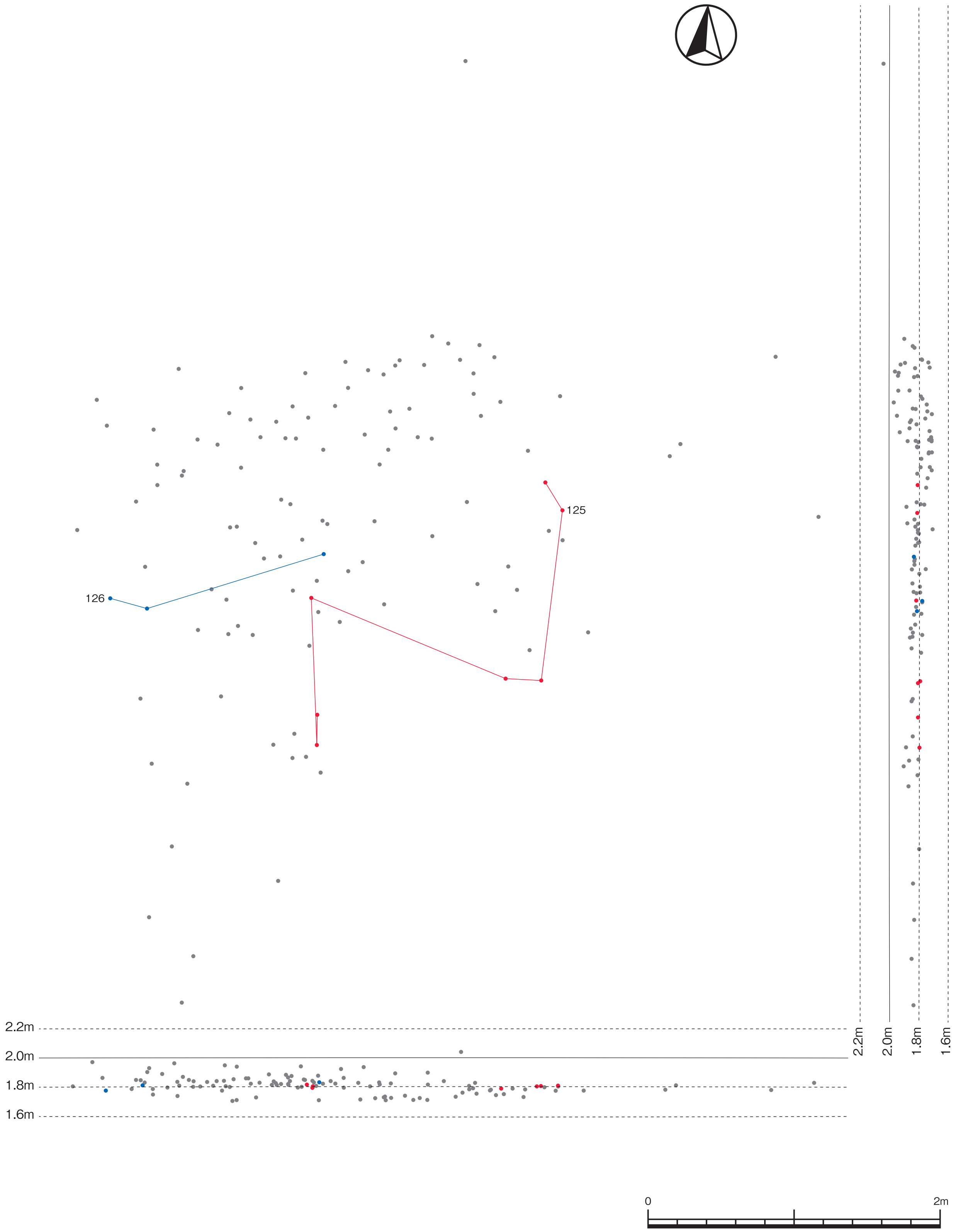
127 は甕の胴部～脚部である。脚部内面天井部は平坦で，脚部は外反する。129 は壺である。内面に稜は持つが，屈曲はきつくなく，ゆるやかに外反する。内面は指ナデによる調整である。底部は平坦でやや小さい。128 は壺の底部である。平坦で小さめの底部から立ち上がった後，さらに外側に開きながら立ち上がる。130 は壺あるいは鉢の胴部～底部である。

土器集中遺構 11(第 53・54 図)

D － 10 区，Ⅴ層上面で検出した。約 3 × 3 mの範囲に小片が広がっている。接合・復元できた個体は 2 個体である。



第 48 図　土器集中遺構 8 内出土遺物



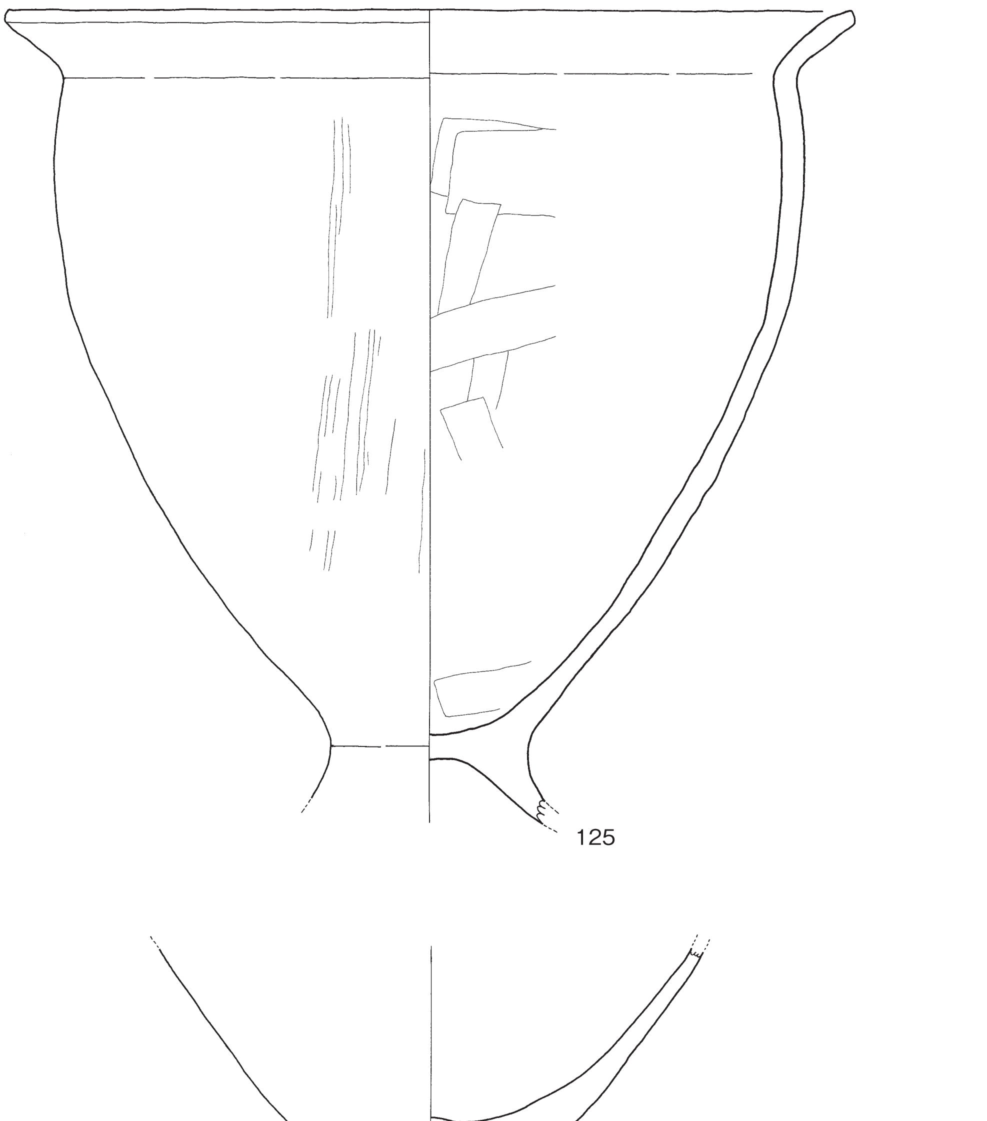
第 49 図　土器集中遺構 9 ドット図

131は甕の口縁部である。緩やかに立ち上がり，内面の稜は弱い。132は甕の脚部である。割れているため，脚部内面天井部の形状は不明である。脚部はやや外反する。

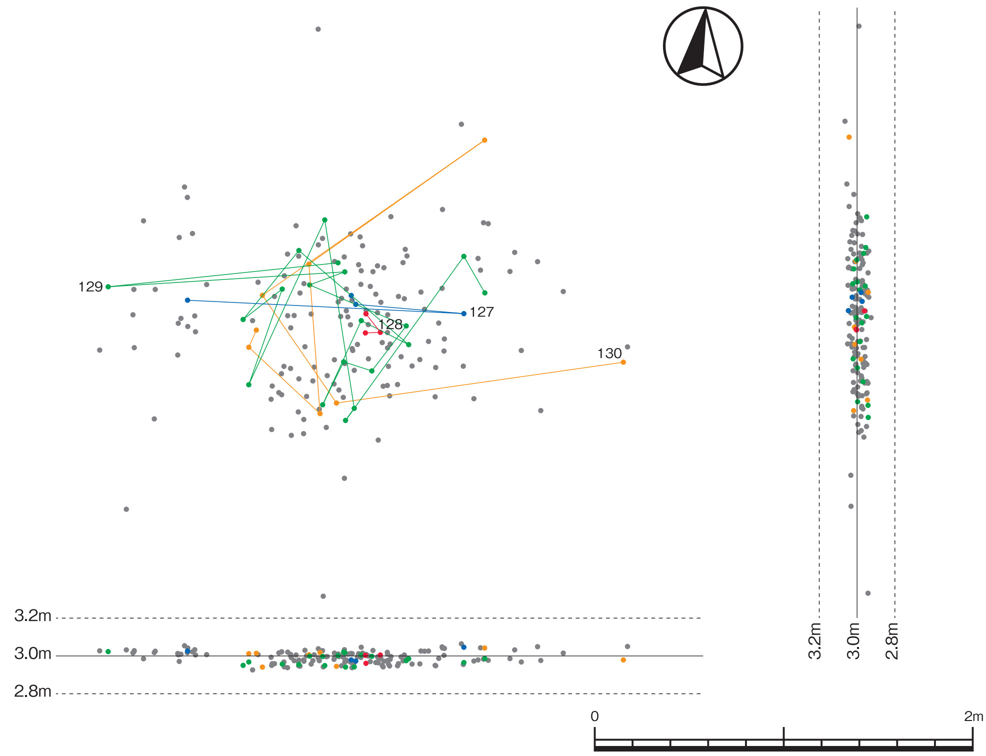
土器集中遺構12(第55・56図)

Ｄ－９区，Ⅴ層上面で検出した。約２×３ｍの範囲に出土した破片は40個と少ない。その中で，２個体が接合・復元できた。

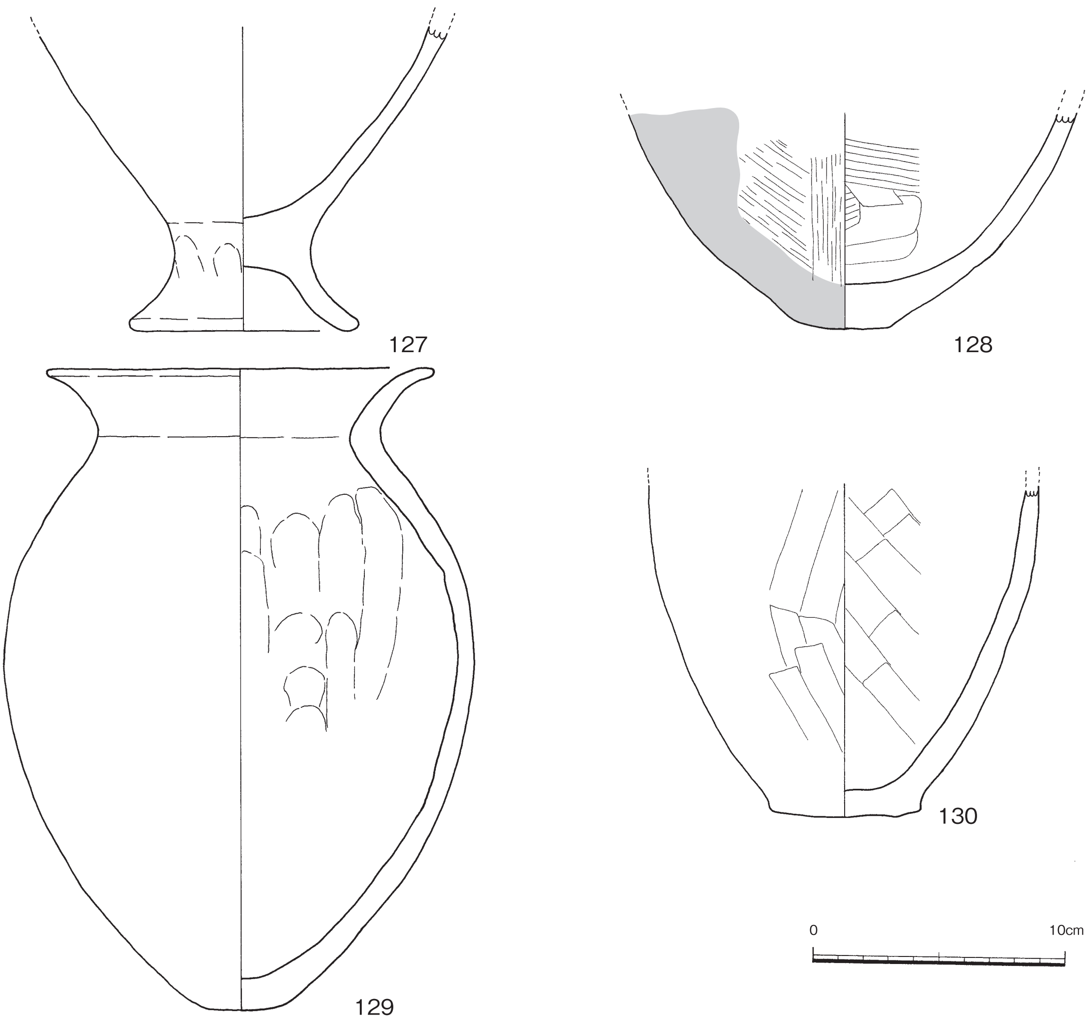
133は小型の甕の口縁部である。短く緩やかに外反する口縁部からあまり張らない胴部へと続く。口縁部外面には煤の付着が見られる。134は甕の脚部である。脚部内面天井部は平坦で，脚部は外反する。



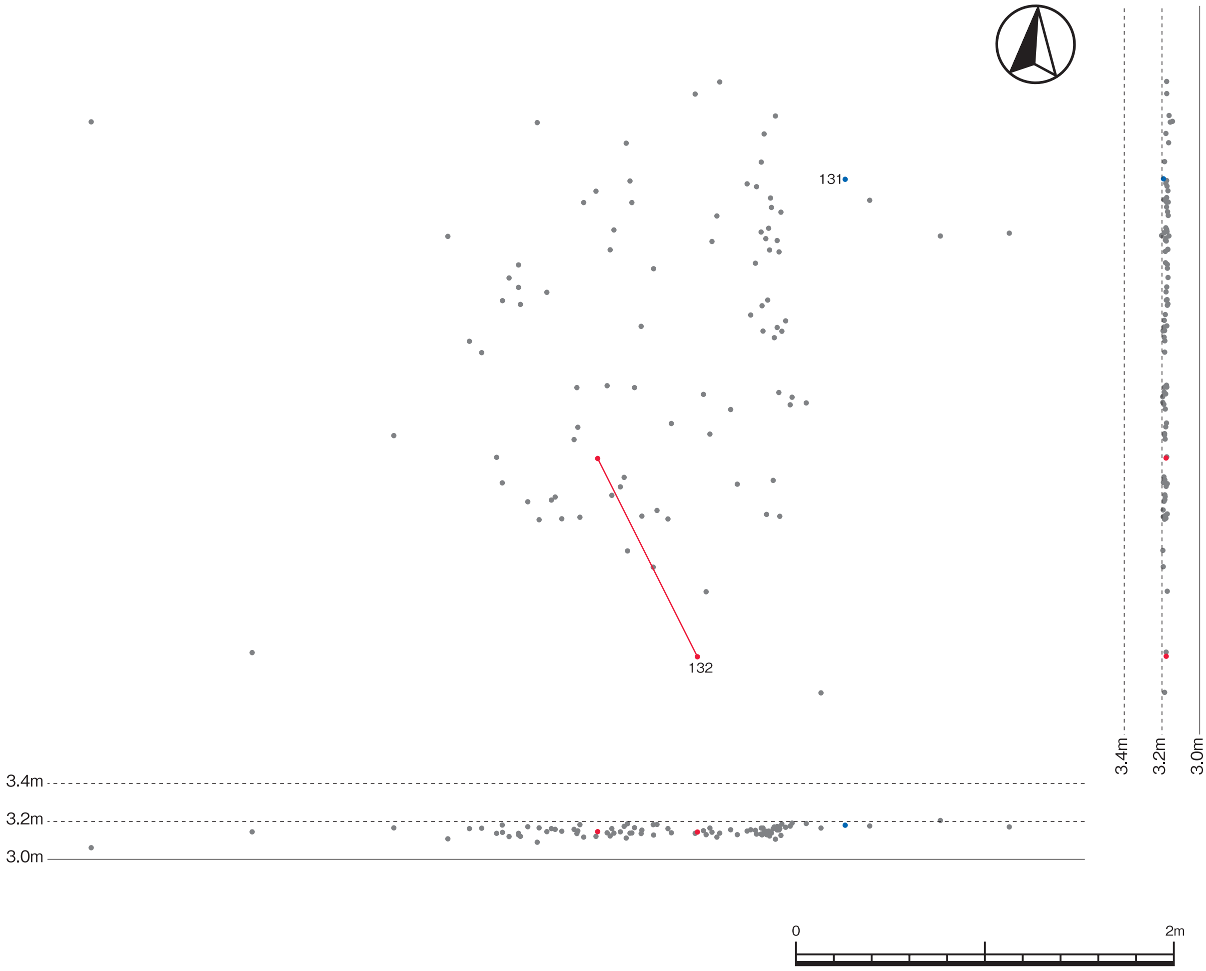
第50図　土器集中遺構９内出土遺物



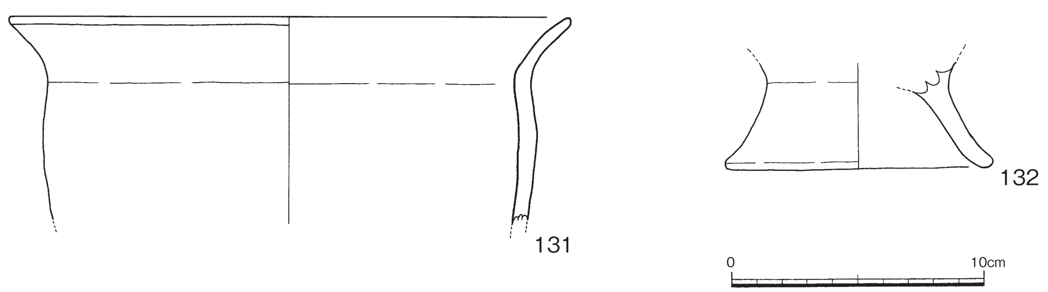
第 51 図　土器集中遺構 10 ドット図



第 52 図　土器集中遺構 10 内出土遺物



第 53 図　土器集中遺構 11 ドット図

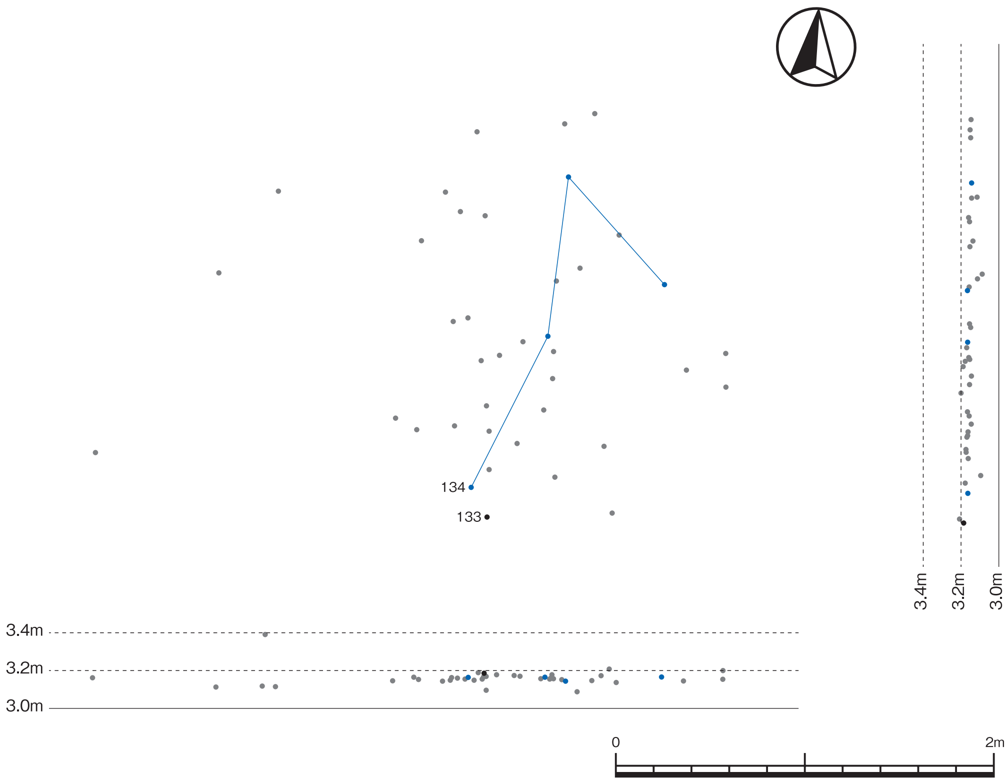


第 54 図　土器集中遺構 11 内出土遺物

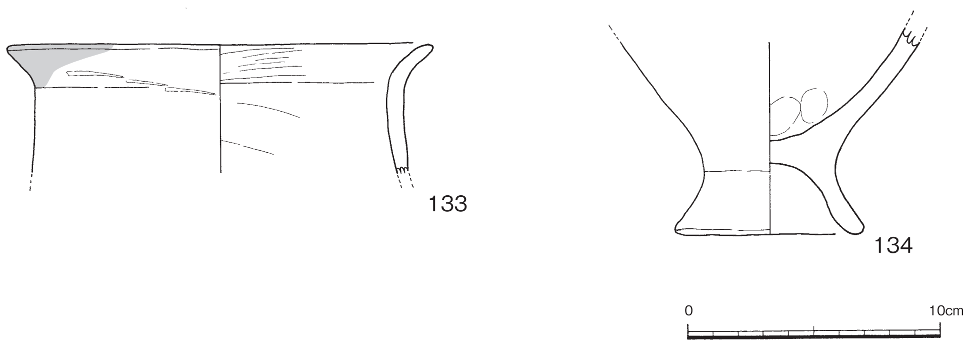
土器集中遺構 13(第 57・58 図)

Ｃ－９区，Ｖ層上面で検出した。

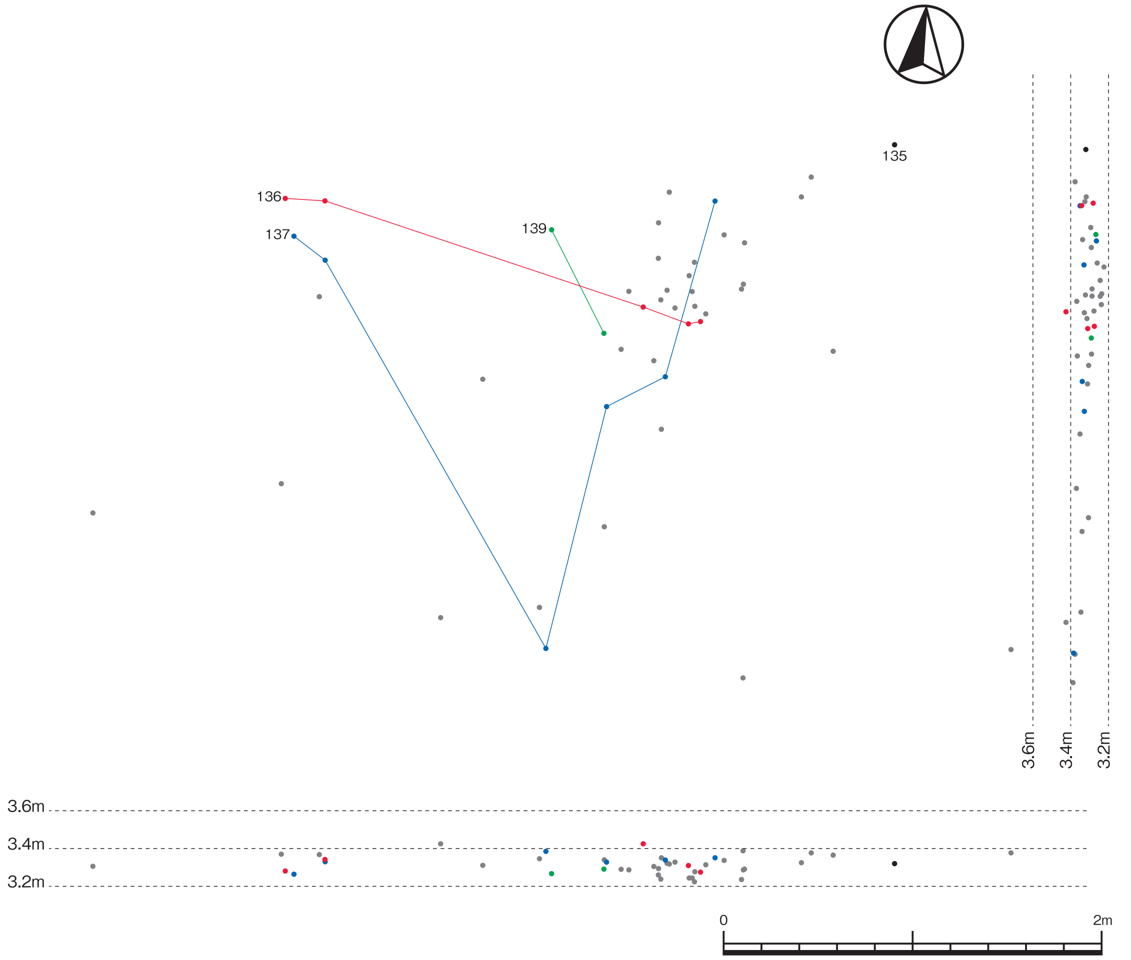
135 は，甕または鉢の脚部である。「ハ」の字にやや外反し，天井部は平坦である。136 は壺の口縁部である。大きく外反し，内面の稜がはっきりする。137 はやや平底の壺の底部である。138・139 は鉢の底部である。138 はやや上げ底の底部から外反しながら立ち上がる形，139 は平坦な底部から直線的に立ち上がる形である。



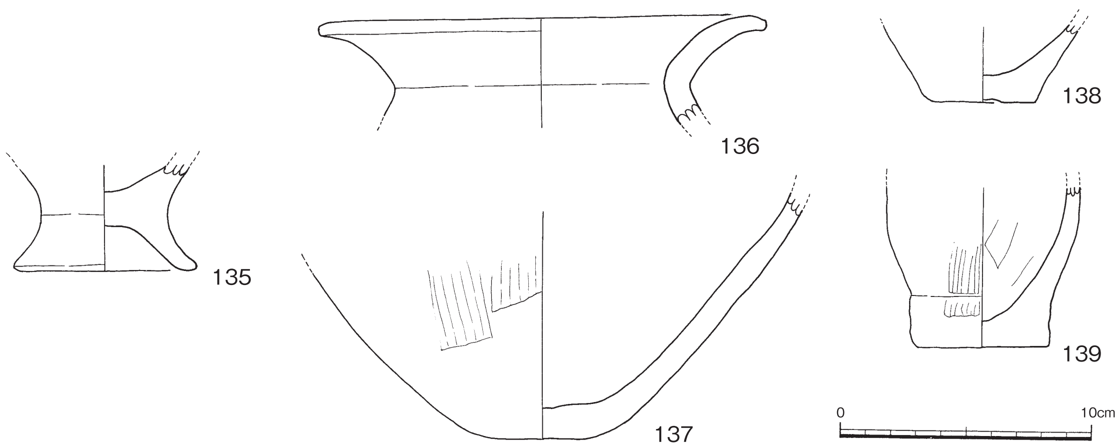
第 55 図　土器集中遺構 12 ドット図



第 56 図　土器集中遺構 12 内出土遺物



第 57 図　土器集中遺構 13 ドット図



第 58 図　土器集中遺構 13 内出土遺物

土器集中遺構観察表

挿図番号	遺構名	掲載番号	注記番号	器種	部位	色調		胎土				法量(cm)			調整		備考
						内面	外面	石英	長石	角閃石	雲母	口径	底径	器高	内面	外面	
第14図	土器集中遺構1	1	78,56,15,16,94,86,252,48,240,243,7,66,63,260,249,75,280,49	壺	口縁部～底部	にぶい橙	にぶい黄橙	○				15.8	4.8	19.0	ナデ	ハケメ後ナデ	
		2	126,118,138,104,103	壺	口縁部～胴部	明褐	明褐		○			17.2	—	—	ハケメ後ナデ・指押さえ	ハケメ後ナデ	
		3	324,167,161,119	壺	胴部～底部	にぶい橙	にぶい橙		○		○	—	4.8	—	工具ナデ	工具ナデ	
		4	57,11,285,280	鉢	口縁部～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙					12.8	—	—	工具ナデ	工具ナデ	
		5	267	鉢	口縁部～胴部	にぶい黄褐	褐灰					—	—	—	ナデ	ハケメ後ナデ	
		6	71,76	鉢	胴部～脚部	橙	橙		○			—	7.8	—	ナデ	ナデ	
		7	90	鉢	胴部～脚部	褐灰	にぶい橙	○				—	7.7	—	—	指ナデ	
		8	38,65,62	鉢	胴部～脚部	にぶい黄橙	にぶい黄橙					—	6.0	—	ハケメ後ナデ	工具ナデ	
		9	281	鉢	胴部～底部	にぶい黄橙	灰					—	4.2	—	工具ナデ	ハケメ後ナデ	
		10	2,81	鉢	口縁部～底部	明黄褐	橙	○				11.0	3.2	5.3	ナデ	工具ナデ	
		11	177,117,145,109,323,158,157	鉢	口縁部～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙				○	19.4	8.6	7.4	ハケメ	ハケメ	
第16図	土器集中遺構2	12	239,157,83,131,1,42,143,244,39,139,149	甕	口縁部～胴部	浅黄橙	浅黄橙		○			26.0	—	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	
		13	118	甕	口縁部～胴部	橙	にぶい黄橙					—	—	—	ハケメ	ハケメ後ナデ	
		14	191,239	甕	胴部～脚部	明黄褐	明黄褐				○	—	9.0	—	ナデ	ナデ	
		15	135	甕	胴部～脚部	にぶい橙	にぶい橙			○		—	9.2	—	ナデ	ナデ	
		16	35,109,101	甕	胴部～脚部	にぶい黄橙	にぶい黄橙					—	8.0	—	—	—	砂粒多
		17	233,223,239,208,288,136	壺	口縁部～底部	にぶい黄褐	にぶい黄褐					13.6	3.5	22.0	工具・指ナデ	工具ナデ	
		18	70,289,231,224,273,272,215,223,232,126,125,50	壺	口縁部～底部	浅黄	橙	○				14.0	3.0	24.7	工具・指ナデ	ハケメ後ナデ	
		19	48,106	壺	胴部～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙					—	4.0	—	ケズリ後指ナデ	ケズリ後ナデ	火山灰赤粒多
		20	289,231,213,205	甕	口縁部～脚部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				16.0	8.0	17.0	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	
		21	157,62,155,151,59,130	壺	口縁部～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			11.4	2.4	8.3	ナデ	ナデ	小形壺・鉢
第18図	土器集中遺構3	22	67,71,66,68,116,98,35,34,95,43,61,108,49,46,53,47,48,16,97,36,20,70,50,4	大甕	口縁部～底部	橙	明赤褐	○	○			31.6	5.0	47.6	ナデ	ハケメ	

土器集中遺構観察表

挿図番号	遺構名	掲載番号	注記番号	器種	部位	色調		胎土				法量（cm）			調整		備考
						内面	外面	石英	長石	角閃石	雲母	口径	底径	器高	内面	外面	
第20図	土器集中遺構4	23	36,30,3,77,99,51,114,19,17	甕	口縁部～胴部	にぶい橙	にぶい橙					30.8	—	—	ナデ	工具ナデ	
第20図	土器集中遺構4	24	59,126,124,125,102,137,58,103	壺	口縁部～胴部	にぶい橙	浅黄橙	○	○			23.4	—	—	工具ナデ	工具ナデ	砂粒多
第20図	土器集中遺構4	25	79,109,129,68,71,120,66,61,55,43,164,62,141,135,115,123	壺	口縁部～胴部	橙	浅黄	○	○			28.0	—	—	工具ナデ	工具ナデ	砂粒多
第21図	土器集中遺構4	26	94	壺	底部	浅黄	にぶい黄橙					—	8.0	—	—	ナデ	火山灰赤粒多
第21図	土器集中遺構4	27	53,1,52,23,50,77,29,31,28,34,10,54,6,81,22,19,87,78,7,12,47,77,64,142,133	壺	胴部～底部	橙	明黄褐					—	4.0	—	—	—	
第25図	土器集中遺構5	28	1320	甕	口縁部～胴部	にぶい黄橙	橙	○	○			24.2	—	—	ハケメ後ナデ	工具ナデ	
第25図	土器集中遺構5	29	1367	甕	口縁部～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				17.0	—	—	ハケメ後ナデ	工具ナデ	
第25図	土器集中遺構5	30	910,409	甕	口縁部～胴部	明黄褐	明黄褐					40.0	—	—	工具ナデ	工具ナデ	火山灰赤粒多
第25図	土器集中遺構5	31	1299	甕	口縁部～胴部	明黄褐	明黄褐	○				30.0	—	—	工具ナデ		
第25図	土器集中遺構5	32	1299	甕	口縁部～胴部	浅黄	明黄褐					21.4	—	—	工具ナデ	ハケメ後ナデ	
第25図	土器集中遺構5	33	1261,1365,1367	甕	口縁部～胴部	橙	橙	○				19.0	—	—	工具ナデ	ナデ	
第25図	土器集中遺構5	34	1378	甕	口縁部～胴部	にぶい黄橙	橙					20.0	—	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	
第26図	土器集中遺構5	35	1300,1306	甕	口縁部～胴部	橙	橙					19.0	—	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	火山灰赤粒多
第26図	土器集中遺構5	36	18,1315,1318	甕	口縁部～胴部	橙	橙	○				27.4	—	—	工具ナデ	工具ナデ	火山灰赤粒多
第26図	土器集中遺構5	37	1320,1349,1329,1012,1318	甕	口縁部～胴部	橙	橙	○	○			31.0	—	—	ハケメ	ハケメ	砂粒多
第26図	土器集中遺構5	38	1287,1265	甕	口縁部～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			31.6	—	—	工具ナデ	ハケメ後ナデ	砂粒多
第27図	土器集中遺構5	39	1329,1319,1315,1320,612	甕	胴部	にぶい橙	橙	○	○			—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	
第27図	土器集中遺構5	40	1297	甕	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				—	—	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	火山灰赤粒多
第27図	土器集中遺構5	41	1292,1294,1297	甕	胴部～脚部	にぶい褐	にぶい黄褐	○				—	8.6	—	ナデ	ハケメ後ナデ	
第27図	土器集中遺構5	42	1299	甕	胴部～脚部	橙	橙	○				—	8.6	—	ナデ	ハケメ後ナデ	火山灰赤粒多
第27図	土器集中遺構5	43	1074,1299,666,1300	甕	胴部～脚部	灰黄褐	にぶい黄橙	○				—	8.5	—	ハケメ・ケズリ	ハケメ後ナデ	火山灰赤粒多
第27図	土器集中遺構5	44	1161,93	甕	胴部～脚部	黒褐	にぶい橙	○	○			—	9.0	—	—	—	砂粒多
第27図	土器集中遺構5	45	1282,1284,1273	甕	胴部～脚部	黒褐	にぶい黄橙	○	○	○		—	10.7	—	—	—	砂粒多
第28図	土器集中遺構5	46	1254,1327,1326,1321,1253,1040,1257,1320,1231,1227,715,279,711,716,1225,1226,1529,964,628,1387	大甕	口縁部～底部	明赤褐	明赤褐					32.0	9.5	39.7	ケズリ・ナデ	ハケメ	

土器集中遺構観察表

挿図番号	遺構名	掲載番号	注記番号	器種	部位	色調		胎土				法量（cm）			調整		備考
						内面	外面	石英	長石	角閃石	雲母	口径	底径	器高	内面	外面	
第28図	土器集中遺構5	47	948,946,938,658,661,670,643,656,654,473,597,494,747,1304,1306,1070,1292,1297,1804	大甕	口縁部～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙					41.2	6.0	58.0	ハケメ	ハケメ	
第29図		48	43,570,579,362,1186,1200,1198,396,1193,1190	大甕	口縁部	黄灰	にぶい黄橙	○	○	○		60.8	—	—	工具ナデ	ハケメ	火山灰赤粒多
		49		大甕	底部	黄灰	にぶい黄橙	○	○	○		—	8.0	—	工具ナデ	ハケメ	
第30図		50	627,1296,1329,1374,1075,1256,1273,1320,1292,1244,1324	壺	口縁部～底部	にぶい橙	明赤褐					17.0	4.8	33.6	—	ハケメ・工具ナデ	
		51	1260,219,1266,931,907,1141,877,1171,1101,1288,1273,1279,927,1280,1128,1207,437	壺	口縁部～底部	明黄褐	明黄褐					20.6	2.2	43.1	工具ナデ	ハケメ後ナデ	
第31図		52	1288,755,780	壺	口縁部～胴部	明黄褐	明黄褐					18.0	—	—	ナデ	ハケメ後ナデ	
		53	1201,621,1216,620	壺	口縁部～胴部	にぶい黄橙	明黄褐					16.0	—	—	—	—	
第32図		54	1320	壺	口縁部～胴部	明黄褐	明黄褐	○				17.4	—	—	—	ナデ	砂粒多
		55	1266,1258,485,1267	壺	口縁部～胴部	橙	橙	○		○		16.0	—	—	工具ナデ	工具ナデ	砂粒多
		56	701	壺	口縁部～胴部	にぶい橙	にぶい黄橙					17.4	—	—	ナデ	ナデ	
		57	1222,1268	壺	口縁部～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙					15.2	—	—	指押さえ	ナデ	
		58	1261,692	壺	口縁部～胴部	褐	赤褐	○				17.0	—	—	指押さえ・ナデ	ハケメ後ナデ	
		59	1114	壺	口縁部～肩部	明黄褐	明黄褐	○				17.2	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外面赤色顔料
		60	1256,943,1382	壺	口縁部～肩部	にぶい黄橙	にぶい黄橙					14.0	—	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	砂粒多
		61	980,993	壺	口縁部～肩部	にぶい黄褐	にぶい黄褐					16.0	—	—	工具ナデ	ハケメ後ナデ	砂粒多
		62	162	壺	口縁部～肩部	明黄褐	浅黄					10.4	—	—	工具ナデ	ハケメ後ナデ	
		63	1297,1303	壺	口縁部～肩部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				11.2	—	—	工具ナデ	指頭痕	
第33図		64	1320,1248,326,997,1001,1233	壺	口縁部～胴部	にぶい黄橙	橙	○				15.3	—	—	—	工具ナデ	砂粒多
		65	972,990,996,1297,1329,1320,1296,672	壺	胴部	橙	橙					—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	砂粒多
		66	1253,1311,1121,1368	壺	胴部	橙	橙					—	—	—	指ナデ	工具ナデ	火山灰赤粒多
		67	1329,1320	壺	胴部	橙	橙	○		○		—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	
第34図		68	1288,451,807,748,1104,1277,1208,1286,1264,1287	壺	口縁部～底部	暗赤褐	赤褐					16.8	3.3	30.8	指ナデ	ハケメ後ナデ	火山灰赤粒多

土器集中遺構観察表

挿図番号	遺構名	掲載番号	注記番号	器種	部位	色調 内面	色調 外面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	調整 内面	調整 外面	備考
第34図	土器集中遺構5	69	1320,1329,1291,1238,1022,1025,1232,980	壺	口縁部～底部	にぶい黄橙	浅黄	○				14.2	5.0	30.0	—	—	
第35図		70	1374,641,1254,1291	壺	胴部～底部	橙	明黄褐					—	5.0	—	工具・指ナデ	ハケメ後ナデ	
		71	750,1287	壺	胴部～底部	明黄褐	橙	○				—	6.0	—	—	ハケメ後ナデ	砂粒多
		72	174,1316,713,291,723,1279,1286,1095,1264,1286,1316,728	壺	胴部～底部	明黄褐	明黄褐					—	10.0	—	ナデ	ナデ	火山灰赤粒多
		73	1324	壺	胴部	橙	にぶい黄橙	○	○			—	—	—	ナデ	ハケメ後ナデ	
		74	1285	壺	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄橙					—	—	—	ナデ	ナデ	
		75	1257,1326	壺	胴部	橙	にぶい橙	○	○			—	—	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	
		76	1320	壺	胴部	橙	橙					—	—	—	ナデ	ハケメ後ナデ	
第36図		77	1296,1320	壺	胴部～底部	明黄褐	橙					—	5.6	—	ハケメ	ハケメ後ナデ	砂粒多
		78	665	壺	胴部～底部	にぶい黄橙	にぶい橙	○				—	5.5	—	ナデ	ナデ	
		79	790,1320	壺	胴部～底部	橙	にぶい橙	○	○			—	5.0	—	ナデ	ナデ	砂粒多
		80	1164,1273	壺	胴部～底部	暗黄灰	にぶい黄					—	4.8	—	ナデ	ハケメ後ナデ	火山灰赤粒多
		81	275,1286,1264,1278,416,810,1328	壺	胴部～底部	にぶい橙	にぶい橙					—	4.7	—	工具ナデ	ハケメ後ナデ	
		82	1278,1328	壺	胴部～底部	にぶい黄橙	明黄褐					—	2.0	—	ナデ	ナデ	砂粒多
第37図		83	1257,580,53,536,1254,1329,1320	壺	口縁部～胴部	橙	橙					16.4	—	—	ハケメ	ハケメ後ナデ	細砂粒多
		84	121	壺	口縁部～胴部	黄灰	明赤褐	○	○			14.8	—	—	—	工具ナデ	砂粒多
第38図		85	1282,225,902,930	壺	口縁部～底部	にぶい黄橙	にぶい橙	○				24.0	8.4	—	ハケメ	ハケメ	
		86	1328	壺	胴部	明黄褐	明黄褐					—	—	—	ナデ	ハケメ後ナデ	火山灰赤粒多
第39図		87	650,1297,590,599,594,587	壺	胴部～底部	明黄褐	にぶい黄橙	○	○			—	6.0	—	工具ナデ	ハケメ後ナデ	
		88	1096,1289,1290	壺	胴部	明黄褐	明黄褐					—	—	—	工具ナデ	—	
		89	1297	壺	胴部	橙	浅黄橙					—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	
		90	976,505,1380,1319	壺	胴部	橙	橙	○	○			—	—	—	工具・指ナデ	ハケメ後ナデ	
第40図		91	1342,1229,1217,1329,1173,925,1320,1256,693,1257,1263	器台	完形	橙	橙	○	○			27.4	23.0	19.9	ナデ	ハケメ後ナデ	火山灰赤粒多
		92	149,1320,327,1011,1257,618,673,1235,513,1244,1291,1215,705	器台	完形	橙	にぶい橙	○	○			25.0	26.4	25.6	ハケメ	ハケメ後ナデ	火山灰赤粒多
		93	955,1308,1297,1312,957,1374	器台	完形	橙	橙	○	○	○		28.0	24.4	25.3	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	
第41図		94	521,967	鉢	口縁部～胴部	橙	橙					14.6	—	—	ハケメ	ハケメ後ナデ	

土器集中遺構観察表

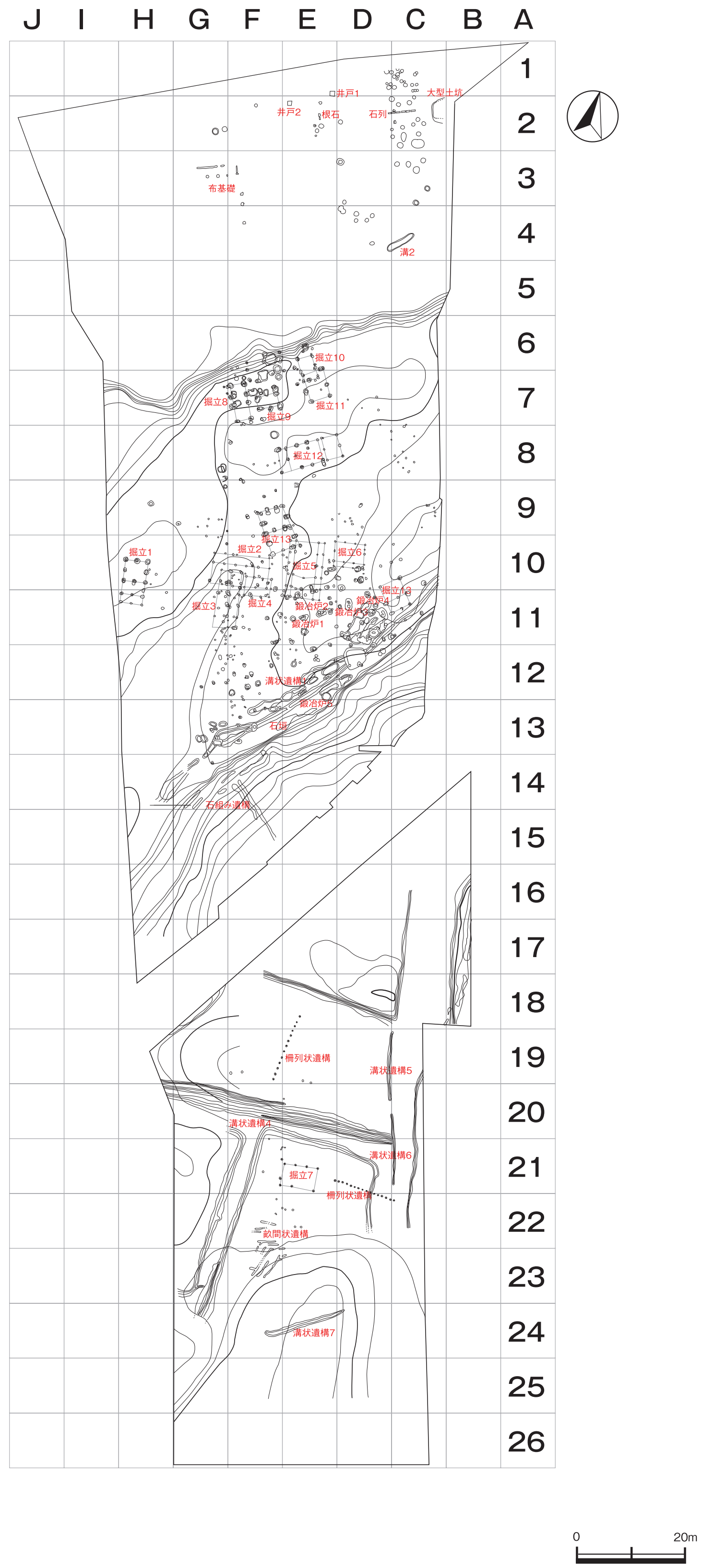
挿図番号	遺構名	掲載番号	注記番号	器種	部位	色調 内面	色調 外面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	調整 内面	調整 外面	備考
第41図	土器集中遺構5	95	1292	甕・鉢	胴部～脚部	にぶい黄褐	灰黄褐	○				—	6.2	—	ハケメ	ハケメ	
		96	1367	鉢	口縁部～胴部	橙	橙					11.0	—	—	ハケメ	ハケメ後ナデ	
		97	1297	鉢	口縁部～胴部	褐	明黄褐					13.0	—	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	砂粒多
		98	1297	鉢	胴部～底部	灰黄	にぶい橙	○	○			—	4.0	—	ナデ	ケズリ・ナデ	砂粒多
		99	1373	壺	胴部～底部	にぶい橙	にぶい黄橙					—	3.4	—	ヘラナデ	ハケメ	
		100	一括	棒状土錘	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙					—	—	—	—	ナデ	精製された胎土
第43図	土器集中遺構6	101	32,87,179,173,323,73,313	甕	口縁部～胴部	にぶい橙	にぶい黄橙					18.2	—	—	工具ナデ	ハケメ後ナデ	
		102	5,64,240	甕	胴部～脚部	橙	橙					—	8.4	—	工具ナデ	工具ナデ	砂粒多
		103	3,65,72,67,35,99	甕	胴部～脚部	橙	橙	○	○			—	9.2	—	工具ナデ	工具ナデ	砂粒多
		104	263,284,130,132,122,114,150,292	甕	胴部～脚部	にぶい褐	橙	○	○			—	11.0	—	工具ナデ	工具ナデ	砂粒多
		105	一括	甕	胴部～脚部	橙	橙					—	8.6	—	—	—	砂粒多
		106	52,67,22	甕	胴部～脚部	黄橙	橙					—	8.2	—	工具ナデ	工具ナデ	
		107	76,108	壺	口縁部～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙					10.0	—	—	工具ナデ	—	砂粒多
		108	195,74,73,351,43,82,10,9,77,85,153,20,8,7,305,38,11,189	壺	胴部～底部	橙	明黄褐	○	○			—	5.4	—	工具ナデ	—	火山灰赤粒多
第45図	土器集中遺構7	109	137,141,140,19,122,221,198,17,18,196	壺	胴部～底部	にぶい橙	明黄褐	○	○			—	4.0	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	
第46図		110	230,19,11,9,130,65,220,193,194,156,131	鉢	口縁部～胴部	明黄褐	明黄褐					11.6	—	—	工具ナデ	工具ナデ	
		111	12,33,39,204	甕	脚部	にぶい橙	にぶい橙	○				—	8.4	—	工具ナデ	工具ナデ	
		112	66,135	甕	胴部～脚部	黄灰	橙					—	6.5	—	工具ナデ	—	
		113	58,136,37,159,14,72,88,81,219,7,103,208,217,236,121,137,119,70,178,1,191,35,96,95,93	長頸壺	口縁部～底部	暗灰黄	橙					10.0	2.1	23.0	—	—	火山灰赤粒多
		114	133	高坏	脚部	にぶい橙	にぶい橙	○	○			—	9.0	—	—	ナデ	火山灰赤粒多
		115	150	高坏	脚部	黄橙	黄橙					—	8.6	—	—	—	火山灰赤粒多
		116	26	甕	脚部	にぶい橙	にぶい橙	○		○		—	6.1	—	ナデ	ナデ	小形の甕
		117	181	甕	脚部	明赤褐	明赤褐					—	4.0	—	—	工具ナデ	ミニチュア
		118	180	器台	完形	橙	橙					18.6	17.6	26.0	指押さえ・ミガキ	ミガキ	火山灰赤粒多
第48図	土器集中遺構8	119	62,99	甕	口縁部～胴部	橙	橙					25.2	—	—	工具・指ナデ	ハケメ	砂粒多
		120	82,41	甕	口縁部～胴部	明黄褐	橙	○	○			23.6	—	—	工具ナデ	ハケメ後ナデ	火山灰赤粒多
		121	19	甕	口縁部	明黄褐	にぶい黄橙					—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	砂粒多

土器集中遺構観察表

挿図番号	遺構名	掲載番号	注記番号	器種	部位	色調		胎土				法量（cm）			調整		備考
						内面	外面	石英	長石	角閃石	雲母	口径	底径	器高	内面	外面	
第48図	土器集中遺構8	122	47,66,67,135,305,16,7	甕	胴部～脚部	にぶい褐	赤褐	○	○			—	10.2	—	ナデ	—	砂粒多
		123	17,95,80,72	甕	胴部～脚部	明黄褐	橙					—	9.5	—	—	ナデ	砂粒多
		124	21	壺	底部		にぶい黄褐		○			—	7.0	—	指ナデ	ヘラケズリ・ナデ	内面朱？
第50図	土器集中遺構9	125	36,37,116,115,98,46,101,104,105	甕	口縁部～脚部	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○			33.4	—	—	工具ナデ	ハケメ後ナデ	火山灰赤粒多
		126	2,22,65,100	壺	胴部～底部	黄橙	黄橙	○	○			—	5.5	—	—	工具ナデ	火山灰赤粒多
第52図	土器集中遺構10	127	41,93,124,156	甕	胴部～脚部	橙	浅黄橙	○				—	8.5	—	工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	
		128	39,134,135	壺	胴部～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				—	2.7	—	ハケメ	ハケメ	
		129	48,83,169,80,106,88,71,89,129,7,4,85,32,83,33,70,115,59,164,65,140	壺	口縁部～底部	橙	橙					15.4	3.0	24.5	指ナデ	—	火山灰赤粒多
		130	145,153,154,121,68,34,1501	鉢	胴部～底部	にぶい黄褐	にぶい黄橙					—	6.0	—	工具ナデ	工具ナデ	火山灰赤粒多
第54図	土器集中遺構11	131	3	甕	口縁部～胴部	橙	橙					22.2	—	—	—	—	
		132	31,38	甕	脚部	にぶい黄橙	橙					—	10.6	—	—	—	
第56図	土器集中遺構12	133	31	甕	口縁部～胴部	明黄褐	明黄褐					16.8	—	—	ハケメ・工具ナデ	ナデ	
		134	4,8,21,33	甕	胴部～脚部	橙	にぶい褐					—	7.5	—	指頭痕	—	
第58図	土器集中遺構13	135	3	甕	脚部	黄橙	明黄橙					—	7.3	—	—	—	
		136	22,18,19,40,39	壺	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙					16.6	—	—	—	—	
		137	32,9,27,38,41,29	壺	底部	にぶい橙	にぶい黄橙					—	4.2	—	—	ハケメ	
		138	一括	鉢	底部	橙	橙					—	4.2	—	ナデ	ナデ	
		139	24,36	鉢	胴部～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙					—	5.2	—	工具ナデ	ハケメ	

２　中世～近世の調査

中世～近世の遺構は１地点～４地点のⅠａ層～Ⅴ層上面において溝，掘立柱建物跡，鍛冶炉跡などが検出され，遺物はⅠａ層～Ⅳｂ層内から輸入陶磁器，肥前系陶磁器，在地系陶磁器のほか土製品，鉄滓などが出土した。以下，遺構・遺物にわけて述べる。



第 59 図　中世～近世遺構配置図

（1）遺構

１地点～４地点にかけて中世～近世に相当すると思われる遺構が検出された。主に屋敷跡とそれに付随する遺構であると考えられる。

井戸跡１(第60図)

Ｅ－１・２区の境でⅠａ層にて検出された。板状に加工した熔結凝灰岩を７段縦に組み合わせて構築されている。それぞれの板はノミの加工痕が観察できる。板石と板石の間には粘土が塗り込められており，接着されている。また最下段は木枠である。調査途中でも下から２段目あたりまで水が湧き出ていた。

井戸跡２(第60図)

Ｅ－２区において検出された。井戸１と同様に，ノミの加工が施された熔結凝灰岩を組み合わせて造られている。崩壊する危険があったため，上から２段目の途中までで調査を終了した。２段目までの埋土中から，以下の遺物が検出された。

井戸跡２出土遺物(第60図)

140は白磁の碗である。高台内面に「一」の墨書がある。141は端反碗である。外面には山水文が描かれる。畳付きは釉剥ぎされる。142は肥前系の中皿で，高台は短く，畳付きには砂が付着している。口唇部は口紅である。143は，口縁部が外反する大型の鉢の胴部である。内外面とも白化粧土の刷毛目文様が描かれる。144は土製品の焙烙である。煤の付着は見られない。口縁部下に焼成前の穿孔がある。持ち手がつく形ではなく，囲炉裏につるして使用する形のものと考えられる。

掘立柱建物跡

２地点の自然堤防上において，13棟の掘立柱建物跡が検出された。柱穴内の埋土は，Ⅰａ層およびⅣｂ層であり，出土した遺物も土器や土師器，土製品に関してはローリングを受けているものが多かった。このことから，川内川の氾濫時にはこれらの建物跡周辺にまで川砂が流れ込んだと思われる。

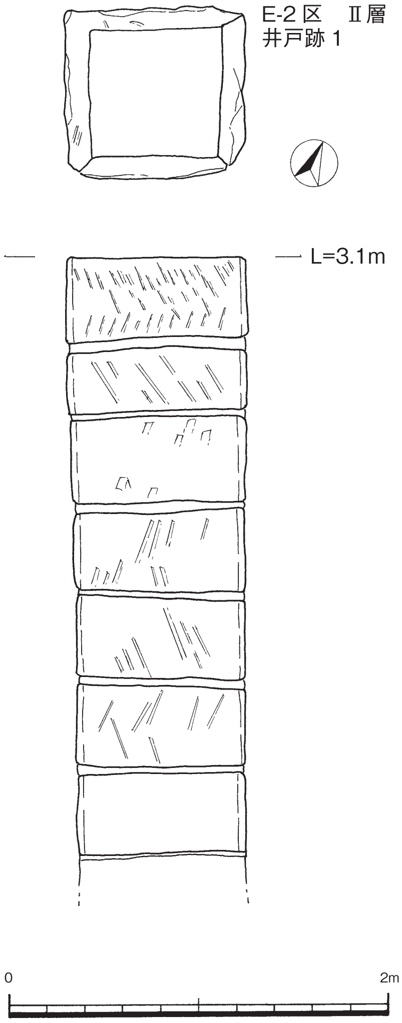
検出されたこれらの建物跡を軸方向で比較してみると，２タイプに分けることができる。すなわち，軸を北東方向(N10°E)に持つ建物跡(以下，タイプ１とする)と，北北西(N15°W)に軸を持つ建物跡(以下タイプ２とする)である。

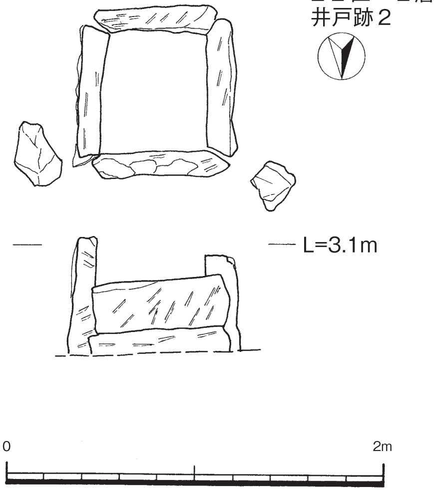
以下に，それぞれの掘立柱建物跡について述べる。なお，梁行き，桁行き及び柱間などについてはそれぞれの計測表を参照されたい。

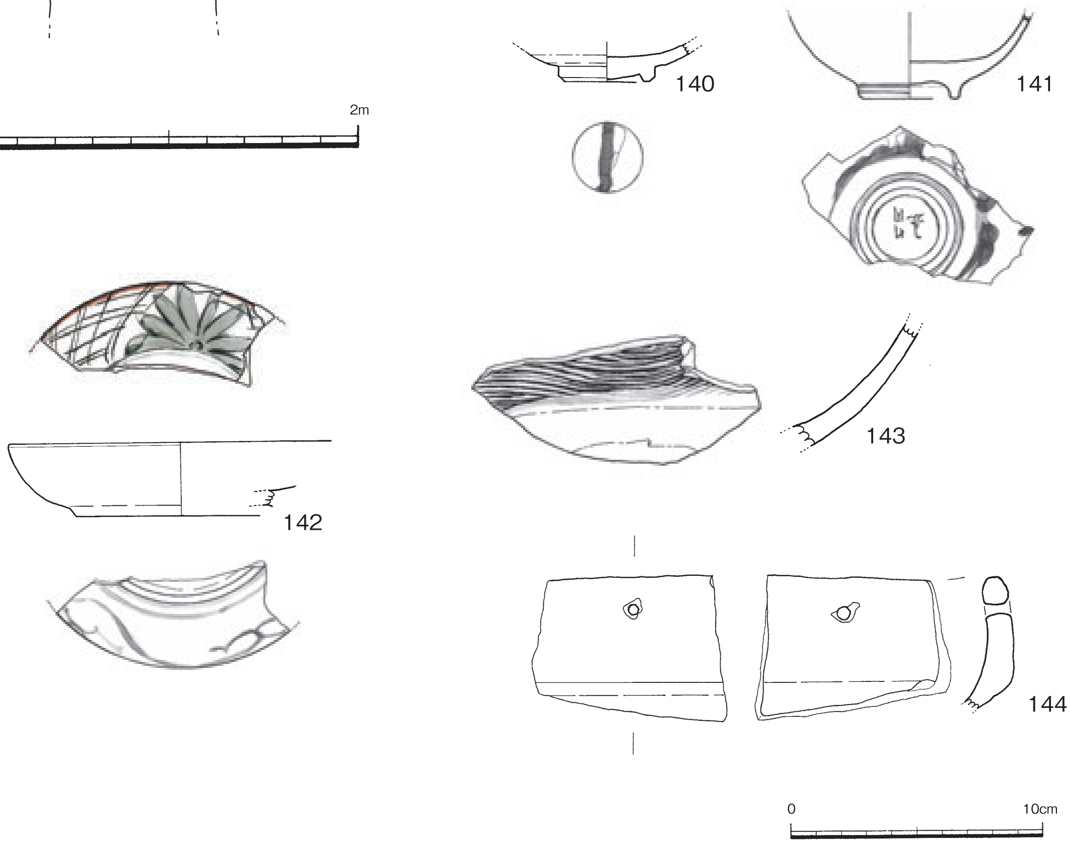
〈タイプ１〉

掘立柱建物跡１(第61図)

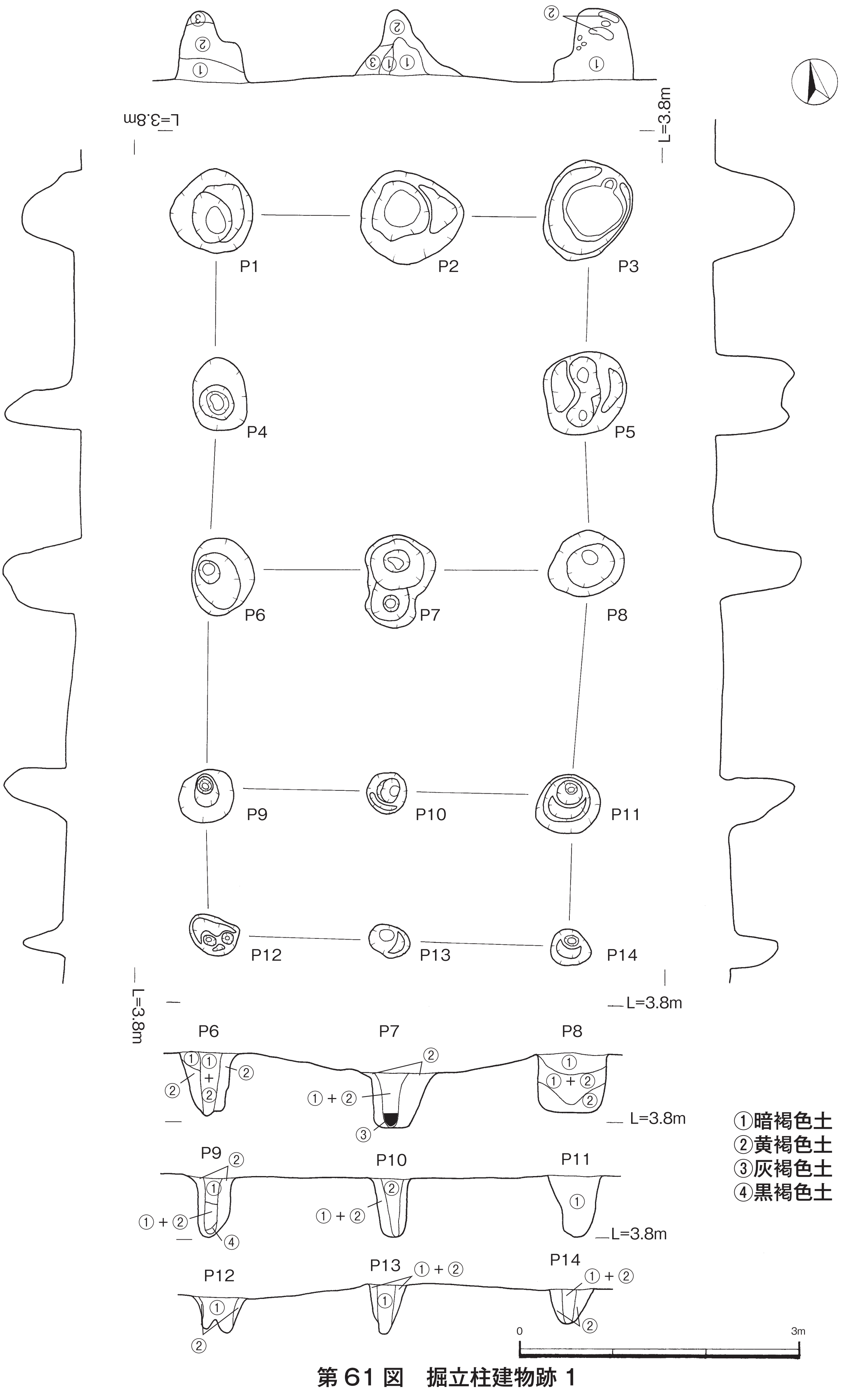
Ｈ－10・11区，Ⅴ層上面で検出した。14基の柱穴からなる２×４間の建物跡である。柱穴の底から根石と思われる人頭大の石が検出されたものもある。



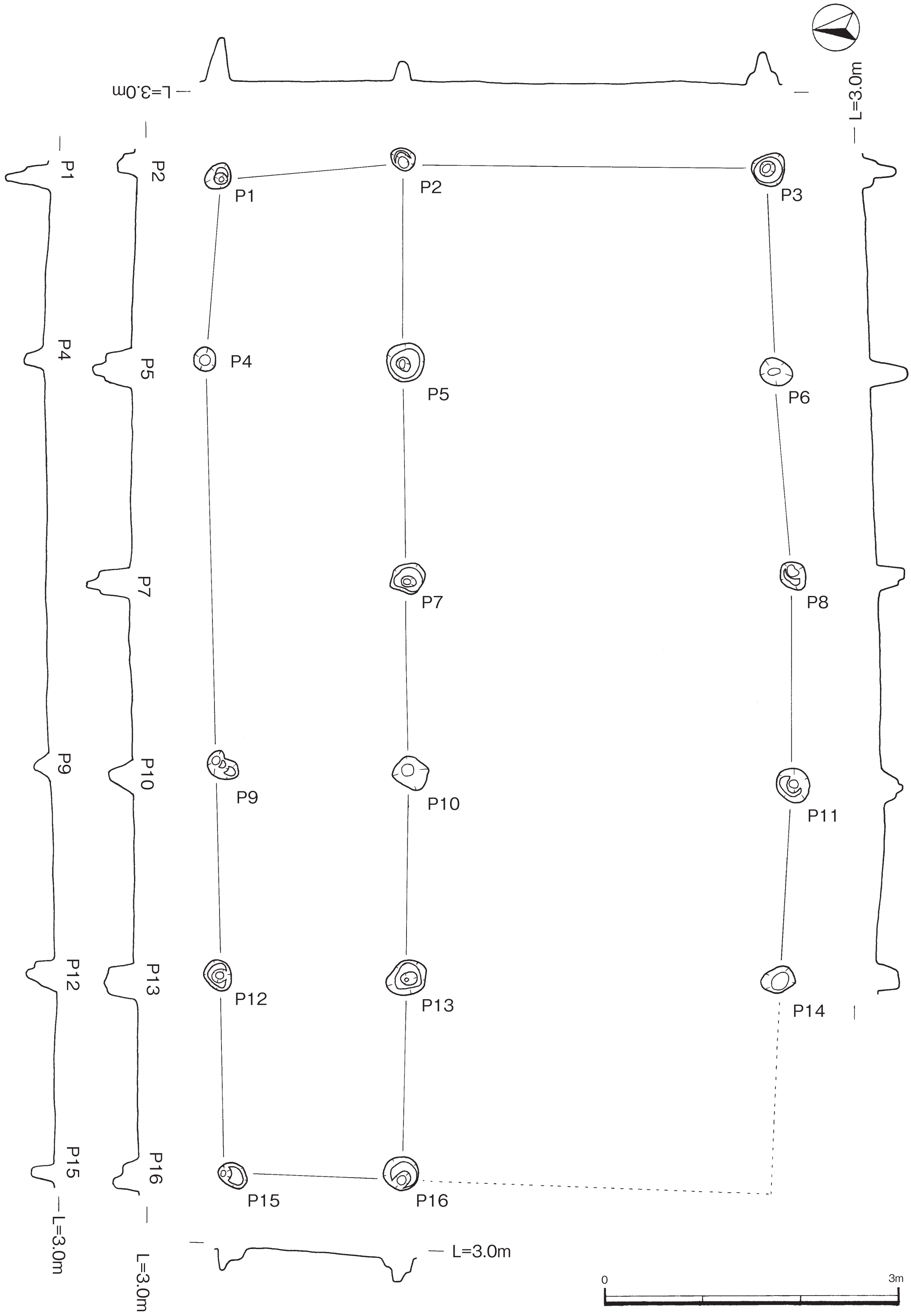




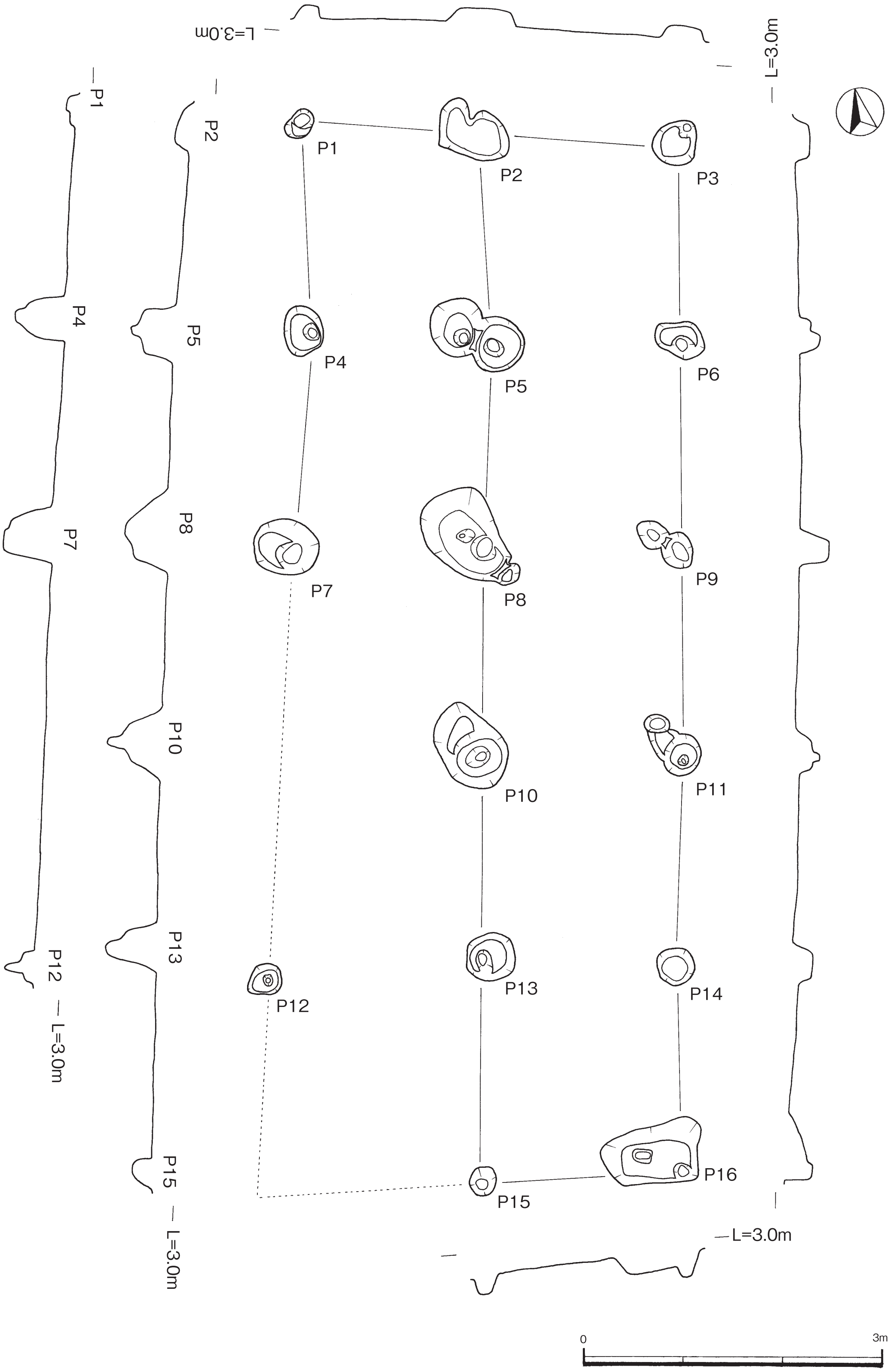
第 60 図　井戸跡および出土遺物



第61図　掘立柱建物跡 1



第 62 図　掘立柱建物跡 2



第63図　掘立柱建物跡３

掘立柱建物跡１

柱穴番号	柱穴（cm）		
	長径	短径	深さ
1	91	90	75
2	112	102	70
3	104	97	75
4	79	59	79
5	90	88	83
6	83	66	67
7	73	70	58
8	81	71	64
9	60	55	63
10	42	40	62
11	70	64	66
12	53	41	37
13	43	35	52
14	44	39	37

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1 - 2	2	1 - 4	1.95
2 - 3	2	4 - 6	1.8
6 - 7	2	6 - 9	2.3
7 - 8	2.05	9 - 12	1.65
9 - 10	2	3 - 5	1.95
10 - 11	1.9	5 - 8	1.75
12 - 13	1.9	8 - 11	2.5
13 - 14	2	11 - 14	1.6

掘立柱建物跡２

柱穴番号	柱穴（cm）		
	長径	短径	深さ
1	30	28	50
2	24	20	20
3	36	34	34
4	26	22	20
5	38	38	42
6	32	28	40
7	34	30	44
8	28	24	30
9	26	20	20
10	38	32	26
11	36	34	25
12	30	28	34
13	40	38	34
14	36	28	23
15	30	20	26
16	36	32	24

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1 - 2	1.85	1 - 4	1.82
2 - 3	3.68	4 - 9	4.05
15 - 16	1.8	9 - 12	2.18
		12 - 15	2
		2 - 5	2.04
		5 - 7	2.2
		7 - 10	1.92
		10 - 13	2.1
		13 - 16	2.05
		3 - 6	2.06
		6 - 8	2.05
		8 - 11	2.16
		11 - 14	2

掘立柱建物跡３

柱穴番号	柱穴（cm）		
	長径	短径	深さ
1	30	28	14
2	68	40	18
3	46	44	16
4	42	40	50
5	56	54	44
6	50	36	22
7	66	54	50
8	96	56	42
9	36	32	32
10	68	66	58
11	42	36	22
12	34	32	30
13	50	48	52
14	38	38	22
15	32	24	22
16	90	58	30

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1 - 2	1.7	1 - 4	2.14
2 - 3	2.02	4 - 7	2.24
15 - 16	2	2 - 5	2.1
		5 - 8	2
		8 - 10	2.1
		10 - 13	2
		13 - 15	2.24
		3 - 6	2
		6 - 9	2.06
		9 - 11	2.1
		11 - 14	2.06
		14 - 16	2.1

掘立柱建物跡２(第62図)

Ｆ・Ｇ－10・11区，Ⅴ層上面で検出した。16基の柱穴からなる建物跡である。ピット５から土師器（145）が出土している。

掘立柱建物跡３(第63図)

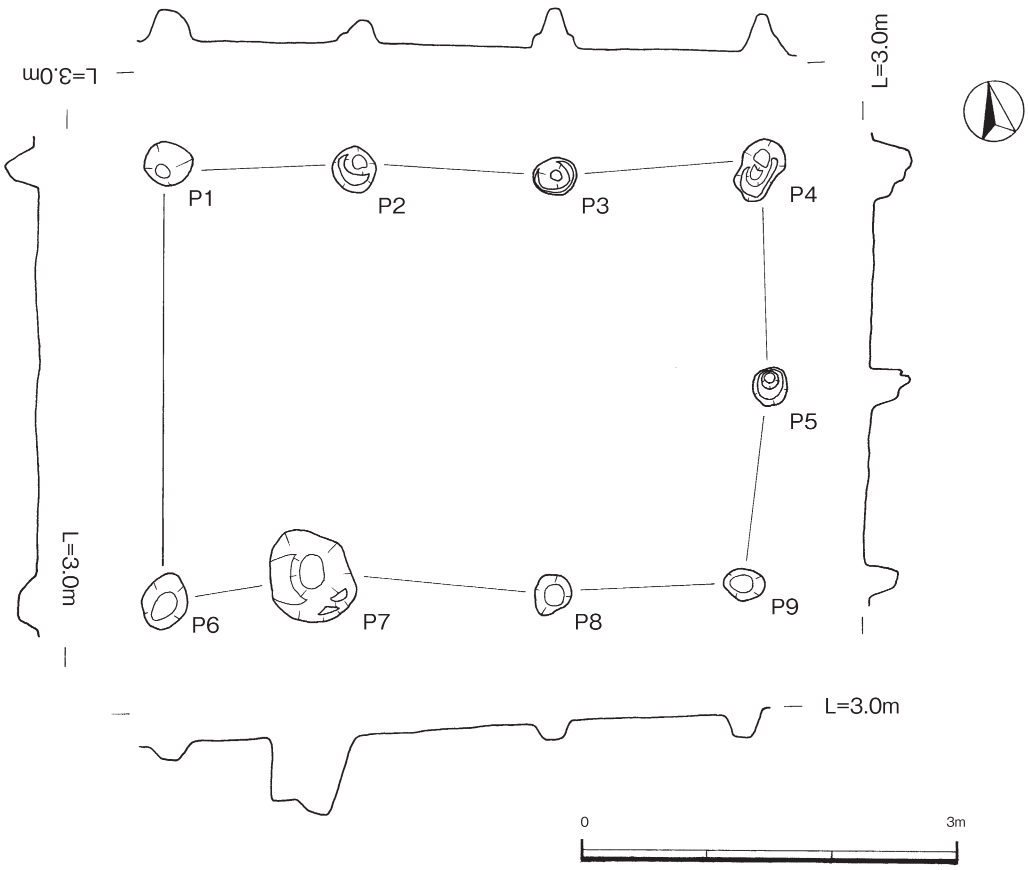
Ｆ・Ｇ－10・11区，Ⅴ層上面で検出した。16基の柱穴からなる２×５間の建物跡である。

掘立柱建物跡４(第64図)

Ｆ－10・11区，Ⅴ層上面で検出した。８基の柱穴からなる１×４間の建物跡である。

掘立柱建物跡５(第65・66図)

Ｅ－10・11区，Ⅴ層上面で検出した。東西に庇をもつ，３×５間の建物跡である。

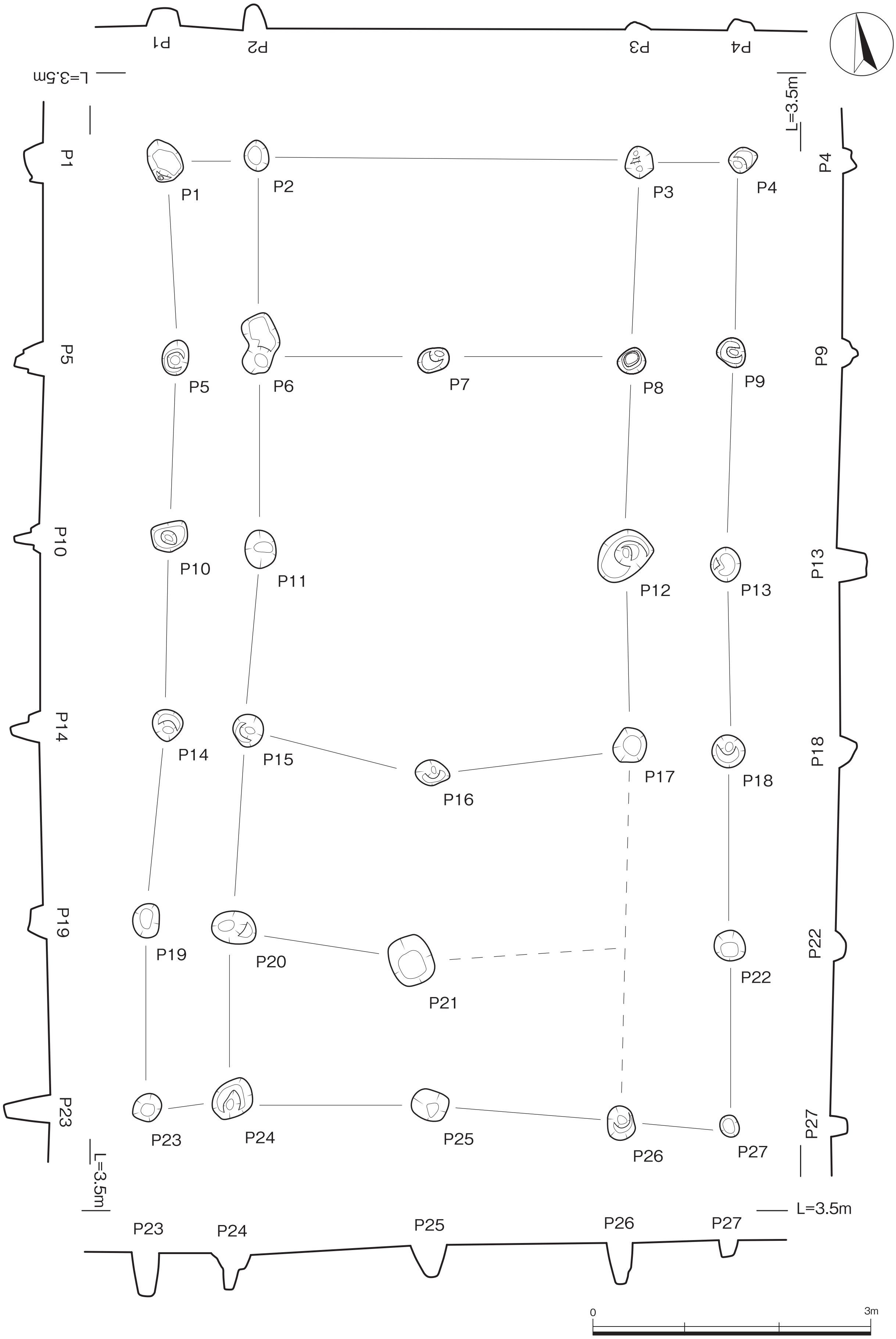


第64図　掘立柱建物跡４

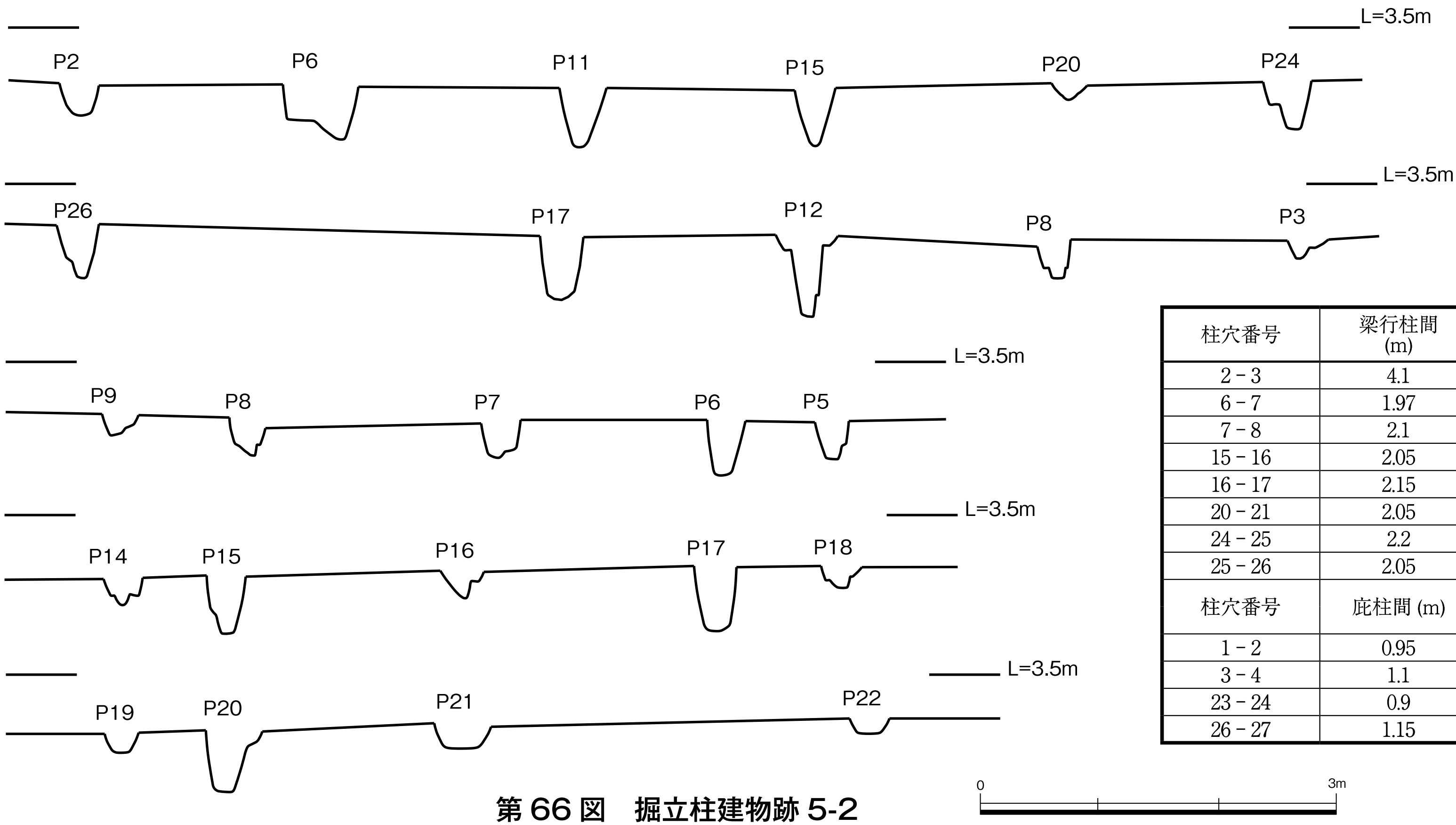
掘立柱建物跡４

柱穴番号	柱穴（cm）		
	長径	短径	深さ
1	36	36	28
2	38	36	20
3	34	30	34
4	50	30	30
5	30	28	33
6	46	36	18
7	74	72	64
8	36	30	16
9	33	26	25

柱穴番号	梁行柱間(m)	柱穴番号	桁行柱間(m)
1－6	3.44	1－2	1.58
4－5	1.74	2－3	1.56
5－9	1.64	3－4	1.64
		6－7	1.2
		7－8	1.9
		8－9	1.5



第 65 図　掘立柱建物跡 5-1

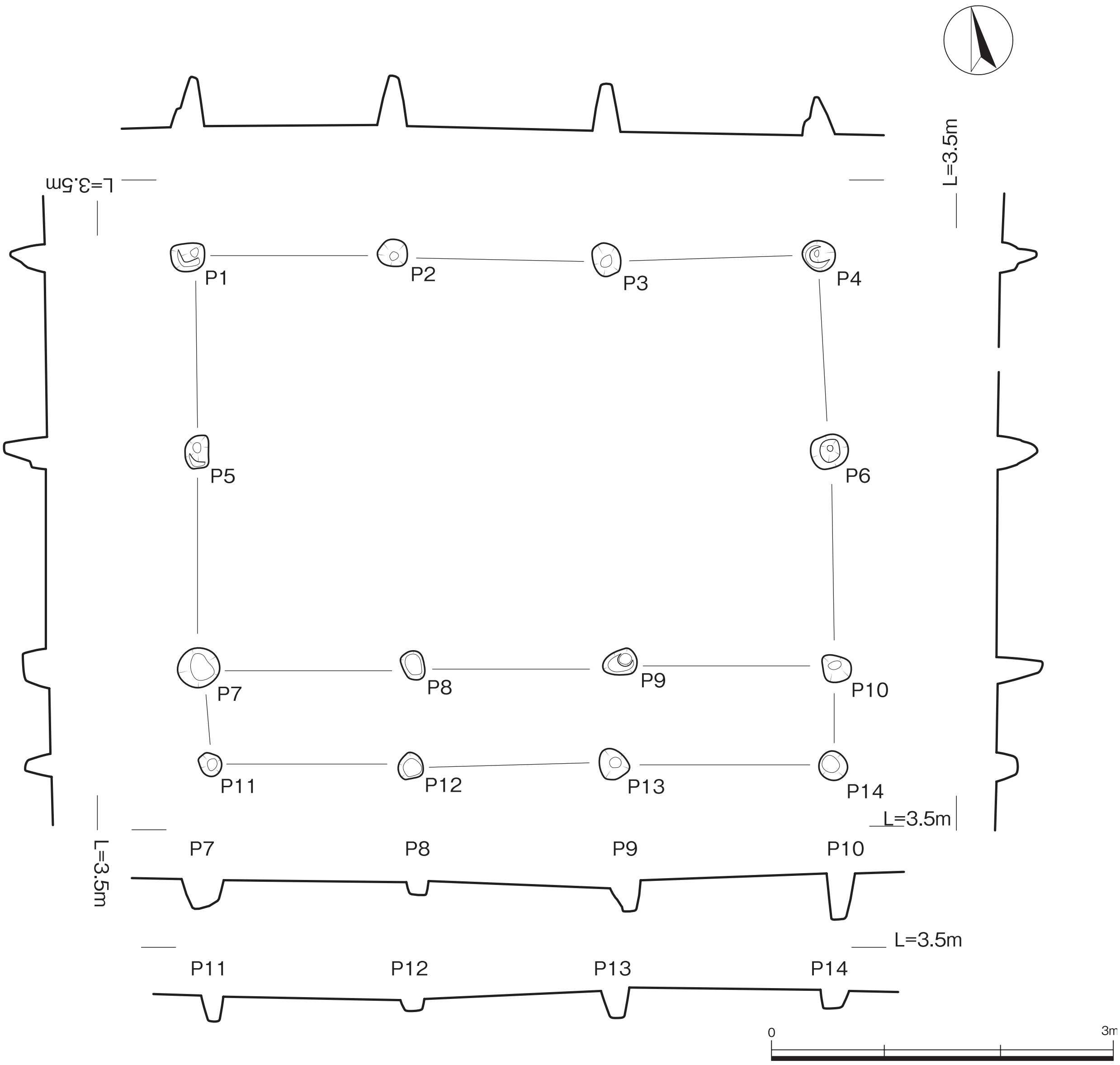


第66図　掘立柱建物跡5-2

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
2 - 3	4.1	1 - 5	2.1
6 - 7	1.97	5 - 10	1.95
7 - 8	2.1	10 - 14	2.05
15 - 16	2.05	14 - 19	2.05
16 - 17	2.15	19 - 23	2.05
20 - 21	2.05	2 - 6	2.15
24 - 25	2.2	6 - 11	2.05
25 - 26	2.05	11 - 15	2
柱穴番号	庇柱間 (m)	15 - 20	2.15
		20 - 24	1.95
1 - 2	0.95	3 - 8	2.1
3 - 4	1.1	8 - 12	2.1
23 - 24	0.9	12 - 17	2.05
26 - 27	1.15	17 - 26	4.05
		4 - 9	2
		9 - 13	2.3
		13 - 18	1.95
		18 - 22	2.2
		22 - 27	1.9

掘立柱建物跡5

柱穴番号	柱穴（cm）			柱穴番号	柱穴（cm）			柱穴番号	柱穴（cm）		
	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ		長径	短径	深さ
1	50	35	23	10	44	32	30	19	37	30	20
2	35	26	27	11	40	35	50	20	50	35	55
3	35	30	15	12	64	46	70	21	57	46	20
4	32	30	15	13	40	33	32	22	35	33	15
5	40	30	35	14	35	30	32	23	33	28	50
6	70	35	50	15	35	30	50	24	50	40	40
7	35	25	35	16	40	30	24	25	42	35	35
8	32	28	30	17	40	35	55	26	40	30	45
9	35	30	17	18	36	35	20	27	25	20	20



第67図　掘立柱建物跡６

掘立柱建物跡６

柱穴番号	柱穴（cm）		
	長径	短径	深さ
1	30	25	42
2	27	25	45
3	30	25	40
4	30	30	32
5	30	25	36
6	35	30	35
7	40	35	25
8	25	21	15
9	30	25	25
10	25	25	40
11	23	23	20
12	25	23	15
13	38	27	25
14	27	25	18

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1－5	1.7	3－4	1.87
5－7	1.9	2－3	1.87
4－6	1.7	1－2	1.75
6－10	1.9	11－12	1.75
平均値	1.8	12－13	1.75
柱穴番号	庇柱間 (m)	13－14	1.9
		7－8	1.9
7－11	0.85	8－9	1.85
10－14	0.9	9－10	1.85

掘立柱建物跡６(第67図)

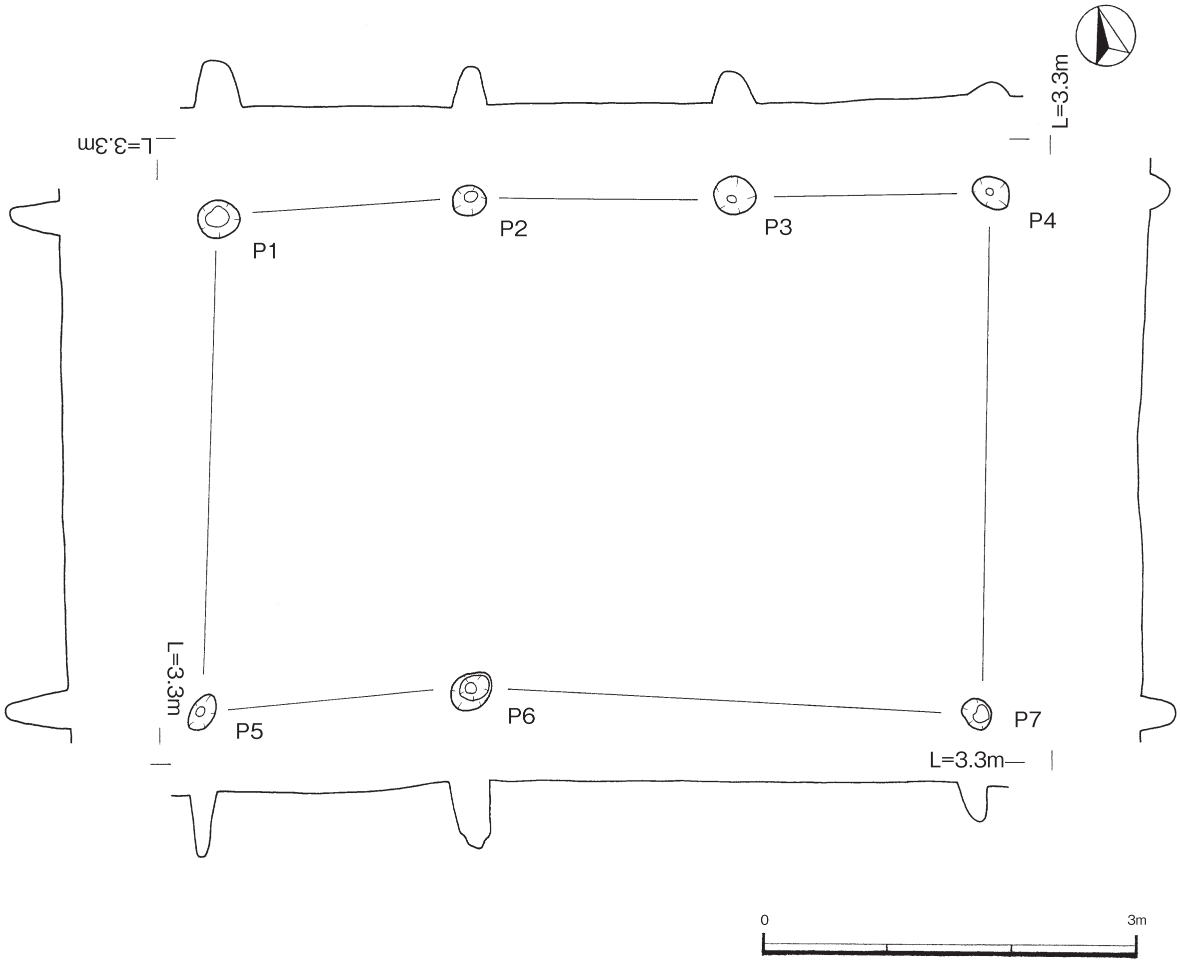
Ｄ・Ｅ－10区，Ⅴ層上面で検出した。南側に庇をもつ３×３間の建物跡である。ピット８から布目瓦（146）が出土している。

掘立柱建物跡７(第68図)

Ｅ・Ｆ－21・22区，Ⅴ層上面で検出した。１×３間の建物跡である。

〈タイプ２〉

掘立柱建物跡８～14は自然堤防の際に位置し,ピットの埋土は砂混じりで下層は水成堆積になっていた。

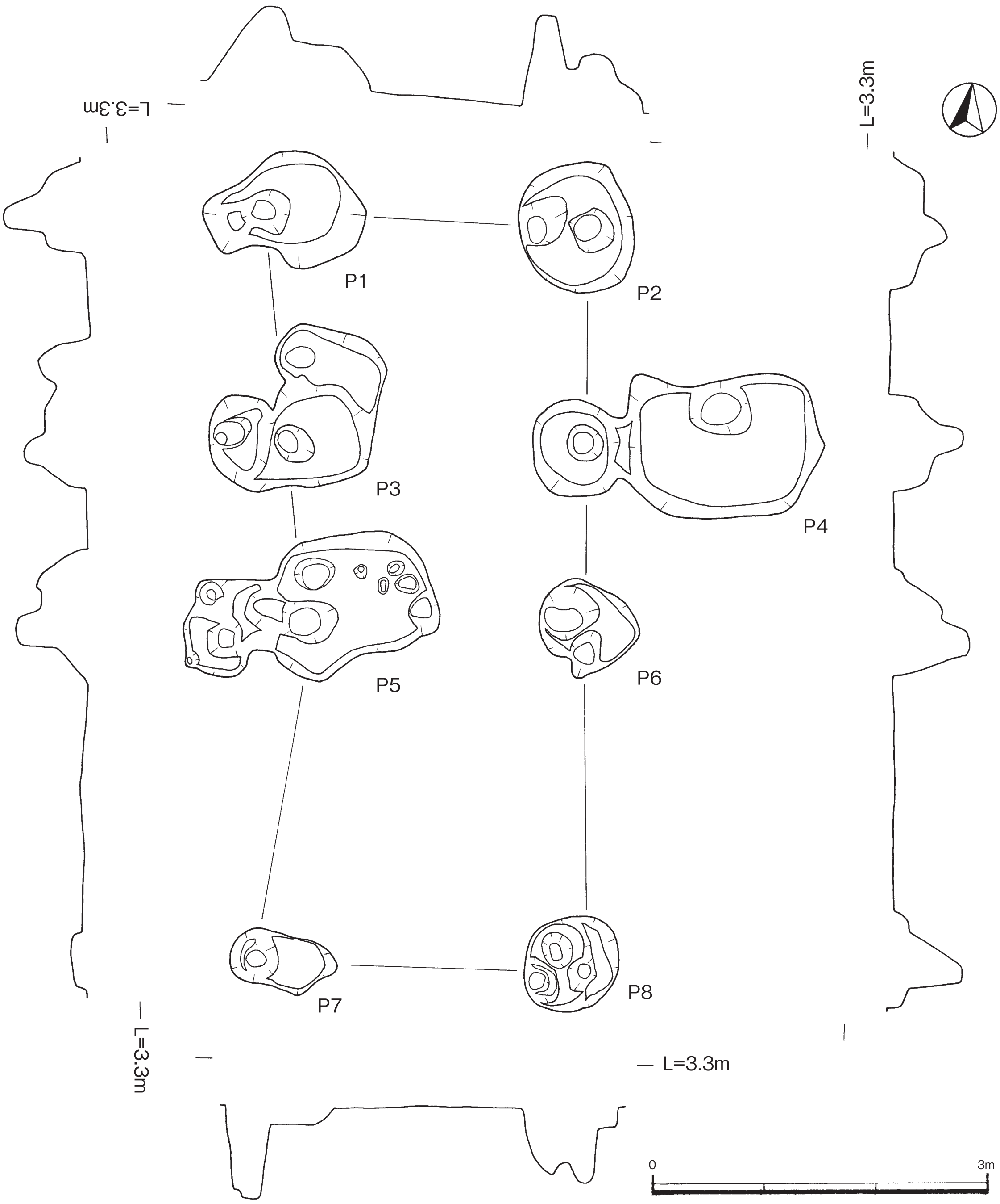


第68図　掘立柱建物跡７

掘立柱建物跡７

柱穴番号	柱穴（cm）		
	長径	短径	深さ
1	35	32	36
2	28	26	30
3	35	32	25
4	30	27	10
5	30	19	50
6	36	32	53
7	26	20	29

柱穴番号	梁行柱間(m)	柱穴番号	桁行柱間(m)
1－5	3.9	1－2	2.05
4－7	4.15	2－3	2.05
		3－4	2.05
		5－6	2.15
		6－7	4.05



第69図　掘立柱建物跡８

掘立柱建物跡８

柱穴番号	柱穴（cm）		
	長径	短径	深さ
1	146	66	72
2	112	100	50
3	156	148	68
4	254	80	66
5	224	116	69
6	90	62	70
7	94	48	16
8	82	78	70

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1－2	2.9	1－3	2.06
7－8	2.95	3－5	1.6
		5－7	3
		2－4	1.9
		4－6	1.88
		6－8	2.8

掘立柱建物跡８(第69図)

Ｆ－７区，Ｖ層上面で検出した。ピット１で薩摩焼の土瓶（147）が出土している。

掘立柱建物跡９(第70図)

Ｆ－７区,Ｖ層上面で検出した。ピット２で薩摩焼苗代川系と思われる蓋(148)が出土している。

掘立柱建物跡 10(第71図)

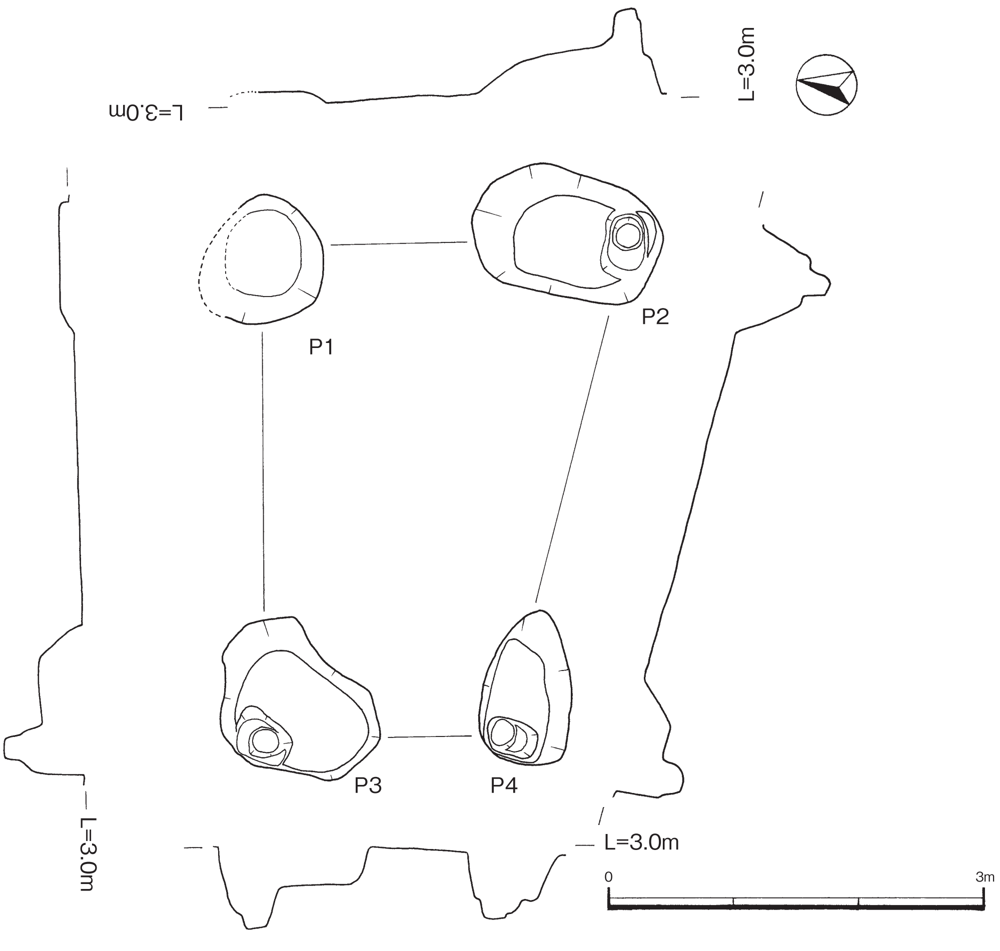
Ｆ－７区，Ｖ層上面で検出した。１×２間の建物跡である。

掘立柱建物跡 11(第72図)

Ｅ－６・７区，Ｖ層上面で検出した。１×２間の建物跡である。ピット５から16世紀代と思われる青花の皿（149）が出土した。

掘立柱建物跡 12(第73・74図)

Ｄ～Ｆ－８区，Ｖ層上面で検出した。４×１間の建物の横に１×２間の建物が付随する。



第70図　掘立柱建物跡９

掘立柱建物跡９

柱穴番号	柱穴（cm）		
	長径	短径	深さ
1	100	(60)	12
2	158	84	70
3	120	100	65
4	120	68	52

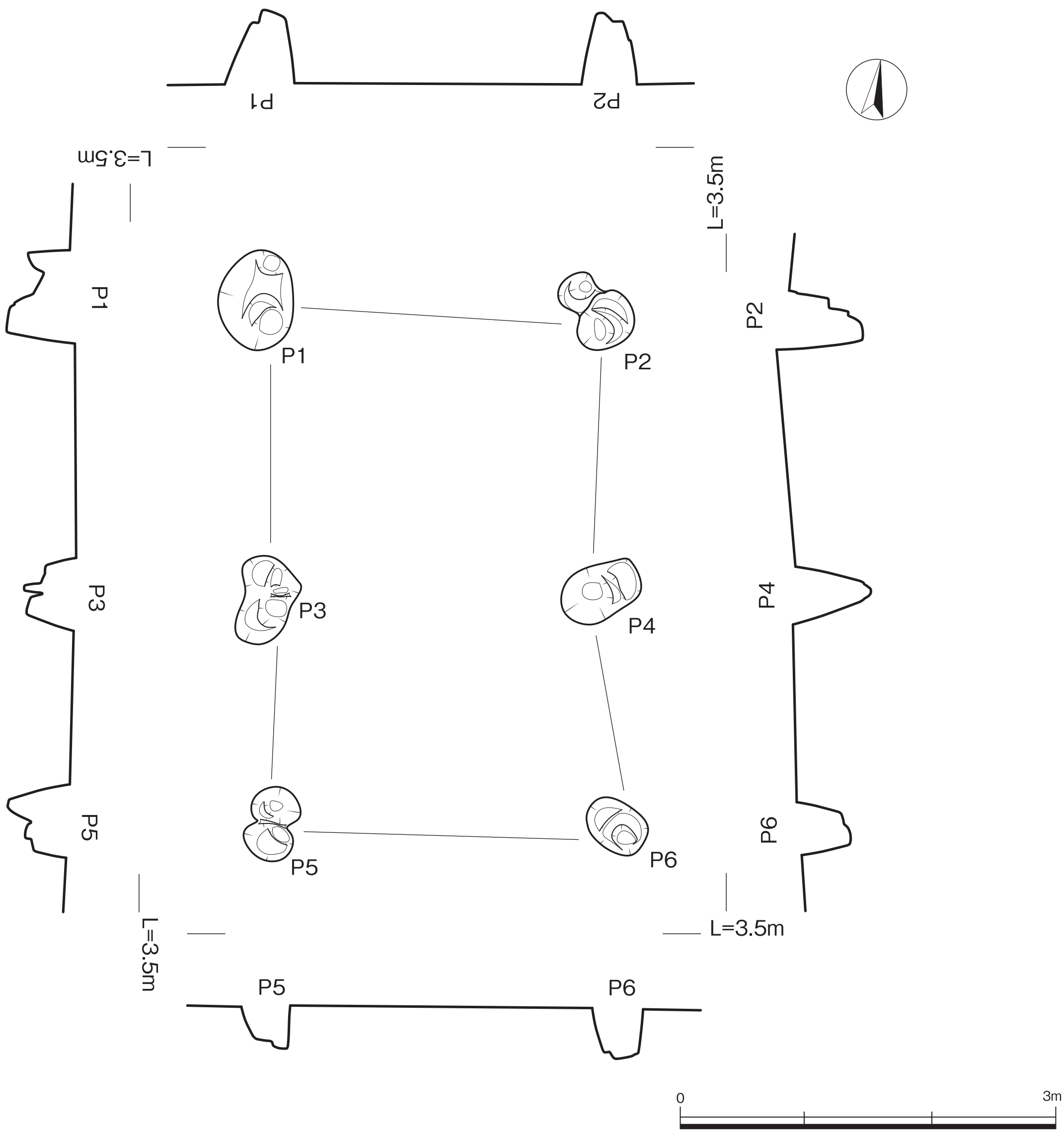
柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1 - 2	2.9	1 - 3	3.9
3 - 4	1.83	2 - 4	4.05

掘立柱建物跡 13(第 75 図)

E・F－9・10 区，Ⅴ層上面で検出した。3×4間の建物跡である。

掘立柱建物跡 14(第 76 図)

C・D－10・11 区，Ⅴ層上面で検出した。

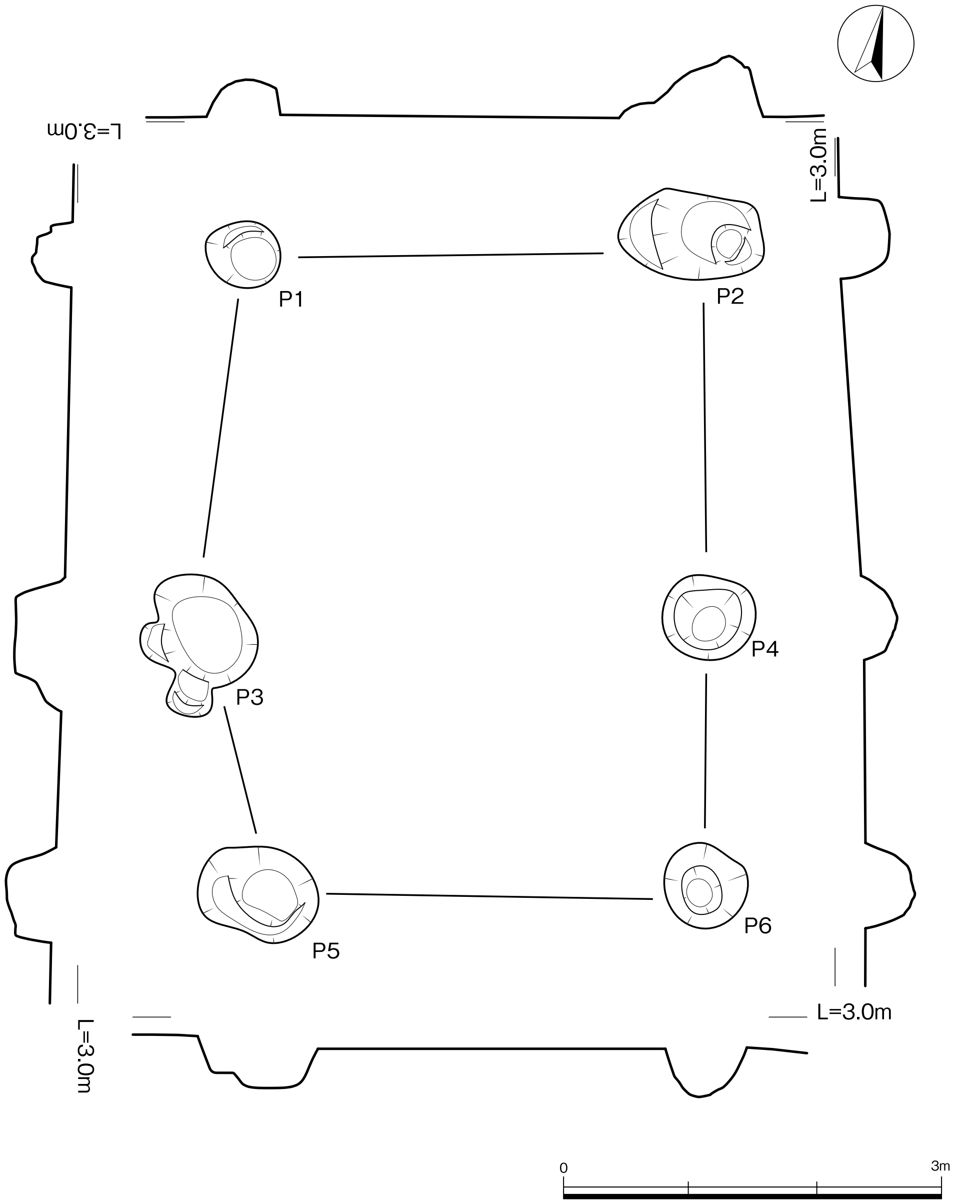


第 71 図　掘立柱建物跡 10

掘立柱建物跡 10

柱穴番号	柱穴（cm）		
	長径	短径	深さ
1	80	60	60
2	50	45	65
3	75	40	40
4	65	45	63
5	65	25	48
6	55	40	40

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1－2	2.6	1－3	2.3
5－6	3.05	2－4	2.25
		3－5	1.7
		4－6	2

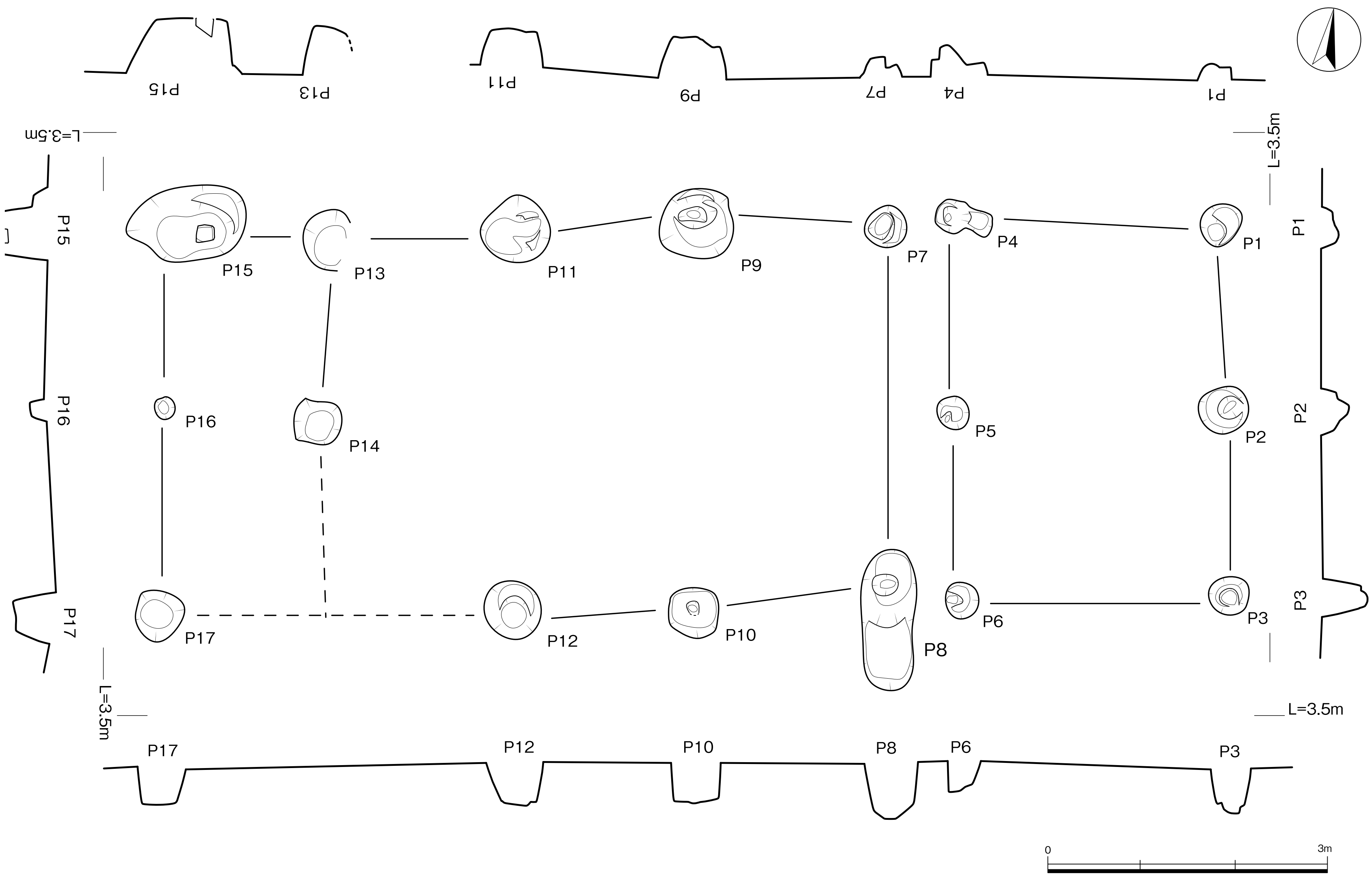


第 72 図　掘立柱建物跡 11

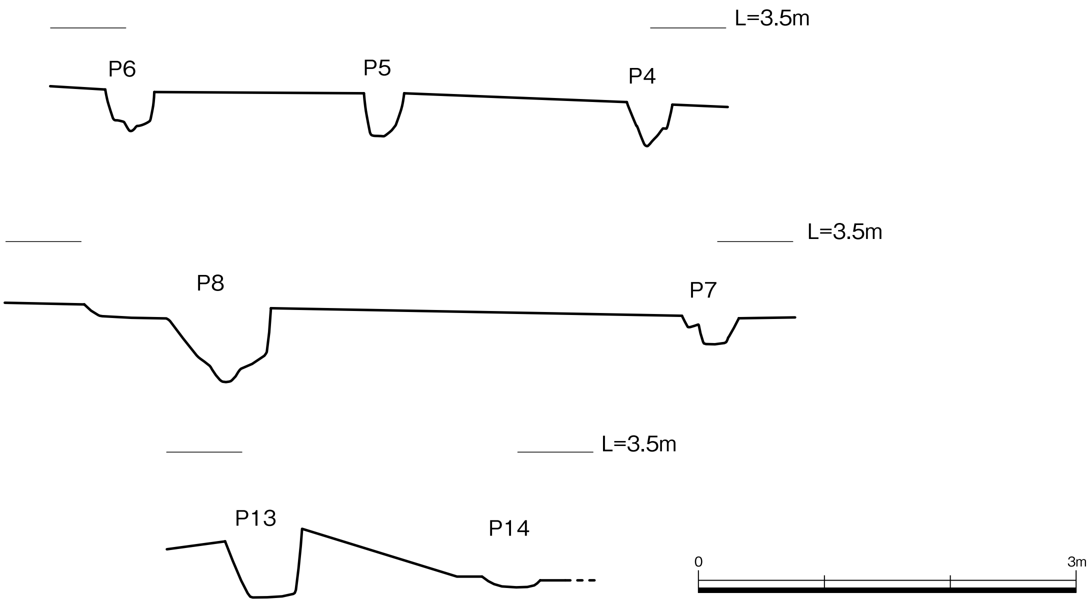
掘立柱建物跡 11

柱穴番号	柱穴　(cm)		
	長径	短径	深さ
1	60	55	35
2	115	60	50
3	110	75	40
4	75	65	30
5	95	70	40
6	70	65	40

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1 - 2	3.75	2 - 4	3
5 - 6	3.45	4 - 6	2.15
		1 - 3	3
		3 - 5	2.1



第 73 図　掘立柱建物跡 12-1



第 74 図　掘立柱建物跡 12-2

掘立柱建物跡 12

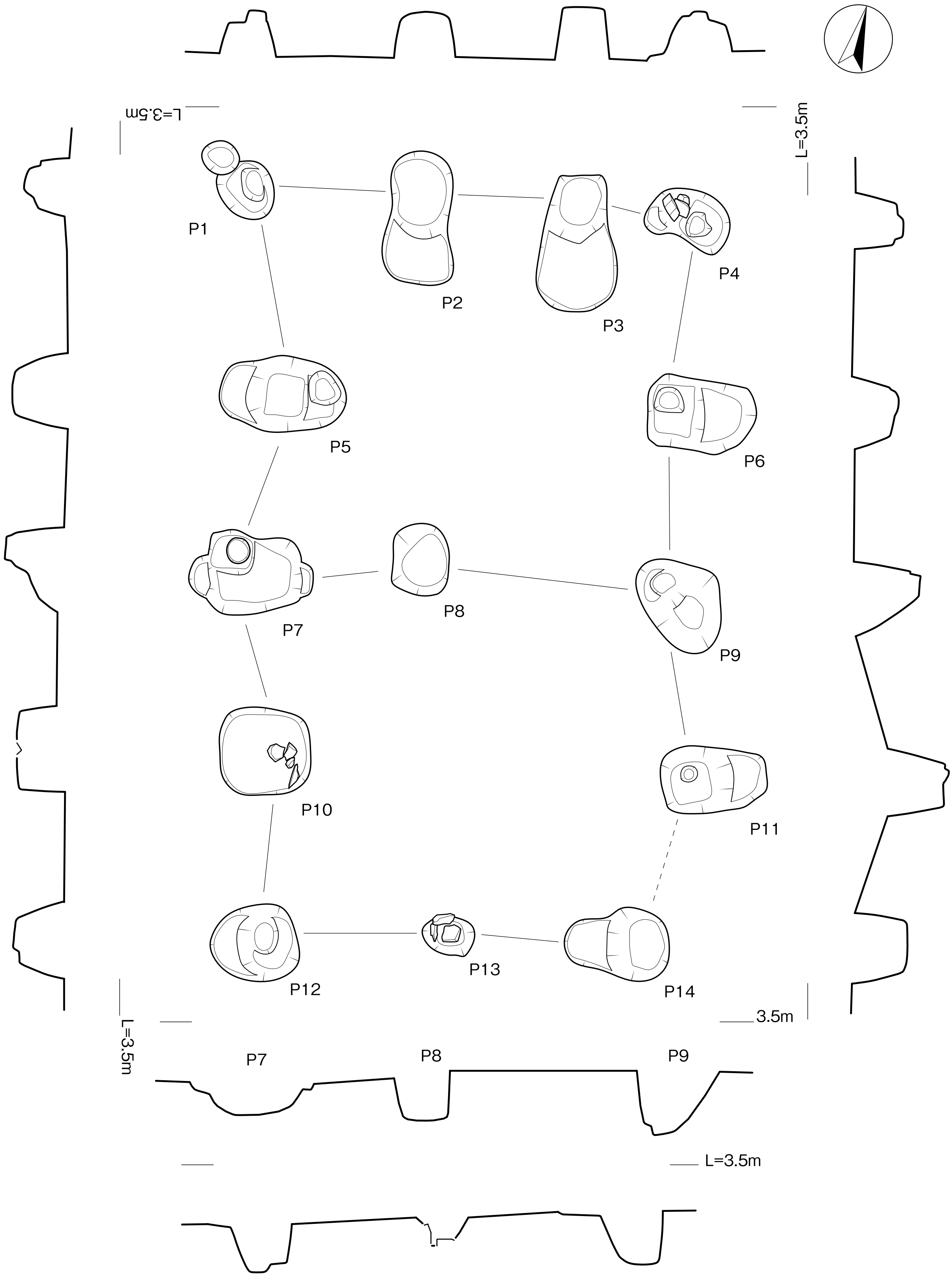
柱穴番号	柱穴　(cm)		
	長径	短径	深さ
1	50	40	20
2	55	50	30
3	45	45	50
4	65	35	35
5	35	35	35
6	40	36	35
7	50	45	25
8	150	55	60
9	85	75	45
10	60	55	45
11	75	65	40
12	65	56	50
13	(65)	(60)	55
14	55	46	10
15	125	75	60
16	25	23	20
17	55	50	45

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
15 - 16	1.95	1 - 4	2.9
16 - 17	2.25	7 - 9	2.05
13 - 14	1.95	9 - 11	2
7 - 8	3.85	11 - 13	1.95
5 - 6	1.95	13 - 15	1.8
4 - 5	2.1	10 - 12	1.95
2 - 3	2.05	8 - 10	2.1
1 - 2	1.9	3 - 6	3
		12 - 17	3.8

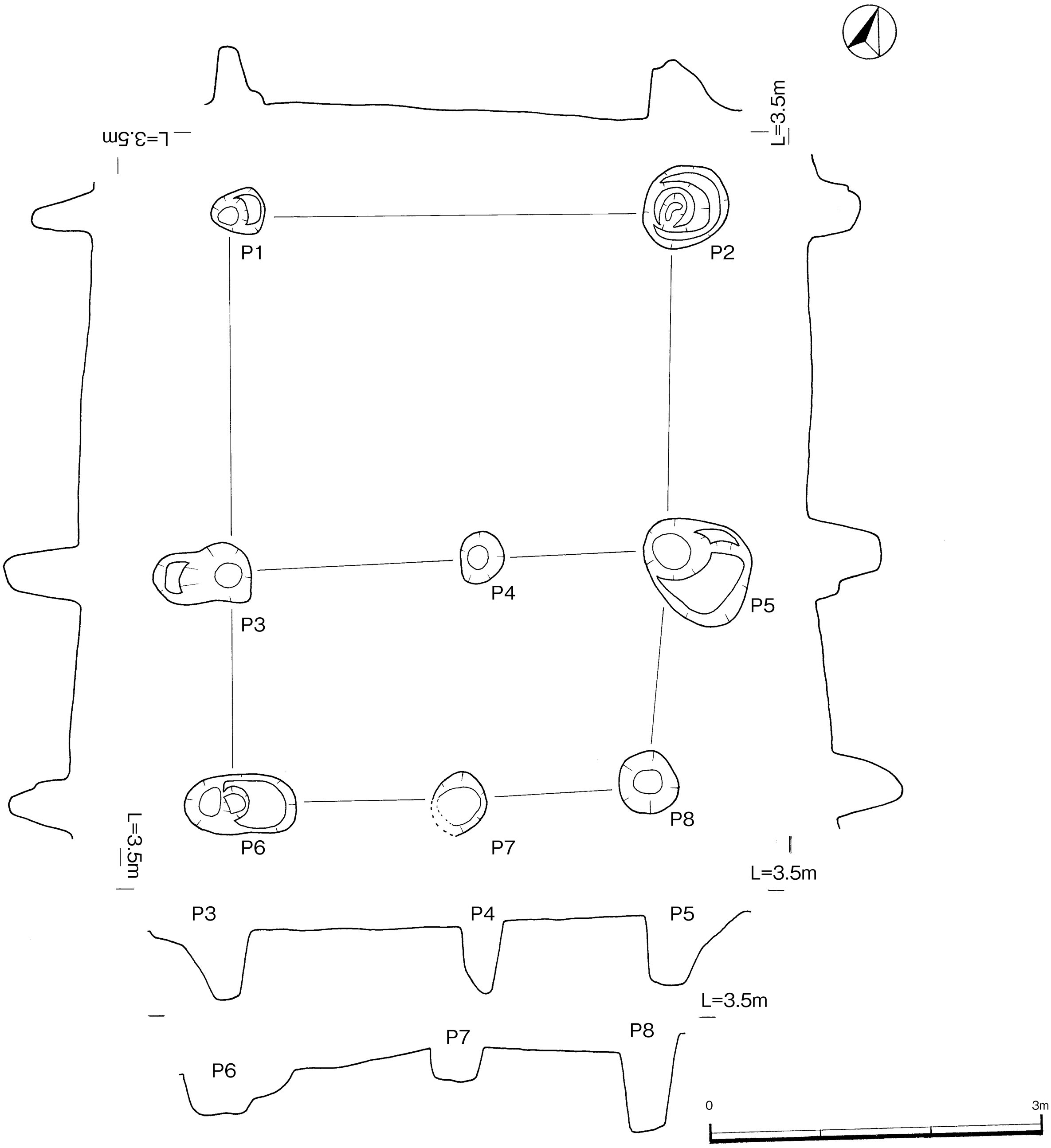
掘立柱建物跡 13

柱穴番号	柱穴　(cm)		
	長径	短径	深さ
1	65	57	50
2	141	65	50
3	145	60	55
4	90	55	50
5	135	80	60
6	115	80	50
7	100	85	60
8	80	60	50
9	110	60	70
10	110	95	50
11	113	70	65
12	90	85	55
13	55	45	30
14	110	75	57

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1 - 2	1.8	1 - 5	2.3
2 - 3	1.7	4 - 6	1.9
3 - 4	1.25	5 - 7	1.75
7 - 8	2.0	6 - 9	1.95
8 - 9	2.55	7 - 10	2.05
12 - 13	2	9 - 11	2.05
13 - 14	2.1	10 - 12	2



第 75 図　掘立柱建物跡 13



第 76 図　掘立柱建物跡 14

掘立柱建物跡 14

柱穴番号	柱穴　(cm)		
	長径	短径	深さ
1	48	35	54
2	82	68	55
3	88	46	68
4	47	40	66
5	110	60	65
6	100	52	54
7	58	44	33
8	56	50	88

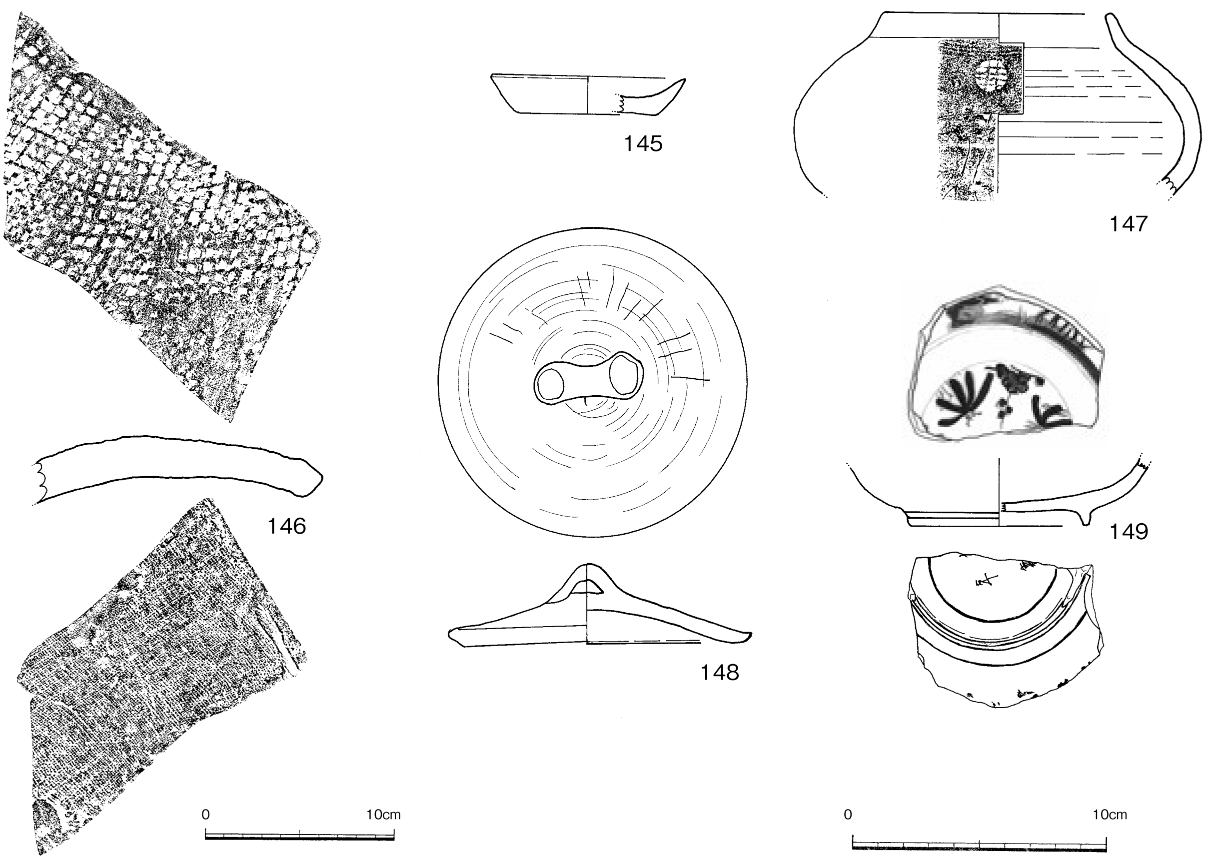
柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1 - 2	4	1 - 3	3.2
3 - 4	2.2	3 - 6	2.04
4 - 5	1.7	2 - 5	3.04
6 - 7	2	5 - 8	2.1
7 - 8	1.7		

掘立柱建物跡出土遺物（第 77 図）

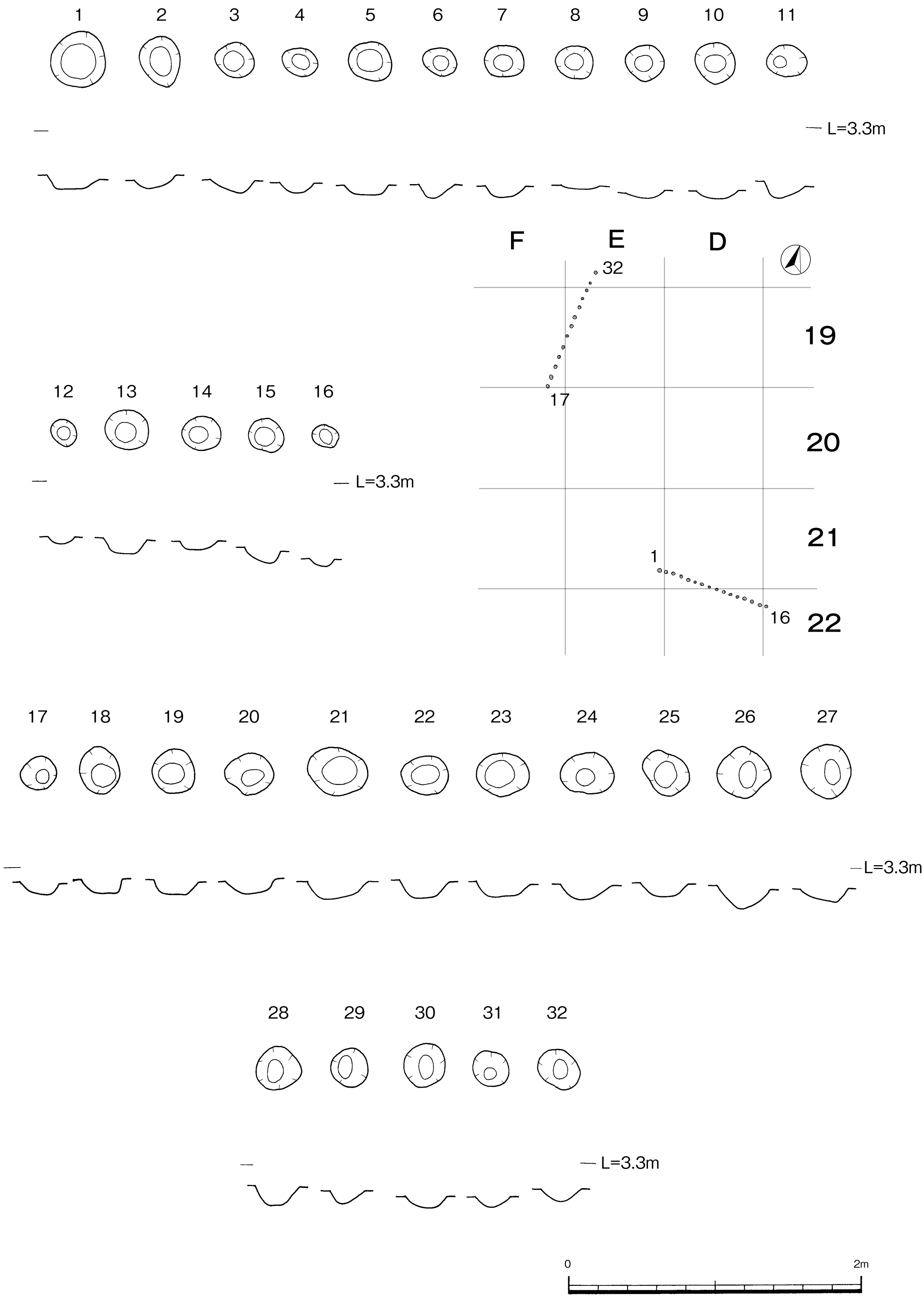
145 は土師器の小皿である。底部は糸切りで，口径 7.8cm，底径 5.5cm，器高は 1.5cmである。146 は布目瓦である。薩摩国分寺に使用されていた瓦と類似している。表面は格子目叩きの後，一部を指でナデて調整している。大きく焼き歪んでおり，実際に瓦として使用されたものではなく，船のバラストなどとして使われたものであると考えられる。147 は，いわゆる筋土瓶と呼ばれるものである。口縁部は内傾しながら立ち上り，口唇部は細くなっている。肩部に格子目のスタンプが施されている。148 は，薩摩焼苗代川系の蓋である。リボン状のつまみが付き，内面はドーム形にふくらみ，口唇部はやや外側に反る。149 は青花の皿である。内面には花文が描かれ，高台内面にはおそらく「大明年製」と思われる文字が書かれている。畳付は釉剥ぎしてある。

柵列状遺構 (第 78 図)

Ｅ・Ｆ－ 18・19 区，Ｖ層上面で１条，Ｃ～Ｅ－ 21・22 区，Ｖ層上面で１条，それぞれ 16 基の柱穴が並んで検出された。いずれも埋土はＩａ層である。それぞれを南，西方向へ延長していくとＦ－ 21 区で直行する。上部が削平されているためか，全体的に深さが６～ 10cm程度と浅い。溝状遺構３と切り合っており,柵列状遺構のほうが新しい。建物などの囲いの柵であると考えられるが,柵列状遺構に囲まれた部分において，建物跡は確認されなかった。

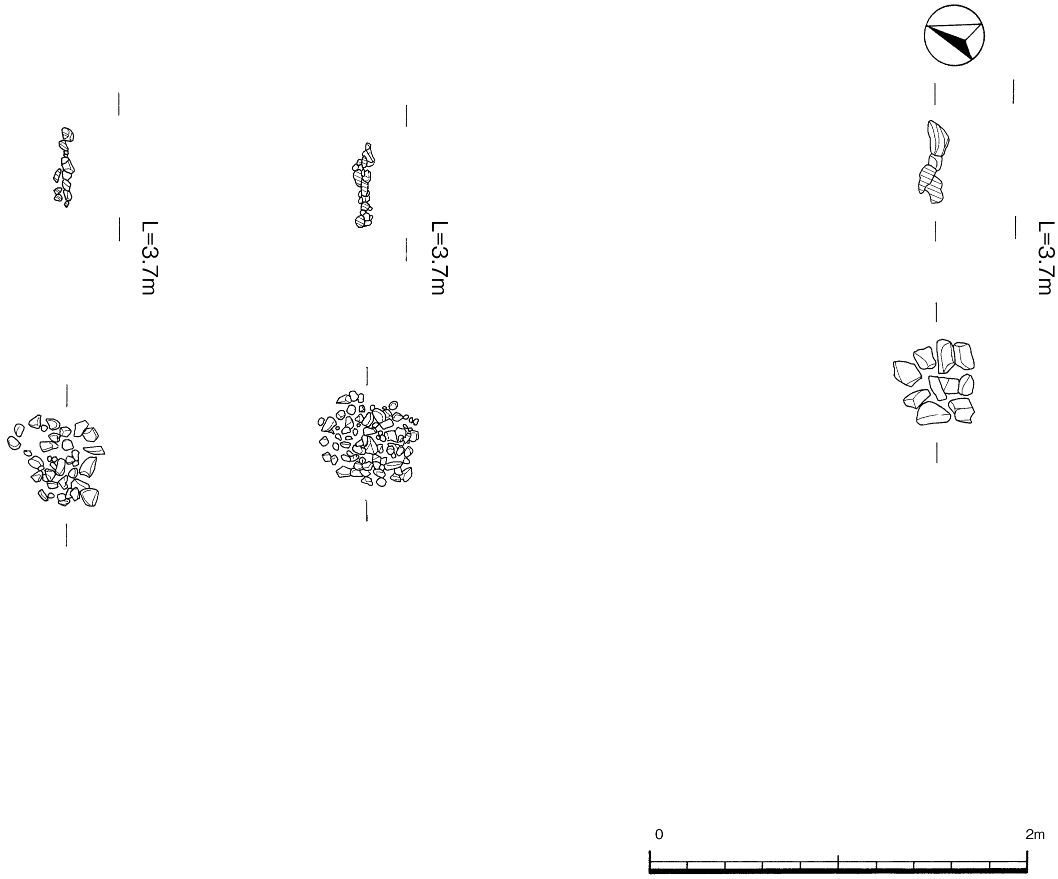


第 77 図　掘立柱建物跡内出土遺物


1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11
L=3.3m
F E D
32
19
17
20
21
1
16
22
12 13 14 15 16
L=3.3m
17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27
L=3.3m
28 29 30 31 32
L=3.3m
0
2m

第78図　柵列状遺構

第79図　布基礎1



第 80 図　布基礎２

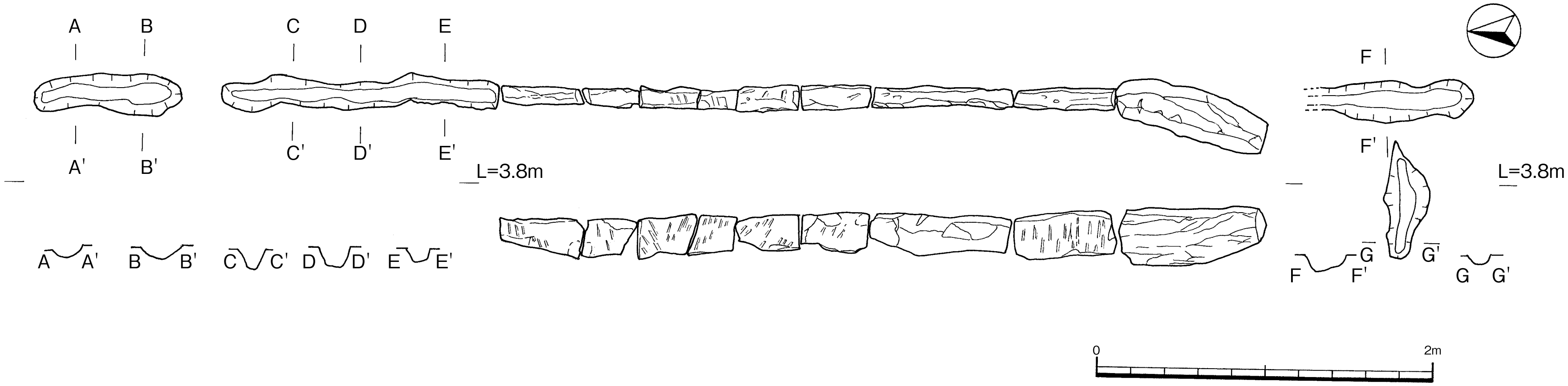
布基礎 (第 79・80 図)

Ｆ・Ｇ－３・4 区において検出された。列状と円形の基礎である。どちらも掘り込みは確認できなかった。列状のものは，東西方向と南北方向の２方向に向かい，円形の基礎と対応していると思われる。列状の基礎を構成している石は人頭大のもので，川原にある石のように角がとれている。円形の基礎を構成している石は小さめの川原石であるが，Ｆ－４区で検出された円形の基礎は列状の基礎と同様の大きさの石で構成されていた。どちらの基礎も平面的に構築されており，深さはない。円形の基礎間は，1.2 ｍ～ 1.8 ｍである。列状の基礎と円形の基礎は近接しすぎている部分があり，軸が揃わないので，異なる時期の建物跡である可能性も考えられる。

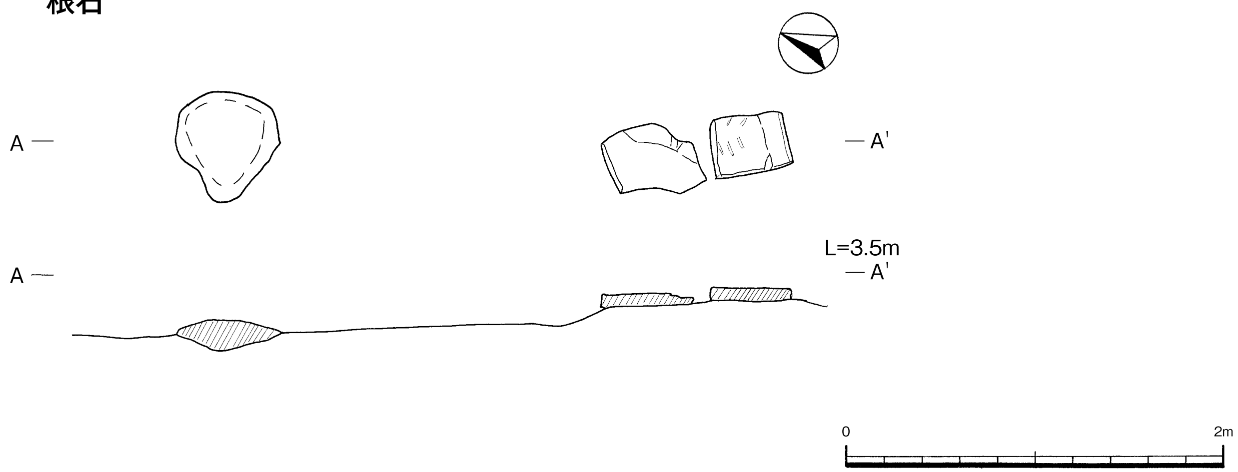
石列 (第 81 図)

Ｃ・Ｄ－２区，Ⅰａ層中で検出した。東西方向に延びる，二本の間の幅が約 65㎝の石列である。鑿で加工された熔結凝灰岩で構成されている。石列を抜き取ったと思われる掘り込みを，石列の続きで検出した。

石組み



根石



第８１図　石組み・根石

根石 (第 81 図)

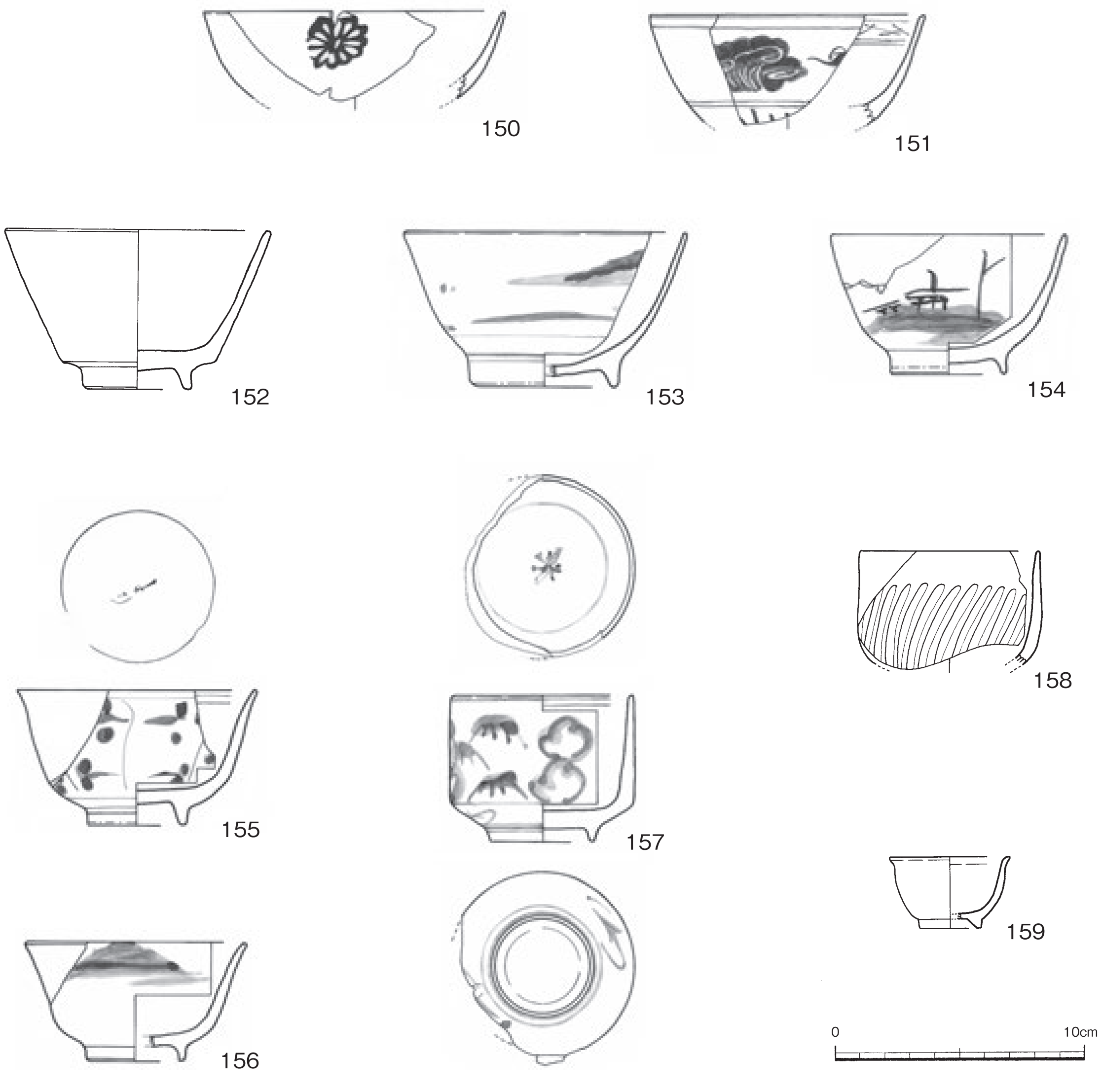
Ｅ－２区，Ｉａ層中において検出した。南北方向で，厚さ 10 ～ 20cmほどの平らな石が三枚並んで検出された。建物の基礎の根石として使用されていたものであると考えられる。

石垣

Ｉａ層掘り下げ途中の，Ｄ・Ｅ－ 13 区で検出された。人頭大ほどの大きさの石を組み合わせた石垣で，遺物は石と石の間に挟まった状態で出土した。残存していた長さは，約 8.4 m，幅約 50cm，うらごめを含めた幅は約 1.5 m，高さは約 60cmである。現在においても遺跡周辺の家屋と道路の境には同様の石垣が存在する。また，出土した遺物が 18 世紀代～ 19 世紀代のものであることから，この遺構が 18 世紀後半以降に築かれていることがわかる。

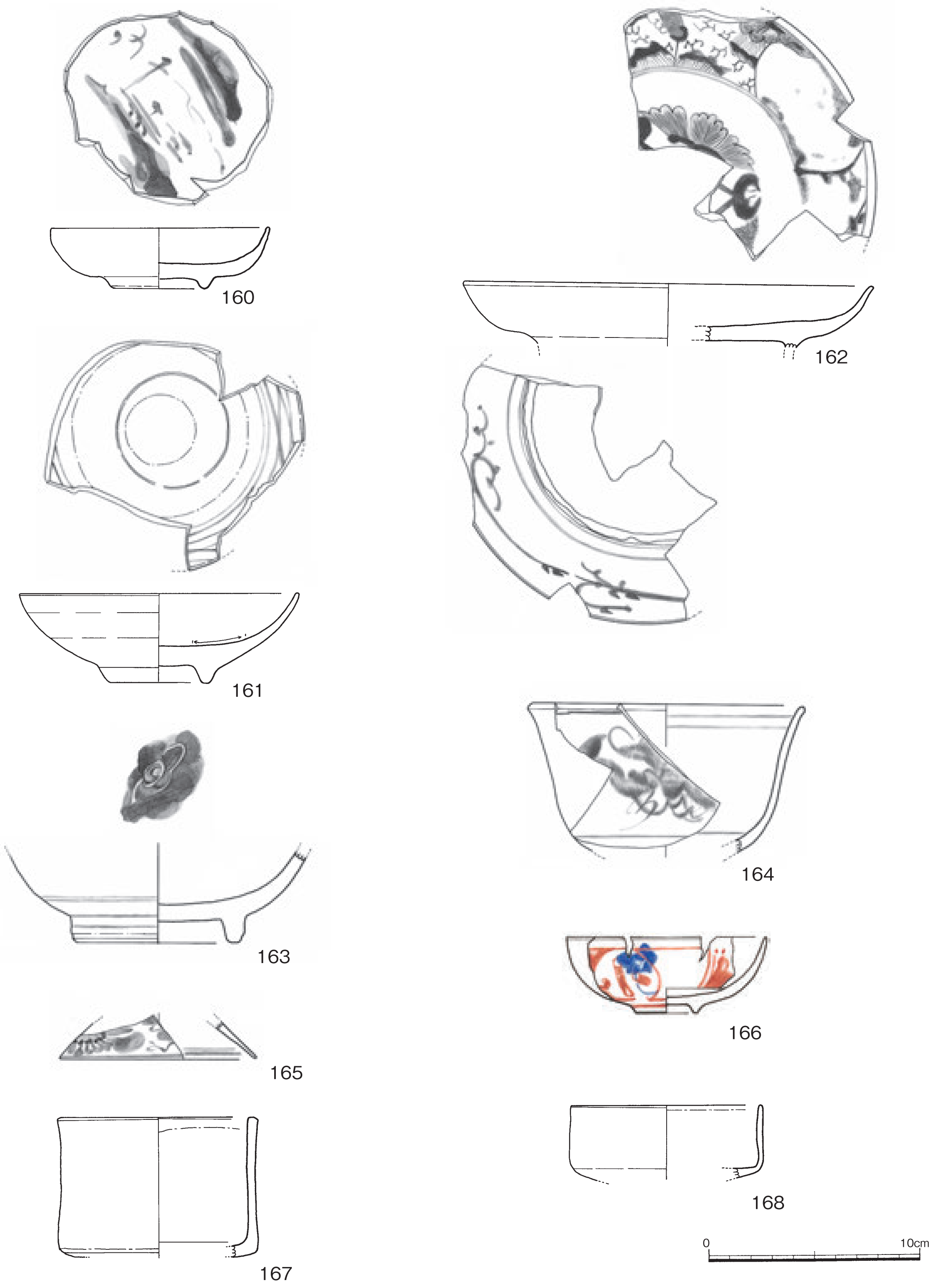
石垣出土遺物 (第 82 ～ 84 図)

150・151 は丸碗である。150 は外面にコンニャク印判で菊文が押される。151 は，濃による文様が描かれる。内面は四方襷文である。152 は朝顔形の白磁である。153・154 は広東碗であるが，一般的な広東碗に比べて高台が短く，外側に開いている。どちらも外面に山水文が描かれる。



第 82 図　石垣内出土遺物 1

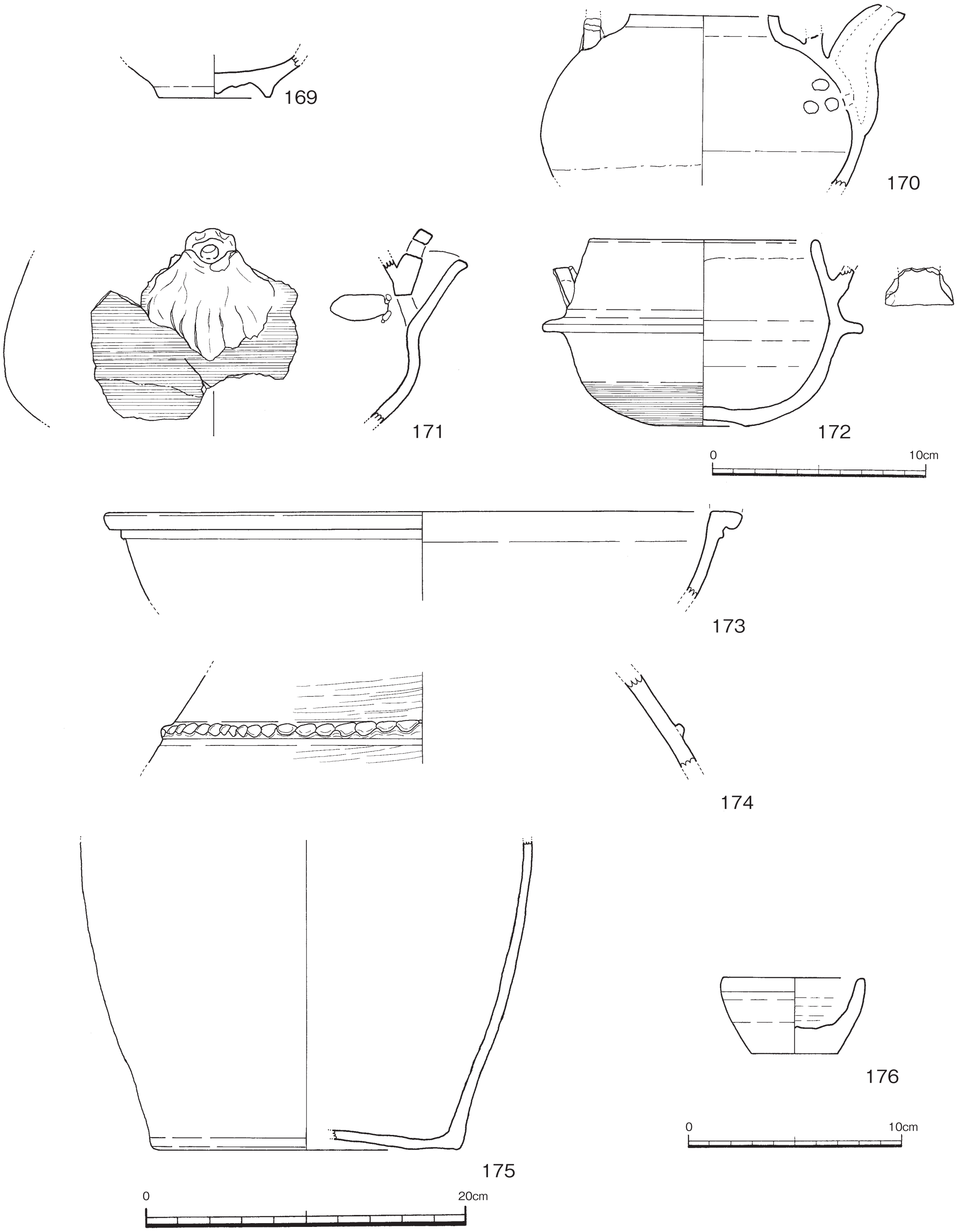
154は胴部下半がやや丸みを帯びて立ち上がる。155は端反碗である。外面には省略された四弁花文が描かれる。156は小形の端反碗である。高台径が小さく，口径は大きい。外面に山水文が描かれる。肥前系であると思われる。157は筒形碗である。外面には雪持笹文，見込みには虫文が描かれる。体部には別の製品の破片が熔着している。158は半筒形の小碗である。外面には，斜位の縞文を施す。体部から口縁部は直線的に立ち上がる。159は小坏である。口縁部が短く外反する。在



第83図　石垣内出土遺物２

地系であると思われる。

160 は在地系の小皿である。見込みには山水文が描かれており，高台は分厚く短い。161 は中皿である。全体的に厚手である。見込みは蛇ノ目釉剥ぎされている。162 は在地系の大皿である。二次的な被熱を受けたと思われ，内面は黒く変色している。口縁部は短く外反する。18 世紀後半に相当すると考えられる。高台は意図的に打ち欠かれたような痕があり，加工して二次利用しようとしたものと思われる。163・164 は鉢である。163 は大形で厚手の鉢で，見込みに濃による文様が施される。164 は体部が口縁部に向かってゆるやかに開き，口縁部は短く外反する。165 は端反碗の



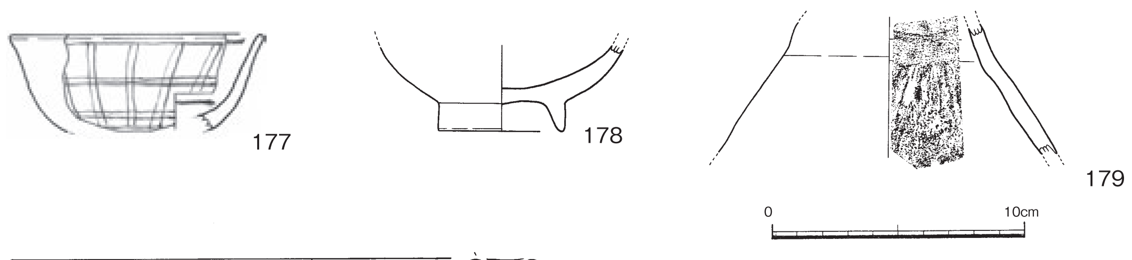
第 84 図　石垣内出土遺物 3

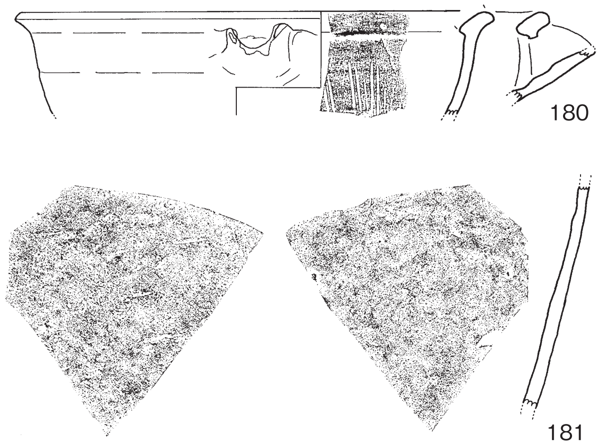
蓋であるが，やや小振りのものである。外面には芙蓉が描かれる。166 は色絵の小碗である。体部は丸みをおびるが，やや浅い。高台は低く，口縁径に比べて高台径が小さい。染付の花文の上に，赤い窓絵が描かれる。167 は白磁の火入れである。口縁部内面まで釉がかかり，内面は無釉である。168 は髪盥であると思われる。口唇部は釉が剥いである。

169 は薩摩焼の苗代川系の碗である。畳付は釉を剥いであり，高台内底面は巴状に削られている。170 は薩摩焼の土瓶である。器形は胴部がやや下垂した丸形である。内外面に褐釉がかけられているが，口唇部は釉が剥いであり，他の製品を重ね焼きした痕が看取できる。171 は鍋である。外面にはヘラ状工具による横筋が観察される。172 は羽釜である。底部には，円形の台に据えて使用したと思われる，筋状に黒く変色した部分があり，比熱した箇所は赤変している。産地は薩摩焼苗代川系である。173 は薩摩焼苗代川系の鉢である。口縁部断面はＬ字状を呈し，口唇部は釉が拭き取られて無釉となっている。174 は，いわゆる半胴甕と呼ばれる肥前の大甕の胴部である。胎土はマーブル状を呈し，内外面とも鉄釉がかけられている。175 は甕の胴部〜底部である。底部および底部内面に，貝目が看取できる。176 は磁製のチャツである。底部にはアルミナが付着している。近世以降のものであると思われる。

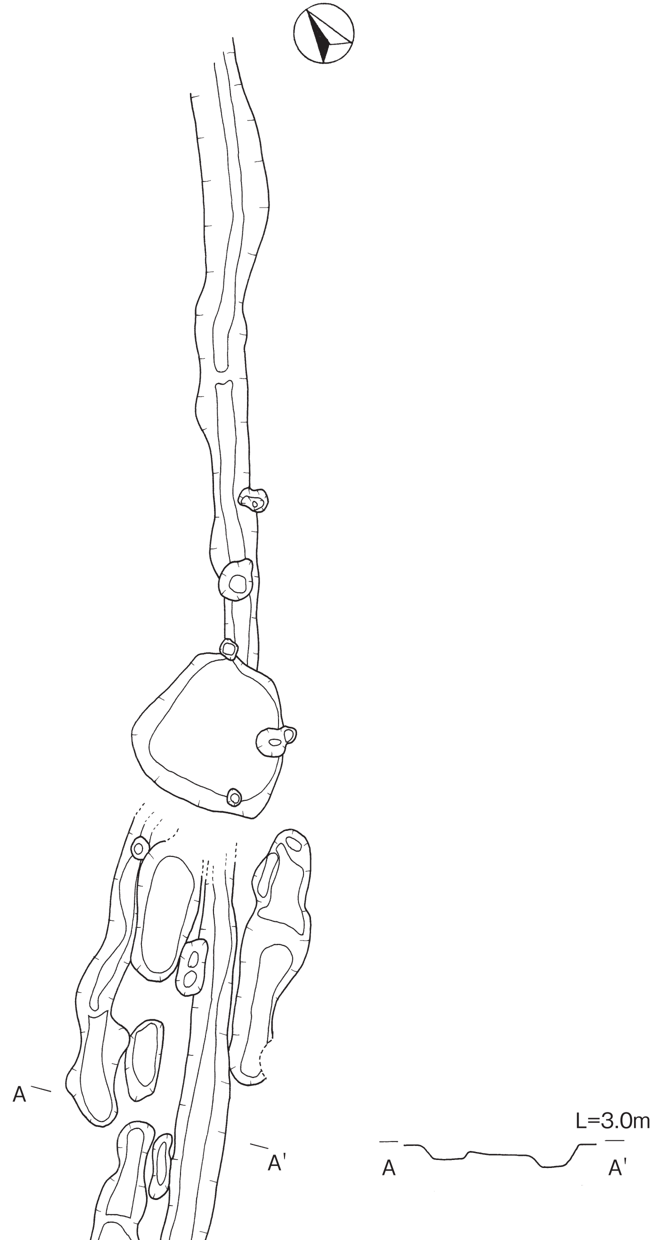
石組み遺構

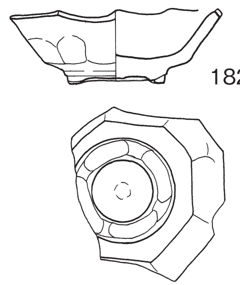
Ｆ・Ｇ − 14・15 区で検出された。全て繋がっているわけではないが，石が並ぶ方向などから，同一の遺構であると考えられる。Ｄ・Ｅ − 13 区で検出された石垣とは異なり，石を積み上げげたものではなく，石を平面的に並べて配置してある。



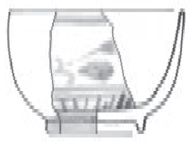


第 85 図　石組み遺構内出土遺物

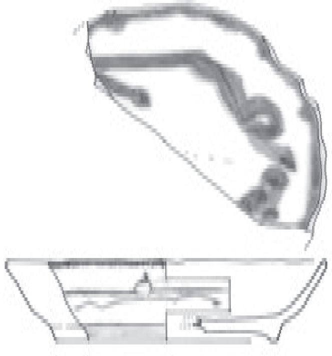


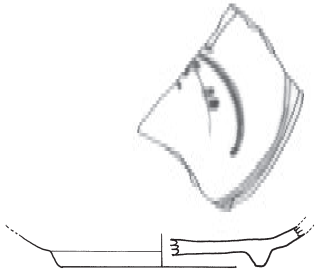

182


183

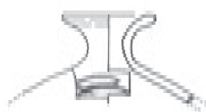

185

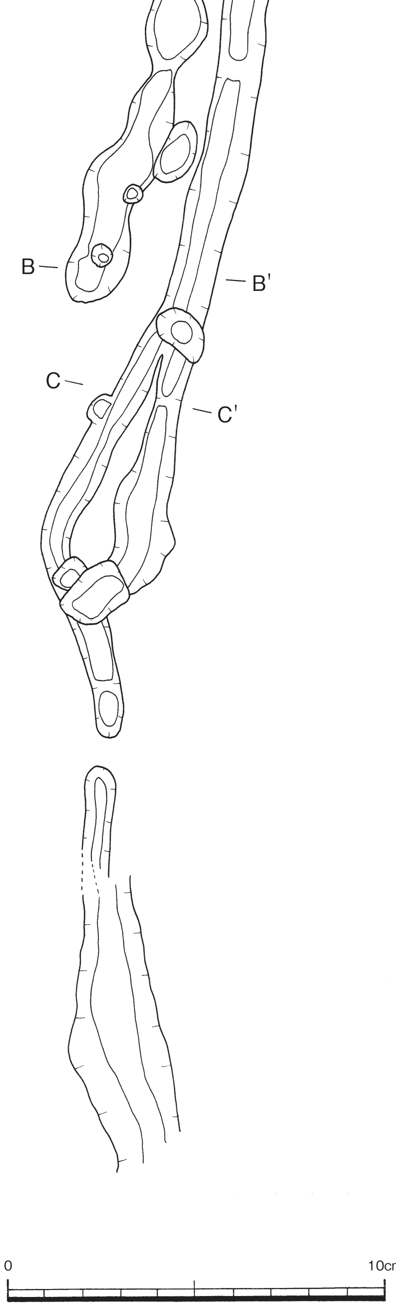

184

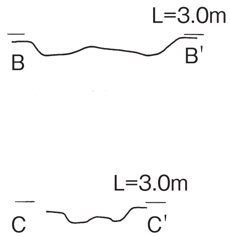

186

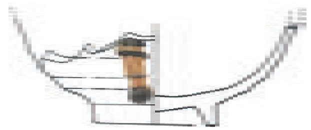

187


188

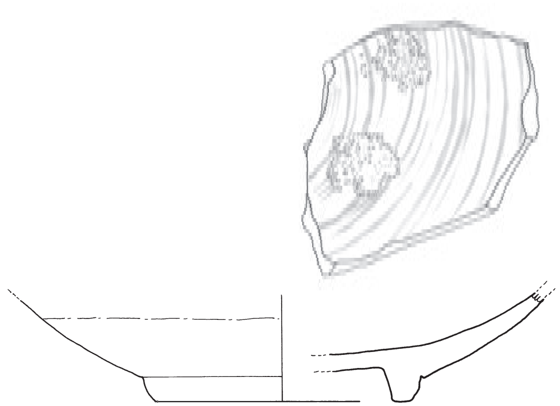

189





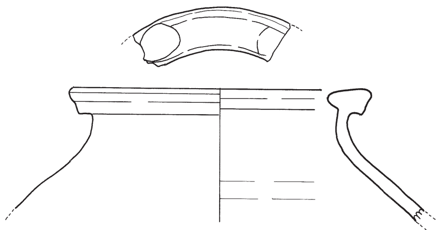


190

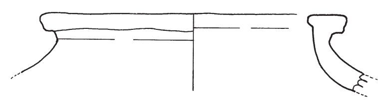


191

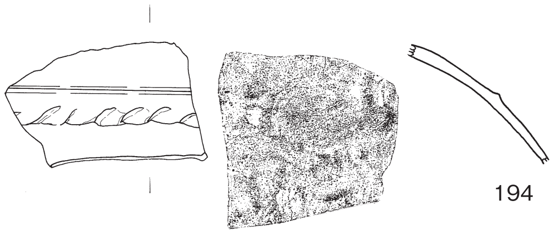
0 10cm



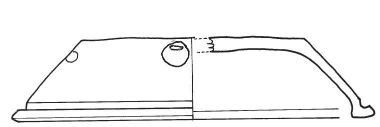
192



193



194



195

0 20cm

第 86 図　溝状遺構 1 および出土遺物 1

石組み遺構出土遺物 (第 85 図)

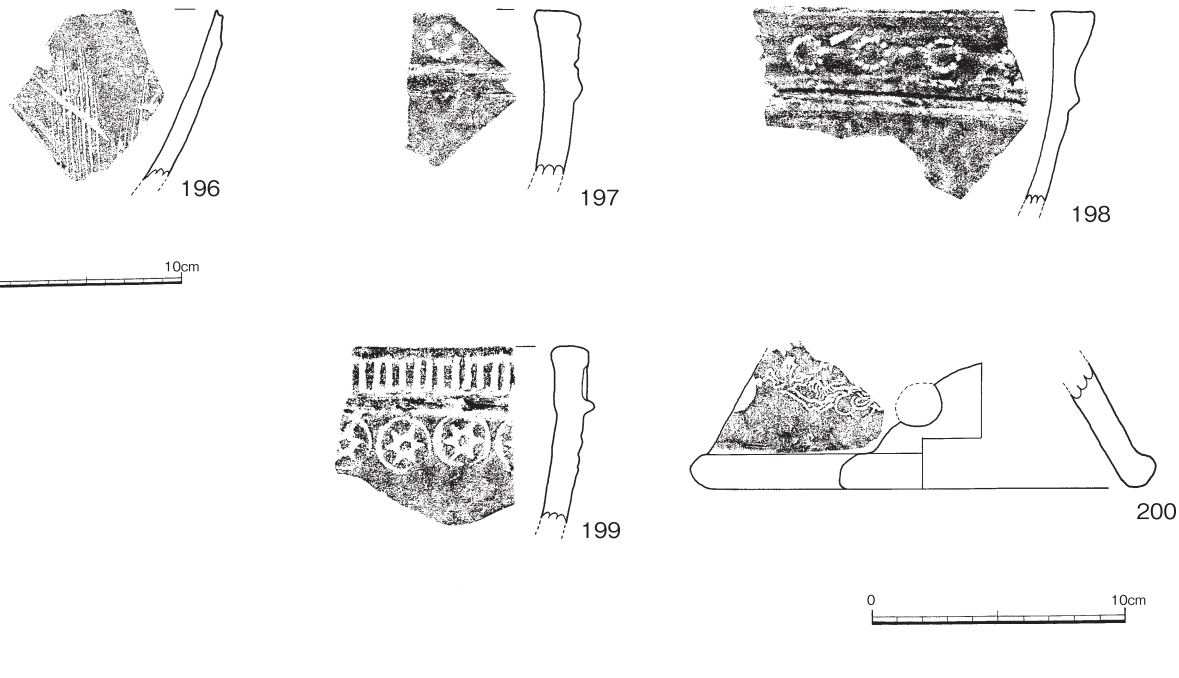
主にＧ－14区で検出した石組み遺構から出土した遺物である。177はやや小振りの端反碗である。外面の文様は格子目で内面には界線をめぐらす。178は白薩摩の碗である。高台はまっすぐに作られている。畳付は釉剥ぎである。179は，中国産と思われる瓶である。内面はケズリの後，指でナデて調整している。180は片口の擂鉢である。181は，甕または壺の胴部である。内面には同心円状のタタキ目が見られる。中国南部産であると思われる。

溝状遺構 1(第 86 図)

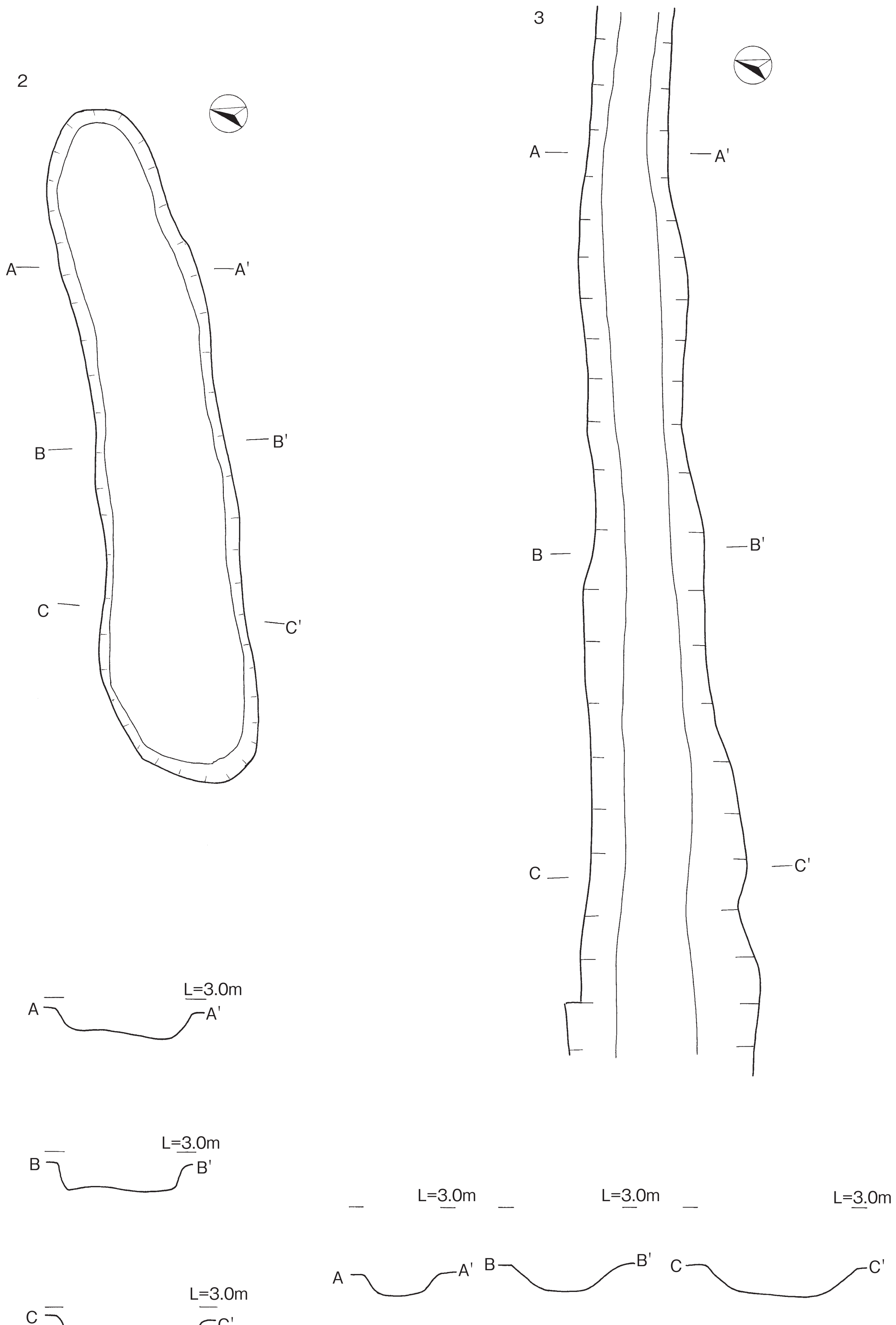
Ｃ－10～Ｈ－14区，Ｖ層上面で検出した。Ｈ－14区で一度途切れているが，方向が同じであること, 出土遺物の時期がほぼ同じであることなどから同一の遺構として扱う。埋土はⅠａ層であったが，下層においては水成堆積もみられ，水が流れていた可能性もある。

溝状遺構１内出土遺物（第 86・87 図）

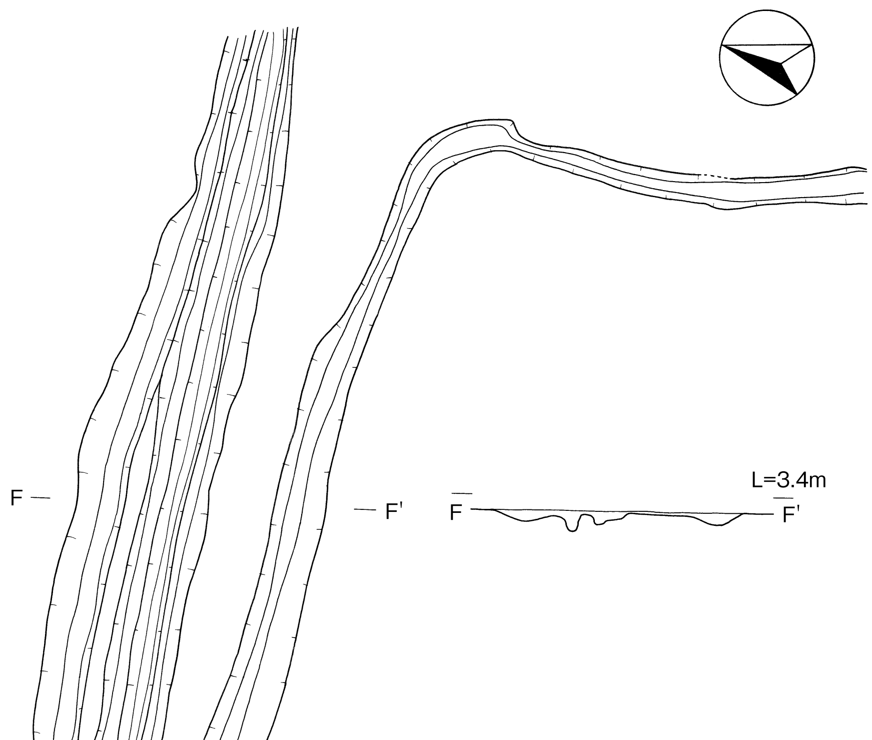
182は，切り出し高台の白磁八角形の稜花小皿である。釉は腰部までかかる。内面は，同じ製品を重ね焼きしたと見られ，4つの高台跡が残っている。183は青花の中皿である。外面は界線，内面は菱形の模様が描かれる。同じ規格の皿の破片が数個体分出土したことから，組物皿であったと思われる。184は，丸碗である。外面の文様は山水文である。185は，在地系の丸形の湯飲み碗である。やや小振りである。186・187は中皿である。186は，蛇ノ目凹形高台の稜花皿である。窯内で焼成時に熔着した別の製品の破片が胴部に付着している。18世紀後半～19世紀に相当する。187は1650～1670年代に相当する。高台は釉を剥いであり，砂が付着している。189は油壺である。頸部が短く，くびれが急で，肩が張っている。190は堂平窯の製品と思われる白磁の碗である。鉄釉で胴部に一筋景色が描かれる。胴部にはロクロ跡が残り，高台は直立，畳付は平坦で，高台内面は若干斜めに入っている。高台脇には釉薬が溜まり，薄い水色を呈している。191は刷毛目唐津

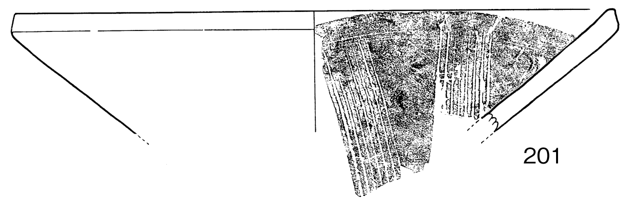


第 87 図　溝状遺構 1 内出土遺物２

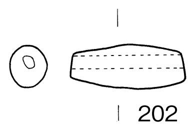


第88図　溝状遺構２・３

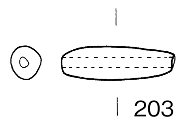




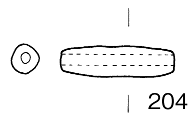
201



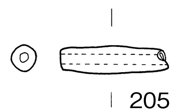
202



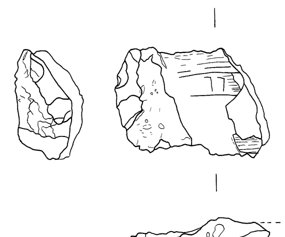
203

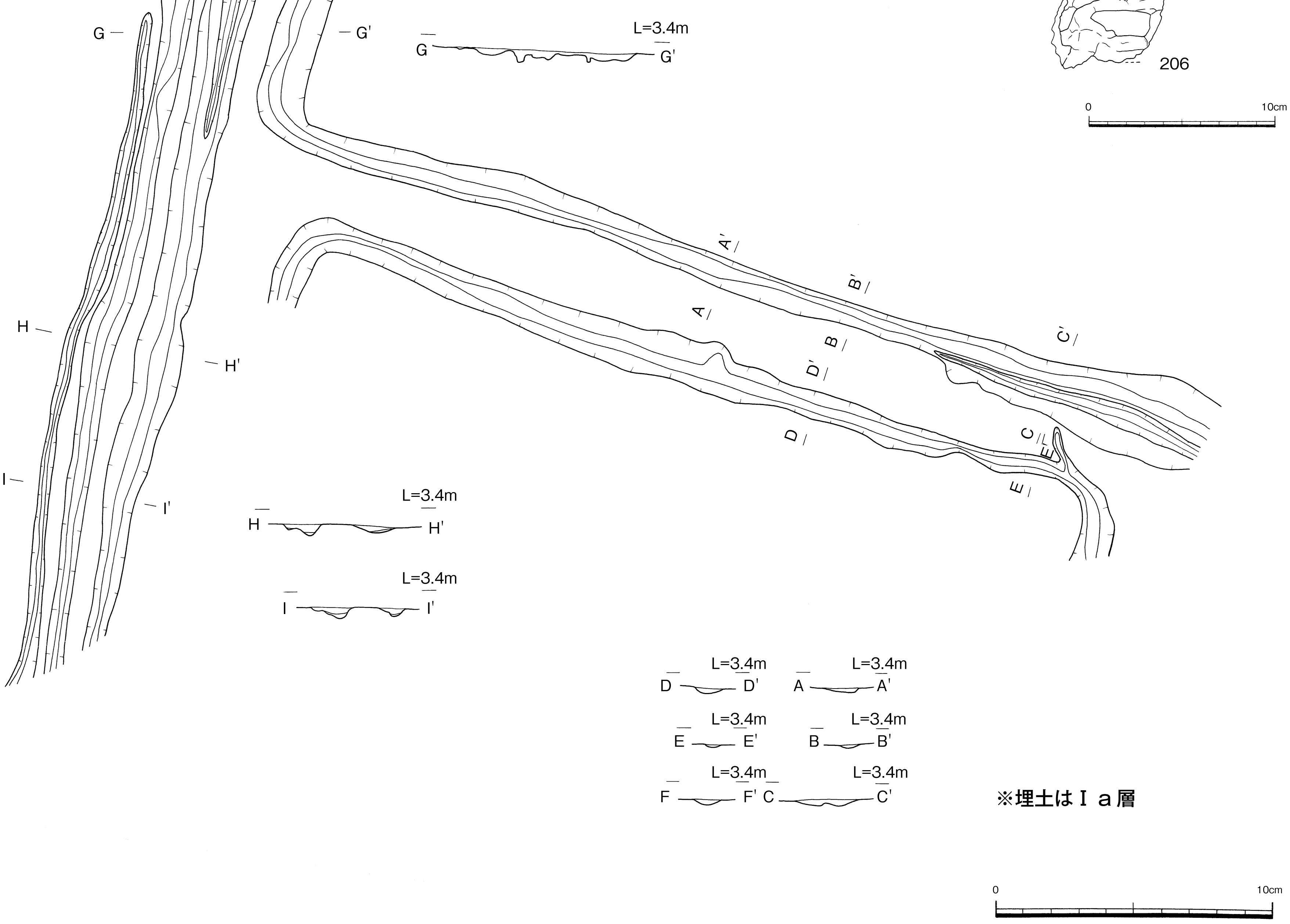


204

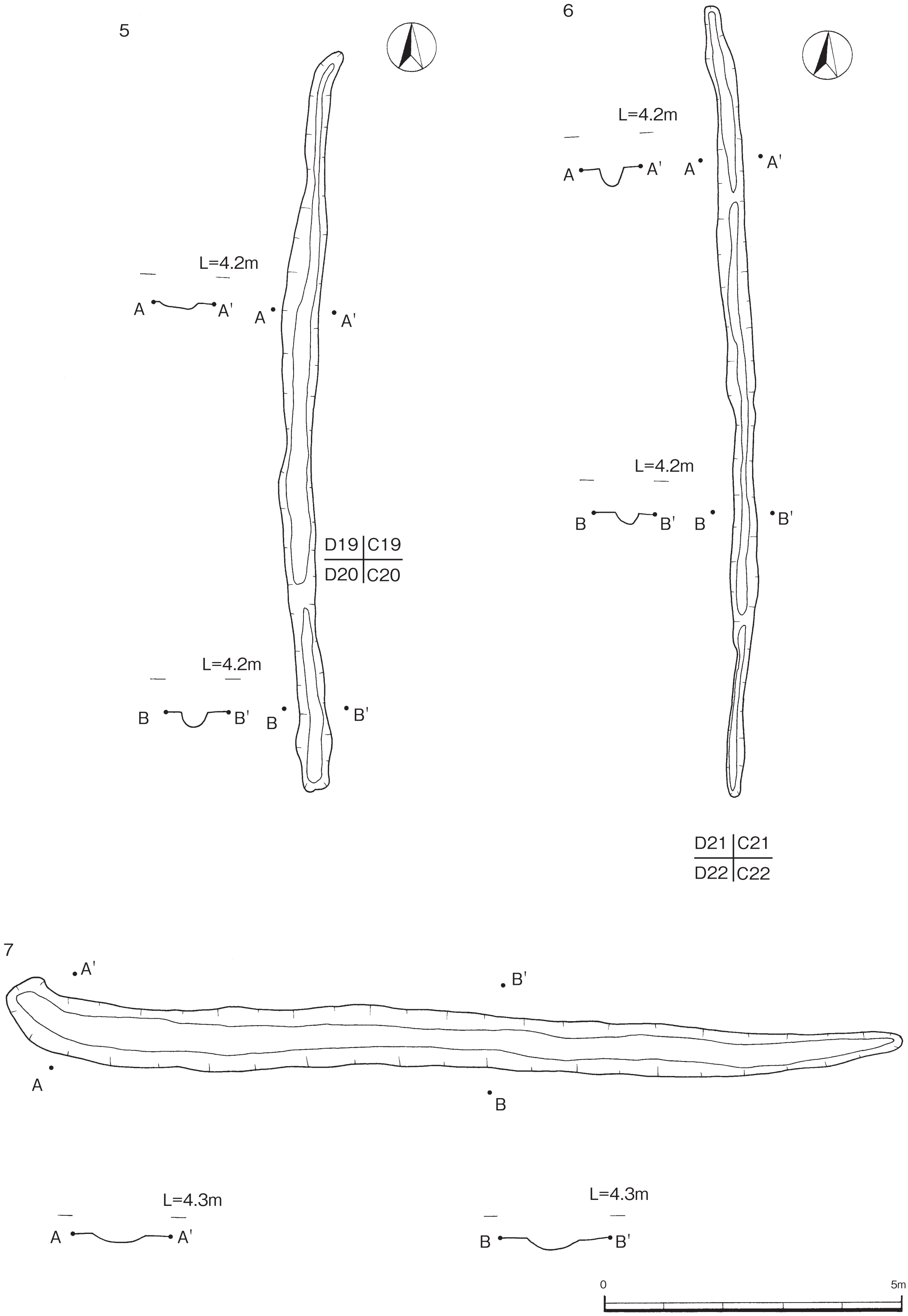


205





第89図　溝状遺構4および出土遺物



第 90 図　溝状遺構 5・6・7

の皿である。見込み部分には，粗い砂目が残る。17 世紀後半に相当する。192・193 は薩摩焼の壺である。192 の口唇部には貝目が，193 の口唇部にはコマ目がある。194 は甕の胴部である。内面には同心円状のタタキがみられる。堂平窯の製品であると思われる。195 は薩摩焼の蓋である。胴部には貝目がある。17 世紀後半に相当する。196 は瓦質の擂鉢である。197 ～ 199 は火鉢である。197･198 の外面はスタンプで花文が施文されている。煤などの付着は見られない。199 の外面には，格子と花の文様のスタンプが施文されている。200 は植木鉢の高台部分である。外面に型押しで文様が施され，穿孔が一か所確認される。

溝状遺構 2(第 88 図)

Ｃ・Ｄ－４区で検出した。埋土は，砂混じりのⅠａ層である。長さ×幅＝ 5.5 ｍ× 1.2 ｍである。深さはほぼ同じで約 20㎝である。

溝状遺構 3(第 88 図)

Ｃ・Ｄ－５区で検出した。深さ 10 ～ 20㎝の浅い溝である。埋土は砂混じりのⅠａ層である。

溝状遺構 4(第 89 図)

Ｄ～Ｈ－ 20 ～ 24 区，Ⅴ層上面で検出された。埋土は全てⅠａ層である。畑境などの溝であると思われる。溝内からは，ほとんど遺物は出土しなかった。

溝状遺構４内出土遺物（第 89 図）

201 は，瓦質の擂鉢である。刷り目は 6 条である。202 ～ 205 は土錘である。202 は他の土錘と比べて分厚く，胎土に砂が多く混じる。粘土を棒状のものに巻き付けて指で押さえて成形した痕が観察できる。203 ～ 205 は，土師器と同様の胎土で，薄く軽い。206 は鞴の羽口である。残存部片側には熔鉄が付着している。

溝状遺構５～ 7(第 90 図)

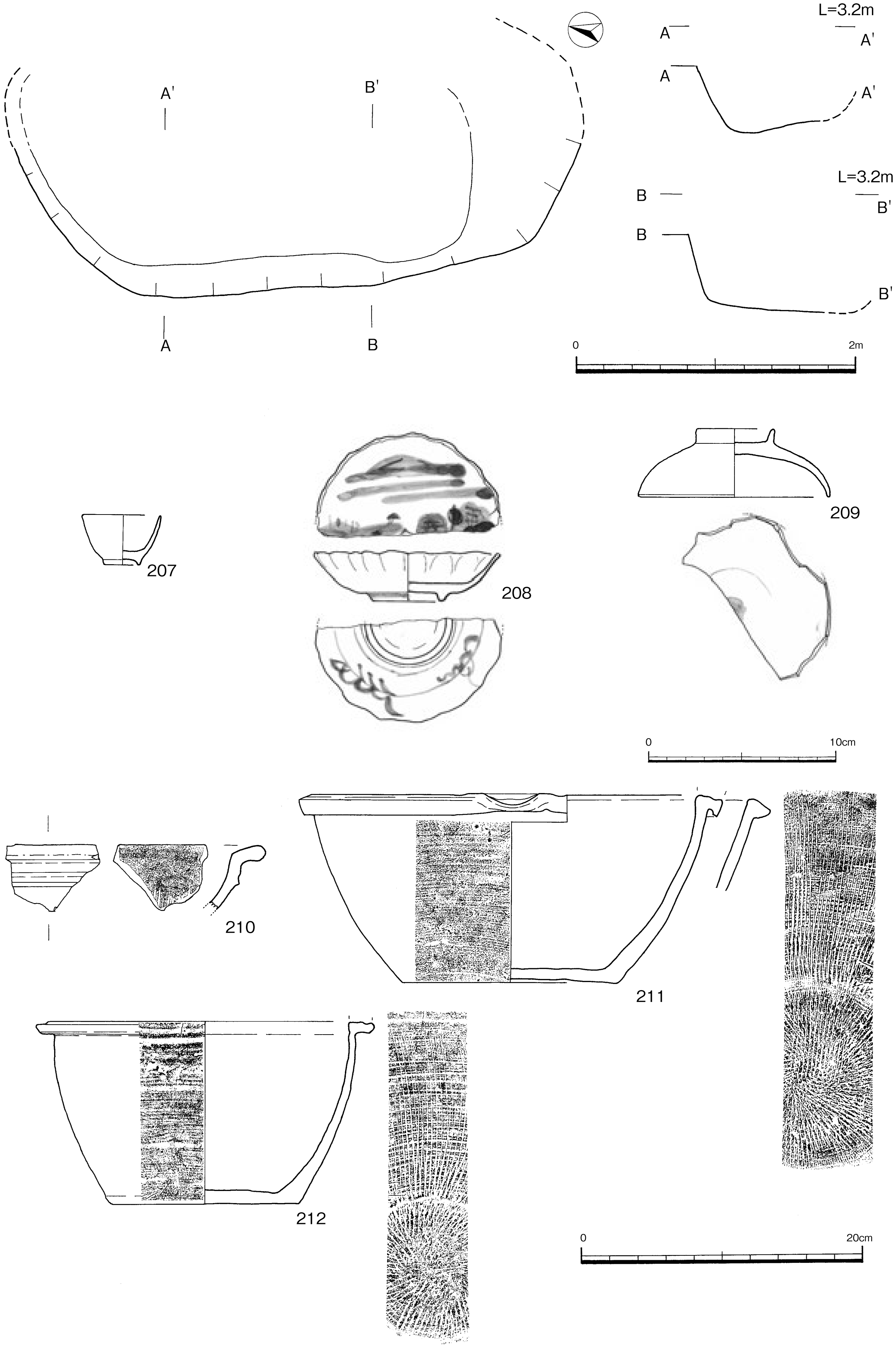
4 地点，Ⅴ層上面において検出した。埋土はⅠａ層である。5・6 は溝状遺構 4 と同一の遺構であるが，7 は方向が異なるため，時期差があると考えられる。いずれも浅い。遺構内から遺物は出土しなかったため，時期の特定はできない。

大型土坑 (第 91 図)

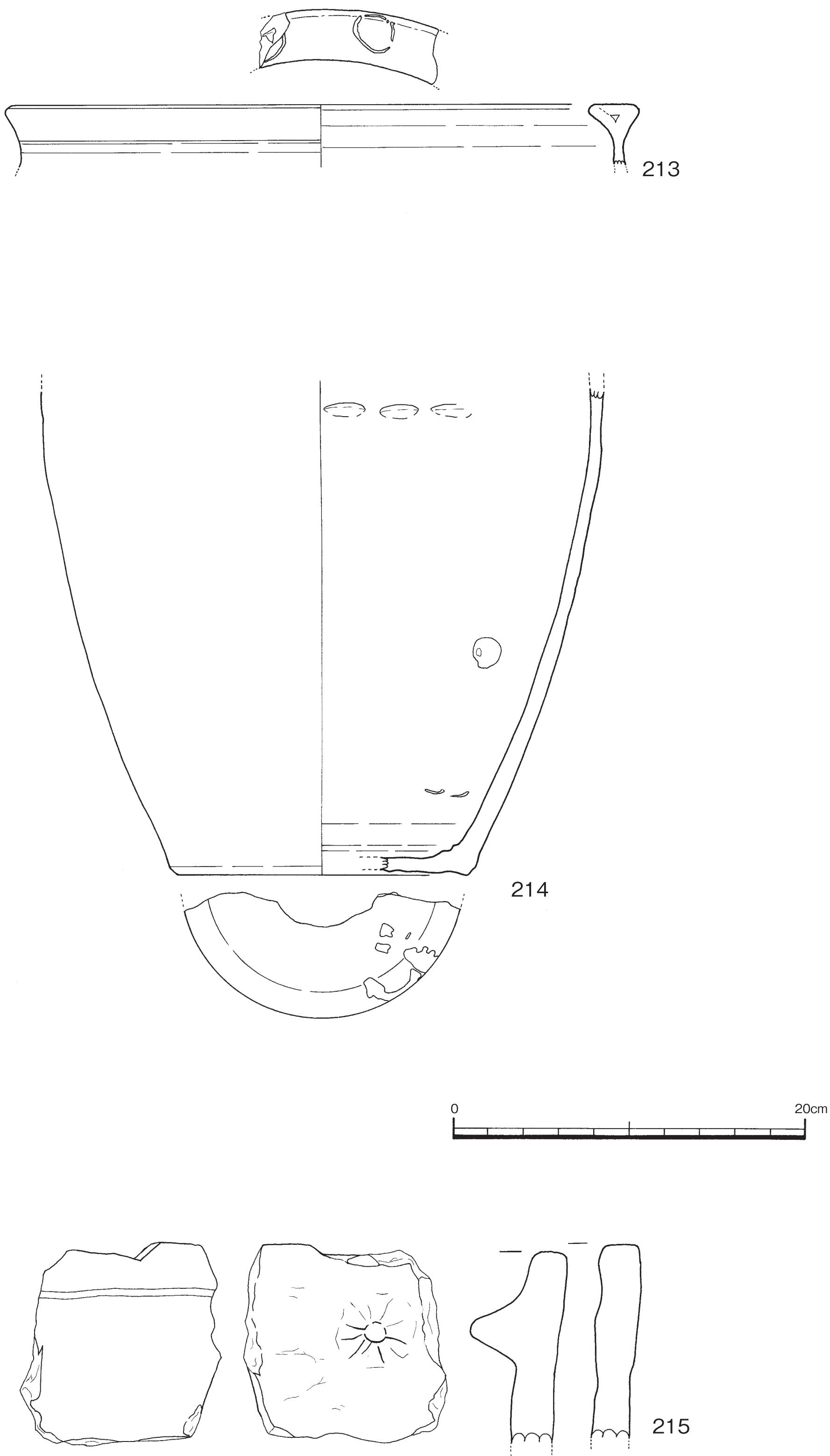
Ｂ･Ｃ－２区において検出された。検出された規模は, 長径約 4 ｍ, 短径約 1.1 ｍ, 深さ 50㎝である。調査区内で検出できた範囲は約半分であり，この遺構は調査区外にも広がる可能性がある。埋土中からは薩摩焼の壺や擂鉢などが出土している。

大型土坑内出土遺物 (第 91・92 図)

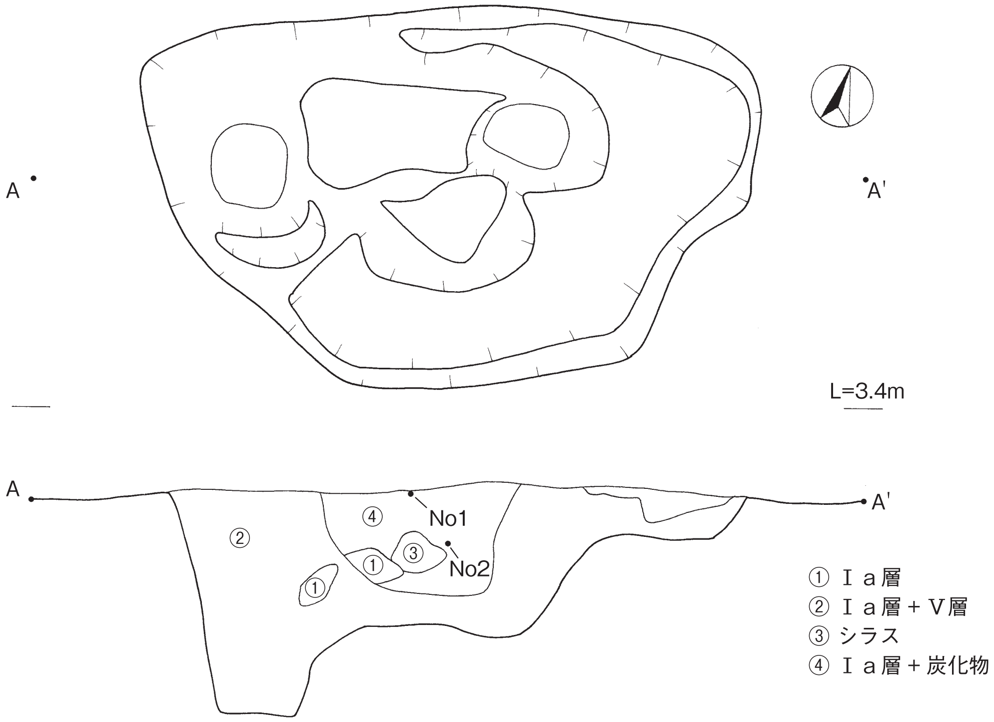
207 は小坏である。口縁部はやや内湾する。208 は稜花の小皿である。内面は山水文である。畳付きは釉を剥いである。209 は青磁染付の碗蓋である。内面は五弁花のスタンプ文様で，畳付きは釉剥ぎである。210 ～ 212 は薩摩焼の擂鉢である。外反する口縁部と小さめの突帯から，18 世紀に相当するとおもわれる。212 は底部にコマ目跡が見られる。213・214 は薩摩焼の甕である。口唇部には貝目跡がある。214 は，底部および胴部内面に貝目跡が見られる。215 の土製品は，内側に突起があり，七輪か火舎のようなものであると思われる。



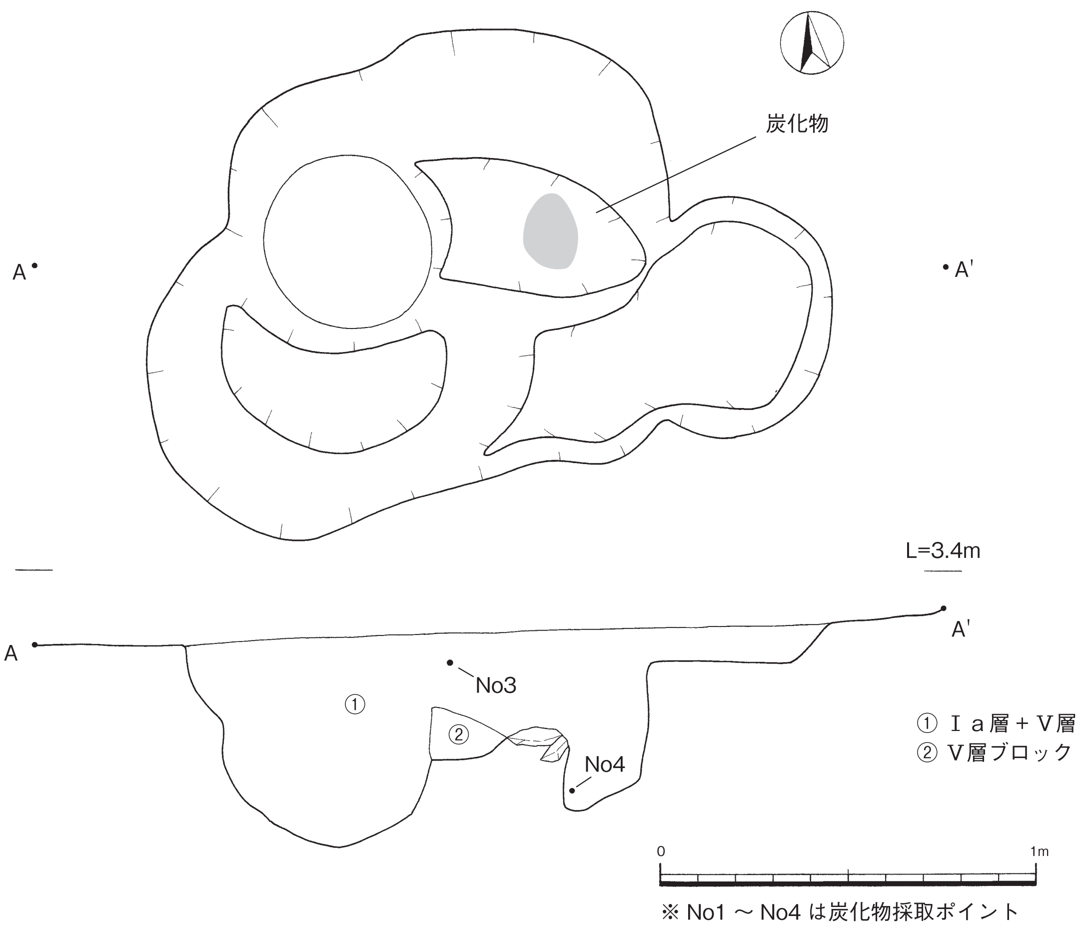
第91図　大型土坑および出土遺物1



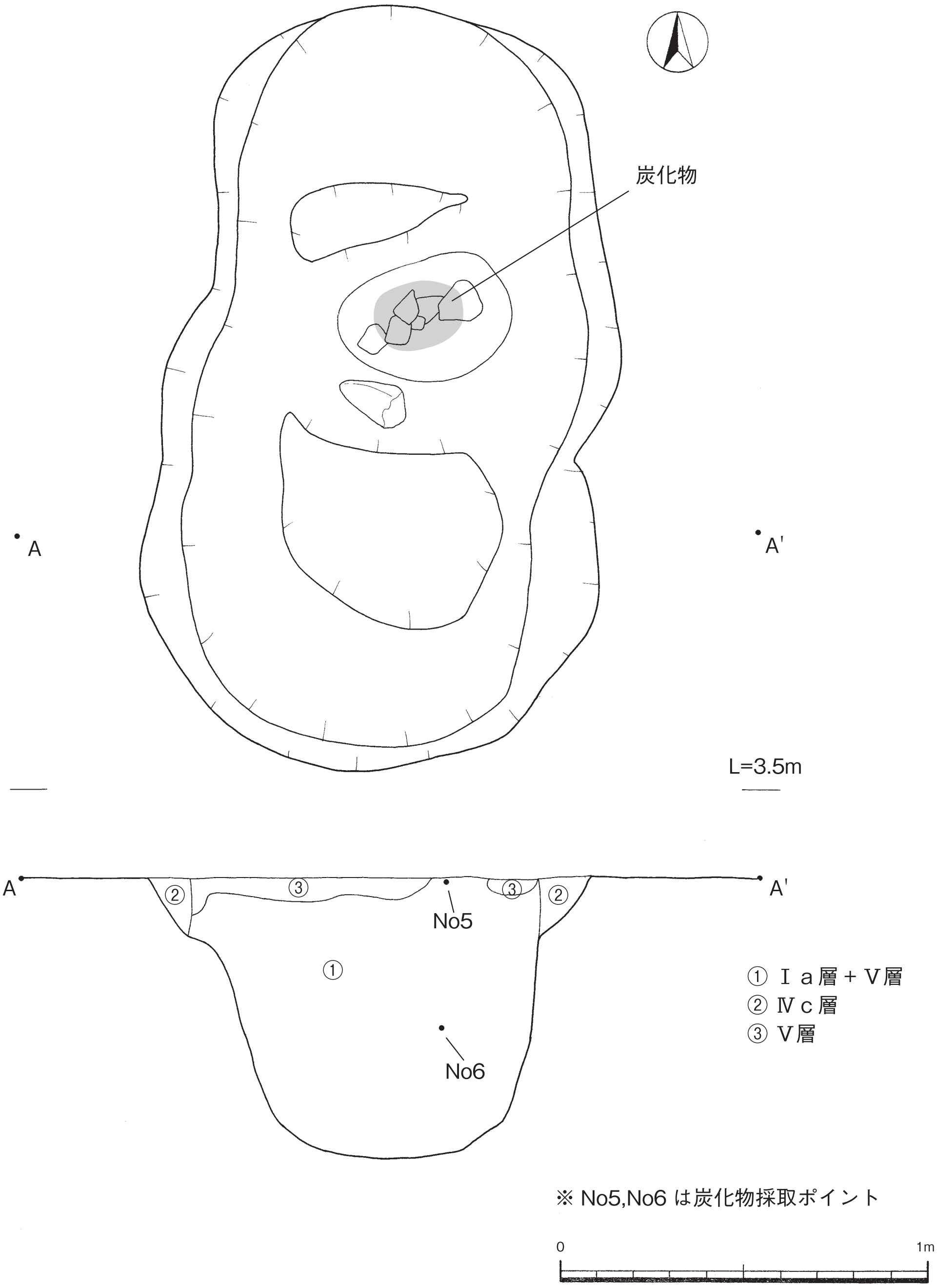
第 92 図　大型土坑内出土遺物 2

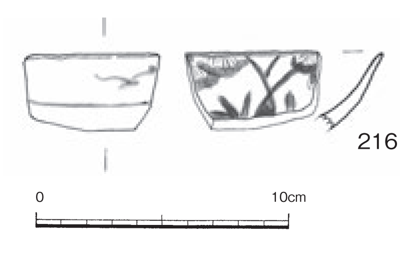


第 93 図　鍛冶炉 1

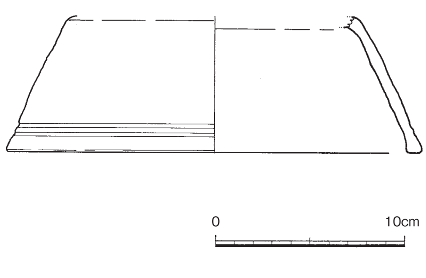


第 94 図　鍛冶炉 2





216



217

第 95 図　鍛冶炉 3 および出土遺物

鍛冶炉跡

2地点において1～4の鍛冶炉が並ぶように検出された。またやや離れた位置から検出された鍛冶炉5は，溝状遺構3を切っており，他の4基とは形態が異なる。鍛冶炉の中からは，鉄滓や製品は出土しなかったが，遺跡全体から碗形滓や鉄滓が出土している。

鍛冶炉 1(第 93 図)

E － 11 区，Ⅴ層上面で検出された。長径×短径×深さ＝ 160㎝× 100㎝× 60㎝である。

鍛冶炉1から出土した炭化物による放射性炭素年代測定の結果は，上部で 120 ± 30yrBP，下部で 150 ± 30yrBP なので，18 世紀後半～ 19 世紀にかけて使用されていたことになる。

鍛冶炉 2(第 94 図)

E － 11 区，Ⅴ層上面で検出された。長径×短径×深さ＝ 170㎝× 115㎝× 55㎝である。

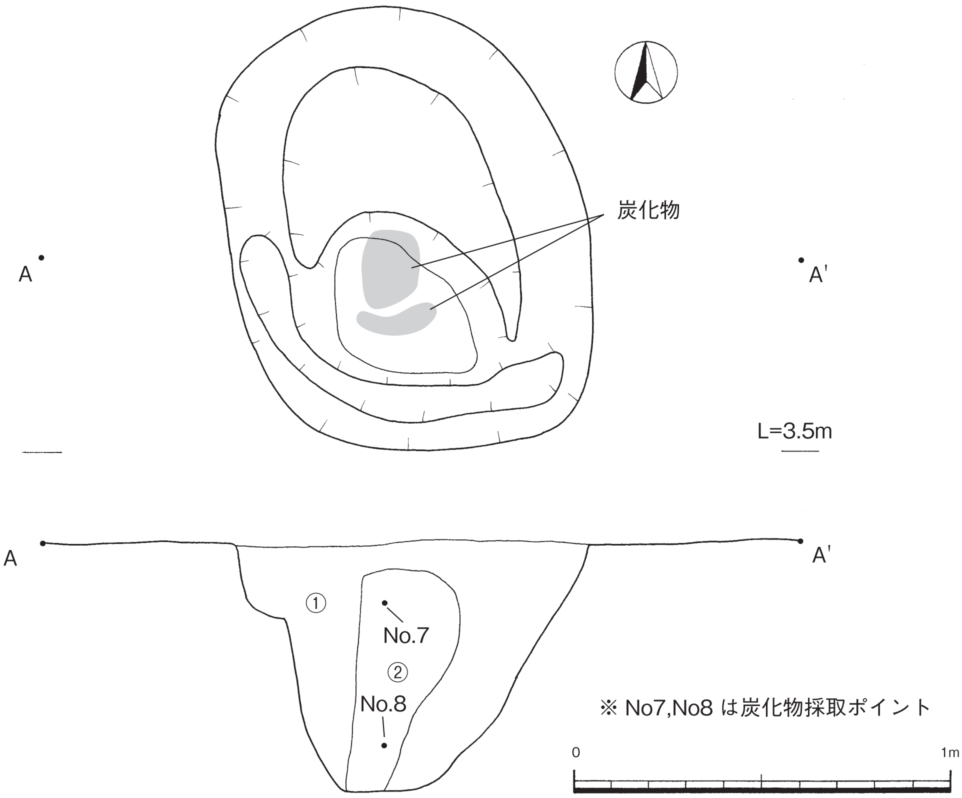
鍛冶炉2から出土した炭化物による放射性炭素年代測定の結果は，上部で 200 ± 30yrBP，下部で 230 ± 30yrBP である。この鍛冶炉は 18 世紀後半～ 19 世紀初頭にかけて使用されていたことになる。

鍛冶炉 3(第 95 図)

D － 11 区，Ⅴ層上面で検出された。長径×短径×深さ＝ 210㎝× 120㎝× 75㎝である。鍛冶炉3から出土した炭化物による放射性炭素年代測定の結果，上部と下部では 100 年の差があるが，17 世紀前半～ 19 世紀前半にかけての年代が算出されている。このことと，出土遺物の年代から考えると，鍛冶炉3は江戸時代中頃～後半にかけて使用されていたものである。

鍛冶炉３内出土遺物（第 95 図）

216 は，肥前系染付の稜花皿である。内面には草花文が描かれている。18 世紀前半に相当すると



第 96 図　鍛冶炉４

思われる。217は薩摩焼苗代川系の蓋である。19世紀代に相当すると思われる。

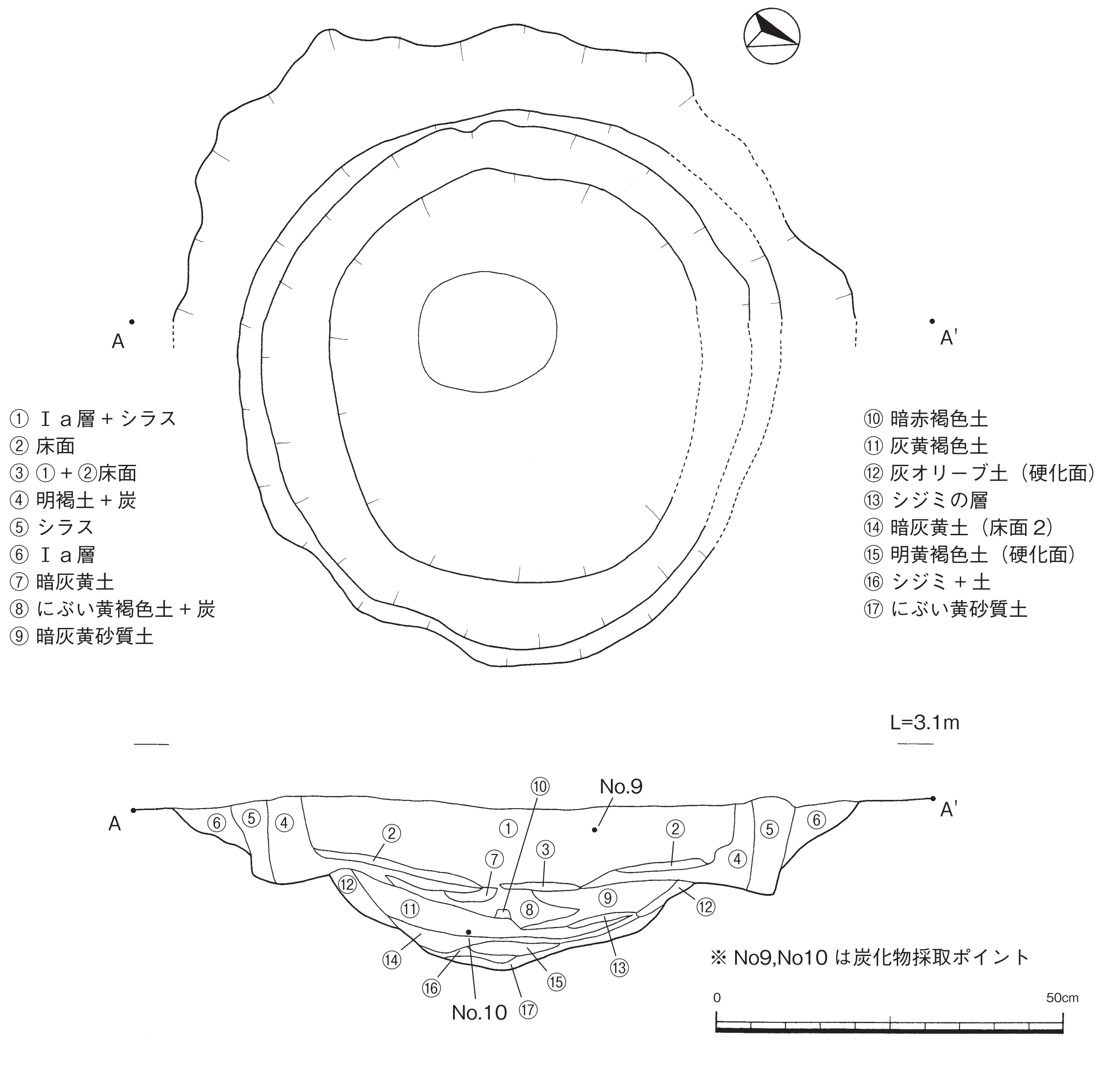
鍛冶炉4(第96図)

Ｄ－11区Ｖ層上面で検出された。長径×短径×深さ＝120cm×95cm×65cmである。鍛冶炉4から出土した炭化物による放射性炭素年代測定によると，上部で200±30yrBP，下部で160±30yrBPである。18世紀～19世紀にかけて使用されていたものである。

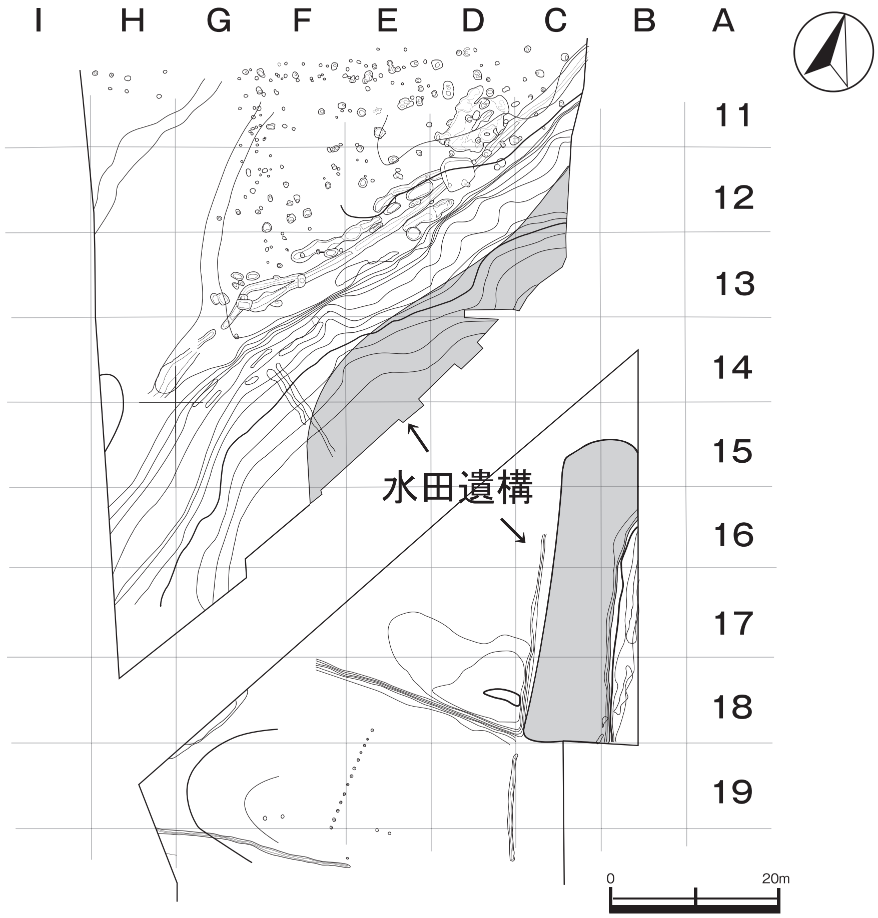
鍛冶炉5(第97図)

Ｅ－12・13区で検出された円形の鍛冶炉である。長径×短径×深さ＝195cm×180cm×50cmである。炉壁が2層存在することから，少なくとも2回の炉の構築があったものと考えられる。1層目の下層及び2層目の下層にはシジミのような小型の貝殻が敷き詰められて層をなしている。鍛冶炉5から出土した炭化物による放射性炭素年代測定によると，上部が210±30yrBP，下部が110±30yrBPという結果が出ており，18世紀後半～19世紀にかけて使用されていたものである。

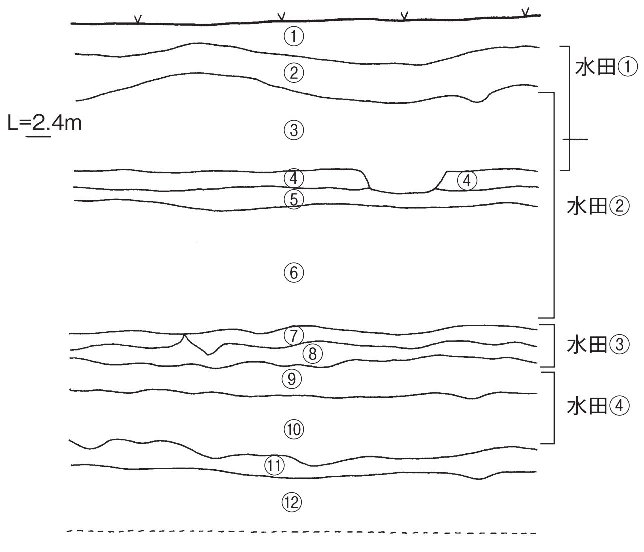
以上，鍛冶炉跡1～5における放射性炭素年代測定の詳細な結果は，第5節を参照されたい。

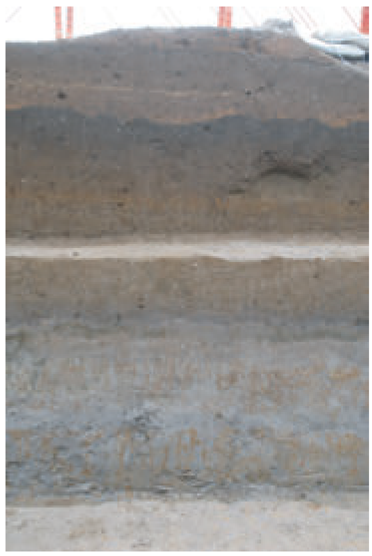


第97図　鍛冶炉5



第 98 図　水田遺構位置図





① 表土
② 黒褐色土
③ 黄褐色土
④ 明黄褐色土（酸化鉄を含む）
⑤ 黄褐色土（マンガンを含む）
⑥ 灰黄褐色土 (酸化鉄を含む)
⑦ 灰色粘質土
⑧ 灰色砂
⑨ 灰黄色土（酸化鉄を含む）
⑩ 灰色シルト
⑪ 灰黄色粘質土
⑫ 灰色粘質土

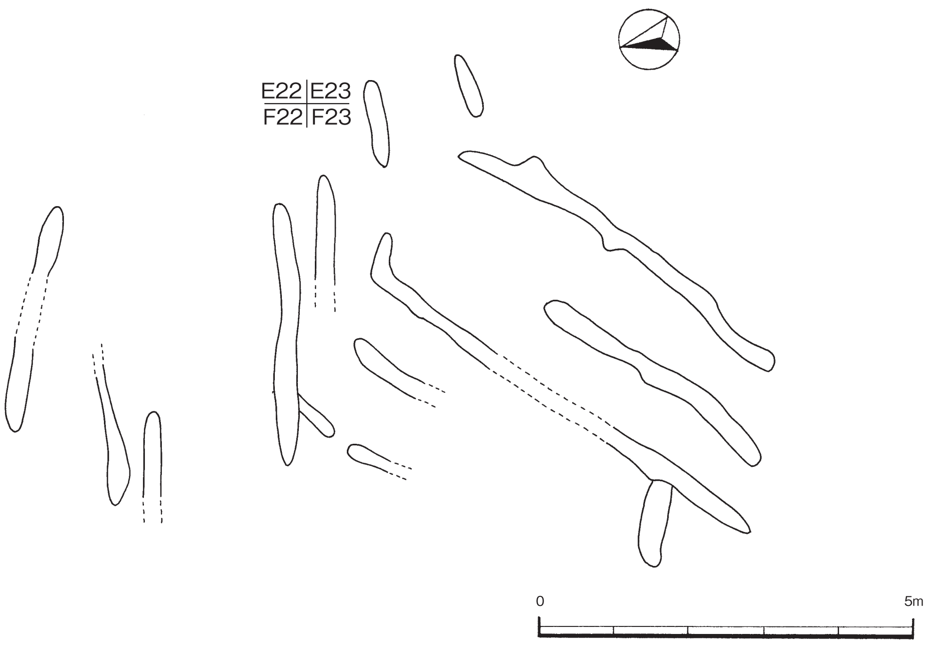
第 99 図　水田遺構土層断面図

水田遺構 (第 98・99 図)

3 地点・4 地点の低湿地部分では，水田遺構が確認された。3 地点の水田遺構においては，畦や水口といった水田に伴う遺構は確認されなかったため，範囲をはっきりと確定することはできなかったが，堆積している土壌の観察（低湿地部分の土層断面は曇管状の鉄分･マンガンの堆積層（鋤床層），黒色土（耕作土層）の繰り返しがみられた。）および植物珪酸体分析の結果から，水田遺構であると認定した。また，4 地点の諏訪山に近い部分からも近世～近代の水田跡と思われる，酸化鉄を含む土壌が面で確認された。この部分には，畦のような土の盛り上がりがみられた。植物珪酸体分析の詳細な結果は第 5 節に掲載する。

畝間状遺構 (第 100 図)

Ｅ・Ｆ－ 22・23 区Ⅴ層上面で検出された。深さは非常に浅く，数㎜～数㎝しか残存していない。削平が激しく，検出できた規模が当時のものであるとは言い難い。東西方向と南北方向に重なって検出されたので，おそらく比較的短い間で何時期かの遺構が重なっているものであると考えられる。埋土の植物珪酸体分析の結果，稲作，ムギの栽培が行われていた可能性が認められた。また，当時の調査区周辺は，ススキ属やチガヤ属などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であり，部分的にヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたということであった。また，イスノキ属を主体として，シイ属，クスノキ科なども生育する照葉樹林が分布していたと推定される。これは，低湿地のⅤ層における植物珪酸体分析の結果とほぼ同じであり，Ⅲ層～Ⅴ層の時期と同時期にこの畝間状遺構が存在していた可能性も考えられる。自然科学分析の詳細な結果については，第 5 節を参照されたい。



第 100 図　畝間状遺構

（2）遺物

中世～近世の出土遺物については，1区から4区において大量の陶磁器が検出された。この時期に相当する層位はⅡ～Ⅳａ・ｂ層であるが，中世と近世の時代区分は層位的に困難で，中世から近世にかけての遺物がどの層位からも混在して出土する状況であった。そのため，ここでは，中世から近世の出土遺物を一括して取り扱い報告する。

中世に相当する遺物は，輸入磁器（白磁，青磁，青花），滑石製石鍋が出土しているが，これらの出土量は約350点と多くはない。それに対して，近世に相当する遺物は約10,300点と多い。主なものとしては，肥前陶磁器，薩摩焼，瓦質土器，土師質土器，土製品等が出土している。

分類方法については，輸入陶磁器，国内産磁器，国内産陶器，その他（瓦質土器・土師質土器・土製品・滑石製品・瓦・金属製品・古銭等）に大分類し，さらに種別，器種に細分類した。また，器形や産地（判別できるもの）についても考慮し分類を行った。（以下参照）

輸入陶磁器	白磁	皿
	青磁	椀・皿・盤・香炉・瓶
	青花	碗・皿・その他
	陶器	徳利
国内産磁器（白磁・色絵を含む）		
	碗・小坏・皿・鉢・蓋・瓶・仏具・その他	
国内産陶器	碗・小坏・皿・鉢（食膳具）・蓋（浅鉢形以外のもの）・水注・土瓶・徳利・片口・鉢（調理具）・擂鉢・鍋・釜・蓋（浅鉢形のもの）・甕・壺・灯明具・仏具・その他	
その他	土製品（土人形・土錘），瓦質土器（火鉢），土師質土器（焙烙），鉄製品（坩堝・鉄滓），滑石製品（石鍋），金属製品，古銭	

また，近世の遺物とともに近代以降の遺物も出土した。鍛冶炉遺構が近世から近代のものと想定されるため，近代以降の出土遺物として，中世～近世の出土遺物の次に報告しておきたい。

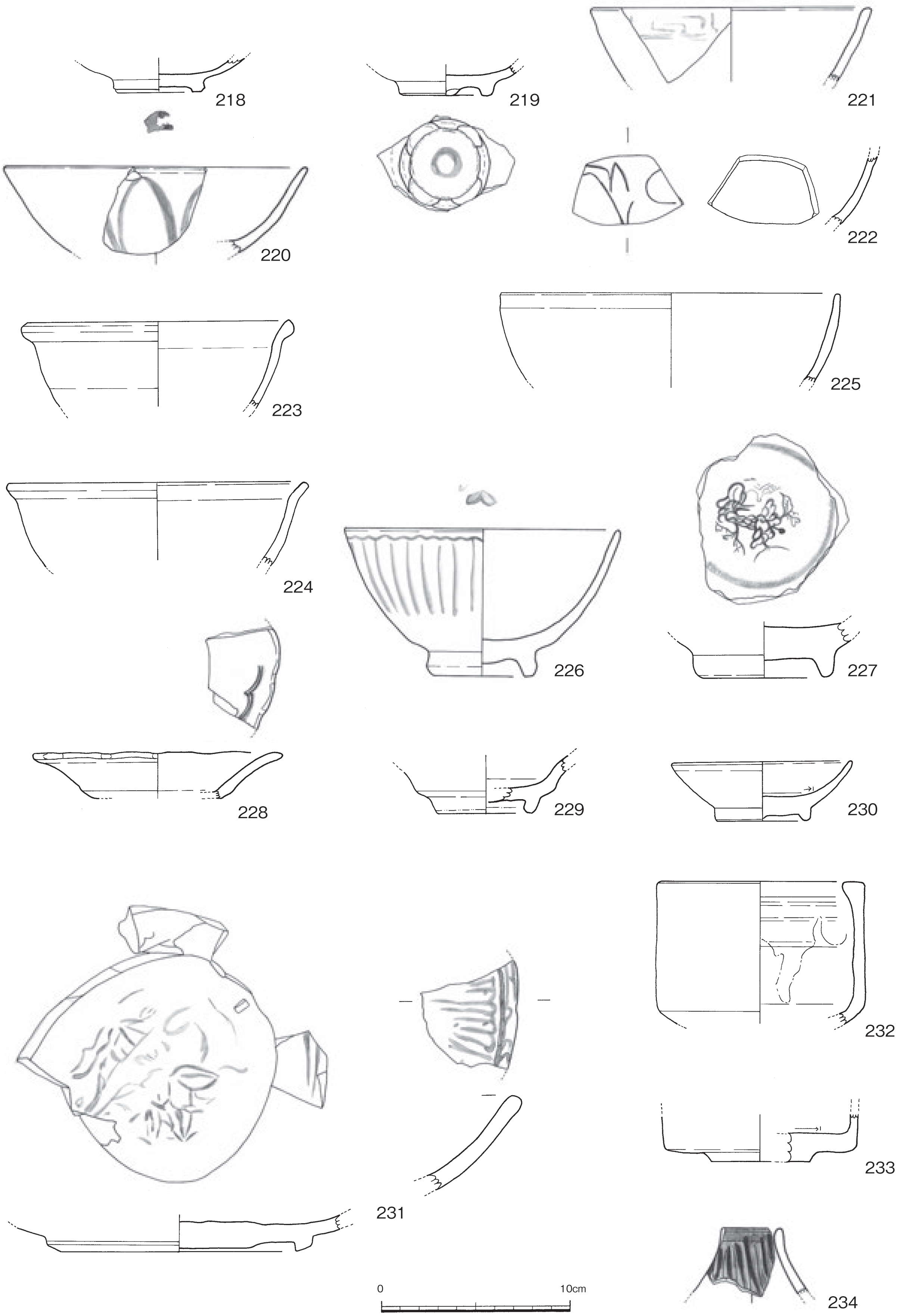
輸入陶磁器

白磁（第101図）

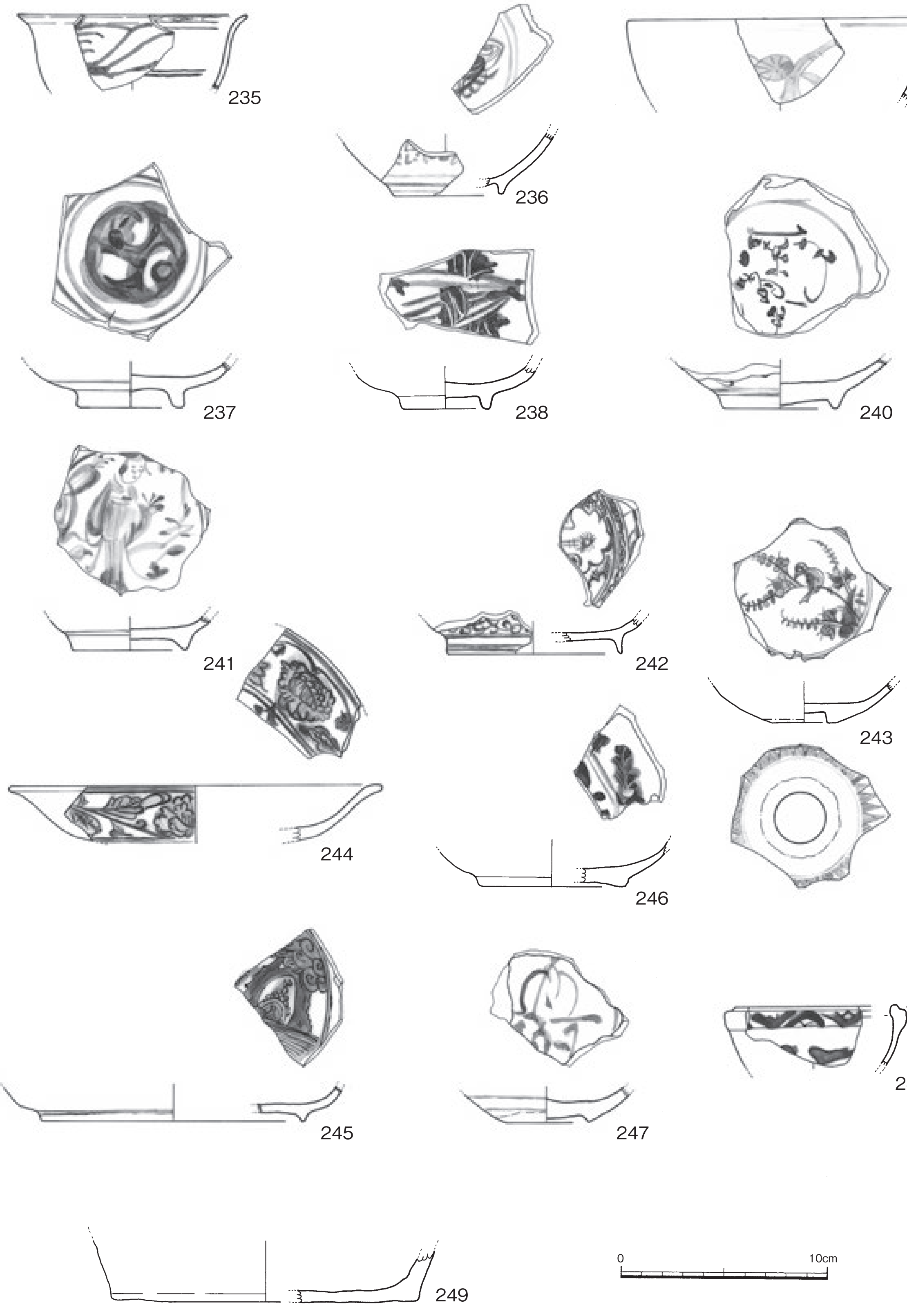
218・219は皿である。黄白色の粗い胎土に，白濁した釉薬が内面と外面腰部までかかる。2点とも高台内底面には，墨書が書かれる。219の高台は抉り高台を呈する。

青磁（第101図）

220～234は龍泉窯系の青磁である。220～227は椀である。220は外面に片彫りで連弁文が描かれる。連弁の中央に稜はみられない。221は外面口縁部にやや崩れた雷文帯を有するものである。222は口縁部が欠損しているが，外面に雷文帯を有するものと考えられる。223・224は口縁端部が外反するものである。223は口縁端部が丸くつくられ，小形の玉縁状を呈する。224は口縁端部が丸くつくられるが，223のように玉縁状にはならない。225は口縁部がやや内湾するもので，内外面とも無文である。226は外面に細蓮弁文を描くものである。細線と剣頭をそれぞれ別々に描いて



第 101 図　中世～近世の出土遺物 1　輸入陶磁器



第 102 図　中世～近世の出土遺物２　輸入陶磁器

いるが，蓮弁文としての単位は意識して描かれる。227は底部である。見込みには印花文がスタンプされる。釉は比較的厚く，畳付も含め高台全てにかかり，高台内底面は輪状に釉剥ぎされる。

228～230は皿である。228は稜花皿である。内面には線彫りによる文様が施される。229は腰部が強く屈曲するもので，稜花皿の底部と思われる。高台内底は輪状に釉剥ぎされる。230は見込みと高台内底が円状に釉剥ぎされるものである。

231は盤である。口縁部と底部の２点で，同一個体と思われる。口縁端部は丸みを帯び，見込みには印花文が施される。高台内底面の釉は輪状に釉剥ぎされる。焼成不良のためか，胎土・釉薬ともに灰黄色を呈する。龍泉窯系のものでない可能性も考えられる。

232・233は香炉である。232は口縁部で，釉は外面と口縁部内面上位までかかり，以下は露胎する。233は底部である。高台は充実高台状になるものと思われる。

234は瓶の頸部である。

青花（第102図）

235～240は碗である。235～238は景徳鎮窯系のものである。235は端反口縁を呈する。236は蓮子碗の底部である。高台はやや内傾し，畳付は尖る。237は見込みが饅頭心を呈する。畳付には褐色の砂粒が付着する。238は腰が張る形状を呈する。239・240は漳州窯系のものである。胎土は黄白色の色調を呈し，呉須の発色も鈍い。

241～247は皿である。241～246は景徳鎮窯系のものである。241は底部で，見込みに人物文が描かれる。242は口縁部が欠損しているが，端反口縁になるものと思われる。243は底部が碁笥底を呈するものである。244は端反口縁を呈する。245は高台が斜めに面取りされており，一部に砂粒が熔着する。246は高台が充実するもので，中心に向けてレンズ状に凹む。247は漳州窯系のもので，底部が碁笥底を呈する。

248は景徳鎮窯系の蓋物と思われる。口唇部の蓋受け部は，釉剥ぎされる。

陶器（第102図）

249は中国南部産の瓶もしくは壺と思われる。外面は体部に黒釉がかかり，外底面に目跡がみられる。内面は無釉である。

国内産磁器

国内産磁器については，肥前系磁器の染付・白磁・色絵と，薩摩磁器の平佐系と思われる在地産の染付・白磁が出土している。

碗（第103～107図）

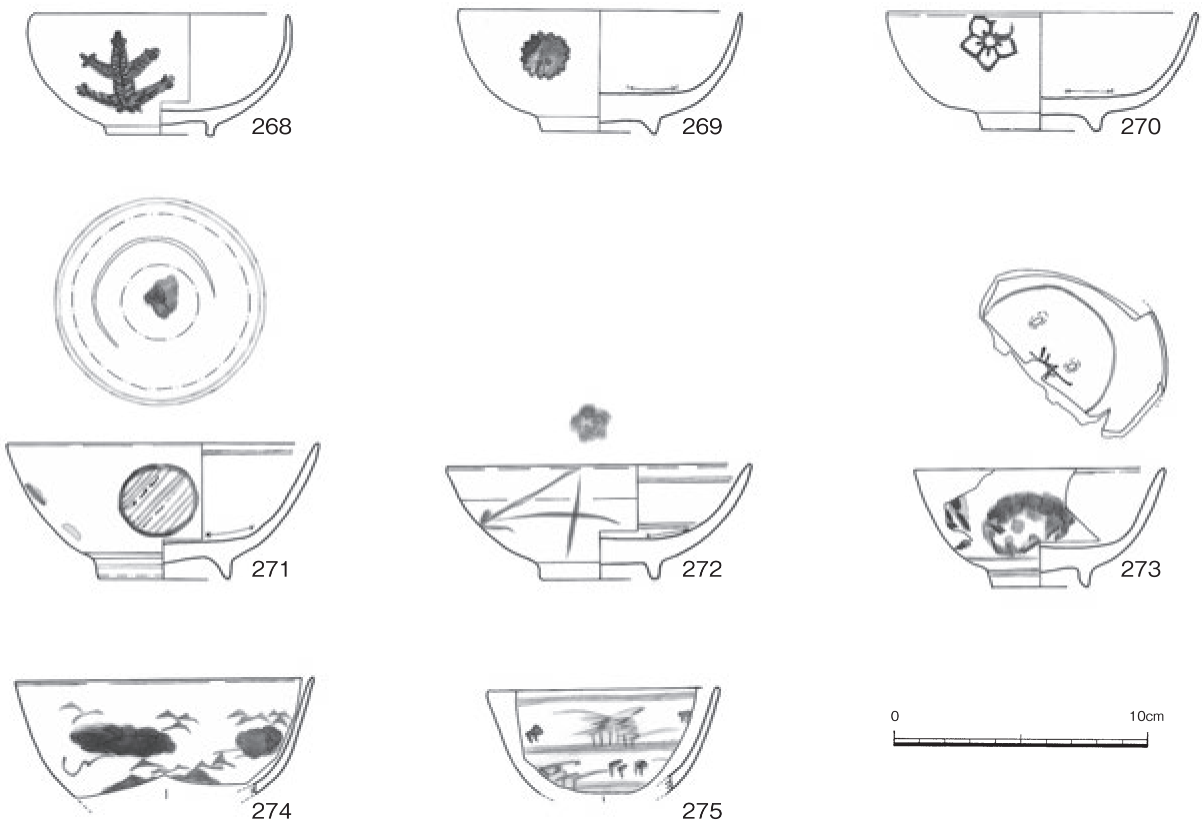
碗については，形状から次の７つに細分化した。

丸　　形　体部が丸みを帯び，口縁部は直口もしくはやや内湾するもの。

朝 顔 形　腰部で内側に屈曲し，体部は逆ハの字型にまっすぐのびるもの。

小広東形　小形の碗で，体部はやや丸みを帯びながら立ち上がるが，口縁部に向けてハの字状に開く。

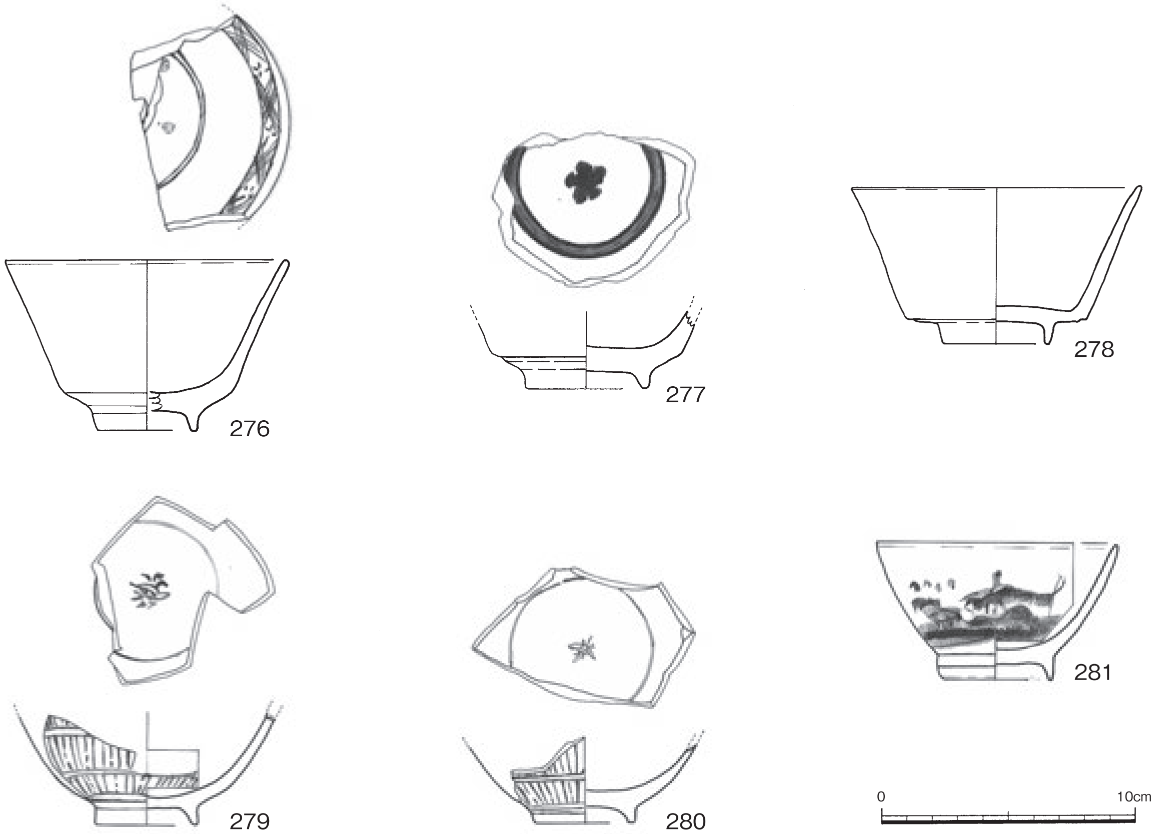
第 103 図　中世～近世の出土遺物３　国内産磁器



第 104 図　中世～近世の出土遺物４　国内産磁器

広 東 形　高台が高く，体部は逆ハの字状に開く形状を呈する。
端 反 形　口縁部が外反するもの。
半 筒 形　体部が筒状の形状を呈し，腰部で強く屈曲するもの。
筒 丸 形　体部が筒状を呈し，腰部が丸みを帯びるもの。

250 ～ 275 は，丸形のものである。250 は白磁である。器壁が薄く，高台も細く先が尖る形状を呈する。251 は外面に青磁釉がかけられる青磁かけわけの碗である。見込みには呉須による花文が描かれる。252 は器壁が薄いもので，高台は低く先端は尖る。欠損しているため全体は不明であるが，高台内底面には裏銘がみられる。253 は内外面に二重網目文が描かれる。見込みには花文が描かれる。254 は高台が低く，やや外側に開くバチ状を呈する。器壁は薄く，上手のつくりであるが，見込みに窯傷が残る。255・256 はやや腰が張るタイプのものである。257 は外面に青磁釉がかかるもので，口縁部内面には四方襷文が描かれる。258 は器壁が薄く，やや大振りの碗である。外面には一重網目文と魚文と思われる文様が描かれる。畳付には砂粒が付着する。259・260 は焼成不良のためか，透明釉が熔けきっておらず，釉の発色も悪い。259 は外面に矢羽根文が描かれる。260 は外面に一重網目文が描かれる。261 ～ 272 は器壁が厚く，胎土の色調が灰色ないしは灰白色を呈するものである。261 は詳細な判読はできないが，「□□年製」の裏銘がみられる。262・263 は畳



第 105 図　中世～近世の出土遺物５　国内産磁器

付に砂が付着し，263・264 は見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施される。265 ～ 267 はやや小振りの碗で，266 は透明釉に貫入がみられる。267 は見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施される。267 は在地産と思われる資料である。268 ～ 270 は，外面にコンニャク印判による文様が施された資料である。268 は若松文，269 は菊花文，270 は花文である。271・272 は，見込みに矮小化したコンニャク印判五弁花が観察される。272 は外面に丸文が描かれ，見込みは蛇ノ目釉剥ぎされる。272 は外面に折れ松葉文が描かれる。273 ～ 278 は透明釉が青みを帯び，呉須の発色も悪く文様が滲んでいるもので，在地産のものと思われる。273 は見込みに，窯道具の目跡が残る。274･275 は外面に山水文が描かれる。

276 ～ 278 は，朝顔形の碗である。276・277 は外面に青磁釉がかけられたものである。276 の口縁部内面には四方襷文が描かれる。欠損しているが見込みにコンニャク印判五弁花がスタンプされる。277 は見込みに幅広の圏線とコンニャク印判五弁花がみられる。278 は白磁である。在地産の可能性が考えられる。

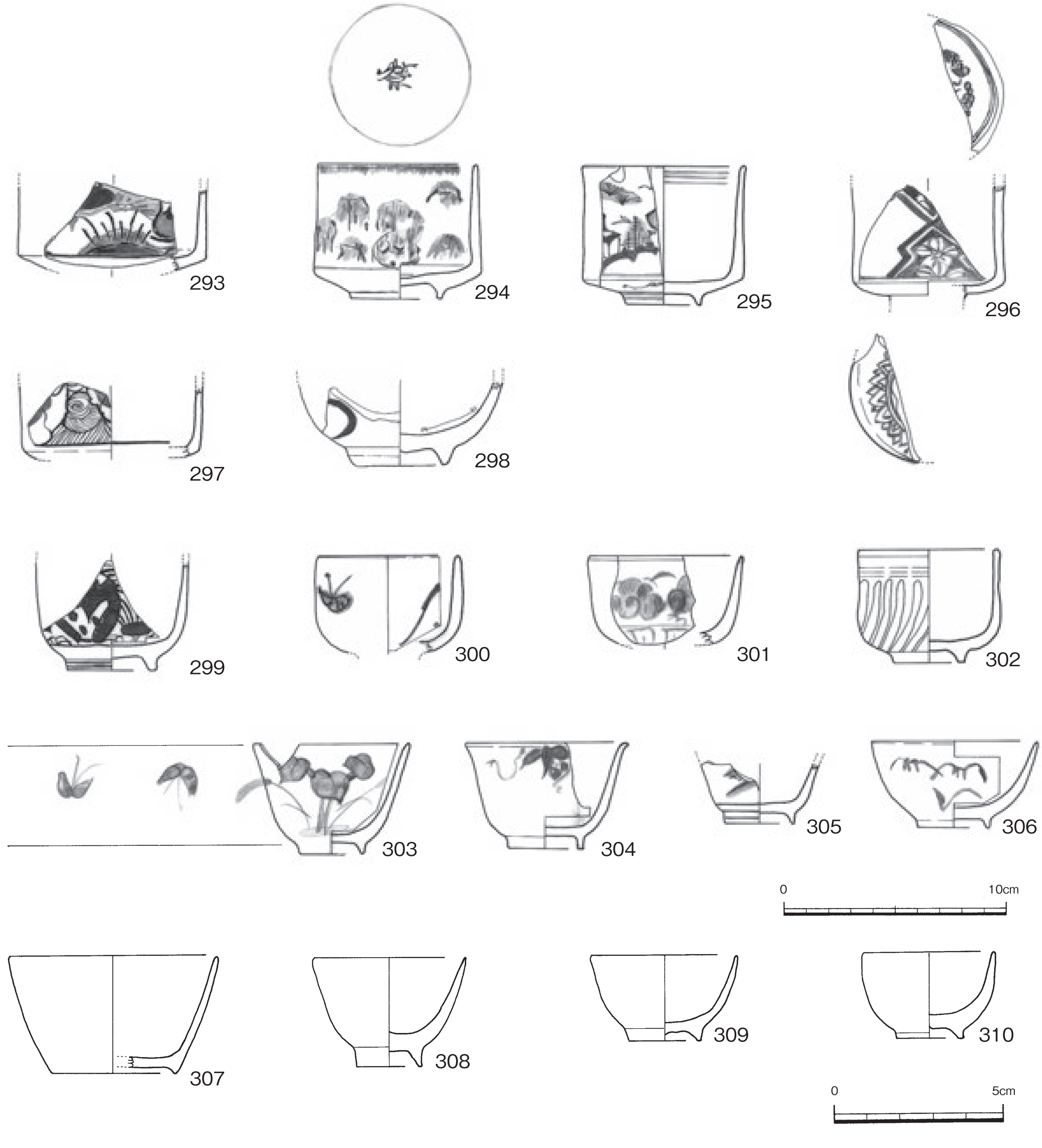
279・280 は小広東形の碗である。やや小振りの資料で，外面には梵字文，見込みには虫文が描かれる。透明釉がやや青みがかり，文様の描き方も雑であることから，在地産のものと思われる。

281 は広東形の碗である。一般的な広東碗と比べ，高台は低くやや小振りである。外面に描かれた山水文は呉須が滲んでおり，透明釉も青みがかっている。在地産のものと思われる。

282 ～ 292 は端反形の碗である。282 は肥前産のものである。清朝磁器の影響を受け，内外面にねじ花文が描かれ，見込みには 3 匹の蝶が描かれる。透明釉には貫入がみられる。283 ～ 292 は在地産と思われる資料である。283 は外面に二重格子文が描かれる。見込み中央にも格子文が描かれ，蛇ノ目釉剥ぎが施される。284 は外面に山水文が描かれ，透明釉には貫入が入る。見込みには目跡が残る。285 ～ 287 は外面に草花の文様が描かれる。288 は外面に山水文，289 ～ 292 は唐草文が描かれる。291・292 はやや小振りのものである。

293 ～ 297 は半筒形の碗である。293・295 ～ 297 は比較的呉須の発色が良い資料であるが，294 は呉須が滲み，透明釉が青みを帯びる。在地産の資料と思われる。外面には雪持ち笹文，見込みには虫文が描かれる。

第 106 図　中世～近世の出土遺物 6　国内産磁器



第 107 図　中世～近世の出土遺物 7　国内産磁器

298 ～ 302 は筒丸形の碗である。298 は白色の化粧土をかけ，その上から呉須で絵付けをしたもので，見込みは蛇ノ目釉剥ぎされる。腰の張るタイプの碗にも分類できる資料である。301 は呉須の発色が悪く，滲んでいる。302 は在地産の白磁である。

小坏（第 107 図）

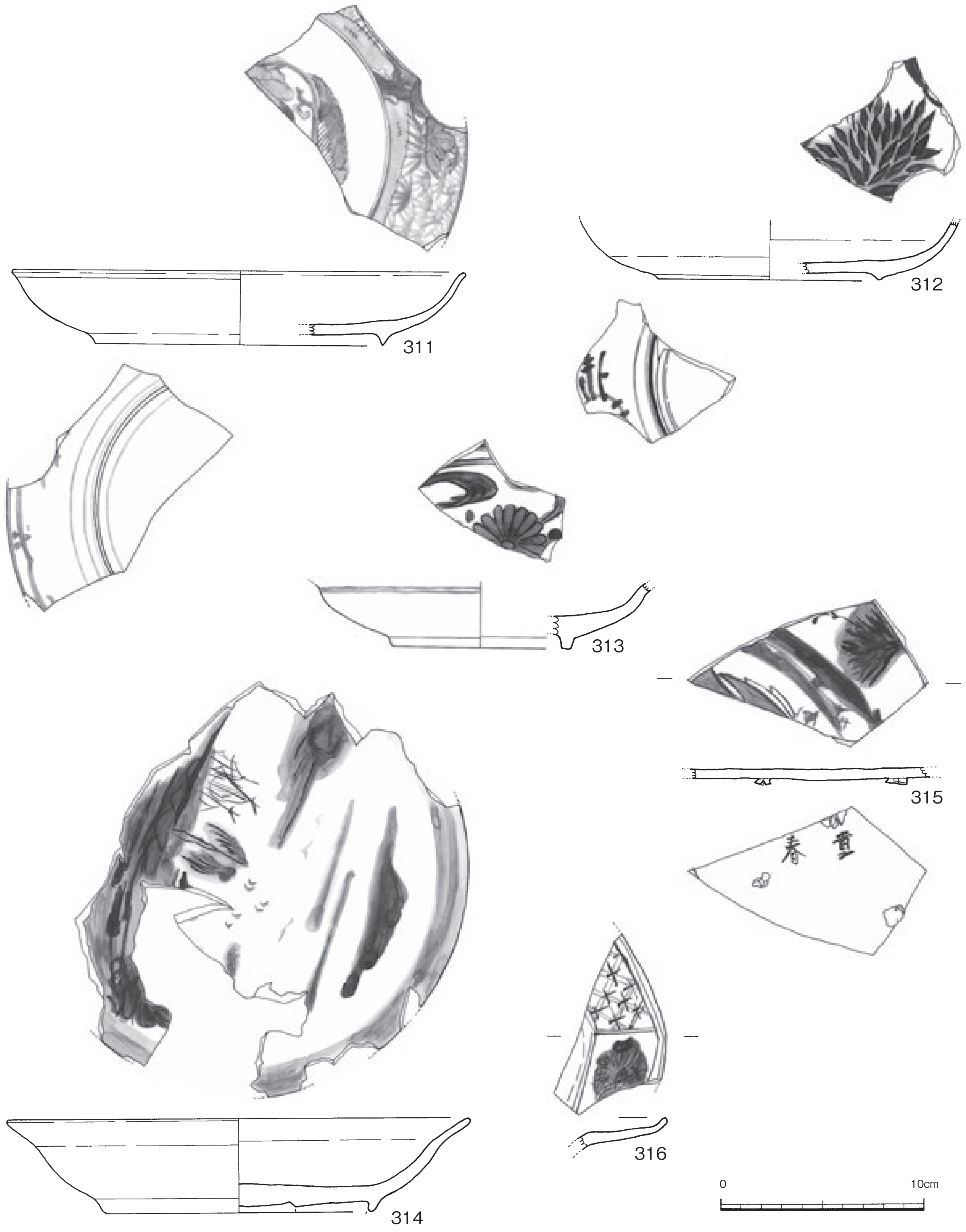
303 ～ 310 は小坏である。303 ～ 306 は，外面に染付が描かれるものである。

307 ～ 310 は白磁である。307 は高台と体部の境にくびれがなく，一直線に立ち上がる形状を呈する。

皿（第110・111図）

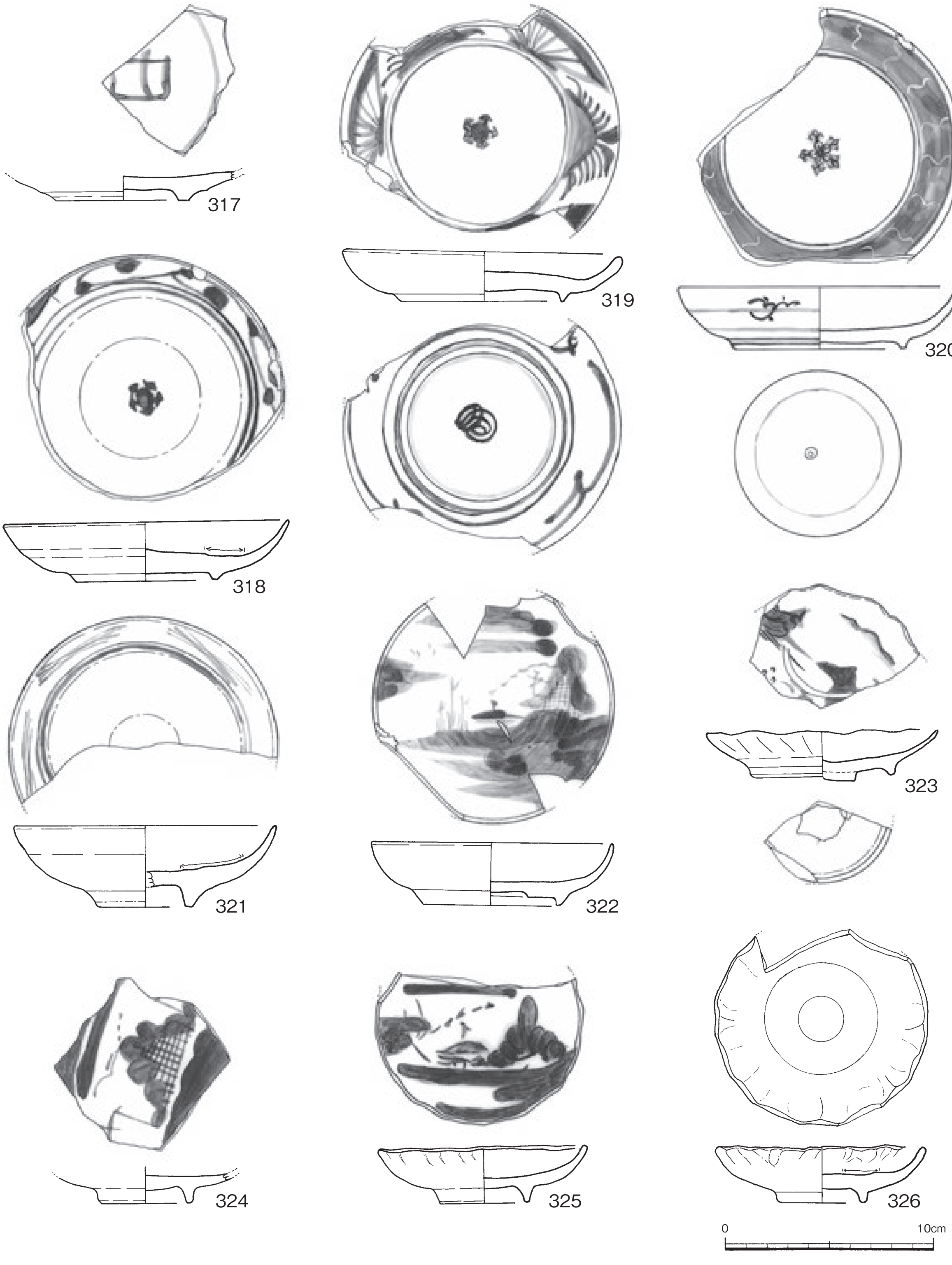
皿については，大皿（口径22cm以上）・中皿（口径12cm～15cm）・小皿（口径10cm～12cm未満）の３つに細分化した。

311～316は大皿である。311は口縁端部がわずかに外反するものである。312は裏文様の唐草

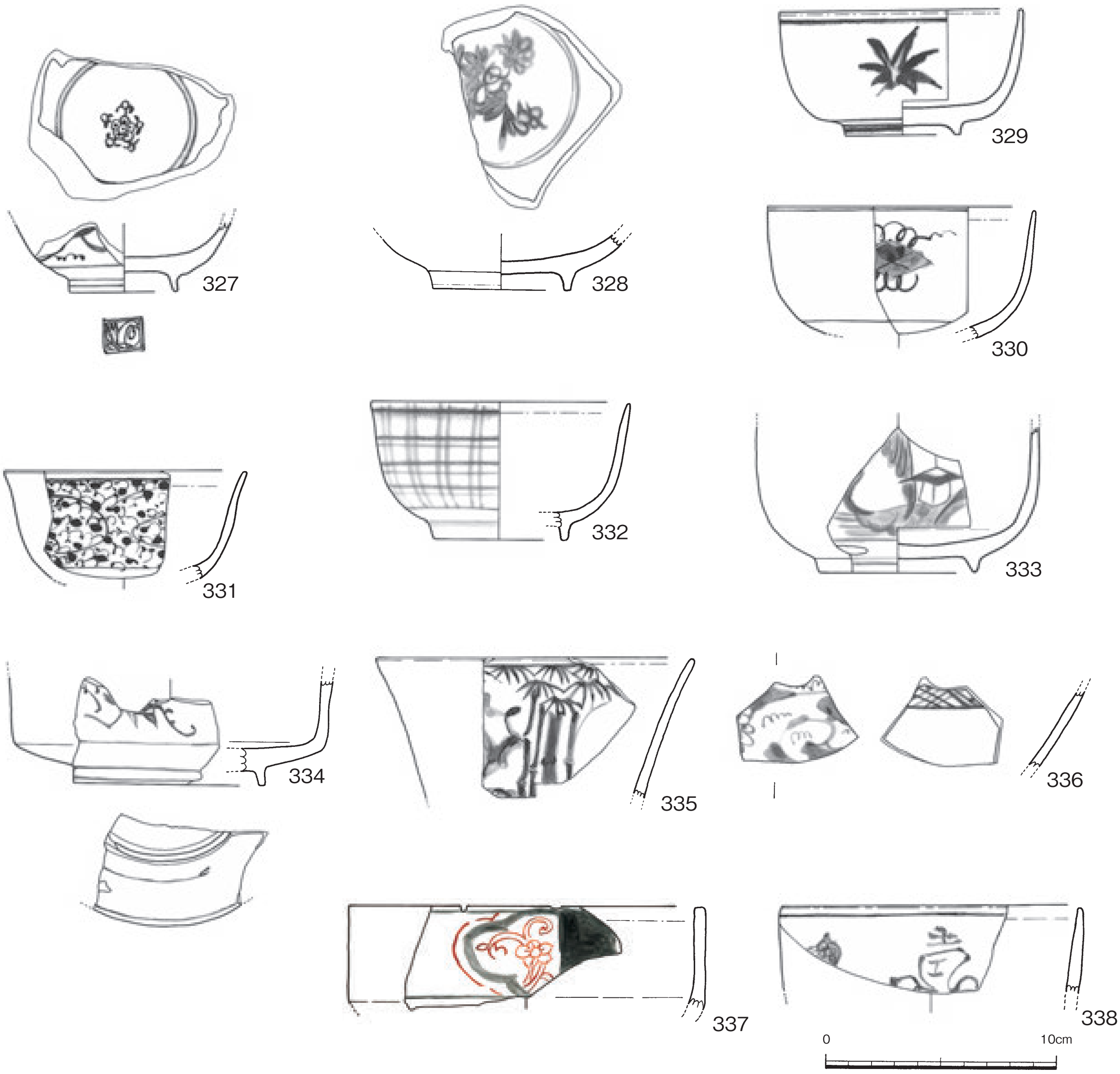


第108図　中世～近世の出土遺物８　国内産磁器

文が崩れず描かれている。313・314は折れ縁の皿である。314は蛇ノ目凹型高台を呈する。白化粧土をかけた後，呉須により山水文を描く。315は底面のみの資料である。高台内底面にはハリ支えの粘土が熔着する。また，裏銘が描かれており，「貴・春」の二文字がみられる。316は一部であるため詳細は不明であるが，六角ないしは八角の皿になるものと思われる。



第109図　中世～近世の出土遺物９　国内産磁器



第 110 図　中世～近世の出土遺物 10　国内産磁器

317 ～ 322 は中皿である。317 は見込みに「日」の字が描かれるもので, 日の字鳳凰文皿と思われる。高台には砂が付着する。318・319 は見込みにコンニャク印判五弁花がスタンプされるものである。318 は見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施される。319 は裏銘に「渦福」が描かれる。胎土は灰色を呈する。320 は見込みに手書き五弁花が描かれる。内側面は墨弾きの技法により白線を描き，その間をダミで塗りつぶす。321 は高台径が小さく，見込みには幅の広い蛇ノ目釉剥ぎが施される。在地産のものと思われる。322 は，高台が蛇ノ目凹型高台を呈するものである。見込みに鉋の削り痕が輪状に残る。在地産と思われる。

323 ～ 326 は小皿である。すべて在地産のものと思われる。323 ～ 325 は内面に山水文が描かれるもので，323・325 は口縁部が輪花をなす。326 は白磁である。口縁部が輪花をなし，見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施される。

鉢（第110図）

327 ～ 338 は鉢である。327 ～ 329 については鉢としたが，碗の可能性も考えられる。327 は見込みに手書き五弁花，裏銘は二重枠の「角福」が描かれる。328 は外面が青磁釉のもので，裏銘に「大明年製」の文字が描かれる。329 は腰が張り，丸みを帯びる形状のもので，高台も低く短い。330 ～ 332 は蓋付きの鉢で，口縁部内面は釉剥ぎされる。334 は腰部が強く屈曲する筒形を呈する。335・336 は体部が外側に外反するもので，外面には笹文が描かれる。

337・338 は段重である。口縁内面は釉剥ぎされ，蓋が被るものと思われる。337 は色絵である。上絵が剥落している。338 は外面に宝船の文様が描かれる。対になると考えられる同じ文様の蓋（第 112 図 352）も出土している。

蓋（第111・112図）

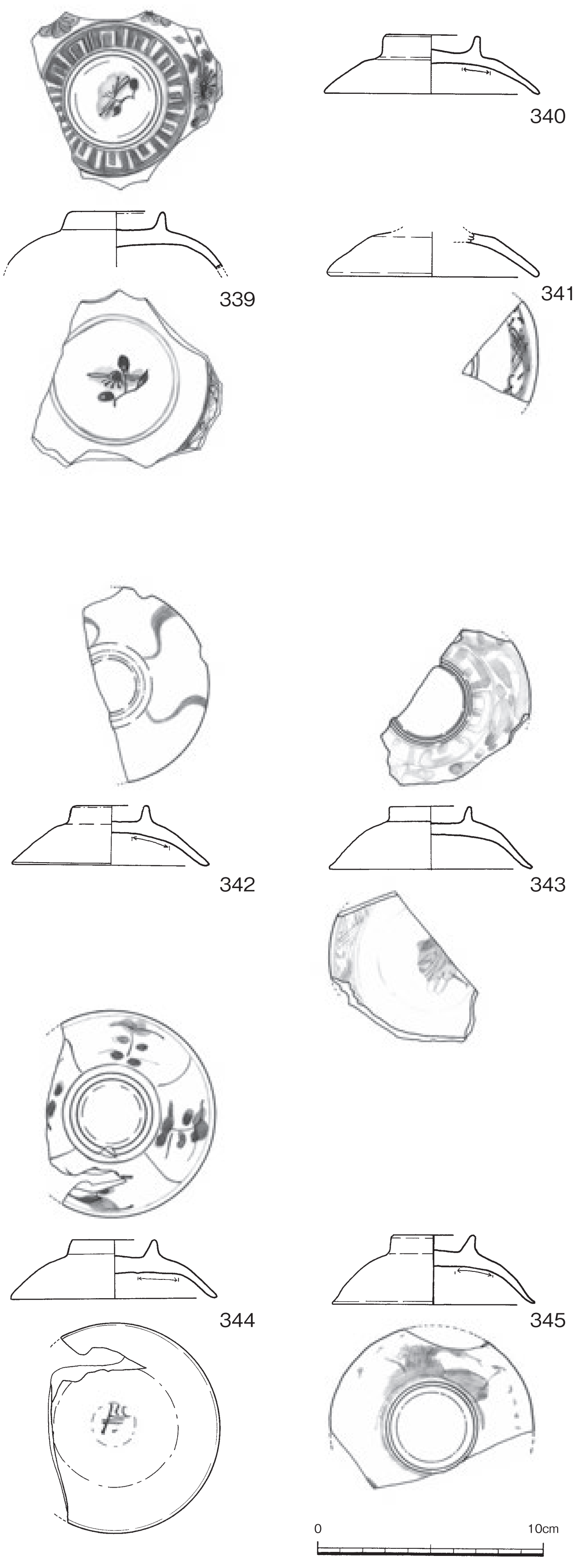
様々な器種に被せられるものを，蓋として分類した。本遺跡では，碗蓋，段重蓋，土瓶蓋，壺蓋が出土している。

339 ～ 345 は碗蓋である。碗蓋は身と対になっているため，文様や形状はほぼ一致する。

339 は丸碗の蓋である。340・341 は朝顔形の蓋である。340 は白磁，341 は外面青磁釉の碗蓋である。342 ～ 345 は端反碗の蓋である。

346 ～ 352 は段重蓋もしくは蓋物の蓋である。これらは類似するため分類が困難である。つまみの形状により大きく２つに分類した。

346 ～ 350 はアーチ状のつまみを有する蓋である。身受け部は釉剥ぎされる。351 は球状のつまみを有する。身受け部の釉は釉剥ぎされる。353 は白磁の土瓶もしくは急須の蓋である。354 は磁製の壺蓋である。



第111図　中世～近世の出土遺物11　国内産磁器

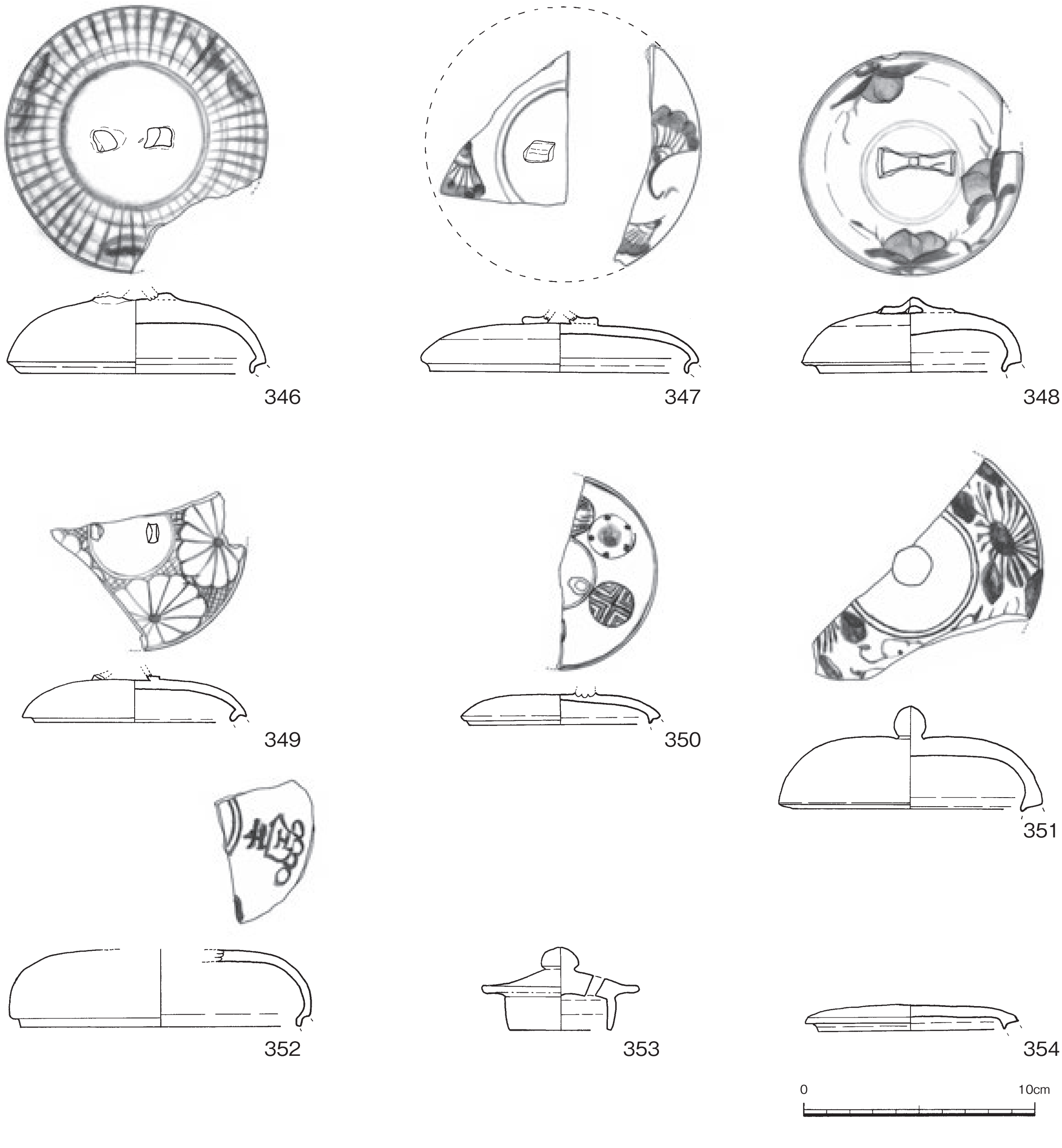
瓶（第 113 図）

袋状の形状を呈し，口縁部より液体を注ぐものを瓶として分類した。355 ～ 358 が瓶に相当する。本遺跡では徳利，油壷が出土した。

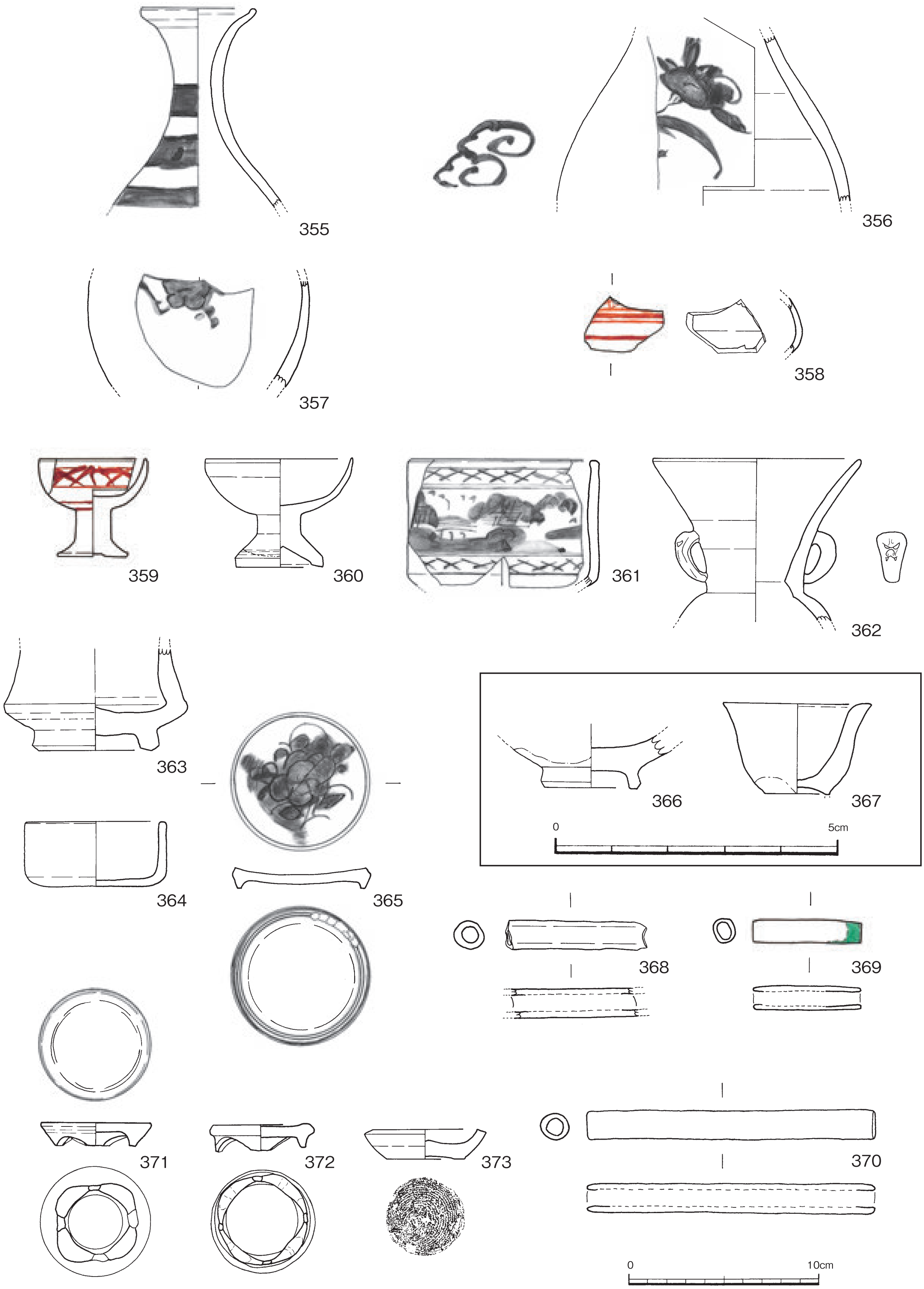
355 ～ 357 は徳利である。355 は頸部が細くくびれ，口縁部はラッパ状に開く形状を呈する。外面にはダミによる横線が 3 条観察される。356・357 は胴部である。全体の形状は不明であるが，内面が無釉であることから瓶とした。358 は赤絵の油壷である。

仏具（第 113 図）

359 ～ 363 は仏具である。359・360 は仏飯器で，359 は赤絵，360 は白磁のものである。361 は



第 112 図　中世～近世の出土遺物 12　国内産磁器



第 113 図　中世～近世の出土遺物 13　国内産磁器

香炉である。内面は無釉で，外面には山水文が描かれる。362・363 は白磁の仏花器である。同一個体ではないかと思われる。胎土が灰褐色を呈するため, 白化粧土をかけた後透明釉がかけられる。

その他の磁器（第 113 図）

特殊な用途のものや出土点数が少ないもので，分類を行わなかったものを「その他の磁器」として掲載した。

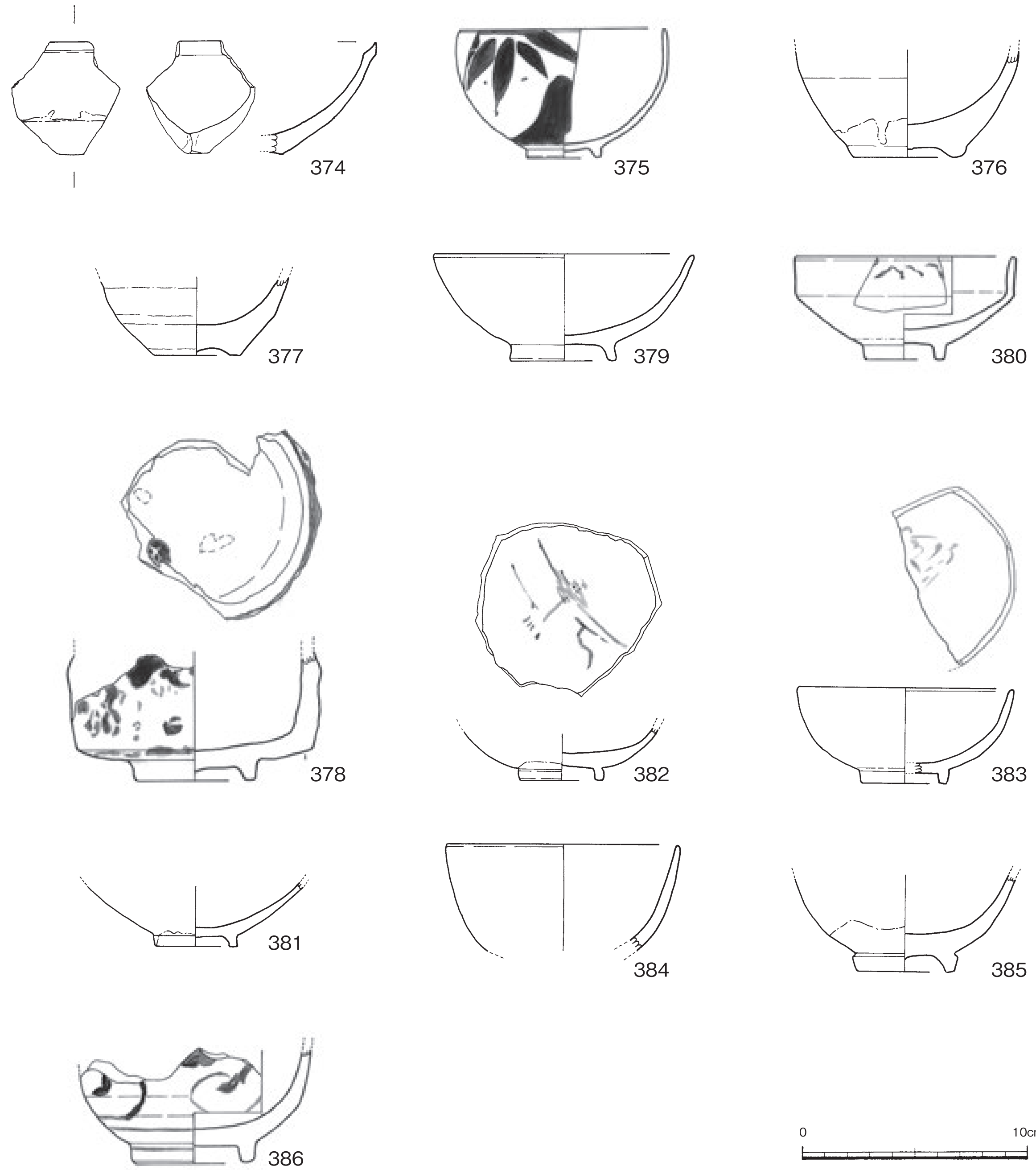
364 は鳥の餌入と思われる。白磁の資料であるが，胎土の質が悪いため，白化粧土をかけた後透明釉がかけられる。365 は皿であるが，底部が鋭い刃物状の工具で円形に切り取られた資料である。用途は不明である。366・367 は玩具である。お飯事道具と思われる。陶製や土師質のものも出土している。(第 135 図 538・539)　366 は碗，367 は小坏の形状を呈する。368・369 は馬の尻がいである。368 は内外面とも無釉で，369 は外面の一部に緑色の釉薬がみられる。370 は 368・369 と同様に，内外面とも無釉の資料であるが，長さが 15㎝と長く，馬の尻がいではないと思われる。近代以降の電線等を束ねた磁製の容器とも考えられる。371 ～ 373 は窯道具である。371・372 は抉られた高台がつく切り高台付ハマで，373 はチャツである。3 点とも磁製のもので，磁器を焼く窯場で使用される窯道具である。本遺跡の近隣には，18 世紀後半から開かれた磁器を焼成した平佐系窯場が存在することから，そこで使用されていた窯道具が，製品と一緒に混入して流通したものと考えられる。

国内産陶器

国内産陶器としては，関西産（京焼），瀬戸･美濃産，肥前産，在地産（薩摩焼堅野系･龍門司系･苗代川系）の陶器が出土している。分類にあたっては，器種ごとの分類のほか，判別できるものについては産地を重視した。

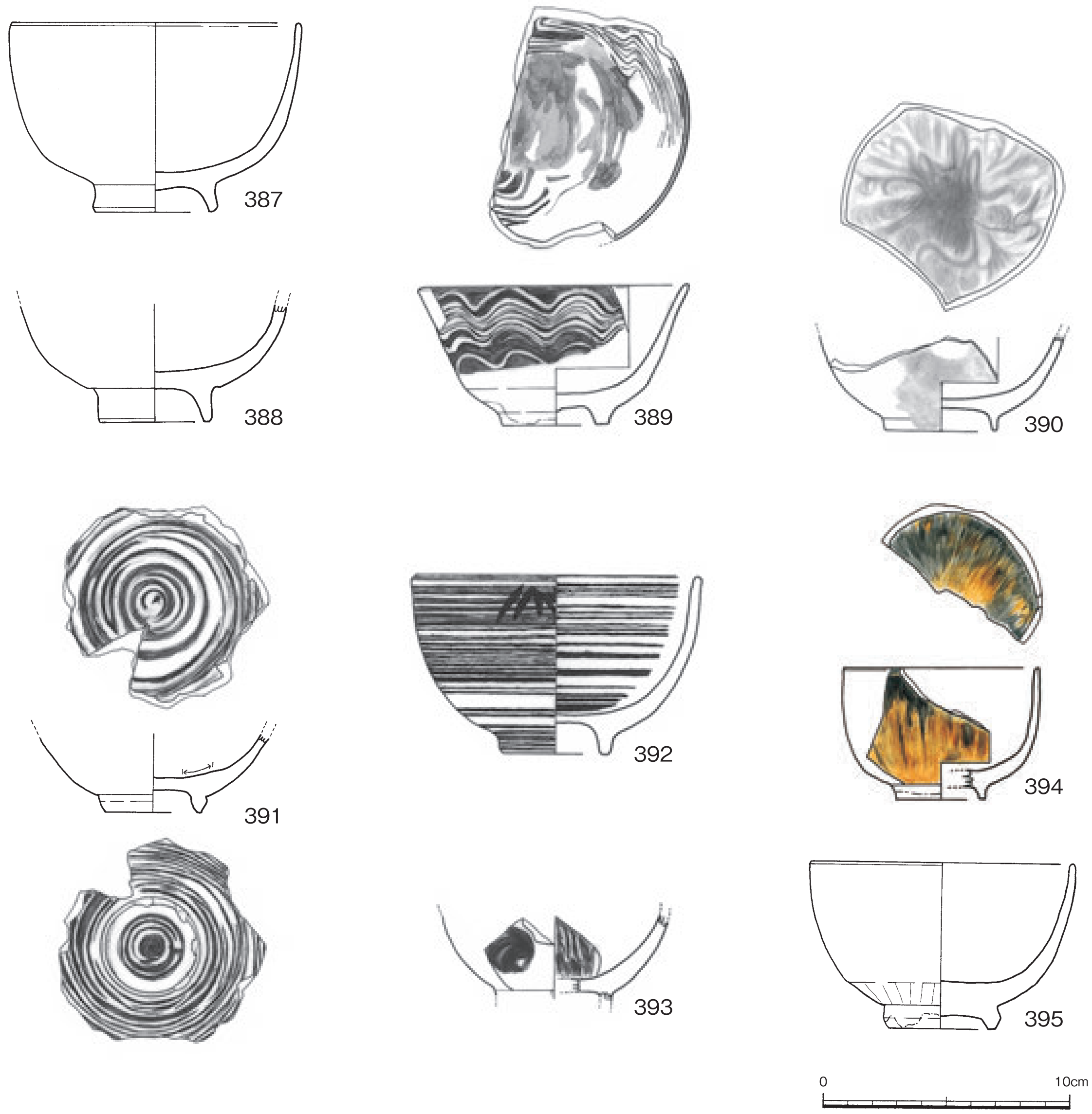
碗（第 114 ～ 116 図）

374 は瀬戸・美濃産と思われる天目碗である。胎土は浅黄色の色調を呈し，褐色の化粧土の上から黒釉がかけられる。375 は京焼である。体部は丸みを帯び，口縁部は内湾する。外面には笹文が色絵で描かれるが，上絵付けのため剥落している。釉は外面高台脇以下高台内底面まで露胎する。376 ～ 386 は肥前陶器である。376 は鉄絵唐津と思われる資料で，残存部の端部にわずかに鉄絵が観察される。胎土は橙色を呈し，灰色の灰釉がかかるが，外面腰部以下は露胎する。377 も唐津焼である。鉄絵等は見られないが，胎土目段階の資料と思われる。378 は腰部が強く屈曲した半筒形のもので，織部好みの沓形風のものである。外面は腰部まで黒釉が厚くかかり，その上から乳白色の藁灰釉がかかる。379 ～ 383 は京焼風陶器である。379 は高台内底面まで施釉されるが，ほかは外面腰部以下高台内底面まで露胎する。380 は煎じ碗形を呈し，外面に笹文が描かれる。381 は底部のみであるが，体部の開き具合から，380 と同様の煎じ碗形になるものと思われる。382・383 は見込みに鉄絵が描かれる。384 は内野山窯系と思われるもので，胎土は灰黄色を呈し，釉は外面に銅緑釉，内面に透明釉がかけられる。385 は内面に透明釉，外面腰部まで銅緑釉がかかるもので，胎土は灰褐色を呈する。高台と体部の境にはくびれを有する。385 は陶胎染付である。灰色を呈す



第 114 図　中世～近世の出土遺物 14　国内産陶器

る胎土の上に，呉須で文様が描かれる。387・388 は呉器手の碗で，腰部が張り丸みを帯びる。胎土は灰白色の色調を呈し，透明釉が畳付を除き総釉でかけられる。釉には貫入が観察される。389 ～ 392 は内外面に，白土による刷毛目が施されるものである。389 は釉の上から内外面に波状の刷毛目が施される。390 は内外面に打刷毛目が施される。391・392 は内外面に巻刷毛目が施されるもので，392 は外面口縁部に鉄絵の笹文が描かれる。393 は外面蛍手，内面打刷毛目の資料である。394 は筒丸形の碗である。褐釉の上から黒釉がかけられるもので，畳付には胎土目と思われる粘土



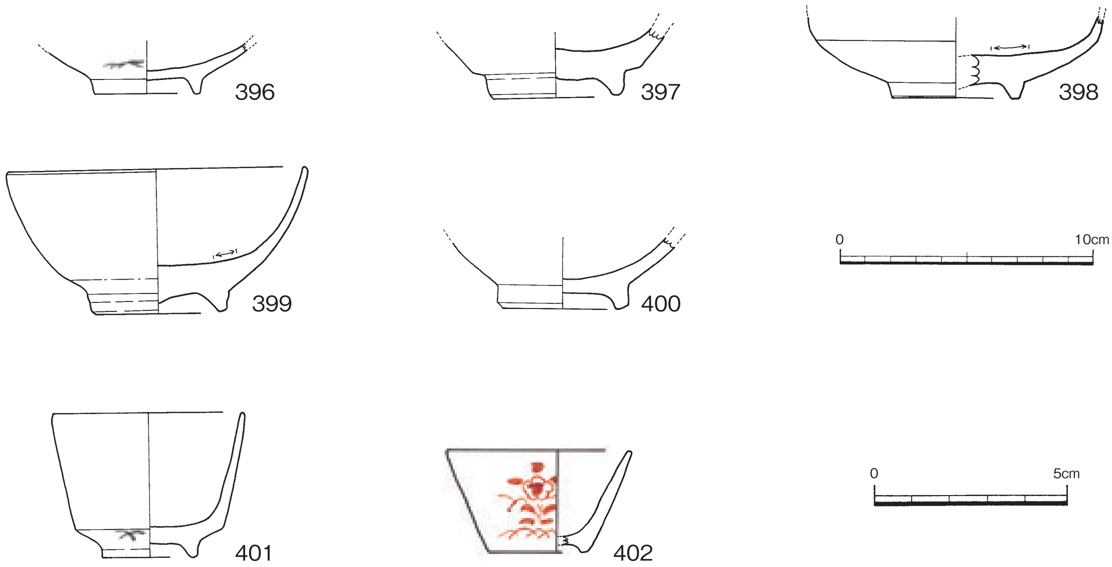
第 115 図　中世～近世の出土遺物 15　国内産陶器

が熔着する。

395 は白化粧土の上から透明釉がかけられた碗で，高台脇から高台内面は無釉である。腰部に鉋削りの痕跡が残る。

396 ～ 399 は薩摩焼である。396・397 は一般的に白薩摩と称される白色陶胎の碗で，堅野系のものと思われるが，397 については苗代川系堂平窯産の可能性も考えられる。386 は外面腰部に呉須による千鳥が描かれる。397 は器壁も厚く，全体的に稚拙なつくりである。畳付に目跡と思われる痕跡が残る。398・399 は龍門司系の資料である。3 点とも外面には褐釉がかかる。

398 は腰部で内側へ屈曲する形状を呈する。見込みは蛇ノ目釉剥ぎが施される。399 の見込みにも蛇ノ目釉剥ぎが観察される。400 は，肥前系陶器の碗で，高台の削りが丸みを帯びる。



第 116 図　中世～近世の出土遺物 16　国内産陶器

小坏（第 116 図）

401 は薩摩焼堅野系の小坏である。白色陶胎の白薩摩で，外面腰部に鉄釉による千鳥が描かれる。402 は肥前産の赤絵の小坏である。胎土は白色陶胎で，外面に草花文が描かれる。

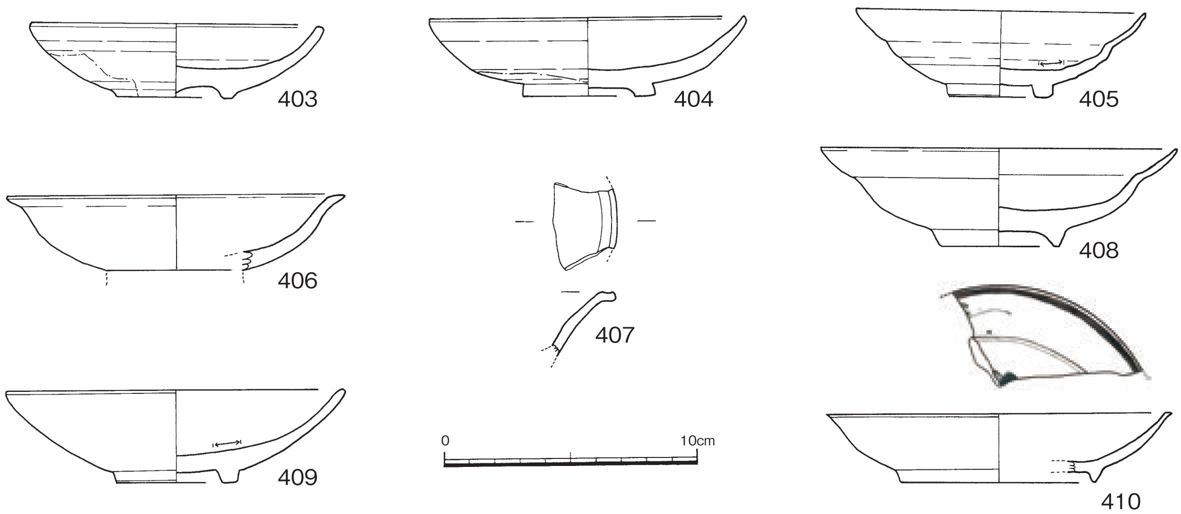
皿（第 117・118 図）

皿については，小皿（口径 12.5cm以下），中皿（口径 12.5cm以上），大皿（口径 19cm以上）の 3 つに細分類した。大皿については鉢に分類できる可能性のあるものもあるため，小皿・中皿・大皿の順で掲載する。

403 ～ 405 は小皿である。肥前産である。403・404 は一般的に唐津焼と称されるもので，見込みに胎土目が観察される。405 は内野山窯系のもので，外面に透明釉がかかる。外面は腰部以下露胎し，見込みは蛇ノ目釉剥ぎされる。

406 ～ 410 は中皿である。肥前産である。406 は口縁端部が外側に屈曲し，上部を平坦につくるものである。407 は溝縁皿の口縁部である。図化はしなかったが，おおよその復元口径より中皿に分類した。408 は見込みに砂目が観察される。胎土は黄色みを帯び，高台内面の削りは丸みを帯びる。409 は内野山窯系のものである。内外面に銅緑釉がかかるものと思われるが，釉の発色が悪い。見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施される。410 は口唇部に口錆が施されたもので，内側面と見込みに呉須による文様が描かれる。

411 ～ 417 は大皿である。深さのある形状のものもみられるため，鉢として分類できる可能性も考えられる。411 は口唇部が溝縁をなすものである。見込みには円形の釉剥ぎが施され，鉄絵が描かれる。412 は褐釉に鉄絵が描かれるもので，見込みには胎土目が観察される。413 は口縁部内面に白土による刷毛目が施されたものである。見込みの蛇ノ目釉剥ぎは赤褐色に着色される。414 は内面に巻刷毛目が施されたもので，見込みに輪状の目跡が残る。415 は内野山窯系のかけ分けの皿



第 117 図　中世～近世の出土遺物 17　国内産陶器

である。銅緑釉と褐釉がかけ分けられる。416・417 は口縁部が折れ縁状を呈するものである。416 は屈曲部が短く，溝縁口縁とも捉えられる。白土による刷毛目が施される。417 は白土による刷毛目と化粧土の上に鉄釉で文様が描かれる。

鉢（第 118 図）

ここで取り扱う鉢は，食膳具としての鉢である。こね鉢等の調理具としての鉢は後述する。

418 ～ 420 は肥前産の資料である。418 は口縁部が玉縁状を呈するもので，見込みには窯道具の脚部の目跡が 6 か所観察される。419 は巻刷毛目のものである。高台内底面に砂粒の混じる白色の粘土が熔着する。420 は鉢に分類したが，詳細な用途は不明の資料である。内野山窯系のものと思われるが，内外面とも銅緑釉と褐釉のかけ分けが施される。

蓋（第 119 図）

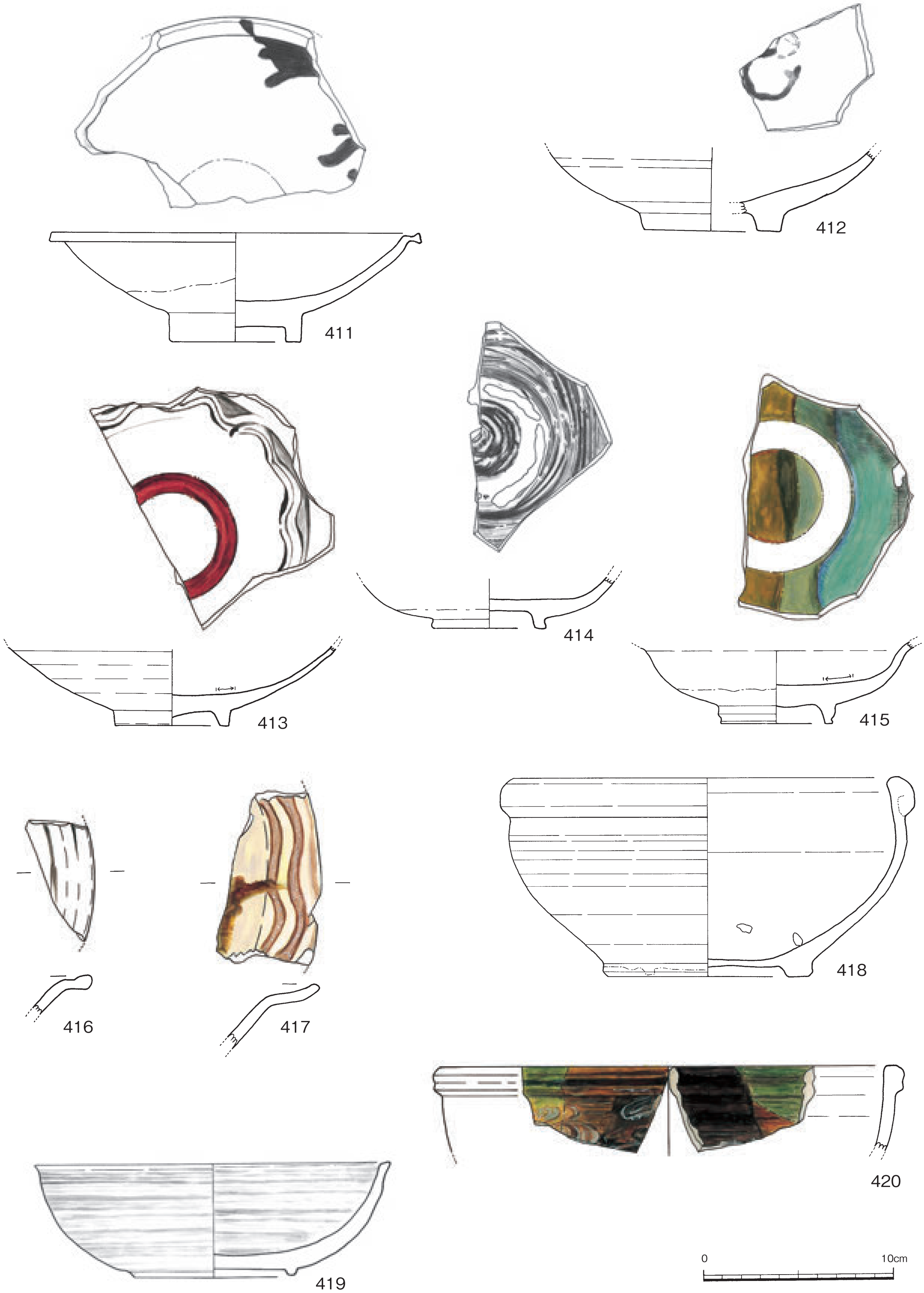
ここでは，甕等に被せられる浅鉢形以外の蓋を報告する。主に土瓶蓋が中心であるが，本遺跡からは陶製の瓶蓋も出土している。

421・422 は薩摩焼堅野系のものである。421 は白色陶胎の白薩摩で，土瓶もしくは急須の蓋と思われる。422 は灰色の色調を呈する胎土に,白土による象嵌が施される三島手で,急須蓋と思われる。423・424 は薩摩焼苗代川系の土瓶蓋である。上面には鉄釉がかかる。425 は薩摩焼龍門司系の壺蓋と思われる。胎土は赤褐色を呈し，上面に白土による短曲線が描かれる。

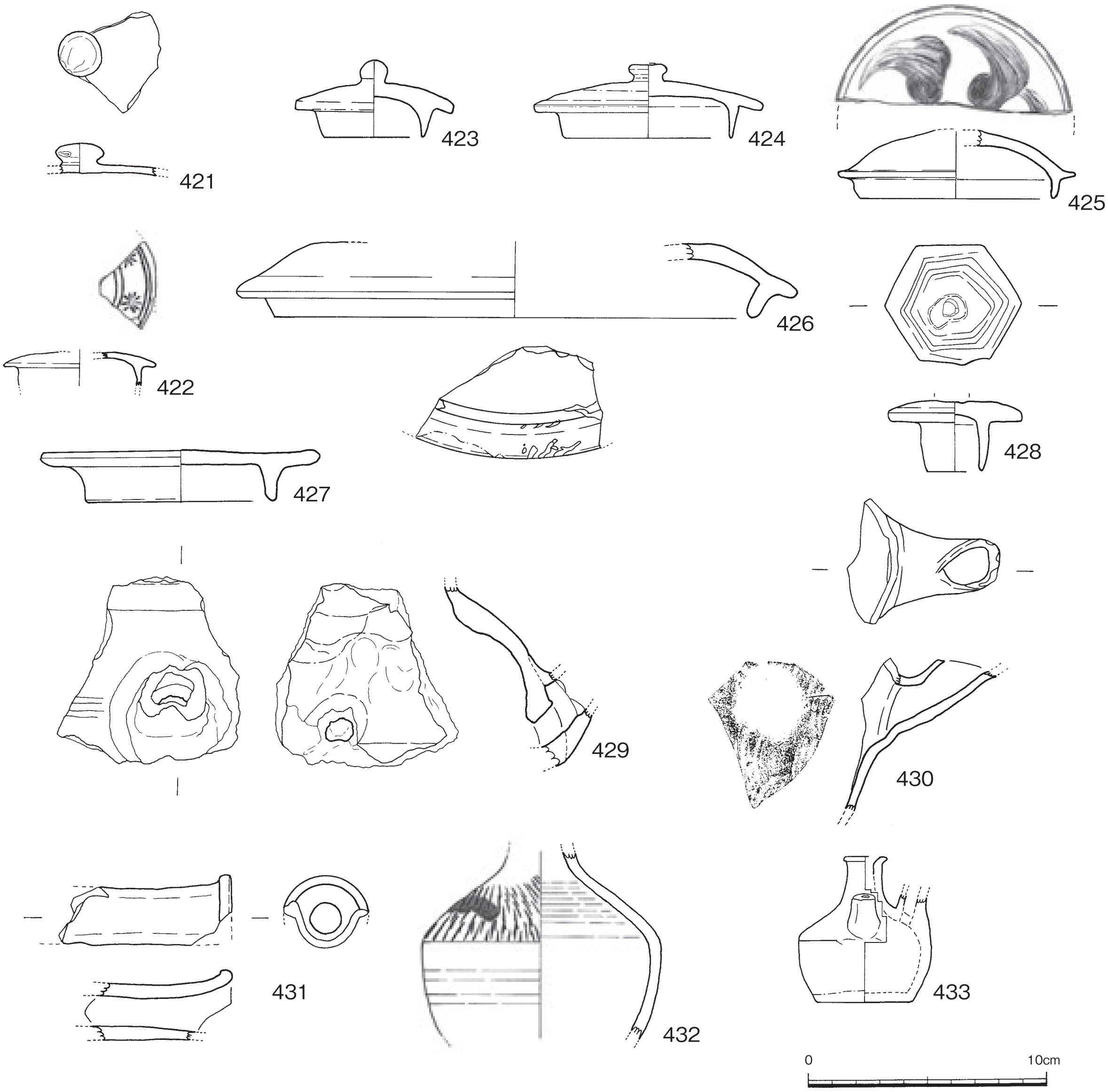
426 は鍋・釜等の蓋である。薩摩焼苗代川系のもので，釉剥ぎされた身受け部と口唇部に渡って貝目が観察される興味深い資料である。

427 は壺蓋である。薩摩焼苗代川系のもので，焼き締めである。初期の薩摩焼である堂平窯産の可能性が考えられる。

428 は瓶蓋である。薩摩焼苗代川産のものである。上面は六角形を呈し，中央に突起物がつくものと思われるが欠損している。



第 118 図　中世～近世の出土遺物 18　国内産陶器



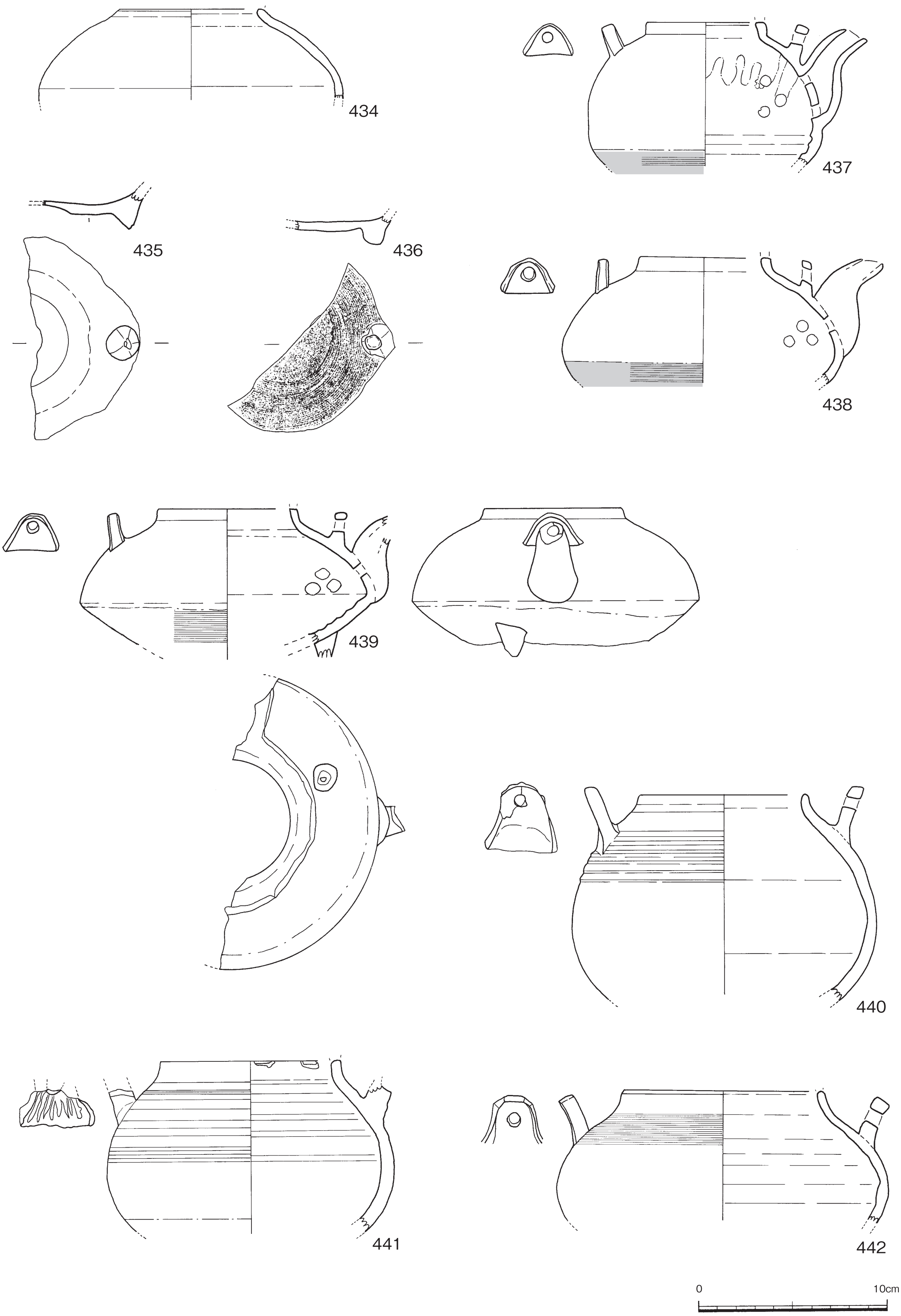
第 119 図　中世～近世の出土遺物 19　国内産陶器

水注（第 119 図）

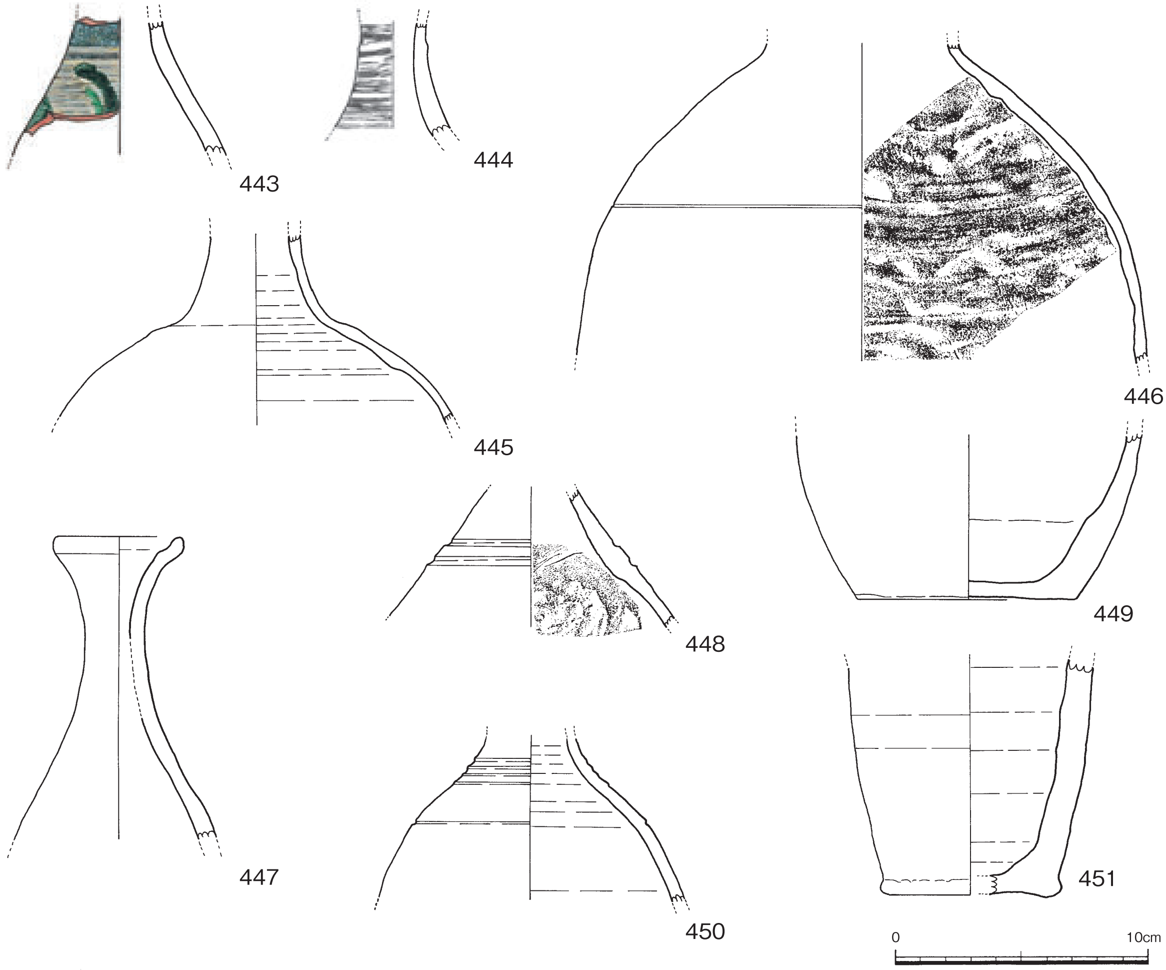
注口を有する形状のもので，火にかけないものを水注とした。

429 は，外面に黄緑色の釉がかかる瀬戸産の灰釉陶器である。中世前半（13 世紀頃）のものと思われる。注口脇の肩部に櫛目状の文様が施される。

430 ～ 433 は薩摩焼である。430・431 は苗代川系のものである。430 は巻口の注口部である。注口に向かって右側を上に巻く。焼成不良のためか，胎土は鈍い橙色を呈し，灰釉も熔けきっていない。堂平窯産のものと思われる。431 は，水注の把手部である。432・433 は，龍門司系のものである。432 は焼酎の酒器で，「からから」と称されるものである。外面に飛び鉋が施される。433 は，小形の水注である。肩部は強く屈曲し，稜を有する。褐釉が外面腰部までかかる。詳細な用途は不明である。



第 120 図　中世～近世の出土遺物 20　国内産陶器



第 121 図　中世～近世の出土遺物 21　国内産陶器

土瓶（第 120 図）

すべて薩摩焼である。434･435 は堅野系のもので，内外面に褐釉がかかる。435 は脚部まで施釉される。436 は底部で，ヘラ状工具による筋状の痕跡が観察される。437 は丸形のものである。438・439 は平形のものである。438 は胴部に稜を有さず，丸みを帯びるものである。439 は胴部に稜を有し，ソロバン玉形を呈するものである。440 ～ 442 は外面肩部に筋状の細い沈線が施されるものである。器面調整としてではなく，文様を意識して施されたものと思われる。耳は型作りであるが，441 は装飾が施される。

徳利（第 121 図）

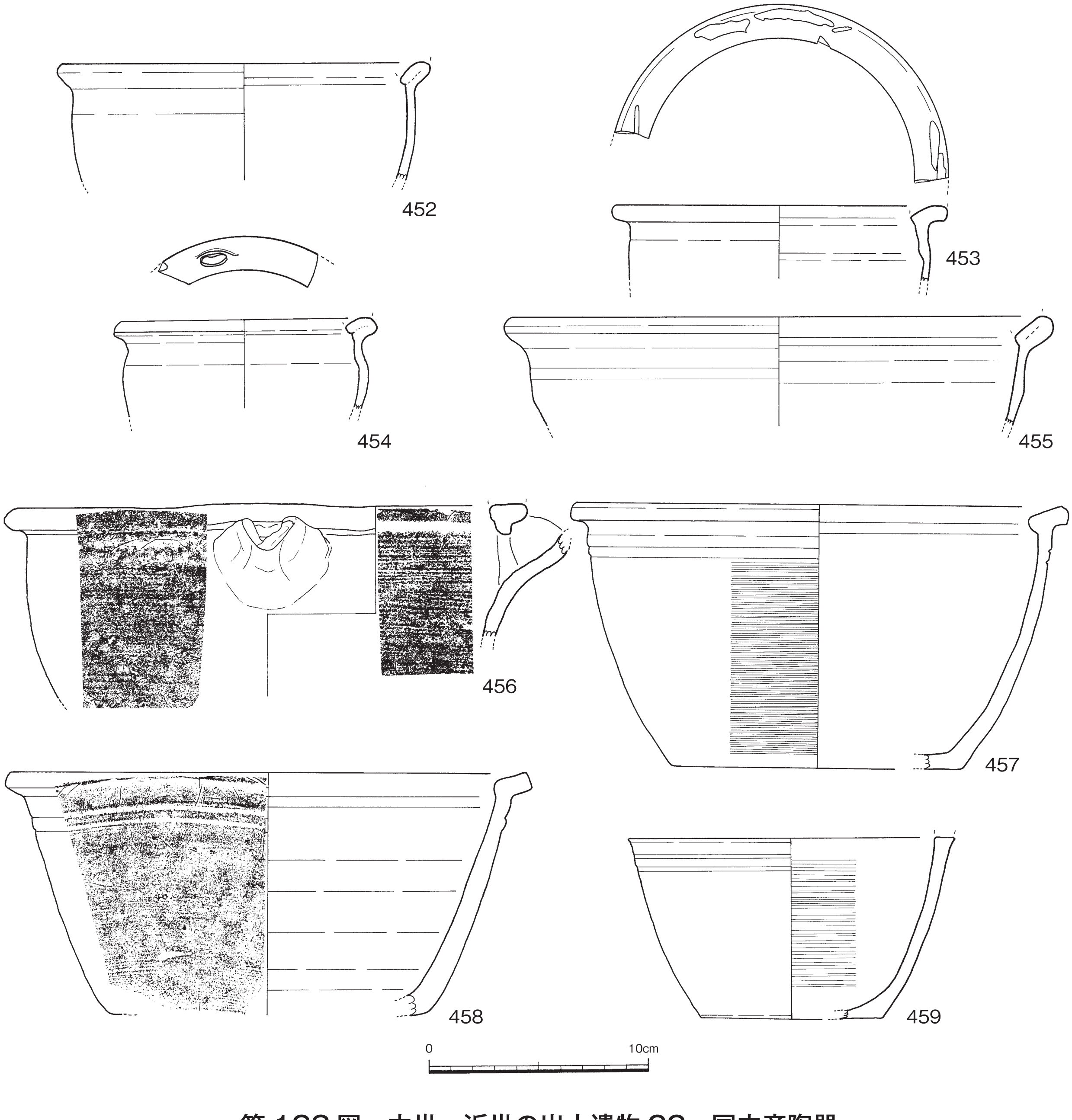
443・444 は肥前陶器である。どちらも外面に白土による刷毛目が施され，その上から，443 は緑釉で，444 は褐釉で文様が描かれる。445 は薩摩焼堅野系のものと思われる。胎土は鈍い灰褐色を呈し，外面に赤みを帯びた褐釉がかかる。446 は，内面にタタキ成形時のあて具痕が残るもので，外面肩部には 1 条の沈線が巡る。胎土は灰褐色を呈し，内外面に黄色みを帯びた灰釉がかかる。初期の薩摩焼古窯である串木野窯産の可能性も考えられる資料である。447 ～ 449 は薩摩焼苗代川系のものである。447 は鶴首形を呈する。堂平窯産と思われる。

448 は肩部に 2 条の沈線が巡る。449 は底部である。450・451 は琉球産の荒焼である。450 は頸部に 4 条，肩部に 1 条の沈線が巡る。451 は「鬼の腕」と称される泡盛用の酒瓶である。

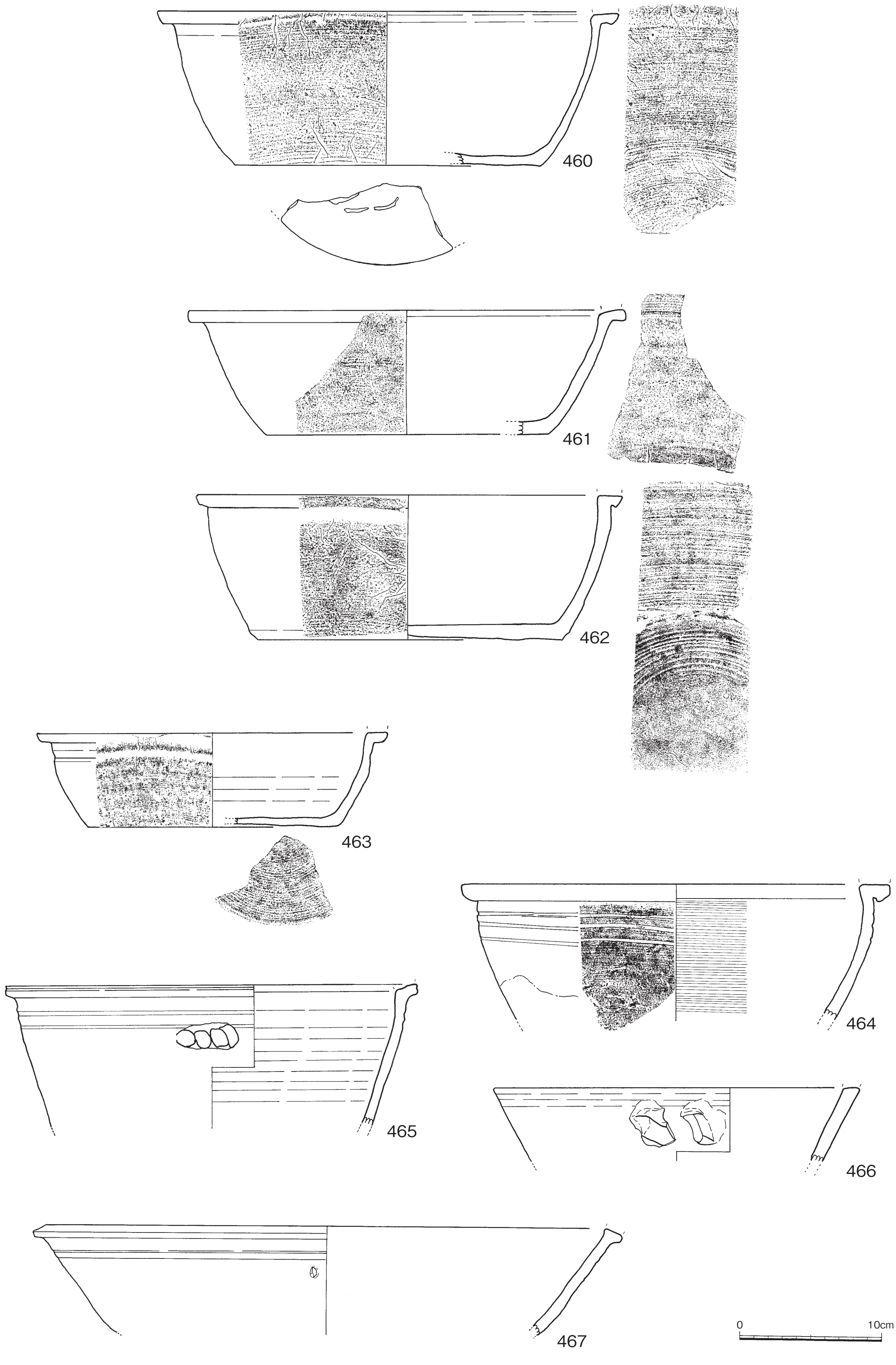
片口（第 122 図）

片口については，残存していないものもあるが，口縁部下位に 1 か所片口がつくと思われるものを片口として分類した。すべて薩摩焼苗代川系の資料である。

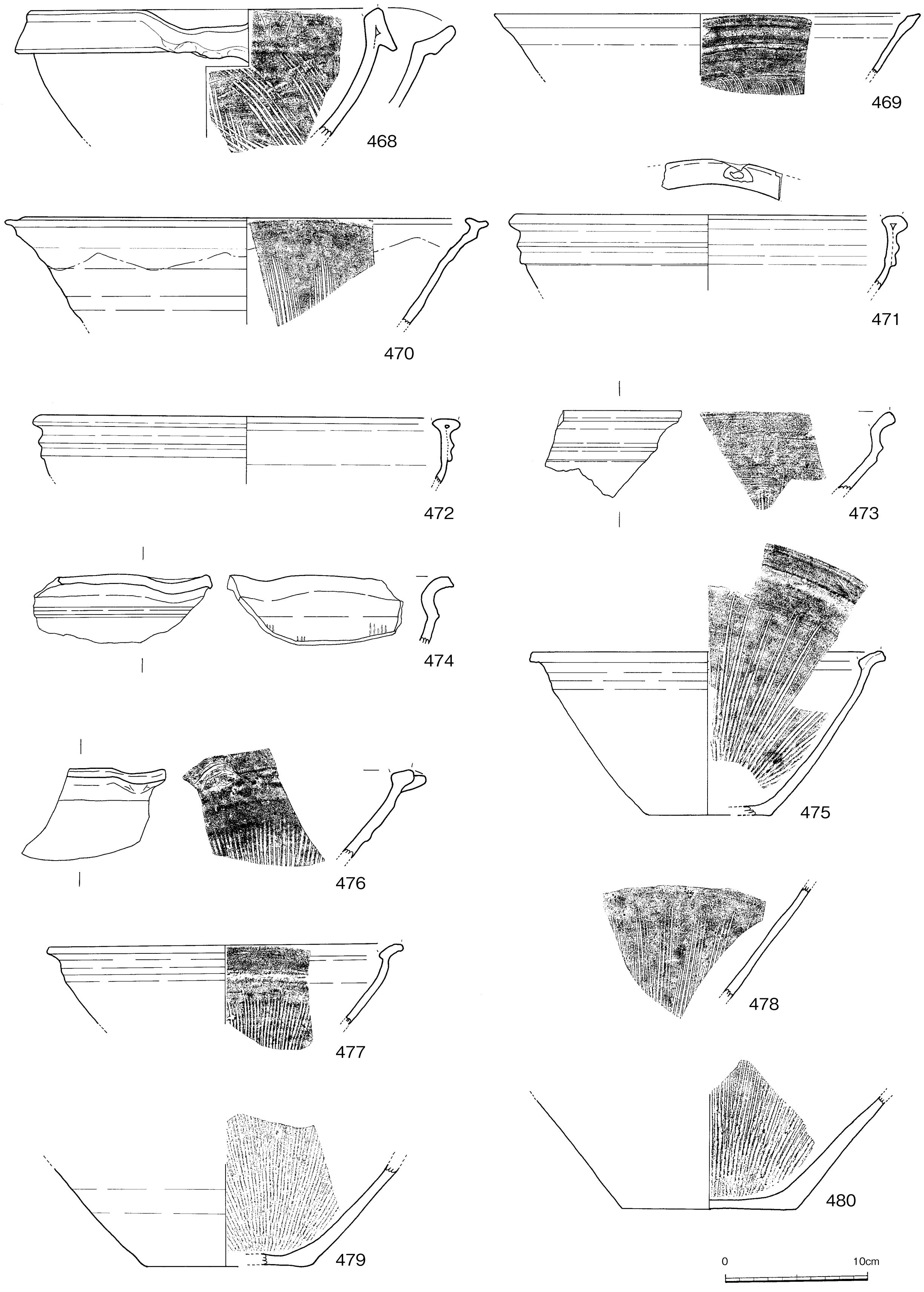
452 ～ 458 の口縁部は，外側から内側に折り曲げて丸くつくられ，口唇部の釉は釉剥ぎされる。453・454 の口唇部には貝目が残り，堂平窯産のものと思われる。456 は片口部が残るものである。内外面に横筋状の調整痕が残る。457・458 は外面に横方向の調整痕が残る。459 は口唇部が平坦につくられるもので，口縁部外面には 2 条の沈線が巡る。器高が高いことから，片口に分類したが，このような口縁形態は浅鉢形の蓋にもみられることから，蓋の可能性も考えられる。



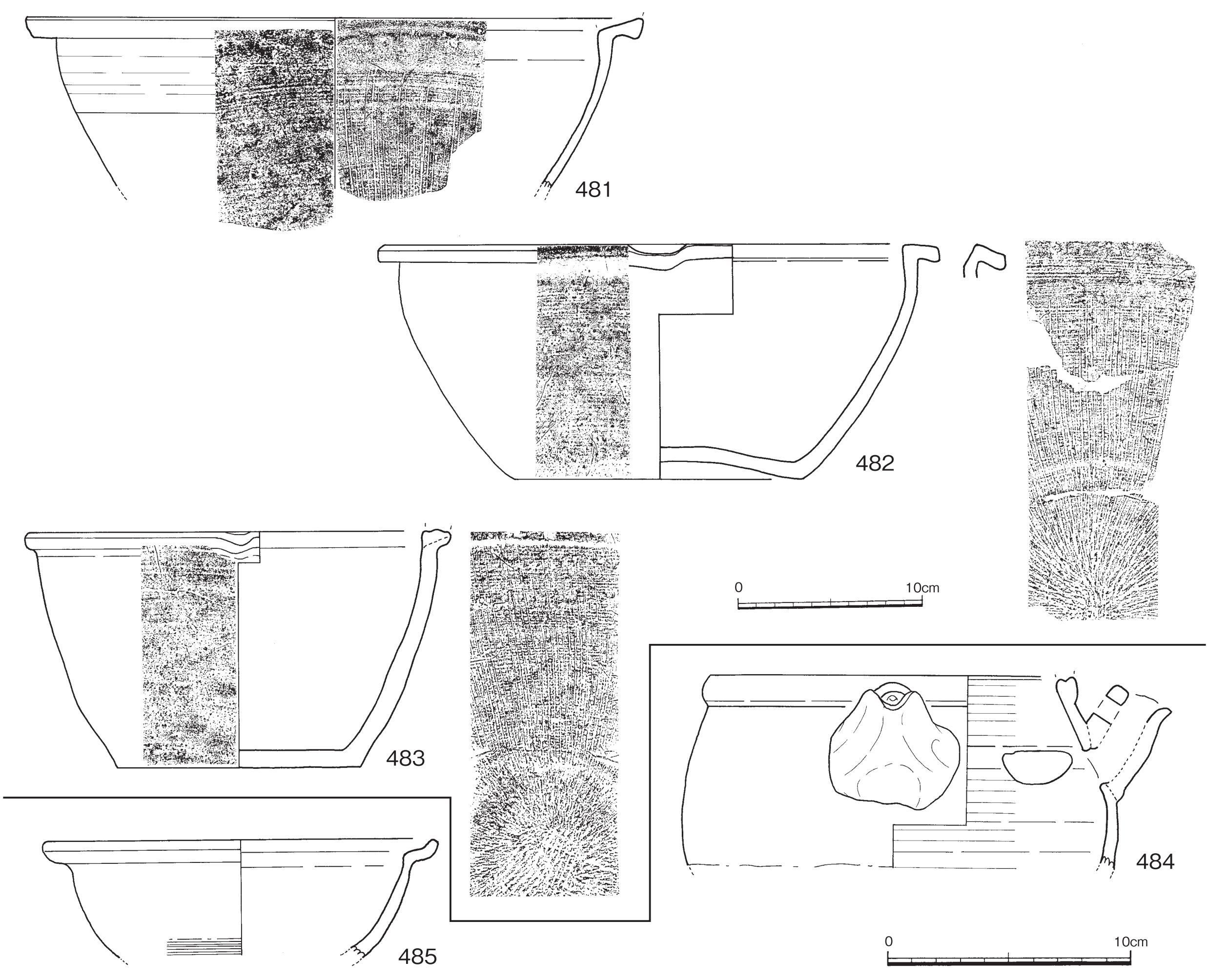
第 122 図　中世～近世の出土遺物 22　国内産陶器



第 123 図　中世～近世の出土遺物 23　国内産陶器



第 124 図　中世～近世の出土遺物 24　国内産陶器



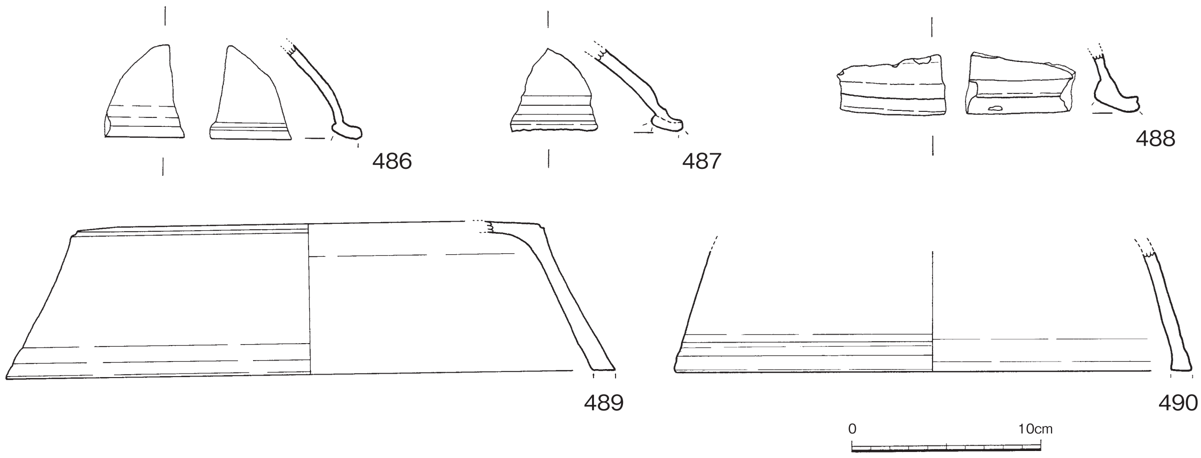
第 125 図　中世～近世の出土遺物 25　国内産陶器

鉢（第 123 図）

鉢はすべて薩摩焼で，苗代川系のものである。460 ～ 463 は口縁部が「Ｌ」字状を呈するものである。内外面はヘラ状工具による器面調整のため，横筋が強く残る。口唇部の釉は釉剥ぎされ，外底面の釉は拭い取られる。鉢として分類したが，浅鉢形の蓋とも捉えることもでき，判断が難しい。464 は口縁部が外側に折れ，断面が三角形状を呈するものである。外面口縁部下位には 3 条の沈線が巡る。465 は口縁部が短く外側に折れるものである。外面に 2 条の弱い沈線が巡り，把手が形骸化したものと思われる突起が観察される。466・467 は，鉢として分類したが，形状から浅鉢形の蓋の可能性も考えられる資料である。466 は口唇部が平坦につくられる。口縁部外面には 2 条の弱い沈線が巡り，「ハ」の字形に把手もつけられる。467 は口縁部が短外側へ屈曲するもので，外面には 2 条の弱い沈線が巡る。

擂鉢（第 124・125 図）

468 は備前産のものである。口縁部は外側に折り返され，断面三角形を呈する。内面には斜位の擂り目が入る。469・470 は肥前系陶器の擂鉢である。釉は口縁部にのみかけられる。



第 126 図　中世～近世の出土遺物 26　国内産陶器

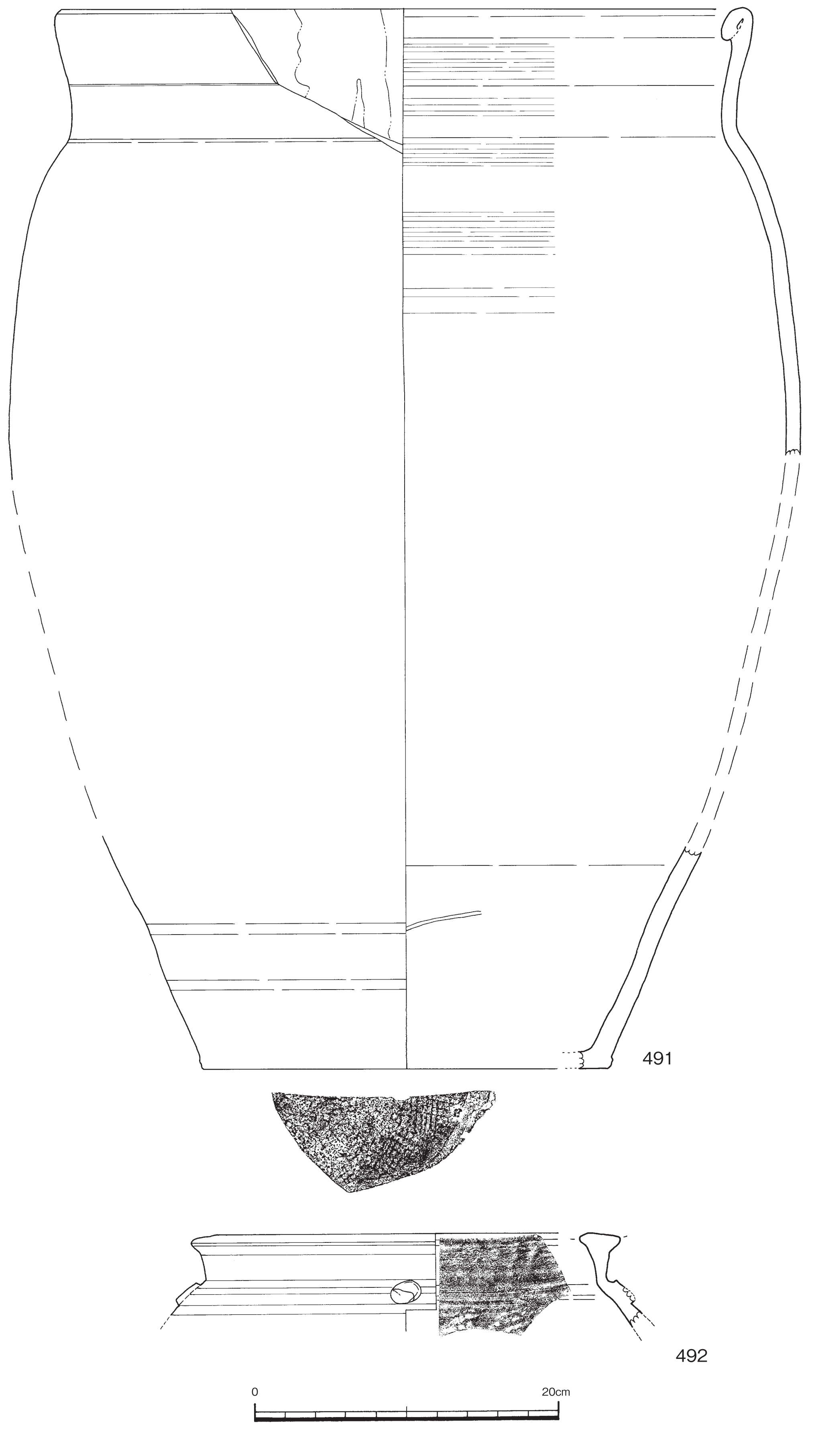
469 は口縁部を内側に折り返して，弱い稜を 2 段つくる。470 は口唇部を平坦気味につくり，「T」字状を呈するものである。471 ～ 483 は薩摩焼で苗代川系の資料である。471・472 は口縁部を外側に折り曲げて肥厚させ，外面口縁下位に 2 条の突帯を巡らせるものである。口唇部は平坦気味につくられる。釉剥ぎされた口唇部には，貝目も観察される。内面は口縁部下位に余白を残して擂り目が施されるため，擂り目が観察できない。どちらも堂平窯産と考えられる。473・474 は口縁端部が外側へのび，「S」字状を呈するものである。外面には低い 2 条の突帯が巡る。内面の擂り目は口縁下位に余白をあけて入る。475 ～ 477 は口縁部を外側から内側に折り返してつくるものである。外面には 2 条の突帯が形骸化したような弱い稜が観察される。内面には余白を残して擂り目が入る。478 は胴部，479・480 は底部である。3 点とも細くシャープな擂り目が密に入る。481 ～ 483 は口縁部が「L」字状を呈するものである。内面の擂り目は細くシャープだが，口縁下位に余白を残さず，上位まで入れられる。また，擂り目の下には横方向の器面調整の痕跡が筋状に入る。

鍋・釜（第 125 図）

484 は鍋である。薩摩焼苗代川系のものである。485 は釜である。苗代川系のもので，片口と耳がつく形状のものである。484・485 とも，外底面には煤が付着する。

蓋（第 126 図）

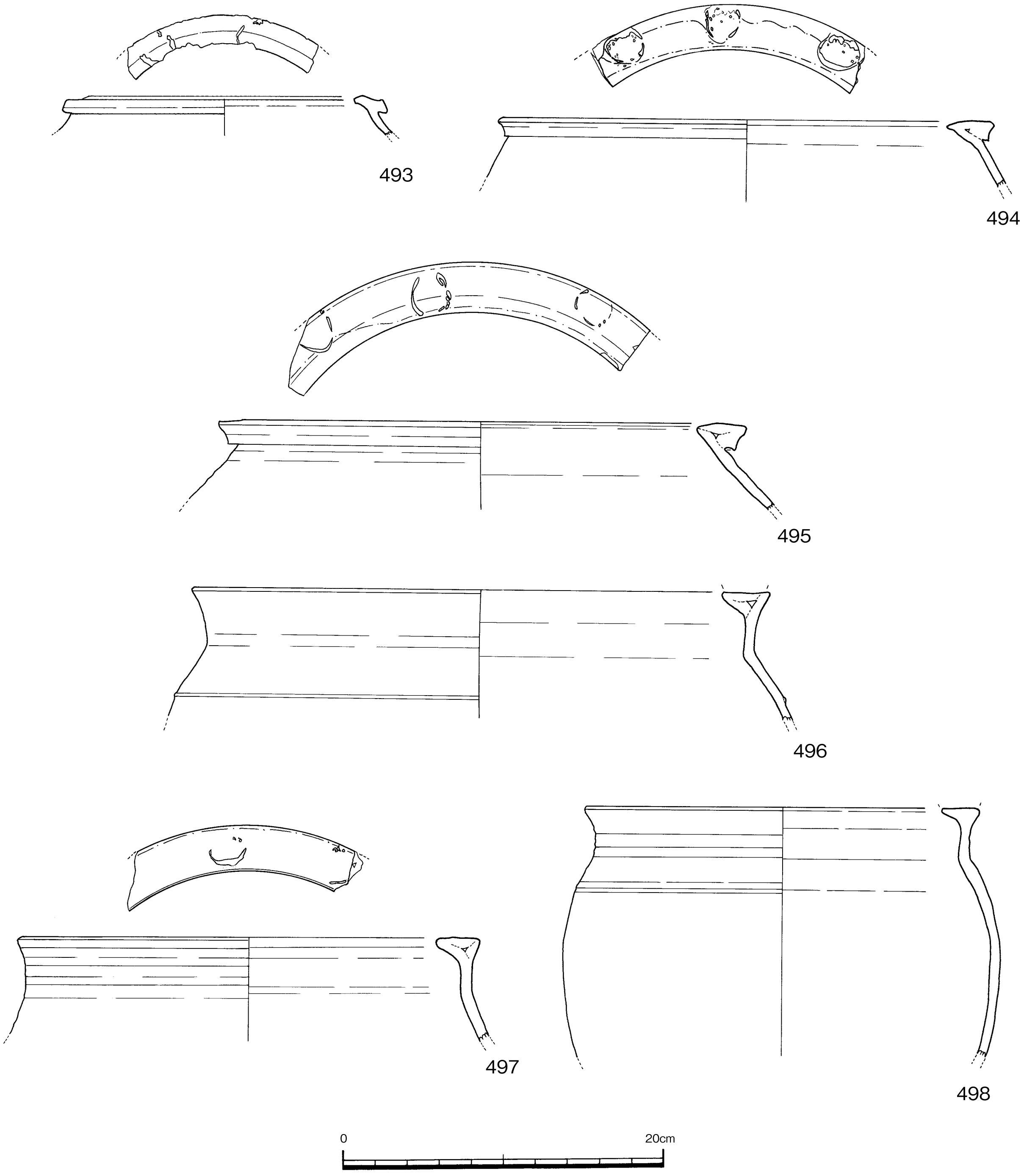
ここでは，甕等に被せる浅鉢形の蓋を報告する。すべて薩摩焼で，苗代川系のものである。486 ～ 488 は，口縁部を外側から内側に折り返してつくるものである。口唇部の釉は剥ぎ取られる。487 は口唇部に貝目が残る。489・490 は口唇部が平坦につくるものである。外面には 2 条の弱い沈線が巡る。489 の口唇部には貝目が残る。



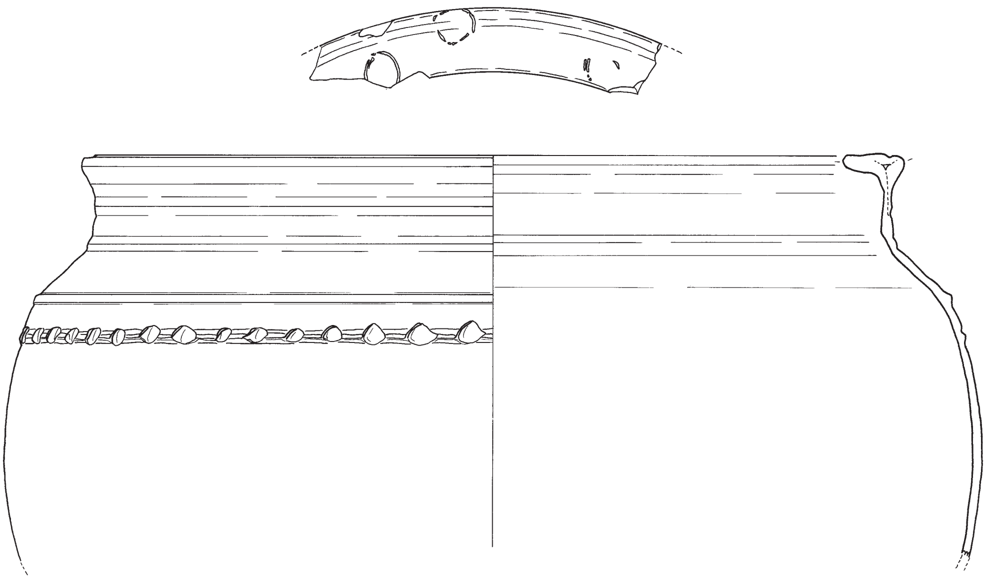
第 127 図　中世～近世の出土遺物 27　国内産陶器

甕（第 127 ～ 130 図）

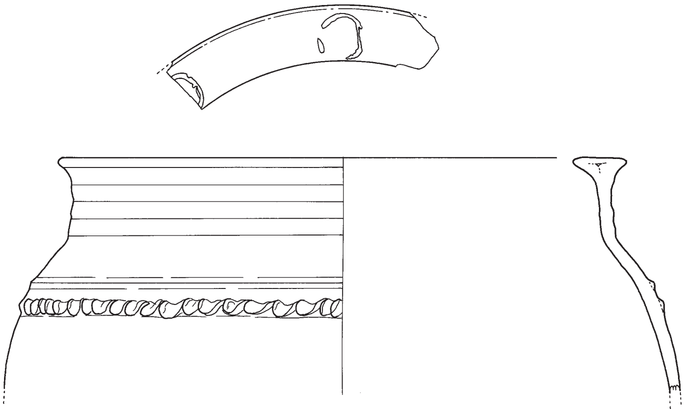
491・492 は肥前陶器の大甕である。491 は，口縁部の内側は折り返され肥厚する。内外面には横ナデ調整が施されるが，下に格子目タタキの痕跡が観察できる部分もわずかに残る。釉は内外面ともに褐釉がかかり，白土による刷毛目も施される。492 は，口縁部が T 字状を呈するものである。内外面には格子目のタタキ目が残り，肩部にはボタン状の貼り付けが施される。493 ～ 508 は薩摩焼で，苗代川系のものである。493 ～ 495 は，口縁部を外側に折り返して逆 L 字状につくるもので，



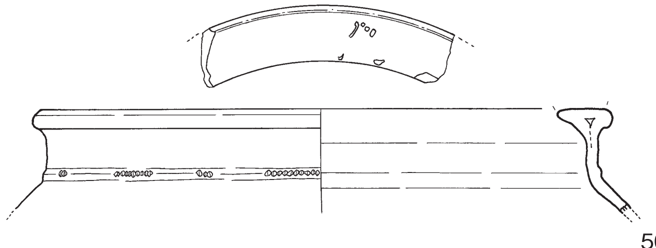
第 128 図　中世～近世の出土遺物 28　国内産陶器



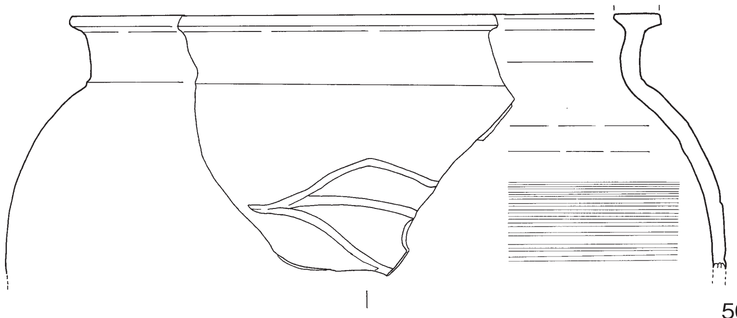
499



500



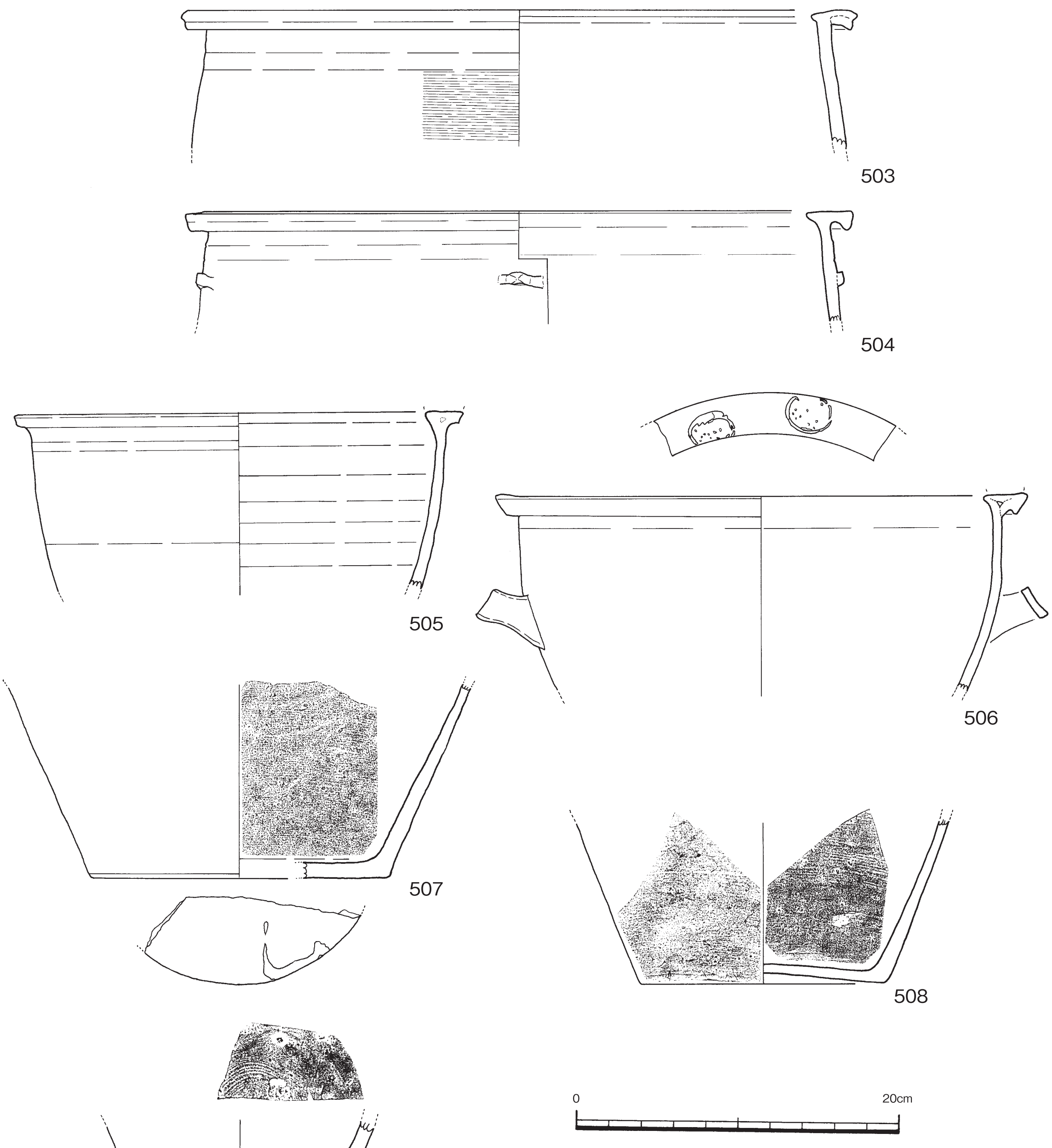
501



502

第 129 図　中世～近世の出土遺物 29　国内産陶器

口唇部には貝目が残る。堂平窯の製品である可能性が考えられる。493 の口唇部は内側がやや高くなり，外側は溝縁状となる。495 の内面にはタタキ成型時のあて具痕がわずかに残る。496 ～ 502 は口縁部を内側に折り返して，T 字状につくるものである。497･499 ～ 501 は口唇部に貝目が残る。499・500 は外面肩部に突帯と縄目突帯が巡る。501 は口縁端部が丸みを帯びる。頸部には突帯が巡り，細かい刻みが間隔をおいて入る。502 は，外面に掻き落とし文が施され，内面には横ナデの器面調整が残る。503 ～ 505 は，器形がバケツ状で，口縁部は L 字状を呈するものである。503 の外

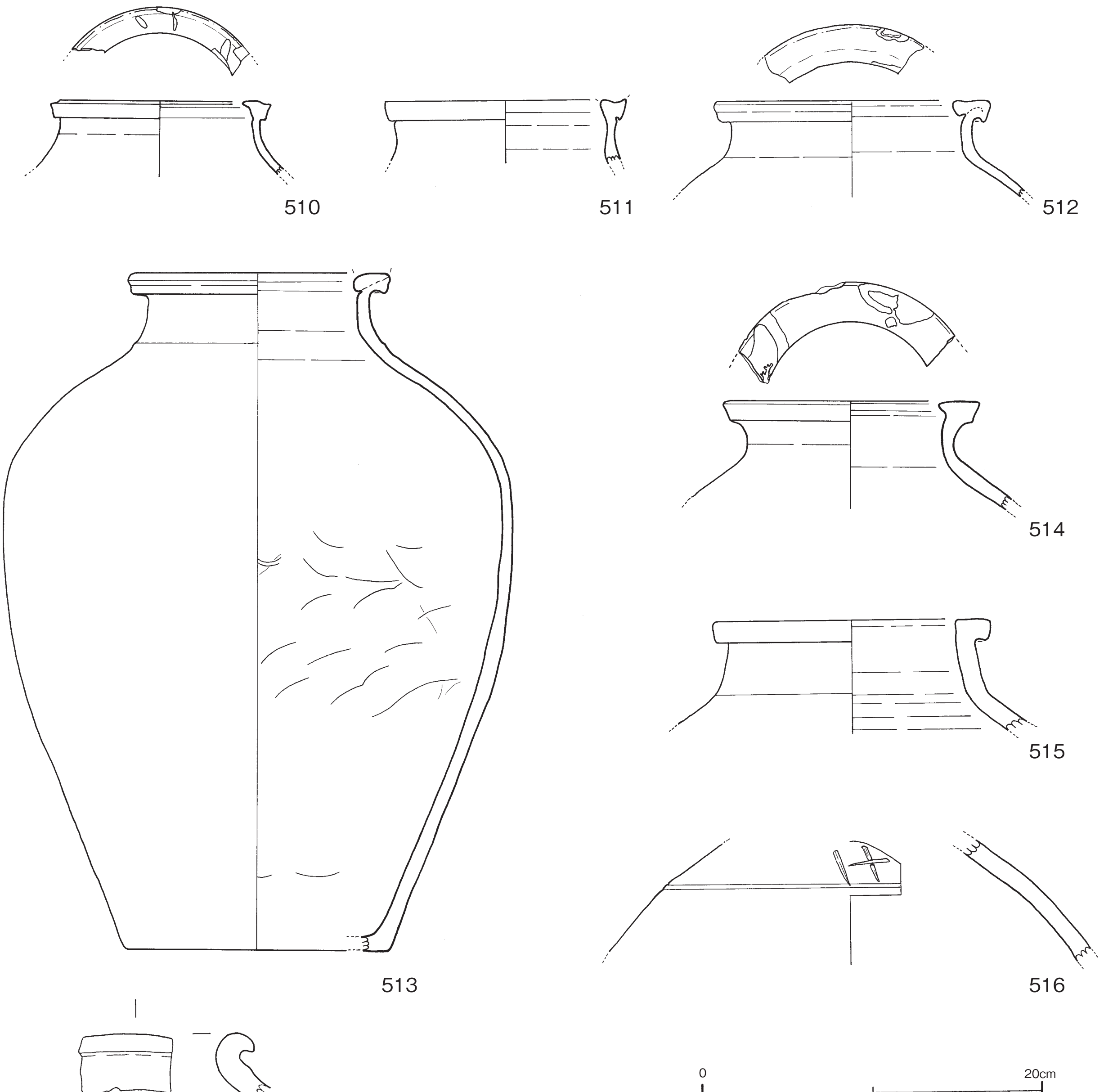


第 130 図　中世～近世の出土遺物 30　国内産陶器

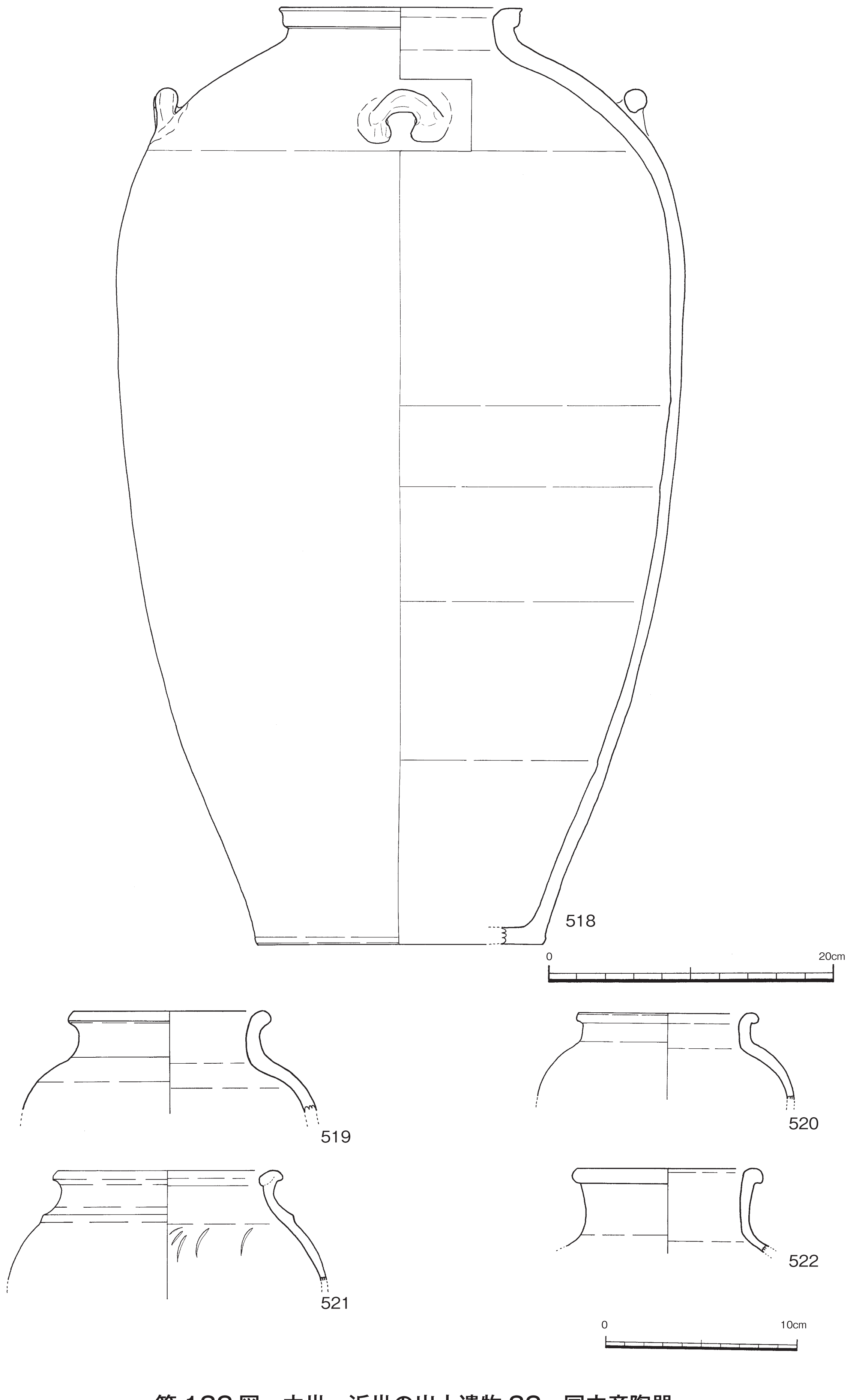
面には横ナデの器面調整が残る。504 は口唇部に貝目が残り，外面には三角形状の突起が観察される。506 は把手付甕である。507 ～ 509 は底部である。507 の外底面には貝目が残る。509 は，胎土が灰褐色を呈し，黒色の鉱物が多く混じるものである。釉は赤みを帯びた褐釉が内外面にかかり，外底面は軽く拭い取られる。堅野系の資料と思われるが，詳細は不明である。

壺（第 131・132 図）

510 ～ 514・518 は，薩摩焼苗代川系のものである。510・511 は口縁部を外側に折り返すものである。口唇部は外側が溝縁状を呈し，貝目が残る。512 ～ 514 は，口縁部を外側から内側に折り返してつくるものて，口唇部には貝目が残る。513 は内面にタタキ成型時のあて具痕が観察される。



第 131 図　中世～近世の出土遺物 31　国内産陶器



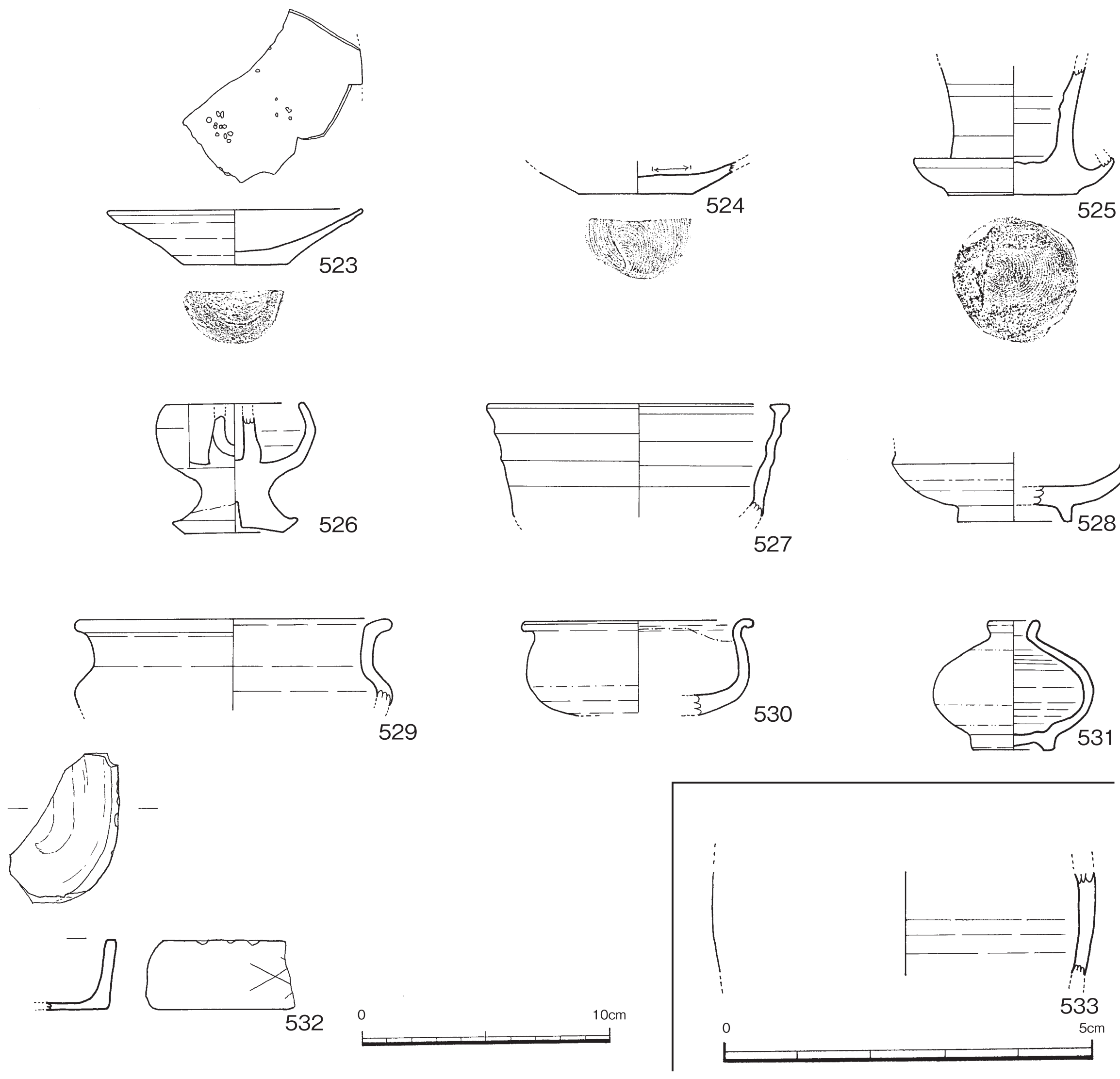
第 132 図　中世～近世の出土遺物 32　国内産陶器

515・516は同一個体と思われる資料で，琉球産の荒焼である。胎土は赤褐色を呈し，516の外面にはヘラ書きによる「十一」と読める文字が入る。517は，備前焼である。口縁部は外側が丸く屈曲する。518は長胴の壺である。内外面には黒色に発色した鉄釉がかかり，肩部に横耳が4か所付く。

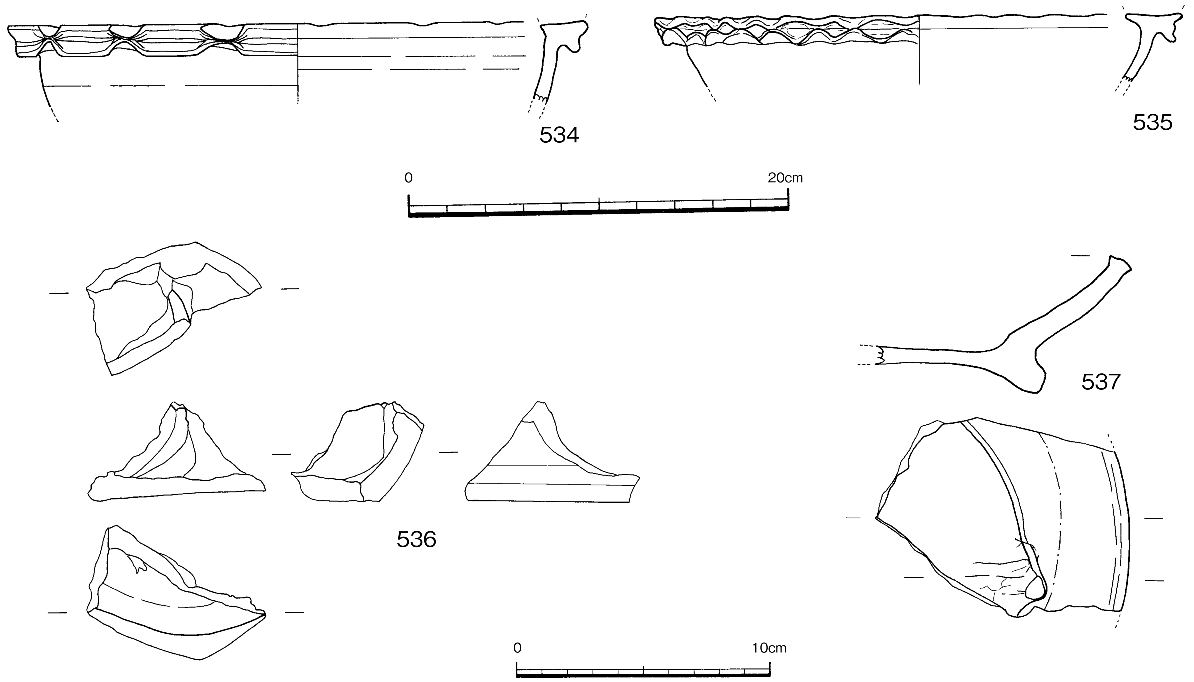
519～522は小壺である。4点とも薩摩焼苗代川系の資料で，519以外は堂平窯の製品と思われる。519は口縁部を外側に緩く外反させるものである。520・522は口縁部を外側に折り曲げて丸くつくるものである。521は口縁部を外側から内側に折り返すものである。

灯明具（第133図）

523～526は灯明具である。523･524は灯明皿である。いずれも外底面は糸切りである。523は，見込みにゴマ目が残る。524は，見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施される。525は灯明皿受け台である。外底面は糸切りされ，砂粒混じりの白土が薄く輪状に熔着する。526は，秉燭である。たんころ形のもので，外底面中央は円錐状に穿孔される。



第133図　中世～近世の出土遺物33　国内産陶器



第 134 図　中世～近世の出土遺物 34　国内産陶器

仏具（第 133 図）

527 ～ 530 は香炉である。527 は口唇部と外面に銅緑釉がかかる。内面は無釉である。外面は稜線が強く残る。528 は，内面無釉，外面腰部まで銅緑釉の資料である。529 は，白色陶胎の白薩摩である。扁平鼎形を呈するものである。530 は，口縁部が強く外反し，上面を平坦につくるもので，腰部は張り丸みを帯びる。

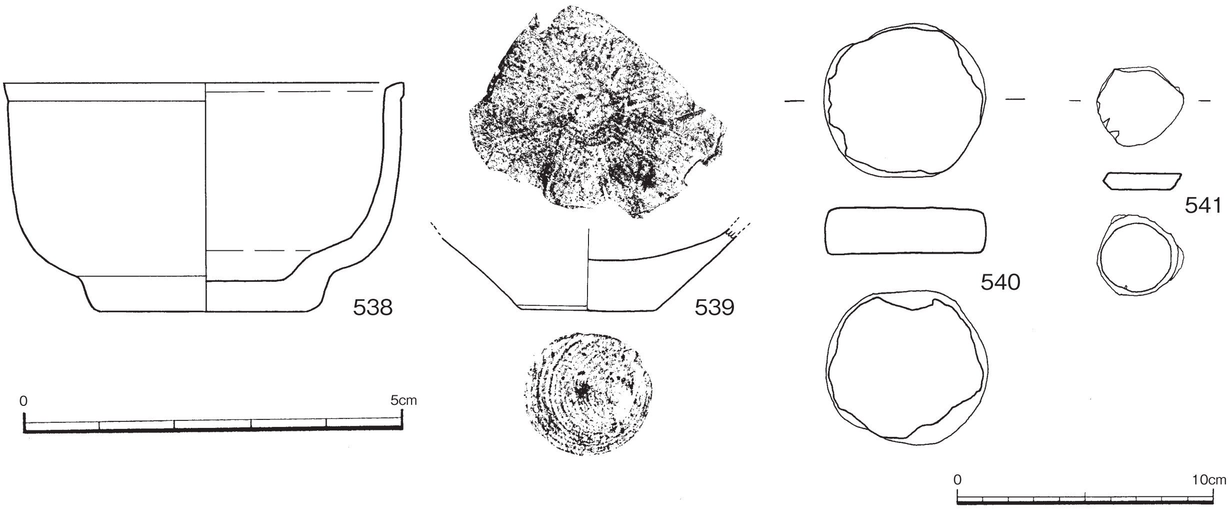
その他の陶器（第 133 ～ 135 図）

出土点数が少なく，1・2 点の掲載となるものについては，その他の陶器として取り扱った。

531 は油壺である。外面は白化粧土の上から透明釉がかかる。532 は鬢盥である。白色陶胎のもので，側面には鉄釉がかり，焼成後先端が尖った鋭利なもので入れられたと考えられる印も観察される。

533 は茶入れの胴部と思われる資料である。胎土は緻密で，外面には黒釉がかかる。内面は無釉であるが,水引きによる細かい轆轤線が残る。中国産もしくは薩摩焼堅野系の可能性が考えられる。

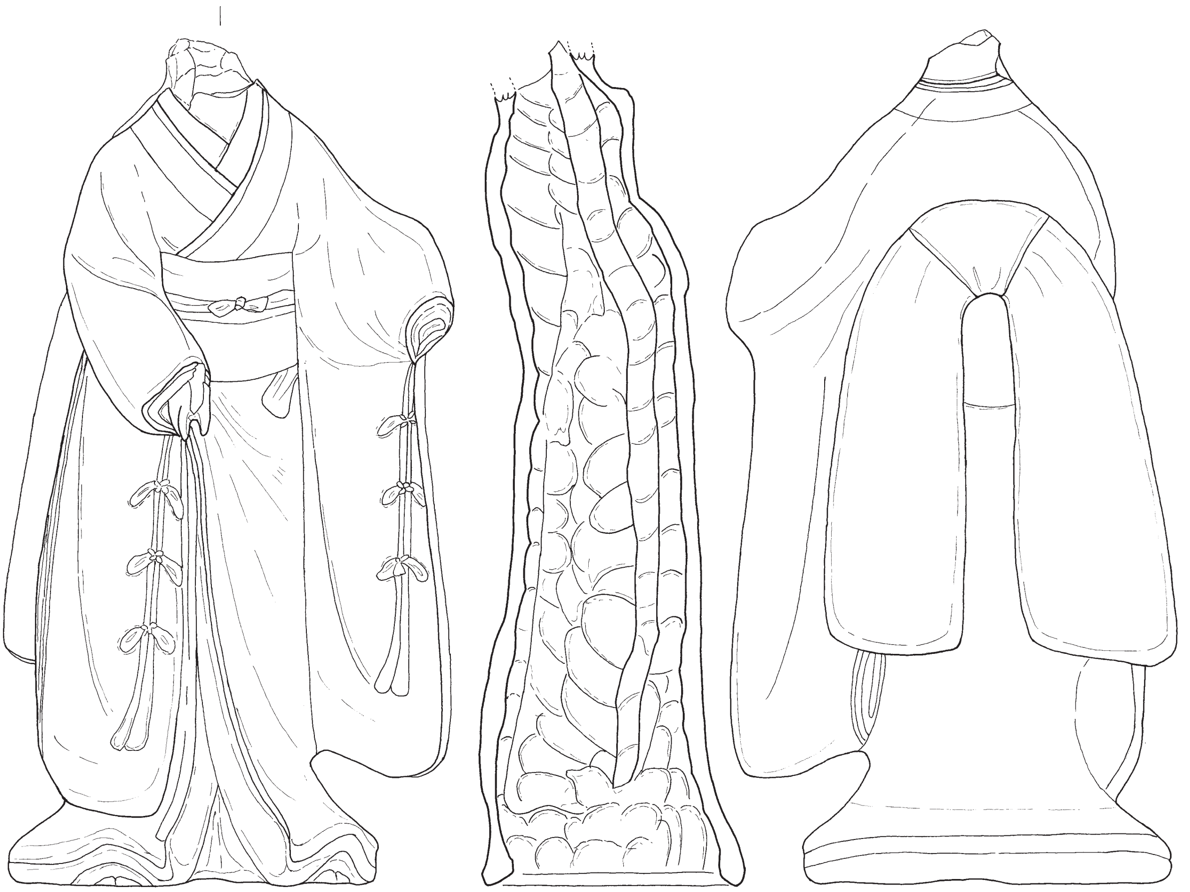
534・535 は植木鉢と思われる資料である。底部が欠損しており，水抜き穴も確認できないが，口縁部の形状より植木鉢として分類した。534 はＬ字状，535 はＴ字状を呈する口縁端部をつまんで装飾を施すものである。536 は箱庭用の仕切り盤と思われる。焼き締めで，琉球産の可能性も考えられるが，小片のため産地・用途等詳細は不明である。537 は，浅鉢状の形状を呈するもので，外地面には獅子頭が 3 足つくと思われる。用途は不明である。



第 135 図　中世～近世の出土遺物 35　国内産陶器

538・539 は玩具である。お飯事道具と思われる。538 は土師質のものである。碗もしくは鉢と思われる。539 は擂鉢である。

540・541 はメンコである。540 は陶器を，541 は瓦を転用したものである。



第 136 図　中世～近世の出土遺物 36　その他

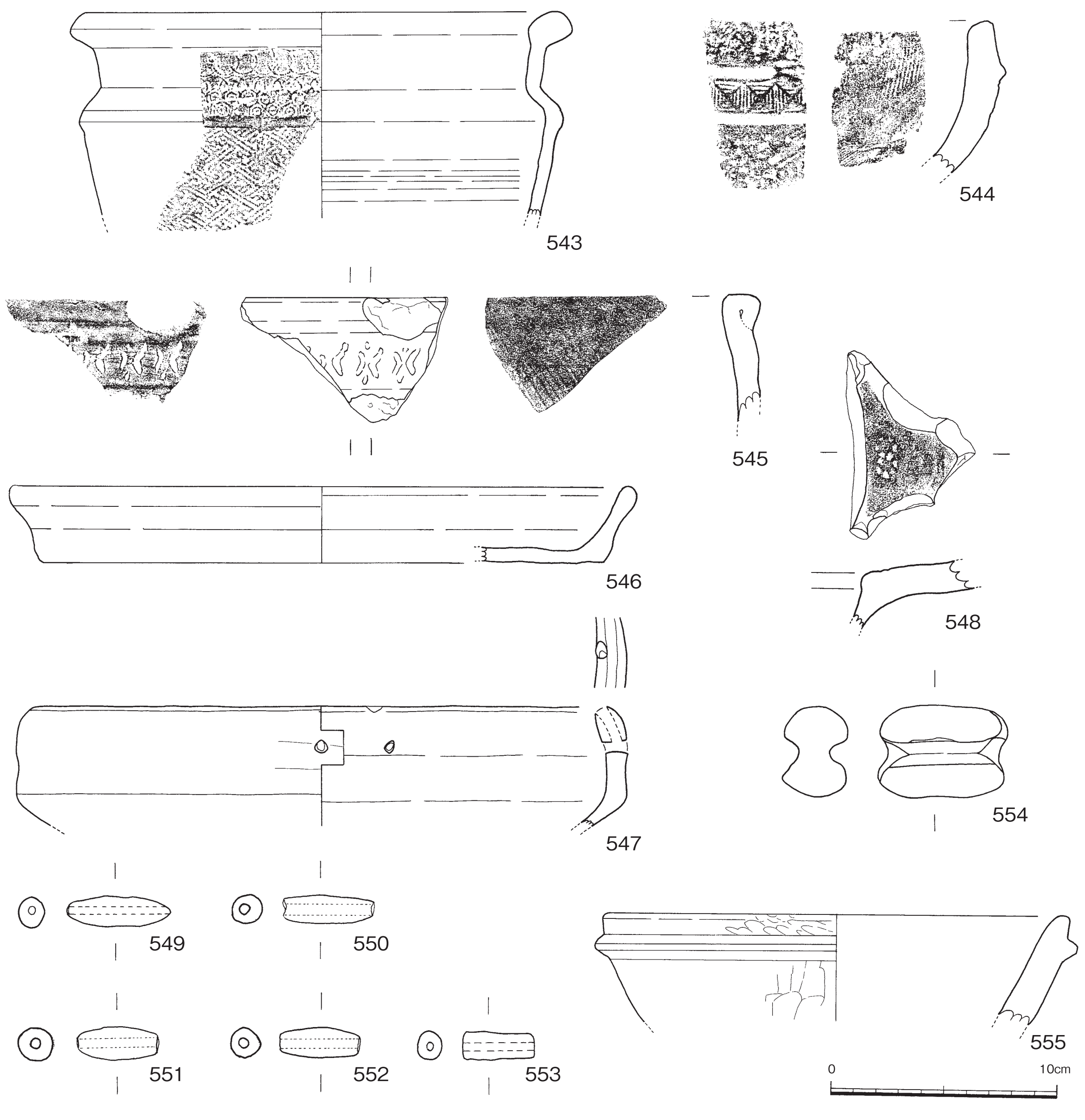
その他（第 136・137 図）

輸入陶磁器，国内産陶器，国内産磁器に大別できないものを，その他として分類した。土製品，瓦質土器，土師質土器，滑石製品がこれに相当する。

542 は人形型土製品である。頭部は欠損している。振り袖を着た女性である。型作りでつくられており，内面には型に粘土を押しつけた際の指跡が残る。

543 は，瓦質土器の火鉢である。胎土に金雲母が含まれる火鉢である。外面には，型押しの文様が施される。544・545 は中世後期の火鉢である。544 は浅鉢形のもので，外面に雷文がスタンプされる。545 は深鉢形のもので，外面にX形の文様がスタンプされる。

546 ～ 548 は，土師質土器の焙烙である。焙烙については，中世の時代のものとの区別が難しく，層位的に捉えることもできなかった。ここでは焙烙をまとめて報告しておく。546 は体部が直線的



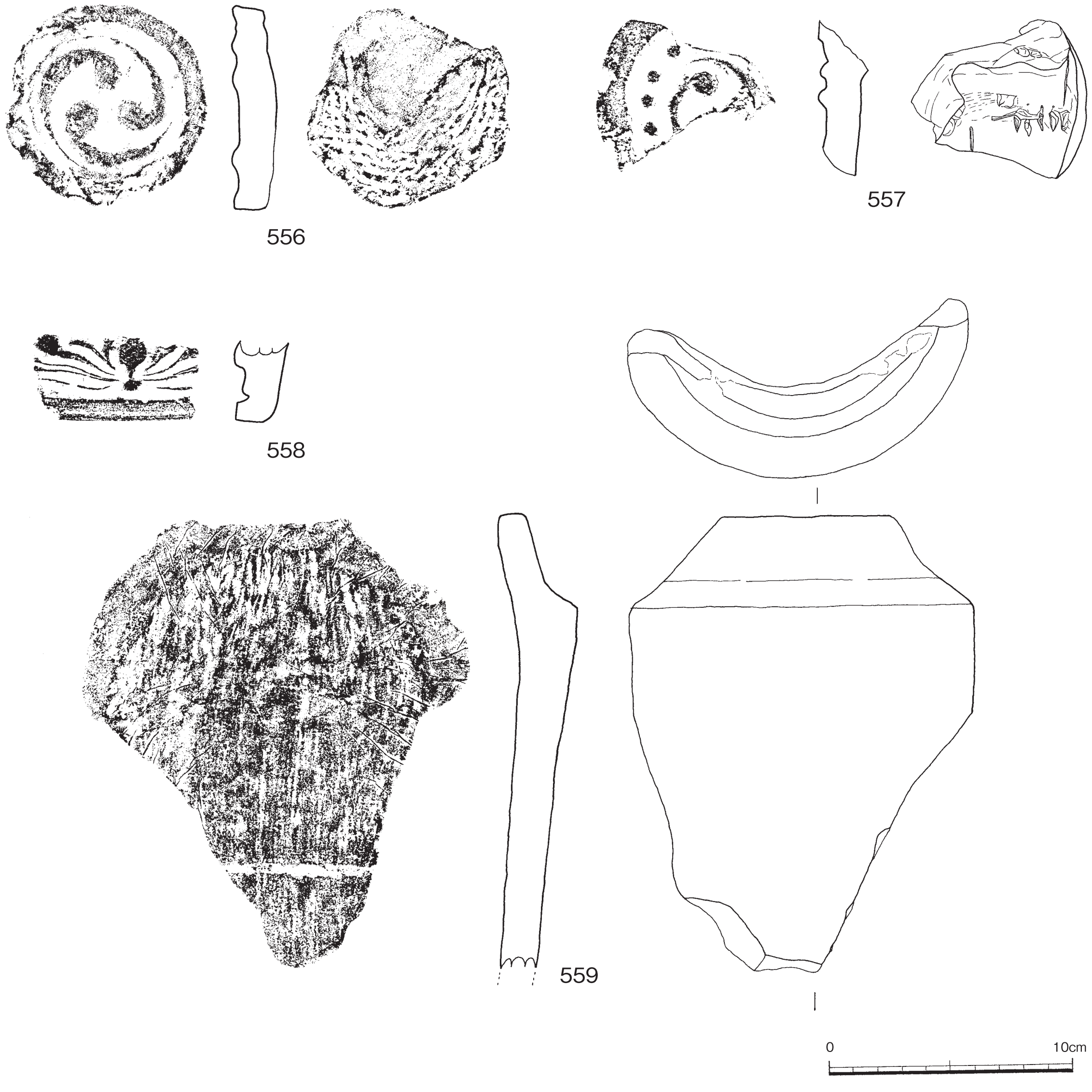
第 137 図　中世～近世の出土遺物 37　その他

に立ち上がる形状のものである。547は，補修穴と思われる穴が穿たれる。548は焙烙の把手部である。

549～554は土製品で，土錘である。土錘についても，中世のものと近世のものの判別が難しく層位的にも捉えることができなかったため，まとめて報告することとする。549～553は管状土錘である。554は断面がH状を呈する土錘である。555は滑石製石鍋である。中世前期のものと思われる。外面口縁下位に短い鍔が巡る。

瓦（第138図）

556・557は軒丸瓦である。556の正面は巴文があり，裏面が一部剥がれ，接着しやすいように刻みをつけた接合面が観察できる。557の正面は珠文縁の巴文がある。558は唐草文の軒平瓦である。559は玉縁付きの丸瓦である。外面は丁寧に撫でられており，胎土には雲母が多く混じる。内面は，粗い布目と縄目が見られる。



第138図　中世～近世の出土遺物38　その他

金属製品（第 139 図）

金属製品は遺跡全体から出土しているが，特に 1 地点・2 地点のⅠａ層から多く出土している。出土遺物は，煙管の吸口や雁首，刀の鍔，古銭などである。

560 は煙管の雁首である。脂返しの湾曲が小さくなっていることから 1750 ～ 1800 年代のものであると思われる。掲載しなかったが，他にも雁首が 2 点出土しており，それらは火皿と脂返しの湾曲がほとんどないことから，1800 年代のものであると考えられる。561・562 は煙管の吸口である。

563 は簪である。頭部に耳かきが付き，髪に挿す部分が二股になっているものである。

564 は刀の鍔，566 は鎺（はばき）である。E － 11 区で出土した。刀の鍔に切羽下 2 枚および鎺（はばき）が紐で結びつけられたような状態で出土した。刀身から離れた状態で, 保管してあったものであると思われる。鍔の形は撫丸形，耳は丸耳である。両面には折れ松葉文様が施されている。565 は刀の鞘の先端につける鐺（こじり）である。E － 10 区で出土した。鎺の隣の区で出土しているので，おそらく同じ刀の一部であったのではないかと思われる。

古銭（第 139 図）

古銭は計 26 枚出土しており, 表採あるいはⅠａ層出土である。その内訳を見てみると, 世高通寶 1 枚, 洪武通寶 4 枚，寛永通寶 15 枚，明治銭貨 2 枚，不明 4 枚である。そのうち，8 点を図化した。

567 は世高通寶である。4 地点にて表採された。世高通寶は琉球銭で，琉球王朝の尚徳 (世高王：在位 1461 ～ 1469 年) が永楽通寶を土台として鋳出したものである。568 は洪武通寶である。G － 24 区Ⅰａ層で出土した。明銭である。無背で径は 2.3㎝の小平である。569 ～ 572 は,「寛」字の 12 画と 13 画の頭が相接し,「寶」字の貝画末尾が「ス」の古寛永通寶である。1636 ～ 1659 年に鋳造されていた。573・574 は,「寛」字の 12 画と 13 画の頭が離れ,「寶」字の貝画末尾が「ハ」の新寛永通寶である。573 は 3 枚が重なっているが，一番下の背面には「元」字がある。

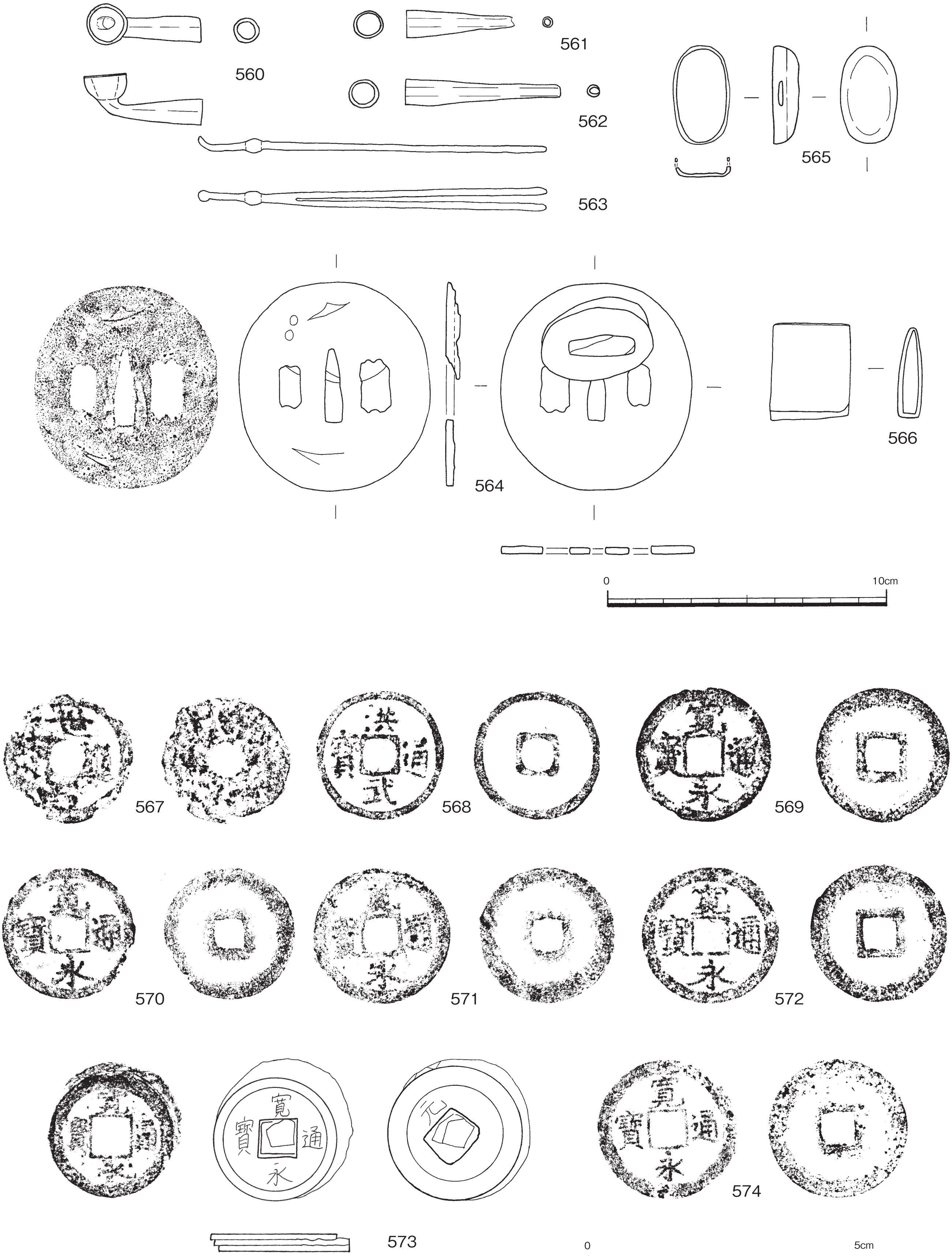
坩堝・鞴の羽口・鉄滓（第 140 図）

575 は，坩堝である。576・577 は，鞴の羽口である。筒状のものと思われるが欠損しており，一部が残っている。578 ～ 582 は鉄滓と思われる資料である。578・579 は碗形滓，流動滓等，形状が明確に判別できるものはない。580 ～ 582 は碗型鉄滓の一部と思われる。

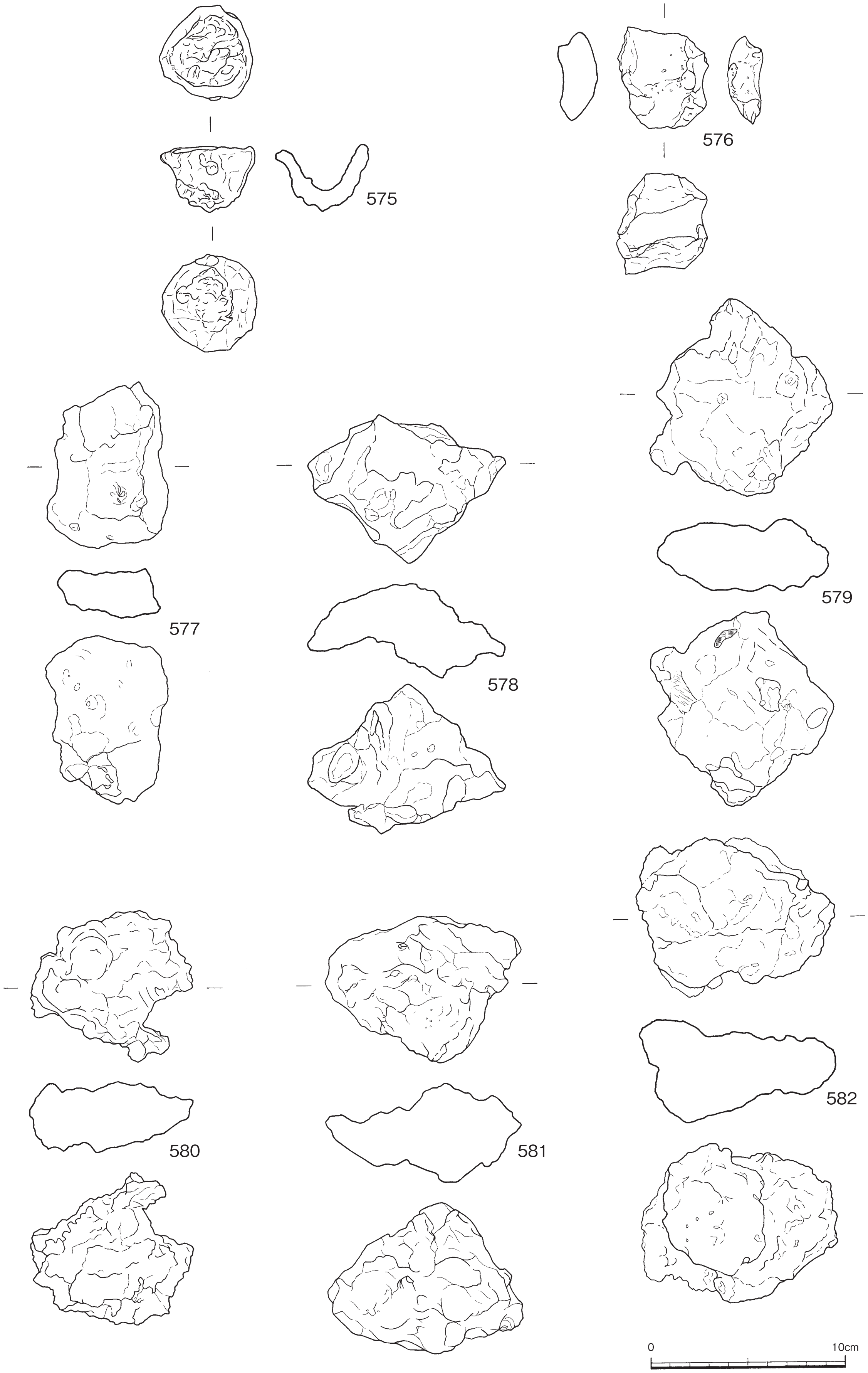
近世～近代以降の出土遺物

近世～近代以降の出土遺物については，江戸時代から明治・大正時代に至るまでの資料的価値が高いと考えられるものについて掲載した。本遺跡では，磁器の碗・皿・蓋・段重・仏飯器・小坏・急須，土師質土器，鉄滓を掲載した。

583 は錆ついた鉄製品と思われるものに碗蓋が熔着した資料である。碗蓋の文様は銅板転写により描かれる。584 は徳利である。口縁部は玉縁状を呈し，外面には草化文が描かれる。585 ～ 587 外面には銅板転写により文様が描かれた碗である。588 は体部がやや丸みを帯びる小碗で，外面には馬の文様が描かれる。「子ども茶碗」の可能性が考えられる。589 は色絵の碗である。590・591 は色絵の皿である。



第 139 図　中世～近世の出土遺物 39　その他



第 140 図　近世～近代以降の出土遺物 1　鉄滓ほか

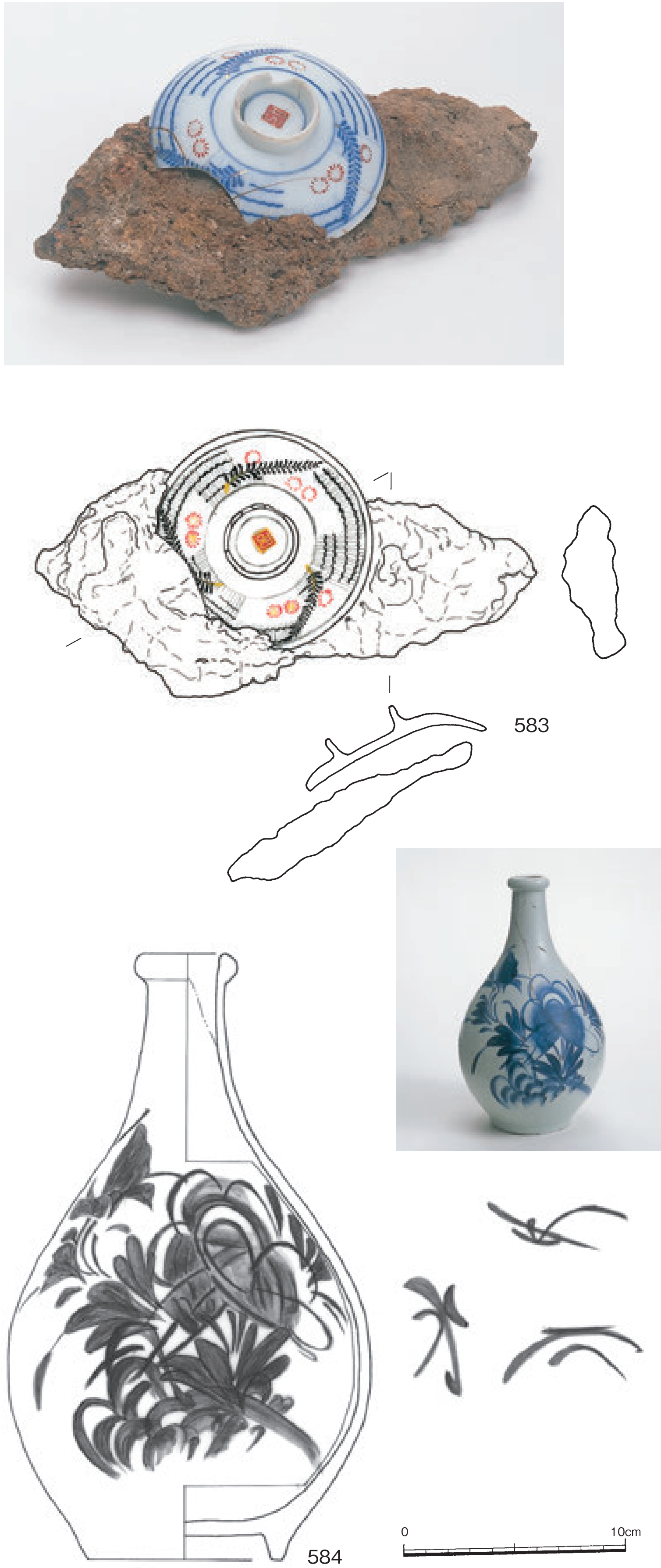
大正時代の瀬戸・美濃産である。592は外面に銅板転写により文様が描かれた段重である。593・594は仏飯器である。外目には栗色の厚めの釉がかかる。

595は南九州で一般的に「からから」と称される焼酎を入れるための容器である。肩部が強く屈曲する。在地産と思われる。

596は磁製の醤油入である。右手で持って使用する際に，コバルトでかかれた「醤油入」の文字が正面にくるようにつくられている。在地産と思われる。

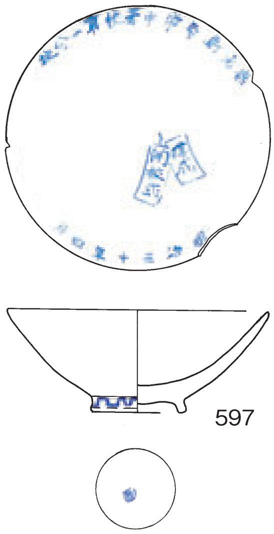
597・598は小坏である。597は内面口縁部上位に，「鹿児島県尋常中学校第一分校　明治三十年」，見込みに「落成・開校式」の文字がみられる。598は日露戦争からの凱旋を祝うもので，明治38（1905）年頃のものである。597・598は高台内底面に同じ旗印が描かれており，同一の生産地であると考えられる。

599は急須である。外面には銅板転写により文様が描かれる。在地産と思われる。

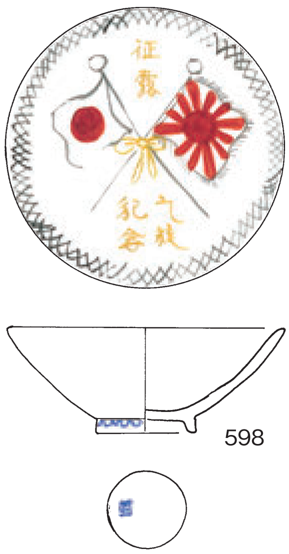


第141図　近世～近代以降の出土遺物２　磁器

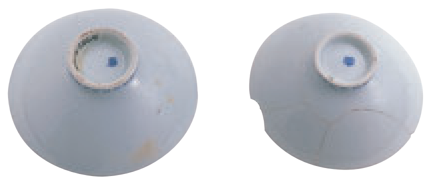
第 142 図　近世～近代以降の出土遺物３　磁器

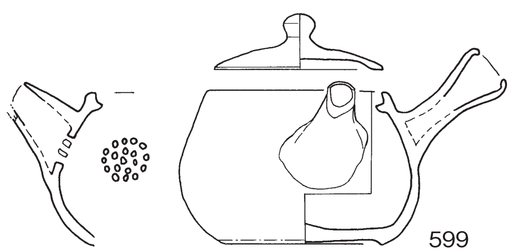


597

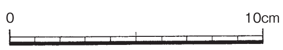


598





599



第 143 図　近世～近代以降の出土遺物４　磁器

その他の遺物

表層および包含層内から混在して出土した遺物である。遺物が摩耗しているものもみられることから流れ込みの可能性が高いが，周辺遺跡の様相を知るための資料として掲載した。

石器

600 ～ 614 は弥生時代から近世の石器である。包含層出土のものも含まれるが，出土点数が少ないため，ここでまとめて掲載しておく。

600 は石鏃である。基部に三角形の抉りが入る二等辺三角形鏃で両側辺は鋸歯状を呈する。弥生時代～古墳時代の包含層であるⅤ層からの出土である。乳灰色の黒曜石製で，大分県姫島産に類似する。

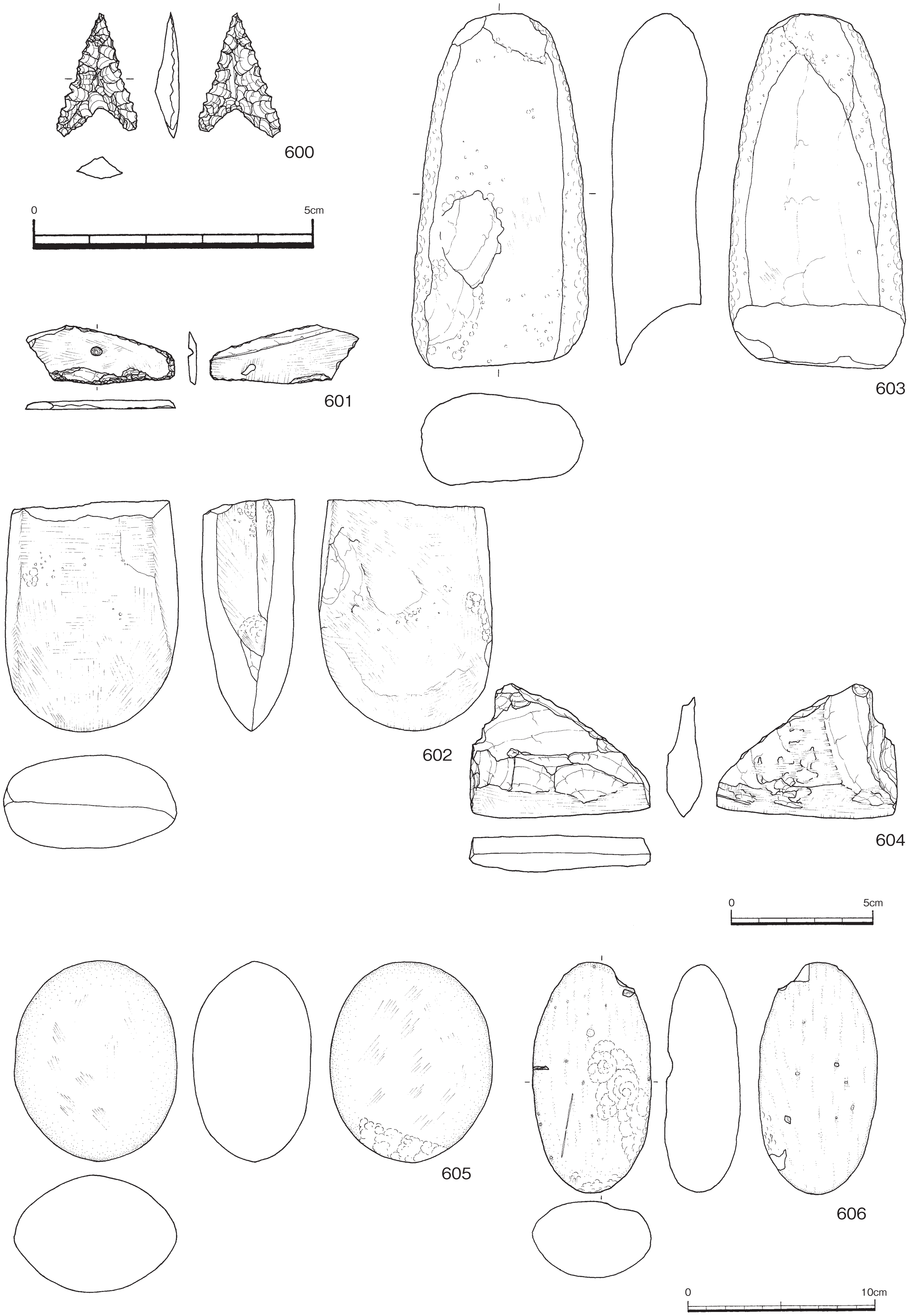
601 は加工痕のある剥片である。表裏とも研磨され，厚みが 3mm 程度の扁平な板状を呈する粘板岩の剥片で，図下辺部分に細かい剥離が施されている。また , 表面の側から器面上に径が縦 3mm ×横 3.5mm, 深さ 2mm 程度の逆円錐形を呈する穿孔が施されているが, 孔は貫通していない。

602・603 は磨製石斧である。比較的きめの細かい砂岩製の磨製石斧である。素材礫に剥離を加え成形し，敲打で整形した後，ほぼ全面に丁寧な研磨を施している。刃部は両凸刃で円刃，やや小振りではあるが蛤歯状を呈する。刃部左縁辺の 1 か所にわずかに刃こぼれがみられるが，ほぼ刃部全体が丁寧に研ぎ上げられた状態である。E － 10 区，Ⅴ層からの出土である。603 は砂岩製の磨製石斧である。裏面側には大きな剥離痕が残るほか，背面側にもやや深い調整剥離の痕跡が残るなど，敲打による整形の痕跡はほぼ全面に及ぶもののやや粗い。背面図右側下部分や裏面左側部分など，器面の各所に研磨された部分があることから磨製石斧としたが，研磨もかなり粗略に施されるのみである。

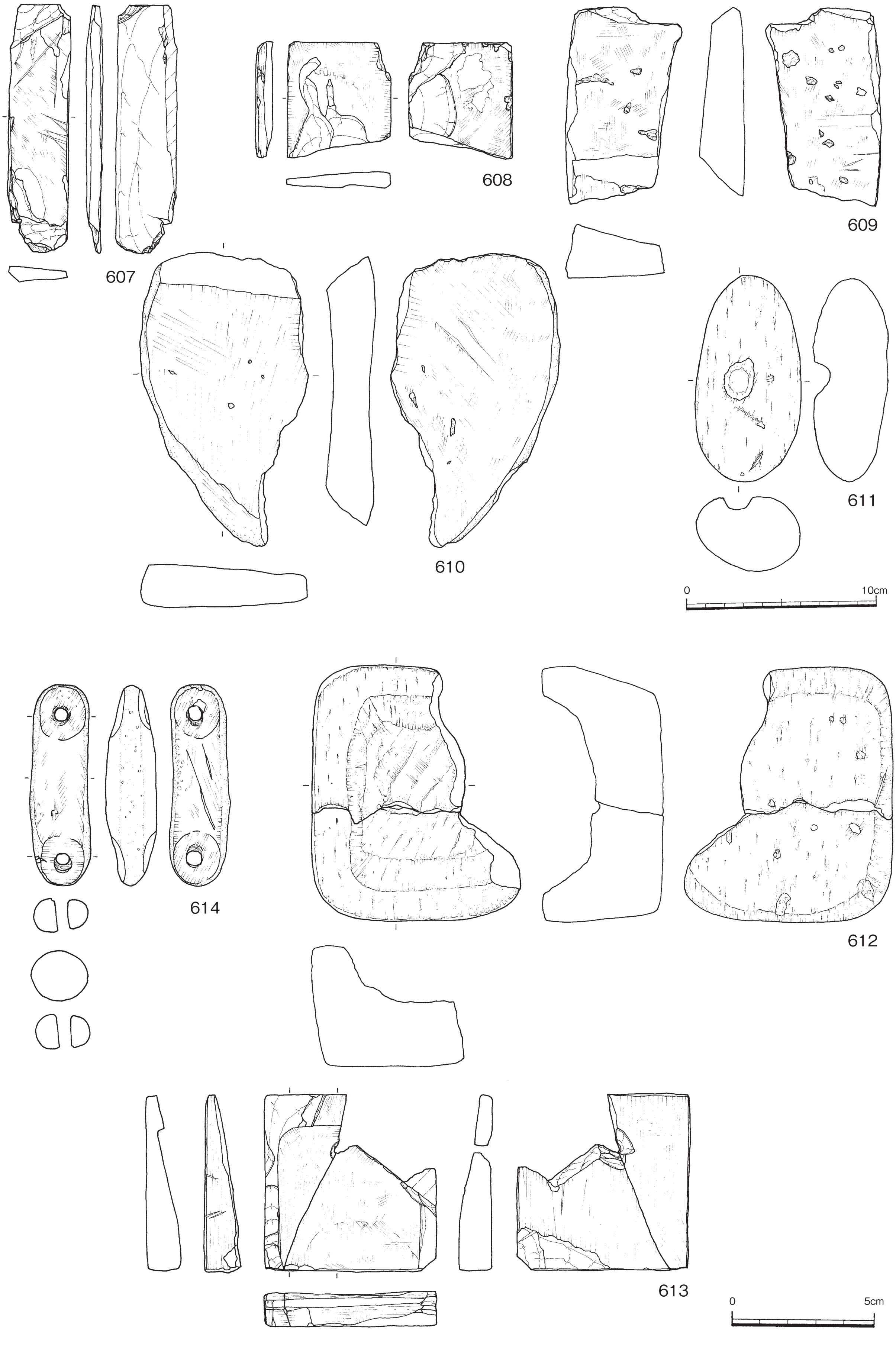
604 は擦り切り石器である。きめの細かい細粒の砂岩のやや厚みの剥片で，下辺部分に表裏からの研磨で刃部を作り出している。刃部は凸レンズ状を呈し，やや厚みがあり，刃縁の平面形状はわずかに外湾するが，ほぼ直線に近く，刃こぼれが生じた部分に研ぎ直しを加えた痕跡がうかがわれる。

605・606 は磨石・敲石類である。605 は長径 10.7cm，短径 8.8cm，厚さ 6.3cm のやや厚みのある砂岩の円礫で，重量は 805g を量る。下端部にわずかに敲打痕がみられるほか，表裏に磨りの痕跡がみられる。606 は長径 12.3cm，短径 6.4cm，厚さ 4.1cm の凝灰岩の長楕円形の円礫である。表面中央付近に敲打によるとみられる浅い凹みが生じており，凹みの周辺に敲打の痕跡がみられる。

607 ～ 610 は砥石類である。607 は赤褐色に黄褐色の縞の入る軟質の粘板岩の扁平な剥片で，右側辺及び上辺は擦り切りにより切り取られた側面になっている。表面のみが砥石として使用され，中央右側面よりには鋭い擦り傷が残り，この部分を中心に砥面がわずかに内湾する。608 は灰褐色を呈する頁岩製の剥片で，折れ面や剥離面を除く左右，上辺には擦り切りの跡が残る。周辺部分を中心に，側辺に直行及び斜行する鋭い擦り傷がみられ，表裏共に凸部を中心に顕著な使用の痕跡が残る。609・610 はいずれも乳褐色の地に赤褐色の縞の入る砂岩で，天草石と呼ばれる。609・610 とも破砕面，砥面を除く側面には自然面が残り，転礫を砥石として利用したものとみられる。610 は主に表面が砥石として使われており，砥面は右上辺下がりに傾斜している。



第 144 図　その他の出土遺物 1　石器



第 145 図　その他の出土遺物２　石器

611・612 は軽石加工品である。611 はやや黄色みを帯びた長楕円形の軽石の円礫で表面はやや平滑で，表面ほぼ中央に縦 20mm，横 17mm の不整円形で深さ 8mm の凹みがみられる。612 は灰白色の軽石で，底面・側面共に平滑に整形され，隅丸方形状の外形を呈する。

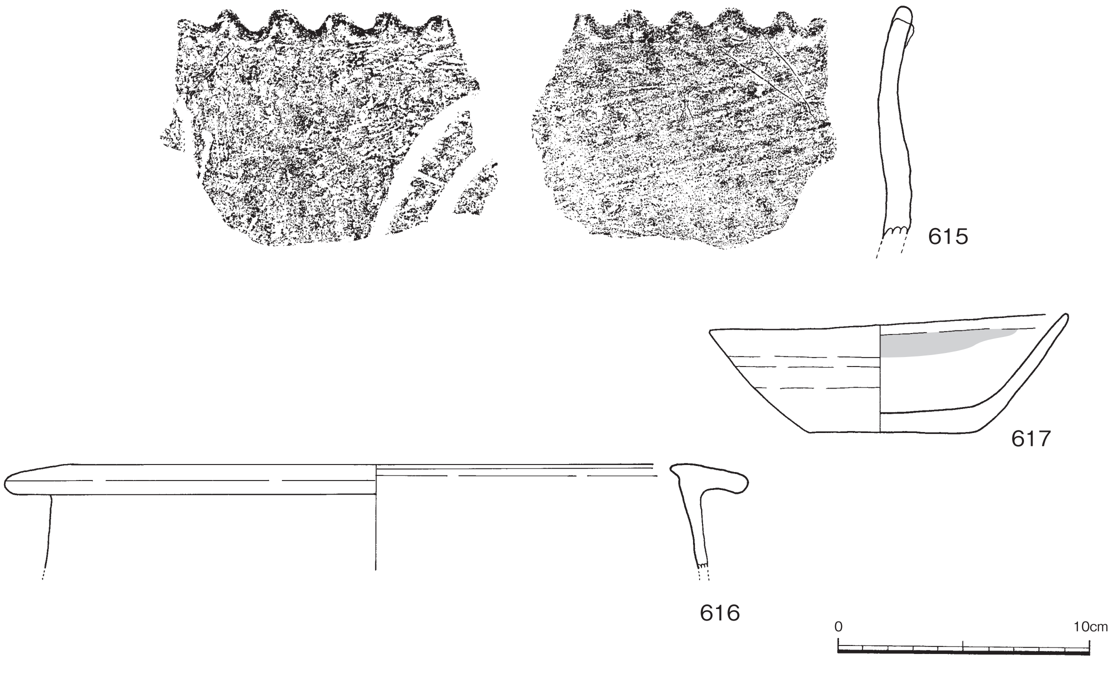
613 は青灰色に黄褐色の斑文が入る細粒の砂岩製の硯である。残存形は縦 6.3cm，横 6.1cm で，下辺部分に上下から擦り切りにより溝を切り，この部分から折割った痕跡が残る。また，図中央やや左よりの，接合線の上端部分に径 3mm 程度の穿孔が施されている。

614 は双孔棒状石製品である。長さ 7.2cm，幅 2.1cm，棒状の多孔質の安山岩の円礫で，両端部は表裏から擦って厚みを約 1.0cm まで減じた後，径約 0.5cm の孔を穿孔によって穿っている。表面は全体に平滑で，部分的に擦痕が観察される。Ⅳ a 層の出土である。

土器

615 は磨消縄文系土器である。波状の口縁部で，ナデ調整を施した外面は太い凹線で模様が描かれる。内面は，ケズリの跡が見られる。滑石が混入していると思われ，全体的に滑らかな胎土である。616 は，須玖式の甕である。胎土は，川骨遺跡出土の土器に類似している。617 は土師器の坏である。4 地点の東側の川砂層 (Ⅳ b 層) から出土した口径 14.2cm，底径 6.4cm，器高 4.8cmである。底部は糸切りで，内面の口縁部には煤が巡る。外面には煤あるいは墨のような跡があるが赤外線で観察しても，はっきりとしなかった。

618・619 は丸瓦，620・621 は平瓦である。いずれも薩摩国分寺の瓦に類似しており，焼成に失敗した瓦あるいは廃棄された瓦が船のバラストなどとして二次利用されて本遺跡に搬入されたもの



第 146 図　その他の出土遺物３　土器

であると考えられる。内面は布目痕がみられる。618 は太線による正格子叩きで，格子の大きさは0.5cm～ 0.8cmである。焼き歪んでいる。側面には切り離した痕が見られる。619 は太線による斜格子叩きである。620 の外面は，太線による正格子叩きである。内面は 1cm四方に 8 × 8 の糸目の布痕である。621 の外面は，幅 0.2cm～ 0.3cmの縄目の平行叩きである。内面は 1 cm四方に 8 × 6 の糸目の布痕である。

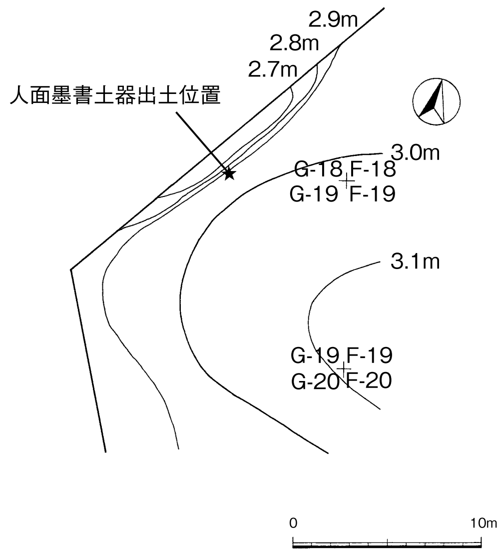
第 147 図　その他の出土遺物４　瓦

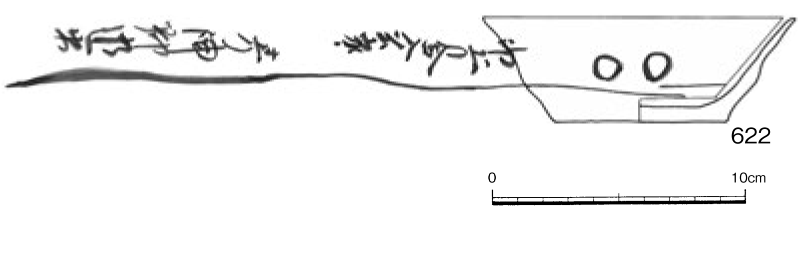
622は古代の墨書土器である。低湿地に近い4地点の自然堤防上縁辺部の表層中において1点出土した。

この墨書土器は，口径12.3㎝，底径6.8㎝，器高4.1㎝の底部ヘラ切りの坏である。9世紀の第3四半期に相当するものであると考えられる。

永山修一氏（ラ・サール学園教諭）の指導所見を以下にまとめる。

二つの〇は目を表現しており，この墨書土器は人面墨書土器に分類される。また，体部を巡るように書かれた文字資料を解読すると，「御前舍入□（公・分・長？）家［　　　］方神郡進出」の11文字を確認することができ，郡が四方あるいは未申・丑寅の方角の神に献げたと解釈できる。この土器は，①陰陽道祭祀の中の四角四境祭のような境界祭祀，②水辺の祭祀，③国家および玉体安穏に関する祭祀に用いられた可能性が考えられる。また，坏に人面と文字が墨書されていることから，都城よりも東国の人面墨書土器に似ている一方，東国の人面墨書土器が，個人の長寿延命祈願に用いられるものであるのに対して，この土器には，個人名が記されず，「郡」が主体になっている点が特徴的である。また，9世紀第3四半期に相当するとすれば，川骨遺跡と川内川を挟んで，薩摩国分寺の近くに位置する京田遺跡の墨書の木簡の嘉祥3年（850）とほぼ同時期であると考えられ，「郡」が関与する祭祀の実施という点で，当時の薩摩国府近傍における郡の機能を知ることのできる資料である。





第148図　その他の出土遺物　人面墨書土器

挿図番号	掲載番号	出土区	遺構名	種別	分類	器種	産地	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
								口径	底径	器高					
第60図	140	E-2	井戸２	白磁	坏	小坏	中国	—	—	—	白色	透明釉	腰部以下無釉	15 世紀？	高台内面「一」墨書
	141	E-2	井戸２	染付	碗	丸碗	在地系	—	3.8	—	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀後半	
	142	E-2	井戸２	染付	皿	中皿	肥前系	13.6	8.3	2.9	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀後半	
	143	E-2	井戸２	陶器	鉢	鉢	肥前	—	—	—	赤褐色	白化粧土・鉄釉	肩部一部無釉	18 世紀前半	
	144	E-2	井戸２	土製品	鍋	焙烙	—	—	—	—	橙色	—	—	—	
第77図	145	F-10	柱穴	土師器	皿	小皿	—	7.8	5.5	1.5	橙色	—	—	—	
	146	D･E-10	柱穴	瓦	瓦	布目瓦	—	—	—	—	灰黄色	—	—	—	
	147	F-7	柱穴	陶器	瓶	土瓶	薩摩焼苗代川系？	9.0	—	—	灰色	灰釉	腰部以下無釉	—	
	148	F-7	柱穴	陶器	蓋	蓋	薩摩焼苗代川系	11.0	—	3.3	にぶい褐色	—	—	17 世紀前半	
	149	E-7	柱穴	青花	皿	皿	中国	—	7.0	—	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	16 世紀	
第82図	150	D･E-13	石垣	染付	碗	丸碗	肥前系	12.0	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18 世紀前半	
	151	D･E-13	石垣	染付	碗	丸碗	肥前系	11.0	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18 世紀前半	
	152	D･E-13	石垣	染付	碗	朝顔形	肥前系	10.6	4.4	6.4	灰白色	透明釉	畳付・口唇部釉剥ぎ	17 世紀後半～18 世紀前半	
	153	D･E-13	石垣	染付	碗	広東碗	肥前系	11.2	5.8	6.2	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀後半	
	154	D･E-13	石垣	染付	碗	広東碗	肥前系	9.4	4.6	5.7	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀後半	
	155	D･E-13	石垣	染付	碗	端反碗	肥前系	9.6	3.8	5.4	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19 世紀	
	156	D･E-13	石垣	染付	碗	端反碗	肥前系	8.8	4.0	4.8	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19 世紀	
	157	D･E-13	石垣	染付	碗	筒型碗	肥前系	7.3	4.2	5.9	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀後半	
	158	D･E-13	石垣	磁器	碗	半筒形小碗	在地系	7.2	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	19 世紀	
	159	D･E-13	石垣	磁器	碗	坏	在地系	4.8	2.4	2.9	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19 世紀	
第83図	160	D･E-13	石垣	染付	皿	小皿	在地系	10.4	4.4	2.9	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀	
	161	D･E-13	石垣	染付	皿	中皿	肥前	13.2	4.8	4.1	灰白色	透明釉	見込み蛇ノ目釉剥ぎ，畳付釉剥ぎ	18 世紀後半	
	162	D･E-13	石垣	染付	皿	大皿	肥前	19.4	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18 世紀	二次的被熱
	163	D･E-13	石垣	染付	鉢	鉢	肥前	—	7.6	—	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀後半～19 世紀	
	164	D･E-13	石垣	染付	鉢	鉢	肥前	13.0	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18 世紀後半～19 世紀前半	
	165	D･E-13	石垣	染付	蓋	端反碗蓋	肥前	9.2	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18 世紀	
	166	D･E-13	石垣	色絵	碗	小碗	不明	9.4	3.0	3.6	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19 世紀代？	
	167	D･E-13	石垣	磁器	仏具	火入れ	肥前	9.4	—	—	灰白色	透明釉	口縁部内面～外面腰部まで	19 世紀以降	
	168	D･E-13	石垣	磁器	その他	髪盥	肥前	9.0	—	—	灰白色	透明釉	口唇部釉剥ぎ，底部無釉	18 世紀後半～19 世紀	
第84図	169	D･E-13	石垣	陶器	碗	碗	薩摩焼苗代川系	—	5.2	—	赤褐色	鉄釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀	
	170	D･E-13	石垣	陶器	瓶	土瓶	薩摩焼苗代川系	7.0	—	—	黒褐色	鉄釉	口唇部・内面一部無釉	19 世紀代	
	171	D･E-13	石垣	陶器	鍋	鍋	薩摩焼苗代川系	—	—	—	明赤褐色	鉄釉	腰部以下無釉	19 世紀代	
	172	D･E-13	石垣	陶器	鍋	羽釜	薩摩焼苗代川系	10.8	4.0	8.7	赤褐色	鉄釉	口唇部～口縁部内面・鍔以下無釉	19 世紀	
	173	D･E-13	石垣	陶器	鉢	鉢	薩摩焼苗代川系	40.0	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	19 世紀以降	
	174	D･E-13	石垣	陶器	甕	甕	肥前	—	—	—	灰赤色	鉄釉	内外面施釉	19 世紀代	
	175	D･E-13	石垣	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	—	20.6	—	赤褐色	灰釉	全面施釉	18 世紀	内面に貝目跡あり
	176	D･E-13	石垣	磁器	窯道具	チャツ	—	6.8	4.0	3.5	灰白色	—	口縁部にアルミナ付着	18 世紀後半以降	
第85図	177	H-15	石列	染付	碗	端反碗	肥前系	10.0	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18 世紀後半	
	178	H-15	石列	陶器	碗	碗	白薩摩	—	5.0	—	淡黄色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀代	
	179	H-15	石列	陶器	壺	壺	備前	—	—	—	灰黄色	鉄釉	内外面施釉	17 ～ 18 世紀	
	180	H-15	石列	陶器	鉢	擂り鉢	薩摩焼苗代川系	25.4	—	—	にぶい褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18 世紀代？	
	181	H-15	石列	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	—	—	—	赤褐色	灰釉	内外面施釉	17 世紀後半	
第86図	182	E-12	溝	白磁	皿	稜花皿	中国	8.4	3.8	2.9	白色	透明釉	腰部以下無釉	12 世紀？	
	183	G-13	溝	青花	皿	皿	漳州窯	16.0	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	16 世紀末～1630 年代	
	184	C-11	溝	磁器	碗	丸碗	肥前系	12.2	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18 世紀前半	
	185	G-13	溝	染付	碗	湯飲み碗	在地系	6.8	3.6	4.9	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀後半	
	186	H-16	溝	染付	皿	稜花皿	在地系	12.6	8.6	3.2	灰白色	透明釉	蛇ノ目凹型高台	19 世紀～幕末	
	187	D-11	溝	磁器	皿	皿	肥前系	—	8.0	—	浅黄橙色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀前半	畳付に砂付着
	188	G-13	溝	青花	皿	皿	中国	—	7.0	—	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	16 世紀後半～17 世紀	
	189	H-16	溝	染付	瓶	油壺	肥前系	3.6	—	—	灰白色	透明釉	内面頸部以下無釉	18 世紀後半	
	190	H-14	溝	陶器	碗	碗	薩摩焼苗代川系	—	4.8	—	白色	透明釉，一部鉄釉	畳付釉剥ぎ	17 世紀後半	堂平Ⅱ期
	191	H-15	溝	陶器	皿	皿	唐津	—	10.0	—	にぶい橙色	白化粧土・透明釉	外面腰部以下無釉	—	
	192	H-16	溝	陶器	壺	壺	薩摩焼苗代川系	15.6	—	—	にぶい褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	17 世紀後半	口唇部に貝目跡あり
	193	H-16	溝	陶器	壺	壺	薩摩焼苗代川系	16.2	—	—	暗灰褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	19 世紀	

挿図番号	掲載番号	出土区	遺構名	種別	分類	器種	産地	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
								口径	底径	器高					
第86図	194	H-14	溝	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	—	—	—	灰褐色	鉄釉	内外面施釉	17世紀	
	195	H-14	溝	陶器	蓋	蓋	薩摩焼苗代川系	19.2	11.8	4.3	橙色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	17世紀後半	外面に貝目跡あり
第87図	196	D-12	溝	瓦質	鉢	擂り鉢	—	—	—	—	灰白色	—	—	—	
	197	D-12	溝	瓦質	その他	火舎	—	—	—	—	にぶい橙色	—	—	—	
	198	H-16	溝	土製品	その他	火舎	—	—	—	—	にぶい黄色	—	—	—	
	199	D･E-12	溝	土製品	その他	火舎	—	—	—	—	黒色	—	—	—	
	200	H-16	溝	土製品	その他	植木鉢	—	—	16.4	—	にぶい橙色	—	—	—	内外面黒色
第89図	201	D･F-20	溝	瓦質	鉢	擂り鉢	—	32.0	—	—	灰黄色	—	—	—	
	202	G21～25	溝	土製品	錘	土錘	—	—	—	—	褐色	—	—	—	
	203	G21～25	溝	土製品	錘	土錘	—	—	—	—	にぶい橙色	—	—	—	
	204	G21～25	溝	土製品	錘	土錘	—	—	—	—	にぶい赤褐色	—	—	—	
	205	G21～25	溝	土製品	錘	土錘	—	—	—	—	にぶい橙色	—	—	—	
	206	D･F-20	溝	土製品	その他	鞴の羽口	—	—	—	—	—	—	—	—	
第91図	207	C-2	大型土坑	磁器	坏	小坏	在地系	4.2	2.0	2.7	白色	透明釉	—	19世紀	
	208	C-2	大型土坑	染付	皿	稜花皿	肥前系	9.8	3.8	2.6	灰白色	透明釉	—	18世紀	
	209	C-2	大型土坑	青磁染付	蓋	蓋	肥前系	10.0	4.0	3.7	灰色	透明釉,青磁釉	—	18世紀後半	底径はつまみ径
	210	C-2	大型土坑	陶器	鉢	擂り鉢	薩摩焼苗代川系	—	—	—	赤褐色	鉄釉	—	18世紀	
	211	C-2	大型土坑	陶器	鉢	擂り鉢	薩摩焼苗代川系	30.2	15.5	13.4	赤褐色	灰釉	—	19世紀	
	212	C-2	大型土坑	陶器	鉢	擂り鉢	薩摩焼苗代川系	24.2	13.4	13.0	赤褐色	鉄釉	—	19世紀	
第92図	213	C-2	大型土坑	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	36.0	—	—	赤褐色	灰釉	—	18世紀	口唇部に貝目跡あり
	214	C-2	大型土坑	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	—	16.6	—	暗赤褐色	鉄釉	—	18世紀	
	215	C-2	大型土坑	土製品	その他	不明	—	—	—	—	にぶい黄橙色	—	—	—	
第95図	216	D-11	鍛冶炉３	染付	皿	稜花皿	肥前系	—	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18世紀前半	
	217	D-11	鍛冶炉３	陶器	蓋	蓋	薩摩焼苗代川系	23.8	—	—	褐灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	19世紀代	

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	層位	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
						口径	底径	器高					
第101図	218	白磁	皿	E-8	Ⅰａ	—	4.4	—	淡黄色	透明釉	底部無釉	16世紀後半	抉り高台
	219	白磁	皿	G-11	Ⅰａ	—	4.8	—	白色	透明釉	底部無釉	16世紀後半	抉り高台
	220	青磁	椀	G-6	Ⅰａ	16.0	—	—	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15世紀	上田分類B-Ⅰ’
	221	青磁	椀	G-10	Ⅰａ	14.8	—	—	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15世紀後半～16世紀前半	上田分類C群
	222	青磁	椀	G-11	Ⅰａ	—	—	—	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15世紀頃	上田分類B群か？
	223	青磁	椀	—	Ⅰａ	13.8	—	—	灰黄色	青磁釉	残存部全面施釉	14世紀後半～15世紀前半	上田分類D群
	224	青磁	椀	G-10	Ⅰａ	15.8	—	—	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15世紀	
	225	青磁	椀	9T	Ⅰａ	18.0	—	—	灰色	青磁釉	残存部全面施釉, 口縁一部釉剥ぎ	14世紀後半～15世紀前半	上田分類C群
	226	青磁	椀	F-5	Ⅳａ	14.2	5.2	7.9	灰白色	青磁釉	高台内面無釉	16世紀前半	上田分類B-Ⅳ-a群
	227	青磁	椀	G-12	Ⅰａ	—	6.6	—	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	15世紀代か？	高台内底面輪状に釉剥ぎ, 目跡有り 見込みに印花文 上田分類B群か？
	228	青磁	稜花皿	I-7･8	Ⅰａ	13.2	—	—	灰黄色	青磁釉	残存部全面施釉	15世紀後半～16世紀前半	
	229	青磁	稜花皿	—	Ⅰａ	—	5.0	—	灰白色	青磁釉	高台内底面輪状に釉剥ぎ	15世紀後半～16世紀前半	
	230	青磁	小皿	F-2	Ⅱ	9.5	4.8	3.2	灰黄色	青磁釉	畳付～高台内底面無釉	16世紀代か？	見込み輪状に釉剥ぎ
	231	青磁	盤	G-11	Ⅰａ	—	12.4	—	灰黄色	青磁釉	残存部全面施釉	15世紀後半～16世紀前半	高台内底面輪状に釉剥ぎ
	232	青磁	香炉	F-6	Ⅰａ	10.9	—	—	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	—	
	233	青磁	香炉	F･G-7･8	Ⅰａ	—	5.2	—	灰白色	青磁釉	見込み無釉	—	
	234	青磁	瓶	E-18	Ⅰａ	3.2	—	—	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	—	

挿図番号	掲載番号	種別	器種	分類	産地	出土区	層位	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の色調	施釉部位	時期	備考
								口径	底径	器高					
第102図	235	青花	碗	碗	景徳鎮	2地点	—	11.2	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	15世紀前半	小野分類C群
	236	青花	碗	碗	景徳鎮	D-12	Ⅰａ	—	5.3	—	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	15世紀後半～ 16世紀中葉	小野分類C群
	237	青花	碗	碗	景徳鎮	H-6	Ⅰａ	—	5.0	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	16世紀後半	畳付に砂目 饅頭心 小野分類
	238	青花	碗	碗	景徳鎮	H-6～9	Ⅰａ	—	4.4	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	—	小野分類B群か？
	239	青花	碗	碗	漳州窯	H-13	Ⅰａ	14.6	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	16世紀後半～ 17世紀初頭	
	240	青花	碗	碗	漳州窯	G-6～9	Ⅰａ	—	5.6	—	灰白色	透明釉	底部無釉	16世紀後半～ 17世紀初頭	
	241	青花	皿	皿	景徳鎮	C-1	Ⅱ	—	5.6	—	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	16世紀後半	小野分類B群 見込み人物文
	242	青花	皿	皿	景徳鎮	E-3	Ⅰａ	—	8.3	—	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	16世紀後半	小野分類B群
	243	青花	皿	皿	景徳鎮	F･G-14	Ⅰａ	—	3.0	—	灰白色	透明釉	底部～畳付無釉	15世紀後半～ 16世紀中葉	小野分類皿C群
	244	青花	皿	皿	景徳鎮	F-13	Ⅰａ	17.5	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	16世紀後半	小野分類B郡
	245	青花	皿	皿	景徳鎮	F-14	Ⅰａ	—	12.4	—	灰白色	透明釉	畳付一部釉剥ぎ	16世紀後半	小野分類B郡 砂目跡有り
	246	青花	皿	皿	景徳鎮	H-15	Ⅰａ	—	7.0	—	灰白色	透明釉	底部無釉	—	
	247	青花	皿	皿	漳州窯	H-6	Ⅰａ	—	4.0	—	灰白色	白化粧土に 透明釉	底部無釉	16世紀後半～ 17世紀初頭	
	248	青花	蓋物	蓋物	景徳鎮	G-11	Ⅰａ	7.6	—	—	灰白色	透明釉	口唇部無釉	16世紀代	
	249	陶器	壺か瓶	壺か瓶	中国南部	E-18	Ⅰａ	—	15.0	—	灰黄色	黒釉	内面無釉	—	

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
								口径	底径	器高					
第103図	250	白磁	碗	碗	肥前	F-7	Ⅰa	11.1	4.3	6.2	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	17世紀中葉	
	251	磁器	碗	碗	肥前	G-15･16	ロングT	—	4.2	—	灰白色	(外)青磁釉 (内)透明釉	高台無釉	17世紀中葉	見込みに呉須による印花文
	252	染付	碗	丸碗	肥前	G-14	Ⅰa	—	4.6	—	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	1660年代～1670年代	
	253	染付	碗	丸碗	肥前	—	—	—	4.2	—	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	17世紀後半	二重編目文
	254	染付	碗	丸碗	肥前	E-18	Ⅰa	4.0	—	—	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	1770年代～1810年代	見込みに花文
	255	染付	碗	碗	肥前	G-5	Ⅰa	12.4	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	1770年代～1810年代	
	256	染付	碗	碗	肥前	I-7･8	Ⅰa	11.4	4.0	5.0	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	1770年代～1810年代	草花文
	257	染付	碗	丸碗	肥前	D-12	Ⅰa	10.6	—	—	白色	(外)青磁釉 (内)透明釉	残存部全面施釉	18世紀中頃	口縁部四方襷文, コンニャク印判五弁花
	258	染付	碗	丸碗	肥前	G-13	Ⅰa	12.6	5.4	6.4	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀前半～中頃	一重編目文, 畳付砂粗付着
	259	染付	碗	丸碗	肥前系	G-8～10	Ⅰa	11.2	5.2	5.9	黄白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀前葉～中葉	矢羽文
	260	染付	碗	丸碗	肥前系	F-7	Ⅰa	10.0	4.1	5.0	黄白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀中頃	一重編目文
	261	染付	碗	丸碗	肥前系	F-8	Ⅰa	10.7	4.2	5.5	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀前葉～中葉	雪の輪梅花文, 高台内底裏名有り
	262	染付	碗	丸碗	肥前系	H-6	Ⅰa	11.0	4.4	6.0	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀前葉～中葉	畳付に砂付着, 高台内面に界線有り
	263	染付	碗	丸碗	肥前系	E-8	Ⅰa	11.8	4.8	5.7	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀前葉～中葉	雪の輪梅花文, 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ
	264	染付	碗	丸碗	肥前系	C-1	Ⅰa	12.0	4.6	6.0	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀前葉～中葉	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ
	265	染付	碗	丸碗	肥前系	G-7	Ⅳb	10.4	4.4	5.3	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀前葉～中葉	
	266	染付	碗	丸碗	肥前系	G-7	Ⅴ	10.0	4.8	5.2	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀前葉～中葉	
	267	染付	碗	丸碗	肥前系	D-12	Ⅰa	10.8	4.6	4.7	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀後半	梅文，見込みに蛇ノ目釉剥ぎ
第104図	268	染付	碗	丸碗	肥前系	F-7	Ⅰa	10.0	4.2	4.8	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀後半	松葉文
	269	染付	碗	丸碗	肥前系	F･G-8･9	Ⅰa	11.0	4.6	4.8	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀初頭	コンニャク印判花文, 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ
	270	染付	碗	丸碗	肥前系	G-4	Ⅰa	12.0	4.7	4.7	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀初頭	
	271	染付	碗	丸碗	肥前系	E-10	Ⅰa	12.3	5.2	5.4	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	1820年代～1860年代	丸紋
	272	染付	碗	端反碗	肥前系	D-12	Ⅰa	12.0	4.6	4.5	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	1820年代～1860年代	松葉文, 見込みに重ね焼きの高台跡, 蛇ノ目釉剥ぎ
	273	染付	碗	端反碗	在地	G-14	ベルト	10.8	3.8	4.7	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀後期～19世紀初頭	見込みに足付ハマの目跡有り
	274	染付	碗	丸碗	在地	D-12	Ⅰa	11.6	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18世紀後期～19世紀初頭	山水文
	275	染付	碗	丸碗	在地	D-12	Ⅰa	9.0	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18世紀後期～19世紀初頭	山水文
第105図	276	染付	碗	朝顔型	肥前系	D-12	Ⅰa	11.0	4.0	6.7	灰白色	(外)青磁釉 (内)透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀後半	口縁内面四方襷文, 見込みに二重圏線, コンニャク印判五弁花
	277	染付	碗	朝顔型	肥前系	H-8	Ⅰa	—	4.8	—	灰白色	(外)青磁釉 (内)透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀後半	コンニャク印判五弁花
	278	染付	小鉢	朝顔型	在地	D-12	Ⅰa	11.4	4.3	6.0	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀初頭	
	279	染付	碗	丸碗	在地	D-12	Ⅰa	—	4.0	—	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀初頭	梵字文，見込みに虫文
	280	染付	碗	碗	在地	E-11	Ⅰa	—	4.0	—	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀初頭	見込みに虫文
	281	染付	碗	広東碗	在地	—	—	9.4	4.2	5.5	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19世紀初頭～幕末	
第106図	282	染付	碗	端反碗	肥前	G-8～10	Ⅰa	10.4	4.0	5.8	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀初頭	
	283	染付	碗	端反碗	肥前系	E-12	Ⅰa	10.5	4.5	5.1	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19世紀初頭～幕末	高台内面蛇ノ目釉剥ぎ
	284	染付	碗	端反碗	肥前系	E･F-12～16	ベルト	9.4	3.6	5.1	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19世紀初頭～幕末	見込みに足付ハマの目跡有り
	285	染付	碗	端反碗	肥前系	G-14	Ⅰa	9.0	3.8	4.6	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19世紀初頭～幕末	
	286	染付	碗	端反碗	肥前系	F-12	Ⅰa	9.6	4.3	4.6	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19世紀初頭～幕末	
	287	染付	碗	端反碗	肥前系	D-12	Ⅰa	10.4	4.6	4.4	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19世紀初頭～幕末	高台内面に目跡有り
	288	染付	碗	端反碗	在地	G-10	Ⅰa	10.6	4.7	5.6	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19世紀初頭～幕末	
	289	染付	碗	端反碗	在地	F-14	Ⅰa	11.0	4.2	5.5	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19世紀初頭～幕末	唐草文
	290	染付	碗	端反碗	在地	F-14	Ⅰa	10.8	4.0	5.8	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19世紀初頭～幕末	山水文, 見込み蛇ノ目釉剥ぎ
	291	染付	碗	端反碗	在地	—	Ⅰa	8.6	3.8	5.1	灰白橙色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19世紀初頭～幕末	
	292	染付	碗	端反碗	在地	EF-12～16	ベルト	8.8	3.6	4.7	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19世紀初頭～幕末	
第107図	293	染付	碗	半筒型碗	肥前	E-18	Ⅰa	—	—	—	灰色	透明釉	残存部全面施釉	1780年代～1810年代	見込みに圏線, 腰部に松葉文
	294	染付	碗	半筒型碗	在地	D-12	Ⅰa	7.4	4.2	6.1	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	1780年代～1810年代	雪の輪笹文, 見込みに虫文
	295	染付	碗	半筒型碗	肥前	H-6	Ⅰa	7.3	3.4	6.2	白色	透明釉	全面施釉	1780年代～1810年代	
	296	染付	碗	半筒型碗	肥前	E-18	Ⅰa	—	—	—	白色	透明釉	残存部全面施釉	1780年代～1810年代	
	297	染付	碗	半筒型碗	肥前	H-8	Ⅰa	—	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	1780年代～1810年代	
	298	染付	碗	筒丸型碗	肥前系	G-10	Ⅰa	—	4.2	—	灰白色	透明釉	畳付以外施釉, 蛇ノ目釉剥ぎ	1780年代～1810年代	碗の可能性有り
	299	染付	碗	筒丸型碗	肥前	C-2	Ⅱ	—	4.0	—	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	1780年代～1810年代	
	300	染付	碗	筒丸型碗	肥前系	—	Ⅰa	6.4	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	1780年代～1810年代	
	301	染付	碗	筒丸型碗	在地	—	Ⅰa	7.0	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	1780年代～1810年代	

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
								口径	底径	器高					
第107図	302	染付	碗	筒丸型碗	在地	—	—	6.4	3.3	5.1	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	1780 年代～1810 年代	
	303	磁器	坏	小坏	肥前系	—	—	6.8	2.8	5.0	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	17 世紀末～18 世紀中葉	
	304	染付	碗	小坏	肥前系	—	—	7.3	3.4	4.8	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	17 世紀後半	
	305	染付	碗	小坏	肥前系	—	—	—	3.2	—	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	17 世紀末～18 世紀中葉か？	
	306	染付	碗	小坏	肥前系	—	—	7.4	3.2	3.9	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19 世紀初頭～幕末	
	307	染付	碗	小坏	肥前系	H-10	Ⅰａ	6.4	3.8	3.6	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	1780 年代～1820 年代	
	308	染付	碗	小坏	肥前系	C･E-6	Ⅰａ	4.6	2.0	3.3	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19 世紀代	
	309	染付	碗	小坏	肥前系	D-12	Ⅰａ	4.4	2.2	2.6	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19 世紀代	
	310	染付	碗	小坏	肥前系	E-7	Ⅰａ	4.0	2.1	2.6	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19 世紀代	
第108図	311	染付	皿	中皿	肥前	F-14	Ⅰａ	22.4	14.0	3.6	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀前半	唐草文，口縁部・見込みに松竹梅文
	312	染付	皿	中皿	肥前	F-6	Ⅰａ	—	11.0	—	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	17 世紀後半	花文
	313	染付	皿	大皿	肥前	G-14	Ⅰａ	—	8.8	—	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀前半	
	314	染付	皿	大皿	肥前系	F-14	Ⅰａ Ⅲａ	22.8	13.0	4.6	白色	透明釉	蛇ノ目大型高台以外全面施釉	19 世紀初頭～幕末	山水文
	315	染付	皿	大皿	肥前	EF-12～16	ベルト	—	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18 世紀前半	
	316	染付	皿	角皿	肥前	DG-1～5 ロングトレンチ	—	—	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18 世紀前半か？	
第109図	317	染付	皿	皿	肥前	C-2	Ⅰ	—	6.4	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	1650 年代～1660 年代	日字鳳凰文，畳付に砂付着
	318	染付	皿	中皿	肥前系	7T	Ⅰａ	13.8	6.5	2.9	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀後半～19 世紀初頭	コンニャク印判五弁花
	319	染付	皿	中皿	肥前系	E-10	Ⅰａ	13.1	7.7	2.4	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀後半～19 世紀初頭	見込みにコンニャク印判五弁花，裏銘「渦福」
	320	染付	皿	中皿	肥前	C-1	—	13.0	8.2	3.0	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀前半	手描き五弁花，墨はじき
	321	染付	皿	中皿	肥前系	EF-12～16	ベルト	12.7	4.8	3.9	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19 世紀初頭～幕末	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ
	322	染付	皿	小皿？	肥前系	F-10	Ⅰａ	11.6	6.6	3.0	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19 世紀初頭～幕末	高台内面に蛇ノ目釉剥ぎ
	323	染付	皿	五寸皿	肥前系	D-12	Ⅰａ	11.0	6.8	2.2	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19 世紀初頭～幕末	畳付内面にハリ支え熔着
	324	染付	皿	五寸皿	肥前系	—	—	—	4.6	—	乳白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19 世紀初頭～幕末	山水文
	325	染付	皿	小皿	肥前系	DG-1～5 ロングトレンチ	—	10.0	4.2	2.7	浅黄色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19 世紀初頭～幕末	
	326	染付	皿	型物皿	在地	H-8	Ⅰａ	10.1	4.3	2.7	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19 世紀初頭～幕末	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ
第110図	327	染付	鉢	鉢	肥前	G-8～10	Ⅰａ	—	4.7	—	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀前半	
	328	染付	鉢	鉢	肥前	F-10	Ⅰａ	—	6.0	—	灰白色	（外）青磁釉（内）透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀前半	
	329	染付	鉢	鉢	肥前系	G-6～9	Ⅰａ	10.6	5.0	5.4	灰白色	透明釉	口唇部・畳付釉剥ぎ	1780 年代～1810 年代	
	330	染付	鉢	鉢	肥前系	—	—	11.4	—	—	灰白色	透明釉	口唇部内面釉剥ぎ	19 世紀初頭～幕末	
	331	染付	鉢	鉢	肥前系	—	—	10.4	—	—	灰白色	透明釉	口唇部内面釉剥ぎ	19 世紀初頭～幕末	
	332	染付	鉢	鉢	肥前系	EF-12～16	ベルト	11.0	5.6	6.0	灰白色	透明釉	口唇部～口縁部・畳付釉剥ぎ	19 世紀初頭～幕末	
	333	染付	鉢	鉢	肥前	H-6	Ⅰａ	—	6.8	—	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	1780 年代～19 世紀初頭	
	334	染付	碗	筒型碗	肥前系	D-12	Ⅰａ	—	8.2	—	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19 世紀初頭～幕末か？	
	335	染付	鉢？	鉢？	肥前系	C-2	Ⅱ	13.8	—	—	白色	透明釉	残存部全面施釉	19 世紀初頭～幕末	
	336	染付	鉢	鉢	肥前	—	—	—	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18 世紀後半	
	337	色絵	鉢	段重	肥前	F-8	Ⅰａ	15.4	—	—	灰白色	透明釉	口唇部，口縁部内部釉剥ぎ	1780 年代～1810 年代	
	338	染付	鉢	段重	在地	—	—	13.0	—	—	灰白色	透明釉	口唇部～口縁部内面釉剥ぎ	19 世紀初頭～幕末	

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
								口径	つまみ径	器高					
第111図	339	染付	蓋	丸型蓋	肥前系	GH-6～9	Ⅰａ	—	4.2	—	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	1780 年代～19 世紀初頭	花文
	340	染付	蓋	朝顔型蓋	在地	GH-6～9	Ⅰａ	9.6	4.4	2.6	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	1780 年代～19 世紀初頭	内面に蛇ノ目釉剥ぎ
	341	青磁染付	蓋	朝顔型蓋	肥前	—	—	9.2	—	—	灰白色	（外）青磁釉（内）透明釉	残存部全面施釉	18 世紀後半	
	342	染付	蓋	端反蓋	肥前	F-18	Ⅰａ	8.8	3.3	2.6	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18 世紀後半～19 世紀初頭	内面に蛇ノ目釉剥ぎ
	343	染付	蓋	端反蓋	在地	F-14	Ⅰａ	9.0	3.6	2.9	灰白色	透明釉	全面施釉？	19 世紀初頭～幕末	
	344	染付	蓋	端反蓋	在地	E-10	Ⅰａ	9.0	3.6	2.6	灰白色	透明釉	外面つまみ・上端は釉剥ぎ	19 世紀初頭～幕末	内面に蛇ノ目釉剥ぎ
	345	染付	蓋	端反蓋	在地	G-14	Ⅰａ	9.0	3.5	3.1	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19 世紀初頭～幕末	内面に蛇ノ目釉剥ぎ

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
								口径	庇径	器高					
第112図	346	染付	蓋	段重蓋	肥前系	E-10	Ⅰａ	10.2	11.3	—	灰白色	透明釉	身受け部釉剥ぎ	1780 年代～19 世紀初頭	
	347	染付	蓋	段重蓋	肥前系	E-18	Ⅰａ	11.2	11.9	—	白色	透明釉	残存部全面施釉	1780 年代～19 世紀初頭	扇文
	348	染付	蓋	段重蓋	肥前系	D-12	Ⅰａ	8.0	9.5	3.2	白色	透明釉	身受け部釉剥ぎ	1780 年代～19 世紀初頭	
	349	染付	蓋	段重蓋	肥前	C-1～3	Ⅰ	8.6	9.6	—	灰白色	透明釉	口唇部～庇まで釉剥ぎ	1780 年代～19 世紀初頭	

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
								口径	底径	器高					
第112図	350	染付	蓋	段重蓋	肥前	G-6～9	Ⅰa	7.8	8.6	—	灰白色	透明釉	身受け部釉剥ぎ	1780年代～19世紀初頭	
	351	染付	蓋	段重蓋	在地	E-12	Ⅱ	10.0	11.4	4.4	灰白色	透明釉	身受部無釉	19世紀初頭～幕末	つまみ径　1.6cm
	352	染付	蓋	段重蓋	在地	EF-12～16	—	12.1	12.9	—	灰白色	透明釉	庇～口縁施釉	19世紀初頭～幕末	
	353	染付	蓋物	蓋	在地	G-15	Ⅰa	4.4	6.6	3.7	灰白色	透明釉	内面無釉	幕末	つまみ径　1.6cm
	354	染付	蓋	段重蓋	在地	E-10	Ⅰa	8.1	9.2	1.1	灰白色	透明釉	身受け部釉剥ぎ	幕末	

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
								口径	底径	器高					
第113図	355	染付	瓶類	徳利	肥前	—	Ⅱ	6.0	—	—	灰白色	透明釉	内面胴部以下無釉	18世紀代	
	356	染付	瓶類	徳利	肥前系	D-12	Ⅰa	—	—	—	白色	透明釉	内面一部釉だれ	18世紀代	
	357	染付	瓶類	徳利	肥前系	—	Ⅰa	—	—	—	白色	透明釉	内面無釉	18世紀後半	
	358	磁器	徳利	徳利	肥前系か？	E-6	Ⅰa	—	—	—	灰色	透明釉	内面無釉	19世紀代	
	359	染付	仏具	仏飯器	肥前系	—	Ⅰ Ⅱ	5.0	3.6	5.2	灰白色	透明釉	底部無釉	17世紀中葉～後半	
	360	染付	仏具	仏飯器	在地か？	D-12	Ⅰa	7.4	4.6	5.7	灰白色	透明釉	脚部中以下無釉	19世紀代	
	361	陶胎染付	仏具	香炉	肥前	G-14	Ⅰa	10.0	—	—	灰白色	透明釉	内面無釉	18世紀後半	
	362	染付	仏具	仏花器	在地	F-14	Ⅰa	10.4	—	—	灰白色	白濁した透明釉	内面口縁部下位無釉	19世紀代	
	363	磁器	仏具	仏花器	在地	—	—	—	6.0	—	灰白色	透明釉	腰部～底部無釉	19世紀代	
	364	磁器	鉢類	飯猪口か？	在地	C-1～3	Ⅰ	7.4	5.6	3.4	灰白色	透明釉	底部無釉	19世紀代	
	365	染付	その他	メンコ	肥前	D-11	Ⅰa	6.8	6.6	1.0	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀後半か？	口径は上径，皿の転用
	366	陶器	その他	碗	肥前系か？	表採	—	—	1.7	—	灰白色	透明釉	腰部～高台内面無釉	不明	ままごと道具
	367	磁器	玩具	小坏	肥前系か？	2地点	—	2.6	1.1	1.6	灰白色	透明釉	畳付以外施釉	不明	
	368	磁器	その他	馬の鞦	在地	EF-12～16	Ⅰa	1.5	—	—	白色	—	—	19世紀代	
	369	磁器	その他	馬の鞦	在地	F-7	Ⅰa	1.1	—	5.7	灰白色	緑釉	端部片面施釉	19世紀代	
	370	磁器	その他	—	在地	E-14	Ⅰa	1.4	—	15.1	白色	透明釉	口唇部のみ施釉	19世紀以降	
	371	磁器	窯道具	切り高台付ハマ	在地	表採	—	5.8	4.2	1.2	灰白色	—	—	1780年代～幕末	平佐窯
	372	磁器	窯道具	切り高台付ハマ	在地	F-12	Ⅰa	5.0	4.8	1.9	白色	—	—	1780年代～幕末	平佐窯，口径は上端径
	373	磁器	窯道具	チャツ	在地	F-7	Ⅰa	6.3	4.0	1.5	褐色	—	—	1780年代～幕末	平佐窯，上端部にアルミナ付着
第114図	374	陶器	碗	天目碗	瀬戸美濃か？	G-11	Ⅰa	—	—	—	浅黄橙色	黒釉	腰部以下無釉	不明	
	375	陶器	碗	丸碗	京焼	—	—	9.0	3.2	5.7	灰白色	透明釉	腰部～高台内面無釉	17世紀後半	
	376	陶器	碗	碗	肥前唐津	G-13	Ⅰa	—	4.8	—	橙色	灰釉	腰部～底部無釉	1590年代～1610年代	
	377	陶器	碗	碗	肥前唐津	G-14	Ⅰa	—	3.8	—	灰白色	鉄釉	腰部～高台内面無釉	17世紀中葉	
	378	陶器	碗	抹茶碗	肥前唐津	表採	—	—	5.4	—	浅黄橙色	白濁釉の上に黒釉	腰部～底部無釉	1590年代～1610年代	
	379	陶器	碗	碗	肥前京焼風陶器	FG-8·9	Ⅰa	11.6	4.0	4.8	淡黄色	透明釉	畳付釉剥ぎ	17世紀後半～18世紀初頭	
	380	陶器	碗	煎じ碗	肥前京焼風陶器	—	—	9.7	3.6	4.6	灰黄色	透明釉	腰部～底部無釉	17世紀後半～18世紀初頭	
	381	陶器	碗	碗	肥前京焼風陶器	—	Ⅰa	—	3.7	—	灰黄色	透明釉	高台脇～ 高台内面無釉	17世紀後半～18世紀初頭	
	382	陶器	碗	碗	肥前京焼風陶器	E-7	Ⅰa	—	3.6	—	淡黄色	透明釉	腰部～底部無釉	17世紀後半～18世紀初頭	
	383	陶器	碗	碗	肥前京焼風陶器	E-8	Ⅰa	9.6	3.7	4.3	灰黄色	透明釉	腰部～底部無釉	17世紀後半～18世紀初頭	
	384	陶器	碗	碗	肥前内野山系	G-15·16	Ⅰa	10.4	—	—	灰黄色	銅緑釉	残存部全面施釉	17世紀後半～18世紀初頭	
	385	陶器	碗	碗	肥前内野山系	F-7	Ⅰa	—	4.0	—	灰黄色	(外)銅緑釉 (内)透明釉	腰部～底部無釉	17世紀後半～18世紀初頭	
	386	陶胎染付	碗	丸碗	肥前	H-6	Ⅰa	—	5.2	—	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀後半	
第115図	387	陶器	碗	碗	肥前	C-2	Ⅱ	11.8	5.0	7.7	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀前半	
	388	陶器	碗	碗	肥前	D-11	Ⅰa	—	4.4	—	灰黄色	青磁釉	畳付釉剥ぎ	18世紀前半	
	389	陶器	碗	刷毛目唐津碗	肥前	H-14	Ⅰa	11.0	4.3	5.7	褐灰色	白化粧土ハケ目·鉄釉	高台脇～高台内面無釉	18世紀前半	
	390	陶器	碗	碗	肥前	G14～16 ロング トレンチ	Ⅰa	—	4.6	—	にぶい 橙色	白化粧土 ハケ目の上に 透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀前半	打ち刷毛目
	391	陶器	碗	刷毛目唐津碗	肥前	G-14	Ⅰa	—	4.0	—	明赤褐色	白化粧土ハケ目	畳付釉剥ぎ	18世紀前半	巻刷毛目，蛇ノ目釉剥ぎか？
	392	陶器	碗	呉器手碗	肥前	F-8	Ⅰa	11.8	4.4	7.3	灰黄色	白化粧土ハケ目 透明釉·緑釉絵	畳付釉剥ぎ	18世紀前半	巻刷毛目
	393	陶器	碗	丸碗	肥前	D-3	Ⅱ	—	—	—	黒褐色	透明釉	残存部全面施釉	18世紀前半	螢手
	394	陶器	碗	碗	肥前	I-7·8	Ⅰa	8.0	3.6	5.4	灰色	黒釉	全面施釉	1590年代～1610年代	
	395	陶器	碗	碗	肥前内野山	G-5	Ⅰa	10.8	4.2	6.8	灰黄色	白化粧土に 透明釉 二彩手	高台脇途中～高台内面無釉	17世紀後半	
第116図	396	白薩摩	碗	碗	薩摩焼竪野系	F-13	Ⅰa	—	4.2	—	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	17世紀後半か？	呉須の千鳥
	397	白薩摩	碗	碗	薩摩焼竪野系	E-14	Ⅰa	—	5.4	—	灰白色	透明釉	底部一部無釉	17世紀後半か？	
	398	陶器	碗	碗	薩摩焼龍門司系	—	Ⅰa	—	5.2	—	灰色	褐釉	畳付釉剥ぎ	18世紀後半	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ
	399	陶器	碗	碗	薩摩焼龍門司系	C-12	Ⅰa	12.0	5.0	5.7	橙色	鉄釉	腰部～高台内面無釉	18世紀後半	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
								口径	底径	器高					
第116図	400	陶器	白色陶胎	碗	肥前系	—	Ⅰａ	—	4.6	—	淡黄色	透明釉	畳付釉剥ぎ	時期不明	
	401	白薩摩	坏	小坏	薩摩焼 竪野系	F-12	Ⅰａ	5.0	2.5	4.8	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	17世紀後半か？	鉄絵の千鳥印
	402	陶器	碗	小坏	肥前	C-11	Ⅰａ	4.8	2.6	2.7	黄白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀後半	
第117図	403	陶器	皿	小皿	肥前唐津	表採	—	11.6	4.6	2.9	灰黄色	鉄釉	腰部～高台内面無釉	1590年代～1610年代	見込みに胎土目有り
	404	陶器	皿	小皿	肥前唐津	H-6	Ⅰａ	12.4	5.2	3.1	黄灰色	灰釉	腰部～底部無釉	1590年代～1610年代	見込みに胎土目有り
	405	陶器	皿	小皿	肥前 内野山系	FG-14	Ⅰａ	11.4	4.2	3.4	灰白色	透明釉	腰部～底部無釉	17世紀後半～18世紀初頭	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ
	406	陶器	皿	折れ縁皿	肥前系	I-7･8	Ⅰａ	13.4	—	—	灰色	透明釉	残存部全面施釉	1610年代～17世紀前半	
	407	陶器	皿	溝縁皿	肥前	H-14	Ⅰａ	—	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	1610年代～17世紀前半	
	408	陶器	皿	溝縁皿	肥前	—	—	14.0	4.8	3.8	淡黄色	透明釉	畳付釉剥ぎ	1610年代～17世紀前半	
	409	陶器	皿	皿	肥前 内野山系	G-14	Ⅰａ	13.4	4.8	3.6	灰黄色	銅緑釉	畳付釉剥ぎ	17世紀後半～18世紀初頭	
	410	陶胎 染付か？	皿	皿	肥前か？	FG-7･8	Ⅰａ	13.6	7.6	2.7	灰色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀	口唇部口錆，内面呉須の文様
第118図	411	陶器	皿	絵唐津 大皿	唐津	C-1	Ⅰａ	19.5	7.0	5.7	にぶい橙色	灰釉・鉄釉	胴～底部無釉，見込み部分無釉	17世紀前半	見込み円状に釉剥ぎ
	412	陶器	碗	碗	肥前	G-13	Ⅰａ	—	7.2	—	灰色	鉄釉	腰部～底部無釉	1590年代～1610年代	見込みに胎土止め，内面鉄絵
	413	陶器	皿	大皿	肥前	F-7	Ⅰａ	—	5.8	—	黄白色	透明釉	畳付～高台内面無釉	18世紀前半	内面刷毛目
	414	陶器	皿	皿	唐津	F-8･9	Ⅰａ	—	5.8	—	灰黄色	白化粧土のハケ目，透明釉	腰部～高台内面無釉	18世紀前半	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ，巻刷毛目
	415	陶器	皿	皿	肥前 内野山系	FG-8～10	Ⅰａ	—	5.9	—	灰黄色	(外)透明釉 (内)銅緑釉と褐釉	腰部～底部無釉	17世紀後半～18世紀初頭	蛇ノ目釉剥ぎ
	416	陶器	皿	大皿	肥前	F-3	Ⅰａ	—	—	—	灰色	青磁釉？白化粧土ハケ目？	残存部全面施釉	18世紀前半	刷毛目
	417	陶器	皿	大皿	肥前	C-2	Ⅰ・Ⅱ	—	—	—	にぶい黄橙色	白化粧土に透明釉・鉄釉	残存部全面施釉	18世紀前半	
	418	陶器	鉢	片口	肥前	E-13	Ⅰａ	20.4	10.6	10.4	灰黄色	透明釉	畳付～底部無釉	18世紀	
	419	陶器	鉢	鉢	肥前	G-14～15	Ⅰａ	18.6	8.6	6.0	浅黄色	白化粧土のハケ目 透明釉	畳付釉剥ぎ	18世紀前半	巻刷毛目
	420	陶器	鉢	鉢	肥前	G-14	Ⅰａ 表採	25.0	—	—	灰色	銅緑釉・褐釉	残存部全面施釉	17世紀中葉～末	

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
								口径	底径	器高					
第119図	421	白薩摩	蓋	土瓶蓋	薩摩焼 竪野系	—	—	—	—	—	灰白色	透明釉	全面施釉	18世紀後半以降	つまみ径　2.0cm
	422	陶器	蓋	急須蓋	薩摩焼 竪野系	C-3	Ⅱ	—	6.4	—	灰色	透明釉	上面施釉	18世紀後半以降	象嵌，三島手
	423	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩焼 苗代川系	E-18	Ⅰａ	4.2	6.6	3.2	にぶい褐色	鉄釉	上面施釉	18世紀後半以降	つまみ径　1.1cm
	424	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩焼 苗代川系	E-18	Ⅰａ	7.0	9.5	3.1	明赤褐色	鉄釉	上面施釉	18世紀後半以降	つまみ径　1.6cm，上面に重ね焼きの跡有り
	425	陶器	蓋	壺蓋	薩摩焼 龍門司系	F-6	Ⅰａ	8.2	10.0	—	赤褐色	白化粧土と鉄釉	上面施釉	18世紀後半以降	
	426	陶器	蓋	鍋蓋	薩摩焼 苗代川系	H-6	Ⅰａ	20.2	23.6	—	暗灰褐色	鉄釉	庇～口縁部内面無釉	18世紀後半～19世紀代	
	427	陶器	蓋物	壺蓋	薩摩焼 苗代川系	F-7	Ⅰａ	8.0	11.8	2.1	灰黄色	鉄釉	全面施釉	17世紀前半～後半	堂平窯
	428	陶器	蓋物	瓶蓋	薩摩焼 苗代川系	E-4	Ⅰａ	2.4	5.6	3.0	暗灰色	鉄釉	上面施釉	19世紀代か？	

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
								口径	底径	器高					
第119図	429	磁器	水注	水注	瀬戸	—	—	—	—	—	灰黄色	青磁釉	内面無釉	13世紀代	
	430	陶器	水注	水注	薩摩焼 苗代川系	G-14	Ⅰａ	—	—	—	にぶい赤褐色	灰釉	残存部全面施釉	17世紀前半	堂平窯
	431	陶器	水注	水注	薩摩焼 苗代川系	G-5	Ⅰａ	—	—	—	褐灰色	灰釉	残存部全面施釉	17世紀後半	堂平窯か？
	432	陶器	瓶類	からから	薩摩焼 龍門司系	F-8	Ⅰａ	—	—	—	赤褐色	鉄釉	内面頸部以下無釉	19世紀代	飛鉋
	433	陶器	瓶類	不明	薩摩焼 龍門司系	E-12	Ⅰａ	1.8	4.0	6.1	灰褐色	鉄釉	底部無釉	19世紀代	庇径4.0は底径
第120図	434	陶器	水注	土瓶	薩摩焼 竪野系	C-2	Ⅰａ	7.6	—	—	灰白色	褐釉	口唇部～口縁部内面釉剥ぎ	18世紀後半以降	
	435	陶器	水注	土瓶	薩摩焼 竪野系	—	Ⅰａ	—	—	—	浅黄橙色	褐釉	底面無釉	18世紀後半以降	
	436	陶器	瓶類	土瓶	薩摩焼 苗代川系	E-18	Ⅰａ	—	—	—	灰褐色	鉄釉	内面施釉	18世紀後半以降	
	437	陶器	水注	土瓶	薩摩焼 苗代川系	D-12	Ⅰａ	6.2	—	—	橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ，底部無釉	18世紀後半以降	外面に煤付着
	438	陶器	水注	土瓶	薩摩焼 苗代川系	D-12	Ⅰａ	7.0	—	—	にぶい 橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ，底部無釉	18世紀後半以降	外面に煤付着
	439	陶器	水注	土瓶	薩摩焼 苗代川系	D-12	Ⅰａ	7.4	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ，底部無釉	18世紀後半以降	
	440	陶器	水注	土瓶	薩摩焼 苗代川系	E-6	Ⅳｂ	8.8	—	—	褐灰色	鉄釉	全面施釉	18世紀後半以降	外面肩部に横筋
	441	陶器	水注	土瓶	薩摩焼 苗代川系	G-14	Ⅰａ	9.6	—	—	黒褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ，底部無釉	18世紀後半以降	口唇部に貝目有り，外面肩部に横筋
	442	陶器	水注	土瓶	薩摩焼 苗代川系	GH-6～9	Ⅰａ	10.6	—	—	にぶい褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀後半以降	外面肩部に横筋
第121図	443	陶器	瓶類	徳利	肥前	G-13	Ⅰａ	—	—	—	明赤褐色	白化粧土とハケ目の上に透明釉・緑彩	内面無釉	17世紀後半	二彩手

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
								口径	底径	器高					
第121図	444	陶器	瓶類	徳利	肥前	G-5	Ⅰa	—	—	—	灰黄色	白化粧土とハケ目の上に透明釉	内面無釉	17世紀後半	二彩手
	445	陶器	瓶類	徳利	薩摩焼竪野系	C-1～3	Ⅰ	—	—	—	にぶい灰褐色	褐釉	内面無釉	?	
	446	陶器	瓶類	徳利	薩摩焼苗代川系	G-14	Ⅰa	—	—	—	灰褐色	灰釉	残存部全面施釉	17世紀初頭	内面タタキ，串木野窯の可能性あり
	447	陶器	瓶類	徳利	薩摩焼苗代川系	F-14	Ⅰa	4.8	—	—	灰色	灰釉	全面施釉	17世紀後半	堂平窯
	448	陶器	瓶類	徳利	薩摩焼苗代川系	E-18	Ⅰa	—	—	—	にぶい赤褐色	灰釉	残存部全面施釉	17世紀後半	堂平窯
	449	陶器	瓶類	徳利	薩摩焼苗代川系	F-14	Ⅰa	—	8.6	—	灰色	灰釉	底部無釉	18世紀代	
	450	磁器	瓶類	徳利	琉球	C-1～3	Ⅰ	—	—	—	にぶい赤褐色	鉄釉	内面無釉	18世紀代	
	451	陶器	瓶類	徳利	琉球	表採	—	—	7.0	—	暗赤褐色	鉄釉	内面無釉	18世紀代	底部にこま目跡有り
第122図	452	陶器	鉢	片口	薩摩焼苗代川系	F-5	Ⅰa	16.6	—	—	褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	17世紀後半	堂平窯
	453	陶器	鉢	片口	薩摩焼苗代川系	G-5	Ⅰa	15.4	—	—	灰赤色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17世紀後半	口唇部に貝目有り，堂平窯
	454	陶器	壺	片口	薩摩焼苗代川系	G-13	Ⅰa	11.0	—	—	暗赤灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17世紀後半	口唇部に貝目有り，堂平窯
	455	陶器	鉢	片口	薩摩焼苗代川系	F-3	Ⅰa	25.0	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀代	
	456	陶器	鉢	片口	薩摩焼苗代川系	D-9	Ⅰa	24.0	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀代	
	457	陶器	鉢	片口	薩摩焼苗代川系	GH-6～9	Ⅰa	22.6	13.1	12.0	褐灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀代	底部に貝目有り
	458	陶器	鉢	片口	薩摩焼苗代川系	F-7	Ⅰa	18.0	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀代	
	459	陶器	鉢	片口	薩摩焼苗代川系	H-7	Ⅱ	15.0	8.4	8.3	褐灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀代	
第123図	460	陶器	鉢	鉢	薩摩焼苗代川系	H-6	Ⅰa	32.4	21.5	10.9	赤褐色	鉄釉	口唇部・外底部無釉	18世紀代	
	461	陶器	鉢	鉢	薩摩焼苗代川系	EF-12～16	Ⅰa	31.0	20.0	8.7	暗赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀代	
	462	陶器	鉢	鉢	薩摩焼苗代川系	D-9	Ⅰa	30.0	21.5	10.2	褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ，上面無釉	18世紀代	
	463	陶器	鉢	鉢	薩摩焼苗代川系	H-6	Ⅰa	24.6	18.0	6.7	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀代	
	464	陶器	鉢	鉢	薩摩焼苗代川系	E-18	Ⅰa	30.2	—	—	褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ，腰部以下無釉	18世紀代	
	465	陶器	鉢	鉢	薩摩焼苗代川系	E-18	Ⅰa	29.4	—	—	黒褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀代	
	466	陶器	鉢	鉢	薩摩焼苗代川系	G-15・16	Ⅰa	26.0	—	—	明赤褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀代	
	467	陶器	鉢	鉢	薩摩焼苗代川系	C-1	Ⅰ	39.6	—	—	赤褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀代	
第124図	468	陶器	鉢	擂鉢	備前	C-3・4 E-2 7T	Ⅰa	25.0	—	—	橙色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	16世紀末	
	469	陶器	鉢	擂鉢	肥前	H-12	Ⅰa	28.8	—	—	明赤褐色	鉄釉	口縁部上端施釉	17世紀前半	
	470	陶器	鉢	擂鉢	肥前	E-6	Ⅱ	31.4	—	—	にぶい橙色	灰釉	胴部以下無釉	17世紀後半	
	471	陶器	鉢	擂鉢	薩摩焼苗代川系	F-2	Ⅱ	28.0	—	—	にぶい褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17世紀後半	堂平窯
	472	陶器	鉢	擂鉢	薩摩焼苗代川系	E-5	Ⅱ	29.0	—	—	褐黄色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	17世紀後半	口唇に貝目有り，堂平窯
	473	陶器	鉢	擂鉢	薩摩焼苗代川系	H-12	Ⅰa	—	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀前半	
	474	陶器	鉢	擂鉢	薩摩焼苗代川系	H-16	Ⅰa	—	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀前半	
	475	陶器	鉢	擂鉢	薩摩焼苗代川系	H-12	Ⅰa	24.8	8.8	11.5	橙色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀前半	
	476	陶器	鉢	擂鉢	薩摩焼苗代川系	—	—	—	—	—	灰褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀前半	
	477	陶器	鉢	擂鉢	薩摩焼苗代川系	G-5	Ⅰa	25.0	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀前半	
	478	陶器	鉢	擂鉢	薩摩焼苗代川系	G-13	Ⅰa	—	—	—	にぶい赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	17世紀後半	堂平窯
	479	陶器	鉢	擂鉢	薩摩焼苗代川系	—	Ⅰa	—	12.0	—	赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	18世紀前半	
	480	陶器	鉢	擂鉢	薩摩焼苗代川系	G～H-6～9	Ⅰa	—	12.2	—	暗赤褐色	鉄釉	底部無釉	18世紀前半	
第125図	481	陶器	鉢	擂鉢	薩摩焼苗代川系	F-4	Ⅰa	33.6	—	—	褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀後半	
	482	陶器	鉢	擂鉢	薩摩焼苗代川系	F-14	Ⅰa	28.0	15.6	12.8	赤灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ，底部無釉	18世紀後半	
	483	陶器	鉢	擂鉢	薩摩焼苗代川系	G-14	Ⅰa	21.8	13.1	12.8	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ，底部無釉	19世紀代	
	484	陶器	鍋	山茶家	薩摩焼苗代川系	D-12	Ⅰa	14.6	—	—	にぶい褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ，底部無釉	19世紀代	
	485	陶器	釜	土鍋	薩摩焼苗代川系	D-12	Ⅰa	16.0	—	—	褐灰色	鉄釉	腰部以下無釉	19世紀代か？	

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
								口径	上径	器高					
第126図	486	陶器	蓋	蓋	薩摩焼苗代川系	—	Ⅰa	—	—	—	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17世紀前半	堂平窯Ⅰ-b期
	487	陶器	蓋	蓋	薩摩焼苗代川系	—	Ⅰa	—	—	—	にぶい褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	17世紀前半	口唇部に貝目有り，堂平窯Ⅰ-b期
	488	陶器	蓋	蓋	薩摩焼苗代川系	—	Ⅰa	—	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17世紀後半	堂平窯Ⅱ期
	489	陶器	蓋	蓋	薩摩焼苗代川系	G-15・16	Ⅰa	32.2	24.4	8.0	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17世紀後半	天井部・口唇部に貝目有り，堂平窯Ⅱ期
	490	陶器	蓋	蓋	薩摩焼苗代川系	E-3	Ⅰa	27.2	—	—	暗褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17世紀後半	堂平窯Ⅱ期

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量（cm）口径	底径	器高	胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
第127図	491	陶器	甕	甕	肥前	E-6	Ⅳ b	46.0	26.6	70.0	灰赤色	鉄釉白土によるハケ目	全面施釉	19 世紀	
	492	陶器	甕	甕	肥前	F-14	Ⅰ a	28.4	—	—	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ，内面に釉だれ	17 世紀後半	内面に当て具痕有り
第128図	493	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	F-13	Ⅰ a	17.3	—	—	灰黄褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17 世紀前半	堂平窯Ⅰ期
	494	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	E-13	Ⅰ a	31.0	—	—	明赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17 世紀中葉	堂平窯Ⅰ - b 期
	495	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	H-14	Ⅰ a	33.0	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17 世紀後半	堂平窯Ⅱ期
	496	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	E-14	Ⅰ a	36.4	—	—	にぶい赤褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	17 世紀後半	堂平窯Ⅱ期
	497	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	G-5	Ⅰ a	29.0	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17 世紀後半	堂平窯Ⅱ期
	498	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	E-7	Ⅰ a	22.6	—	—	黒色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17 世紀後半	堂平窯Ⅱ期
第129図	499	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	G-5	Ⅰ a	41.2	—	—	橙色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	17 世紀後半	堂平窯Ⅱ期，口唇部貝目有り
	500	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	H-6	Ⅰ a	30.0	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17 世紀後半	堂平窯Ⅱ期
	501	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	H-6	Ⅰ a	30.8	—	—	にぶい黄橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18 世紀前半	
	502	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	H-8	Ⅰ a	30.8	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	19 世紀代	外面に掻き落とし文有り
第130図	503	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	C-2	Ⅰ Ⅱ	41.0	—	—	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18 世紀後半	
	504	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	—	Ⅰ a	41.4	—	—	にぶい赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	18 世紀後半	口唇部に貝目有り
	505	陶器	鉢	鉢	薩摩焼苗代川系	H-6	Ⅰ a	28.0	—	—	黄灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18 世紀後半	口唇部にコマ目跡有り
	506	陶器	甕	把手付甕	薩摩焼苗代川系	FG-8･9	Ⅰ a	32.0	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17 世紀後半	口唇部に貝目有り，堂平窯Ⅱ期
	507	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	FG-8･9	Ⅰ a	—	18.6	—	にぶい赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	18 世紀代	
	508	陶器	甕	甕	薩摩焼苗代川系	F-7	Ⅰ a	—	15.2	—	暗褐色	鉄釉	残存部全面施釉	18 世紀代	
	509	陶器	甕	甕	薩摩焼竪野系か？	H-8	Ⅰ a	—	14.0	—	にぶい灰褐色	褐釉	残存部全面施釉	18 世紀代	
第131図	510	陶器	壺	壺	薩摩焼苗代川系	C-1 ～ 3	Ⅰ	13.0	—	—	褐灰色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17 世紀前半	堂平窯Ⅰ -a 期
	511	陶器	壺	壺	薩摩焼苗代川系	BC-14	Ⅰ a	14.2	—	—	暗赤褐色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	17 世紀前半	堂平窯Ⅰ -b 期
	512	陶器	壺	壺	薩摩焼苗代川系	G-5	Ⅰ a	15.8	—	—	灰赤色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	17 世紀後半	堂平窯Ⅱ期
	513	陶器	壺	壺	薩摩焼苗代川系	F-7,H-15	Ⅰ a	15.4	15.6	39.8	褐灰色	灰釉	口唇部釉剥ぎ	17 世紀後半	堂平窯Ⅱ期
	514	陶器	壺	壺	薩摩焼苗代川系	H-8	Ⅰ a	15.2	—	—	黒褐色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18 世紀前半	口唇部に貝目有り
	515 516	陶器	壺	壺	琉球	C-1	Ⅱ	16.4	—	—	にぶい赤褐色	—	—	?	
	517	陶器	壺	壺	薩摩焼苗代川系	E-10	Ⅰ a	—	—	—	黄灰色	灰釉	残存部全面施釉	18 世紀代	
第132図	518	陶器	壺	壺	薩摩焼苗代川系	F･G	Ⅰ a	17.0	20.0	65.0	褐灰色	鉄釉	底部無釉	18 世紀代	
	519	陶器	壺	小壺	薩摩焼苗代川系	F-8	Ⅰ a	10.2	—	—	褐色	鉄釉	残存部全面施釉	18 世紀代	
	520	陶器	壺	小壺	薩摩焼苗代川系	F-4	Ⅰ a	9.2	—	—	黄灰色	灰釉	残存部全面施釉	17 世紀後半	堂平窯
	521	陶器	壺	小壺	薩摩焼苗代川系	G-14	Ⅰ a	11.6	—	—	褐灰色	灰釉	全面施釉	17 世紀後半	堂平窯
	522	陶器	壺	小壺	薩摩焼苗代川系	F-12	Ⅰ a	10.0	—	—	赤灰色	鉄釉	残存部全面施釉	17 世紀後半	堂平窯
第133図	523	陶器	皿	灯明皿	薩摩焼龍門司系	E-10	Ⅰ a	10.3	4.2	2.2	灰色	鉄釉	内面全面施釉	18 世紀後半	見込みにゴマ目
	524	陶器	皿	灯明皿	薩摩焼龍門司系	—	Ⅰ a	—	4.6	—	暗褐色	鉄釉	外面腰部，底面無釉	18 世紀後半	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ
	525	陶器	仏具	灯明皿受け台	薩摩焼龍門司系	D-12	Ⅰ a	—	5.2	—	赤褐色	鉄釉	底部無釉	18 世紀後半	
	526	陶器	仏具	秉燭	薩摩焼龍門司系	D-11	Ⅰ a	5.6	3.9	5.1	にぶい褐色	鉄釉	脚部以下無釉	19 世紀代	たんころ型
	527	陶器	仏具	香炉	肥前内野山系	G-15･16	Ⅰ a	12.2	—	—	灰白色	銅緑釉	内面無釉	17 世紀後半～18 世紀初頭	
	528	陶器	仏具	香炉	肥前内野山系	G-6	Ⅰ a	—	4.6	—	浅黄橙色	銅緑釉	腰部～底部無釉	17 世紀後半～18 世紀初頭	
	529	白薩摩	仏具	香炉	薩摩焼竪野系	G-14 ～ 16 ロングトレンチ	Ⅰ a	12.5	—	—	白色	透明釉	外面・内面一部施釉	18 世紀代か？	
	530	陶器	鉢	香炉	薩摩焼龍門司系	E-12	Ⅱ	9.4	—	—	赤褐色	鉄釉	外面腰部以下・内面口唇部以下無釉	18 世紀後半	
	531	陶器	壺	油壺	薩摩焼龍門司系	C-1 ～ 3	Ⅰ・Ⅱ	2.0	3.4	5.2	褐灰色	白化粧土，鉄釉・透明釉	腰部～底部・内面無釉	18 世紀後半	
	532	磁器	—	髪盥	肥前系	E-4	Ⅰ a	—	—	—	白色	(側面)鉄釉(内)透明釉	底部無釉	不明	半陶半磁可能性あり，外側面に×印の刻書あり
	533	陶器	茶道具	茶入れ	中国か？薩摩焼竪野系か？	1 地点	—	—	—	—	灰黄色	黒釉	内面無釉	17 世紀代か？	
第134図	534	陶器	鉢	植木鉢	薩摩焼苗代川系	E-10	Ⅰ a	30.8	—	—	褐灰色	鉄釉	口縁部釉剥ぎ	18 世紀後半以降	
	535	陶器	鉢	植木鉢	薩摩焼苗代川系	F-6	Ⅰ a	28.0	—	—	橙色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18 世紀後半以降	
	536	陶器	盤	箱庭道具か？	琉球か？薩摩焼苗代川系か？	G-14	Ⅰ a	—	—	—	赤灰色褐灰色	鉄釉	外面施釉	不明	底部に貝目有り
	537	陶器	鉢？	鉢か？	薩摩焼苗代川系	E-6	Ⅰ a	—	—	—	にぶい赤褐色	鉄釉	腰部～底部無釉	18 世紀代	
第135図	538	土師質土器	玩具	ままごと道具	肥前か？	F-7	Ⅰ a	5.2	2.8	3.0	淡橙色	—	—	不明	
	539	陶器	玩具	ままごと道具	肥前か？	G-7･8	Ⅰ a	—	1.8	—	にぶい赤褐色	—	残存部無釉	不明	ままごと道具
	540	陶器	玩具	メンコ	不明	D-12	Ⅰ a	—	5.9	1.8	灰黄色	—	—	不明	
	541	陶器	玩具	メンコ	薩摩焼苗代川系	C-11	Ⅰ a	—	2.8	0.7	赤褐色黒色	鉄釉	表面のみ施釉	不明	

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量（cm） 口径	底径	器高	胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
第136図	542	土製品	土人形	人形	薩摩焼	F-9	Ⅰa	—	—	—	橙色	—	—	19 世紀代	
第137図	543	瓦質土器	火鉢	火鉢	在地	EF-12 ～ 16	Ⅰa	22.0	—	—	浅黄色	—	—	19 世紀代	外面型押し文あり
	544	瓦質土器	火鉢	火鉢	不明	E-6 E-10	Ⅰa	—	—	—	赤褐色	—	—	15 世紀代	
	545	瓦質土器	火鉢	火鉢	不明	—	Ⅰa	—	—	—	灰黄色	—	—	15 世紀代か？	内面にタタキ跡，外面 X スタンプ文
	546	土製品	鍋	焙烙	不明	DG-1 ～ 5 ロング トレンチ	—	27.4	25.0	3.4	褐灰色	—	—	不明	
	547	土製品	鍋	焙烙	不明	—	—	25.2	—	—	明赤褐色	—	—	不明	
	548	土製品	鍋	焙烙	不明	E-13	—	—	—	—	浅黄色	—	—	不明	
	555	滑石製品	石鍋	石鍋	不明	G-5	Ⅰa	20.6	—	—	—	—	—	15 世紀代	
第141図	583	磁器	蓋	蓋	肥前か？	F-6	—	9.4	3.2	3.0	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	近代	底径はつまみ径，銅板転写
	584	染付	瓶類	徳利	在地	E-12	Ⅰa	4.5	8.9	27.4	灰白色	透明釉	外面畳付釉剥ぎ，内面頸部一部釉だれ	近代以降	
第142図	585	染付	碗	碗	肥前か？	1 地点	—	11.1	4.4	4.7	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	近代	銅板転写，見込みに目跡あり
	586	染付	碗	碗	肥前か？	1 地点	—	10.8	4.4	4.8	灰白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	近代	銅板転写
	587	磁器	碗	碗	在地	—	—	10.9	4.0	5.5	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	近代	
	588	磁器	碗	子供茶碗	不明	—	—	9.0	—	—	白色	透明釉	残存部全面施釉	近代	
	589	色絵	小坏	小坏	瀬戸美濃	F-8	Ⅰa	8.8	3.0	3.6	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	近代	
	590	磁器	皿	小皿	瀬戸美濃	—	—	11.6	7.5	2.0	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	近代	
	591	磁器	皿	小皿（組物）	瀬戸美濃	—	—	10.8	6.4	1.9	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	近代	
	592	磁器	その他	段重	肥前か？	—	—	9.1	8.2	4.7	灰白色	透明釉	口唇部と口縁部内面釉剥ぎ，底面無釉	近代	コバルト銅板転写
	593	磁器	仏具	仏飯器	不明	1 地点	—	6.4	3.9	4.5	白色	?	底部無釉	近代	
	594	磁器	仏具	仏飯器	不明	—	—	6.6	4.0	5.1	白色	?	底部無釉	近代	
	595	染付	水注	からから	在地系	I-7･8	Ⅰa	—	—	—	灰白色	透明釉	内面無釉	近代	
	596	染付	水注	醤油差し	在地系	F-6	Ⅰa	2.7	6.0	8.2	灰白色	透明釉	底面無釉	近代	
第143図	597	磁器	碗	小坏	肥前か？	—	—	7.0	2.5	2.7	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	近代	明治 30 年銘あり
	598	色絵	碗	小坏	肥前か？	G-13	—	7.4	2.6	2.9	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	近代	見込みに日の丸文あり
	599	磁器	水注	急須	在地	—	—	7.1	6.2	7.7	白色	透明釉	底部無釉，蓋受け無釉	近代	つまみ径　1.3cm，庇径　6.2cm，銅板転写

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	種別	器種	色調	法量 (cm) 長さ	厚さ	備考
第137図	549	—	Ⅰa	—	土製品	管状土錘	橙色	4.5	1.3	
	550	H-8	Ⅰa	—	土製品	管状土錘	にぶい赤橙色	4.0	1.3	
	551	F-8･9	Ⅰa	—	土製品	管状土錘	橙色	3.6	1.5	
	552	—	Ⅰa	—	土製品	管状土錘	浅黄色	3.5	1.4	
	553	—	Ⅰa	—	土製品	管状土錘	灰白色	3.1	1.1	外面に赤色顔料塗布
	554	F･G-8･9	Ⅰa	—	土製品	土錘	浅黄色	5.5	4.0	

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	分類	器種	産地	胎土の色調	備考
第138図	556	I-7	Ⅰa	一括	瓦	軒丸瓦	—	灰色	
	557	E-1･2	Ⅱ	一括	瓦	軒丸瓦	—	暗褐色	
	558	G-3	攪乱	一括	瓦	軒平瓦	—	灰白色	
	559	D-12	Ⅰa	一括	瓦	丸瓦	—	灰色	
第146図	615	C-4	Ⅳb	289	縄文土器	深鉢	—	にぶい橙色	
	616	H-9	Ⅳa	一括	弥生土器	甕	—	浅黄橙色	須玖Ⅱ式
第147図	618	E-18	Ⅰa	一括	瓦	丸瓦	鶴峯窯？	黄灰色	
	619	H-13	Ⅰa	一括	瓦	丸瓦	鶴峯窯？	灰白色	
	620	—	Ⅰa	一括	瓦	丸瓦	鶴峯窯？	灰黄色	
	621	—	Ⅰa	一括	瓦	丸瓦	鶴峯窯？	灰色	

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	種別	名称	重さ（g）	備考
第139図	560	E-7	Ⅰa	—	金属製品	雁首	5.12	
	561	C-4	—	—	金属製品	吸口	2.60	
	562	E-8	Ⅰa	—	金属製品	吸口	5.02	
	563	H-8	Ⅰa	—	金属製品	簪	5.84	
	564	E-11	Ⅰa	—	金属製品	鍔	84.95	
	565	E-10	Ⅰa	—	金属製品	鐺	—	
	566	—	—	—	金属製品	鋼	23.70	
	567	—	表採	—	銭貨	世高通寶	3.69	初鋳年 1461 年
	568	G-24	Ⅰa	—	銭貨	洪武通寶	2.48	初鋳年 1368 年
	569	I-7	Ⅰa	—	銭貨	寛永通寶	2.86	古寛永通寳
	570	—	Ⅰa	—	銭貨	寛永通寶	2.84	古寛永通寳
	571	F-4	Ⅰa	—	銭貨	寛永通寶	3.31	古寛永通寳
	572	C-22	P44	—	銭貨	寛永通寶	2.30	古寛永通寳
	573	D-10	Ⅰa	—	銭貨	寛永通寶	8.81	新寛永通寳
	574	I-12	Ⅰa	—	銭貨	寛永通寶	3.06	新寛永通寳

挿図番号	掲載番号	器種	出土区	層位	材質	部位	法量（cm）			重さ (g)	備考
							長さ	幅	厚さ		
第140図	575	坩堝	H-6	Ⅰａ			5.0	4.8	1.0	50.0	
	576	鞴の羽口	E-4	Ⅰａ			4.7	4.0	1.5	44.0	
	577	鞴の羽口	E-4	Ⅰａ			8.0	5.3	2.0	214.0	
	578	鉄滓	E-4	Ⅰａ			7.1	10.0	4.0	180.0	
	579	鉄滓	E-4	Ⅰａ			9.7	8.8	3.3	250.0	
	580	鉄滓	E-4	Ⅰａ			6.5	8.2	3.2	161.0	
	581	鉄滓	E-4	Ⅰａ			7.0	9.8	3.1	235.0	
	582	鉄滓	—	—			7.5	9.9	4.0	474.0	
第141図	583	鉄製品か？	F-6	—			11.3	22.3	1.9	610.0	

挿図番号	掲載番号	器種	層位	石材	出土区	出土　遺構	取上番号	法量 (cm)			重量 (g)	備考
								最大長	最大幅	最大厚		
第144図	600	石鏃	Ⅴ	黒曜石	G-15		365	2.2	1.5	0.4	0.6	
	601	加工痕のある剥片	Ⅰａ	粘板岩	2 地点		一括	2.1	5.3	0.3	5.0	
	602	磨製石斧	Ⅴ	砂岩	E-10		一括	8.3	6.2	3.3	255.0	
	603	磨製石斧	Ⅴ	砂岩	G-16		51	12.7	6.3	3.2	415.0	
	604	擦り切り石器	Ⅴ	砂岩	G-15		366	4.8	6.5	1.3	45.0	
	605	磨石・敲石類	Ⅰａ	砂岩	E-7		一括	10.7	8.8	6.3	805.0	
	606	磨石・敲石類	—	凝灰岩	G-15		一括	12.3	6.4	4.1	245.0	
第145図	607	砥石	Ⅰａ	粘板岩	G-14		一括	13.2	3.1	0.8	50.0	
	608	砥石	Ⅰａ	頁岩	G-14		一括	6.2	5.5	0.9	45.0	
	609	砥石	Ⅰａ	砂岩	E-6		一括	10.0	5.3	2.9	220.0	
	610	砥石	Ⅰａ	砂岩	F-14		一括	15.7	9.0	2.5	420.0	
	611	軽石加工品	Ⅳｂ	軽石	E-6	北側落ち込み	一括	11.0	5.6	4.0	80.0	
	612	軽石加工品	Ⅰａ	軽石	E-7		一括	9.2	7.4	4.3	80.0	
	613	硯	Ⅳｂ	砂岩	E-6	北側落ち込み	一括	6.3	6.1	1.2	55.0	
	614	双孔棒状石錘	Ⅳａ	—	E-8		一括	7.2	2.1	1.8	25.0	

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	種別	器種	部位	色調	法量（cm）			胎土				焼成	調整		備考
									口径	底径	器高	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面	
第146図	615	C-4	Ⅳｂ	289	縄文土器	深鉢	口縁	黒褐	—	—	—	○				良	ナデ	ケズリ	滑石混入
	616	H-9	Ⅳａ	—	須玖式土器	甕	口縁	浅黄橙	31.6	—	—	○				良	ナデ	ナデ	
	617	—	Ⅳｂ	385	土師器	坏	完形	明黄褐色	14.2	6.4	4.8					良	ナデ	ナデ	底部ヘラ切り
第148図	622	G-18	Ⅰａ	—	土師器	坏	完形	浅黄橙色	12.3	6.8	4.1					良	ナデ	ナデ	底部糸切り

第６節　自然科学分析

１　自然科学分析の概要

川骨遺跡から出土した炭化物および採取した土壌などの分析を科学的に行うことによって，遺跡の時代ごとにおける環境を明らかにするための自然科学分析を，古環境研究所株式会社，パリノ・サーヴェイ株式会社，株式会社加速器分析研究所に委託した。また，古銭の成分分析を本センターで行った。

それぞれの自然科学分析の概要は以下のとおりである。

(1) 花粉分析は，一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており, 遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。今回は，低湿地における植生・環境の復元のために花粉分析を行った。

(2) 植物珪酸体は，植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので，植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。また , イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である。低湿地の土層断面図から，水田跡が存在していたと考えられるが，畝などの水田に不随する遺構を検出できなかったため，水田跡としての確証を得るために植物珪酸体分析を行った。また，4 地点で畝間状遺構を検出した。畝間であるか，また，畝間であるとしたらどのような植物を栽培していたのかを明らかにするために, 植物珪酸体分析を行った。

(3) 放射性炭素年代測定法とは，空気中に含まれるきわめて微量の炭素がもつ放射能が半減する期間が約 5730 年であるという原理に基づき，この減量を測定することによりそのものが遺物となった年代を明らかにするものである。今回は，2 地点で検出された鍛冶炉の年代を明らかにするため，放射性炭素年代測定を行った。

(4) 樹種同定は，当時の植生・環境を復元するための材料の一つとなる。今回は，3 地点の低湿地Ⅴ層から多数出土した木材の樹種の同定を行った。

(5) 種実同定により，当時の植生・環境を復元するための材料の一つとなる。3 地点の低湿地Ⅴｂ層からは，遺物は出土しなかったものの種実が多数出土した。これらの種実同定を行い，また同じ種実で放射性炭素年代測定を行った。

(6) 出土古銭の蛍光Ｘ線分析を行い，成分組成の分析を行った。

1　川骨遺跡における花粉分析

株式会社　古環境研究所

（1）はじめに

花粉分析は，一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は，水成堆積物では保存状況が良好であるが，乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

（2）試料

分析試料は，低湿地西側および低湿地東側の2地点から採取された計22点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

（3）分析法

花粉の分離抽出は，中村（1973）の方法をもとに，以下の手順で行った。

①試料から $1cm^3$ を秤量

② 0.5％リン酸三ナトリウム（120k）溶液を加えて15分間湯煎

③水洗処理の後，0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法で砂粒を除去

④ 25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

⑤水洗処理の後，氷酢酸によって脱水し，アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン試液を加え1分間湯煎）を施す

⑥再び氷酢酸を加えて水洗処理

⑦沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

⑧検鏡・計数

検鏡は,生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は,島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類し，複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

（4）結果

①分類群

出現した分類群は,樹木花粉11，樹木花粉と草本花粉を含むもの2，草本花粉7，シダ植物胞子2形態の計22である。分析結果を表1に示し，花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属，スギ，ヤマモモ属，ハシバミ属，クマシデ属-アサダ，クリ，シイ属－マテバシイ属，ブナ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，ジャケツイバラ，ハイノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

マメ科，ウコギ科

〔草本花粉〕

イネ科，アブラナ科，チドメグサ亜科，セリ亜科，シソ科，タンポポ亜科，ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子，三条溝胞子

②花粉群集の特徴

【低湿地西側地点（図１）】

Ⅴ層（試料 11）では，花粉が検出されなかった。Ⅳｃ層（試料 10）では，樹木花粉のクリ，シイ属－マテバシイ属，草本花粉のシソ科が検出されたが，いずれも少量である。Ⅳｂ層②（試料 9）からⅢ層（試料 2）にかけては，花粉が検出されなかった。Ⅱ層（試料 1）では，草本花粉が 76％を占める。草本花粉ではアブラナ科が卓越し，イネ科，チドメグサ亜科が伴われる。樹木花粉では，スギが少量検出された。

【低湿地東側地点（図 2)】

Ⅴ層（試料 22）では，草本花粉のセリ亜科，シソ科，樹木花粉のコナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属が検出されたが，いずれも少量である。Ⅳｃ層（試料 21）では，樹木花粉が約 90％を占める。樹木花粉では，シイ属－マテバシイ属が卓越し，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，クリなどが伴なわれる。草本花粉ではシソ科，イネ科，ヨモギ属などが少量検出された。Ⅳｂ層②（試料 20）からⅢ層（試料 13）にかけては，花粉が検出されなかった。Ⅱ層（試料 12）では，草本花粉のイネ科，アブラナ科，タンポポ亜科が検出されたが，いずれも少量である。

(5) 花粉分析から推定される植生と環境

下位のⅤ層（古墳時代の包含層）では，花粉がほとんど検出されないことから，植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては，乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

Ⅳｃ層の堆積当時は，シイ属－マテバシイ属を主体としてカシ類（コナラ属アカガシ亜属）も生育する照葉樹林が分布しており，クリ，ナラ類（コナラ属コナラ亜属）などの落葉広葉樹も見られたと推定される。また，林縁などにはシソ科，イネ科，ヨモギ属などが生育していたと考えられる。シイ林は照葉樹林の中でも乾燥したところに立地する森林であり，やや乾燥した環境が示唆される。

Ⅳｂ層②からⅢ層にかけては，花粉が検出されなかった。花粉が検出されない原因としては，前述のようなことが考えられる。

Ⅱ層では，花粉密度が低いことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが，おもにアブラナ科が多く生育し，イネ科，チドメグサ亜科，シダ類も見られたと推定される。アブラナ科には，アブラナ（ナタネ），ダイコン，ハクサイ，タカナ，カブなど多くの栽培植物が含まれていることから，これらを栽培する畑作の可能性が示唆される。森林植生としては，周辺地域にスギなどが分布していたと考えられる。

文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復元，新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態，大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，p.60

中村純（1973）花粉分析，古今書院，p.82-110.

中村純（1974）イネ科花粉について，とくにイネ（Oryza sativa）を中心として，第四紀研究13，p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉，考古学と自然科学第10号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴，大阪自然史博物館収蔵目録第13集，p.91

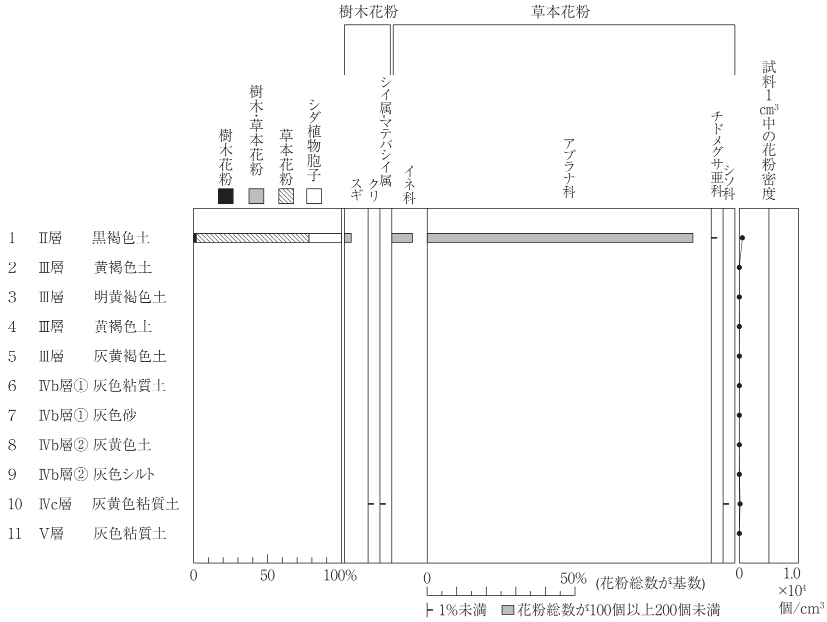


図1　川骨遺跡低湿地西側地点における花粉ダイアグラム

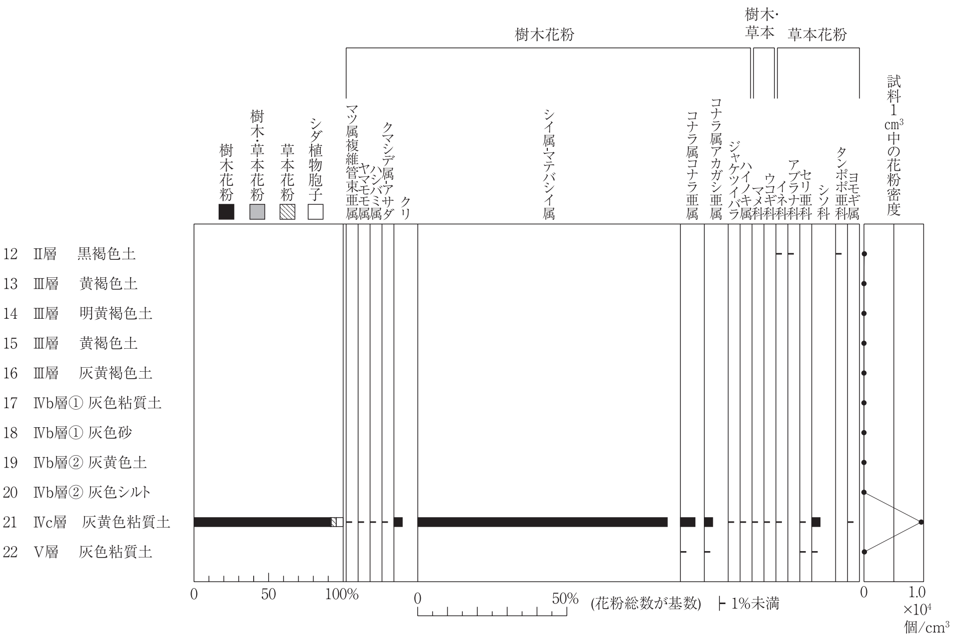


図2　川骨遺跡低湿地東側地点における花粉ダイアグラム

表１　川骨遺跡における花粉分析結果

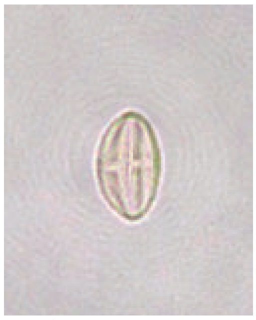
分類群		低湿地西側											低湿地東側										
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
Arboreal pollen	樹木花粉																						
Pinus subgen.Diploxylon	マツ属複維管束亜属																					1	
Cryptomeria japonica	スギ	3																					
Myrica	ヤマモモ属																					1	
Corylus	ハシバミ属																					1	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属 - アサダ																					2	
Castanea crenata	クリ										2											11	
Castanopsis-Pasania	シイ属 - マテバシイ属										13											326	
Quercus subgen.Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属																					19	2
Quercus subgen.Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属																					11	1
Caesalpinia japonica	ジャケツイバラ																					1	
Symplocos	ハイノキ属																					1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉																						
Leguminosae	マメ科																					1	
Araliaceae	ウコギ科																					1	
Nonarboreal pollen	草本花粉																						
Gramineae	イネ科	9											2									1	
Cruciferae	アブラナ科	115											8										
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1																					
Apioideae	セリ亜科																					1	1
Labiatae	シソ科										2											11	2
Lactucoideae	タンポポ亜科												1										
Artemisia	ヨモギ属																					1	
Fern spore	シダ植物胞子																						
Monolate type spore	単条溝胞子	12											1									5	
Trilate type spore	三条溝胞子	24											7									14	1
Arboreal pollen	樹木花粉	3	0	0	0	0	0	0	0	0	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	374	3
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	125	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	14	3
Total pollen	花粉総数	128	0	0	0	0	0	0	0	0	17	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	390	6
Pollen frequencies of 1cm3	試料 1cm3 中の花粉密度	5.1 $\times 10^{2}$	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3 $\times 10^{2}$	0.6 ×10	6.6 ×10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	9.6 $\times 10^{3}$	7.2 ×10
Unknown pollen	未同定花粉	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	6
Fern spore	シダ植物胞子	36	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	19	1
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物												(+)	(+)									

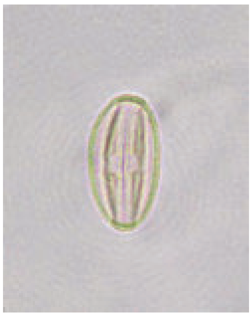
川骨遺跡の花粉･胞子


1　マツ属複維管束亜属


2　スギ


3　ハシバミ属


4　クリ


5　シイ属-マテバシイ属


6　コナラ属コナラ亜属


7　コナラ属アカガシ亜属

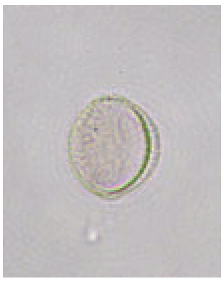

8　ハイノキ属


9　イネ科


10　アブラナ科


11　セリ亜科


12　シソ科


13　ヨモギ属


14　シダ植物単条溝胞子


15　シダ植物三条溝胞子

10μm

２　川骨遺跡における植物珪酸体分析

株式会社　古環境研究所

（1）はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので，植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000)。また，イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984)。

（2）試料

分析試料は，低湿地西側および低湿地東側の 2 地点から採取された計 22 点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

（3）分析法

植物珪酸体の抽出と定量は，ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて，次の手順で行った。

①試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾）

②試料約 1 g に対し直径約 40 μ m のガラスビーズを約 0.02g 添加（0.1mg の精度で秤量）

③電気炉灰化法（550℃・ 6 時間）による脱有機物処理

④超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散

⑤沈底法による 20 μ m 以下の微粒子除去

⑥封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

⑦検鏡・計数

同定は，400 倍の偏光顕微鏡下で，おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は，ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に, 計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g）をかけて，単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより，各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000)。

（4）分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を表 1 および図 1，図 2 に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ，イネ（穎の表皮細胞由来），ムギ類（穎の表皮細胞），ヨシ属，シバ属，ススキ属型（おも

にススキ属)，ウシクサ属Ａ（チガヤ属など）
〔イネ科－タケ亜科〕
メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節・ヤダケ属)，ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節)，ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など)，マダケ属型（マダケ属・ホウライチク属)，未分類等
〔イネ科－その他〕
表皮毛起源 , 棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来)，未分類等
〔樹木〕
ブナ科（シイ属)，ブナ科（アカガシ亜属)，クスノキ科，アワブキ科，その他

(5) 考察
①稲作跡の検討
水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合，一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料 1g あたり 5,000 個以上と高い密度で検出された場合に，そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000)。なお，密度が 3,000 個 /g 程度でも水田遺構が検出される事例があることから，ここでは判断の基準をおよそ 3,000 個 /g として検討を行った。

【低湿地西側（図 1)】
Ⅱ層（試料 1）からⅤ層（試料 11）までの層準について分析を行った。その結果，Ⅱ層（試料 1）～Ⅳｂ層①（試料 6)，およびⅣｂ層②（試料 8）～Ⅳｃ層（試料 10）からイネが検出された。このうち，Ⅱ層（試料 1）とⅢ層（試料 2）では , 密度が 20,000 個 /g および 14,200 個 /g とかなり高い値であり , Ⅲ層（試料 4）とⅣｂ層②（試料 8）でも 2,900 個 /g と比較的高い値である。したがって，これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。その他の層準では，密度が 700 ～ 2,200 個 /g と比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては，稲作が行われていた期間が短かったこと，土層の堆積速度が速かったこと，採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと，および上層や他所からの混入などが考えられる。

【低湿地東側（図 2)】
Ⅱ層（試料 1）からⅤ層（試料 11）までの層準について分析を行った。その結果，Ⅱ層（試料 12）～Ⅳｂ層①（試料 17), およびⅣｂ層②（試料 19）からイネが検出された。このうち , Ⅱ層（試料１）とⅢ層（試料２）では，密度が 17,900 個 /g および 16,900 個 /g とかなり高い値であり，Ⅲ層（試料 16）とⅣｂ層②（試料 19）でも 7,500 個 /g および 5,800 個 /g と高い値である。また，Ⅲ層（試料 14）でも，2,900 個 /g と比較的高い値である。したがって，これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。その他の層準では，密度が 1,400 ～ 2,000 個 /g と比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては，前述のようなことが考えられる。

②イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには，イネ以外にもムギ類，ヒエ属型（ヒエが含まれる），エノコログサ属型（アワが含まれる），キビ属型（キビが含まれる），ジュズダマ属（ハトムギが含まれる），オヒシバ属（シコクビエが含まれる），モロコシ属型，トウモロコシ属型などがある。このうち，本遺跡の試料からはムギ類が検出された。

ムギ類（穎の表皮細胞）は，低湿地西側のⅡ層（試料1）～Ⅲ層（試料3）および低湿地東側のⅡ層（試料12）から検出された。密度は700～1,400個/gと低い値であるが，穎（籾殻）が栽培地に残される確率は低いことから，少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって，これらの層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため，キビ属型などその他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお，植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため，根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

③植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と，そこから推定される植生・環境について検討を行った。下位のⅤ層（古墳時代の包含層）では，ヨシ属，ススキ属型，ウシクサ属A，メダケ節型，ネザサ節型，および樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属）などが検出されたが，いずれも少量である。Ⅳc層からⅣb層②にかけてはマンサク科（イスノキ属）が大幅に増加し，アワブキ科も出現している。Ⅳb層①からⅡ層にかけては，イネの増加に伴ってマンサク科（イスノキ属）は次第に減少している。また，Ⅲ層上部ではマダケ属型が出現している。

以上の結果から，古墳時代の調査区周辺は，おおむねススキ属やチガヤ属，メダケ属（メダケ節やネザサ節）などが生育する比較的開かれた環境であったと考えられ，ヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたと推定される。また，遺跡周辺にはシイ属，クスノキ科，イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと考えられる。

Ⅳc層からⅣb層②にかけては，何らかの原因で照葉樹のイスノキ属が増加したと考えられるが，Ⅲ層より上位では稲作の拡大に伴ってイスノキ属は次第に減少したと推定される。Ⅲ層上部より上位ではマダケ属が見られるが，マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く，建築材や生活用具，食用などとしての利用価値が高い。

(6) まとめ

植物珪酸体分析の結果，Ⅱ層，Ⅲ層，およびⅣb層②上部ではイネが多量に検出され，稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また，Ⅱ層およびⅢ層上部では，ムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

古墳時代頃の調査区周辺は，おおむねススキ属やチガヤ属，メダケ属（メダケ節やネザサ節）などが生育する比較的開かれた環境であったと考えられ，ヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたと推定される。また，遺跡周辺にはシイ属，クスノキ科，イスノキ属などの照葉樹林が分

布していたと考えられる。Ⅳｃ層からⅣｂ層②にかけては，何らかの原因で照葉樹のイスノキ属が増加したと考えられるが，Ⅲ層より上位では稲作の拡大に伴ってイスノキ属は次第に減少したと推定される。

文献

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－. 考古学と自然科学，19，p.69-84.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38(2)，p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) －数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) －プラント・オパール分析による水田址の探査－. 考古学と自然科学，17，p.73-85.

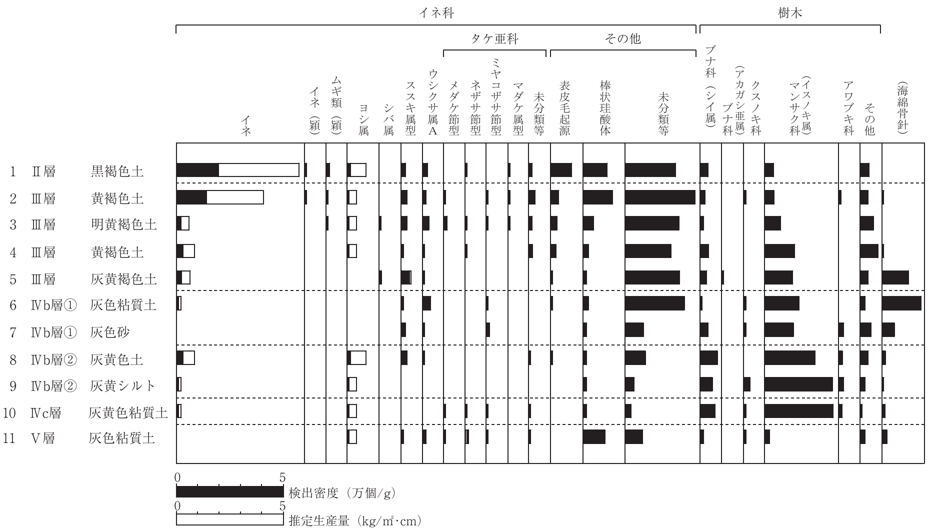


図１　川骨遺跡低湿地西側地点における植物珪酸体分析結果

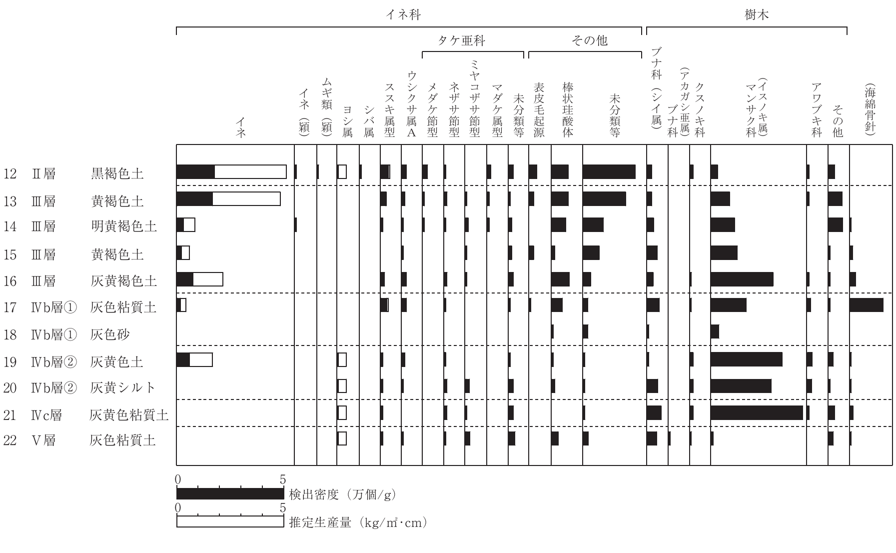


図２　川骨遺跡低湿地東側地点における植物珪酸体分析結果

表１　川骨遺跡における植物珪酸体分析結果

分類群	学名 \ 地点・試料	低湿地西側 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	低湿地東側 12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
イネ科	Gramineae																						
イネ	Oryza sativa	200	142	20	29	22	7		29	7	7		179	169	29	20	75	14		58			
イネ籾殻 (穎の表皮細胞)	Oryza sativa (husk Phytolith)	7	7										7		7								
ムギ類 (穎の表皮細胞)	Hordeum-Triticum (husk Phytolith)	14	7	7									7										
ヨシ属	Phragmites	14	7	7	7				14	7	7	7	7							7	7	7	7
シバ属	Zoysia			7		7							7										
ススキ属型	Miscanthus type	14	21	20	7	36	7	14	21			7	35	21	7		14	28		7	7	7	7
ウシクサ属A	Andropogoneae A type	21	14	27	7	7	36	7	7			15	21	14	7	7	21	21		14	7		7
タケ亜科	Bambusoideae																						
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus		7	14							7	7	21	7	7								
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	7		7	7						7	15	7	14	7		14	7		7	14	14	7
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi		7	7			7	14			7	7		7	14	7	7				20	7	22
マダケ属型	Phyllostachys	7	7	7									14	7	7								
未分類等	Others	14	28	14	15				7		7	7	21	7	14	13	21	7		7	20	21	29
その他のイネ科	Others																						
表皮毛起源	Husk hair origin	96	35	27	22	7	7		7				35	21		20		7					
棒状珪酸体	Rodshaped	110	134	47	22	14	22	14	14	14	13	44	76	77	65	13	82	49	7	7	14		29
未分類等	Others	234	326	250	213	253	276	84	93	41	27	81	242	197	94	74	34	21	21	7	7	7	22
樹木起源	Arboreal																						
ブナ科 (シイ属)	Castanopsis	34	21	14	37	29	7	35	78	55	67	15	21	21	29	47	27	56	7	7	48	64	43
ブナ科 (アカガシ亜属)	Quercus subgen. Cyclobalanopsis					7																	7
クスノキ科	Lauraceae		7				7	7		27	7	7	14				7	7		14	14	14	7
マンサク科 (イスノキ属)	Distylium	41	42	74	140	130	160	133	235	316	319	22	28	85	108	121	288	162	35	331	280	427	7
アワブキ科	Sabiaceae		7					21	14	21	13		7	7			7	14		22	20	7	
その他	Others	41	35	61	81	36	22	49	36	21	7	22	28	63	65	7	7	7		22	7	28	22
（海綿骨針）	Sponge spicules		7		7	123	182	56	14	7	13	22			7	13	27	155		7	7	14	7
植物珪酸体総数	Total	853	856	609	588	549	560	377	556	508	492	256	773	718	462	328	603	401	71	511	464	605	217

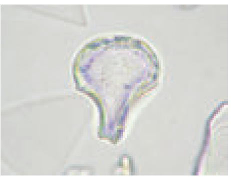
おもな分類群の推定生産量（単位：kg / ㎡･cm）：試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出

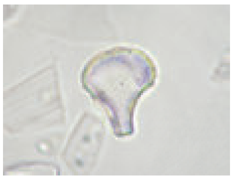
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
イネ	Oryza sativa	5.87	4.16	0.60	0.86	0.64	0.21		0.84	0.20	0.20		5.28	4.97	0.85	0.59	2.22	0.41		1.69			
ヨシ属	Phragmites	0.87	0.45	0.43	0.46				0.90	0.43	0.42	0.46	0.44							0.45	0.43	0.45	0.46
ススキ属型	Miscanthus type	0.17	0.26	0.25	0.09	0.45	0.09	0.17	0.27			0.09	0.43	0.26	0.09		0.17	0.35		0.09	0.08	0.09	0.09
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus		0.08	0.16							0.08	0.08	0.24	0.08	0.08								
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	0.03		0.03	0.04						0.03	0.07	0.03	0.07	0.03		0.07	0.03		0.03	0.07	0.07	0.03
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi		0.02	0.02			0.02	0.04			0.02	0.02		0.02	0.04	0.02	0.02				0.06	0.02	0.07

タケ亜科の比率（%）

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus		79	75							60	48	88	48	52								
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	100		15	100						25	40	12	40	21		76	100		100	52	76	35
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.																						
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi		21	10			100	100			15	12		12	27	100	24				48	24	65

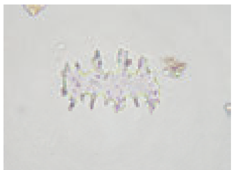
川骨遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）

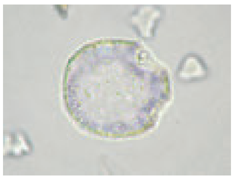

イネ

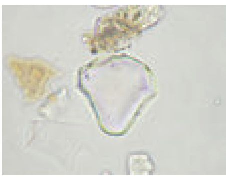

イネ

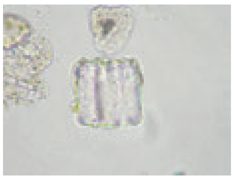

イネ（側面）

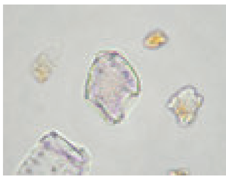

イネの籾殻（穎の表皮細胞）


ムギ類（穎の表皮細胞）


ヨシ属


ススキ属型


ネザサ節型


マダケ属型


表皮毛起源


ブナ科（シイ属）


クスノキ科


マンサク科（イスノキ属）


アワブキ科


海綿骨針

50μm

３　川骨遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．川骨遺跡における植物珪酸体分析

(1) はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので，植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

(2) 試料

分析試料は，E･F-21･22区の畝間状遺構から採取された畝間1北（試料1），畝間1南（試料2），畝間2北（試料3），畝間2南（試料4），畝間3北（試料5），畝間3南（試料6），畝間4南（試料8），畝間5南（試料10），畝間6南（試料12），畝間7（試料13）の10点である。

(3) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は，ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて，次の手順で行った。

①試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
②試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
③電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
④超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
⑤沈底法による20μm以下の微粒子除去
⑥封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
⑦検鏡・計数

同定は，400倍の偏光顕微鏡下で，おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に,計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g）をかけて，単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより，各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。タケ亜科については，植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

(4) 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，そ

の結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ，サヤヌカグサ属，ムギ類（穎の表皮細胞），キビ属型，ヨシ属，シバ属，ススキ属型（おもにススキ属），ウシクサ属A（チガヤ属など），ウシクサ属B（大型）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節・ヤダケ属），ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など），ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など），未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），未分類等

〔シダ類〕

〔樹木〕

ブナ科（シイ属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属），アワブキ科，その他

(5) 考察

①稲作跡の検討

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合，一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に，そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし，畑稲作（陸稲栽培）の場合は，連作障害や地力の低下を避けるために輪作を行ったり休閑期間をおく必要があるため，イネの密度は水田跡と比較してかなり低くなり，1,000～2,000個/g程度である場合が多い（杉山，2000）。

E･F-21･22区の畝間状遺構から採取された10試料について分析を行った。その結果，畝間1南（試料2）を除く9試料からイネが検出された。密度は600～2,200個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては，1）畑稲作（陸稲栽培）であったこと，2）稲作が行われていた期間が短かったこと，3）土層の堆積速度が速かったこと，4）稲藁が耕作地以外に持ち出されていたことなどが想定されるが，ここでは1）の要因が大きいと考えられる。

②イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには，イネ以外にもムギ類，ヒエ属型（ヒエが含まれる），エノコログサ属型（アワが含まれる），キビ属型（キビが含まれる），ジュズダマ属（ハトムギが含まれる），オヒシバ属（シコクビエが含まれる），モロコシ属型，トウモロコシ属型などがある。このうち，本遺跡の試料からはムギ類が検出された。

ムギ類（穎の表皮細胞）は，畝間5南（試料10）から検出された。密度は600個/gと低い値であるが，穎（籾殻）が栽培地に残される確率は低いことから，少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって，同層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため，その他の分類群の中にも栽培種に由来するも

のが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお，植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため，根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

③植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では，ススキ属型，ウシクサ属Ａが検出され，部分的にキビ属型，ヨシ属，メダケ節型，ネザサ節型なども認められた。また，樹木ではマンサク科（イスノキ属）が多量に検出され，ブナ科（シイ属），クスノキ科なども認められた。マンサク科（イスノキ属）の密度は，52,400 ～ 81,800 個 /g と極めて高い値である。

以上の結果から，当時の調査区周辺はススキ属やチガヤ属などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であり，部分的にヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたと考えられる。また，遺跡周辺にはイスノキ属を主体としてシイ属，クスノキ科なども生育する照葉樹林が分布していたと推定される。なお，イスノキの木材は器具類や薪炭など多様な用途に利用され，樹皮や葉の灰（いすばい）は釉薬に用いられる。

(6) まとめ

植物珪酸体分析の結果，E・F-21･22 区の畝間状遺構では，分析を行ったほとんどの試料からイネが検出され，稲作が行われていた可能性が認められた。また，部分的にムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

当時の調査区周辺は，ススキ属やチガヤ属などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であり，部分的にヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたと考えられる。また，遺跡周辺にはイスノキ属を主体としてシイ属，クスノキ科なども生育する照葉樹林が分布していたと推定される。

文献

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69-84.

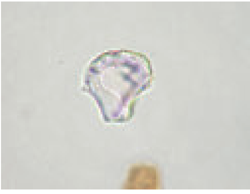
杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38(2)，p.109-123.

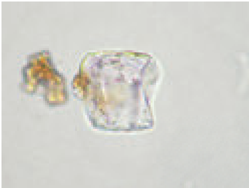
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

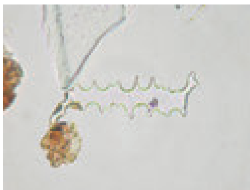
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) －数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) －プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

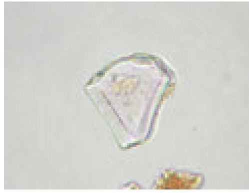
川骨遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）

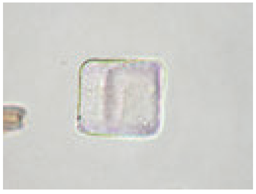

イネ


イネ（側面）


ムギ類（穎の表皮細胞）

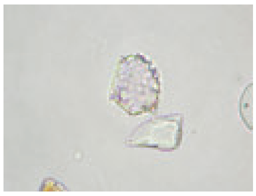

キビ属型


ススキ属型


ウシクサ属Ａ


シバ属

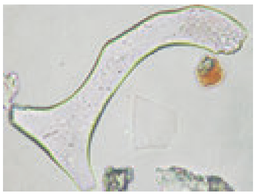

メダケ節型


ミヤコザサ節型

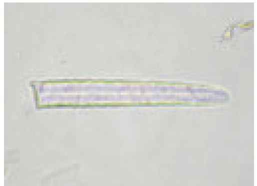

ブナ科（シイ属）


クスノキ科


アワブキ科


マンサク科（イスノキ属）


マンサク科（イスノキ属）


海綿骨針

50μm

表１　川骨遺跡における植物珪酸体分析結果
検出密度（単位：×100 個 /g）

	地点・試料	E.F-21.22 区									
		1	2	3	4	5	6	8	10	12	13
分類群	学名	畝間1北	畝間1南	畝間2北	畝間2南	畝間3北	畝間3南	畝間4南	畝間5南	畝間6南	畝間7
イネ科	Gramineae										
イネ	Oryza sativa	7		7	7	15	7	7	6	7	22
サヤヌカグサ属	Leersia				7						
ムギ類 (穎の表皮細胞)	Hordeum-Triticum (husk Phytolith)								6		
キビ属型	Paniceae type					7		7			
ヨシ属	Phragmites		7	7					6		
シバ属	Zoysia	7									
ススキ属型	Miscanthus type	7	7		15	7	7	14	19	15	22
ウシクサ属A	Andropogoneae A type	49	14	36	44	15	74	100	51	37	37
ウシクサ属B	Andropogoneae B type				7	7			6		
タケ亜科	Bambusoideae										
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus						7	21	6		7
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	14	14		7		7			7	7
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.			7							
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi		7	7						15	
未分類等	Others	7	7		7	15	7	14	6	29	22
その他のイネ科	Others										
表皮毛起源	Husk hair origin					7		7	6	7	
棒状珪酸体	Rodshaped	7	7	14	22	7	37	28	6	22	15
未分類等	Others	14	21	14	7	15	44	43	13	15	15
シダ類	Fern			7	7						7
樹木起源	Arboreal										
ブナ科 (シイ属)	Castanopsis	91	57	43	44	103	44	78	51	44	139
クスノキ科	Lauraceae		7	7	7			7	6	7	7
マンサク科 (イスノキ属)	Distylium	587	713	761	797	524	815	818	668	806	651
アワブキ科	Sabiaceae	35	50	78	22	44	59	21	51	37	29
その他	Others	49	64	28	37	22	67	57	58	59	22
（海綿骨針）	Sponge spicules		7	7	7						
植物珪酸体総数	Total	873	976	1017	1040	790	1177	1223	970	1107	1001

おもな分類群の推定生産量（単位：kg / ㎡･cm）：試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出

		1	2	3	4	5	6	8	10	12	13
イネ	Oryza sativa	0.21		0.21	0.22	0.43	0.22	0.21	0.19	0.22	0.64
ヨシ属	Phragmites		0.45	0.45					0.41		
ススキ属型	Miscanthus type	0.09	0.09		0.18	0.09	0.09	0.18	0.24	0.18	0.27
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus						0.09	0.25	0.07		0.08
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	0.07	0.07		0.04		0.04			0.04	0.04
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.			0.05							
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi		0.02	0.02						0.04	

タケ亜科の比率（%）

		1	2	3	4	5	6	8	10	12	13
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus						71	100	100		71
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	100	76		100		29			44	29
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.			71							
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi		24	29						56	

Ⅱ．川骨遺跡における花粉分析

(1) はじめに

花粉分析は，一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は，水成堆積物では保存状況が良好であるが，乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

(2) 試料

分析試料は，E・F-21・22区の畝間状遺構から採取された畝間1北（試料14），畝間1南（試料15），畝間2北（試料16），畝間2南（試料17），畝間3北（試料18），畝間3南（試料19），畝間4南（試料21），畝間5南（試料23），畝間6南（試料25），畝間7（試料26）の10点である。これらは，植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

(3) 方法

花粉の分離抽出は，中村（1973）の方法をもとに，以下の手順で行った。

①試料から $2cm^3$ を採量
② 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
③水洗処理の後，0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法で砂粒を除去
④ 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
⑤水洗処理の後，氷酢酸によって脱水し，アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン試液を加え1分間湯煎）を施す
⑥再び氷酢酸を加えて水洗処理
⑦沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
⑧検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は，島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類し，複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

(4) 結果

①分類群

出現した分類群は，草木花粉1，シダ植物胞子1形態の計2である。分析結果を表1に示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔草木花粉〕　ヨモギ属
〔シダ植物胞子〕　単条溝胞子

②花粉群集の特徴

分析の結果，畝間１北（試料 14）ではシダ植物単条溝胞子，畝間７南（試料 26）ではヨモギ属が検出されたが，いずれも少量である。その他の試料では，花粉は検出されなかった。

(5) 花粉分析から推定される植生と環境

畝間状遺構の試料では，花粉がほとんど検出されないことから，植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては，乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集，60p.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-110.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.

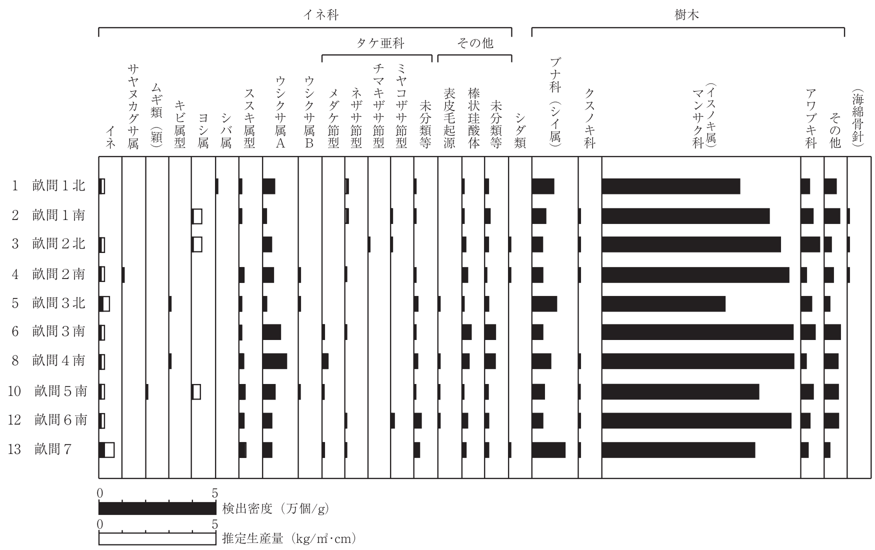


図１　川骨遺跡 E.F-21.22区畝間状遺構における植物珪酸体分析結果

表１　川骨遺跡における花粉分析結果

	地点・試料	E.F-21.22 区									
		14	15	16	17	18	19	21	23	25	26
学名	和名	畝間1北	畝間1南	畝間2北	畝間2南	畝間3北	畝間3南	畝間4南	畝間5南	畝間6南	畝間7
Nonarboreal pollen	草本花粉										
Artemisia	ヨモギ属										1
Fern spore	シダ植物胞子										
Monolate type spore	単条溝胞子	1									
Arboreal pollen	樹木花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
Total pollen	花粉総数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
Pollen frequencies of 1cm3	試料 1cm3 中の花粉密度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(++)	(+)	(++)	(+)

４　川骨遺跡出土木材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

川骨遺跡は，川内川左岸の自然堤防から後背湿地にかけて立地する。今回の発掘調査により，弥生時代～古墳時代の水田，溝，柱穴，江戸時代の井戸等の遺構が検出された。

今回の分析調査では，出土木材の樹種を明らかにするために，樹種同定を実施する。

(2) 試料

試料は，木製品を含む木材 30 点 (試料番号 1 ～ 30) である。

(3) 分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作製し，ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し，プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお, 木材組織の名称や特徴については, 島地・伊東 (1982), Wheeler 他 (1998), Richter 他 (2006) を参考にする。また，日本産木材の組織配列については，林 (1991) や伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) を参考にする。

(4) 結果

樹種同定結果を表 1 に示す。木材の形状は，送付されてきた状態を記載したものである。明らかに大きな木材から分割したと思われる試料もあり，記載されている形状と出土時の形状が異なる場合も考えられる。木材の大きさは，直径や半径が計測できる場合には，直径・半径を記録し，直径・半径が記録できない場合には軸方向と直交する方向の最大幅を記録した。これらの木材は，針葉樹 1 分類群 (マツ属複維管束亜属) と広葉樹 4 分類群 (スダジイ・クスノキ・イスノキ・シラキ) に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで，晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管，柔細胞，水平樹脂道，エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となり，1 分野に 1 個。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列，1 ～ 10 細胞高。

・スダジイ（Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai）　ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で，孔圏部は接線方向に疎な 3 ～ 4 列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1 ～ 20 細胞高。

・クスノキ（Cinnamomum camphora (L.) Presl）　クスノキ科ニッケイ属

散孔材で，道管径は比較的大径，管壁は薄く，横断面では楕円形，単独または 2 ～ 3 個が放射方

向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性，1 ～ 3 細胞幅，1 ～ 20 細胞高。柔組織は周囲状～翼状。柔細胞には油細胞が認められる。

・イスノキ（Distylium racemosum Sieb. et Zucc.）　　マンサク科イスノキ属

散孔材で，道管は横断面で多角形，ほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有する。道管および放射組織の内部には茶褐色の物質が充填する。放射組織は異性，1 ～ 3 細胞幅，1 ～ 20 細胞高。柔組織は，独立帯状または短接線状で，放射方向にほぼ等間隔に配列する。

・シラキ（Sapium japonicum (Sieb. et Zucc.) Pax et Hoffm）　　トウダイグサ科シラキ属

散孔材で，道管は単独または 2 ～ 4 個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性，1 列 (希に 2 列)，1 ～ 30 細胞高。

(5) 考察

今回調査対象とした木材試料は，木製品 1 点 (試料番号 14) が含まれるが，他は自然木 (木の枝) とされている。自然木 29 点は，いずれも低湿地のⅣ c 層 (灰黄色粘質土) から出土している。丸木状を呈する試料では, 直径は 1㎝～ 6㎝までである。しかし, 破片の中には, 半径で 4㎝以上ある試料や, 破片の最大幅が 6㎝を超える試料もあり，さらに大きな丸木が存在していたと考えられる。これらの自然木には，複維管束亜属，スダジイ，クスノキ，イスノキ，シラキが認められ，過半数の 18 点が複維管束亜属である。

複維管束亜属は，二次林を構成する針葉樹である。また，岩場や砂地などの痩せ地でも育つことから，伐採地や河畔等の開けた場所には複維管束亜属を主体とする二次林 (マツ林) が見られたことが推定される。一方，広葉樹のスダジイ，クスノキ，イスノキは，暖温帯常緑広葉樹林の構成種であり，スダジイやクスノキは特に沿海地に多くみられる。これらの種類は，後背の山地・丘陵地に常緑広葉樹林を構成しており，シラキはその林縁部等に生育していたことが推定される。

木製品は, 自然木より下層で, 古墳時代の遺物包含層であるⅤ層 (灰色粘質土) から出土している。芯持丸木状を呈し，樹種は複維管束亜属であった。複維管束亜属は，針葉樹としては比較的強度が高く，松脂を多く含むために保存性もある。器種の詳細は不明であるが，複維管束亜属は直上のⅣ c 層から出土した木材に多数認められていることから，Ⅴ層当時も周囲で入手が容易であった可能性がある。

鹿児島県内では，寿国寺跡の近世とされる木杭や胴木，上焼田遺跡の中世とされる炭化材に複維管束亜属が確認された例があるが，古墳時代の木製品や炭化材に複維管束亜属が確認された例は知られていない (株式会社古環境研究所 ,2002; パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2003)。今回の結果は，古墳時代における複維管束亜属の利用を考える上で貴重な資料といえよう。

引用文献

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 ,66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

株式会社古環境研究所 ,2002, 寿国寺跡から出土した木製品の樹種同定 .「寿国寺跡・梅落遺跡　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ」, 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（40）, 鹿児島県立埋蔵文化財センター ,186-188.

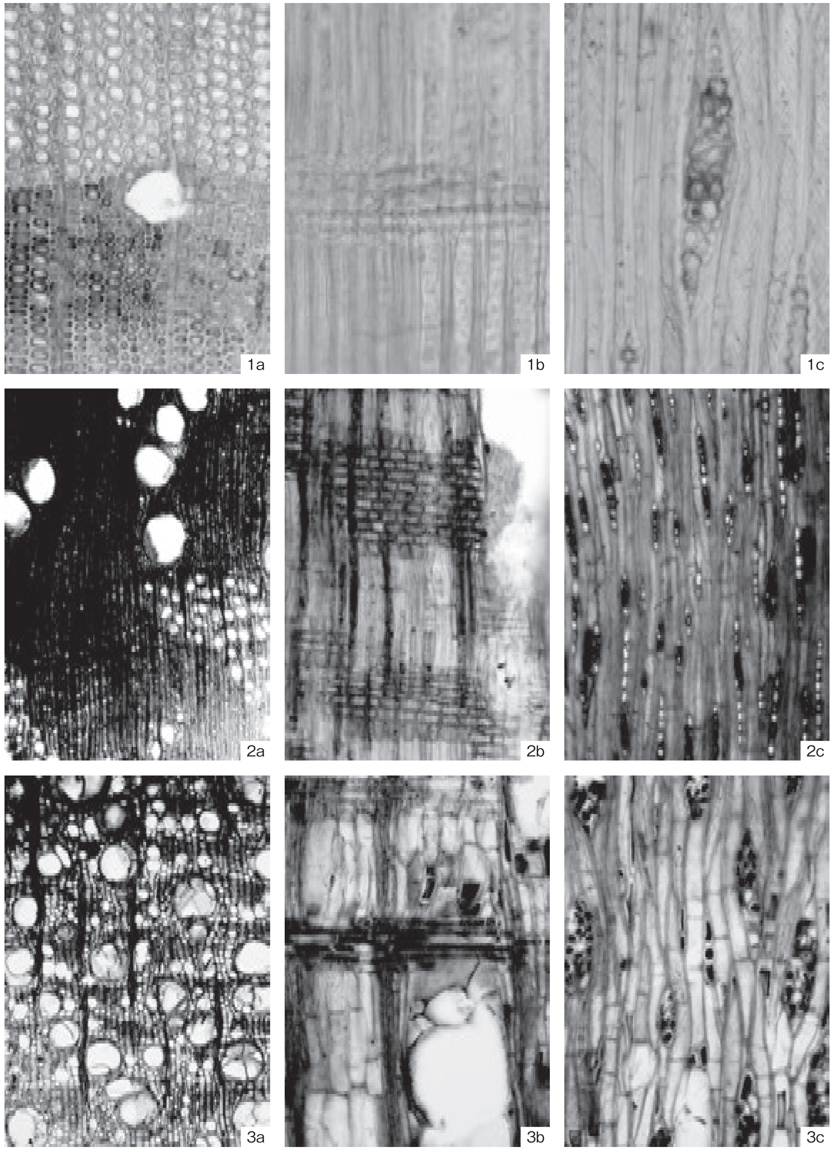
パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2003, 上焼田遺跡における樹種同定 .「上焼田 A 遺跡・上焼田 B 遺跡　ふるさと農道緊急整備事業（宮崎地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1」, 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書（15）, 金峰町教育委員会 ,300.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

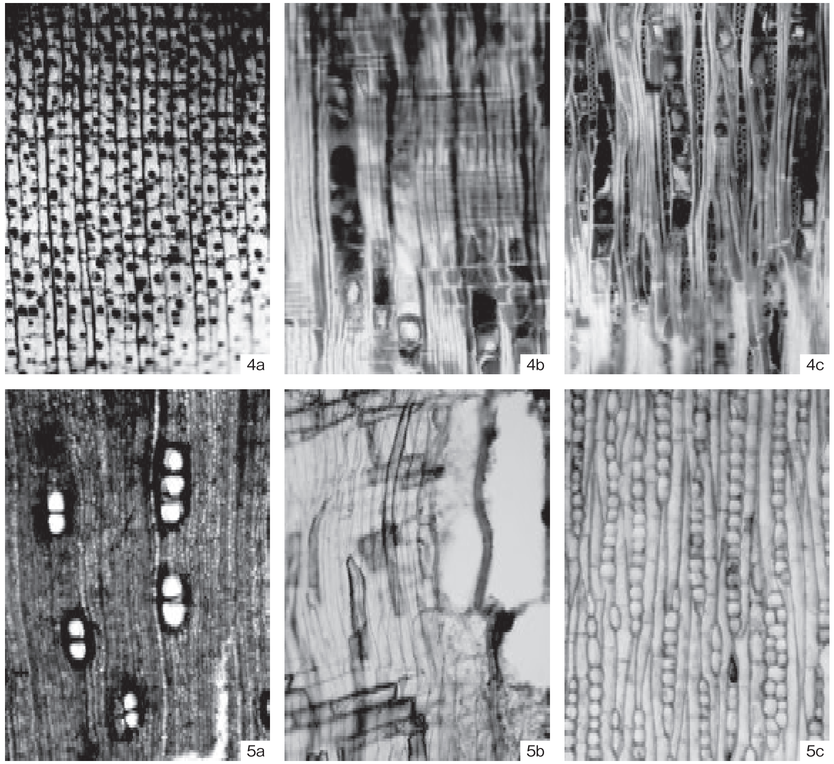
図版1　木材(1)



1. マツ属複維管束亜属(試料番号11)
2. スダジイ(試料番号6)
3. クスノキ(試料番号10)
　a：木口，b：柾目，c：板目

300μm:a
200μm:a.b,c
100μm:b,c

図版2　木材(2)



4. イスノキ(試料番号17)
5. シラキ(試料番号22)
　a：木口，b：柾目，c：板目

300μm:a
200μm:b,c

5　川骨遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

（1）測定対象試料

川骨遺跡は，鹿児島県薩摩川内市高江町 2201 番地ほか（北緯 31° 49′ 32″，東経 130° 15′ 32″）に所在する。

測定対象試料は，鍛冶炉跡 1 ～ 5 から出土した炭化物各 2 点，合計 10 点である（No.1 ～ 10：IAAA-82090 ～ 82099）。

（2）測定の意義

遺跡の年代及び性格を明らかにしたい。

（3）化学処理工程

①メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

②酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 1N の水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお，AAA 処理において，アルカリ濃度が 1N 未満の場合，表中に AaA と記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

③試料を酸化銅と共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で 30 分，850℃で 2 時間加熱する。

④液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

⑤精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

⑥グラファイトを内径 1mm のカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

（4）測定方法

測定機器は，3MV タンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（5）算出方法

①年代値の算出には，Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

② ^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され，1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は，$\delta^{13}C$ によって補正された値である。^{14}C 年代と誤差は，1 桁目を四捨五入して 10 年単位で表示される。また，^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）

は，試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

③ δ ^{13}C は，試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}C/^{12}C$ を測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

④ pMC (percent Modern Carbon) は，標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。

⑤暦年較正年代とは，年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（1 σ = 68.2%）あるいは2標準偏差（2 σ = 95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ramsey 1995　Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

(6) 測定結果

^{14}C 年代は，鍛冶炉跡1上から出土した炭化物（No.1）が120 ± 30yrBP，同下から出土した炭化物（No.2）が150 ± 30yrBPである。鍛冶炉跡2では，上から出土した炭化物（No.3）が200 ± 30yrBP，下から出土した炭化物（No.4）が230 ± 30yrBPである。鍛冶炉跡3では，上から出土した炭化物（No.5）が270 ± 30yrBP，下から出土した炭化物（No.6）が170 ± 30yrBPである。鍛冶炉跡4では，上から出土した炭化物（No.7）が200 ± 30yrBP，下から出土した炭化物（No.8）が160 ± 30yrBPである。鍛冶炉跡5では，上から出土した炭化物（No.9）が210 ± 30yrBP，下から出土した炭化物（No.10）が110 ± 30yrBPである。

測定対象となった炭化物は小片であり，本来の木材の部位を断定できる試料ではなかった。多くの試料は炭素含有率50%以上であり，十分な値であった。ただし，No.5は5mm程の炭化物片が崩れたものであり，付着した砂と完全に分離できない状態であったため，炭素含有率も32%と低い値であった。

測定結果の ^{14}C 年代は，同一遺構内でも出土位置の上下関係と整合しない。その理由として，この年代範囲における暦年較正曲線の歪みがあげられる。この時期は，大気中の ^{14}C 濃度の変化が不安定な時期であり，暦年較正曲線は上下動の大きいウイグルを描く。したがって，当該期では，暦年較正年代の幅を絞り込むことが難しい。暦年較正年代（1 σ）から判断すれば，すべての試料が江戸時代から明治時代の中に含まれる年代といえる。

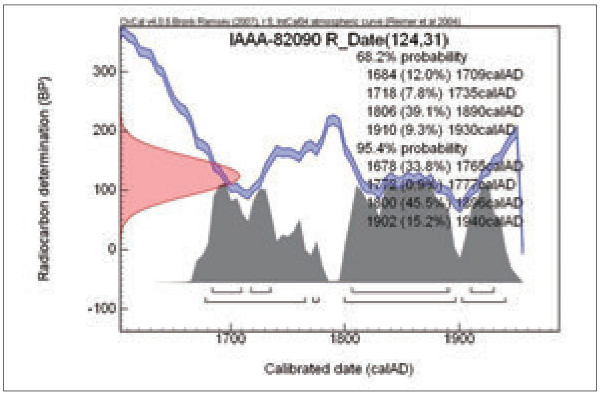
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C 補正あり	
						LibbyAge(yrBP)	pMC (%)
IAAA-82090	No. 1	鍛冶炉跡 1 上	炭化物	AaA	-27.05 ± 0.57	120 ± 30	98.46 ± 0.39
IAAA-82091	No. 2	鍛冶炉跡 1 下	炭化物	AAA	-27.74 ± 0.49	150 ± 30	98.14 ± 0.37
IAAA-82092	No. 3	鍛冶炉跡 2 上	炭化物	AAA	-28.78 ± 0.66	200 ± 30	97.52 ± 0.37
IAAA-82093	No. 4	鍛冶炉跡 2 下	炭化物	AAA	-29.23 ± 0.74	230 ± 30	97.23 ± 0.39
IAAA-82094	No. 5	鍛冶炉跡 3 上	炭化物	AaA	-25.03 ± 0.47	270 ± 30	96.71 ± 0.37
IAAA-82095	No. 6	鍛冶炉跡 3 下	炭化物	AAA	-27.79 ± 0.72	170 ± 30	97.91 ± 0.37
IAAA-82096	No. 7	鍛冶炉跡 4 上	炭化物	AaA	-25.88 ± 0.76	200 ± 30	97.54 ± 0.37
IAAA-82097	No. 8	鍛冶炉跡 4 下	炭化物	AAA	-25.39 ± 0.94	160 ± 30	98.01 ± 0.38
IAAA-82098	No. 9	鍛冶炉跡 5 上	炭化物	AaA	-23.39 ± 0.63	210 ± 30	97.42 ± 0.41
IAAA-82099	No. 10	鍛冶炉跡 5 下	炭化物	AaA	-27.05 ± 0.96	110 ± 30	98.68 ± 0.41

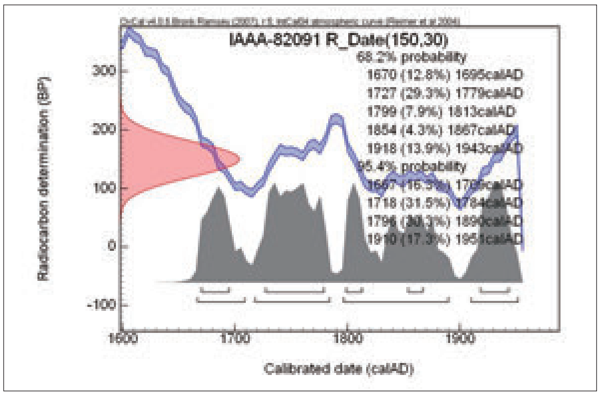
［# 2592］

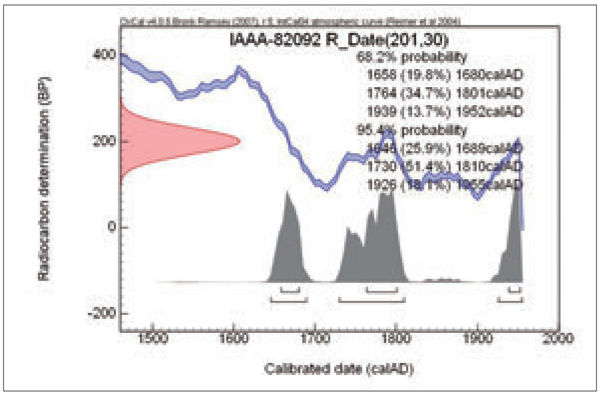
測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)			
IAAA-82090	160 ± 30	98.05 ± 0.37	124 ± 31	1684AD - 1709AD (12.0%) 1718AD - 1735AD (7.8%) 1806AD - 1890AD (39.1%) 1910AD - 1930AD (9.3%)	1678AD - 1765AD (33.8%) 1772AD - 1777AD (0.9%) 1800AD - 1896AD (45.5%) 1902AD - 1940AD (15.2%)
IAAA-82091	200 ± 30	97.59 ± 0.35	150 ± 30	1670AD - 1695AD (12.8%) 1727AD - 1779AD (29.3%) 1799AD - 1813AD (7.9%) 1854AD - 1867AD (4.3%) 1918AD - 1943AD (13.9%)	1667AD - 1709AD (16.3%) 1718AD - 1784AD (31.5%) 1796AD - 1890AD (30.3%) 1910AD - 1951AD (17.3%)
IAAA-82092	260 ± 30	96.77 ± 0.34	201 ± 30	1658AD - 1680AD (19.8%) 1764AD - 1801AD (34.7%) 1939AD - 1952AD (13.7%)	1646AD - 1689AD (25.9%) 1730AD - 1810AD (51.4%) 1926AD - 1955AD (18.1%)
IAAA-82093	300 ± 30	96.38 ± 0.36	226 ± 32	1645AD - 1671AD (32.5%) 1778AD - 1799AD (26.5%) 1942AD - 1953AD (9.2%)	1636A D - 1685AD (40.3%) 1733AD - 1807AD (42.0%) 1929AD - 1955AD (13.2%)
IAAA-82094	270 ± 30	96.70 ± 0.36	268 ± 31	1525AD - 1557AD (24.8%) 1632AD - 1665AD (39.5%) 1785AD - 1793AD (3.9%)	1514AD - 1600AD (40.3%) 1616AD - 1670AD (46.5%) 1781AD - 1799AD (7.7%) 1946AD - 1953AD (1.0%)

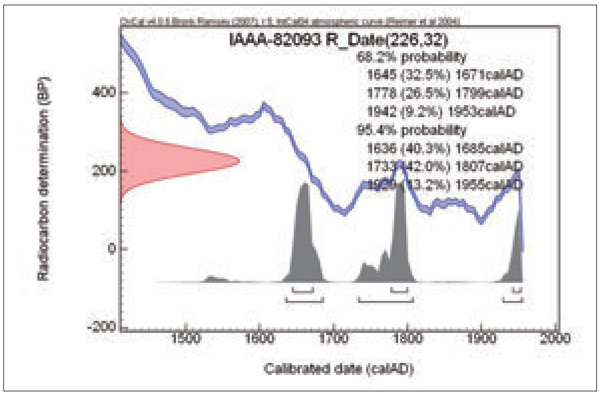
測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC （%）			
IAAA-82095	220 ± 30	97.35 ± 0.34	169 ± 30	1668AD - 1686AD (12.0%) 1731AD - 1782AD (35.0%) 1797AD - 1808AD (6.9%) 1927AD - 1950AD (14.3%)	1660AD - 1700AD (17.4%) 1721AD - 1819AD (50.5%) 1832AD - 1880AD (8.6%) 1915AD - 1954AD (18.8%)
IAAA-82096	210 ± 30	97.37 ± 0.33	200 ± 30	1660AD - 1680AD (18.8%) 1764AD - 1801AD (35.4%) 1939AD - 1952AD (14.0%)	1646AD - 1690AD (25.5%) 1729AD - 1810AD (51.6%) 1925AD - 1955AD (18.2%)
IAAA-82097	170 ± 30	97.94 ± 0.33	161 ± 31	1669AD - 1691AD (13.2%) 1729AD - 1781AD (34.5%) 1798AD - 1810AD (7.5%) 1925AD - 1946AD (13.0%)	1664AD - 1707AD (17.0%) 1720AD - 1826AD (47.7%) 1832AD - 1883AD (12.7%) 1914AD - 1953AD (18.0%)
IAAA-82098	180 ± 30	97.74 ± 0.39	210 ± 33	1650AD - 1680AD (25.0%) 1764AD - 1800AD (31.2%) 1939AD - 1953AD (12.0%)	1642AD - 1690AD (30.1%) 1729AD - 1810AD (48.7%) 1925AD - 1955AD (16.6%)
IAAA-82099	140 ± 30	98.27 ± 0.36	106 ± 33	1693AD - 1727AD (18.7%)* 1813AD - 1892AD (43.0%)* 1907AD - 1919AD (6.5%)*	1681AD - 1764AD (30.1%)* 1801AD - 1939AD (65.3%)*

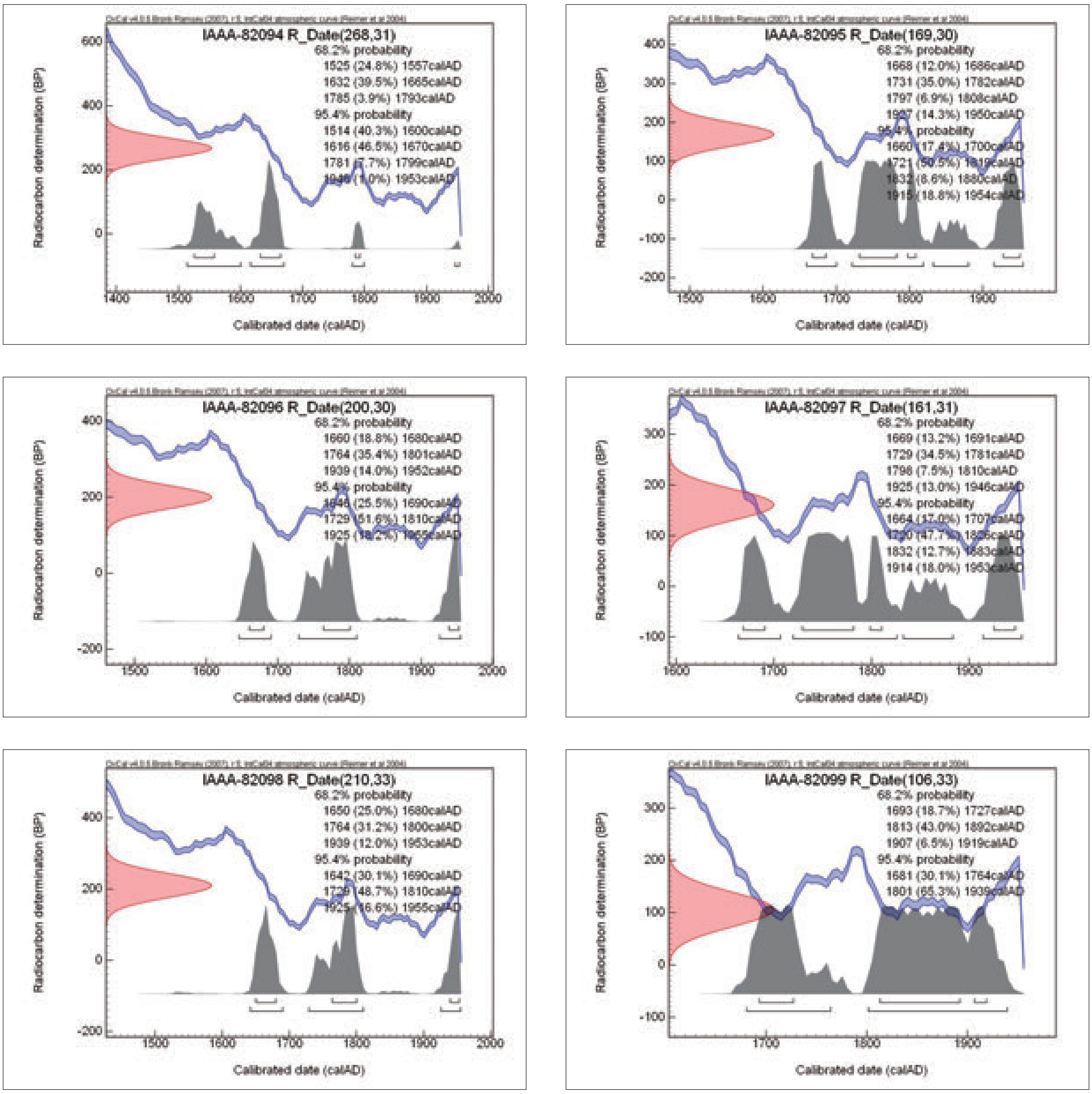
［参考値］











［参考］暦年較正年代グラフ

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

６　川骨遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

（１）測定対象試料

川骨遺跡は，鹿児島県薩摩川内市高江町（北緯 31° 49′，東経 130° 15′）に所在し，標高約３～4m の川内川下流域左岸の自然堤防から後背湿地にかけて立地する。測定対象試料は，Ｖ層の土器集中Ｅより出土した土器付着炭化物（1：IAAA-101491），低湿地のＶ層より出土した種子（2：IAAA-101492，3：IAAA-101493）の合計３点である（表 1）。土器付着炭化物１は大甕胴部下半より採取された。

（２）測定の意義

土器付着炭化物１の測定では，土器及び土器集中の年代を明らかにする。炭化種子2，3の測定では，種子の生育していた年代及び出土した層位の年代を明らかにする。

（３）化学処理工程

①メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

②酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA 処理における酸処理では，通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」，1M 未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

③試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

④真空ラインで二酸化炭素を精製する。

⑤精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

⑥グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

（４）測定方法

3MV タンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置を使用し，^{14}C の計数，^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（５）算出方法

①δ ^{13}C は，試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表 1）。AMS 装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

②^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され，

1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libby の半減期（5568 年）を使用する(Stuiver and Polach 1977)。^{14}C 年代は δ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に，補正していない値を参考値として表 2 に示した。^{14}C 年代と誤差は，下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また，^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）は，試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

③ pMC (percent Modern Carbon) は，標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し，pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ^{13}C によって補正する必要があるため，補正した値を表 1 に，補正していない値を参考値として表 2 に示した。

④暦年較正年代とは，年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1 標準偏差（1 σ = 68.2%）あるいは 2 標準偏差（2 σ = 95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C 補正を行い，下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal09 データベース（Reimer et al. 2009）を用い，OxCalv4.1 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は，^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

（6）測定結果

Ⅴ層の土器集中Ｅより出土した土器付着炭化物 1 の ^{14}C 年代は 2060 ± 30yrBP, 暦年較正年代(1 σ）は 154 ～ 41cal BC の間に 2 つの範囲で示され，弥生時代中期頃に相当する。2 σ で見ると暦年代範囲が特に新しい方に広がる。

低湿地のⅤ層より出土した種子の ^{14}C 年代は，2 が 4810 ± 30yrBP，3 が 4000 ± 30yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は，2 が 3645 ～ 3536cal BC，3 が 2567 ～ 2481cal BC の間に各々複数の範囲で示され，2 は縄文時代前期後葉頃，3 は縄文時代中期末葉頃に当たる。

試料の炭素含有率は，1 が約 40%と若干低い値を示した。2，3 は 50%を超え，化学処理，測定上の問題は認められない。

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150

表１

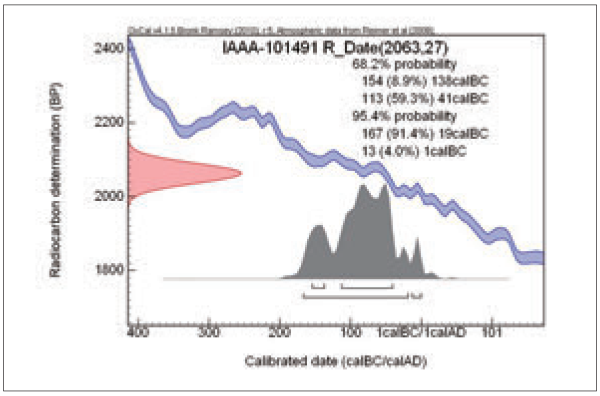
測定番号	試料名	採取場所	試 料 形 態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C 補正あり	
						LibbyAge(yrBP)	pMC (%)
IAAA-101491	1	遺構：土器集中Ｅ 層位：Ⅴ	炭化物（土器付着）	AaA	-26.66 ± 0.49	2,060 ± 30	77.35 ± 0.26
IAAA-101492	2	層位：Ⅴ	種子	AAA	-26.95 ± 0.39	4,810 ± 30	54.92 ± 0.21
IAAA-101493	3	層位：Ⅴ	種子	AAA	-26.84 ± 0.40	4,000 ± 30	60.75 ± 0.23

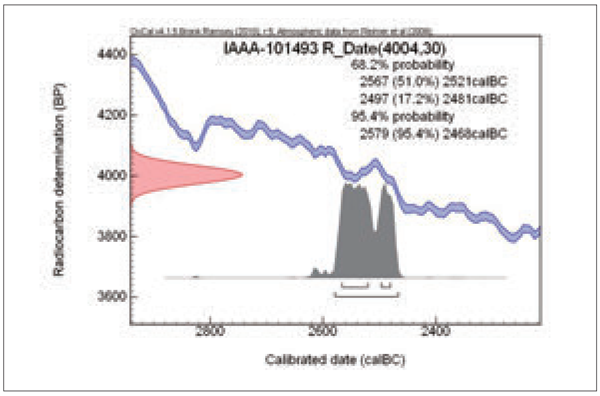
[#3830]

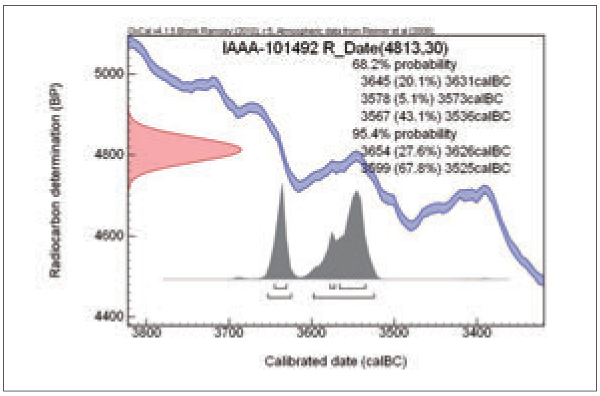
表２

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦 年 較 正 用 (yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC （%）			
IAAA-101491	2,090 ± 30	77.08 ± 0.25	2,063 ± 27	154calBC - 138calBC (8.9%) 113calBC - 41calBC (59.3%)	167calBC - 19calBC (91.4%) 13calBC - 1calBC (4.0%)
IAAA-101492	4,850 ± 30	54,70 ± 0.20	4,813 ± 30	3645calBC - 3631calBC (20.1%) 3578calBC - 3573calBC (5.1%) 3567calBC - 3536calBC (43.1%)	3654calBC - 3626calBC (27.6%) 3599calBC - 3525calBC (67.8%)
IAAA-101493	4,030 ± 30	60.52 ± 0.22	4,004 ± 30	2567calBC - 2521calBC (51.0%) 2497calBC - 2481calBC (17.2%)	2579calBC - 2468calBC (95.4%)

[参考値]







［参考］暦年較正年代グラフ

7　川骨遺跡出土試料の種実同定

（株）加速器分析研究所

（1）はじめに

今回の分析調査では，川骨遺跡 (鹿児島県薩摩川内市高江町所在) の弥生時代後期後半～古墳時代初頭と考えられている，Ｖｂ層より出土した種実遺体の同定を実施し，当時の植生に関する資料を得る。

（2）試料

試料は，Ｖｂ層より出土した種実遺体 6 点 (試料名：種実同定 1 ～ 6) である。

（3）分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川 (1994)，中山ほか (2000) 等との対照から，種実遺体の種類と部位を同定する。

（4）結果および考察

表 1.　種実同定結果

試料番号		分類群	部位	状態	個数	備考
種実同定 1	AMS-C14-2	センダン	核	完形	1	
種実同定 2	AMS-C14-3	コナラ属	果実	完形	1	頂部欠損
種実同定 3		ヤマモモ	核	半分	1	
種実同定 4		マツ属複維管束亜属	球果	破片	1	
種実同定 5		コナラ属	果実	破片	6	1 個基部確認
種実同定 6		ツブラジイ	果実	完形	2	
				破片	7	

裸子植物 1 分類群 (常緑針葉樹のマツ属複維管束亜属)1 個，被子植物 4 分類群 (常緑広葉樹のヤマモモ，ツブラジイ，常緑または落葉広葉樹のコナラ属，落葉広葉樹のセンダン)18 個の種実が同定された (表 1)。これらの種実遺体は，本遺跡周辺域の森林に生育していた樹種に由来するものと考えられる。以下に，各分類群の形態的特徴を記す。

・マツ属複維管束亜属 (Pinus subgen. Diploxylon)　マツ科

球果は灰褐色，長さ 2.8cm，径 1.9cm 程度の円錐状広卵体。木質で長楕円状矩形の種鱗が覆瓦状，螺旋状に密着する。種鱗外面は不規則な四 - 五角形で肥厚し，横の稜線とその中央部に短く突起する臍点がある。球果は一部が摩耗しており，中央に 1 本の太い球果軸が確認される。

・ヤマモモ (Myrica rubra Sieb. et Zucc.)　ヤマモモ科ヤマモモ属

核 (内果皮) は灰褐色，長さ 8mm，幅 7mm，厚さ 5mm 程度の歪でやや偏平な広楕円体。破片は縦半分に割れている。内果皮は厚く硬く，表面には微細な網目模様があり，粗面。剛毛が密生する。核の内側表面は平滑で，種子 1 個が入る卵状の窪みがみられる。

・コナラ属 (Quercus)　ブナ科

果実は灰褐色，長さ 1.8cm，径 1.2cm 程度の卵状楕円体。同定根拠となる頂部を欠損している。基部に径 7mm 程度の円形で維管束の穴が輪状に並ぶ着点がある。果皮表面は平滑で，微細な縦筋がある。

・ツブラジイ (Castanopsis cuspidata (Thunb. ex Murray) Schottky)　ブナ科シイ属

果実は灰黒褐色，長さ 8-11mm，径 5-7mm 程度の広卵体。頂部は尖り，基部を占める着点は灰褐色，

円状不定形で維管束の穴が不規則な輪状に並ぶ。果皮表面には細く浅い溝が縦列する。

・センダン (Melia azedarach L. var. subtripinnata Miquel)　　　センダン科センダン属

核 (内果皮) は灰褐色，長さ 1.3cm，径 0.8cm 程度の楕円体。基部には大きく深い孔がある。背面は浅く広い 5-6 個の縦溝と縦隆条が交互に並び，上面観は星型。表面は粗面。

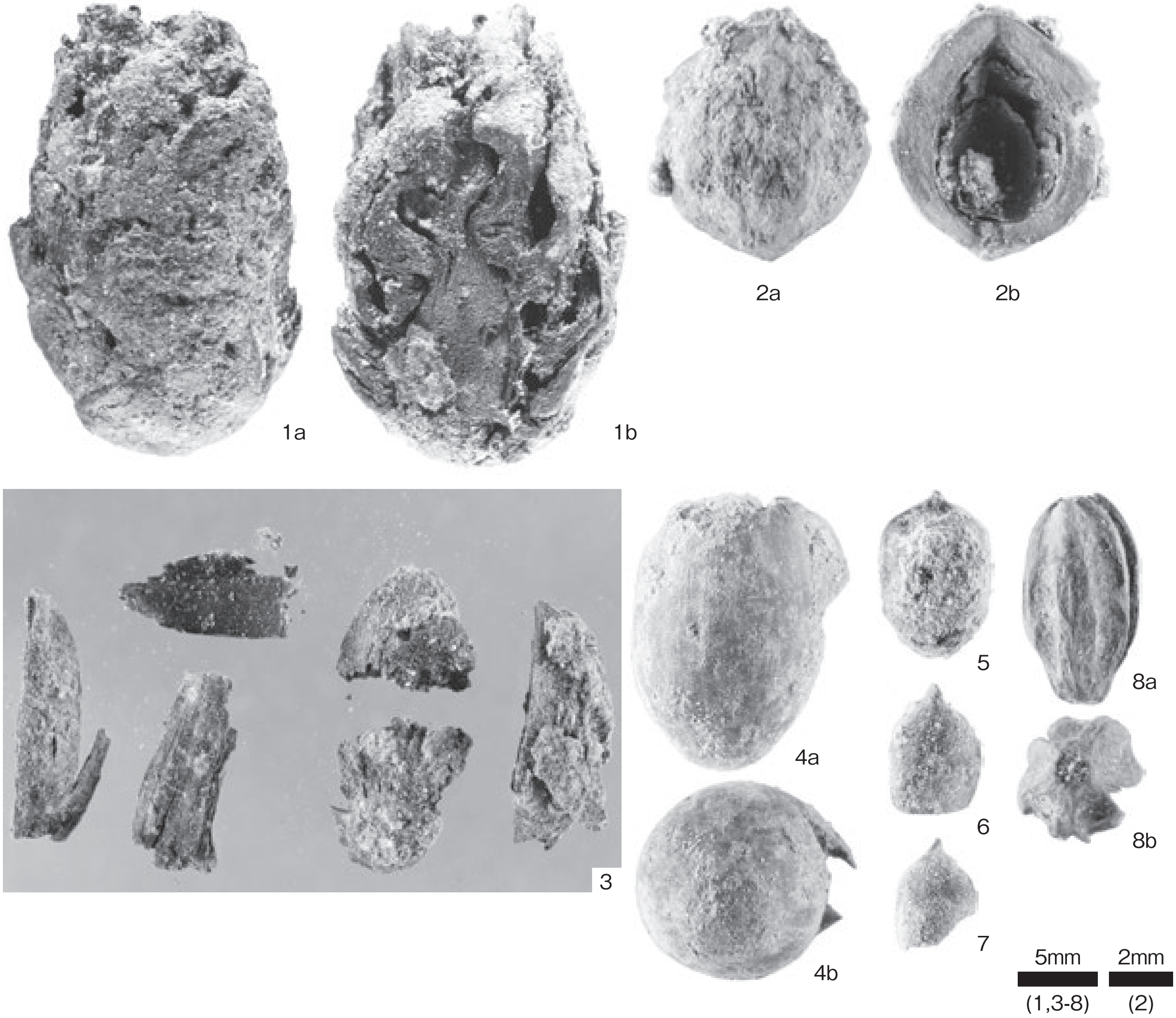
引用文献

石川茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 . 東北大学出版会 ,642p.

※）本分析は，パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

図版1　種実遺体



1．マツ属複維管束亜属 球果(種実同定4)　　2．ヤマモモ 核(種実同定3)
3．コナラ属 果実(種実同定5)　　4．コナラ属 果実(種実同定2)
5．ツブラジイ 果実(種実同定6)　　6．ツブラジイ 果実(種実同定6)
7．ツブラジイ 果実(種実同定6)　　8．センダン 核(種実同定1)

8　出土古銭の蛍光Ｘ線分析

元来は古銭の裏面の地金が現れるまで小型自動研磨機で研磨し, 試料の表面全体にＸ線を照射し, 発生する試料の蛍光Ｘ線スペクトルを観測するが, 報告書に載せる関係上, 今回は研磨せず, 表面を分析したにとどまる。完全非破壊分析が可能であっても, 表面が錆びているために, 地金本来の組成についての正確な情報を得がたい。また, その際, 表面の微小の金属を計測してしまう可能性もあることを前提に分析を行った一考察である。

（1）蛍光Ｘ線分析

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所製 XGT-1000, Ｘ線管球ターゲット：ロジウム, Ｘ線照射径 100 μm）を使用して, 非破壊で測定した。分析条件は次のとおりである。

Ｘ線照射径：100 μm　測定時間：200 s　Ｘ線管電圧：15/50 kV　電流：1000/700 μA

パルス処理時間：P3　Ｘ線フィルタ：なし　試料セル：なし　定量補正法：スタンダードレス

①報告書番号 No. 567　世高通寶

元 素	ライン	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
Fe 鉄	K	0.33	14.03
Cu 銅	K	21.88	1269.54
As　ひ素	K	0.03	1.72
Sn すず	K	44.46	219.84
Pb 鉛	L	33.3	545.26

②報告書番号 No. 568　洪武通寶

元 素	ライン	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
Fe 鉄	K	4.73	253.56
Cu 銅	K	19.21	1468.56
As　ひ素	K	0.54	37.65
Sn すず	K	30.92	188.25
Pb 鉛	L	44.60	906.44

③報告書番号 No. 569　寛永通寶 1

元 素	ライン	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
Fe 鉄	K	3.01	177.21
Cu 銅	K	45.83	3196.12
As　ひ素	K	0.04	2.37
Sn すず	K	22.62	133.05
Pb 鉛	L	28.50	441.34

④報告書番号 No. 574　寛永通寶 2

元 素	ライン	質量濃度 [%]	強度 [cps/mA]
Fe 鉄	K	1.64	96.04
Cu 銅	K	41.87	2929.00
As　ひ素	K	0.03	1.54
Sn すず	K	20.00	110.43
Pb 鉛	L	36.47	574.02

世高通寶は, 他の古銭と比べ, 鉄の成分の割合が極端に少なく, 加工しやすいすずや鉛などの割合を多くしたことも考えられる。背景には, 短い期間に多量に生産する必要があったことが予想される。また, すずの割合に注目して見ると, 時代を追うごとに（①>②>③>④）相対的に低くなっている。すずの生産量と, その他の金属精製法の確立が時代を追うごとに確立してきたことも考えられる。

ひ素は, 微量の不純物の代表格と考えられるが, 洪武通寶は比較的その他の古銭より多く検出されている。しかしながら, 微量の範疇を超えているようには考えにくい。同じ寛永通寶でも, 生産された時代が異なると, 鉛成分の割合に違いが生じてくるようである。

第６節　総括

1　弥生時代後期後半～古墳時代初頭

（1）出土土器の分類と時間的位置づけ

土器集中遺構から出土した土器は，弥生時代後期後半～古墳時代初頭に相当する土器であり，一部は中津野式土器と呼ばれてきた土器群に該当する。これらを中村直子鹿児島大学准教授の指導のもと，甕型土器(以下甕と略す)，壺型土器(以下壺と略す)を中心に型式分類を行い，その他の土器については他遺跡との比較の上,分類を行った。同一器種が2点以上出土しているものに関して,分類の基準を以下に記す。ただし，完形で出土しているものが少ないため，Ⅱ類とⅢ類の区分が曖昧な部分もある。

＜甕口縁部＞

Ⅰ類：「く」の字に外反し，内面の稜がはっきりとする

Ⅱ類：Ⅰ類よりも口縁部が立ち上がり，内面の稜もやや弱くなる

Ⅲ類：Ⅱ類よりもさらに立ち上がり，口縁部の屈曲が弱くなる

＜甕脚部＞

Ⅰ類：脚部天井内面が平坦で，脚端部が外反する

Ⅱ類：脚部天井内面が山形になる。脚端部は外反する

Ⅲ類：脚部天井内面は山形だが，脚端部の外反は弱い。脚部が高くなる

＊Ⅰ類の胴部はⅡ・Ⅲ類の長胴型の胴部と異なり，丸みを帯びて張る胴部である。松木薗式または同系統の様式を引くものと思われる。

＜壺底部＞

Ⅰ類：底部に平坦な面があり，立ち上がりにはっきりとした角がある

Ⅱ類：底部の面はやや丸みを帯び，立ち上がりの角にも丸みがある

Ⅲ類：丸底

＜大甕＞

口縁部下に鍔の付く，口径30㎝以上のもの。時期が下るにつれて，口縁部内面の稜が弱まり，鍔は短く小さく退化する。

＜鉢＞

・底部は平坦であまり広がらずに立ち上がり，口縁部は直立する。コップのような形状のもの

・底部に比べて口縁部の径が大きい，ボウル状のもの

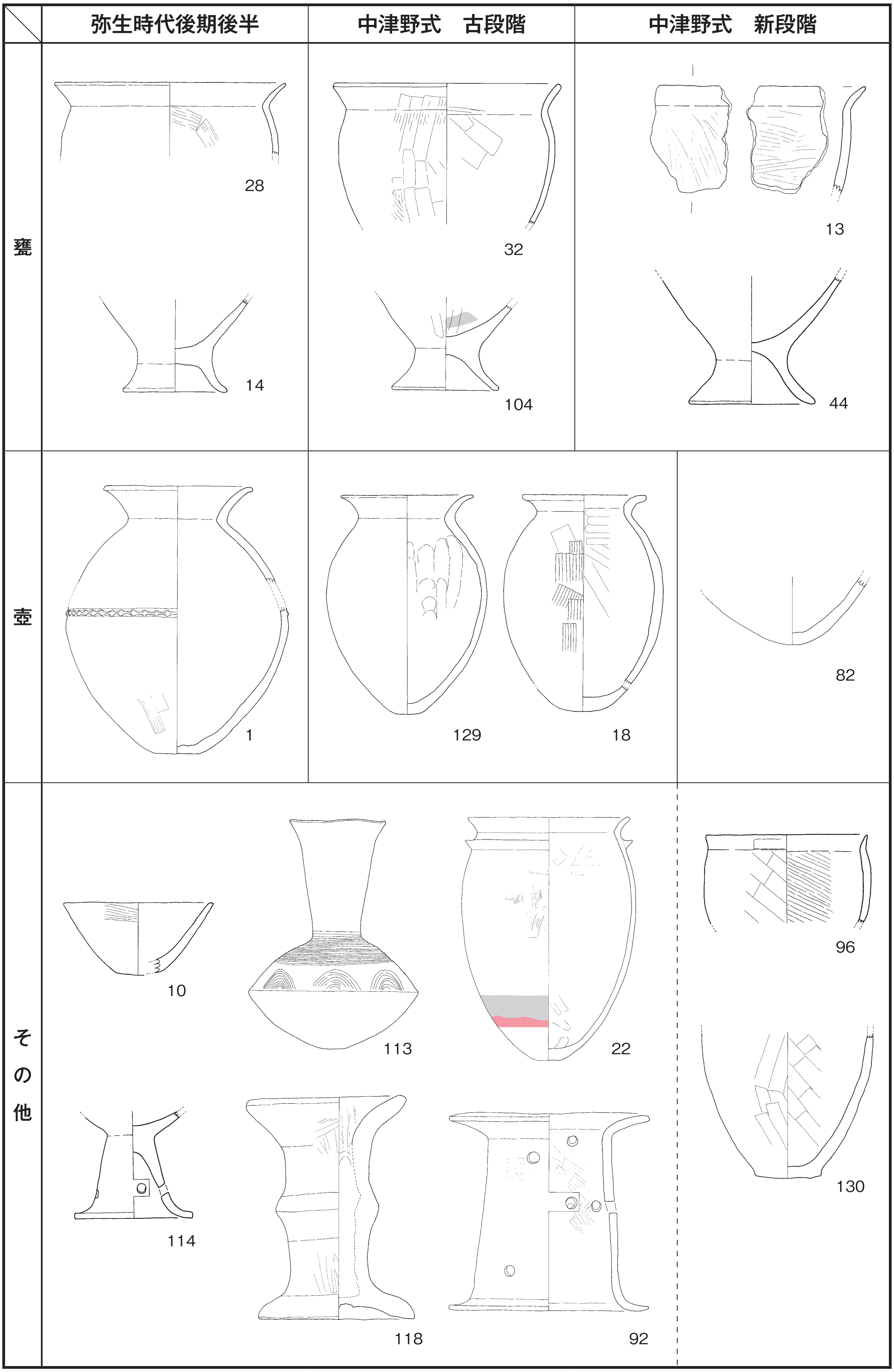
・小型の甕のような器形

＊鉢は，個体数が少ないため時間的な分類はできなかったが，共伴している土器から，ボウル状の鉢に関しては，Ⅰ類またはⅡ類に分類できる。また，コップ状の鉢は，Ⅱ類以降であるということができる。

＜器台＞

・鼓形で，胴部に透かし穴があるもの

・細長い鼓形で，胴部にふくらみをもつもの


弥生時代後期後半
中津野式　古段階
中津野式　新段階
甕
28
32
13
14
104
44
壺
1
129
18
82
その他
10
113
22
96
130
114
118
92

分類の結果とこれまでの研究成果から，土器を３つの時期に当てはめることができると考えられる。すなわち，以下のとおりである。

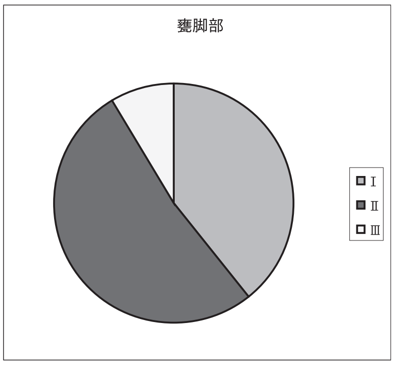
Ⅰ類：弥生時代後期後半段階

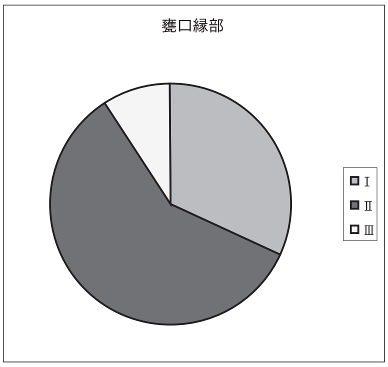
Ⅱ類：中津野式古段階

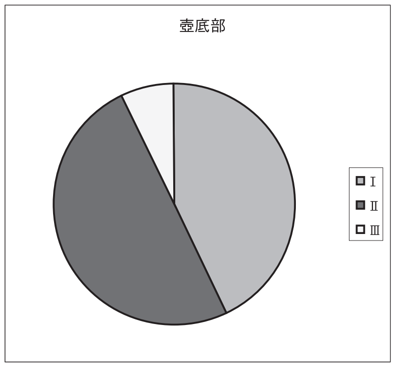
Ⅲ類：中津野式新段階

土器集中遺構出土の土器を分類ごとに当てはめると，土器集中遺構９はⅠ類のみの土器が，土器集中遺構 10・11 は，Ⅱ類の土器のみが出土している。土器集中遺構２・５・７は，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類とも出土している。Ⅰ・Ⅱ類が同じ遺構内から出土している例が最も多く，量的には，Ⅲ類が最も少ない。

時期の変遷がわかりやすい甕の口縁部形態および脚部形態，壺の底部形態にしぼって，その個体数を比較してみると，下のグラフのような結果を得ることができた。Ⅱ類 (中津野式古段階) が数量的に最も多く，川骨遺跡のこの時代の主体を占める時期であると思われる。







(2) 特殊な土器について

＜器台＞

川骨遺跡から出土した器台は２種類あり，１つは土器集中遺構５から出土した，鼓形の胴部に透かし孔が複数あり，口縁部・底部ともに外側に大きく外反する器形のものである。もう１種類は土器集中遺構７から出土した。口縁部・底部が大きく外反する。器壁は厚く底部は充実で，胴部半ばに膨らみがある。同じ遺構内から長頸壺が出土しているが，そのための器台だったのではないかと考えられる。しかしこの器形については他遺跡で出土例がなく，今後の出土例の増加を待つ。

鹿児島県内における鼓形器台の出土例については，薩摩川内市の外川江遺跡，大島遺跡，大隅地方の鎮守ヶ迫遺跡，塚崎遺跡の４遺跡８例である。外川江遺跡出土の器台は鼓形で円形の透かし孔が４つずつある。大島遺跡でも同様の鼓形の器台が４点（住居内１点, 包含層３点）出土している。鎮守ヶ迫遺跡出土の器台は，小型で４つの円形透かしがある。塚崎遺跡の器台は，胴部に凹線が数条めぐる小型のものである。この凹線文は，瀬戸内系の土器の影響を受けたと思われる日向地方の外来系土器の指標となっているもので，宮崎平野で出土している透かし孔のある器台にも凹線文が見られる。この形の器台が川骨遺跡など北薩地域に伝播した時期には凹線文が消失しており，在地の土器の器形として定着しているものと思われる。

<線刻土器>

川骨遺跡の土器集中遺構５からは，胴部下半に「十」が焼成後線刻される壺が９点出土している。調整・胎土・色調に他の土器との違いは見られない。

南九州（鹿児島県・宮崎県）において，線刻土器（絵画・記号土器）が出土しているのは，46遺跡308点であり，そのうち,「十」印が線刻されている土器が出土している遺跡は，９遺跡である。南九州の線刻土器は弥生時代後期～古墳時代初頭にわたり，特に弥生時代後期後半～終末期に位置づけられるものが大半であり，川骨遺跡から出土した線刻土器もこの時期と一致する。同様の土器は，宮崎平野，都城平野においても確認されている。また，宮崎平野からの流れをくむと考えられる円形透かし孔のある鼓形器台が出土している点，熊本の免田式土器に代表される重弧文の長頸壺も出土している点から,「他地域の影響を受ける環境にある遺跡で絵画土器や記号をもつ土器が出土する点も近畿地方から北部九州のありかたと同様である」（合田2007)。また，近畿地方から北部九州では，多くは包含層から出土し，特別な出土状況を示さないものが大半であるが，南九州では竪穴住居跡や貯蔵穴などの遺構から出土する場合が多い。川骨遺跡においては，竪穴住居跡などの遺構は確認されなかったことから，他の遺跡で見られるような遺構の廃棄に伴う祭祀行為ではなく，川辺という「場所」での祭祀行為が行われた後に廃棄されたのではないかと考えられる。記号土器と共に出土した土器の量などからもこれは，南九州に特徴的であると考えられている竪穴住居跡などの小単位での祭祀ではなく，集落単位での祭祀である。

川骨遺跡の線刻土器に特徴的な点は，焼成後に線刻されているということ，壺の胴部下半に線刻されていることである。弥生時代終末期に相当すると考えられている，鹿児島県指宿市南摺ヶ浜遺跡の墓やその周辺から出土した土器は，胴部下半に焼成後穿孔を施してある。川骨遺跡は墓地という性格をもつものではないと思われるが，焼成後穿孔が施される場所と同じ位置に焼成後線刻が施されるという点は注目される。

つぎに，北薩地域で出土している線刻土器について比較してみる。外川江遺跡においては，９点の絵画土器（甕１点，壺８点）が報告されている。大島遺跡では，線刻土器が１点（壺）報告されている。また，楠元遺跡でも２点の線刻土器（甕）が出土している。外川江遺跡は弥生時代後期の土器に龍と思われる絵画が施されている。大島遺跡の線刻土器の壺も弥生時代後期に相当する。楠元遺跡は１点は中津野式古段階，もう１点は中津野式新段階に相当する。外川江遺跡の龍と思われる絵画土器は，胴部片のみで時期を特定することは困難であるが，共伴している遺物から，弥生時代後期から中津野式古段階に相当する。線刻土器の甕に関しては，中津野式新段階である。近畿地方・北部九州では，絵画土器から線刻土器へと移行していくが，北薩地域では，宮崎平野同様，弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて絵画土器と線刻土器が併存していたということになる。

以上，器台と線刻土器から川骨遺跡は，弥生時代～古墳時代にかけて，他地域の影響をうけた土器を製作・使用した，祭祀的な性格をもつ遺跡であったということができる。

線刻土器出土遺跡

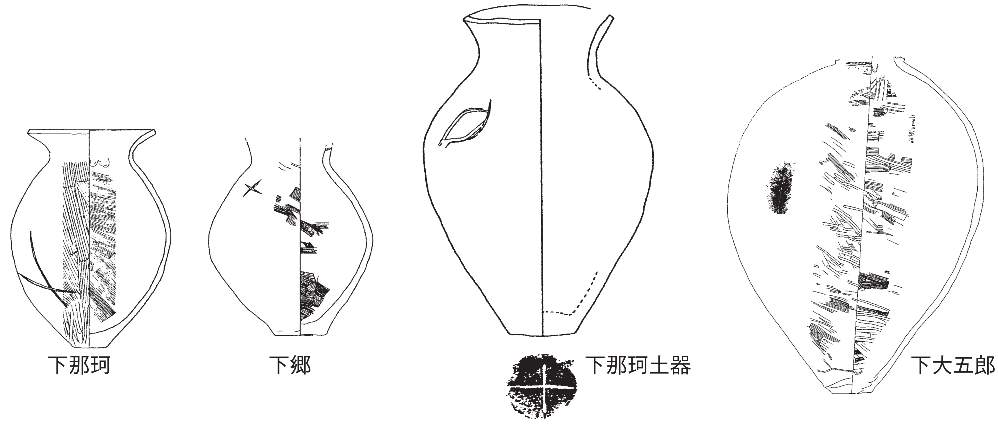
鹿児島県内線刻土器出土遺跡

	遺跡名	市町村	点数
1	王子遺跡	鹿屋市	1
2	名主原遺跡	鹿屋市	8
3	橋牟礼川遺跡	指宿市	3
4	南丹波遺跡	指宿市	1
5	南摺ヶ浜遺跡	指宿市	2
6	成川遺跡	指宿市	1
7	松之尾遺跡	枕崎市	2
8	古市遺跡	南九州市	1
9	堂園Ｂ遺跡	南九州市	1
10	持躰松遺跡	南さつま市	1
11	万之瀬川河床遺跡	南さつま市	?
12	松木薗遺跡	南さつま市	1
13	諏訪前遺跡	南さつま市	1
14	中津遺跡	日置市	1
15	池野頭遺跡	日置市	1
16	山下掘遺跡	鹿児島市	1
17	武Ｃ遺跡	鹿児島市	1
18	鹿大構内遺跡	鹿児島市	1
19	保養院遺跡	姶良市	1
20	大島遺跡	薩摩川内市	1
21	楠元遺跡	薩摩川内市	2
22	川骨遺跡	薩摩川内市	9
23	外川江遺跡	薩摩川内市	9
24	中町馬場遺跡	薩摩川内市	2

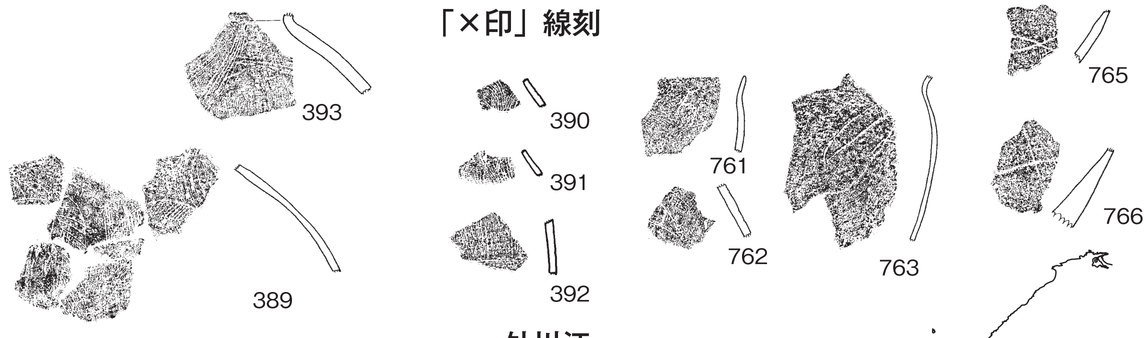
宮崎県内線刻土器出土遺跡

1	赤坂遺跡	川南町	6
2	志戸平遺跡	新富町	12
3	園田遺跡	新富町	6
4	下那珂遺跡	佐土原町	11
5	町屋敷遺跡	宮崎市	6
6	前田二月田遺跡	宮崎市	1
7	下郷遺跡	宮崎市	18
8	石ノ迫第２遺跡	宮崎市	23
9	間越遺跡	宮崎市	3
10	二月田遺跡	宮崎市	2
11	学頭遺跡	宮崎市	5
12	桜町遺跡	宮崎市	8
13	中岡遺跡	宮崎市	42
14	源藤遺跡	宮崎市	3
15	東宮遺跡	宮崎市	3
16	熊野第２遺跡	宮崎市	3
17	熊野原遺跡	宮崎市	23
18	前原北遺跡	宮崎市	2
19	陣ノ内遺跡	宮崎市	1
20	車坂第１遺跡	宮崎市	1
21	山下第１遺跡	宮崎市	1
22	浦田遺跡	清武町	1
23	須田木遺跡	清武町	4
24	福神屋敷遺跡	清武町	1
25	加納遺跡	清武町	4
26	白ヶ野第１遺跡	清武町	1
27	上の原第一遺跡	清武町	2
28	梅木原遺跡	小林市	1
29	水落遺跡	小林市	1
30	城ヶ尾遺跡	都城市	1
31	山田第１遺跡	都城市	4
32	丸谷第１遺跡	都城市	5
33	下大五郎遺跡	都城市	4
34	中大五郎遺跡	都城市	9
35	今房遺跡	都城市	8
36	平田遺跡	都城市	1
37	星原遺跡	都城市	3
38	加治屋Ｂ遺跡	都城市	3
39	坂元Ｂ遺跡	都城市	12
40	馬渡遺跡	都城市	2
41	祝吉遺跡	都城市	7
42	大田井丘遺跡	串間市	2

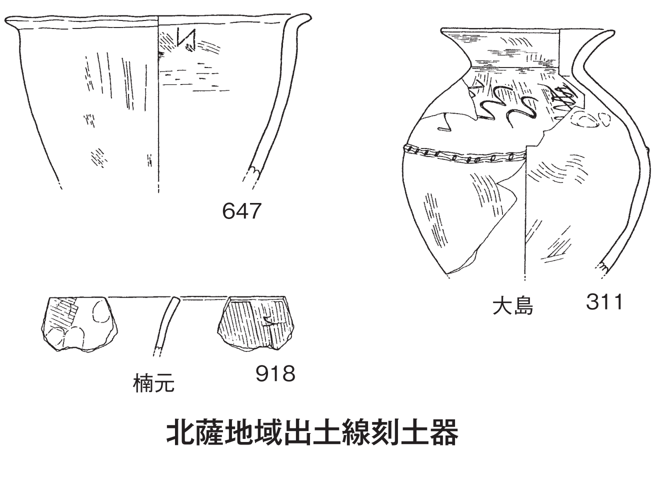
※網かけ部は，「×」印の線刻土器が出土している遺跡



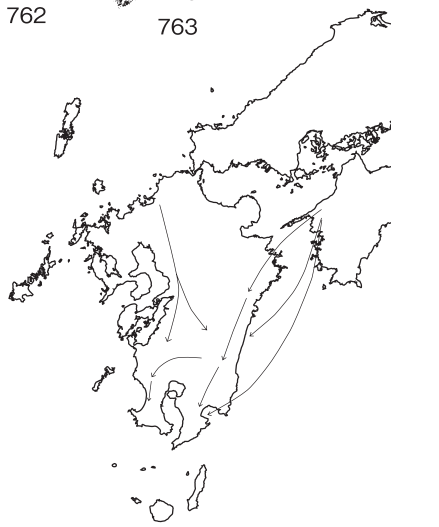
「×印」線刻



外川江



北薩地域出土線刻土器



土器の伝播ルート

※番号は各報告書中のもの

2　中世～近世の遺構について

(1) 中世～近世の遺構と歴史的記述

高江町郷土史によると,「(白浜) 堤防を構築して之に添い四十八戸の士族が此に居住し士族屋敷といつて一戸五畝歩ずつを配当されて居たところ弘化二, 三年の頃川内川氾濫堤防決潰のために大方今の峯下方面に転家したということである」(高江郷土史 1953) とある。白浜堤防とは，猪子岳から川骨遺跡，八間川にかけて築かれている堤防である。川骨遺跡の12,000㎡という範囲に凝灰岩を組んで作った井戸が3か所検出されたことや，布基礎，石垣などの遺構も検出されたことから，川骨遺跡の近世遺構跡はこの記述にあるように士族屋敷の一部であると考えることができる。

川骨遺跡で検出された掘立柱建物跡1～14を，本文中において建物の軸方向からタイプ1 (掘立柱建物跡1～7) とタイプ2 (掘立柱建物跡8～14) に分類した。これらの建物跡と周辺の遺構の方向を考え合わせると，D・E－13区で検出された石垣，F・G－14・15区で検出された石列と同じ方向であるのは，タイプ2である。このことからタイプ2の建物跡群は石垣・石列と同時期に存在していたと考えられる。石垣・石列の遺構内出土遺物からその年代を推測すると，18世紀代～19世紀である。この時期は，川骨遺跡の近世の遺物量が最もピークに達する時期であり，鍛冶炉跡が稼働していた年代とも重なる。

タイプ1の年代について考えてみると，タイプ2の建物跡と切り合っているものもあるため，同時期のものとは考えにくい。柱穴内の出土遺物などからみると，タイプ1は18世紀以前の建物跡群である可能性があると言える。掘立柱建物跡2の柱穴内から出土した土師器の小皿は底部糸切りで，復元口径7.8㎝，底径5.5㎝であり，13世紀頃の遺物である。また，掘立柱建物跡6の柱穴内から出土した布目瓦は古代の遺物であるが，焼き歪みしており，実際に瓦として使用されてはいなかったと思われる。さらに，タイプ1を柱穴間の距離で分けるとさらに2時期に分けることができる。掘立柱建物跡1・2・4・6に関しては，柱穴間が約6尺であるといえるため，この建物跡は古代～中世前半に比定することができる。掘立柱建物跡3・5・7は，柱穴間が約7尺であり，中世後半以降の建物跡である。

(2) 鍛冶炉跡について

2地点において，2つのタイプの鍛冶炉跡が検出された。鍛冶炉とは，鍛冶に用いられる炉＝火床のことである。古代では地面を浅く掘り窪めて粘土を張ったものが多く，その上に小割りした木炭を積み，鞴からの送風で燃焼させて，鉄塊系遺物や鉄器などを赤熱する目的に用いる。鍛冶炉内部から鉄滓などが出土しているわけではないが，周辺からは椀形滓などが出土しているため，川骨遺跡内で鍛冶を行っていた可能性は高い。しかし，この遺構を周辺のピットとの並びを考慮した時に，掘立柱建物跡の柱穴としての可能性も考えられる。周辺に焼けて硬くしまった部分や炭化物が散乱している部分があったので，消失家屋の一部であった可能性も考えられる。

(3) 水田遺構について

川骨遺跡の3地点，低湿地部分において水田が確認された。Ⅱ層，Ⅲ層は，近世～近代にかけての水田であると思われる。Ⅳb①層はイネのプラントオパールは検出されたものの，密度が低いことから水田断定することは困難である。Ⅳb②層は，時期は特定できないものの，植物珪酸体分析の結果から水田として利用されていた可能性は高い。Ⅳc層以下に関しては，土壌がグライ化して

いる。グライ土壌や粗粒グライ土壌に分布する水田は乾田，または半湿田で，水稲は根腐れを起こしやすく収量が低い。このため排水路の整備や暗渠等の設置によって乾田化をはかる必要がある。Ⅳｃ層以下において水田に伴う畝や水口等の施設は確認されず，植物珪酸体分析においても，稲などのプラントオパールは検出されなかった。このことから，Ⅳｃ層以下の低湿地土層は，水田層である可能性は低いと考えられる。

（4） 中世～近世の出土陶磁器について

中世～近世の出土遺物については，1～4区のⅡ～Ⅳａ・ｂ層において総数約10,600点出土した。中世と近世の時代区分は層位的には困難で，どの層からも混在して出土した。

中世に相当する遺物は，白磁・青磁・青花・中国産陶器等の輸入陶磁器，瓦質土器，瀬戸・美濃の国産陶器，滑石製石鍋等が，近世に相当する遺物は，肥前陶磁器，薩摩焼等が出土した。その他，土師質土器，土製品等も出土している。

出土遺物の分類，編年にあたっては，次の資料を参考とした。

森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」 1992『貿易陶器研究№2』日本貿易陶磁学会
上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」　〃
小野正敏「15～16世紀の染付碗，皿の分類と年代」　〃
太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡ＸⅤ―陶磁器分類編―』
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
九州近世陶磁学会 2006『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通―九州編―』

出土遺物の年代は，中世後期の15世紀から近代まで連綿と続くが，15，16世紀のものは少なく，そのほとんどは，18世紀後半から幕末，近代の資料である。近代の資料については，資料価値が高いと思われるものについて掲載した。

時代ごとの出土遺物の組成については，中世後期に相当する15，16世紀代は，出土量は総数約360点と多くはない。主なものとしては，抉り高台の白磁皿，龍泉窯系青磁で外面に稜を持たない蓮弁文や剣先蓮弁文，雷文帯が描かれる椀等が見られるほか，香炉や盤も出土している。青花は，景徳鎮窯系及び漳州窯系の碗や皿等が見られ，蓋物になると思われる資料（第102図248）も1点出土している。他に，中国産陶器の壺と思われる資料が出土しているほか，瓦質土器の火鉢も出土している。国内産陶器としては，瀬戸・美濃産かと思われる天目碗や，やや年代はのぼるが，13世紀代と思われる瀬戸の水注（註）が出土している。

川骨遺跡の中世後期では，遺跡周辺を支配する階層の人が生活していた可能性が考えられる。

近世の17世紀代については，食膳具において，肥前陶器の碗や皿が中心を占めるが，出土量は多くない。16世紀末から17世紀初頭に相当する胎土目段階の碗や皿，鉄絵の大皿，17世紀前半の砂目段階の皿，17世紀後半～18世紀初頭に相当する京焼風陶器の碗や内野山産の碗や皿が見られる。薩摩産の白薩摩も少量ではあるが見られ，特に注目すべき資料として，堂平Ⅱ期に相当する白薩摩の碗が出土している。堂平窯産白薩摩の碗は景色として正面に鉄釉を流しかける。本遺跡からは溝状遺構1内から，口縁部は欠損しているものの，この碗と思われる資料が出土した（第86図

90)。遺跡の性格を考えるうえで重要な資料であろう。調理具・貯蔵具では17世紀前半の肥前産擂鉢等が見られるが，薩摩産の陶器も早くから流通しており，17世紀初頭の苗代川系串木野窯産の可能性が考えられる徳利（第121図147）が出土している。また，苗代川系堂平窯産と思われる擂鉢，甕，壺等も出土している。しかし，串木野窯産や堂平Ⅰa期（17世紀前半）のものは非常に少なく，Ⅰb期（17世紀中葉）からⅡ期（17世紀後半）にかけての製品が多い。

18世紀代については，食膳具において，引き続き肥前陶器の碗や皿が主流を占め，18世紀前半にみられる内野山産の呉器手碗や，刷毛目唐津の碗や皿が目につく。また，肥前磁器も18世紀に入ると本格的に流入し始め，手描きやコンニャク印判の五弁花が描かれた丸碗や朝顔形碗，中皿等が見られる。18世紀後半には，波佐見産のくらわんか碗等の大量生産された製品が急増する。一方で，肥前産の上手の碗や大皿等も少量ではあるが見られる。薩摩産陶器は龍門司系の碗が18世紀後半頃から見られるようになる。磁器については1780年代に入り，見られるようになるが，その量はまだ少ない。調理具・貯蔵具では，苗代川系の片口・鉢・擂鉢・土瓶・甕・壺等がそのほとんどを占める。

19世紀代については，食膳具は，1780年代以降，肥前系磁器生産技術を導入して始まった薩摩磁器（端反碗）が肥前磁器を上回る割合で出土している。調理具・貯蔵具についても苗代川産の擂鉢・甕・壺等がほとんどを占める。

本遺跡におけるこのような陶磁器の組成・出土傾向に対して，渡辺芳郎氏（鹿児島大学法文学部教授）から，栫城遺跡の郷士年寄屋形跡（いちき串木野市）出土の陶磁器に類似し，両遺跡が同じ陶磁器流通圏に存在した可能性が考えられるとの御指導を賜り，さらに，次の相違点についても御教示を得た。①本遺跡では，郷士年寄屋敷跡にみられた京焼色絵陶器や肥前の色絵磁器，在地産の白薩摩が少ないこと。②郷士年寄屋敷跡で大量に出土した植木鉢が少ないこと。③郷士年寄屋敷跡では堂平Ⅰa期の製品も一定量見られたが，本遺跡では少ない。④鹿児島城下との比較として清朝磁器がないこと。

また，これらの相違点から次のような点が考えられるとの御教示を受けた。①については，伝承から本遺跡には士族が居住していたとされているが，この士族は，郷士年寄という地方最高クラスの身分階層よりやや低い身分の郷士層であった。②については，屋敷の付帯施設として広い庭園を所有しているか否かは，その居住者の身分によるところが大きい。③・④については，流通によるものであるのか，身分差によるものであるのか判然としない。

そのほか，郷士年寄屋敷でみられた，組み物の碗・皿が，本遺跡ではほとんどない点も，郷士年寄との身分差，階層差を表しているものと思われる。

一方で，織部好みの沓茶碗風の茶碗（第378図114）や，中国産もしくは薩摩産と思われる茶入（第133図533）等の茶道具や，堅野系の土瓶（第120図434・435），三島手象嵌の土瓶蓋（第119図422），徳利（第121図445），白薩摩の碗や小坏，子ども用の玩具でお飯事道具と思われるミニチュアの碗・小杯・鉢・擂鉢（第113図366・367，第136図538・539 ）等，上級階層でなければ所有できないと考えられる資料も出土している。

本遺跡から出土した中世～近世の陶磁器は，年代の違いや，社会的階層の差，地域差による陶磁

器の組成の違いを解明するうえで，貴重な資料である。

註　世界陶磁　中世　P.183　右下　158　瀬戸灰釉印花文手付水注に類似すると思われる。

（佐賀県九州陶磁文化館　大橋康二氏の御教示による。）

引用参考文献

鹿児島県企画部開発課　1974　『川内』鹿児島地域開発地域土地分類基本調査

鹿児島県教育委員会　1975　『薩摩国府跡・国分寺跡』

1978　『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（9）

1980　『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（13）

1984　『外川江遺跡・横岡古墳』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（30）

鹿児島県知覧町教育委員会　2000　『厚地松山製鉄遺跡』鹿児島県知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書第 9 集

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003『楠元・城下遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（57）

2005『大島遺跡』　〃　（80）

2006『堂平窯跡』　〃　（106）

2009『南摺ヶ浜遺跡』　〃　（144）

2010『栫城跡』　〃　（155）

合田幸美　2007　「南九州の弥生絵画と記号」『日向・薩摩・大隅の原像－南九州の弥生文化－』

高江邑教育委員会　1953　『高江村郷土史』

中村直子　1987　「成川式土器再考」『鹿児島大学考古』第 6 号

1993　「中津野式土器に表れる地域色」『鹿児島考古』第 27 号

春成秀爾　1991　「絵画から記号へ－弥生時代における農耕儀礼の盛衰－」『国立歴史民族博物館研究報告』第 35 集

都城市教育委員会　1996　「中大五郎第 2 遺跡」『都城市文化財調査報告書』第 34 集

宮崎県埋蔵文化財センター　2004　『下那珂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 90 集

宮崎市教育委員会　1998　『二月田遺跡・芋字遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 35 集

1999　『郷遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 41 集

4　遺跡の残存状況

今回の発掘調査の成果および，歴史・地理的環境から，調査対象となった川骨遺跡の範囲の周辺にはさらに遺跡が広がる可能性が考えられる。

川骨遺跡においては，Ⅴ層を弥生時代～古墳時代の包含層として扱った。土器集中遺構が検出された2地点は川内川と，川内川が諏訪山に沿って流れる細い支流とに囲まれ，遺跡の西側から八間川にかけて，川骨遺跡と同じような地形が続いているとすれば，同時代の土器集中遺構が存在する可能性が考えられる。現在の地形・用水路の配置およびⅤ層上面の検出状況から考えると，川内川は現在よりも80～100ｍほど南側の位置を流れており，支流が諏訪山の裾をめぐって市道付近を流れていたと考えられ，自然科学分析の結果や，川骨遺跡周辺の江の口部落で昭和40年代に井戸を掘るために地表面から5ｍほど掘り下げたところで多量の木片が出土したということから考えると周辺は湿地としての様相を呈していたと思われる。このことから，自然堤防のラインに沿って遺跡の東西から，弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃の遺構および遺物が検出される可能性がある。

また，川骨遺跡周辺は江戸時代に武家屋敷があった場所であり，現在でも当時のものと思われる石垣が残っている家屋が多くある。それらの場所には，川骨遺跡と同様に中世～近世の遺構および遺物が埋蔵されている可能性が高い。加えて，今回4地点とした場所は残存状況は悪いが，遺構が検出されている。このことから，遺跡の東西にある，現在水田として利用されていない土地に関しても，川骨遺跡で検出された溝の続きなどが残存している可能性があると考えられる。

以上のことから，今後は周知の遺跡として遺跡登録されていない場所についても，諸開発に伴い事前調査を行う必要がある。

遺跡の残存状況

西　之　城　遺　跡

第４章　西之城遺跡の調査

第１節　調査経過（日誌抄）

調査経過は，日誌抄をもってこれに変えることとしたい。

平成 20 年 12 月～平成 21 年３月（発掘調査）

・遺跡内環境整備

・Ａ－３区，Ｂ－２･３区，Ｃ－２･３区，Ｄ－３区，Ｅ－２･３区，Ｆ－２区，Ｇ－２･３･４区，
　Ｈ－３･４区，掘り下げ。

・遺物出土状況及び調査範囲平板実測。

・土層断面図作成。

・調査終了区の重機による埋め戻し。

第２節　調査の方法と成果

１　発掘調査の方法

発掘調査は，道路建設用センター杭 No.240 と No.245 を基準に，10 ｍ間隔の区画を設定し，東から西へ１･２･３･４･･･列，北から南へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・・・列と呼称した（第２図)。本調査は，3 地点において実施した。19 トレンチを拡張し，表土を重機で取り除いた後，人力でⅡ層からⅢ層までを掘り下げた。

遺構は検出されなかったが，Ⅱ層において，中世後半から近世に相当する遺物が出土した。

２　整理作業の方法

整理作業については，平成 22 年４月～平成 23 年３月まで，南九州西回り自動車道整理作業事務所において行った。整理作業の工程は次の通りである。

４月・５月　図面整理，注記，接合，選別，分類

６月・７月　土層断面作成，周辺地形図及びグリッド配置図作成，実測，トレース，
　　　　　　レイアウト

８月・９月　観察表作成，原稿執筆，写真撮影

３　出土遺物の分類

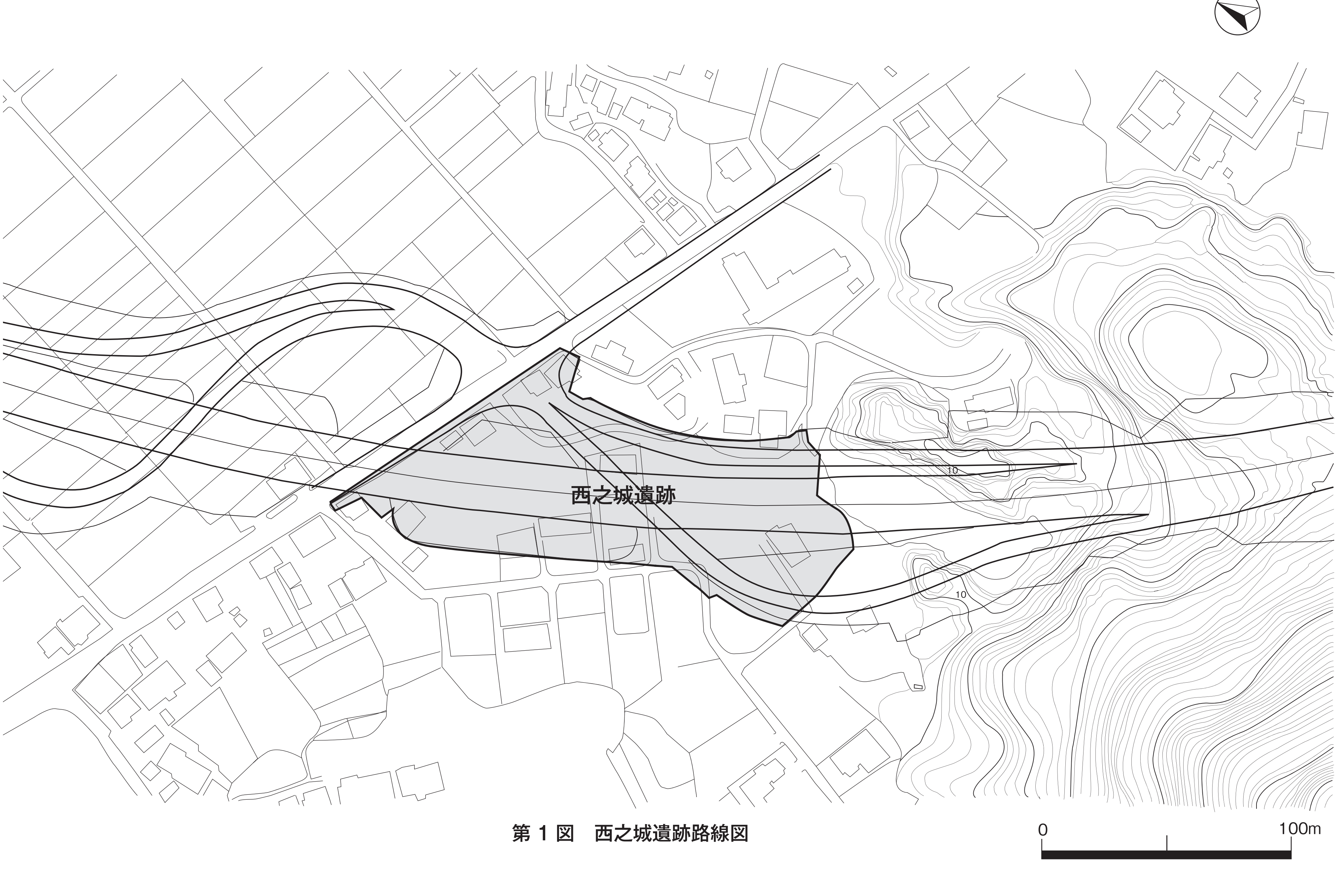
出土遺物は，Ⅱ層から，中世後半から近世に相当する陶磁器が出土した。Ⅱ層内での文化層ごとの細分化は困難であったため，掲載にあたっては，種別や器種，製作方法等を参考に時期設定を行った。

中世相当の遺物　糸切り底の土師器，瓦質土器，白磁，青磁，青花

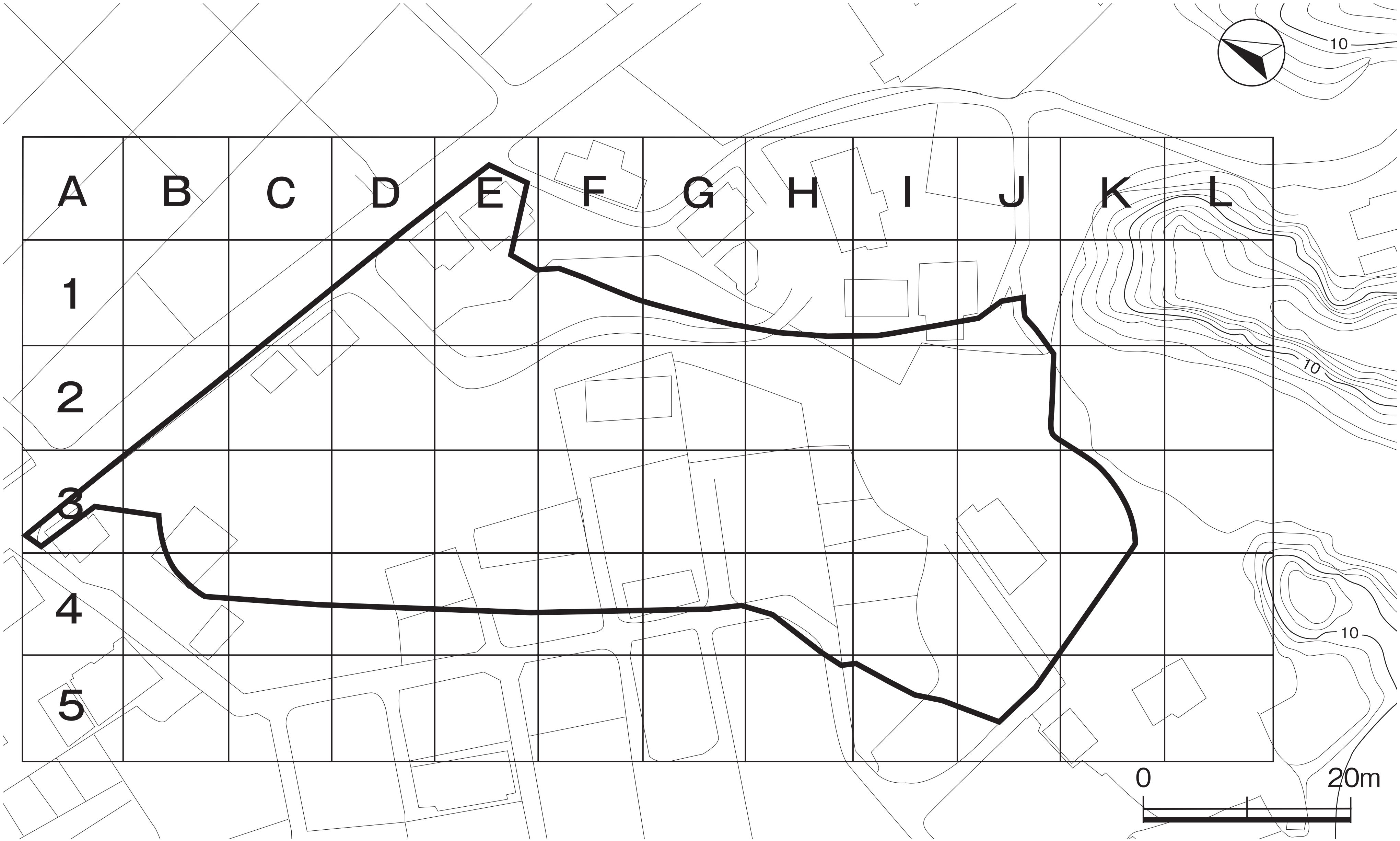
近世相当の遺物　肥前系陶器，土師質土器，簪，石臼

第３節　層序

西之城遺跡の層位は，以下のように基本的に３層に分層できる。Ⅰ層は，耕作土及び宅地造成土



第１図　西之城遺跡路線図



第２図　西之城遺跡周辺地形図およびグリッド配置図

である。Ⅱ層は黒褐色の有機質を含む明褐色土層で，中近世の包含層である。Ⅲ層はシラスである。（第３・４図参照）

Ⅰ層	耕作土，宅地造成土	明赤褐色土
Ⅱ層	中近世の包含層	明褐色土
Ⅲ層	シラス	明褐色火山灰

第４節　調査の成果

１　中世～近世の調査

（1）調査の概要

３地点において，19トレンチを拡張して調査を行ったが，遺構は検出されなかった。

遺物はⅡ層で，中世から近世に相当する遺物が出土した。

（2）遺物

中世に相当する遺物としては，土師器，瓦質土器，白磁，青磁，青花が，近世に相当する遺物としては，肥前陶器，土師質土器，簪，石臼が出土した。

中世の遺物（第５・６図）

土師器

１～10は土師器である。すべて底部の切り離しは糸切りである。

１～３は皿である。器高2㎝未満のものを皿と分類した。1は体部が直線的に立ち上がるものである。2は口縁部がわずかに外反する。3は1・2に比べると口径が9㎝とやや大きいものである。内面の一部に煤が付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。

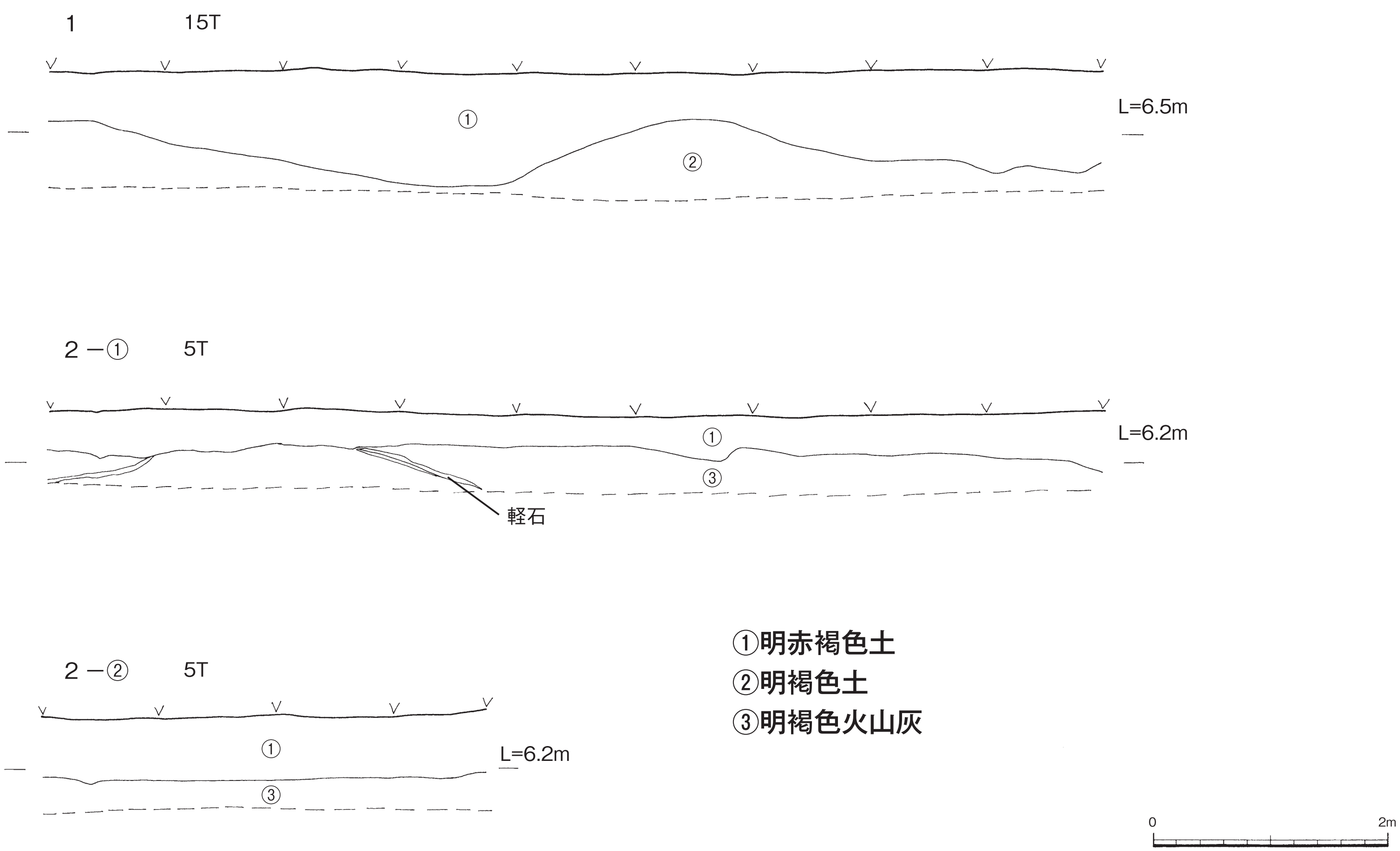
4・5は器高が2㎝以上のもので，坏として分類した。4は内底面が盛り上がるもので，外面体部下位はヘラケズリを施した後，糸切りされている。5は，体部がわずかに内湾しながら斜めに開く形状を呈するものである。

6・7は碗または坏の底部である。

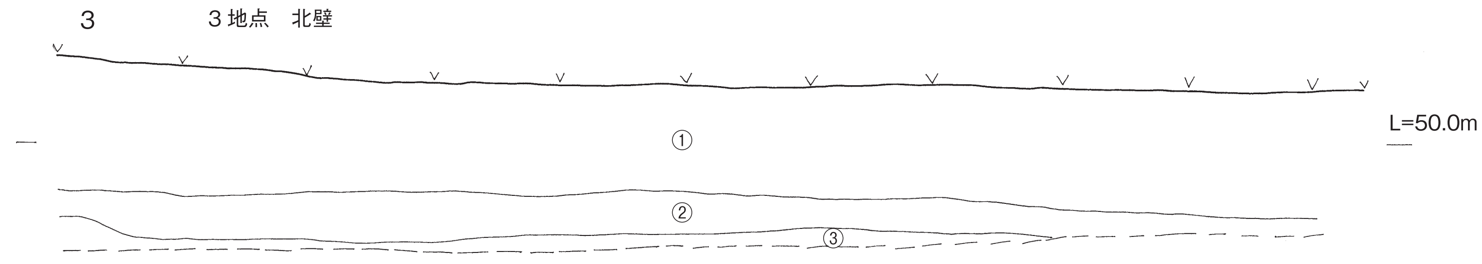
8は鉢である。体部は曲線的に立ち上がり，口縁部は強く内湾する形状を呈する。体部と底部の境は，糸切りの後ヘラケズリにより面取りされている。内外面とも赤色顔料が塗布されている。

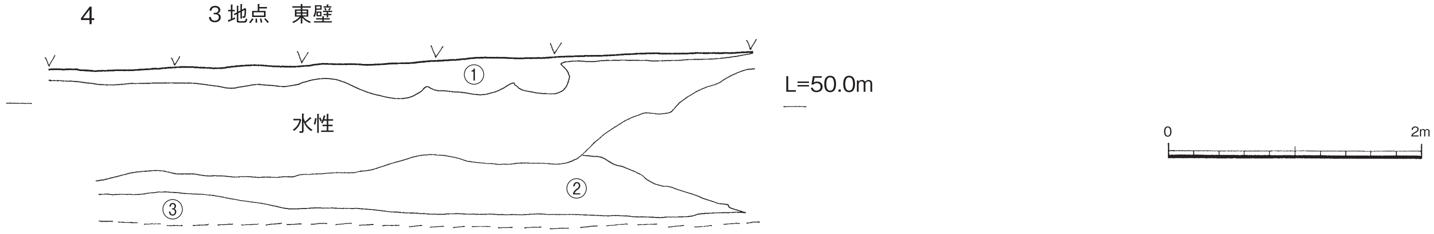
9・10は香炉である。9は糸切りで底部を切り離した後，体部と底部の境をヘラケズリで面取りし，その後3か所に脚をつけている。10は脚部分である。

11～14は瓦質土器である。11・12は擂鉢で，同一個体の可能性が考えられるものである。内面には5条1単位の擂り目が施される。13は鉢，14は深鉢形の火鉢である。13は蓋の可能性も考えられる。14は外面に○に十のスタンプが刻印されたものであるが，島津氏の家紋との関連はないものと思われる。

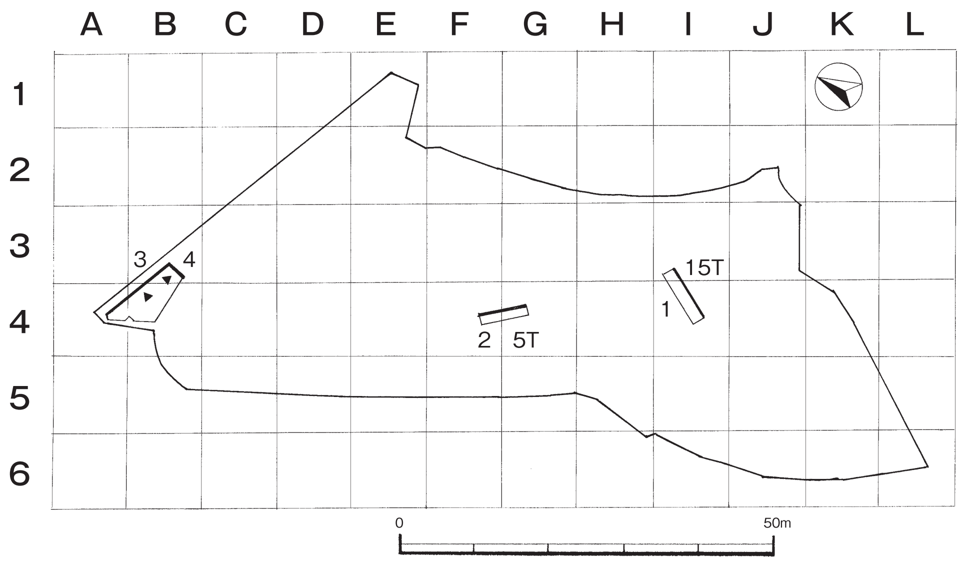

1
15T
①
②
L=6.5m
2－①
5T
①
③
L=6.2m
軽石
2－②
5T
①
③
L=6.2m
①明赤褐色土
②明褐色土
③明褐色火山灰
0
2m

第３図　土層断面図 1

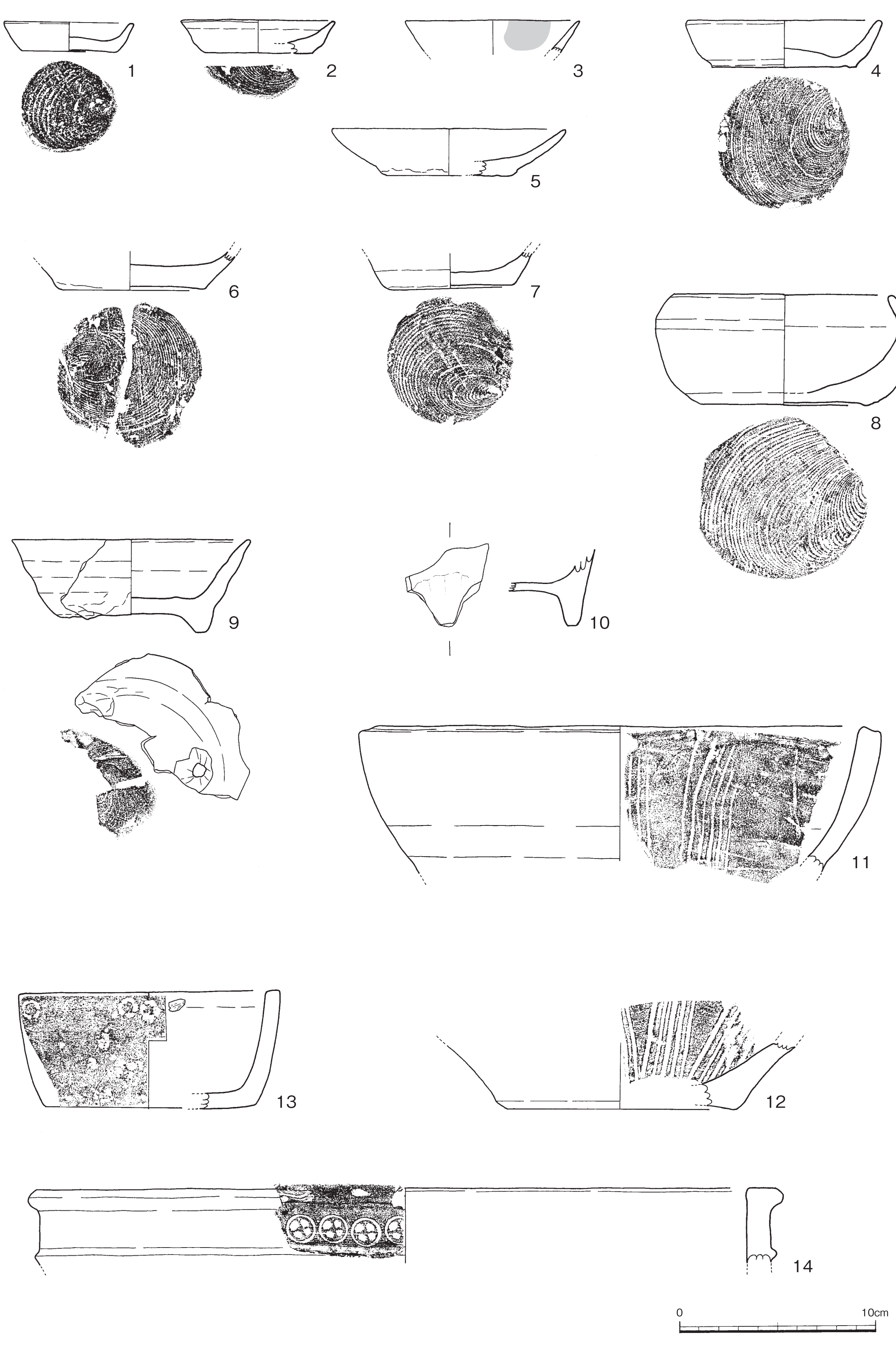




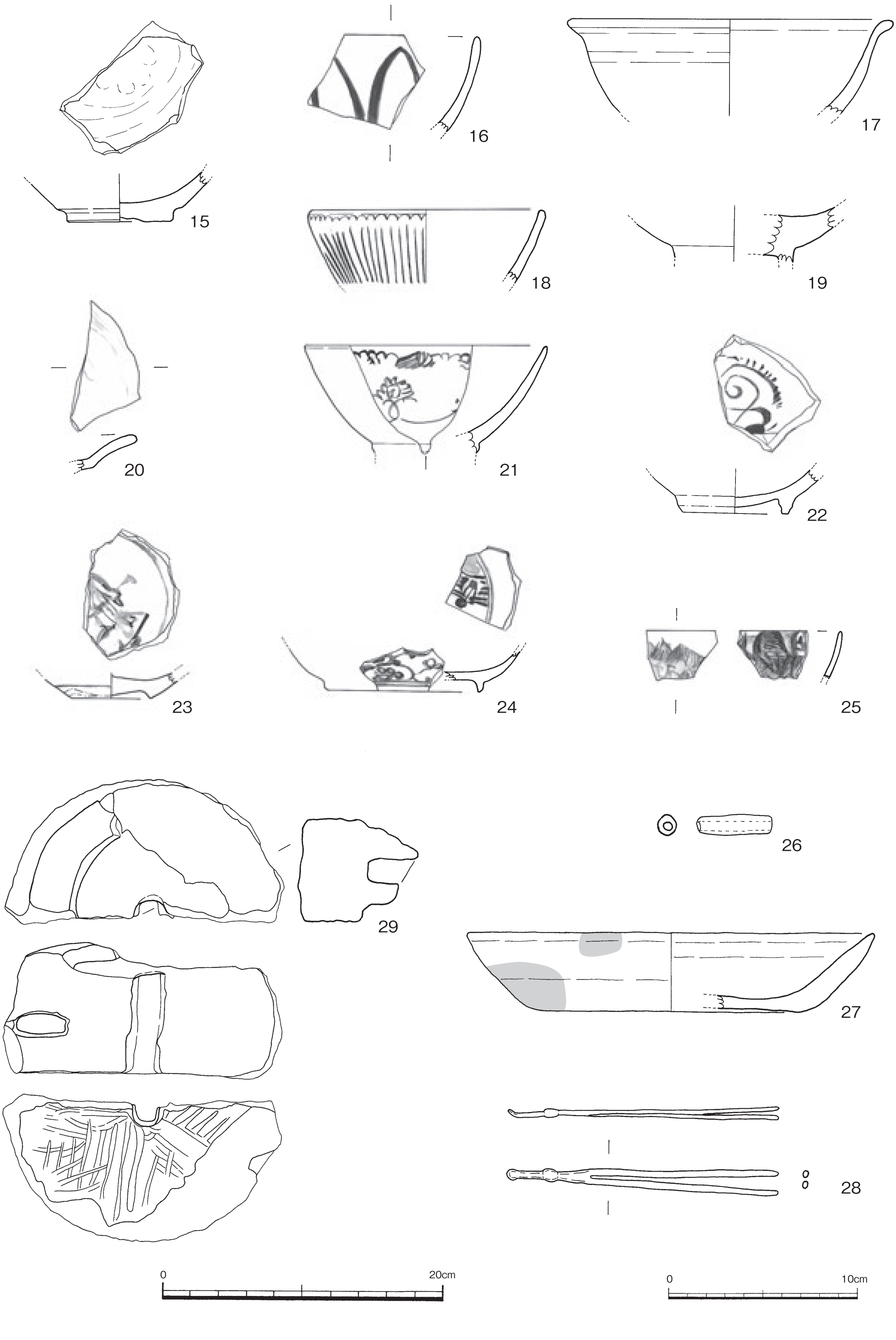
①明赤褐色土
②明褐色土
③明褐色火山灰



第４図　土層断面図２



第５図　中世～近世の出土遺物１



第６図　中世～近世の出土遺物２

白磁・青磁

15は白磁である。口縁部が欠損しているが，玉縁口縁になるものと思われる。外面の釉は腰部までかかり，以下は露胎する。

16～20は青磁である。16～18は椀の口縁部である。16は外面に蓮弁文が片彫りで描かれるが，蓮弁の中央に稜はみられない。17は口縁部が外反するものである。口縁端部は丸くつくられる。18は外面に線描連弁文が描かれるもので,剣頭が連弁の一部として意識されずに描かれている。19は椀の底部である。器壁は厚手の大振りである。高台内底の釉は輪状に掻き取られる。20は稜花皿である。

青花

21～24は青花である。21・22は蓮子碗である。21は漳州窯系のもので，呉須の発色が鈍い。22は景徳鎮窯系のものである。高台内底面中央に砂粒が付着している。 窯詰め時のものと思われる。23・24は皿である。 23は碁笥底を呈するものである。漳州窯系のものである。24は薄手で，欠損しているが端反口縁を呈するものと思われる。外面には唐草文が描かれる。景徳鎮窯系のものである。

その他の遺物

25は肥前陶器で，碗の口縁部である。褐色の素地の上に白泥により打ち刷毛目が施されるものである。

26は土製品の土錘，27は土師質土器の焙烙である。どちらも近世の範疇で取り扱ったが，中世の可能性も考えられる。27の底部の切り離しは不明で，切り離し後体部との境をヘラケズリにより面取りしている。

28は簪である。片端に耳かきがつくられている。

29は石臼である。石材は凝灰岩である。

挿図番号	掲載番号	出土区	取り上げ番号	層位	種別	器種	部位	色調	法量（cm） 口径	底径	器高	胎土 石英	長石	角閃石	その他	焼成	調整 外面	内面	備考
第5図	1	3地点	42	Ⅱ	土師器	皿	口縁～底部	赤褐色	6.5	4.8	1.5		○				ナデ	ナデ	底部糸切り
	2	3地点	90	Ⅱ	土師器	皿	口縁～底部	にぶい黄橙色	7.8	5.4	1.7		○				ナデ	ナデ	底部糸切り 赤色の石粒含む
	3	3地点	138	Ⅱ	土師器	皿	口縁～胴部	にぶい黄橙色	9.0	—	—		○				ナデ	ナデ	赤色の石粒含む
	4	3地点	44	Ⅱ	土師器	坏	口縁～底部	浅黄橙色	10.0	7.2	2.4		○				ナデ	ナデ	底部糸切り 赤色の石粒含む
	5	3地点	74	Ⅱ	土師器	坏	口縁～底部	浅黄橙色	12.0	6.6	2.4		○				—	—	底部糸切り 赤色の石粒含む
	6	3地点	137,118	Ⅱ	土師器	椀か？	口縁～底部	橙色	—	7.4	—		○				ナデ	ナデ	底部糸切り 赤色の石粒含む
	7	3地点	71	Ⅱ	土師器	椀か？	底部	浅黄橙色	—	6.5	—			○			ナデ	ナデ	底部糸切り
	8	3地点	131	Ⅱ	土師器	鉢	口縁～底部	(外)赤橙色 (内)浅黄橙色	11.0	8.6	5.6		○				ナデ	ナデ	底部糸切り 赤色の石粒含む
	9	19T	10,12	—	土師器	香炉	口縁～脚部	明黄褐色	12.0	7.0	4.7		○				ナデ	ナデ	
	10	3地点	97	Ⅱ	土師器	香炉	底部	橙色	—	—	—		○				ナデ	ナデ	

挿図番号	掲載番号	出土区	取り上げ番号	層位	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	胎土の色調	釉薬	施釉	時期	備考
第5図	11	3地点	41	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	24.8	—	—	浅黄橙色	—	—	—	12と同一個体
	12	3区	50	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	—	11.4	—	浅黄橙色	—	—	—	—
	13	3地点	114	Ⅱ	瓦質土器	鉢か？	13.3	10.8	5.9	浅黄橙色	—	—	16世紀代	口唇部に煤付着， 外面に印花文
	14	3地点	117	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	38.4	—	—	にぶい橙色	—	—	16世紀代	外面に印花文
第6図	15	8T	—	—	白磁	椀	—	5.4	—	灰白色	透明釉	内面と外面腰部まで施釉	—	
	16	3地点	96	Ⅱ	青磁	椀	—	—	—	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	15世紀代	龍泉窯 上田分類Ｂ群
	17	3区	72	Ⅱ	青磁	椀	17.2	—	—	灰色	青磁釉	残存部全面施釉	15世紀代	龍泉窯 上田分類Ｄ群
	18	8T	—	—	青磁	椀	12.6	—	—	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	16世紀代	龍泉窯 上田分類Ｂ群
	19	19T	20	—	青磁	椀	—	—	—	灰白色	青磁釉	残存部全面施釉	—	
	20	3地点	106	Ⅱ	青磁	稜花皿	—	—	—	灰褐色	青磁釉	残存部全面施釉	16世紀代	龍泉窯

挿図番号	掲載番号	出土区	取り上げ番号	層位	種別	器種	産地	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の色調	施釉	時期	備考
								口径	底径	器高					
第6図	21	3地点	152	Ⅱ	青花	碗	漳州窯	12.8	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	16世紀後半～17世紀初頭	
	22	3地点	142	Ⅱ	青花	碗	景徳鎮	—	5.6	—	灰白色	透明釉	高台脇～高台内面無釉	16世紀後半～17世紀初頭	砂目有り
	23	19 T	13	—	青花	皿	漳州窯	—	4.2	—	灰白色	白化粧土の上に透明釉	底部無釉	16世紀後半	碁筒底
	24	3地点	69	Ⅱ	青花	皿	景徳鎮	—	8.0	—	灰白色	透明釉	畳付き釉剥ぎ	16世紀後半	小野分類B群
	25	8T	—	—	陶器	碗	肥前	—	—		灰色	白化粧土にオリーブ黒の釉薬	残存部全面施釉	18世紀前半	内面打ち刷毛目

挿図番号	掲載番号	出土区	取り上げ番号	層位	種別	器種	色調	法量(cm)		備考
								長さ	厚さ	
第6図	26	3地点	148	Ⅱ	土製品	管状土錘	橙色	3.9	1.1	

挿図番号	掲載番号	出土区	取り上げ番号	層位	種別	器種	産地	法量（cm）			胎土の色調	時期	備考
								口径	底径	器高			
第6図	27	19T	6	ー	土師質土器	焙烙	ー	21.6	13.6	4.2	にぶい黄橙色	ー	外面・外底面に 煤付着
	28	8T	一括	—	金属製品	簪	—	—	—	14.4	—	—	耳かき付，重さ 9.21g 器高は全長
	29	3地点	一括	Ⅱ	石製品	石臼	—	—	19.4	7.3	—	—	石材　凝灰岩

第５節　総括

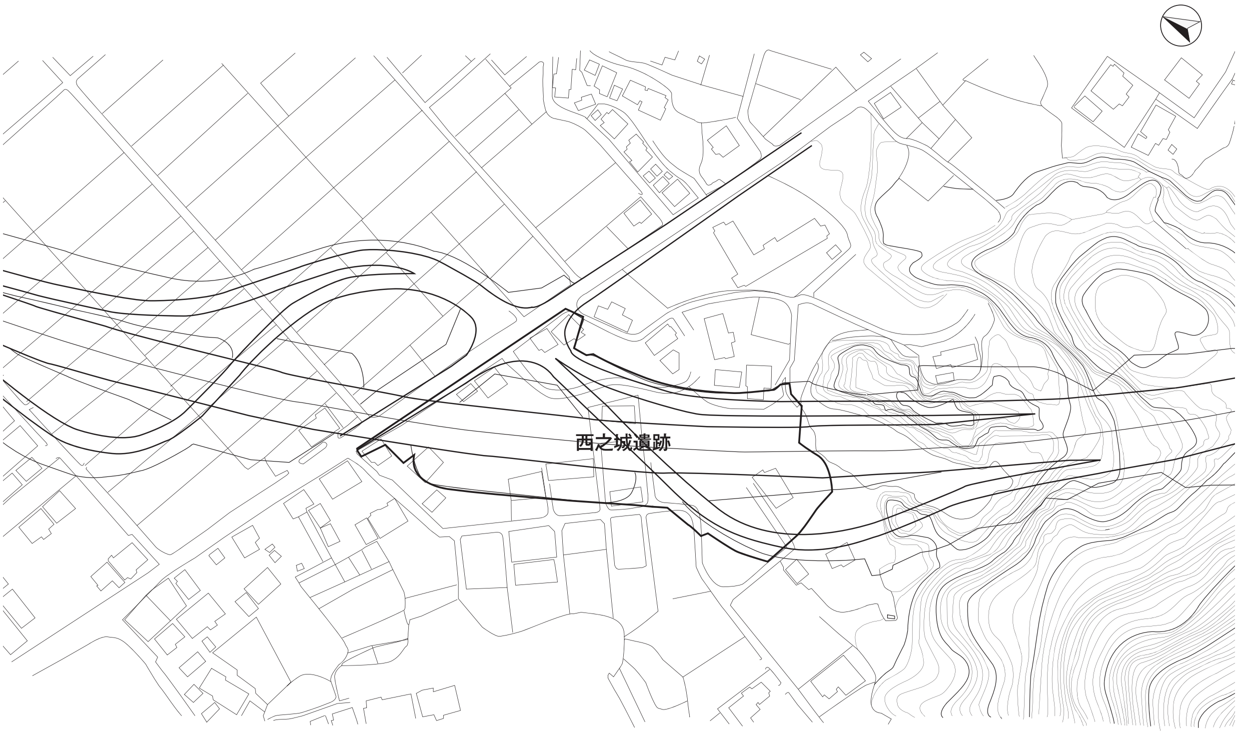
今回の調査では，遺構は検出されなかった。遺物は，第3地点のⅡ層において，中世～近世に相当する遺物が出土した。

中世の出土遺物については，11世紀後半から12世紀前半に相当する白磁椀が1点出土しているものの，青磁・青花については中世後半の5世紀代～16世紀代に相当する資料であり，遺跡の中心年代はこれらの年代に一致すると考えられる。

しかしながら，土師器をみると，ローリングを受けている資料等も見られ，原位置を留めていない可能性も考えられる。

近世については，遺物が少ないため詳細は不明である。

遺跡の残存状況については，本遺跡を含め西之城遺跡・東之城遺跡の範囲として捉えられているが，周辺遺跡はすでに消滅しており，遺跡は広がらないと考えられる。（下図参照）



遺跡の残存状況図

川　幡　遺　跡

第５章　川幡遺跡の調査

第１節　調査の経過（日誌抄）

平成 20 年度

2 月 9 日　調査のための環境整備。

2 月 10 日～ 17 日　グリッド杭設定，表土剥ぎ，先行トレンチ掘り下げ，土層断面実測。

2 月 18 日　棚田石組み及び周辺掃除，実測，写真撮影。

2 月 19 日　表土剥ぎ，Ｂ－５区　Ｉａ・Ⅱ層掘り下げ。

2 月 20 日～ 23 日　表土剥ぎ，Ｂ－５区　Ｉａ・Ｉｂ層掘り下げ，Ｂ－８･９　Ｉ・Ⅱ層掘り下げ。

2 月 24 日　Ｂ－５区　Ｉａ・Ⅱ層掘り下げ，遺物取り上げ，コンタ図作成。

3 月 4 日～６日　Ｂ－４･５区　Ｉ・Ⅱ層掘り下げ。

3 月 10 日　Ｂ－４･５区　Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。

3 月 11 日・12 日　Ｃ・Ｄ－３区　棚田石組み内面調査，重機による埋め戻し

平成 21 年度

11 月 4 日　調査のための環境整備。

11 月 5 日・6 日　Ａ～Ｃ―11 ～ 14 区，Ｉｂ層掘り下げ。

11 月 9 日～ 13 日　Ａ～Ｃ―11 ～ 14 区，Ｉｂ層，Ⅱ層以下掘り下げ。

調査範囲平板実測，写真撮影，重機による埋め戻し。

第２節　発掘調査の方法と成果

１　発掘調査の方法

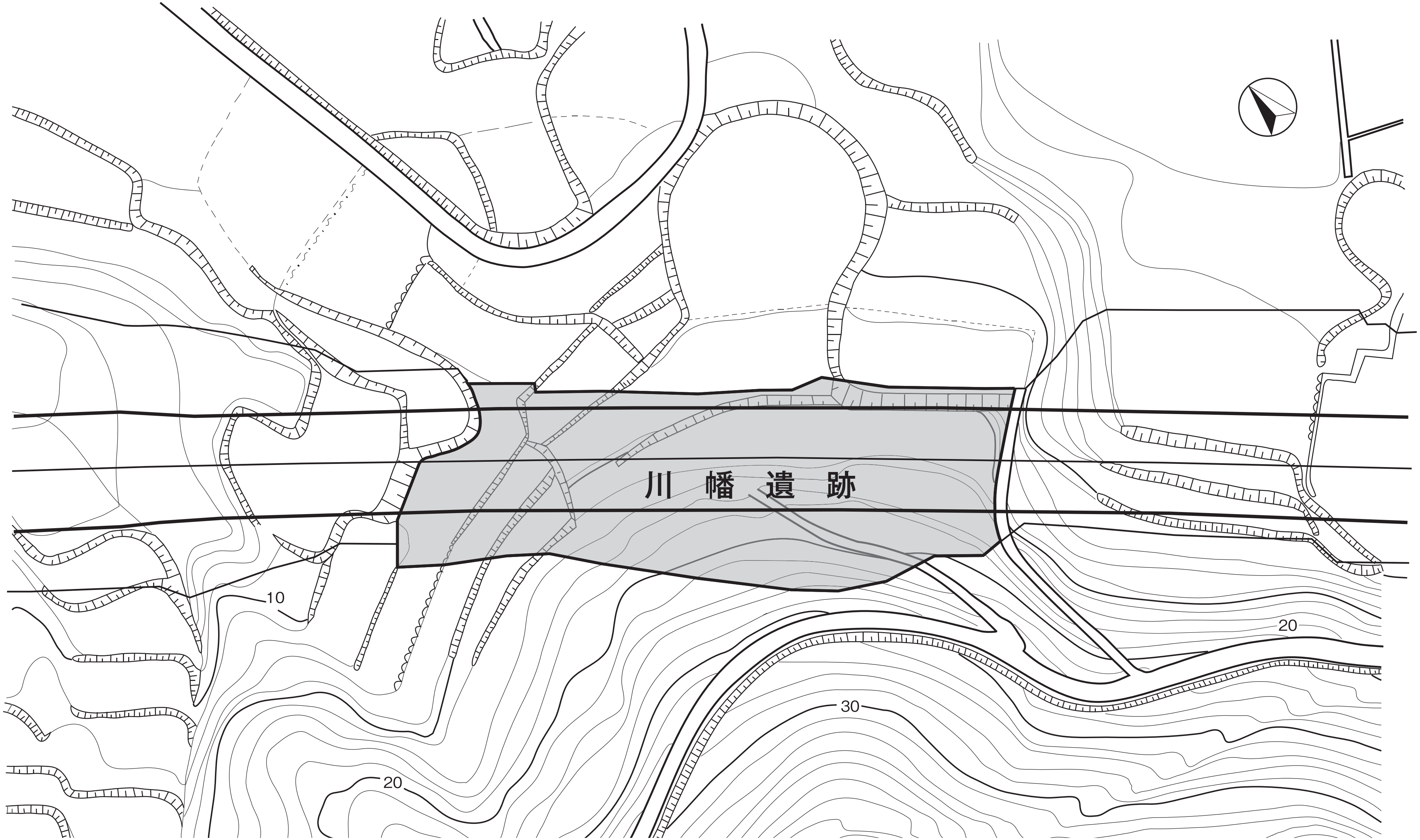
道路建設用センター杭 No.240 と No.245 を基準に，10 ｍ間隔の区画を設定し，西から東へ１･２･３･４・・・列，北から南へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・・・列と呼称した（第２図）。

平成 20 年度の調査は，調査区域内の草払い等の環境整備を最初に行った後，先行トレンチを７か所設定し，包含層の有無や広がりを把握した。表土は重機で取り除き，Ⅱ層からⅢ層までは人力で掘り下げた。その結果を踏まえ，Ｂ－４･5 区，とＡ･Ｂ－８･9 区の２か所において本調査を行った。表土は前述と同様に取り除き，Ⅱ層からⅢ層までは人力で掘り下げた。2 か所とも遺構は検出されなかったが，Ｂ－４・５区で包含層が確認され，古代の遺物が出土したので，写真撮影と図面作成を行い，記録保存を行った。また，幕末から明治初期にかけて構築されたという棚田が現在は耕作が行われていないものの，良好な状態で残存していたので，調査区内の石組みの写真撮影と図面作成を行い，記録保存を行った。

平成 21 年度の調査は，Ａ～Ｃ－ 11 ～ 14 区において実施した。表土を重機で除去し，Ⅱ層からⅢ層を人力で掘り下げたが，遺構・遺物は検出されなかった。

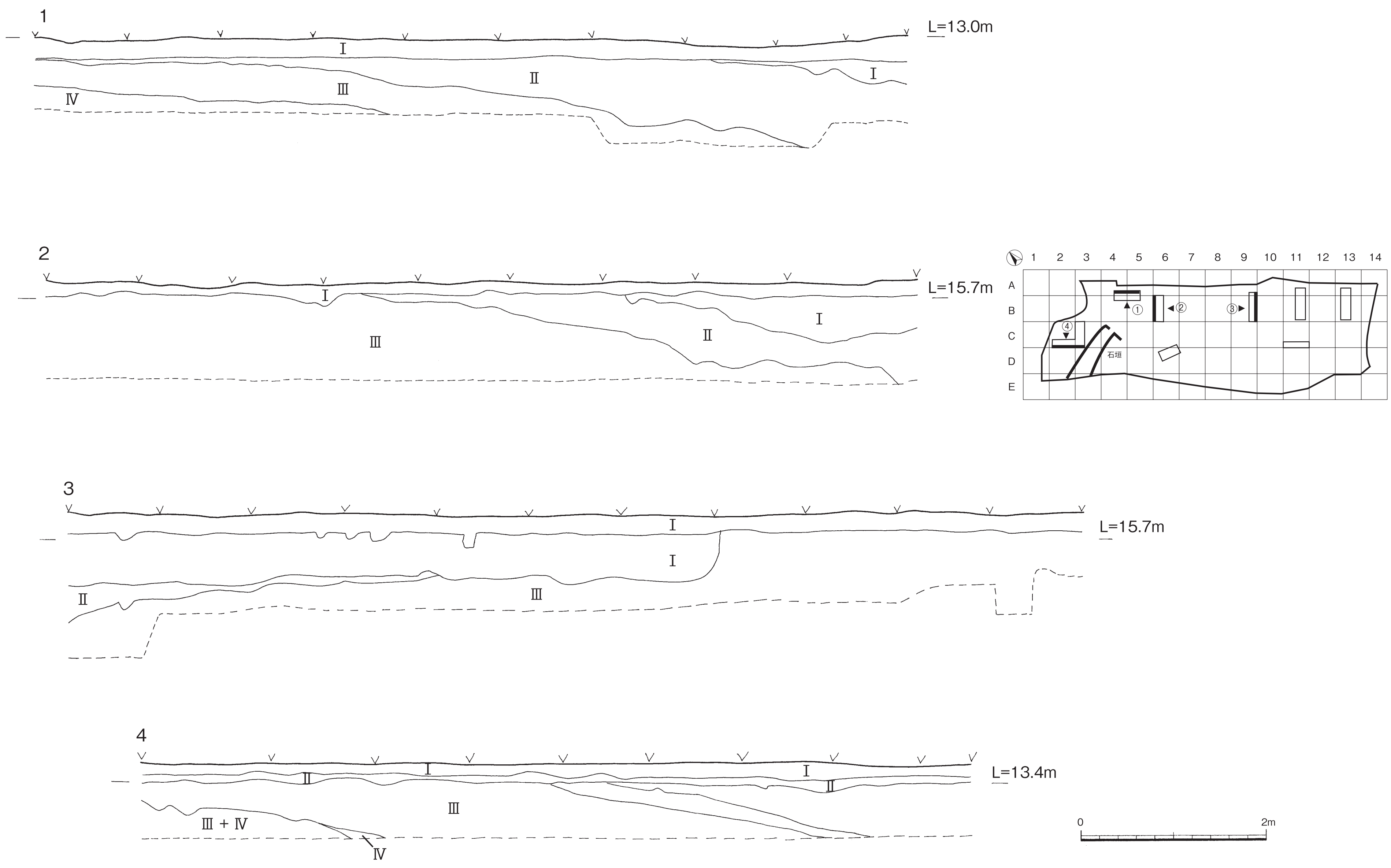
２　整理作業の方法

整理作業については，平成 22 年４月～平成 23 年３月まで，南九州西回り自動車道整理作業事務所において行った。整理作業の工程は次の通りである。



第１図　川幡遺跡路線図（S=1/1000）

第２図　川幡遺跡周辺地形図およびグリッド配置図


1
L=13.0m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
2
L=15.7m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
3
L=15.7m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
4
L=13.4m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅲ＋Ⅳ
Ⅳ
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14
A
B
C
D
E
石垣
①
②
③
④
0
2m

第３図　土層断面図

4月・5月　図面整理，注記，接合，選別，分類
6月・7月　土層断面図作成，周辺地形図及びグリッド配置図作成，実測，トレース，
　　　　　レイアウト
8月・9月　観察表作成，原稿執筆，写真撮影

3　出土遺物の分類

出土遺物は，Ⅱ層から，古代に相当する土師器，須恵器が出土した。また，Ⅰ層から，近世の陶器と古銭が出土している。分類は，時代と種別，器種をもとに行った。

第３節　層序

川幡遺跡の層位は基本的に4層に分層できる。Ⅰ層は棚田や畑として利用されていた旧耕作土である。Ⅱ層は上位にⅠ層の水田基盤と考えられる硬化した面が見られ，マンガン粒と礫を多く含む。下位は古代の遺物包含層である。Ⅲ・Ⅳ層は火山灰や安山岩が風化した埴土で，安山岩礫を多く含む。（第3図参照）

第４節　調査の成果

1　古代の調査

⑴　調査の概要

Ｂ－4・5区において，Ⅱ層より古代に相当する遺物が42点検出された。遺構は確認されなかった。

⑵　遺物

出土遺物は，総数42点で，古代に相当する土師器の椀・坏・高坏・甕，須恵器の壺が出土した。その中から，5点を掲載した。

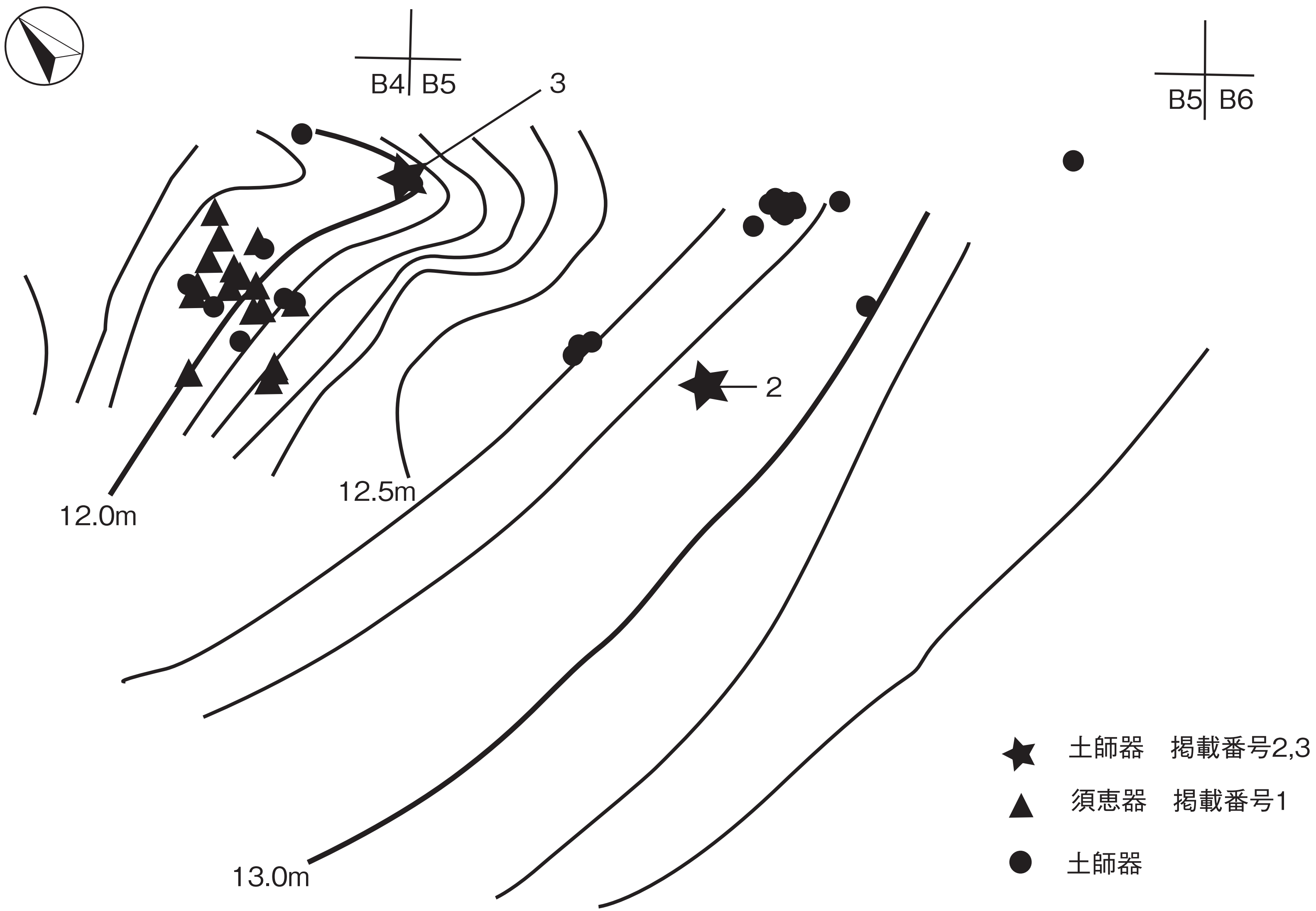
須恵器（第４・５図）

1は須恵器の壺である。Ｂ－4区において出土した。出土状況は緩やかな斜面で，近隣に散乱する状況であった。接合を試みたところ，体部が一部欠損しているが，ほぼ完形に復元することができた資料である。1点のみの出土である。全体の形状は，肩部はあまり張らず丸みをおび，切り出しでつくられた耳が2か所付く。外面肩部から胴部にかけては斜位のタタキ目が残り，頸部から口縁部は，ナデ調整，胴部下位はヘラケズリが施される。内面と内底面には，小石を布状のものでくるんだ工具による円形の当て具痕が残る。また外底面には車輪文の一部と思われるタタキ目が観察される。

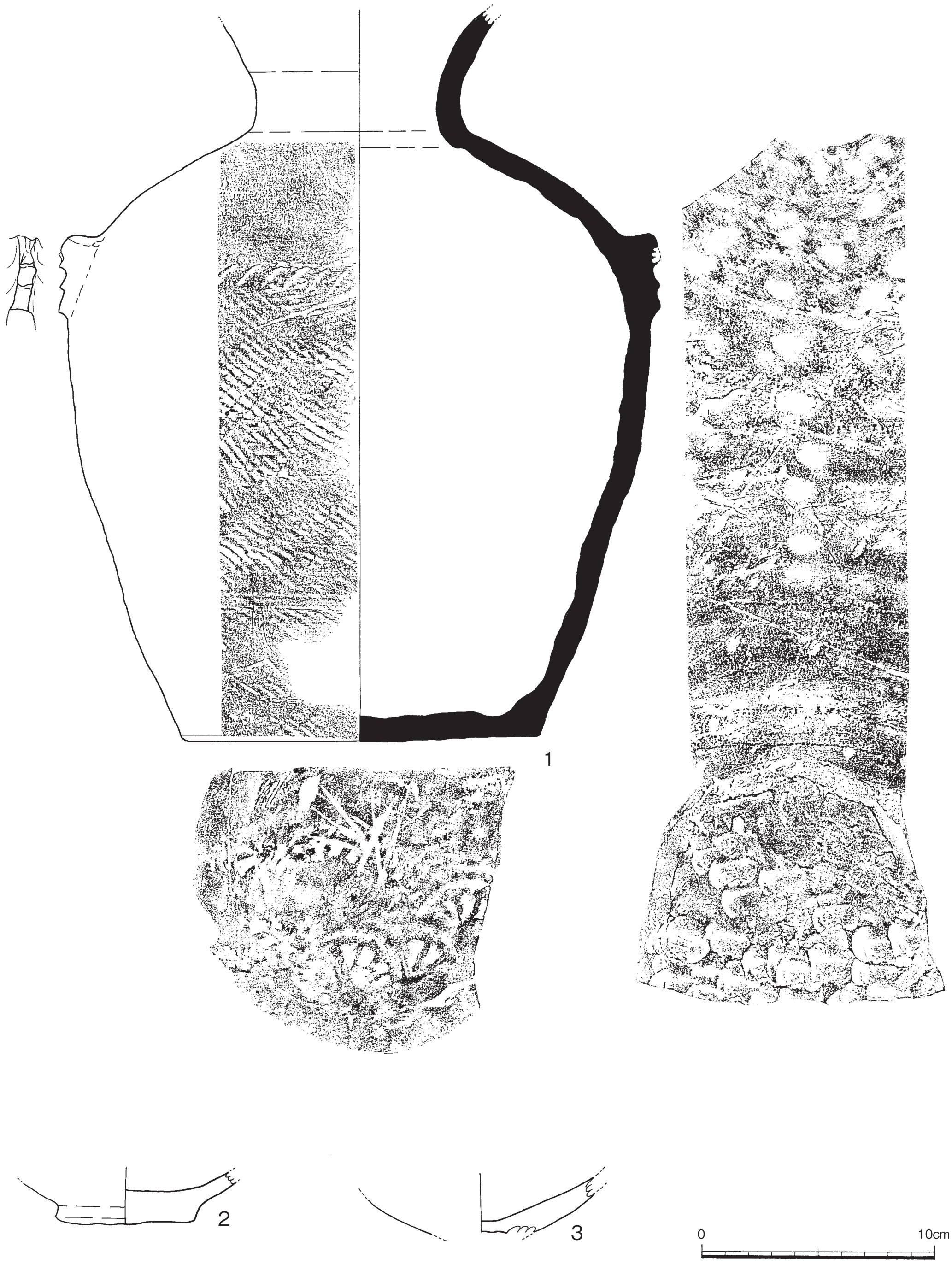
土師器（第４・５図）

主にＢ－4・5区において出土した。緩やかな斜面上に出土している。土師器は約24点出土しているが，比較的良好に復元できた2点を図化した。

2は坏である。底部は充実高台ほどではないが，柱状を呈する。3は高坏である。口縁部と脚部は欠損しているため全体の形状は不明である。



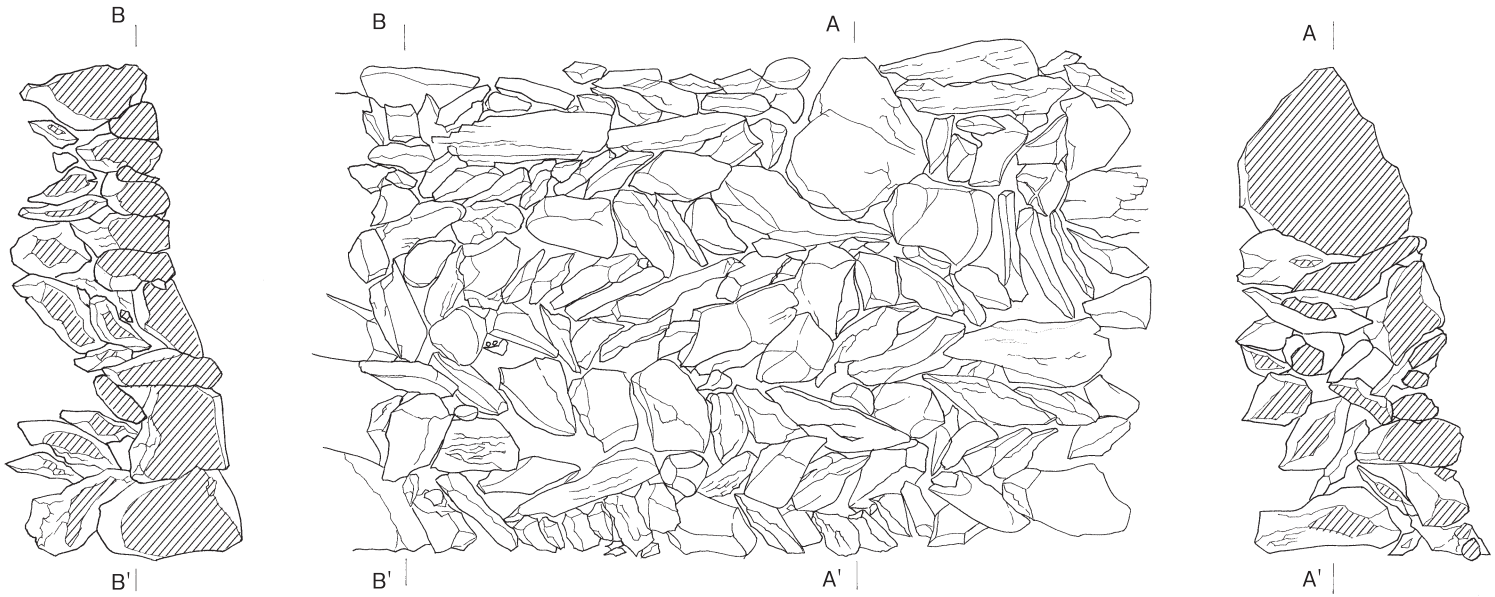
第４図　古代遺物出土状況

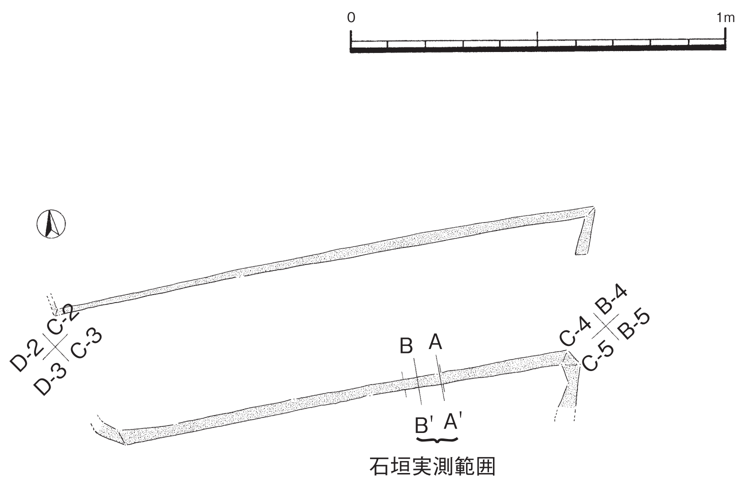


第５図　古代の出土遺物

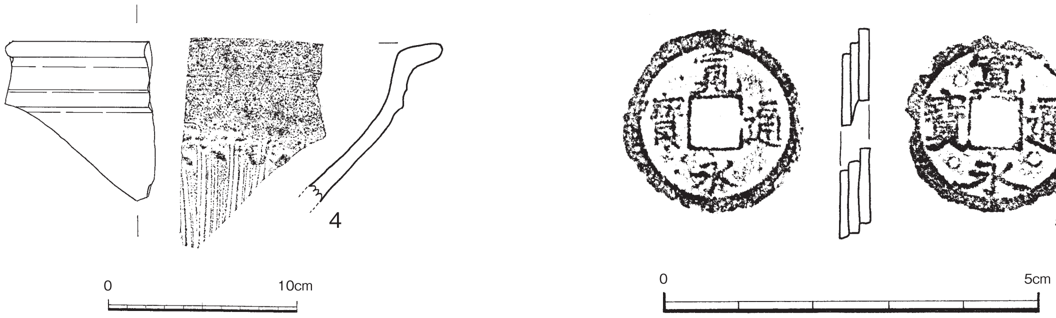
古代遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	取り上げ番号	層位	種別	器種	部位	色調	法量（cm）			胎土				焼成	調整		備考
									口径	底径	器高	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面	
第5図	1	B-4	37	Ⅱ	須恵器	壺	頸部～底部	灰黄色	―	15.4	―								
	2	B-5	1	―	土師器	坏	底部	浅黄橙色	―	6.0	―				○		ナデ	ナデ	底部ヘラ切り 赤色の石粒含む
	3	B-5	21	―	土師器	高坏	胴部	(外)橙色 (内)黄橙色	―	―	―				○				赤色の石粒含む





第６図　棚田石組み実測図



第７図　近代以降の出土遺物

２　近世以降の調査

（1）棚田（第６図）

調査区内に残る石組みと地形により，大小７枚の水田が棚田の形状で作られていたようである。この棚田は近隣地域の住民や地権者からの聞き取り調査により，幕末から明治の初期にかけて構築されたことが推定される。この棚田は調査区背後にある丘陵より湧水を用水路で導入して利用したが，湧水が枯渇したことにくわえ，国の減反政策や後継者不足のために昭和 50 年代頃には耕作が行われなくなったようであるが，地域の生産活動の歴史を示すものとして，また，当時の構築技法を記録するため石組みが比較的良好に残存しているＣ－４区の一部を図化した。

石組みは調査区背後にある丘陵の斜面に豊富にある安山岩礫を利用している。個々の礫には加工がほとんどされず，隙間の形状に合わせて礫を選んで組み込んでいるものの，部分的に飛び出したりするような箇所もなく，全体形状も視野に入れて構築されている。

（2）遺物（第７図）

近世以降の出土遺物は薩摩焼の擂鉢と古銭が出土した。

４は苗代川系薩摩焼の擂鉢である。口縁部は外側に折り返して，弱い２条の突帯をつくる。内面の擂り目は細くシャープで，口縁部下位に余白を残す。18 世紀前半の資料と思われる。

５は古銭である。３枚の寛永通寶が密着した状態である。

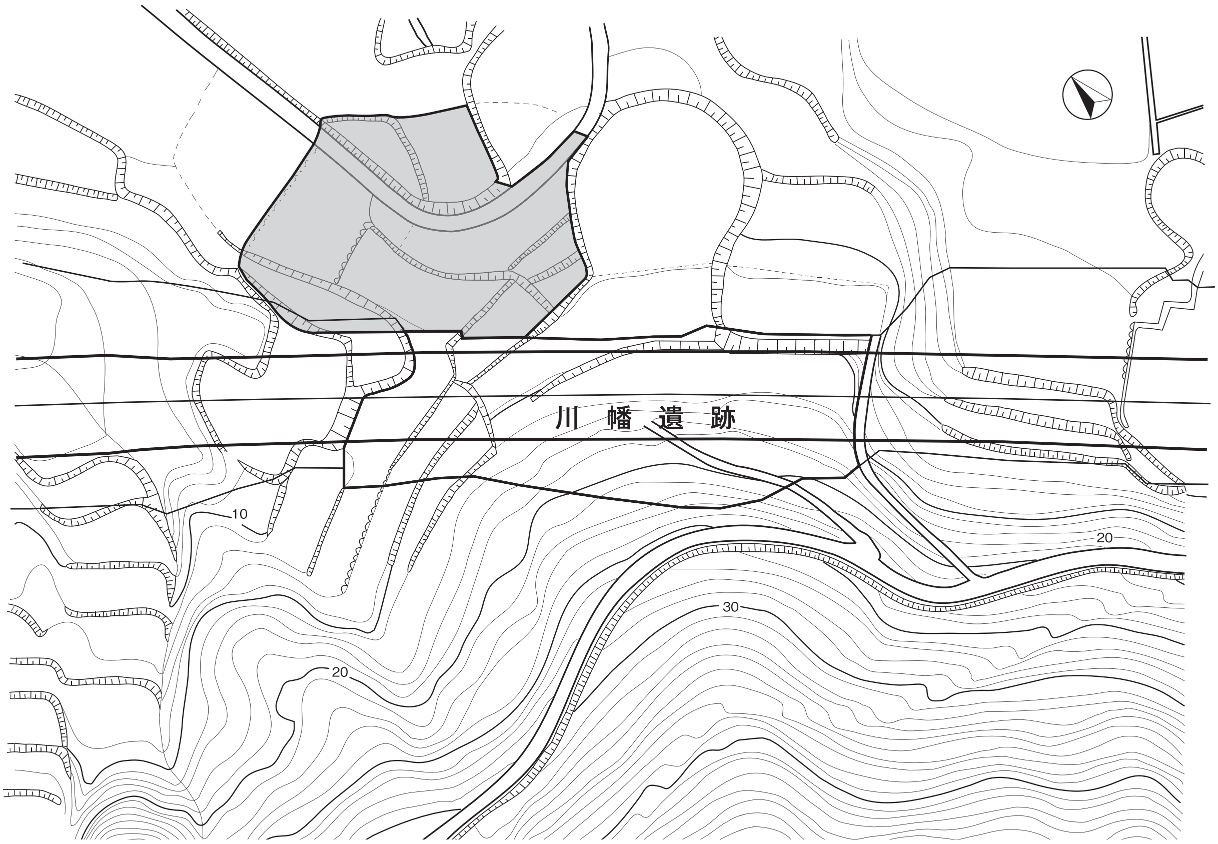
挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	分類	器種	産地	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
								口径	底径	器高					
第7図	4	B-4	Ⅱ	陶器	鉢	擂鉢	薩摩焼苗代川系	—	—	—	暗灰黄色	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18 世紀前半	

挿図番号	掲載番号	取り上げ番号	出土区	層位	種別	名称	法量 (cm)		重さ (g)	備考
							長径	幅		
第7図	5	一括	A-8	Ⅱ	古銭	寛永通寶	2.6	0.4	9.83	古寛永通寶３枚

第５節　総括

川幡遺跡は川内川下流左岸から約 1.5 ｋｍ南の標高約 12 ～ 20 ｍの丘陵地の北斜面に立地している。この斜面は 19 世紀後半頃から棚田や畑として利用されており，現在は休耕地となっているものの，当時構築された石垣が良好な状態で現存している。しかしこのため，遺構や遺物等が消失してしまい，僅かにＢ－４・５区で９世紀代と考えられる須恵器の壺と土師器片の総数 42 点の出土をみるに止まった。この出土点数では残念ながら本遺跡の性格について述べることはできない。

また遺跡の残存状況としては，棚田が作られる前の本遺跡から南～南東方向に隣接する畑に広がっていることが，土師器・須恵器・青磁等がこのあたりで表採されていることで推測できる。



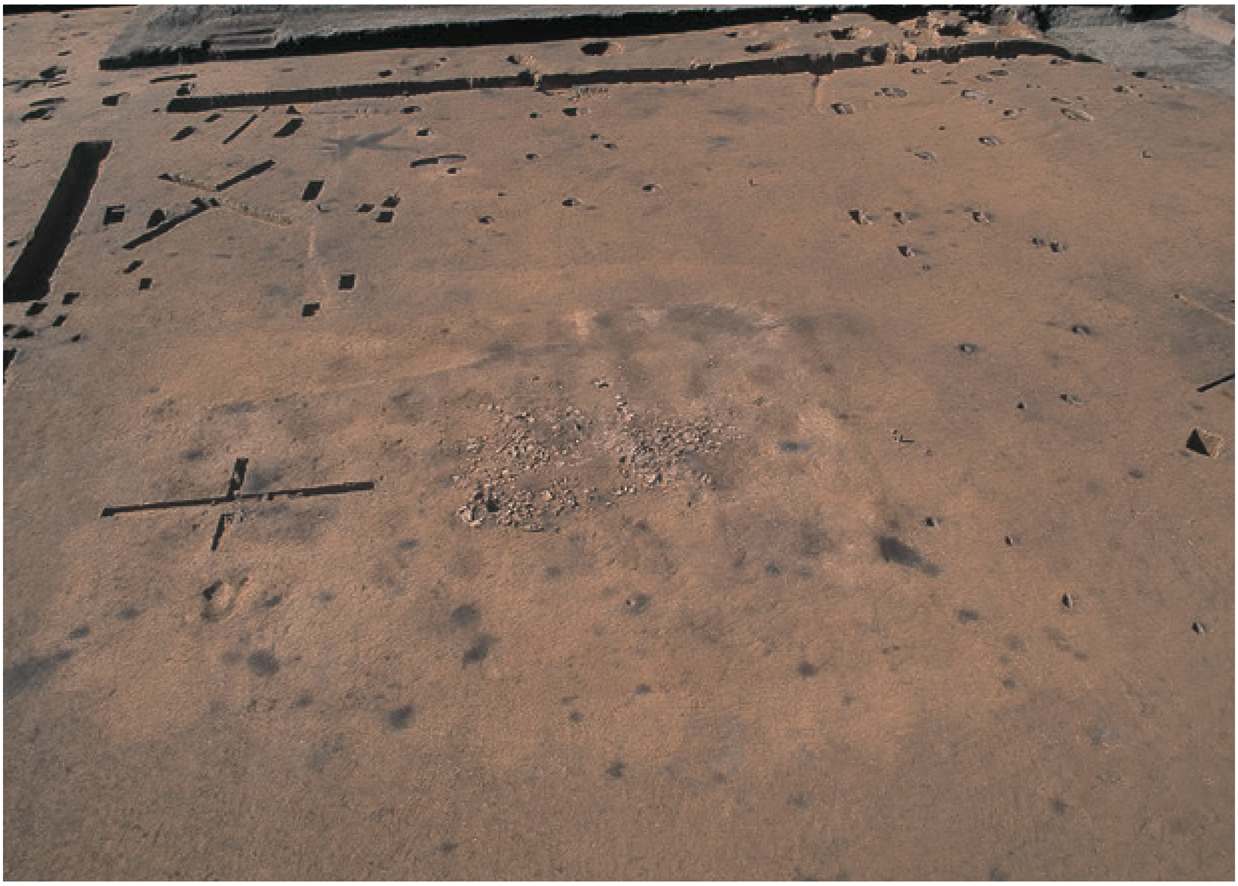
遺跡の残存状況図

写　真　図　版

遠景

近景

２地点遺構全体（航空写真）



土器集中遺構５

溝状遺構１

図版４
川骨遺跡


調査前


調査中

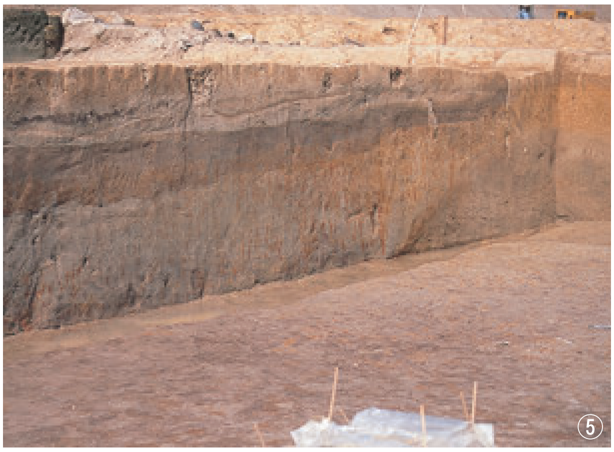

調査後

作業風景

図版６
川骨遺跡

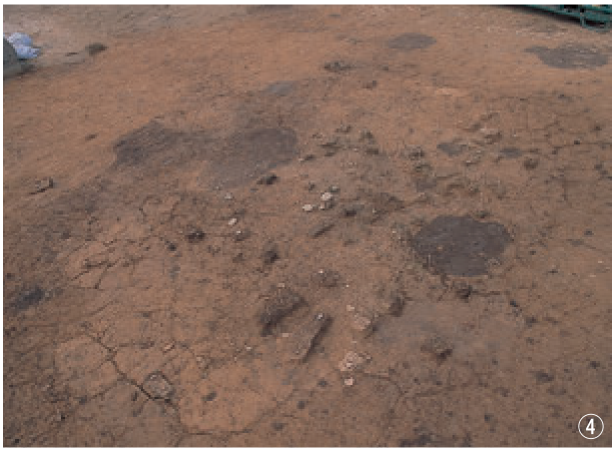







①・②１地点土層断面　③・④２地点土層断面　⑤・⑥３地点土層断面
⑦・⑧４地点土層断面




①土器集中遺構１検出状況　②土器集中遺構２検出状況　③土器集中遺構３検出状況
④土器集中遺構４検出状況　⑤土器集中遺構５検出状況

図版８
川骨遺跡

①～⑤土器集中遺構５検出状況

①〜③土器集中遺構７検出状況　④土器集中遺構８検出状況　⑤土器集中遺構 10 検出状況
⑥土器集中遺構 11 検出状況　⑦土器集中遺構 13 検出状況

図版１０
川骨遺跡

①井戸１　②井戸２　③井戸３　④布基礎　⑤石組み遺構　⑥根石　⑦石列

①石垣　②溝状遺構２　③大型土坑検出状況　④大型土坑半掘
⑤２地点ピット　⑥柵列状遺構

図版 12
川骨遺跡

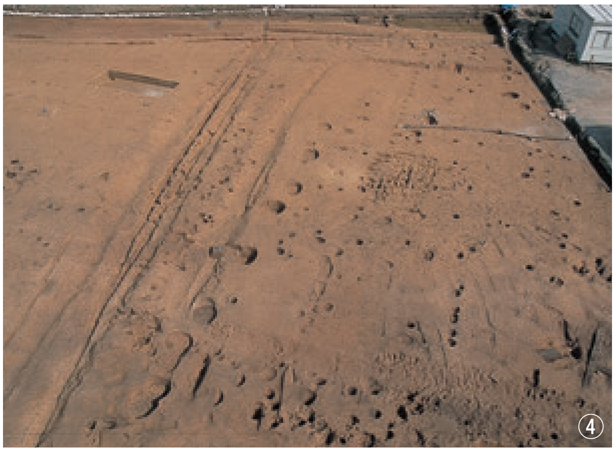







①掘立柱建物跡１　②～⑧掘立柱建物跡１ピット

図版 13
川骨遺跡



①溝状遺構１検出状況　②溝状遺構１半掘　③溝状遺構１完掘　④溝状遺構４検出状況
⑤溝状遺構４断面　⑥溝状遺構完掘状況　⑦畝間状遺構検出状況

図版 14
川骨遺跡

①～③低湿地遺物出土状況　④低湿地検出状況　⑤～⑦４地点低湿地

図版 15
川骨遺跡

①・③鍛冶炉１　②鍛冶炉２　④鍛冶炉３　⑤・⑥鍛冶炉５
⑦４地点土師器出土状況　⑧１地点青磁出土状況

図版 16
川骨遺跡


2


4


6


8


9


10


12


13

土器集中遺構 1 出土遺物


14


15


16


18


17
19
17
19


20


21

土器集中遺構 2 出土遺物

図版 18
川骨遺跡

土器集中遺構 5 出土遺物

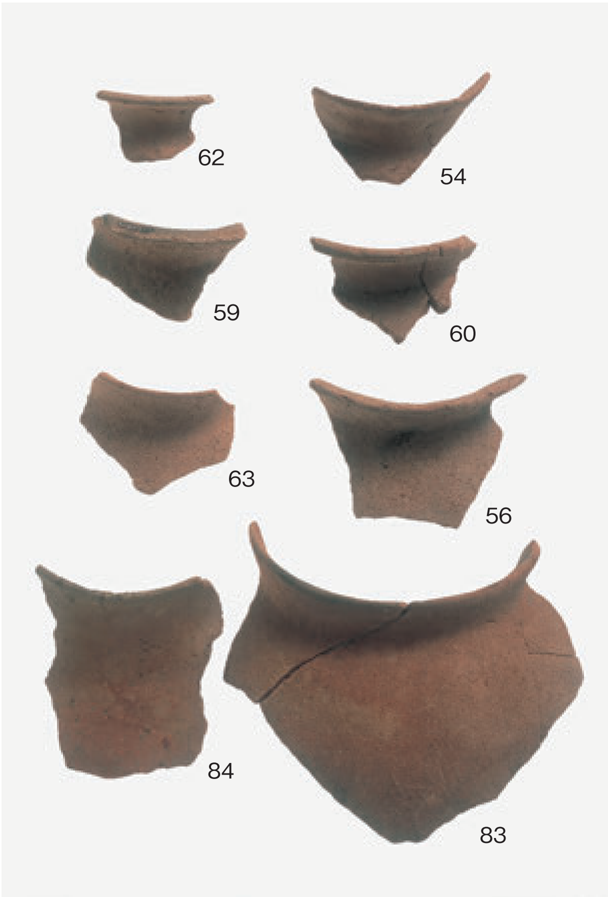

46


47


50


51

土器集中遺構 5 出土遺物



土器集中遺構 5 出土遺物

土器集中遺構 5 出土遺物

図版 22
川骨遺跡

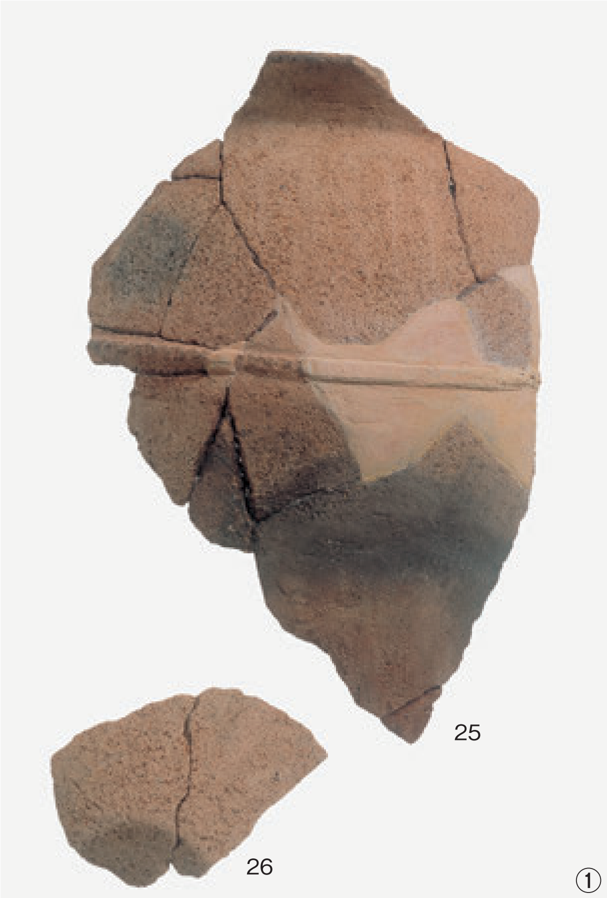

91


92


93


94
96
97
100

土器集中遺構 5 出土遺物



①土器集中遺構 4 出土遺物　③〜⑦土器集中遺構 6 出土遺物
②土器集中遺構 9 出土遺物

図版 24
川骨遺跡

114

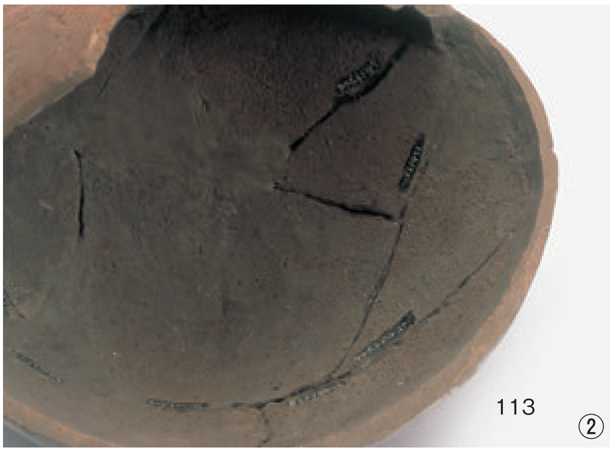
115

113

110 111 116 115

118

土器集中遺構 7 出土遺物



①・②・④土器集中遺構 7 出土遺物　③・⑤土器集中遺構 8 出土遺物
⑥土器集中遺構 10 出土遺物

図版 26
川骨遺跡


129
①


130
②


134
139
135
138
③

①・②土器集中遺構 10 出土遺物　③土器集中遺構 12 出土遺物


150
151
158
152
153
159
162
161
154
155
160
163
165
164
168
156
157
166
167
170
176
172
169
171
173
174

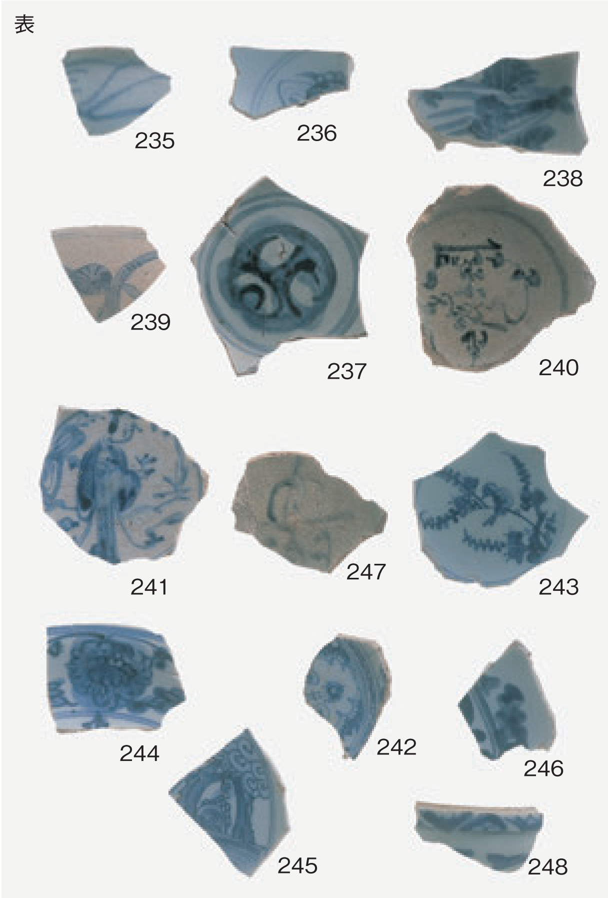
石垣出土遺物

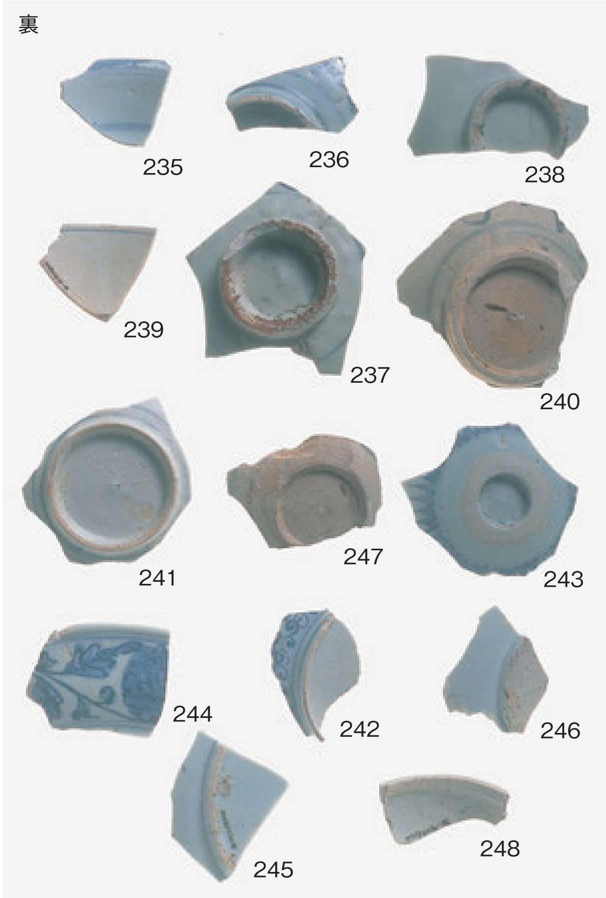
図版 28
川骨遺跡

①井戸２出土遺物　②・③掘立柱建物跡出土遺物　④・⑤石列内出土遺物
⑥・⑦溝状遺構４内出土遺物　⑧～⑩大型土坑内出土遺物

溝状遺構 1 内出土遺物

図版 30
川骨遺跡






226


249


250


251


256


259


260


264

中世～近世の出土遺物 1


258


261


263


265


267


286


292


302

中世～近世の出土遺物 2

図版 32
川骨遺跡


268


269


270


271

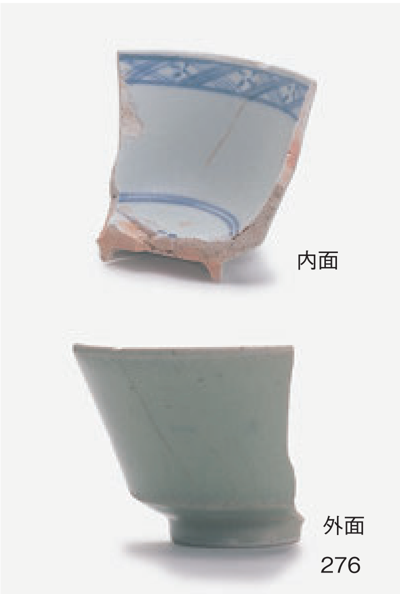

272

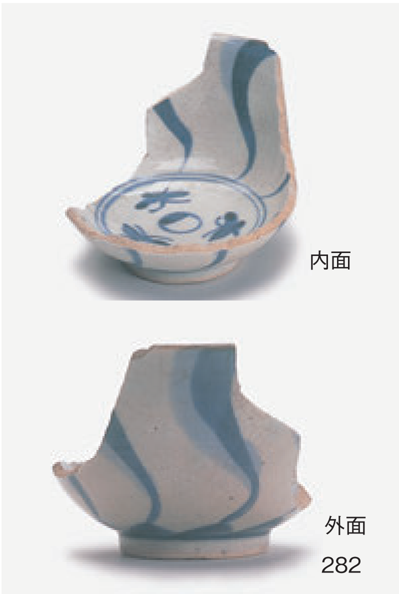

273

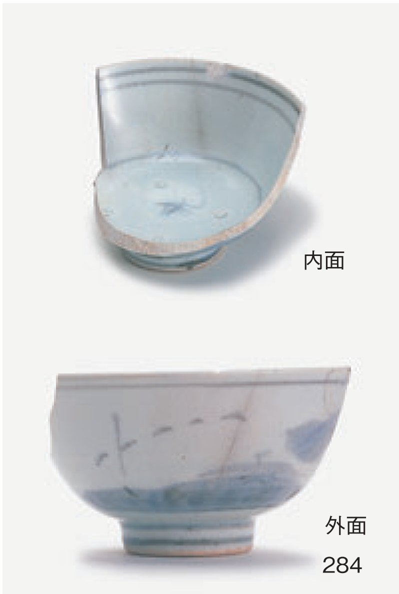

278


279


281


内面
外面
276


内面
外面
282


内面
外面
284

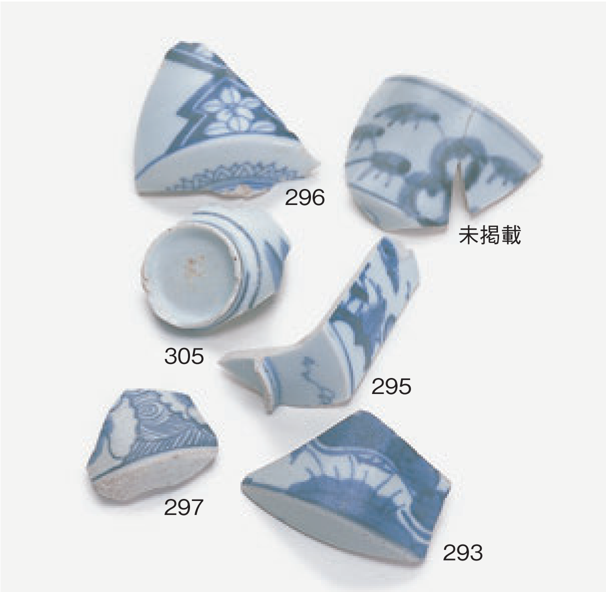

283

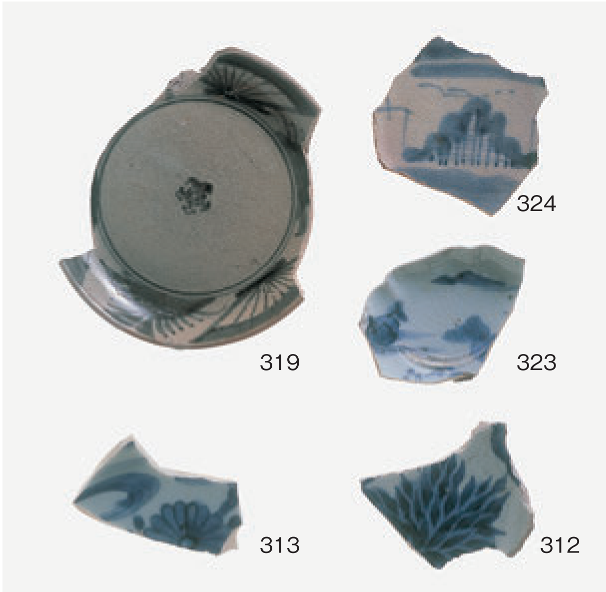

287


285

中世～近世の出土遺物 3

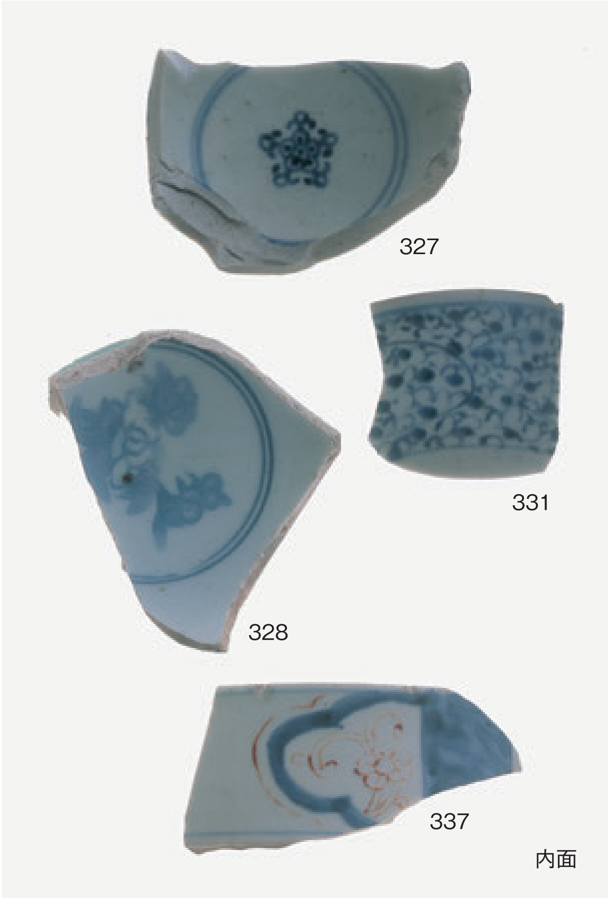
図版 33
川骨遺跡

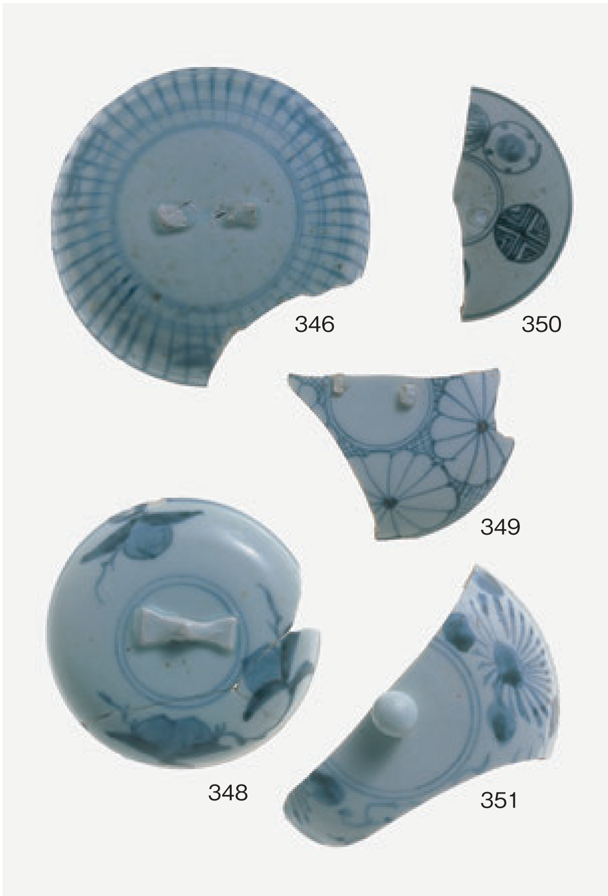




中世～近世の出土遺物 4

図版 34
川骨遺跡





中世～近世の出土遺物 5


306


365


355


359


362


367
538
539
366
内面


367
538
539
366
外面


373
372


370
369
368

中世〜近世の出土遺物 6


374


384


内面


外面


375


378


386


387


389


392

中世〜近世の出土遺物 7


376


379


385


394


395


399


401


402

中世～近世の出土遺物 8

図版 38
川骨遺跡


内面
外面
381


内面
外面
397


内面
外面
400


内面
外面
396


内面
外面
390


内面
外面
398


382

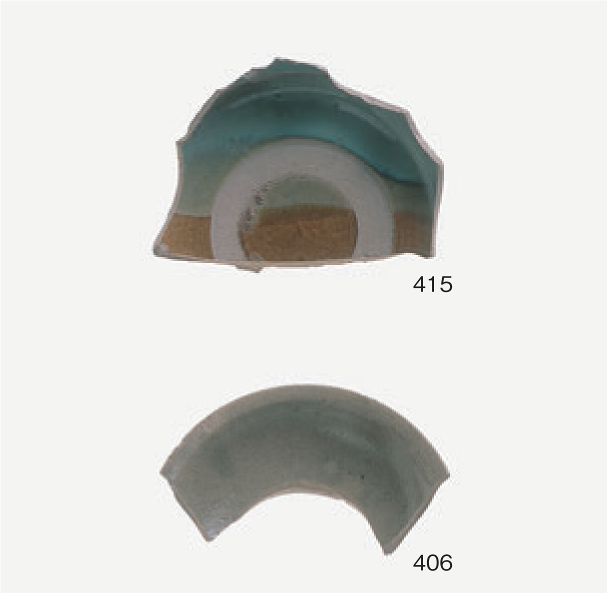

383

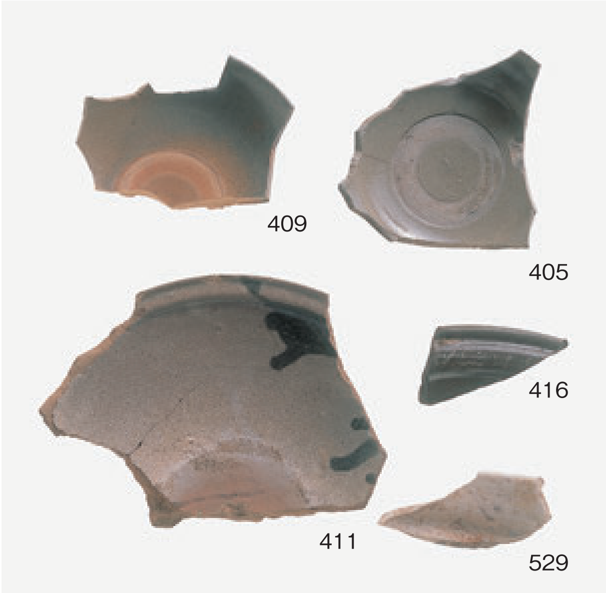

388

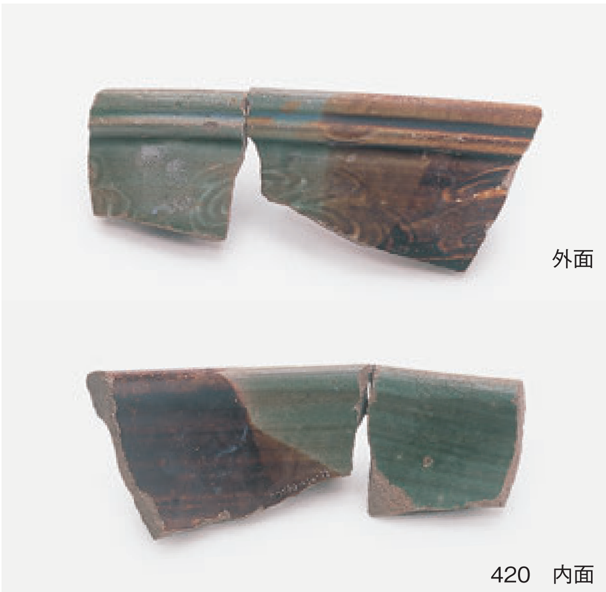

391


外面
内面
403

中世～近世の出土遺物 9







中世～近世の出土遺物 10

図版 40
川骨遺跡


421


422


425

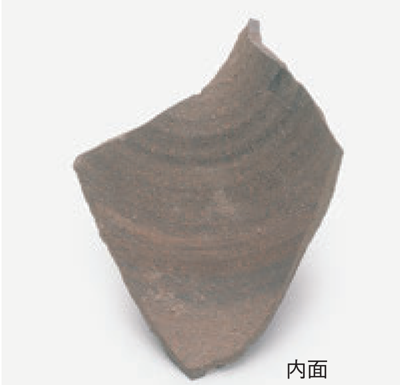

428


433


434

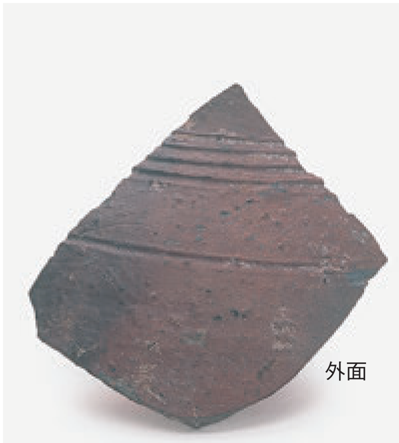

435


外面


内面
445


外面


内面
446


外面


内面
450

中世～近世の出土遺物 12

図版 42
川骨遺跡


外面 429 内面


430 431


444 443


447


451

中世～近世の出土遺物 13


456


460


462


465


470 469
内面

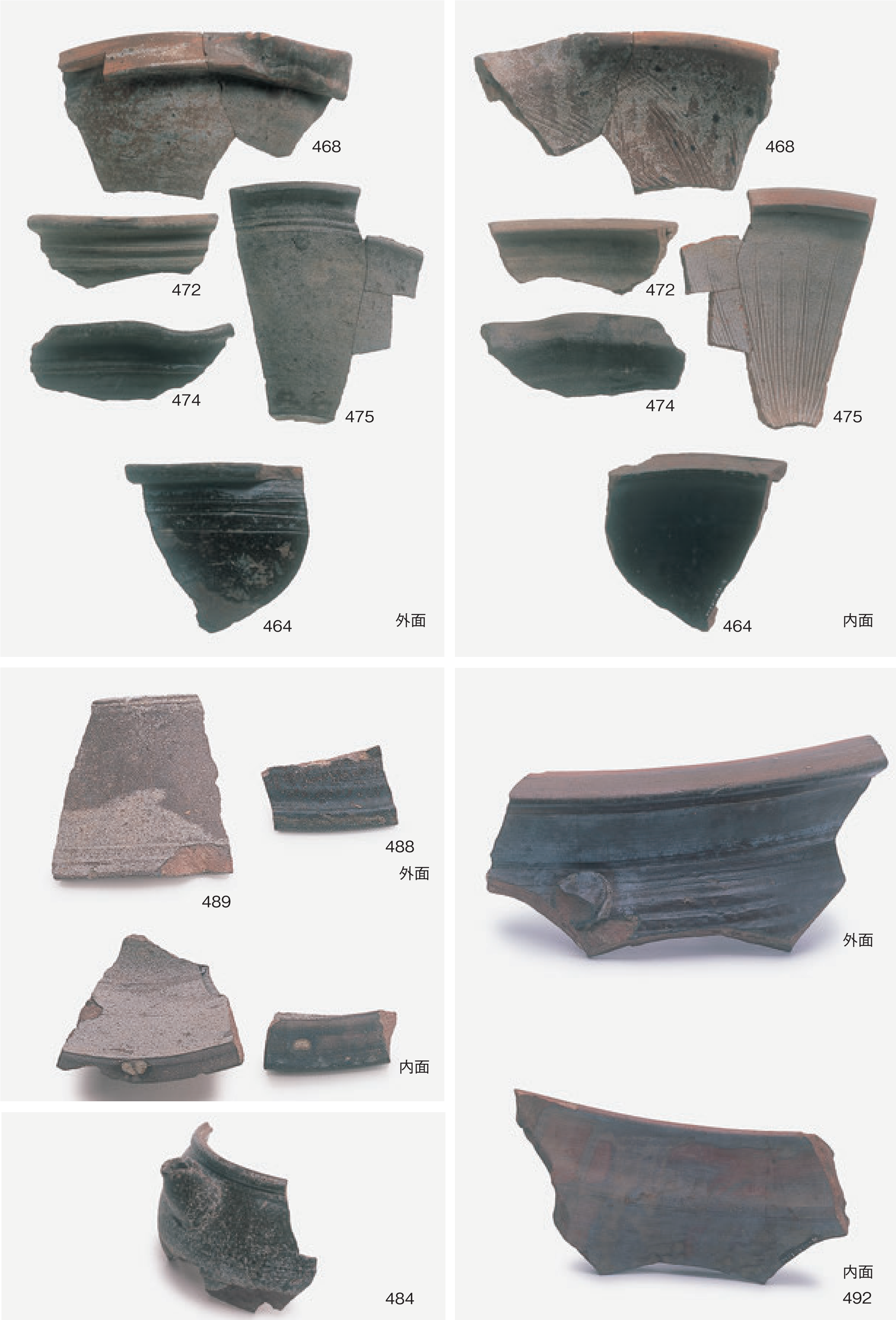

470 469
外面


482

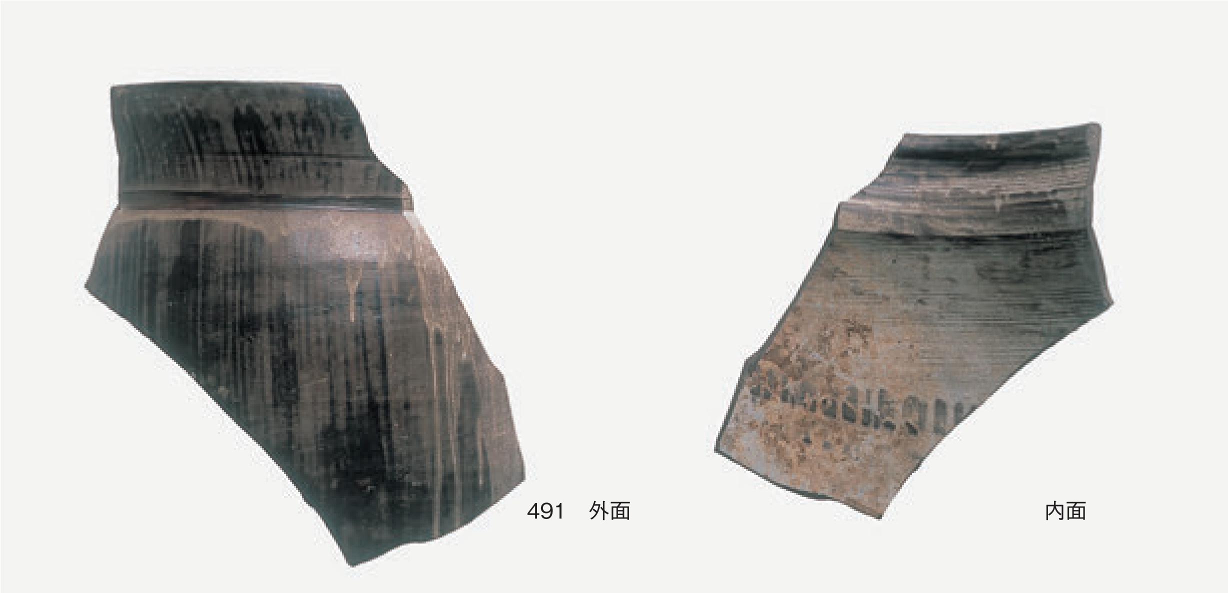

483

中世～近世の出土遺物 14

図版 44
川骨遺跡



中世～近世の出土遺物 15



491　外面　　内面

498

499

506

511

510

515

516

中世～近世の出土遺物 16

図版 46
川骨遺跡

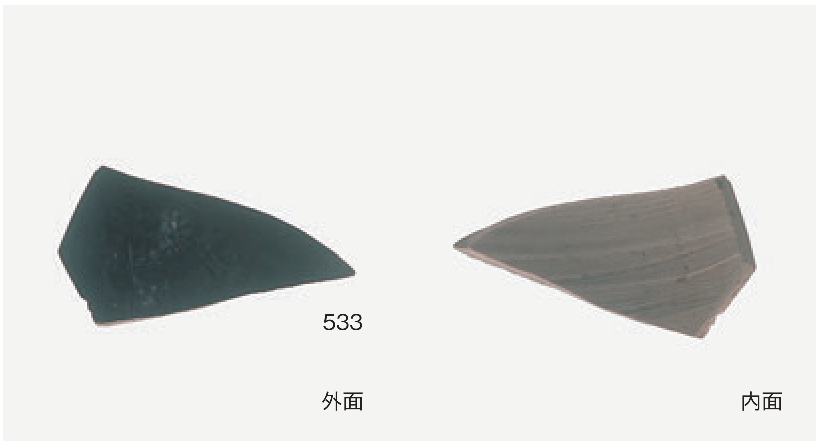
525 526 523 524

525

523

526

531



533

外面　内面

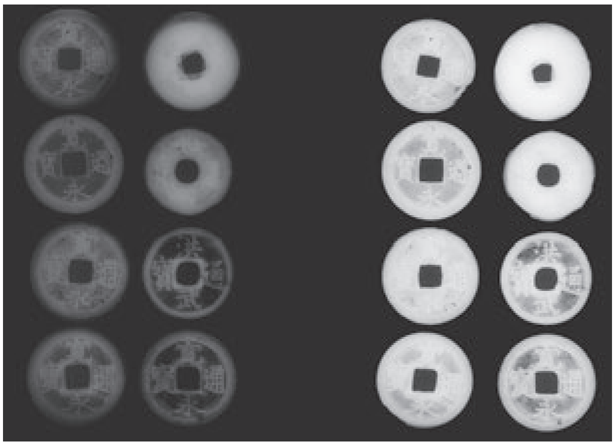
中世～近世の出土遺物 17

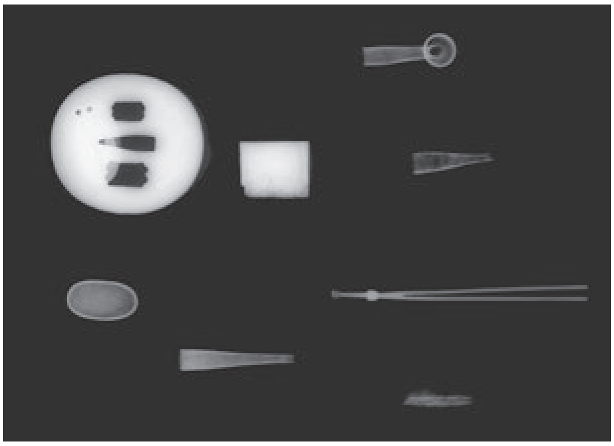
中世～近世の出土遺物 18

図版 48
川骨遺跡

542

中世〜近世の出土遺物 19





中世～近世の出土遺物 20

図版 50
川骨遺跡

その他の出土遺物 1

622

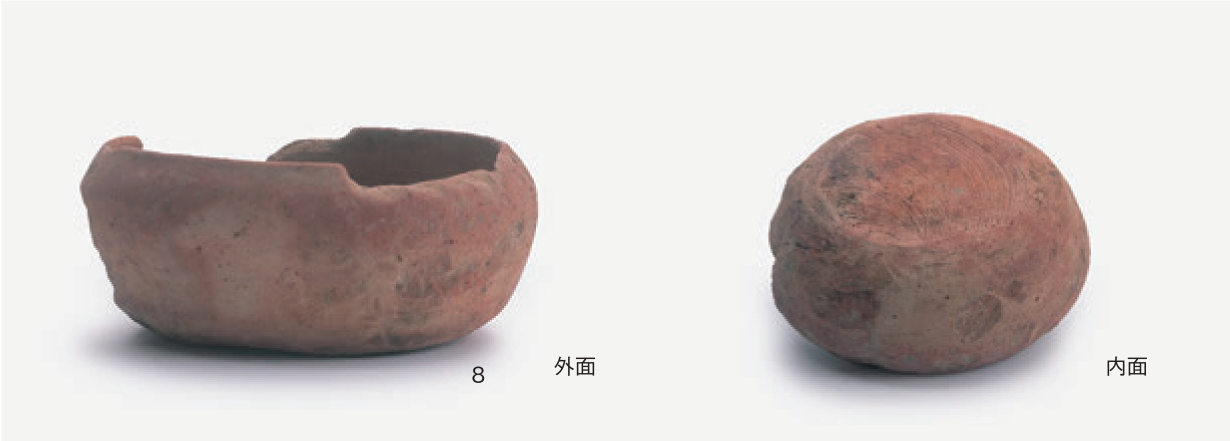
622

その他の出土遺物 2

その他の出土遺物 3

西之城遺跡土層，遺物出土状況

図版 54
西之城遺跡



中世～近世の出土遺物 1

川幡遺跡土層，遺物出土状況

図版 56
川幡遺跡

1

棚田，古代の出土遺物（須恵器）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（165）

川骨遺跡・西之城遺跡・川幡遺跡

発行年月日　　2011 年 3 月

編集・発行　　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒 899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号
TEL 0995-48-5811　　FAX 0995-48-5821

印　　刷　　（株）秀巧社印刷
〒 890-0072
鹿児島市新栄町 25 番 7 号
TEL 099-257-3300　　FAX 099-257-3322

鹿児島県